

禪修指南

本雅難陀尊者

翻譯：Paññādhika Sayalay



目次

目次.....	1
序文.....	10
緬甸 パオ・セヤドー紹介.....	10
緬甸 本雅難陀尊者 紹介.....	12
第一章 智慧の光とは何か.....	13
第二章：安般念から色、無色界禅まで.....	19
二種類の入門法.....	19
安般念（＝出入息念、アーナパーナサティ）.....	20
五根のバランス.....	25
七覚支のバランス.....	28
定の修習におけるその他の法門.....	31
身至念（32 身分）.....	31
涅槃の三門.....	34
白骨観.....	35
十遍.....	37
（一）白遍.....	38
（二）褐遍.....	40
（三）黄遍.....	40
（四）赤遍.....	40
（五）地遍.....	41
（六）水遍.....	41
（七）火遍.....	41
（八）風遍.....	42
（九）光明遍.....	42
（十）虚空遍.....	42
四無色界禅.....	42
（一）空無辺処.....	43
（二）識無辺処.....	44
（三）無所有処.....	44
（四）非想非非想処.....	45
第三章：四梵住と四護衛禅の修行方法.....	46
四梵住の修行.....	46
慈心観（Mettā - Bhāvanā）.....	46
悲心観（karuṇā - Bhāvanā）.....	54

喜心観 (Muditā - Bhāvanā)	55
捨心観 (Upekkhā - Bhāvanā)	56
四護衛禪	56
仏随念 (Buddhānussati)	57
不浄観 (Asubha)	58
死随念 (maraṇānussati)	59
結論	59
第四章：四界分別観	61
四界分別観入門	62
諸界のバランス	66
10 種類の定力を育成する方法	67
近行定に向かって	68
第五章：色業処の基本理論	70
観禅の修行における諸法の観照	70
28 種類の色法	72
色法の本質	76
色法の三種類の密集	78
第六章：色業処 Rūpa Kammatṭhāna	80
如何にして色聚の中の四界を識別するのか	80
色彩、香、味、食素、命根、性根、心色	81
五浄色の識別	83
心生色の識別	84
時節生色の識別	85
食生色の識別	86
四界分別観（詳細法：42 身分）	91
九種類の業生色聚	94
八種類の心生色聚	95
四種類の時節色聚	96
二種類の食生色聚	97
三種類の音声	97
四個の相色の識別	97
諸々の色法を「色」と観ずる時刻	98
要約	98
第七章：名業処 Nāma Kammatṭhāna	99
純観行者の注意点	99
世間名法のみを観ずる	99

六識 (viññāna)	100
六種類の法所縁	100
六門心路過程の識別	101
彼所縁	102
五十二心所	103
七遍一切心心所.....	104
六雑心所	104
14 の不善心所.....	105
25 個の美心所.....	108
先に識別するべき名法	110
六グループの定義	110
四随観 (anupassanā)	111
受、識または触の識別から始める	111
再度の色法の識別.....	113
二門と所縁を同時に識別する	113
四種類の名密集の看破.....	115
果報は斯くの如く、速行は改変する事ができる	118
信慧グループ名法 (saddhā - paññā group)	118
ジャーナ名法の識別	119
意門善速行心路過程の識別.....	123
五門善速行心路過程の識別.....	127
法所縁グループ—善グループ	132
正語 (sammā vācā)	133
正業 (sammā kammanta)	133
正命 (sammā ājīva)	133
悲 (karuṇā)	135
喜 (mudītā)	135
仏随念 (Buddhānussati)	136
死随念 (maraṇānussati)	137
10 個の結の生起.....	138
概念を所縁として取る不善名法の識別方法	143
究極眼浄色を所縁として取る貪見グループ識別の修法	144
色所縁グループ不善名法を識別する方法	146
声 (= 音、以下同様) 所縁、香所縁、味所縁、触所縁の四グループ	148
名法全体を「名法」として識別する.....	150
名色法の分別.....	150

名色差別法 (nāmarūpavavatthāna)	151
威儀路明覚 (iriyāpatha sampajañña、行住坐臥明覚)	151
行住坐臥の中の色法の識別.....	152
如何にして、行住坐臥の中の五蘊法を識別するのか.....	154
外観の方法	155
次の段階に進む	157
四念処の育成に関する修行.....	158
第八章：縁起第五法 Patīccasamuppāda	159
三世間遍知 (3 lokiya pariññā)	160
(一) 所知遍知 (ñāta pariññā)	160
(二) 度遍知 (tīraṇa pariññā)	161
(三) 断遍知 (pahāna pariññā)	161
三出世間遍知 (3 lokuttara pariññā)	161
随覚知と通達知	162
第五法の概要.....	163
集諦 (Samudaya sacca)	163
<無礙解道> (Paṭisambhidāmagga) の教え	165
行と業有 (saṅkhāra & kamma bhava)	165
推理と自らの体験 (anumāna & paccakkha)	166
縁摂受智の体験 (Paccaya Pariggaha Ñāṇa)	167
神通と観禪 (Abhiññā & Vipassanā)	168
因を追尋する方法.....	169
五種類の縁起の教法	170
心 (すなわち智) を過去に向かわせる	171
煩惱輪転及び業輪転.....	172
色相の出現	173
過去世の臨終の時に向かって	174
煩惱輪転の三.....	176
業輪転の内容.....	177
縁摂受の段階.....	178
目標を変える	180
因果の識別	180
先に注意する点	181
四つの名蘊 (4 Nāma khandhā)	181
(一) 一性理 (Ekattanaya)	182
3 または 4 人	183

断見と常見	184
(二) 異性理 (Nānattanaya)	184
(三) 不作為理 (Abyāpāranaya)	185
自性定法	185
(四) 如法性理 (Evaṃ Dhammatānaya)	185
定論 (Niyata Vāda)	186
要点	186
五蘊の構成	187
結生五蘊 (Paṭisandhi 5 Khandha)	188
有分五蘊	194
死亡五蘊	196
色所縁グループ：五門引転五蘊	198
色所縁グループ：眼識五蘊	199
色所縁グループ：領受五蘊	201
色所縁グループ：推度五蘊	202
色所縁グループ：確定五蘊	203
速行の基因作意 (Javana paṭipādaka nāmasikāra)	204
色所縁グループ：速行五蘊 (善グループ)	205
色所縁グループ：彼所縁五蘊	207
色所縁を目標にする意門心路過程	209
色所縁グループ：不善グループ	211
色所縁グループ：(貪見グループ) 速行五蘊	211
声 (=音、以下同様) 所縁グループ	213
香所縁グループ	215
味所縁グループ	216
触所縁グループ	217
法所縁グループ：善グループ (目標=眼浄色)	218
法所縁グループ：善グループ (目標=安般念似相)	219
法所縁グループ：目標=色法	219
局面	220
外観と更に遠くの過去と未来世に向かつて	220
行と明の「種子」	220
有分について	221
所知遍知の体験証悟	221
第九章：縁起第一法 Paṭiccasamuppāda	222
縁起分別—經分別教法	222

12 縁起支.....	232
三時.....	232
三連結.....	233
四摂類（四グループ）.....	233
20 法.....	233
先に知っておくべき識別方法.....	234
縁摂受智の段階.....	234
思惟智慧と初期の生滅随観智の段階.....	234
成熟した生滅随観智の段階.....	234
壊滅随観智の段階.....	235
各自各々.....	235
無明の縁によりて行（Avijjāpaccayā saṅkhāra）.....	236
行の縁によりて識（Saṅkhārapaccayā viññāṇaṃ）.....	237
識の縁によりて名色（Viññāṇapaccayā Nāmarūpaṃ）.....	239
名色の縁によりて六処（Nāmarūpapaccayā Salāyatanaṃ）.....	243
(A) 名が生起するが故に、意処が生起する.....	243
(B) 名が生起するが故に、処色が生起する.....	245
(C) 色が生起するが故に、処色が生起する.....	247
(D) 色が生起するが故に、意処が生起する.....	248
(E) 名色が生起するが故に、意処が生起する.....	249
六処の縁によりて触（Salāyatanaṃ paccayā phassa）.....	251
触の縁によりて受（Phassapaccayā vedanā）.....	255
受の縁によりて愛（Vedanāpaccayā taṇhā）.....	257
愛の縁によりて取（Taṇhāpaccayā upādānaṃ）.....	259
取の縁によりて有（Upādānapaccayā bhavo）.....	261
有の縁によりて生（Bhavaṃ paccayā jātai）.....	264
生の縁によりて老死（Jātipaccayā jarāmaṇaṃ）.....	264
愁、悲、苦、憂、惱.....	265
第十章：四種類の縁起の教法.....	266
(二) 随順縁起第二法.....	268
(三) 逆縁起第一法（末端から始めへ）.....	270
(四) 逆縁起第二法（中から始めへ）.....	272
四食.....	272
果報輪転四食から始める識別方法.....	277
業輪転四食から始まる識別方法.....	277
記載されているもう一つ別の識別方法.....	278

第十一章：相、作用、現起（現象）、近因.....	279
色蘊品：28色	279
識蘊品	285
受蘊品	291
想蘊品	293
行蘊品	293
通一切心心所(sabba citta sādharma cetasika)	293
六雑心所 (pakinnaka cetasika)	294
14 不善心所(akusala cetasika).....	296
二十五美心所 (sobhana cetasika)	300
縁起品	305
第十二章道非道智見清浄義積.....	316
思惟智 (Sammāsanañāṇa)	316
聚思惟または理法観	316
観智の目標（所縁）	317
尊重すべき規則	321
注意すべき要点.....	325
三相.....	325
無我の光.....	326
聚思惟観法と個別法の観法.....	327
縁起法	328
観智と神通	329
易観者から始める観禅の修習	332
名色の滅尽と見做す	333
名法の観照	334
禅修行者が止行者の場合	335
主に好きな相から観照する.....	336
五蘊法	337
同時に色法を観照する.....	339
過去・現在・未来.....	340
粗い・微細／劣・優／遠・近.....	343
不浄観.....	345
有識不浄観.....	345
無識不浄観（死体の不浄を観ずる）	347
縁起支	349
40 種類の思惟法.....	350

無常相は十.....	351
苦相は 25.....	353
無我相は五.....	359
無常、苦、無我の基因.....	361
理法観の 200 種類の思惟.....	361
慧の成就.....	362
七色観法 (Rūpa Sattaka Vipassanā).....	362
(一) 取捨色観法 (ādānanikkhepa rūpa).....	363
(二) 年齢によって増長し生滅する色の観法.....	363
(三) 食所成色観法 (āhāra maya rūpa).....	364
(四) 時節所成色観法 (utu maya rūpa).....	364
(五) 業生色観法 (kammaja rūpa).....	364
(六) 心等起色観法 (cittasamutṭhāna rūpa).....	365
(七) 法性色観法 (dhammatā rūpa).....	365
七非色観法 (Arūpa Sattaka vipassanā).....	365
(一) 聚観法.....	365
(二) 双観法.....	367
(三) 刹那観法.....	367
(四) 次第観法.....	368
(五) 除見観法.....	368
(六) 去慢観法.....	368
(七) 破欲観法.....	369
生滅随観智 (Upayabyayañāṇa).....	370
名色法と五蘊法の二者.....	370
過去、未来、現在、内、外.....	371
生滅随観智の詳細修習法.....	371
(一) 随観集法 (samudayadhammānupassī).....	371
(二) 随観滅法 (vayadhammānupassī).....	374
(三) 随観集滅法 (samudayavayadhammānupassī).....	377
縁起第一法.....	380
随観集法 (samudayadhammānupassī).....	381
随観滅法 (vayadhammānupassī).....	381
随観集滅法 (samudayavayadhammānupassī).....	382
生滅観の進展.....	383
10 種類の随煩惱 (upakkillesa、また染とも).....	384
第十三章 : 行道智見清浄義積.....	390

四随観	390
威儀路と明覚 (iriyāpatha & sampajañña)	392
壊滅随観智 (Bhaṅgañāṇa)	393
壊滅随観智に向かって	393
色聚の消失.....	394
観の修習の観智を観照する (反観 paṭivipassanā)	396
幾つかの観法の例	397
壊滅を観ずる力量	397
己自身の好む法を主として観照する	398
壊滅随観智から行捨智まで.....	399
大念に基づいて修行する道.....	400
智見清浄に向かって	402
行捨智から聖道へ.....	402
第十四章　：道智と果定.....	404
第十五章　：14 種類の心制御法.....	411



序文

《禅修指南》（第二版）は、本雅難陀尊者（Ven.U.Puññānanda）による主導と慎重な研究に基づいて、パオ・セヤドーの著書《如実知見》（第三版・弘誓基金会印刷出版）、《智慧の光》（第三版・増訂版・2003年高雄正覚学会印刷出版）、《智慧の光》（第四版・シンガポール・パオ禅修センター印刷出版）及び《趣向涅槃之道》（緬甸版・パオ森林僧院印刷出版）等を整理して、再構成されている。尊者は、禅の修行者たちが実修の時に、閲覧に便利である様、また禅修の参考に供するため、修法の順序の必要に従って、当該の《禅修指南》を再度編集し直し、現在および未来の禅修行者にとって、主要な教材及び参考書として、これを提供する。

2014年3月10日

本雅難陀尊者

緬甸 パオ・セヤドー紹介

緬甸 パオ・セヤドー（パオ禅師 Pa-Auk Sayadaw）、法名 Āciṇṇa（意味は「慣行」）。1934年緬甸中南部 Hinthada Township Leigh Jhyaung 村にて出生。1943年（9歳）の時、同村の Sa Lin Monastery にて、U Sona 長老に依止して、沙弥戒を受け、出家。1954年（20歳）、Ye Gyi Monastery において U Pañña 長老に依止して、比丘戒を受ける。1956年（23歳）の時、サンガ試験に参加して、Dhammācariya（法師）の資格を、取得する。1964年（30歳）より、当代の幾人かの長老について、四界分別観、出入息念、観禅などの業処を、多年にわたって、学ぶ。その後、Thaton 村 Nemindara Hill Tawaing Gyi の森林、Kyauk Talon 山 楽心寺（Citta Shkha Monastery）及び Ye Tawship 付近の A Sin Tawya（=僧院） などにおいて、十数年の隠遁修行生活を送り、かつ頭陀行（dhutaṅga）を学ぶ。この時期、パーリ聖典及び、その他の関連する注疏に基づいて、禅修の理論に関して、深く研究し、止観の実践（+方法）を構築する。1981年（47歳）、U Aggañña 長老の要請を受けて、パオ森林僧院の住職になり、僧院内部に居住する人々に、禅の修行を教え始める。その教法が殊勝であったため、その

時より、禅の修行者は、数百人に上ったが、その中には世界各地のサンガから馳せ参じた者と、禅の修行を愛好する人士たちが、多く含まれる。現在の緬甸国内においては、モーラミヤインのパオ森林僧院本山以外に、首都ヤンゴン、北緬甸マンダレー及びタウンジー等の都市において、支部がおかれている。彼が教授する禅法は、《清浄道論》の中の三学、七清浄及び 16 観智の修行順序に従ったものであり、禅修行者は「戒清浄」を、定・慧の二つの増上学の基礎とするべきであると、強調するものである。

人の根器と必要性に応じて、通常は「安那般那念」（出入息念）または「四界分別観」でもって入門とし、遍（＝カシナ）による入禅の業処は、例えば：32 身分、白骨観、十遍、四護衛禅（慈心観、仏随念、不浄観及び死随観）、四無色禅とし、色、無色界八定を得たのち、色業処、名業処、縁起の修行や、諸々の究極法である所の「相、作用、現起（現象）及び近因」及び観禅（vipassanā）に進む。禅師は、教学の外に、8 年間の時間をかけて五冊、合計 3600 頁に及ぶ巨著《趣向涅槃之道》(Nibbānagāminīpaṭipadā) を完成させた。その内容は、以下の通りである：

- 一、「出入息念」と「色業処」
- 二、「名業処」
- 三、「縁起」
- 四、「相、作用、現起（現象）、近因」
- 五、「観禅」（「止禅」も含む）

禅師は、1996 年、緬甸政府の認定によって Mahākammaṭṭhānācariya（大業処阿闍梨、すなわち、大禅師）の榮譽をうけた。

1999 年、続いて Aggamahākammaṭṭhānācariya（最高大禅師）の榮譽をうけた。

近年は、中国大陸、台湾省、香港特区、スリランカ、マレーシア及びその他の国家の要請を受けて止観の禅法を教授している。



緬甸 本雅難陀尊者 紹介

本雅難陀尊者 (Ven. U Puññānanda) は、禪修行の指導を開始して後、すでに十余年の長きに達した。あの、善くて巧みで、深い事柄を、易しく説明する彼の禪の指導、生き生きとして、ユーモアに満ちた、聞く者を魅了せずにはいられない法話は、禪修行者に深い印象を残し、利益多く、実に、現代の南伝上座部仏教の中において、禪修行者 (華人) に対する利益多く、影響力の大きな、極めて深遠なる、尊敬すべき尊者である。

尊者は 1971 年に、緬甸の東南部 **Ye, Mon State** に生まれた。

1999 年、最も尊敬するパオ・セヤドーの膝下において、出家して、比丘戒を受ける；

2001 年より、パオ森林僧院にて、業処を指導する禪師となり、パオ森林僧院において、中国語、英語及び韓国語を用いて、外国人禪修行者を指導した。

2002 年、緬甸 **Gwa, Rakhine State** において、海辺椰子林道場を創設した；

2003 年より、緬甸、マレーシア、シンガポール、台湾及び、中国大陸からの要請を受けて、止観の禪修を巡回指導し、かつ仏法の開示を行っている。

尊者が教授する禪修の方法は、律蔵、經蔵、アビダンマパーリ三蔵聖典と《清浄道論》の、三学、七清浄及び、16 観智による、指導次第である。パーリ三蔵の典籍における、中国語翻訳の重要性に鑑み、尊者は長年に亘って、パーリ三蔵の中国語訳を実践し続けてきたが、現在、それは

「經蔵」：《法句經》、《本生經》・・・等；「アビダンマ蔵等のパーリ三蔵」：

《発趣論 (24 縁)》、《法聚論》、《分別論》、《アビダンマッタサンガハ》；

「禪修法要」：パオ・セヤドーの《趣向涅槃之道》・・・等がある。

尊者は、2002 年に緬甸西部の **Gwa** において、海辺椰子道場 (現在は功德禅林と呼ぶ。Puññārāma Meditation Center) を設立し、結果、我々をして、自然な椰子の海岸の、優美で静かな環境の中において、仏陀の教法を学び、涅槃の資糧を蓄積できる様に、なさしめている。まさに、叡智に満ちた導き、ガイドの如く、尊者は、辛苦をものともせず、多くの衆生を導かれ、それゆえ、我々は、仏陀の教えたまいし禪修の古道を辿って、智慧に満ちた、清涼なる生活を、味わうことができるのである。



第一章 智慧の光とは何か

智慧には光明があることについて、仏陀は《増支部・三集・掬塩品・相經》(Aṅguttara Nikāya, Tika Nipāta Loṇakapallavagga, Nimitta Sutta) の中において、以下の様に言う：

Yato ca kho bhikkhave adhicittamanuyutto bhikkhu kālena kālaṃ samādhinimittaṃ manasikaroti, kālena kālaṃ paggāhanimittaṃ manasikaroti, kālena kālaṃ upekkhānimittaṃ manasikaroti, taṃ hoti cittaṃ muduñca kammaniyañca pabhassarañca, na ca pabhangu, sammā samādhiyati āsavānaṃ khayāya.

——「比丘たちよ。増上心を勤修する比丘は、ある時は、定の相に作意し、ある時は、精進の相に作意し、ある時は、捨の相に作意する。故に、その心は柔軟であり、作業に適合し、極光浄であり（＝極めて光輝き清らかであり）、また容易に壊れる事がない。彼の心は漏が尽きるまで、安定してそこに住立する。」

増上心とは何か？ 止禅心（サマタ修習心）と、観禅心（vipassanā 修習心）の二者は、共に増上心である。今まさに、止禅心と観禅心を育成している最中の比丘は、ある時は、定力を育成するために、定を誘発する事のできる相に、專注しなければならない；精進を育成するためには、ある時には、精進を誘発する事のできる相に、專注しなければならない；捨を育成するためには、ある時には、捨を誘発する事のできる相に、專注しなければならない。

これは、彼が定、精進、捨の三法を平等に作意して、それらをバランスさせなければならない事を意味していて、その中の一つだけに專注してはならない、という事でもある。もし、精進が強すぎる時、心は掉挙となり、散乱するし、定が強すぎる時、心は懈怠に落ち込むことになるし、捨が強すぎる時、心は愚痴（＝愚かさと無知）に落ち込む事になる。

故に、定と精進をバランスする事は必要である。精進には、二種類ある：身体の精進と、心の精進である。この二種類は、共に十分に、堅固でなければならない。禅修行者の身体が、席において座っているとしても、心が、外部の種々の目標の上に散乱する事を、防止する様精進しないのであれば、彼は成功することができるであろうか？

否、彼は成功できないのである。

彼が、長く座禅・瞑想したいと思っても、身体が長時間の座禅に堪え得ない時、すなわち、身体の精進が欠ける時、彼は成功することができるであろうか？

否、彼は成功できないのである。故に、この二種類の精進は必要である。同時に、定もまた必要である。

精進と定のある時、彼は心のバランスを保ちながら、禪修の目標に專注しなければならぬが、(+この時) 過剰に熱心になったりしてはならないし、また、過剰に嫌気(+がさす様な心理) になってもならない。もし、(+修行に) 興味を感じることができないのであれば、心は微弱になる；過度の熱狂は、心は騒動(=蠢く事) し、散乱する。故に、彼は、心のバランスを保ちながら、禪修の目標に專注しなければならぬ。これを「中捨性」というが、ここにおいては「捨相」と呼ぶ。

彼がこの様に修習するならば、一体何が発生するであろうか？

Taṃ hoti cittaṃ muduṅca kammaniyaṅca pabhassaraṅca.

——「その心は、変化して柔軟になり、作業に適合し、また極光浄になる。」
柔軟で、適業なる心がある時、もし、定を擁したいと思うならば、彼は定を得る事ができる；もし、観禪に転換したいと思うならば、彼は観禪の修習に、転換する事ができる；もし、名色法の識別を行いたいと思うならば、彼は名色法を識別する事ができる；もし、因果を知見したいと思うならば、彼は因果を知見する事ができる。

どの様な業処であっても、それを修習したいと思う時、彼の心は、当該の業処に、專注する事ができる。それだけではなく、同時に彼の心は、明るく輝き、かつ極光浄(pabhassara) になる；

na ca pabhaṅgu : 彼の心は、敵対する所の煩惱(kilesa)、すなわち、蓋(nīvaraṇa) によって、破壊されることがない；

sammā samādhīyati āsavānaṃ khayāya : 彼の心は、漏(āsava) が尽きて、阿羅漢果を証得するまで、安定して住立する。

止禪心には、極光浄なる光明があるのであるだろうか？ そう、間違いなく(+あるのである)。観禪心には、極光浄なる光明があるのであるだろうか？ そう、間違いなく(+あるのである)。

しかし、大多数の人々は、生滅随観智の段階の観禪心には、光が伴う事を知っているも、止禪心にも、光があることを知らないのである。《増支部》の《睡意經》(Pacalāyamāna Sutta) において、マハーモッガラーナ尊者が、阿羅漢果を証悟する過程を、描写している。この經の中において、仏陀は、マハーモッガラーナ尊者に、日を夜について、光明(āloka) を強化して、昏沈と睡眠を克服する様にと、教えている。《増支部》の《光明經》(Āloka Sutta) と《放光經》(Ābhā Sutta) の中において、仏陀は、四種類の光について言及している：

- 一、日光。
- 二、月光(星の光も含む)。
- 三、火の光。

四、智慧の光。

《睡意經》の疏鈔では、以下の四種類に言及している：

- 一、天眼通には、非常に強い光がある。
- 二、すべての遍には、光がある。
- 三、近行定に近い予作定（遍作定）から始まって、最高の止禅心までに、すべてに光がある。
- 四、観禅の光明随煩惱（染）、これは観智の光明である。

もし、この様であるならば、以下の様な質問を、発する人がいる：止禅心と観禅心の二者に光がある、というのであれば、なぜ、また特別に、観禅随煩惱の光を、光明であると、強調するのか？ その理由は、修行を始めたばかりの初期の段階において出現する光の、その程度とパワーの強さが、この種の光明に、及ばないからである。《清浄道論》第20章において、以下の様に言う：

**'Na vata me ito pubbe evarūpo obhāso uppannapubbo,
addhā maggappattosmi phalapattosmī'ti.**

Amagga - meva 'maggo'ti, Aphalameva ca 'phalan'ti gaṇhatto.

——「『私には今、この種の、以前にはなかった未曾有の光明が生起した。私は実に聖道、聖果を得たのである。』この様に（+修行者は）非道を道と執着し、非果を果と執着するのである。」

（注1）葉均訳《清浄道論》（Visuddhimagga）参照。

彼は以下の様に誤解する：

「以前、この種の光明が生起した事はない。私は道と果を証得したに違いない。」
彼は非道を道として執着し、非果を果として執着して、その結果、正道から乖離する。この種の光明が、人をして正道から乖離させるが故に、それは煩惱の一つとして数えられる。この段階において、この種の光明が出現するのは、非常に普通の事なのである。しかし、智慧の光に関して、人々は多くの疑問を持つのである：智慧には光があるのか？名法には光があるのか？

これらの疑問に関して《大疏鈔》は以下の様に解説する：

**Vipassanobhāsoti vipassanā cittasamuṭṭhitaṃ, sasantatipatitaṃ
utusamuṭṭhānañca bhāsurāṃ rūpaṃ.——**

「観禅の光明は、観禅の心と、自身の身体の相続の内の時節によって引き起こされる、極光明色（＝極めて光り輝く明るい色）である。」

では、観禅の光明とは何か？

上の文章では、二種類の原因に言及している：

(一) 観禅心

(二) 禅修行者自身の色相続流の内の、時節の火界と呼ばれるもの。

禅修行者は、修行者が、色業処の修習を实践する段階において、以下に説明する二種類の項目を、非常に簡単に理解することができる：

1、名色によって構成されている所の、すべての有情は、その結生心を除いて、心所依処に依存して生起する、一つひとつの心は、みな、心生色を製造する能力を、擁している。これら心生色は、生起した後、心生色聚となる。これらの色聚を分析する時、あなたは、八種類の色法を見ることができる、すなわち：地、水、火、風、色彩、匂い、味と栄養素である。観禅の心が造り出す心生色の、その色彩界（色彩色法）または色所縁は、「非常に明るい色」（bhāsuram rūpam）なのである。

2、心生色聚の中において、時節と呼ばれる火界は、新しい色聚を造る事ができる。止禅心と観禅心の威力（+が大きい為）、火界によって製造される新しい色聚は、（+修行者の）内部から外部へと、発散する事ができる。それらを分析すれば、あなたは、火界によって製造された色聚の中に、八種類の色法がある事を見ることができる、すなわち：地、水、火、風、色彩、匂い、味と栄養素である。その中の色彩界は、「非常に明るい色」なのである。

これらの解説において、「観智の光」とは、以下の様であると言う：

(一) 観禅心によって造られた、心生色聚の色彩界の光明；

(二) 心生色聚の火界によって造られる、時節生色聚の色彩界における光明。

止禅心によって引き起こされる所の光明と、上に述べた解説は、同じ意味を持つ。そうであるならば、これは、本当に観智の光明であるのか？（+という疑問が湧く）。いな、違うのである。これは、経典の上において、隠喩を用いて説明しているに、過ぎないのである。それは「因」（智、ñāṇa）によって引き起こされた「果」（色、rūpa）には光がある、とは言わないで、隠喩的に、「因」そのものに光がある、と言う。実際には、それは心生色及び時節生色の色彩界なのである。

例えば：我々は、ソファーがすごく鳴り響く、という言い方をする事がある（これは、ある種の人々が荒々しく座るために、ソファーが騒音を立てる時、緬甸人が用いる隠喩である。）ソファーは、本当に荒々しく、鳴り響くであろうか？ 否である。

実際には、ソファーに座っている人が、その種の騒音を出すのである。文献において、ある種の文字は、隠喩として用いられるが、それは、その事実を更に分かりやすくするためである。では、この部分に用いられた隠喩とは何か？ これは、止禅心と観禅心が強くなればなるほど、光は益々光輝く（+事を隠喩しているのである。）：すなわち、それらの因果関係を表明している、という訳である。

また、もう一点：例えば、この講堂には、電燈がついていて、それによって、照らされているとする。これらの電燈が点灯している時、その光は、講堂の中にある、色々なものに反射される。同様の原理で、心生と時節生色聚の中の色彩界が発光する時、業生と食生色聚の中の色彩界もまた反射して、共に発光する。故に、疏鈔では、この光明は、己自身の相続流の内に生じる（*sasantati patitaṃ*）と言うのである。

また、疏鈔は、心生色と時節生色の、二者の光明の強度を、比較する：

Tattha vipassanācittasamuṭṭhitaṃ yogino sarīratthameva pabhassaraṃ hutvā tiṭṭhati, itaraṃ sarīraṃ muñcitvā ñāṇānubhāvānurūpaṃ samantato pattharati.

——「この二者の内において、観禅心によって誘発される光明は、ただ禅修行者の自身の内に存在する。もう一つの一者（時節生の光をいう）は、すなわち、『智の威力』によって、（身体の）外部に向かって拡散される。」

故に、これら外部に向かって、四方に照射される光明は、時節生色聚の色彩界である、という事ができる。この光明は、智の威力によって生起するものであり、その強弱は、智慧の深淺によって定まる。慧力が強ければ強いほど、光は、明るく輝くのである。

Taṃ tasseva paññāyati：「行者の慧のみが、それ（光明）を（見ることができる）。」この種の光明は、唯一、行者の智慧によってのみ、見ることができ、その他の人々は、見ることができない。例えば、我々は、肉眼でX線を、見ることができるであろうか？ 否、見る事はできない。（+しかし）我々は、X線を、肉眼で見ることができない事を理由に、X線は存在しない、と言えるであろうか？ 否、我々はその様には、言えない。というのも、我々は X線を写すことが出来るが故に。

Tena phuṭṭhokāse rūpagatampi passati.

「この色（光）が、到達して、接触する所の空間は、彼はすべて、見ることができる。」光が外に向かって拡散する時、それが到達する場所において、人々は、各種の目標を、見ることができる。彼は、何でもって、これらの目標を、見るのであるか？

Passanto ca cakkhuvīññāṇena passati, udāhu manovīññāṇenāti vīmaṃsitabbanti vadanti：

「彼らは言う、(行者が) 見る時、彼は、自分が一体、眼識でもって見ているのか、それとも、意識でもって、見ているのかを、観察しなければならない。」

観智によって生じた光によって、外部の諸々の目標を見たり、また分析したりすることができる。止禅心の光明はもまた、外部の目標を識別するのに用いる事ができるが、しかし、それは、天眼通ほどには、正確ではない。故に、(+修行者が) 外部にある目標を見る時、それは一体、眼識でみているのか、それとも意識で見ているのか？ (+が問われなければならない)。

《大疏鈔》は、この件に関する結論を、以下の様に言う：

Dibba cakkhulābhino viya taṃ manoviññāṇa, viññeyyamevāti vuttaṃ viya dissatīti.

——「まさに、天眼を得た者の様に、彼は意識でもって、種々の(外部にある) 目標を見ることができる。」

彼は、心所依処 (*hadaya vatthu*) によって生起した所の、意門速行心 (*manodvārika javana citta*) によって見るのであって、眼浄色によって生起する所の眼識によって、見るのではない。禅修行者が、止禅心と観禅心を育成する時、もし、彼が識別しようとするならば、多くの外部にある目標を見ることができる。特に、慈心観の修習をする禅修行者は、「願わくば、一切の天神が、危機を脱します様に」という方式で、慈愛を散布する時、その光が外部に拡散するため、彼は、多くの天神を見ることができる。同様に彼が、「願わくば、一切の悪趣に墮ちた者」の方式で、慈愛を散布するならば、彼は、多くの苦界の有情を、見ることができる。これは、止禅心によって生じた所の、光明の威力の致すところである。彼は、意識でもって見ているのであって、眼識で見ているのではない。もし、この種の光明がないのであれば、彼は、外部にある 31 界 (注 2) の名色法を、見る事は出来ない。

(注 2) 南伝仏教では 31 界を言う。すなわち：地獄、畜生、餓鬼、阿修羅 (四悪趣)、人界、六欲界天、16 色界天及び無色界天。北伝では 28 天を言う。南伝の第四禅天には、福生天と無雲天がなく、故に、26 天となる。《アビダンマッタサンガッハ》(Abhidhammatthasaṅgaha) の「離心路過程の概要」及び《法聚論》(Dhammasaṅgani) 参照の事。

どの様な時、場合であっても、光明が出現さえすれば、それは生滅智の段階に到達したのだ、と言えるのであろうか？ その様には言えない。唯一生滅智の時にのみ光明がある、という言い方は、正確ではない。その他の観禅心と止禅心においても、光明は存在する。ただし、比較してみるに、生滅智の段階で生じる光明は、それ以前に生起する

光明とは異なっている。もし、異なっているとして、それはどの様に異なるのであるか？この点に関して、禅修行者は己自身の修行が（+その段階に）到達した時に、理解するであろう。



第二章：安般念から色、無色界禅まで

二種類の入門法

パオ森林僧院の禅修行者は、安般念または、四界分別観（訳者注）を入門の修行法とする事ができる。後者について言えば、四界分別観の修習を通して定力を育成し、かつ、光が非常に安定しているならば、32身分の修行に転換する事ができ、また、そこから白骨観を経て、白遍処に進んで、第四禅を証得する事ができるし、その後、慈心観、仏随念、不浄観及び死随念という、四種類の護衛禅と観禅（vipassanā）などの業処を修習し、その後安般念を修習することになる。

（訳者注）四界分別観の修習は、正師を得ずに、書物の上だけで理解して、自己流に実践するのは厳禁です。四界分別観の修行方法は非常に繊細で、方法を間違えると重篤の禅病になりますので、ご注意ください。

白遍第四禅の親依止力（upanissaya satti、近依止力）を擁しているため、また、観智がすでにその定力を更に安定化させているため、（+修行者は）非常に簡単に、一回、または二回の座禅・瞑想の時間の内に、安般念を成就する事ができる。《大教誡ラーフラ経》（Mahārahulovāda Sutta）の中において、この種の修行方法の例を、見ることができる：仏陀はラーフラに、先に六界禅を教え、その後安般念を教えた。こうしたことから、もし、定力が安定しているのならば、一つの業処から、別の業処へと修習を転換する事ができる（+事が分かるのである）。

安般念（＝出入息念、アーナパーナサティ）

ここにおいて、第一番目の方法、すなわち、安般念を入門とする、禅修の方法を、解説する。仏陀は《大念処経》（Mahāsatipatthāna Sutta）の中において、如何にして安般念を修習するのか、ということについて、以下の様に言う：

「比丘たちよ。ここにおいて、比丘は森に行き、木の下に行き、空き地に行つて、結跏趺坐し、その身を正しく真っ直ぐにし、業処において、正念に安住する。彼は正念において入息し、正念において出息する。また、入息が長い時：『私の入息は長い』と知り、また、出息が長い者は：『私の出息は長い』と知る。入息が短い時：『私の入息は短い』と知り、また、出息が短い者は：『私の出息は短い』と知る。『私は全身を覚知して入息する』と修習し、『私は全身を覚知して出息する』と修習する。『私は身行（注3）を止めて入息する』と修習し、『私は身行を止めて出息する』と修習する（注4）。

禅修を始める時、先にリラックスして座る。その後、鼻の下方または鼻孔の周囲の、どこかの部位において、息の出入りを覚知する。（＋覚知が）息とともに、体内に入ったり、（＋遠く）体外に出て行つてはならない。というのも、この様にすれば、あなたは定を、完成する事ができないが故に。あなたは、ただ息を、上唇の上方または鼻孔の周囲において、覚知するだけでよい。この様にすれば、あなたは定を育成し、定を成就する事ができる。

（注3）《智慧の光》では：身行（kāya-saṅkhāra）とは、「入出息」（assāsa-passāsa）であるという。なぜ入出息を身行というのであるか？ これは、入出息が「所生身」（karajakāya、すなわち身体）に依存して生じるからである。もし、身体がないならば、入出息もまた、存在することができない。また、それは名身（nāma kāya）に依存して生じるが故に、身の行法である、という。。。なお、上記＜全身＞は全息の事である（訳者）

（注4）『漢訳南伝大蔵経』「長部経典」二。

《清浄道論》（Visuddhimagga）では以下の様に言う。

修習を開始する段階において、一つの重要な項目を、遵守しなければならない、それはすなわち：na lakkhaṇato paccavekkhitabbaṃ——「相を観察してはならない」

ここにおいて「相」とは、「自性相」（sabhāva lakkhaṇa、特徴）と「共相」（sāmañña lakkhaṇa）を指す。自性相とは、息の中の四大のそれぞれの特徴の事であつて、すなわち硬さ、粗さ、推進、熱さなどである。もし、あなたがそれらに注意を払うならば、あなたの修行は四界分別観になつてしまい、それは安般念ではなくなる。共相とは息の無常・苦・無我の三相を言う。これは「入る、出る、無常」とか「入る、出る、苦」とか、

「入る、出る、無我」などに注意を払ってはならない事を意味する。というのも、この段階における入息と出息は、概念（注5）（paññatti、観念）に過ぎないからである。

（注5）《智慧の光》中国語版では、パーリ語の paññatti を漢訳して「施設」、「概念」または「仮名」等としている。

概念は、観禪を修習する時の法(dhamma)ではない。唯一、究極法(注6) (paramattha)だけが、観禪の目標(所縁)となるのである。結生心を除いて、心所依処(hadaya vatthu)によって生起した心は、みな、入息と出息を生じせしめる事ができる。観禪に転じて、究極法を観察したいと思うならば、あなたはこれらの心生色法(すなわち、出入息)の四界を判別する必要がある。出息と入息はみな、非常に微細な多くの色聚(rūpa kalāpa)である。一つひとつの色聚の中には、9個の色法がある、すなわち：地、水、火、風、色彩、匂い、味と栄養素及び音声である。

（注6）《智慧の光》中国語版では、パーリ語の paramattha を漢訳して「勝義」「第一義」とする。

その内の音声は、異なる色聚の中の地界がお互いに衝突する時に生じる音であり、それはすなわち、呼吸の音である。もし、あなたが、この9種類の色法を系統的に識別する事ができるならば、あなたは、それらの生・滅を無常とみなし、それらの生・滅による圧迫を不断に受ける事を苦とみなし、それらには、壊れない実質というものがないが故に無我である、と観察することができる。いまだこの段階に到達していないのに、あなたが概念をば、無常であると観察するならば、それは安般念の修法ではない。

故に、安般念でもって定力を育成しようとする時、四界の自性相及び生・滅の共相に注意を払ってはならず、ただ、出入息の概念に専注するだけでよい。これが、あなたが定を育成するために、安般念の目標に専注しなければならない(+理由である)。もし、あなたが過去世において、この禅法を修習したことがあり、波羅蜜も累積されているならば、この種の方法でもって、息の概念に専注する時、あなたは出息と入息に、簡単に専注する事ができる。

一回または二回の座禅・瞑想の内に、もし、あなたがいまだよく専注する事ができないのであれば、あなたは《清浄道論》の中に提案されている所の、数息法を採用する事ができる。この方法は、あなたの定力を育成する事ができる。あなたは毎回の入出息ごとの末端の数を数えなければならない。例えば「入る、出る、一：入る、出る、二・・・」という風に。(+数える数は)少なくとも5、しかし十を超えてはならない。私はあなたが8まで数える事を推奨する。というのも、あなたがまさに育成せんとしている八聖

道分に敬意を表す為に。どの様にではあっても、あなたは己自身の希望に従って、5から10までの間の一つの数目を選択して、この時間内において、決して心を外部に漂よわせないことを決意する。この様に息を数えるとき、あなたは心を専注せしめることができるし、また、静かに息に対して覚知することができる。

もし、この様にして半時間ほど専注することができたならば、次の段階に進むべきである：

入息が長い時：「私は入息が長い」と知る；

また、出息が長い時：「私は出息が長い」と知る。

入息が短い時：「私は入息が短い」と知る；

また、出息が短い時：「私は出息が短い」と知る。

この段階において、あなたは、入出息の長短に関して、覚知を育成しなければならない。ここにおける長短とは、寸法の長短を言うのではなく、時間の長短を、言うのである。一回ごとの、入出息の時間の長短を覚知することを通して、あなたは、出息の時間が、長い時もあるれば短い時もある、ということを見出すであろう。この段階において、あなたはただ単純に、息を覚知するだけで充分である。もし、黙念したいというのであれば：「入る、出る、長い；入る、出る、短い」と黙念してはならず、ただ「入る、出る」と黙念し、同時に、息の長短を、覚知するだけでよい。

一回の座禅・瞑想の内に、息が最初から最後まで、長い時もあるれば、最初から最後まで、短い時もある。しかし、あなたは意図的に、わざと、それを短く、または長く変化させてはならない。ここでは、息の長短に注意を払うのは、ただ心が息に専注する様に、後方支援するためであり、専注力の重点は、息においておくべきなのである。こうしたことから、あなたは、息が長いか短いかを、あまり気にしすぎてもならない。もし、あなたその様にするならば、あなたの拙法覚支が強すぎて、心は定を得る事ができなくなるのである。

ある種の禅修行者は、この段階において禅相が出てくる。しかし、もし、平静に一時間修習して後においても、禅相が出て来ないのであれば、あなたは次の段階の修習に入らねばならない：「私は、息の全体を覚知して、入息する」と修習し、「私は、息の全体を覚知して、出息する」と修習する。

ここにおいて、仏陀はあなたに、不断に持続して、最初から最後まで同一地点において、息の全体（全息）を覚知する様にと、指示する。あなたがこの様に修習する時、禅相は生起する可能性がある。もし、禅相が生起したならば、すぐに注意力を禅相に移してはならず、引き続き、息への覚知を継続する事。

もし、連続して不断に、最初から最後まで約一時間、專注することができているのに、なお、禪相の出現することがないのならば、あなたは、次の段階に進まねばならない：「私は身行を止めて、入息する」と修習し、「私は身行を止めて、出息する」と修習する。

もし、この様にしたいのであれば、先に、息が静まる様にと決意しなければならない。何等の方法でもってしても、息を平静にさせようとしてはならない。というのも、その様にすれば、定力は喪失してしまうからである。《清浄道論》の中において、息を静かにさせる事の出来る、四種類の要素が述べられているが、それはすなわち、思惟、念慮、作意と観察である。故に、この段階において必要な事は、息が平静になる様、決意する事であり、その後、引き続き、息において專注すればよい。この方法で修習すれば、息は更に平静になり、禪相の出現する可能性が強まるのである。

禪相がまさに出現しようとするその直前、多くの禪修行者は、いくつかの困難に遭遇する。特に、息が変化して、非常に微細になり、それが覚知できないほどになる場合がある。もし、この様な現象が発生したならば、その直前に息を覚知していた場所において、息が再度、出現するのを待たねばならない。

ただ七種類の「人」だけが呼吸をしない。すなわち：死者、胎児、溺水の者、知覚を失った者（＝失神者）、四禪の定に入った者、入滅尽定の者及び梵天神である。あなたは、己自身がその内のどれにも該当しない事を思惟して、ただ正念が不足するために、呼吸する時の息を、覚知できていないだけであると、知るべきである。

呼吸を鮮明にするため、特段に意識的に、それを変化させる様な事を、してはならない。もし、その様にするならば、定力を育成する事はできなくなる。ただ、息を如実に覚知する事。もし、息が明確でない時、その直前に息を覚知できていた場所で、それを待つ。あなたが、この様に「念」と「慧」を運用するならば、息は再び出現する。もし、心が、非常に安定的に、微細な息に專注する事ができたならば、禪相は、出現するであろう。禪相が初めて出現した時、注意力を息から禪相に移転してはならない。もしその様にすれば、それは消失してしまうであろう。

禪相は「想い」から生じる。禪相の出現する以前、それぞれの禪修行者には、それぞれ異なる想があるため、修行者毎に、異なる禪相が生じるのである。禪修行者が修習している所の業処は、全員が安般念ではあるが、しかし、人によってそれぞれ、異なる禪相が生じる。ある種の人々にとっては、禪相は柔和で：綿花、気流、明けの明星、輝くルビー、または宝玉または真珠の様であったりする。ある種の人々にとっては、それは荒々しく、綿花の木の幹または、尖った木の様である。ある種の人々にとっては、以下の様である：長い紐または細い紐。花輪、煙、広がった蜘蛛の巣、薄い霧、蓮の花、月、

太陽、電燈の光。綿花の様な純白の禪相の、その大多数は「取相」(uggaha nimitta)である。というのも、取相は通常は、不透明で、光らないものであるが故に。

禪相が、明けの明星の様に、明るく光り輝き、透明である時、それは「似相」(paṭibhāga nimitta)である。禪相が、ルビーの様であり、または宝石、または宝玉の様であるが、明るく輝くことがない時、それは取相である：それが明るく発光する時、それは似相である。その他の形状と色彩を呈する禪相は、上記と同じ方法でもって、理解することができる。

もし、禪相が、あなたの眼前より遠くに出現する時、それに注意を払ってはならない。というのも、それは、消失する可能性が存在するし、また修行者が、この様に修行するならば、安止定 (appanā samādhi) に到達する事ができないからである。なぜであるか？ その理由とは、これが、安般念業処を修習する時の、一つの重要な原則であるが故に。註釈では、以下の様に言う：念の修習 (bhāvanā sati) において、接触点にある息に專注することができて初めて、安般念の定力は、円満に成就する事ができる。

もし、当該の場所以外に存在する息に專注するならば、(+修行者は) 安般ジャーナを証得することはできない。こうしたことから、禪相が、息から遠く離れて(+出現して) いる時、あなたは、それに注意を向けてはならず、引き続き、鼻孔の周囲の一か所に存在する、明確な息に專注するべきである。その様に実践するならば、その後において、禪相は、自動的に(+己自身の鼻孔の方へ) 近づいてきて、当該の場所に留まり、息と結合して、一体となるであろう。

もし、禪相が息の接触点において出現し、かつ安定しているならば、その時、当該の禪相は息の様でもあり、息が禪相でもある様な状況を呈する様になり、また心は、非常に自然に、それと強く結ばれるが、その様な時であれば、(+禪修行者は) 息を忘れて、禪相にのみ、專注することができる。この様な方法でもって、注意力を息から禪相に移すならば、あなたは修習において進歩するであろう。

(+修行が) この段階まで到達した時、あなたは禪相を弄んだり、また、故意にその形状を変化させたりしてはならないし、それを消失させてもいけない。この事に注意する以外、あなたは、禪相の色彩に注意を払ってもならない。

《清浄道論》では、安般念の修習において、以下の様な、一つの重要な原則について言及している：

neva vaṇṇato manasikātabbāṃ——「(禪相の) 色彩に注意を払ってはならない」。

もし、あなたが、その色彩に注意を払うと、それは色遍禪の修習に変化してしまい、もはや安般念ではなくなってしまう。そして、その為に、あなたの定力は停滞し、上昇することができず、禪相もまた、そのことが原因で消失してしまうであろう。故に、水で

満たされたコップに、一粒の真珠を放り込む様に、あなたは心を禅相の中に投げ入れて、心をして、平静に、対象を禅相として專注せしめる様にする。

この様に努力する時、それは、益々白くなっていく。それが、綿花の様な白さになった時、それは「取相」である。あなたは決心して、心を平静に保ちながら、白色を呈する「取相」に、一時間、二時間、三時間またはそれより長く專注する。もし、この様にできたならば、あなたはそれが、清浄で、光明で、極めて明るく輝いている事に気が付くであろう。この時、それを「似相」と呼ぶ。この段階に到達すると、心を「似相」に一時間、二時間、三時間と、（+より長く）專注を保持できる様にと決意し、またその様に決意した後、成功するまで修習する。

この段階において、（+修行者は）「近行定」または「安止定」に到達したのだ、と言える。近行定とは、ジャーナに証入する前の定である；安止定はすなわち、ジャーナの定である。この二種類の定は、みな「似相」を目標としているが、その違いは、近行定の諸禅支は、いまだ十分に、強くて力のある状態まで進展していない、という事にある。その為、「有分心」（bhavaṅga citta）は、近行定の時には、いまだ生起する可能性があり、禅修行者は、「有分心」に落ち込むことがある。この種の現象を体験した禅修行者は、一切が停止した、と述べることもあり、また、あまつさえ涅槃を体験したのだ、と主張することもある。実際は、その時「有分心」はいまだ存在していて、故に、心はいまだ停止しておらず、ただ禅修行者の能力が不足しているが為に、それを察知できないだけである。というのも、「有分心」とは、非常に微細なものであるが故に。

「有分心」に落ち込むのを避けるため、また引き続き定力を上昇させるため、あなたは信、精進、念、定、慧の五根の力を借りて、心をして、似相に專注せしめる様に、しなければならない。精進根によって、一回また一回と、似相を覚知し、念根によって、似相を忘れない様にし、慧根によって、似相を覚知する様（＝これが似相である、と理解する事記者）にしなければならない。

五根のバランス

五根とは、心を調伏し、心をして、正道から離れない様に、定、慧及び涅槃に向かわせる様にする所の、五種類の力の事を言う。五根のうち、信とは、三宝があること、業とその報いがあることを、正しく信じることを意味するが、最も重要なことは、仏陀が確実に、すでに証悟を得たという事を、信じる事である。その理由は、もし、人に正信が欠けるならば、彼は、禅の修行を、放棄するであろうから。彼は仏陀の教法は、10

の部分から構成されていることを信じる必要がある。それはすなわち：四道、四果、涅槃及び教理である。仏陀は我々に、禅修行の順序・次第を教えたが、この段階におけるキーポイントは、法に対して、深く確信することである。

例えば、誰かが、以下の様に思うとする：

「息を観ているだけで、本当に、ジャーナを証得することが出来るのだろうか？」

または：

「禅相は、綿花の様相を呈する時は、取相と言ひ、氷の様に透明な時は、似相というが、それは確かな事柄であろうか？」と。

もし、この種の疑惑が益々強くなるならば、彼は、この時代にはジャーナを証することはできないのではないかと懷疑して、結果、仏法に対して確信を失い、最後には禅定の修習を放棄してしまうであろう。

もし、人が、安般念業処でもって、禅定の修習をするならば、堅固な確信が必要である。彼は、全くの懷疑心なく、妄想心なく、安般念を修習しなければならない。もし、仏陀の教えに従って、仏陀の教法を系統的・段階的に修習するならば、必ずや、ジャーナを証得することができる。

反対に、もし、（+修行者が）信じている事柄（例えば：安般念）を、過剰に強く信じすぎている時、信根の勝解（=事柄への解釈、理解）の作用が強すぎて、慧根が不鮮明になり、精進、念及び定根の力もまた同時に、弱まってしまう。その時：精進根は、似相において、諸根を策励するという作用を、実行できなくなってしまう；定根は、似相において、心を散乱させないという作用を、実行できなくなってしまう；慧根は、似相を知見するという作用を、実行できなくなってしまう、そのことが原因で、翻って信根の力を削いでしまうことになる。

もし、精進根が強すぎるなら、信、念、定、慧の諸根は、勝解、建立、不散乱と知見の作用を実行することができない。この強すぎる精進は、心をして、似相に、静かに專注せしめることができなくさせ、七覚支の軽安、定と捨覚支もまた生起することができなくなってしまう。その他の諸根が、過剰に強い時もまた、その后果は、（+修行者にとって）不利益を引き起こすものである。

信と慧、定と精進のバランスは、諸々の聖者が讃嘆するものである。もし、信が強くて慧が弱い時、迷信になり易く、不適切な信仰をしたり、意義のない事柄に取り組んだりする。例えば、仏教以外の外道、護法の鬼神を信仰したり、尊敬したりする様になる。しかしながら、慧が強すぎて信が弱い時、それは人を奸邪に向かわせる。例えば、己自身は実際の修行と実証に欠けているのに、（+仏法について）恣意的に判断したり評価

をしたりする。それはまるで、薬を飲みすぎて、治療が困難な副作用を発症している（+患者の）様なものである。

信と慧がバランスしてこそ、信じるべき事柄を、信じる事が出来る。その様な修行者は、三宝を信じ、業報を信じ、もし、仏陀の教法に従って修習するならば、似相を獲得して、ジャーナを証得することができる事を確信する。もし、信心をもって修習し、智慧をもって、似相を観察するならば、その時には、信根と慧根はバランスを獲得することができる。

止を修習したい禅修行者にとって、堅固な信心（=確信）は、非常に重要である。もし、人が「似相によって定の修習をするならば、私は必ずや、安止定を獲得することができるに違いない」と考え、その後、信根の力をもって、また似相を專注する事を通して（+修習するならば）、彼は必ずや、ジャーナを獲得することができる。というのも、ジャーナの主要な基礎とは、すなわち專注であるが故に。

観を修習する禅修行者にとって、慧力は非常に適合する。というのも、慧力が強い時、彼は無常・苦・無我の三相を知見することができるのであるが故に。

次に、定が強くて精進が弱い時、（+もともと）定に怠惰を生じる傾向があるために、（+修行者において）怠惰の心が増長することがある。もし、精進が強くて定が弱い時、精進には掉挙を生じる傾向があるため、心は掉挙を生じせしめる事になる。唯一、定根と精進根のバランスが取れている時、修行者は、怠惰にも掉挙にも落ち込むことがなく、結果、安止定を証得することができるのである。

定と慧がバランスする時初めて、世間禅（注7）（*lokiya-jhāna*）は生起することができる。仏陀は定と慧は、並行して修習するべきであると指導している。というのも、出世間禅（注8）（*lokuttara-jhāna*）もまた、唯一、定と慧がバランスした時にのみ生起するのであるが故に。

信と慧とのバランス、定と精進とのバランス、定と慧とのバランスは、共に念根を必要とする。念根はどのような状況においても適合するものである。というのも、念は心が信、精進、慧が過剰に強すぎることによって、掉挙に落ち込んだり、定が強すぎることによって、怠惰に落ち込むのを、防ぐことができるが故に。こうしたことから、念は一切の状況に適合する事ができる。ちょうど調味料としての塩が一切の調味に適合するのと同じ様に、また宰相が国王の一切の政務を取り仕切るのに相応しいのと同じ様に。

故に、疏鈔は以下の様に解説する：

「世尊は言う『念はいかなる業処においても必要とされる』」なぜであるか？

というのも、念は心を保護することができ、心を策励し、心をして、いまだ到達したことの無い境に、趣かせる事ができる。正念のない時、どのような特別な境地をも、証得することはできないのである。正念は心を保護することができ、また、心が目標（所縁）から離れない様にする事ができる。これが、なぜ、禅修行者が、観智でもって念を認識する時、彼は念が、次の状況を呈するのを見る事ができるのかという理由である：それは、修行している最中において、專注する所の目標を保護し、また禅修行者の心をも保護する。正念が欠ける時、彼は、心の策励と心の抑制ができない。これが、なぜ仏陀が、念は一切の処に適合すると述べたのか、という回答である。（《清浄道論》第四章参照）

（注7）世間禪：四色界禪と四無色界禪。

（注8）出世間禪：聖道と聖果におけるジャーナ定。

七覚支のバランス

止禪において、ジャーナを獲得するためには、七覚支をバランスする事は、非常に重要である。

- 1、念覚支：正念。また、不断に継続的に、似相を覚照する事。
- 2、択法覚支：似相を知見する事。
- 3、精進覚支：似相において、諸々の禅支を策励し、かつバランスする事。
- 4、喜覚支：似相への歓喜の心を受用する事。
- 5、軽安覚支：似相において身心（＝心と心所）が軽安である事。
- 6、定覚支：似相において、一心に專注する事。
- 7、捨覚支：心の平等、興奮しない事、また、似相から退出しない事。

もし、精進（+の力）が減退する時、あなたの心は、禅修行の目標（似相）から遠く離れてしまう。実際、（+この様な時は）あなたは軽安、定と捨という、この三種類の覚支を修習してはならず、択法、精進と喜覚支を修習するのがよい。（+修行者は）この様にして初めて、その心を、再び奮い立たせることができる。

精進が過剰なために、心に、掉挙と散乱が生じるとき、択法、精進と喜覚支を修習してはならない。その時は、軽安、定と捨覚支を修習するのがよい。この様にして初めて、（+修行者は）掉挙と散乱する心を抑制し、平静にさせる事ができる。

以上が、如何にして、五根と七覚支をバランスするのか（+という説明である）。信、精進、念、定と慧の五根が、十分に成長・展開したならば、定力は近行定を超えて、安

止定に到達する。この時、心は持続的に、不断に、似相を、数時間、または一昼夜、または一日中、覚知することができる。

五禅支：

- 1、尋 (vitakka) : 心をして似相に投入せしめる。
- 2、伺 (vicāra) : 心をして継続的に似相に投入せしめる。
- 3、喜 (pīti) : 似相を好む。
- 4、樂 (sukha) : 似相を体験している時に受ける樂または楽しさ。
- 5、一境性 (ekaggatā) : 似相に対して一心に專注する事。

ジャーナの修習を始めたばかりであれば、あなたは、長時間ジャーナに安住できる様、練習するべきであり、余り長い時間を、禅支の省察に使ってはならない。熟練すれば、あなた同時に、五つの禅支を、省察することができる (+様になる)。

しかしながら、ある種の禅修行者は、憶測の方法でもって、禅支を省察する。本当に正しい方法とは、仏陀が《アビダンマ》の中において、述べている所の教えに基づくべきである。禅修の心は、心臓の中の「心所依処」に依存して、生起する所の、心路過程心である。「心路過程心」 (vīthi citta) が生起していない時、生起するのは有分心 (bhavaṅga citta) である；一たび、心路過程心が生起すると、有分心は即刻 (+その生起を) 停止する。

もしあなたが、心をして平静に、安般似相を、一時間または二時間、または、それ以上の時間、專注せしめることができるならば、この時の禅相の光は、非常に明るいものになる。禅修の心によって、その光は、身体の四周を照らす様になる。もし、この光の力の助けを借りて、心臓の中の心所依処を識別するならば——**pabhassaramidaṃ bhikkhave cittaṃ** ; 比丘たちよ、この心は非常に明るい (《増支部・一集》) —— 明るく輝く、有分を見ることができる。

上記の表現は、その清らかな本質を述べているだけであって、それは見る所、一面の鏡の様に見える。もし、あなたが、明るく輝く安般似相を擁するならば、有分を識別する時、安般似相は、まるで一面の鏡の様相を呈する所の、有分の中において、それは出現する。その時、あなたははっきりと、明晰・明確に、五禅支を識別する事ができる。

その後、あなたは、初禅の五自在を練習するべきである。すなわち：

- 1、引転自在 (āvajjana vasī) :
出定の後、諸禅支を、観察する事ができる。
- 2、入定自在 (samāpajjana vasī) :

どの様な時間においても、心の欲する所に従って、入定する事ができる。

3、住定自在 (adhittāna vasī) :

己の願望に従って、定に住む時間を、決める事ができる。

4、出定自在 (vuttāna vasī) :

予め決めてあった時間に、出定できる。

5、省察自在 (paccavekkhaṇā vasī) :

諸々の禅支を観察することができる（第一項と同じ）。

引転と省察の二者は、同じ「意門心路過程」(manodvāravīthi) の中において出現する。引転とは、「意門引転心」(manodvārāvajjana) によって運用され、尋などの、五禅支の中の一つを、目標とする；省察とはすなわち、意門引転心の後に、引き続き生起する所の、七つの速行心によって、運用されるものであって、二者は同じ目標を取るののである。

《増支部・母山牛經》(Āṅguttara Nikāya, Pabbateyyagāvī Sutta) において、仏陀は比丘たちに以下の様に、注意を与えている：いまだ初禅の五自在に熟練する前に、第二禅に進んではならない。その様にするならば、彼は初禅を失い、かつ、第二禅にも到達することができなくなり、(+同時に) 二者を失うであろう、と。

初禅の五自在に熟練した後、あなたは、第二禅の修習に、進む事ができる。その時、あなたは先に、初禅に入らなければならない。初禅から出て、初禅の欠点及び、第二禅の長所を思惟する：初禅は五蓋に近い；初禅の内の尋、伺禅支は粗悪で、劣っていて、それらは、初禅をして尋、伺のない第二禅の静寂より劣らせしめる。この二つの禅支を取り除きたいという思いの下、喜、楽、一境性のみを残したい、という願望をもって、再度、似相に専注する。この様にすれば、あなたは喜、楽及び一境性を具備する所の、第二禅に到達することができる。次に、第二禅の五自在を修習する。

上記の修習に成功した後、第三禅の修習に進みたいのであるならば、あなたは、第二禅の欠点と、第三禅の長所を、以下の様に、思惟しなければならない：第二禅は初禅に近く、またその喜禅支は粗悪で劣っており、そのため、喜のない第三禅の静寂には及ばない。第二禅から出定した後、この様に思惟し、第三禅を証得したいと思う心を育成し、再度、似相に専注する。この様にすれば、あなたは楽と一境性を具備した第三禅に到達することができる。その後には第三禅の五自在を修習する。

上記の修習に成功した後、第四禅に進んで修行したいのであるならば、あなたは第三禅の欠点と、第四禅の長所を、思惟しなければならない：第三禅の楽禅支は、粗くて劣っていて、そのため第三禅は、楽のない第四禅の静寂より、劣っている。第三禅から出定して、この様に思惟した後、あなたは第四禅を証得したいという心を育成し、再度、

似相に專注する。この様にすれば、捨（受）及び一境性を具備する所の、第四禪に到達することができる。

次に、あなたは、第四禪の五自在を修習しなければならない。第四禪に入る時、呼吸は完全に停止する。ここにおいて《大念処経》において教導する所の：『私は身行を止めて入息する』、『私は身行を止めて出息する』の修習が完成した事になる。

この「身行を止めて」の歩みは、禪相の生起する前から始まり、四禪の修習に伴って定力が増長し、その為呼吸は益々静寂になり、最後には停止する（+という過程を経る）のである。

定の修習におけるその他の法門

まえがき

安般念を修行して、第四禪に到達する方法は、すでに解説を終えた。禪修行者が安般念によって第四禪に到達し、かつ五自在の修習に成功した後、禪定の光が明るく輝き、光が四方へ照射する時、彼は己自身の願望に従って観禪（vipassanā）の修習に転換する事ができる。この時点で、彼は引き続き止禪の法門を修習する事もできる。ここでは、その他の止禪の法門の修習の仕方を紹介する：32 身分、白骨観及び白遍などである。

身至念（32 身分）

《増支部・三集・10-5掬塩品・11-相経》（Aṅguttara Nikāya, Tika Nipāta, 10 - 5 Loṇakapallavagga, 11 - Nimitta Sutta）において、仏陀は、止禪心と観禪心の二者共に、明るい光がある、と述べている。第四禪の光が極めて明るい時、あなたは何をするべきか？

その時は、その他の止禪業処の修習に転換する、よいチャンスである。まず、あなたは光を、更に強く、更に安定するように修し、その後に、この光を用いて、己自身の髪の毛、体毛、爪、歯、皮膚などの、32 の身体部分を照らす様にする。あなたは、それらを 6つのグループに分けなければならない。先の四グループには、それぞれ五つの身体部分が含まれ、最後の二つのグループには、6個の身体部分が含まれる。

その後、逐一、グループ毎に観察する。もし、グループ毎の、身体の 32 の部分の照見に成功したならば、次には、同時に 32 の身体部分すべてを、遍観できる様に、

修習する。すなわち、頭髪から尿まで、次には、尿から頭髪まで、それを何度も重複して、修習する。あなたが、この様に不断に持続的に、正順と逆順で、32の身体部分を観察できるようになった時、例えば、家の中から庭の垣根の、32本の柱を数えながら見るとして、柱の一本一本を見ていくのは非常に時間がかかる。その為、それらを数えない様にして、左から右、右から左とみていくだけにすれば、32本の柱、全部を見ることが出来る。32の身体部分も（+それと同じ様に）迅速に観察すれば、それらを観察する事に（+やがては）非常に熟練するであろう。

次に、（座禅堂の中において）あなたの前に座っている禅修行者の 32 身体部分を、修習の（+対象として）転換する。迅速に、頭髪から尿へと照見する。もし、この様に外観をすることができたならば、己自身の 32 身体部分を内観し、次に再び、当該の人物の、32 身体部分を外観する。この様に、不断に照見の対象を交代する。もし、そのことに成功したならば、座禅堂にいる、その他の禅修行者の、32 身体部分を、逐一照見する。しかしながら、この修習は想像によってではなく、必ずや、光によって、実際に照見しなければならない。それはちょうど、懐中電灯でもって、物を照らすが如くである。もし、この様にできたならば、内観と外観を、逐一実践する。

その後、光を座禅堂の外にいる人物と動物、その 人物の 32 身体部分及び、動物の 32 身体部分に向ける。この様に外観の修習を実践して、光を（+投射して）、遠くまで、照らせれば照らせるほどよい。もし、この修習に成功したならば、あなたは遍禅の修習に転換する事が出来る。多くの禅修行者の体験への、研究を通して知ることが出来るのは、32 身分から遍禅の修習に転換する方が（+他の方法から転換するより）比較的容易である、という事である。

もし、32 身分を修行したいと思うならば、あなたは先に、安般念によって、第四禅に到達しておかねばならない。禅定の光が明るく輝き、その光が四方に放射する時、この光の助けを借りて、あなたは身体の 32 の部分について、逐一識別をする。身体の 32 か所の部分について、地界が顕著なものは 20 個、水界が顕著なものは、12 個ある。

あなたは、地界の、顕著な四つのグループを、観じなければならない。一つのグループには、五つの項目が含まれる。すなわち：

- (一) 頭髪、体毛、爪、歯、皮膚；
- (二) 筋肉、腱、骨、骨髓、腎臓；
- (三) 心臓、肝臓、膜、脾臓、肺臓；
- (四) 腸、腸間膜、胃中物、糞便、脳；

次に、水界の顕著な二つのグループを観ずる。一つのグループ毎に、六つの項目が含まれる。すなわち：

- (一) 胆汁、痰、膿、血液、汗、脂肪；
- (二) 涙、皮脂、唾、鼻水、関節液、尿。

上述の順序に従って、逐一識別する。まるで鏡を使って己自身の顔を見る様に、はっきりと、身体各部分の存在を透視して、当該の身分（注9）を確認する。この様に修行していて、もし、あなたの禅定の光が暗くなった時、識別している最中の、（+その対象である所の）身分（=身体部分）もまた、明晰でなくなる。この時、あなたは、安般念の修習に戻り、定力を第四禅のレベルまで、上げなければならない。禅定の光が再度輝いて、強くなった時、また 32 身分（+の観察）に戻る。毎回、禅定の光が暗くなった時、あなたは、必ずこの様に、修行しなければならない。

あなたが、頭髪から尿まで、順序良く識別する事ができる様になったならば、又は、尿から頭髪まで逆順で識別する事ができる様になったならば、あなたは、透視の智慧をもって、一つひとつの部分を見ることができるようになる。それらに精通し、熟練するまで、継続して修行する。

（注9）禅修行者は、己自身の身体各部分を、実際に、透視できていなければならないのであって、決して、想像を通して修行してはならない。もし、禅修行者が見ている所の身分が己の面前に、まるで写真の様に現れる時、それは己自身が想像したものには過ぎず、32 身分を真正に透視したのではない。

32 身分を透視できない原因は、通常は、定力の深さが足りないからである。禅修行者は、辛抱強く、再度、十分に深い定力を、育成すべきである。焦り、早飲み込みは禁物であり、拙速の者は、大きな利益を失うであろう。

次に、これまでと同じく、目を閉じたマ、禅定の光を運用して、あなたに最も近い人またはその他の衆生を識別する。特に理想的なのはあなたの前方に位置する人が良い。その人または衆生の 32 身分、頭髪から始めて尿まで識別し、その後に尿から逆に頭髪までを識別する。この様に正順と逆順でもって、32 の身体部分を、何度も識別する。この様に修行した後、あなたは、己自身の内在する 32 身分を一度識別し、その後に外部に存在する他人の 32 身分を一度識別する。この様に交替で識別して、何度も不断に繰り返す。

この様に、内と外とで識別が出来る様になったならば、あなたの禅修の力は増強される。あなたはこの様に、近くから遠くまで、徐々に識別の範囲を広げていかねばならな

い。あなたは、自分が遠くの衆生を識別できないかも知れないと、心配する必要はない。第四禪の光の支援の下、あなたは簡単に遠方の衆生を見ることができる。それは肉眼ではなく、慧眼 (ñāṇacakkhu) を用いて見ているのである。

あなたは十の方面に対して、識別の範囲を広げていく必要がある。すなわち：上、下、東、西、南、北、東北、東南、西北、西南である。この十の方角の中にあるもので、識別の対象が人、畜生またはその他の衆生であっても、あなたは内在する 32 身分を一度識別し、その後外部の身分を一度識別する。

この様に何度も繰り返し修習する。あなたが二度と、男性、女性、水牛、乳牛またはその他の衆生等の各種の区別・差異を見ることがなくなった時、如何なる時でも、内部であろうが外部であろうが、あなたが見るのはただ 32 身分の組み合わせに過ぎない。その時、あなたは、初めて、32 身分の修法を成就し、熟練し、精通したのだと言える。

涅槃の三門

ここにおいて、私は、涅槃に向かう三門について、解説したいと思う。《大念処経》(Mahāsatipaṭṭhāna Sutta) において、仏陀は解説して以下の様に言う、四念処の法門は涅槃へ向かう唯一の道である、と；しかし、別の方面（+に目を転ずれば）、註釈の中では、涅槃には三つの門があると言う：

色遍 (vaṇṇakasiṇa)、不浄観 (paṭikūla manasikāra)、無我 (suññāta、空) ——すなわち、四界分別観である。しかしながら、この三門の区別は、ただ止禪の部分においてのみ言えるのであり、それらの観禪の部分においては、みな同じである。

32 身分（+修習）の後、我々は、この三門のどれか一つの門を、修習する事ができる。それらがみな、我々をして涅槃に到達せしめることができるため、これを涅槃の三門、と言う。禅修行者が、内・外の、32 身分の識別に熟練した後、彼は、この三門のどれか一門を選らんで、修行する事ができる。先に、私は、32 身分の不浄観とは、どの様に修行するのであるかを、解説する。



白骨観

あなたは、32 個の部分、一つの全体と見做すか、または、その中の一つ部分を取り出して、不浄観の修行の対象とする事ができる。我々は、どの様にして、32 身分の中の一つである白骨観を修行するのかを、ここで解説する。

この法門を修行する前に、あなたは先に、安般念に戻って修行し、定力を、再び、第四禪にまで上げておく。定力の光が明るく輝いて、四方に放射する時、先に、己自身の 32 身分を識別し、その後、あなたの近くの人、または衆生の 32 身分を識別する。その後、己自身の全身の骨格を、一つの全体と見做し、智慧で以て、これを識別する。この様に、内外において、一回または二回識別する。あなたは、全身の骨格が見えた時、骨格の不浄・厭うべき相を対象として、下記の語彙のどれか一つで以て、心内において、何度も黙念する：

「嫌悪（＝厭うべき）、嫌悪」（paṭikūla, paṭikūla）、または「厭うべき骨、厭うべき骨」（atthikapaṭikūla）、または「骨、骨」（atthika, atthika）と。

あなたの好む、どの様な言葉でもよいので、それをもって、黙念する。あなたは、心を平静にして、骨の不浄で、厭わしい相に専注し、それが、一時間または、二時間持続する様にする。骨格の（1）色、（2）形状、（3）位置、（4）境界、（5）純粋な骨の相とその他の身体部分が混乱（＝混交）していない状態を、注意してよく観察する事。この様に修習すれば、骨格の不浄、厭うべき概念は、容易に、心の中において生起する。安般念の第四禪の力によって、あなたの、不浄相に関する修行は、進歩・上昇し、強化され、完全に安定する。あなたは、不浄の覚観と智慧に対して、その生起と、持続と進展を得る事ができる。

骨格の不浄、厭うべき相で以て、定力を育成する時、あなたは「骨格」の概念を捨てて、骨格の厭わしさにのみ、注意を払わねばならない。《清浄道論》によれば、骨格の全体または、身体のある部分（32 身分）の（1）色、（2）形状、（3）位置、（4）境界、（5）純粋なる骨の相とその他の身体部分が混乱（＝混交）していない状態を観察する時、この様な（五因）が円満する骨の相は、「取相」（uggaha nimitta）という。この五因が円満する骨の相を観察し、また識別する時、不浄・厭わしさが生起する状態を「似相」（paṭibhāga nimitta）という。

五禪支

骨の厭わしい相を借りて、あなたは、初禪に到達することができる。この時、五禪支が存在する。すなわち：

- 1、尋（vitakka）＝心を、骨の厭わしい相に投入せしめる。

- 2、伺 (vicāra) =心をして、継続的に、骨の厭わしい相に、注目し続けせしめる。
- 3、喜 (pīti) =骨の厭わしさを喜ぶ。
- 4、楽 (sukha) =骨の厭わしさを体験する事による楽しさ。
- 5、一境性 (ekagatā) =骨の厭わしさに、一心に專注する。

同様の方法によって、あなたは身体のその他の厭わしい部分を観察して、初禪に到達する事ができる。

ある種の人々は懷疑する：骨の厭わしさを観察の対象にして、なぜ、喜と楽が生じるのか？と。

答え：この種の修行をする時、骨自体は、確実に嫌悪されるべきものであるが、しかし、あなたは、事前に、この法門の利益を理解していて、あえて修行に来ている訳であって、また、同時に、最後には、あなたは、老、病、死の苦から解脱できる事も知っている。故に、喜と楽が生じるのである。また、喜と楽は、熱く悩ませることによって、心を疲労させる所の、五蓋が取り除かれた事によっても、生起する。

例えば、ゴミ拾いを生業にしている人が、ゴミの山を見た時、以下の様に思う：「これらを利用して、私は大金を儲けよう」こうして、彼は非常に歓喜する。また、身体が重病である人が、嘔吐や排便で不快感が癒された時、悦楽と安楽の感覚が生じる様なものである。

《アビダンマ》の註釈では、以下の様に説明される：骨の厭わしさに專注して、初禪に到達した人は、引き続き、初禪の五自在を、修行しなければならない。

その後、彼の、もっとも近くにある衆生（もっともよいのは、自分の前に座っている人）を観察して、禪定の光でもって、その人の骨格を（+瞑想の）対象とする。

彼は、骨格を厭わしいものとして專注して、この不浄想の五禪支が明確になるまで（+專注力を）育成しなければならない。

註釈によると、五禪支が非常に明確になっても、この定力を近行定または安止定と呼ぶことはできない。というのも、対象が生きているからである。《アビダンマ》の再註釈《根本複註》(Mūlaṭīkā)によると、外部にある骨格が死者のものであって、それを專注する場合には、あなたは、近行定に到達する事ができる。

この様に、五禪支が明確である時、あなたは、己自身の、内在する骨格を厭わしいものとして、專注しなければならない。この様に、交互に、内在（=己自身の内にある骨格）を一度、外にあるものを一度、という風に、骨格の厭わしさを、何度も重複して、專注する。

不浄と厭わしさに対する修行が、強力で、かつ、完全に進展した後、あなたは、衆生の骨格を識別する範囲を十方に広めなければならない：一度に一つの方向に向かって、

あなたの禅定の光が及ぶ場所まで、その方向の、すべての衆生の骨格を、観察する。どの方向に向かっても、この様な観察をする。あなたの、透視の智慧を、運用することを通して、近くから遠くまで、十の方向へと（+観察を）する。毎回、外在する対象を観察する前に、必ず己自身の、内在する骨格を一度、観察する。その後、一度、外在する骨格を観察する。十の方向の、どの方向を見ても、見えるものは、ただ骨格だけ、というレベルまで、修行しなければならない。修行が成功したならば、あなたは次には、白遍の修行をする事ができる。

十遍

遍禅には、四種類の色彩がある、すなわち：白、褐色、黄色、赤である。褐色（nīla）と訳されている色彩は、黒色または青色とも、訳される。この四種類の色遍は、身体の、異なる部位の色を採用して修行するもので、初禅～第四禅まで、到達する事ができる。

《アビダンマ》の註釈によると、髪の毛、毛（＝体毛）、黒い眼球の色彩は、青遍（マ）の修行に使える；脂肪の色彩は、黄遍の修行に使える；血液と筋肉の色彩は、赤遍の修行に使える；身体の骨格、歯と爪の白色は、白遍の修行に使える。

もし、あなたがすでに、外在する骨格の白色でもって、白遍の四禅までの、修行ができているのであれば、あなたは外在する頭髮で、褐色（または青遍；黒遍）の修行をする事ができる；外在する脂肪、または尿でもって、黄遍の修行をする事ができる；外在する血液でもって、赤遍の修行をする事ができる。修行が成功したならば、あなたは花びらや、その他の物の色彩を利用して、異なる色遍を、修行する事ができる；すべての青色、褐色または深い色彩の花々は、あなたに呼びかけている。あなたに、褐遍の修行をなさい・・・と。

すべての黄色の花々は、あなたに呼びかけている。あなたに黄遍の修行をなさい・・・と。

すべての赤色の花々は、あなたに呼びかけている。あなたに赤遍の修行をなさい・・・と。

すべての白色の花々は、あなたに呼びかけている。あなたに白遍の修行をなさい・・・と。

この様に、真に熟した禅修行者は、己自身の外部に見えるもの、すべてを対象として、遍禅と観禅を修行する事ができる——生命体であろうと、非生命体であろうとも、内部のものであろうとも、外部のものであろうとも。

(一) 白遍

経典では、白遍とは、四種類の色の中では、最もよいものである、と述べられている。というのも、それは心をして、明るく輝せることができるが故に。その為、私は、白遍の修行方法から、説明を開始する。

白遍を修行する前、あなたは再度、安般念の修行を復習して、第四禪に到達しておく。禪定によって生じる光が、光り輝き、非常に明るく、四方を照らす時、あなたは、内在する (=己自身の) 32 身分を識別する；次に外在する、あなたの近くにいる一人の衆生の 32 身分を識別する；その後、その人の骨だけを、認識する；その骨格を、厭わしいものとして、観察したいのならば、その様にしてもよく；それを、厭わしいものとして、観察したいと思わないのならば、ただの骨格として、観察してもよい；その後、骨格の、最も白い部分を選んで (+瞑想の) 対象とする；もし、骨格全体が白い時、その骨格全体の白色を、対象としてもよい；または、頭がい骨の後ろ側の白色を対象にして、「白、白」と專注してもよい。

もう一つの方法は：もし、あなたの心が非常に明敏で、内在する骨格の厭わしさに專注して、初禪に到達することができるのであるならば、あなたは己自身の骨格の白色を、白遍の修行の対象とする事ができる。あなたは先に、外部の骨格の厭わしさを識別し、その骨格の概念を強化し、安定させると同時に、不浄の修行をする。この様にすれば、あなたは、骨格の白さを更に明確にすることができる。その後、あなたは「白、白」と (+瞑想の対象に) 專注する事に (+修行の内容を) 変更して、白遍の修行をすればよい。

外部の骨格の白色を、(+瞑想の) 対象に取ったならば、あなたは、一回につき、一時間または二時間、心を平静に保って、その白色を呈しているものを対象にして、それに專注しなければならない。安般念第四禪の定力の支援の下、あなたの心は、平静を保持しながら、白色の対象に專注する。あなたが、白色 (+の対象) に、一時間または二時間、專注する事が出来たならば、あなたは、骨格が消え失せて、ただ白い円形だけが、残っている、ということに気が付くであろう。

白色の円形が出現する前、純白の骨の相は遍作相 (予備相) であり；骨の相が消失して、白色の円形になった場合、その白色が、綿の様な白さである場合、それは取相である；それが、明けの明星の様に、明るく清らかに輝く時、それは似相である。

もし、あなたが過去世において、かつて白遍を修行した事があったならば、それが、釈迦牟尼仏の教化の時代であろうとも、過去仏の教化の時代であろうとも、あなたは白遍の修行した事による、波羅蜜を擁している。そうであるならば、あなたは、禪相を拡

大する必要はない。というのも、あなたがそれを見ながら、「白、白」と黙念すれば、それは十方に広がって、遍満するが故に。

引き続き「白、白」と、それが似相になるまで、心を向ける。当該の似相に、引き続き專注すれば、あなたは初禪に、入る事ができる。ただ、あなたは、己自身の定力が、いまだ十分に安定していないという事を発見し、また実際、あなたには、持久する力が、足りないであろう。定力を安定させて、持久させる為に、あなたは禪相を拡大する必要がある。

この事が実践できる為には、あなたは先に、白色の似相に、一時間または二時間、專注する事ができなければならない。その後、あなたは白色の円形を、1、2、3または、4インチ程に拡大する様に、決意する。己自身の希望する大きさに、拡大できるかどうか、チャレンジしてみる。未だ、大きさを決定する前に、禪相を拡大してはならない。どれくらい拡大したいか、1インチなのか、2インチなのか、3インチなのか、または4インチなのか、先に決定しておく事。

あなたが白色の円形を拡大する時、それが不安定な様子に変化する事に、気が付くかもしれない。その時、あなたはそれに対して「白、白」と專注し、それを安定させるのがよい。あなたの定力が、安定して強化された時、あなたは、白色禪相が安定してかつ、静止している事を発見するであろう。

拡大した禪相が安定したならば、あなたは、上述した手順を何度も重複して、(+修習)しなければならない：そして、次には、それを若干広げていく。この様にして、あなたは禪相を直径1碼(ヤード)、2碼と拡大して行く。この様にして、それを拡大した結果、それが、あなたの十方を包圍して、区切り・際限のない様にする。その時、あなたはどちらの方向を見ても、ただ白色の禪相を見るだけであって、その他の物質の痕跡を、一筋も見ることがない。あなたは平静な心で、白遍に專注しなければならない。白遍が安定したならば、あなたの心は、白遍のどこか一か所に安んじておいて置く。ちょうど、帽子を、壁に取り付けたフックに、引っ掛けるが如くに。心をそこに安住させて、それを保持し、引き続き「白、白」と專注する。

あなたの心が平静で安定したならば、白遍もまた静かに止まって安定する。白遍は、非常に潔白で、明るく、清く透徹している。これも似相であって、それは元の白遍似相を拡大する事によって、生じたものである。

引き続き、継続して修行しなければならない、あなたの心が、白遍似相に一時間または二時間継続して專注することができる様になるまで。(+その時)あなたの心中の五禪支は非常に顕著になり、明晰で、力があり、初禪に到達することができる。

五禪支とは：

- 1、尋＝心を白遍似相に投入する。
- 2、伺＝心を持続的に白遍似相に投入せしめる。
- 3、喜＝白遍似相を喜ぶ。
- 4、楽＝白遍似相に注目する事によって生じる安楽。
- 5、一境性＝一心に白遍似相に専注する。

これらは、合わせて全体で、ジャーナと呼ぶ。安般念の段で説明した様な（+同じ方法で）、白遍初禪の五自在を修行し、その後、第二、三、四禪を修行する。

この四種類のジャーナは、また色界禪（rūpāvacara jhāna）と言う。というのも、それらは、修行者をして、色界天に生まれせしめるが故に。しかし、ここにおいては、我々は、修行者にジャーナの修行を勧めるのは、色界天に生まれたいが為ではなく、それらを利用して観禪の修行の基礎となしたいが為である。

（二）褐遍

褐遍に転じて修行する時、あなたの前方に座っている、禪修行者の頭髪を照見する。その色彩を禪修行の目標とする。頭髪の形状が消失した時で、かつ、円形の褐色の遍相が出現した時、あなたはそれを、十の方角に拡大する。その後、引き続き、それに専注して、順序に従ってジャーナに入り、最後は第四禪に入る。

（三）黄遍

黄遍の修行する時、あなたの前方に座っている禪修行者の、尿または脂肪を照見する。その黄色の色彩を禪修行の目標とする。尿または脂肪の形状が消失した時で、かつ、円形の黄色の遍相が出現した時、あなたはそれを、十の方角に拡大する。その後、引き続き、それに専注して、順序に従ってジャーナに入り、最後は第四禪に入る。

（四）赤遍

赤遍の修行する時、あなたの前方に座っている禪修行者の、身体のどこかの赤色、例えば血液などを照見する。もし、血液を対象とするならば、あなたは、心臓の周囲、または内部の血液を観じて、血液の赤色を禪修行の目標とし、心中で默念する「赤、赤」。血液の形状が消失した時で、かつ、円形の赤色の遍相が出現した時、あなたはそれを、十の方角に拡大する。その後、引き続き、それに専注して、順序に従ってジャーナに入り、最後は第四禪に入る。

パーリ聖典によると、仏陀は十遍禪を教えた。それらは、上述の四種類の色遍以外に、六種類の遍を加えたものである：地遍、水遍、火遍、風遍、空遍、光明遍。これから私は、これら六種類の、遍の修行の方法を解説する。

(五) 地遍

地遍の修行をする時、先に、平坦な土地を見つけておかねばならない。それはちょうど、明け方の空の茜色の様に、赤褐色をしていて、木の枝、石、または葉っぱなどが無い場所でなければならない。そして、木の枝、またはその他の道具でもって、その土地に、1インチの円を描く。その後、その円形に専注して、「地、地」と注意を向ける。目を開けて、その円形の土地を見続けて、その後目を閉じて、(+己自身の)前に、同じ円形の相が出現するかどうか、試してみる。この様にしても、地の相が出現することがないならば、あなたは、安般念または白遍によって、定力を、第四禪にまで上げる必要がある。その後、禪定の光の力を借りて、円形の土地を注視する。目を閉じて、目を見開いていた時と同じ様に、明晰に、円形の地相が見える様になった時、あなたは他の場所に移動して、この禪相(取相)の修行を続ける事ができる。

地相の色彩、あるいは地界の硬さ、粗さ、重さなどの特徴に、専注してはならない。ただ、地の概念にのみ専注する事。この取相に継続して専注し、定力が更に強化された時、取相は、非常に純潔で清らかな似相になる。その後、あなたは似相を徐々に拡大する。一度に少しずつ拡大して行き、最後には、それが十方に遍満する様にする。その後、地遍のどこかに専注して、初禪乃至第四禪に到達する(+様に修習する)。

(六) 水遍

水遍の修行をする時、あなたは一鉢の、または一桶の清らかな水、井戸水などを、用意しなければならない。水界の流動性、粘着性などの特徴に、専注してはならない。ただ、取相の修行が成功するまで、水の概念にのみ専注し、「水、水」とだけ注意を向ける。その後は、地遍と同じ様な方法で、この相において修行する。

(七) 火遍

火遍の修行をする時、火を焚くか、蠟燭の炎を利用するか、またはあなた以前に見たことがあって、記憶している炎を利用する。もし、それが困難である時、あなたは、真中に丸い穴をあけた幕(=カーテンの様なもの)を作る。円形の穴の直径は1インチとする。幕を燃焼している木材の前、または乾燥した草の火の前にこれをぶら下げて、あなたは、この穴を通して、炎がみえる様にする。

煙や、燃焼中の木材や、草に専注してはならないし、火界の熱さ、冷たさの特徴に専注してもならない。ただ火の概念にのみ専注して、「火、火」と注意を向ける。その後、上述したのと同じ方法によって、取相の修行をする。

(八) 風遍

触覚 (= 感觸) または、視覚でもって、風遍の修行をする。触覚を利用する修行方法は、以下の通り：あなたは、窓または戸口から入って来て、身体に当たる風に注意を向け、かつ、それについて「風、風」と黙念する。視覚を利用する修行方法は、以下の通り：あなたは、風に吹かれている木の枝、または葉の移動に注目し、かつ、それについて「風、風」と黙念する。風界の支持性、推進性などの特徴に、專注してはならず、ただ、風の概念にのみ、專注する事。先に、その他の遍処でもって、禪定の修行をして、第四禪に到達しておき、その後に、禪定の光の支えのもと、外部の枝葉の移動を観察して、かつ、風の相を認識する：取相は、熱いおかゆから噴き出る蒸気の様であり：似相は静止して動かないものである。

(九) 光明遍

光明遍の修行は、壁の隙間から入って来て、地上に映る光明の相に注目する事を通して、修行する事ができる；または、上方を見上げて、木の枝の隙間から見える空の光を利用してよい。もし、その様にするのが困難であれば、あなたは一個の陶罐を見つけて、その陶罐の内部に、火のついた蠟燭を立てるか、電燈をつける。この陶罐を適当な場所に置いて、罐の口から洩れてくる光線を壁に当てる。その後に壁に映った円形の光明の相に「光、光」（+と注目する）。

(十) 虚空遍

戸口、窓または鍵穴の空間を利用して、虚空遍の修行をする事ができる（限定虚空遍とも言う）。もし、この方法が困難である場合、あなたは一つの木の板を用意する。この板に8インチまたは一フィートの丸い穴をあける。この板を手にとって、空に向かい、あなたはこの丸い穴を通して、天空を見る。その時、樹木やその他の物体が見えない様にする事。その後に、丸い穴の空間を見て「空、空（からっぽ）」と黙念する。

四無色界禪

十遍の中の、一つ一つの遍を修行して、第四禪に到達する事が出来たならば、あなたは次に、四無色処と呼ばれている所の、四種類の無色界禪 (arūpa jhāna または無色定) を、修行することができる。

四無色処とは：

(一) 空無辺処；

- (二) 識無辺処；
- (三) 無所有処；
- (四) 非想非非想処。

あなたは、九種類の遍の内の、どれか一つを基礎として、四無色界禪の修行をする。
唯一、虚空遍は使えない。

(一) 空無辺処

四無色禪を修行する前、あなたは、色法（物質）の過患（＝過失）を思惟しなければならない：人間の身体は、父親と母親の精子と卵子が結合して生じたものであって、故に所生身（*karajakāya*）と呼ぶ。所生身があるために、あなたは刃物、矛、銃などの武器の攻撃を受ける；他人に殴られたり、いじめられたりする；所生身はまた、各種の疾病に罹患する・・・例えば眼の病、耳の病、心臓の病など。故に、あなたは、先に、以下の様な智慧で以て、理解しなければならない：色法で構成された所生身があるが故に、私は種々の痛苦に出会う；もし、色法から離脱できる事が出来たならば、色法によって生じる所の、痛苦を逃れる事ができる、と。

遍処によって第四禪に到達すれば、すでに粗身色（粗い身体的物質）を超越し得てはいるけれども、しかし、あなたは依然として、遍処色を超越する必要がある。というのも、それは粗身色と似通っているが故に。この様に思惟して、遍処色に対して、厭離した後、あなたは九種類の遍の中の一つを、修行しなければならない。例えば、地遍を修行して、第四禪に到達しておく。出定後、あなたは、その欠点を思惟する：それは、あなたがすでに厭離した所の、遍処色によって生起する。それは第三禪の楽と似ており、それは無色界禪より、粗くて劣っている、と。

第四禪の名法と、四無色界禪の中の名法は、同じものであるため、四種類の色界禪を修行していた時の様な、禪支の欠点を、思惟する必要はない。色界第四禪の欠点を見て、かつ、それを厭離したならば、あなたは、無色界禪が色禪（マ）より更に静かで、優れている事を、思惟しなければならない。

次に、あなたは、あなたの（地遍の）禪相を拡大して、十の方向に、際限のない様に、遍満させるか、または、あなたの好きなレベルにまで、拡大する。その後、遍処色（注10）が占有している空間に專注して、遍処色を除去し、「空、空（＝空っぽ）」または「無辺空、無辺空」と黙念する。こうして、残されたものは、遍処色が最初に占有していた所の無辺虚空だけになる。

もし、あなたがこの様に修習できないのであれば、あなたは、地遍禪の相の、ある一部分の空間を認識して、かつ、それを無辺の宇宙にまで拡大する。その結果、地遍禪の相全体は、無辺虚空によって取って代られる事になる。

投入する、という心態（尋心所）によって、引き続き、無辺虚空の相に專注し、「空、空（＝からっぽ）」と、黙念する。この様に專注し続けていると、あなたは、五蓋が降伏され、かつ、無辺虚空相を（+瞑想の）対象として、近行定に到達している事に、気が付くであろう。ジャーナを証するまで、引き続き、無辺虚空相の專注し続け、その後に、五自在を修習する。これが第一番目の無色界禪であり、すなわち、空無辺処禪である。

注 10：心内に見る遍相。それは定心によって生じるイメージであり、真正なる色法ではないが、しかし、それは、外部の色法に依存して生起する為、色法の子の様であるので、色と呼ぶ。これは一種の比喩的な呼び名であるに過ぎない。

（二）識無辺処

第二番目の無色界禪は、識無辺処禪である。その（+瞑想の）対象は、無辺空相を対象とした空無辺処禪心（*ākāsānañcāyatana jhāna citta*）である。もし、識無辺処禪の修行をしたいのであれば、あなたは、空無辺処禪の欠点を思惟しなければならない；空無辺処禪は、色界第四禪に近く、また、空無辺処禪は、識無辺処禪の静けさには敵わない。空無辺処禪の欠点を見て、かつ、それを厭離した後、あなたは、識無辺処禪の静けさの本質を思惟しなければならない。

その後に、あなたは空無辺処禪心に專注する。すなわち、それは無辺虚空相を対象とする心であり、それを「無辺識、無辺識」または「識、識」と黙念する。（+瞑想の対象に心を）投入するという心態でもって、当該の相を「識、識」と、引き続き專注する。この様な、專注の繰り返しを通して、あなたは五蓋が降伏された事を発見し、また、近行定に到達した事を発見するであろう。

ジャーナを証得することができるまで、当該の相に引き続き專注し続け、その後に五自在を修行する。これが二番目の無色界禪、すなわち、識無辺処禪である。

（三）無所有処

三番目の無色界禪は、無所有処禪である。それは、空無辺処禪心の不存在を対象と（+して瞑想）する。空無辺処禪心とは、識無辺処禪が縁として取った所縁である。もし、

無所有処禪を修行したいと思うならば、あなたは、識無辺処禪の欠点を思惟する；識無辺処禪は、空無辺処禪に近く、識無辺処禪は、無所有処禪の静けさには敵わない。

識無辺処禪の欠点を見て、また、それを厭離した後、あなたは、無所有処禪の静けさの本質を、思惟する。その後に、あなたは、空無辺処禪心の不存在に、專注する。この種の状況においては、二種類の心がある：空無辺処禪心（*ākāsānañcāyatana jhāna citta*）と、識無辺処禪心（*viññanañcāyatana jhāna citta*）である。そして、一個の心識刹那（注 11）の中には、二つの心が同時に存出現することができないので、空無辺処禪心が存在する時、識無辺処禪心は、存在できない。反対もまた然りである。先ほど、識無辺処禪に入ったばかりの時の、空無辺処禪心の不存在に專注して、それを「無所有、無所有」または「不存在、不存在」と黙念する。

（+瞑想の対象に心を）投入するという心態でもって、当該の相を「無所有、無所有」と、引き続き專注する。この様に專注するならば、あなたは、五蓋が降伏され、かつ、近行定に到達したのを、発見するであろう。ジャーナを証得するまで、引き続き絶え間なく專注し、その後に、五自在を修行する。これが、第三番目の無色界禪、すなわち、無所有処禪である。

（注 11）心識刹那：心が生起して、消滅するまでの時間。心識刹那は極端に迅速である；一つの稲妻、または一つの瞬きの時間の内に、10 億個の心識刹那が生・滅する。一個の心識刹那の中には三時がある。すなわち、心の生じる時、住むとき（＝心が維持される時）、滅する時である。

（四）非想非非想処

第四番目の無色界禪は、非想非非想処禪である。それは、無所有処禪心を（+瞑想の）対象とする。それが非想非非想処と呼ばれるのは、この禪定の内の想が極端に微細であるからである。

もし、非想非非想処禪を修行したいのであれば、あなたは、無所有処禪の欠点を思惟しなければならない：無所有処禪は、識無辺処禪の近くにあり、また、無所有処禪の静けさは、非想非非想処禪の静けさに及ばない。無所有処禪の欠点を見て、また、それを厭離した後、あなたは、非想非非想処の静けさの本質を思惟する。その後に、あなたは、無所有処禪心を「この心は静かである、この心は至上である」と專注しなければならない。

あなたは（+瞑想の対象に心を）投入するという心態で、引き続き無所有処禪心の想を静かである所にして、專注する。この様に專注し続けていると、あなたは五蓋が降伏

されて、また、近行定に到達している事を発見する。ジャーナを証得するまで、当該の相に継続的に専注し続け、その後に、五自在を修行する。これが四番目の無色界禅であり、すなわち、非想非非想処禅である。



第三章：四梵住と四護衛禅の修行方法

まえがき

次に、四梵住 (catubrahma vihāra) と四護衛禅 (caturārakkha bhāvanā) の修行について解説する。慈悲喜捨の四種類の修行の法門は、四梵住と言われる。

四梵住の修行

慈心観 (Mettā - Bhāvanā)

もし、慈心観 (慈梵住) を修行したいのであれば、先に以下の事を理解する必要がある。それは：異性の人 (liṅgavisabhāga) と死者 (kālakata puggala) (+を対象) にして (+この修行を) してはならない、という事である。単独の一人の個人に慈愛を発散する時、異性の者を対象にとってはならない。というのも、この様にすれば、異性に対して、食欲が生起する可能性があるが故に。ただし、ジャーナの到達した後であれば、団体の異性に対してならば、慈心観を修行してもよい。例えば「一切の女性が安楽である様に願う」等である。死者を対象にとると、あなた慈心禅に到達する事ができない。故に、どの様な時においても、死者を対象に慈心観の修行をしてはならない。

下記の四種類の人を対象に慈心観の修行をする：

- 1、己自身 (atta)
- 2、あなたの好きな人 (piya)
- 3、あなたにとって、好感もないし、悪感もない人 (majjhata)。
- 4、あなたの嫌いな人 (verī)。

しかし、最初の時、あなたは己自身及びあなたが敬愛する所の人を対象にして、慈心観の修行をするのがよい。それは；最初の頃、以下の様な人を対象に修行してはならない事を意味する；

- 1、あなたの好まない人 (appiya puggala)
- 2、あなたの極めて親愛な人 (atippiyasahāyaka)
- 3、好感も悪感もない人 (majjhata puggala)
- 4、あなたが嫌っている人 (verī puggala)。

あなたが好きでない人とは、あなたに対して、または、あなたに関係のある人に対して、有意義な事柄を、実践しない人の事を言う。あなたが嫌いな人とは、あなたに対して、または、あなたに関係のある人に対して、有害な事柄を、実践する人の事を言う。最初の段階において、あなたは、この二種類の人間に対して、慈愛を育成するのは、非常に難しい。というのも、往々にして、あなたは、彼らに怒りを感じるが故に。修行の初めの段階において、あなたが好感も悪感も感じない人に、慈悲を育成するのも難しい。あなたが極めて敬愛している人物に関して、あなたは、その人物に関連して、何かの事件が発生したと聞いたならば、彼らに執着しているのが原因で、彼らのために泣いたりし、心内に悲しみがあふれる。この様であるから、最初の段階では、この四種類の人間を(+修行の)対象にしてはならない。しかしながら、ジャーナに到達した後であれば、あなたは、彼らを修行の対象として、慈悲を育成する事ができる。

100年修行しても、あなたは、あなた自身を対象にして、ジャーナに到達する事はできない。であるのに、なぜ、最初の段階において、己自身を対象にして、慈悲観の修行をするのか？ それは、近行定に到達するため(+の修行)ではなく、己自身への慈愛を育成した後であれば、あなたは己自身を鑑みて、他人に思いを寄せる事ができるからである：まさに、あなたが安楽でありたいと思い、苦を受けたくない、長寿であり、死にたくないと思ふのと同じ様に、その他の一切の衆生もまた、安楽でありたいと思ふ、苦を受けたくない、長寿でありたい、死にたくないと思ふのであるから。この事に思いをはせることが出来たならば、あなたは、一切の衆生の、安楽と幸福を願う心を、育成する事ができる。

仏陀は言う：

Sabbā disā anuparigamma cetasā, Nevajjhagā piyatara - mattanā kvaci.

Evam piyo puthu attā paresam, Tasmā na himse paramattakāmo (Sāriyutta - 1 - 75)

「一人の人間が、心をこめて、十の方角の、すべての場所を探しても、他人を愛するその程度が、己自身を愛する事より、超過している人を、見つけることができない。

同じ理由から、十の方向の、すべての衆生の、己自身を愛する事は、他人を愛する事より超過している。故に、己自身に安樂を願う人間は、他人を害してはならない」

(相応部-1-75)

こうしたことから、己自身から出発して、他人を類推する為に、また、あなたの心を柔軟にし、友好的にする為に、あなたは、以下の四種類の意念でもって、己自身に対して、慈愛を育成しなければならない。

- 1、私に危険や困難がない様に願う (aham̐ avero homi)
- 2、私に精神的な苦痛がない様に願う (abyāpajjo homi)
- 3、私に身体的な苦痛がない様に願う (anīgho homi)
- 4、私は己自身が、楽しく愉快に己自身を重んじ、自重する様に願う (sukhi attānam pariharāmi)

もし、ある人の心が柔軟で、友好的で、寛容であり、他人の為に想像力を働かせる事ができるならば、他人に対する慈悲を育成するのは難しくない。故に、あなたが育成する所の、己自身に対する慈愛が、強くて力のあるものである必要がある。この事は非常に重要である。一たび、あなたの心が柔軟で、友好的で、他人への同情心と、寛容な心を備えたならば、あなたは、その他の衆生への慈愛を、育成する事ができる。

あなたの敬愛する人物に慈愛を散布する

もし、あなたがすでに、安般念または、白遍の修行において、第四禪に到達しているのであれば、あなたは再度、あなたの心が、非常に明るく輝く光芒を、照射できるようになるまで、この定力を展開させる。白遍禪定の光の協力と支援の下で、慈心観を修行する事は、(+すでに上記の事が実践できている) あなたにとって、非常に簡単な事である。その理由は：第四禪の定力はすでに、心内の貪、瞋、痴とその他の煩悩を、浄め取り除いているが故に。第四禪の定から出た後、その心は柔軟で、有能で、純潔で、明るく発光する。故に、あなたは、短時間の間において、強くて完璧な慈愛を、育成する事ができる。

こうした事から、禪定の光が強くて盛んな時、あなたは、一人の、あなたと同姓で、かつ、あなたが敬愛する人物に心を向ける：それは、あなたの先生かもしれないし、共に修行する友人かもしれない。あなたはその光が、あなたを中心にして、四方八方に、

広がっている事に気が付くであろう。あなたは光の中で、あなたが選んだその人を、見る事が出来る。ここにおいて、その人物が、座っているとしても、立っているとしても、あなたは、あなたにとって、最も好ましいイメージを、選ぶのがよい。あなたが、その人物と出会った時の、最も楽しかった時のイメージを選び、また、そのイメージが、あなたの前方 1m くらいの所に出現する様にチャレンジしてみる。あなたが、そのイメージを、はっきりと見る事ができた時、あなたは、下の様な意念によって、その人物への慈愛を育成する：

- 1、この善き人に、危険、困難が無い様に願う
(ayaṃ sappuriso avero hotu)
- 2、この善き人に、精神的苦痛の無い様に願う
(ayaṃ sappuriso abyāpajjo hotu)
- 3、この善き人に、身体的な苦痛の無い様に願う
(ayaṃ sappuriso anīgho hotu)
- 4、この善き人が楽しく、己自身を大切にされる様に願う
(ayaṃ sappuriso sukhī attānaṃ pariharatu)

上述の四種類の方式によって、その人に三回、または四回、慈愛を散布した後、その中の、己自身が一番好きな一つの形式を選択する・・・例えば「この善き人が困難・災難に遭わない事を願う」などで、その後、その人が困難・災難を免れているイメージを採用しつつ、「この善き人が困難・災難に遭わない事を願う、この善き人が困難・災難に遭わない事を願う・・・」と一回、また一回と、何度も重複して実践する。あなたの心が、非常に静かになった時で、かつ、対象に一時間以上、安定して専注出来る様になった時、禅支を識別できるかどうか、チャレンジしてみる。もし、できる様であれば、引き続き、初禅の修習をし、その後に第二禅、第三禅へと進む。

次に、その他の、三種類の方式を採用して、どの一種類でも、第三禅に到達できる様に、慈愛を育成する。この様に修行する時、この四種類の、異なった慈愛の散布の方式に対して、あなたには、個別の、適切な心内のイメージが必要である——あなたが「この善き人が困難・災難に遭わない事を願う」と思う時、あなたはその人が、困難・災難に遭わないイメージを、見ていなければならない：あなたが「この善き人に精神的苦痛がない事を願う」時、あなたはその人が、精神的な苦痛から逃れているイメージを、見ていなければならない：等々である。この様にして、三種類のジャーナを修習しなければならない。その後に引き続き、この三種類の禅の五自在 (vasī - bhāva) を修行する。

あなたが、あなたの敬愛する、一名の同性に対する修行に成功したならば、あなたはもう一人別の、あなたが敬愛する所の、同性の人物に対して、四種類の方式で修行する。この様にして、約 10 人くらいの、あなたが敬愛する所の同性に対して、その内のそれぞれ各人に対して、この四種類の方式でもって、全員、第三禪に到達できる様に、修行する。この段階に至れば、あなたはあなたの同性、生きている人、また、あなたが極めて親愛する人 (atippiyasahāyaka) を、修行の対象とする事ができる。この類の人物の中から、約 10 人を選んで、その後、同じ方法を用いて、彼らに対して、第三禪に入れるまで、慈愛を育成する。

その後、あなたと同性で、あなたにとって好感も悪感もない生きた人、約 10 人を対象に選ばひ、その後、同様の方式でもって、彼らに対して、第三禪に入れるまで、個別に慈愛を育成する。

ここにおいて、あなたはすでに、慈心禪に、相当のレベルまで、熟練したと言える。故に (+今では)、同様の方法を用いて、約 10 人の、あなたが嫌っている人を対象に、修行する事ができる。ただし、その人たちは、あなたと同性で、生きている人でなければならない。もし、あなたが菩薩 (仏陀の前世) の様な偉人であるならば——過去世において、菩薩は大猿王に生まれた時、彼は、彼を害するどの様な人をも、恨むことがなかった——そうであるならば、あなたは誰に対しても、一人として、嫌ったり、軽視したりする事がないであろう。その様であれば、あなたは、この類の人々を (+瞑想の) 対象に、取らなくてもよい。嫌いな人や、他人を蔑視する事のある人は、この種の人々に対して、慈愛を育成しなければならない。

この様な慈心観の修行を通して、一種類毎の人々に、実践し易いものから、難しいものへと向かって、慈愛を育成する。この様にすれば、あなたの心は、ますます柔軟になり、祥和 (=調和と安らぎ) する。四種類の人 (あなたの敬愛する人、あなたの親愛なる人、あなたが好感も悪感もない人、あなたが嫌いな人) の内の、各々一種類を対象にして、第三禪を証得する。

限界の突破 (Sīmā sambheda)

この様に、引き続き慈心観の修行をしていると、あなたは、あなたが敬愛する人と、親愛なる人への慈心が、同じものである事に気が付くであろう。故に、あなたは彼らを一類のものに、まとめる事ができる。こうして、(+瞑想の対象は) 四種類になる、すなわち、あなた自身、あなたが好きな人、あなたが好感も悪感も感じない人、あなたが嫌いな人、である。

引き続き、この四種類の人に対して、慈心観を修行して、あなたの慈心が、バランスのある、均等的なもの、差別や限界のないものにする。あなたは、己自身を対象にして

も、慈心禪に到達することはできないけれども、この四種類の人間の間にある境界を打ち破るために、あなたは、已然として、（+この種の修行において）己自身も（+瞑想の）対象に入れる。

あなたはもう一度、安般念または白遍を通して、定力を、第四禪にまで高めておく。禪定の光が強くて、非常に明るくなった時、短い時間、己自身へ慈愛を散布する。それは、一分またはわずか数秒でよい。その後、あなたの好きな人、好感も悪感もない人、嫌いな人を、それぞれ一人選んで、彼らに対して、個別に慈愛を育成して、第三禪に到達する様にする。

あなたは、再度一から始める。先に、短い時間、慈愛を、あなた自身に向ける。しかし、今回は、あなたはもう一人の、あなたの好きな人、もう一人別の、あなたがその人に好感も悪感もない人、もう一人別の、あなたの嫌いな人へ、慈愛を散布する。この三種類の人に、慈愛を散布する時、四種類の慈愛の散布の方式の、それぞれを記憶しておかねばならない：「この善人が困難に出会いませんように・・・」。この三種類の各個人に対して、それぞれ第三禪に到達するまで修行する。そして、何度も、人を入れ替えて、修行する。

一度また一度と、異なった組み合わせの四種類の人々——あなた自身、あなたの好きな人、あなたが好感も悪感も感じない人、あなたの嫌いな人——慈愛を育成する。あなたの心をして、継続的に慈愛を育成せしめ、間断なく、どの人にも（+公平で）差異を齎さない様にする。あなたは、（+己自を除いた）後ろの三種類のどの人にも、何等の差異なく、慈心禪に到達するまで修行する事ができるならば、あなたは、異なる人間間の差異を、打ち破った事になる。人と人との間の限界を打ち破った後、あなたはシャーリプトラ尊者の修行した方法、《無碍解道》（*paṭisambhidāmagga*）に書かれているものに基づいて、更に一歩進んで慈心を展開する事ができる。

22 種類の遍満

《無碍解道》では、22種類の、慈愛を遍満させる方法を紹介している：

○五種類の限定のない遍満（*anodhiso-pharaṇā*）；

○七種類の限定的遍満（*odhiso-pharaṇā*）；

○10種類の方向への遍満（*disā-pharaṇā*）。

五種類の限定のない遍満の対象は以下の通り：

1、一切の有情（*sabbe sattā*）；

2、一切の息のある者（*sabbe paṇā*）；

3、一切の生物（*sabbe bhūtā*）；

4、一切の個人（*sabbe puggalā*）；

5、一切の個体 (sabbe attabhāvapariyāpannā)。

七種類の限定的慈愛遍満の対象：

- 1、一切の女性 (sabbā ittiyo)
- 2、一切の男性 (sabbe purisā)
- 3、一切の聖者 (sabbe ariyā)
- 4、一切の凡夫 (sabbe anariyā)
- 5、一切の天神 (sabbe devā)
- 6、一切の人類 (sabbe manussā)
- 7、一切の悪道の衆生 (sabbe vinipātikā)

10 種類の方向への遍満

- 1、東 (puratthimāya disāya)
- 2、西 (pacchimāya disāya)
- 3、北 (uttarāya disāya)
- 4、南 (dakkhiṇāya disāya)
- 5、東南 (puratthimāya anudisāya)
- 6、西北 (pacchimāya anudisāya)
- 7、東北 (uttarāya anudisāya)
- 8、西南 (dakkhiṇāya anudisāya)
- 9、下方 (heṭṭhimāya disāya)
- 10、上方 (uparimāya disāya)

この種の慈心観の修行をしようとする時、あなたは再度、禪定を、第四禪にまで、上げておかねばならない。その後、あなたは己自身に対して、及び、あなたの好きな人、あなたが好感も悪感もない人、あなたが嫌いな人に対して、人と人の間の限界を打ち破る事が出来るまで、繰り返し、慈愛を育成する。次に、あなたは先に、ある一定の範囲を選定する。例えば、あなたの住んでいる寺院、または家の付近等。そして、禪定の光の支えの下、あなたには、そこにあるすべての衆生が、はっきりと見えていなければならない。

この時、そこにいるすべての衆生を対象にして、あなたは慈愛を拡散させる。すなわち、逐一、五種類の対象を限定しない所の、慈愛を遍満させる事と、七種類の対象を限定した所の、慈愛を遍満させる。合計 12 種類の方法がある。12 種類の中の、一つの種類ごとに、あなたは以下の様な、四種類の方式でもって、慈愛を遍満させる。

例えば：

- 1、一切の有情が、危難から免れる様に願う。
- 2、一切の有情が、精神的苦痛から免れる様に願う。
- 3、一切の有情が、身体的苦痛から免れる様に願う。
- 4、一切の有情が、己自身を尊重して、幸せである様に願う。

合計 48 種類（ $(7+5) * 4$ ）の方式でもって、慈愛を遍満する。あなたは、定慧（＝定によって生じる智慧）の光の照射の下に、慈心禅の所縁として取った衆生を、はっきりと見なければならぬ。そして、一種類毎の慈愛を遍満する方法について、あなたは第三禅まで修行してから後、次の一種類に、進まなければならない。例えば、あなたが一切の女性に慈愛を遍満する時、あなたは、光明の中において、あなたの決めた範囲内において、一切の女性が見えていなければならない。同様に、あなたはあなたの決めた範囲内において、すべての男性、天神、悪道の衆生などが見えていなければならない。すべての、48 種類の慈愛を遍満する方式に熟練するまで、あなたは、この様に修行すべきである。

熟練した後、あなたは、決定される範囲を広げていく。例えば、寺院全体、村落全体、町全体、都市全体、国家全体、世界全体、太陽系全体、銀河系全体乃至無辺の宇宙まで。決定される範囲を拡大する過程の中で、あなたは、一つの範囲内毎の衆生に対して、48 種類の方式でもって、第三禅に到達するまで、一種類毎の修行を実践する。ひとたび熟練したならば、あなたは更に進んで、10 の方向へ慈愛を遍満させる方法を、修行する事ができる。

10 種類の方向へ慈愛を遍満させる

10 の方向に慈愛を遍満させ、かつ、一つの方向につき、48 種類の方式を用いるため、合計で 480 種類 $[48 \times 10]$ の方式がある事になる。その上に、上述した 48 種類を加えると、慈愛を遍満させる方式は、合計 528 種類 $[480 + 48]$ になる。

10 種類の方向への、慈愛の遍満を修行する時、あなたは先に、あなたの東の方向へ向かって、無辺なる宇宙の、すべての衆生を（+瞑想の）対象としなければならない。あなたが、光明の中において、彼らを見る事が出来たならば、上述した 48 種類の方式でもって、彼らに対して、慈愛を遍満させる。次に、同様の方式でもって、あなたの西の方向等々に向かって、その他の、一種類づつの方向に存在する衆生に向かって、修行する。

582 種類の慈愛を遍満させる方式に熟練したならば、あなたは、仏陀が《増支部 *Aṅguttara Nikāya*》において開示した所の、慈心禅における、11 種類の利益を体験する事ができる。すなわち：

「比丘たちよ。慈心解脱が育成され、開展され、勤習され、駕御され、基礎が打ち立てられ、建立され、安定し、また正確に修行されるならば、11種類の利益が望める。どのような11種類であるか？ 眠る時、安穩である；目覚めて安穩である。悪夢を見ない；人に愛される；Amanussa（人以外のその他の衆生、天神、阿修羅、餓鬼、夜叉等）に愛される；天神に守られる；火、毒薬と武器で害される事がない；心が定を得やすくなる；顔立ちが安らいで祥である；臨終の時に惑わない；（+これより先）更に高度な成就を証得する事が出来ないとしても、梵天界に生まれかわる事ができる。」

悲心観 (karuṇā - Bhāvanā)

ひとたび、上に述べた様な、慈心観の修行が出来た後、悲心観（悲梵住）を修行する事は、あなたにとって、決して難しい事ではない。悲心と憐憫の心を育成する為には、あなたは先に、あなたと同性の、今まさに苦しみを受けている、生きている所の、人物を選ぶ。そして、その人の苦難を思惟し、その人への、憐憫の心を起す。

その後、再び、白遍を修行して、第四禪に到達しておく。禪定の光が強く盛んになって、よく光る時、定の光によって、その人を識別し、その後、その人物に対して、慈心観を修行して、第三禪に入る。慈心禪から出定した後、あなたは以下の様な意念をもって、いま正に苦を受けている人物に対して、悲心と憐憫の心を育成する：

「この善なる人が、苦痛から解脱できます様に」(ayaṃ sappuriso dukkhā muccatu)

この様に、何度も繰り返し修行して、初禪、第二禪、第三禪に入る様に修習し、かつ、一つ毎の禪において、五自在を完成させる。その後、慈心観を修行したのと同じ様に、悲心観を修行する。すなわち、あなたの好きな人、あなたが好感も悪感もない人、あなたが嫌いな人（+を瞑想の対象にして）修行する。各種の人々に対して、必ず、第三禪（+に到達する）まで修行しなければならない。

もし、楽しくて、如何なる苦痛の痕跡もない衆生に対して、悲心と憐憫心を育成するならば、あなたは、以下の様な思惟を行わねばならない：生死輪廻の中に造(ナ)した悪業のために、いまだ聖果を証悟していない、一切の衆生は、みな、悪道に生まれて、苦の報いを受ける可能性がある。また、一人ひとりの衆生は、みな可哀そうなものである。というのも、いまだ生老病死の苦しみから解脱できていないが故に。

この様に思惟した後、あなたは、慈心を育成した時と同じ様に、四種類の人々に対して、悲心を育成する：あなた自身、あなたの好きな人、あなたが好感も悪感もない人、あなたが嫌いな人。その一人ひとりに対して、悲心禪第三禪まで到達する事。人間と人間の間、の差別を取り除くことができるまで、繰り返し継続して修行する。

その後、132 種類の、悲心と憐憫心を遍満させる方法を修行する；すなわち、五種類の限定のない遍満、七種類の限定的遍満と、120 種類の方向への遍満 [5+7+ (12×10) =132] である。上は、慈心禅の修行に用いた方法と同じである。

喜心観 (Muditā - Bhāvanā)

喜心観 (喜梵住) の修行をするならば、あなたは、あなたと同性の、生きていて、(＋その人が) 楽しく (＋過ごしており)、また、あなたが非常に好きで、あなたと友好的な人、会うたびにあなたを楽しく愉快にさせる人を選ぶ。

その後、再度、白遍の修行をして、第四禅に到達しておく。禅定の光が強く、盛んになり、明るくなる時、この光で以て、その人を識別し、その人に対して、慈心観を修行して、第三禅に入る。慈心禅から出定した後、その人に対して、悲心観の修行をし、第三禅に到達する。悲心禅から出定した後、あなたは、その愉快な人に対して、以下の様な意念でもって、随喜の心を育成する：

「この善き人が、己自身の獲得した成就 (=成功) を、失う事のない様に願う」

(ayaṃ sappuriso yathāladhasampattito māvigacchatu)

この様に何度も繰り返して修行し、初禅から第三禅までを証得し、かつ、一つの禅毎に、五自在を完成させる。

同じ方法を用いて、あなたの好きな人、あなたの好感も悪感も感じない人、あなたの嫌いな人に対して、随喜の心を育成した後、次にあなたは、あなた自身、もう一人の、あなたの好きな人、あなたの好感も悪感もない人、あなたが嫌いな人を対象に修行する・・・あなたの、人と人との間に対する差異・差別、限界が取り除かれるまで。その後、無遍なる宇宙の中の、すべての衆生を対象にして、132 種類の喜心を遍満する方式を (＋用いて) 修行する。



捨心観 (Upekkhā - Bhāvanā)

もし、捨心観（捨梵住）を修行したいのであれば、先に、白遍を修行して、第四禪に到達しておく。その後に、あなたと同姓で、あなたが好感も悪感も感じない所の、生きた人物を対象にして、慈心観、悲心観、喜心観の修行をした後、一つひとつの禅毎に、第三禪に到達しておく。喜心観第三禪から出た後、あなたは、これらの三種類の梵住の欠点を思惟しなければならない；すなわち、それらは感情の作用に近い——好きや嫌悪、興奮と喜びが伴っている。その後、あなたは、捨心を基礎とした第四禪は、静寂であると思惟する。その後に、以下の様な意念でもって、その人に対して平等なる捨心を育成する：

「この善き人は、己自身の造(ナ)した業の継承者である」 (ayaṃ sappuriso kammassako)。

慈心観、悲心観と喜心観の第三禪の支援の下、上に述べた様な方法でもって、その人（+を瞑想の対象として）修行するならば、久しからずして、あなたは、捨心観の第四禪に、到達する事ができる。次に、あなたは、あなたの好きな人、及び嫌いな人を一人選んで修行し、それが皆、第四禪（注 14）に到達する様にする。その後に、あなた自身、あなたの好きな人、あなたの好感も悪感もない人、あなたの嫌いな人に対して、平等に捨心を育成する。後ろの三種類の人に対する修行が、第四禪に到達でき、かつ、人と人との間の差異・差別、限界が打ち破れる様にする。その後、無辺なる宇宙のすべての衆生を対象に、上に述べたのと同じ順序で、132 種類の、捨心の遍満の方式でもって、修行する。

注 14：捨心観には、前の三種類の禅はなく、第四禅しか存在しない為、それは、慈、悲、喜の初禅から第三禅を基礎として、生起させざるを得ない。故に、（+瞑想の対象である）一人ひとりに対して、あなたは先に、慈心観、悲心観、喜心観の修行をし、それぞれに第三禅に到達しておき、その後に、捨心観を修行して、第四禅に到達する様にする。

四護衛禅

慈心観、仏随念、不浄観と死随念という、この四種類の修行の法門は、四護衛禅または、四種類の保護の法門と言う。というのも、それらは禅修行者を保護して、各種の危険から守ってくれるが故に。こうした事から、観禅 (vipassanā) を修行する前、これらを学習し、修行する事は、大いに有益なものとなる。ここにおいて、慈心観の修行方法は、すでに解説したので、以下では、その他の、三種類の護衛禅について説明する。最初は仏随念である。

仏随念 (Buddhānussati)

この法門は、仏陀の、9種類の功徳を思惟する事を通して、修行するものである：
「Itipi so bhagavā araham̃ sammāsambuddho vijjācarana sampanno sugato lokavidū
anuttaro purisadammasārathi satthā deva - manussānam̃ buddho bhagavā'ti」

上に述べた所の、経の説明は、以下の通り：

世尊は已に、煩惱を滅し除いており、尊敬に値する (araham̃、阿羅漢) ；
彼は已に、円満なる正覚を証悟した (sammāsambuddho、正遍知) ；
彼の智慧と徳行は、完璧に麗しい (+地点に) 到達した (vijjācarana sampanno、明行足) ；
彼は、利益ある言葉と真実の言葉しか話さない (sugato、善逝) ；
彼は、世間を理解している (lokavidū、世間解) ；
彼は調伏に耐えられる者達にとっての無上の指導者である (anuttaro purisadammasārathi、無上の調御者) ；
彼は、天神と人類の師である (satthā devamanussānam̃、天人師) ；
彼は覚悟 (= 覚醒) 者である (buddho、仏陀) ；
彼は、過去生の善業による福德果報の、最も吉祥なる所有者である (bhagavā、世尊) 。

ここにおいて、仏陀の一番目の功徳 (阿羅漢) によって、どの様にして、禪定の修行をするのかを、説明する。《清浄道論》に基づくと、araham̃ (阿羅漢) という、このパーリ語には、5種類の意味が、含まれている。

すなわち：

- 1、彼は已に、あらゆる煩惱と習気を取り去っている為、清浄で汚染がない。そのことから、己自身 (= 仏陀自身)、煩惱と習気から厭離できているが故に、仏陀は尊敬に値する阿羅漢である。
- 2、彼は已に、阿羅漢道の宝剣でもって、一切の煩惱を断ち切っているが故に、仏陀は尊敬に値する阿羅漢である。
- 3、彼は已に、無明と貪愛を頭とする縁起支を断ち切り、破壊しているが故に、仏陀は尊敬に値する阿羅漢である。
- 4、彼は、無上の戒・定・慧の功徳を具備しているが故に、梵天、天神と人類から、最高の崇拝を得ている。この事から、仏陀は尊敬に値する阿羅漢である。
- 5、人の見ていない、隠蔽された場所においても、彼は、どの様な、身・口・意に関する悪行をも、それを行う事がない。故に、仏陀は尊敬に値する阿羅漢である。

この法門を修行する時、あなたは、この 5項目の定義を、よく記憶しておかねばならないし、また、それらをよく理解し、それらを、空で言える様にする。その後、あな

たは、白遍または安般念を修行して、第四禪に到達しておく。禪定の光の支援の下、あなたは、心内において、あなたが過去において見たことのある、好ましい、尊敬できる仏像を、思い出す様にする。あなたがその仏像を、はっきりと明晰に、見ることができるとき、それを真実の仏陀だと思い做して、かつ、それに注視し続ける。

もし、過去生において、あなたが幸運にも、仏陀に出会った事があるならば、仏陀の真実の影像が、あなたの心中に出現する。その時、あなたは、仏陀の功德に注意を払う必要があるが、仏陀の影像にのみ、注意を払うのは間違いである。もし、仏陀の真実の影像が出現しないのであれば、あなたは、心内で見ることの出来る仏像をば、真正なる仏陀と見做して、仏陀の功德を憶念する。もし、あなたが阿羅漢 (arahaṃ) という、この種の功德を選んだのであれば、あなたは阿羅漢の意義を (+瞑想の) 対象にして、それをば「阿羅漢、阿羅漢」として、一心に繰り返し、憶念する。

あなたの定力が展開され、強くなる時、仏陀の影像は消えて、あなたの心は、ただ功德の上において、平静に專注している事が分かる。もし、平静に專注する事を、一時間前後、維持出来るのであれば、あなたは、五禪支の存在を調べなければならない。この法門は、ただ近行定 (upacāra samādhi) にのみ到達する事ができる。あなたは同様の方法を用いて、仏陀のその他の功德を憶念し、この法門における五自在を、修行する事ができる。

不浄観 (Asubha)

もし、死体の不浄観を修行したいのであれば、あなたは再度、白遍または安般念を修行して、定力を第四禪にまで、上昇させておく。禪定の光が清らかで、明るく輝く時、この光の支援の下、あなたは過去において見た事のある、同性の醜い死体を (+瞑想の) 対象にとって (+修行) する。あなたは、あなたが以前見た事のある死体と全く同じものを、見なければならない。もし、この様にはっきりと、明確にそれを見る事ができたならば、あなたは出来得る限り、その醜い様子を見続ける様にする。その後、それに專注し、「嫌悪、嫌悪」 (paṭikūla, paṭikūla) と憶念する。

もし、あなたの心が、その死体に、安定して一時間または二時間專注する事が出来るならば、あなたは、取相が似相へと変化するのを、見る事が出来るであろう。取相は、あなたが以前、あなたの肉眼で見た死体のイメージと全く同じであって、醜く、恐く、人を驚かすものであるが、しかし、似相は、一人の太った人間が、満腹して、そこに横たわって熟睡している様に見える。あなたは引き続き、初禪を証得する事が出来るまで、継続して似相に專注し、その後、初禪の五自在を修行する。

死随念 (maraṇānussati)

パーリ聖典の《大念処経 Mahāsatipaṭṭhāna Sutta》と《清浄道論 Visuddhimagga》によると、死随念は、あなたが曾て、見たことのある死体を用いて、修行する事が出来る、という。故に、あなたは、死体の不浄観によって、再度初禅に入り、その後に、以下の様に思惟する：「私の身体もまた必ず死ぬ。将来において、死んだならば、この死体と同じ様になるのであり、この様な経過は、避ける事が出来ないものである。」

心をして、(十人は)必ず死ぬという、己自身の本質に専注せしめれば、あなたは心に悚懼感(注15) (saṃvega) が生起するのを、発見するであろう。この悚懼感によって、あなたは、己自身の身体が、嫌悪すべき死体になっている事に気が付く。その後、己自身の死体の、そのイメージの中の命根が、すでに断絶しているのを知ったならば、あなたは、当該の命根の断絶に専注して、以下の語句の中の一種類を選択して、憶念する：

- 1、私は必ず死ぬ、人命は無常なるものである
(maraṇaṃ me dhavaṃ, jīvaṃ me adhavaṃ) ;
- 2、私は必ず死ぬ
(maraṇaṃ me bhavissati) ;
- 3、私の生命は死亡の時に断絶する
(maraṇapariyosānaṃ me jīvaṃ) ;
- 4、死、死 (maraṇaṃ maraṇaṃ) 。

あなたは、上の、どれか一種類の言語(=項目)でもって、それを憶念する。己自身の死体の中の命根が、存在しないイメージに対して、静かに専注できる様になるまで修行し、それを一時間または二時間維持する様にする。この時、あなたは五禅支が生起しているのを発見するであろう。但し、この法門は、近行定にしか到達する事ができない。

注15：悚懼感 (saṃvega)：怖れと警戒の心。世間の不幸によって、引き起こされた、宗教的感情。悚懼感を起すには、以下の様な、8種類の対象がある：生老病死、悪道に堕ちて苦しむ事、及び、過去・現在・未来における輪廻が齎す苦痛。

結論

慈心観、仏随念、不浄観、死随念という、この四種類の修行の法門は、四護衛禅という。というのも、それらは、禅の修行者を、保護する事が出来るが故に。

《Meghiya Sutta》(増支部・Aṅguttara Nikāya)の中で、以下の様に言う：

「食欲を取り去る為には、不浄観を修行すべし；

瞋恨を取り去る為には、慈心觀を修行すべし；
散乱を取り去る為には、安般念を修行すべし。」

この經典によると、不淨觀は、貪欲を取り除く最上の武器である。もし、（+瞑想の対象を）死体にするならば、それをば、不淨として觀察する。これを、無生命体の不淨觀（*aviññāṇaka - asubha*）という。もし、生きている衆生の身体の、32 個の部分を対象とし（+て瞑想し）、それをば不淨と觀察する場合、《*Girimānanda Sutta*》》（増支部・*Aṅguttara Nikāya*）の中で教導される様に、それは、有生命体の不淨觀（*saviññāṇaka - asubha*）という。この二種類の不淨觀は、みな、貪欲を取り去る為の武器である。

慈心觀は、瞋恨を取り除く最上の武器である；安般念は散乱を取り除く最上の武器である。また、禪修行者の修行において、その信心(=自信・確信)が後退して、心内が暗くて鈍くなる時、仏隨念を修行するのがよい。禪修行者において悚懼感に欠ける時、かつ、修行に尽力するのを嫌気がさす時、彼は死隨念の修行をするのがよい。これまで、四梵住と四護衛禪の修行の方法を紹介した。次に、四界分別觀と、各種の色法の分析から始めて、どの様にして、觀禪を修行するのかを説明する。

先に止禪と觀禪の関係性を説明する。

《相応部・蘊品・三摩地經 *Samādhī Sutta, Khandhavagga, Saṃyutta Nikāya*》の中において、仏陀は以下の様に言う：

「比丘たちよ。あなた方は、定力を育成しなければならない。比丘たちよ。定力のある比丘は如実に諸法を知見する事ができる。諸法の実相とは何か？ 色の生と滅；受・想・行の生と滅、識の生と滅である。」

定力のある比丘は、五蘊、五蘊の因と縁、五蘊及びその因と縁の生と滅を、理解する事ができる。彼は、はっきりと、以下のものを、透視する事ができる：因と縁の生起により、初めて五蘊の生起があり、因縁の完全な消滅によって、五蘊は完全に消滅する。

上に解説した所の止禪の法門は、強くて力のある禪定を、生起せしめる事ができる。まさに、禪定の光があるが故に、あなたは、觀禪において、究極なる名色法を透視する修行ができるのである。深く、強く、力のある禪定の支援があつて初めて、あなたははっきりと、名色と、その因と縁の無常・苦・無我の本質を透視する事ができる。この種の明晰な透視（+の力）は、止禪の法門が齎す大きな利益なのである。

その上、止禪は、あなたに一つの、休息の場を提供する。觀禪の修行をする時、あなたは、非常に多くの法を、識別しなければならない。故に、疲労が発生する。この種の

状況の下、あなたは、長時間、各種あるジャーナの一つに、安住する事ができる。この様にすれば、あなたの心は休息し、かつ活力を回復して、その後にも、観禪の修行を続ける事が出来る。毎回、疲労を感じた時、あなたは何度も入禅して、休息する事ができる。これより先、観禪の修行をする時、止禅のこれらの利益を覚えておく事は、（+修行者にとって）非常に有益なのである。

翻訳者よりお願い：本書『禅修指南』の順序に従って、《第四章 四界分別観》を翻訳致しますが、当該の章を読んだ後、四界分別観を、正師に付かず、個人で修習するのは厳禁です。正師の毎日のインタビューもないまま、自己流で修習されて、偏差・禅病が生じた場合、自己責任とさせていただきます。



第四章：四界分別観

パーリ聖典の中に、四界分別観を修習する方法が、二種類記載されている。すなわち：簡略法と詳細法である。ここにおいて、読者に紹介するのは、利慧者（=智慧の鋭い者）に適合する簡略法と、簡略法を修習するのが困難な者へ解説する所の、詳細法である。仏陀は《大念処経》（Mahāsatipaṭṭhāna Sutta）の中において、以下の様に、簡略法を教えている：

「同様に、比丘たちよ。比丘は、この身を観察するに、如何なる姿勢であつても、（+それらはすべて）諸界によって構成されているに過ぎない（+ことが分かる）：この身の中には、地界、水界、火界、風界がある。」（注 16）

注 16：《智慧の光》初篇では、《清浄道論》（第 11 章、節 28）を根拠としている。

《清浄道論》（第 11 章）は、更に一步踏み込んで、以下の様に解説している：「故に、この業処を修習したい利慧者は、まず先に、静かな場所で独居し、己自身の、全色

身に対して、以下の様に念慮する：『この身の内において、堅性（硬性、硬さ）または固性（＝塊性）なるものは地界であり、粘着性または流動性のもものは水界であり、遍熟性または暖熱性のもものは火界であり、支持性または推進性のもものは風界である』。彼は、数を数えるが如くに、『地界、水界、火界、風界』と念慮・作意し、また、観察しなければならない。

（＋念慮する所の）その意味とはすなわち、それらは界に過ぎず、有情でもなければ、寿者（＝命ある者）でもない、という事である。この様に精進すれば、久しからずして、諸界の識別及び、諸界の区別によって生じた慧によって、強化された定が生起する。自性法を所縁とするが故に、その定は、安止に到達する事は出来ず、近行定にのみ、到達する事が出来る。

次に、或いは、シャーリプトラ尊者が述べた如くの、身体の四つの部分において、四界を顕示する中に、如何なる有情も存在しない（＋という事を知る）。すなわち：『骨により、腱により、肉により、皮によって包まれている空間をもって色と言う』。彼は、それぞれの部分において、智の手でもって、それらを分別し、上に述べた方法でもって、それらを観察する、と決意しなければならない。すなわち：『この身において、堅（硬性）・・・安止定に到達することは出来ず、ただ近行定に到達するのみである。』（注17）」

注 17：原文は『漢訳南伝大蔵経』「中部経典」《象跡喻大経》を参考にした。

四界分別観入門

緬甸パオ（Pa-auk）禅林において指導されているのは、全身の四界を遍照する修習方法である。それはすなわち、地界の硬さ、粗さ、重さ、柔らかさ、滑らかさ、軽さの六種類の性質；

水界の流動及び粘着という、二種類の性質；

火界の熱さ及び冷たさという、二種類の性質；

風界の、支持及び推進という、二種類の性質を、識別する事を言う。

《法聚論》（Dhammasaṅgani）の中において記載されているのは、地界の六種類の特徴であり、それらのパーリ語の原文は：

硬さ（kakkhalam）、柔らかさ（mudukam）、滑らかさ（saṅham）、

粗さ（pharusam）、重さ（garukam）、軽さ（lahukam）である。

流動性(paggharaṇa)は水界の特徴で、粘着 (abandhana) または接触 (saṅghaṭṭanā) は、すなわち、水界の現起 (現象) である。

熱さ (uṇha) 及び冷たさ (sīta) は、火界の特徴である。

支持性 (vitthambhana) は、風界の特徴であり、推進性 (samudīraṇa) はすなわち、風界の作用である。

四界分別観を修習する時、先に、この 12 種類の性質を、逐一、識別する。初心者については、通常、先に、比較的識別し易い性質を教え、その後に比較的難しいものを教える。(＋識別するのが) 簡単なものから、難しいものの順序は：推進、硬さ、粗さ、重さ、支持性、柔らかさ、滑らかさ、軽さ、熱さ、冷たさ、流動性及び粘着性である。この中の、どれか一種類の性質の観照を開始する時、先に、身体のどこかの箇所において、それを識別し、その後、全身に拡大して、遍照する。

(一)「推進(＋性)」の識別を開始する場合、呼吸する時の風大が、頭の中央を押し、その推進力に注意を払う。もし、それを察知する事が難しいならば、吸気する時の、胸部または腹部の移動に、注意を向けてもよい。もし、これらをも、察知するのが難しい時、心臓が躍動する事によって引き起こされる、脈拍の躍動に注意を払うこともできるし、他の何か、明確に知ることの出来る推進(＋性)に、注意を払ってもよい。というのも、移動が生じる時、すなわち推進が生じるが故に。

それを識別出来た時、あなたは、注意力をその近隣の部位の推進(＋性)に移動させる。例えば、頭部からゆっくりと推進(＋性)を認識するとして、次には首、身体、手、足から足裏まで見ていく。どこから開始するにしても、己自身の、それへの理解を、継続して不断に、ゆっくりと、向上させていき、やがて全身において、推進(＋性)を見る事が出来る様にする。ある部位では、それは非常に明確、明晰に見る事ができ、ある部位では比較的微細であったりするが、しかし、それは全身のそれぞれの部位に存在している。身体の、どの部位の注意を向けても、非常に容易に推進(＋性)を識別できる様になるまで、不断に繰り返し修習する。

(二)あなたが、推進(＋性)を識別して満足する時、次に「硬さ」の識別に進む。まず、歯において硬さを識別する：歯を噛みしめてみれば、その硬さを感じる事が出来るので、その後に噛みしめた歯を緩め、再度歯の硬さを確認する。硬さを感じ取ることができたならば、系統的に頭から足裏まで、全身の硬さを遍照する。ちょうど推進(＋性)と同じ様に修習するのであるが、しかし、全身を故意に硬くしてはならない。

全身の硬さを見る事が出来たならば、次に再度、全身の推進(＋性)を遍照する。己自身が満足するまで、不断に何度も、繰り返し修習する。

(三) その後、「粗さ」の識別に進む。舌でもって、歯に触り、舌で歯を摩擦してみる。または、手の甲でもって、もう一つの手の甲をこする。この様にすれば、粗さの性質を知る事ができる。もし、粗さを感じ取る事ができないのであれば、推進（+性）と硬さの識別に戻る。この様にすれば、粗さと推進と硬さが、共にある事をみることが出来る。粗さをみる事ができた時、頭から足裏まで、逐一全身の推進、硬さと粗さを、満足のいくまで遍照する。

(四) 次に、全身の「重さ」を識別する。先に、両手を重ねて（+身体の）真中に置いて、足の上に載せる。そうすれば、上に置かれた手（マ）に、重いという感覚が生じる。または、頭を前に垂らして、その重さを体感する。全身の重さを遍照できる様になるまで、系統的に修習する。その後、己自身が満足するまで、全身の推進、硬さ、粗さ及び重さという、四種類の性質に関して、それを逐一識別する。

(五) 次に全身の「支持（+性）」を遍照する。先に、背中をリラックスさせて、少しばかり前かがみになる。その後、身体を真っ直ぐに戻して、それを垂直に保持する。身体を垂直にさせて、不動にさせる力は、すなわち、支持（+性）である。頭から足裏まで、全身の支持（+性）を遍照できる様になるまで、継続的に、系統的に修習する。その後、全身の推進、硬さ、粗さ、重さ及び支持（+性）を逐一、識別する。

(六) 次に、舌でもって、唇の内部を押してみ、て、「柔らかさ」の性質を、感じる取る様にする。その後、全身の柔らかさを遍照出来るまで、継続して、系統的に修習する。その後、全身の推進、硬さ、粗さ、重さ、支持と柔らかさを、逐一識別する。

(七) 次に唾液で以て、唇を湿らせ、その後において、舌でもって、左右にそれらをこすって、「滑らか」の性質を、感じ取る様にする。継続的に、系統的に、全身の滑らかさを遍照出来るまで、修習する。その後、全身における、上に述べた七種類の性質について、逐一識別する。

(八) 次に、一本の指を、上下に移動させて、その「軽さ」を感じ取る様にする。全身の軽さを、遍照できる様になるまで修習した後、引き続き、全身の、上に述べた八種類の性質を、逐一識別する。

(九) 次に、全身の「熱さ」（または暖かさ）を遍照する。通常、この識別は、非常に簡単である。

(十) 次に、吸気の際に「冷たさ」を感じ取る様にする。その後、系統的に、全身の「冷たさ」を遍照する。

ここまで、10種類を識別する事が出来た訳であるが、これらは、直接的に、触の察知から知り得た性質である、と言える。しかし、流動（+性）と粘着（+性）という、この二種類の性質は、ただ、その他の、10種類の性質から推理してのみ、知り得る。これが、なぜ、それらは、最後になってから、修習を開始するのか（+という質問に対する）答えである。

(十一) 「流動（+性）」を識別する為に、あなたは、唾液が口の中に入って行く流動、血管の中の血液の流動、空気が肺に入る時の流動、または熱気の全身における流動を、察知する様にする。万一、流動の性質が明確でない時、流動を識別できる様になるまで、あなたは、それを識別すると同時に、冷たさ、熱さまたは、推進を識別しなければならない。

(十二) 「粘着（+性）」を識別する時、あなたは身体が、皮膚、筋肉、腱によって、一括りに凝集している様を、察知しなければならない。血液は、皮膚に囲まれて、身体内部で維持されているが、それはちょうど、気球の中の、水の様なものである。もし、粘着の作用がないのであれば、身体は、破片または顆粒状に分裂する。人体が地面に吸着している所の、地心（＝地球の芯）の吸引力もまたは、粘着の作用による。もし、粘着が不鮮明である時、あなたは全身における、前に述べた、10種類の性質を、繰り返し、逐一、識別しなければならない。熟練した後、あなたは、粘着の性質が明確になっている事に、気が付くであろう。万一、粘着が尚も不鮮明である時、あなたは繰り返し、ただ、推進と硬さの二種類の性質に関して、專注する様、修習しなければならない。最後に、あなたは、全身が縄で括られている様な感じがしてくるが、これが粘着（+性）である。

全身における、頭から足裏まで、非常に明確に、12種類すべての性質を、識別出来る様になったならば、あなたは引き続き、この順序に従って、それらを識別しなければならない。己自身が、この様に緻密に修習する事に、充分満足を覚えた後、あなたは、修習のその順序を、前に述べた様な順番で行う、すなわち：硬さ、粗さ、重さ、柔らかさ、軽さ、流動、粘着、熱さ、冷たさ、支持、推進である。この様な順序で、頭から足裏まで、あなたが相当の速度、一分内に三回転するくらいに出来る様になるまで、逐一、一つひとつの性質について、識別しなければならない。

諸界のバランス

この様に修行する時、ある種の禅修行者は、諸界におけるバランスを、失うことがある。ある種の界が強すぎて（＝強く感じ過ぎて）我慢できない程になる。特に、硬さ、熱さと推進がそうである。もし、このような状況が生じたなら、あなたは、注意力を、過剰に強いものとは反対の性質の上に向け、かつ、引き続き定力を育成する（＋様努力する）。この様にすれば、諸界はバランスを取り戻す事ができるが、これが、なぜ、修習の最初に、12種類の性質を学ばねばならないのか、という答えである。諸界がバランスする時、定力の育成も比較的容易になる。

相対的な性質とは：

硬さと柔らかさ；粗さと滑らかさ；重さと軽さ；
流動と粘着；熱さと冷たさ；支持と推進である。

もし、（＋上に表記した）一对の、その中の一個の性質が強すぎる時、相対する性質に注意を向けて、それをバランスさせる。例えば：流動の性質が強すぎる時、粘着に注意を向ける；また、支持が強すぎる時、推進に注意を向ける、等である。

今、あなたはこの、身体に遍満する 12種類の性質を識別する事に熟練した。（＋あなたにとって）それらが、明晰になった時、そして、それらが、同時に出現する様に感じられる時、あなたはそれらを、地、水、火、風の四つのグループに分けて、観ずる様にする。あなたは、先の 6種類の性質を「地界」として識別し、同時に、流動と粘着を「水界」として識別し、次に熱さと冷たさを「火界」として識別し、支持と推進を「風界」と識別しなければならない。あなたは、引き続きそれらを、地、水、火、風として識別しながら、心をして平静にならしめ、定力を獲得しなければならない。この種の修習を不断に繰り返し、100回、千回乃至百万回、修行する。

この段階において、一種の実用的なよい方法がある：一つひとつの界は、同時に全身に遍満している。心を平静に保つために、以前に説明した様な、注意力を、身体の一部からもう一つの部位に移動させるのではなくて、今は、同時に全身を遍照せしめればよい。通常、最も良い方法は、両肩の後ろから全身を遍照するものであるが、しかし、頭の上から、下の方向に向かって全身を遍照しても良い。しかし、この方法は、ある種の禅修行者にとっては、身体の緊張を感じて、諸界のバランスを崩す様になるかも知れない（＋ので注意が必要である）。

10 種類の定力を育成する方法

《清浄道論》では、10 種類の、法の観察を通して、定力を育成する方法を、述べている。すなわち：順序よく、速すぎない、遅すぎない、干渉を避ける、概念を超える、不明確なものは捨てる、諸々の相を明確に識別する、及び《相経》（または《増上心経》**Nimitta Sutta** とも / **Adhicitta Sutta**、**Aṅguttara Nikāya**）、《無上清涼経》（**Anuttarasītibhāva Sutta**、**Aṅguttara Nikāya**）及び《覺支経》（**Bojjhaṅga Sutta**、**Saṃyutta Nikāya**）の方法によって修行する事を言う。

(一) 順序良く (**anupubbato**) : ここで言う順序とは、仏陀の教えた順序、すなわち、地、水、火、風である。

(二) 速すぎない (**nātisīghato**) : 速すぎると、四界がよく観えない。

(三) 遅すぎない (**nātisaṅkato**) : ゆっくりしすぎると、(+四界分別観が) 成就しない。

(四) 干渉を避ける (**vikkhepaṭṭibhānato**) : 心をして、禅修の対象 (四界) に専注せしめる。心を、その他の対象に移動させない。

(五) 概念を超える (**paññattisamatikkamanato**) : 「地水火風」と心で念ずるだけではいけない。同時に、それらが代表する所の、真実・内実に注意を払う。すなわち：硬さ、粗さ、重さ、滑らかさ、軽さ、流動性、粘着性、熱さ、冷たさ、支持性と推進性である。

(六) 不明確なものを捨てる (**anupaṭṭhānamuñcanato**) : あなたが、12 種類の性質のすべてを、識別する事に熟練した後、それを四つのグループに分けて、專注力を育成する時、一時的に、不明確な性質のものを捨てる事ができる。しかしならば、この様にすると、諸界のバランスが失われて、痛みや締め付け (+感) が生じる時、この様にしてはならない。また、一つひとつの界において、あなたは一種類の性質を保留しておかねばならない。四界分別観を修行するのに、三界だけを修行するとか、二界だけ修行するとか、一界だけ修行するとかであってはならない。最もよいのは、12 種類の性質すべてに明確であって、どの様な性質も (+瞑想の対象として) 捨てない事である。

(七) 諸々の相を識別する (**lakkaṇato**) : あなたが、禅の修行を開始したばかりの者で、一つひとつの界の、自性相 (**sabhāva - lakkaṇa**、すなわち、特徴) が、いまだ明確でない時、それらの作用または現起 (現象) に、專注する事ができる (= 專注しても

よい) ; 定力が比較的良好な時、あなたは、一つひとつの界の、自性相に専注しなければならぬ。すなわち :

地界の硬さと粗さ ; 水界の流動 ; 火界の熱さと冷たさ ; 風界の支持性である。

この時、あなたは、各種の界をのみ、照見するだけであり、かつ、それらを「人」とか「我」とかに照見することはない。

(八、九、十) : 疏鈔の中において、(八)《相經》(注 18)、(九)《無上清涼經》、(十)《覺支經》によって、修行するべきであると、説いている。この三部の經は、禪修行者が、信、精進、念、定、慧の五根 (indriya) をバランスさせねばならない事、及び、念、捨法、精進、喜、輕安、定、捨の七覺支 (注 19) をバランスする事を説いている。

注 18 : 本書第一章参照の事。

注 19 : 五根と七覺支のバランスに関しては、第二章参照の事。

近行定に向かって

四界に基づいて、定力を育成して、近行定に向かう時、あなたは、異なった種類の光を見るようになる。ある種の禪修行者は、その始まりの段階において、その光は、灰色の煙の様である。もし、引き続き、灰色の光の中の四界を、識別し続けるならば、それは白い綿花の様になり、その後、雲の様に、白く光るようになる。この時、全身は、一塊の白い色をした物体に変る。引き続き、白い色の物体の中の四界を識別していると、それは透明で光り輝く、まるで氷の塊か、またはガラスの様になる。

この明るくて浄なる色法は五根であり、また「浄色」 (pasāda rūpa) とも呼ばれる。その中の身浄色 (kāya pasāda) は、全身に遍満している。この段階において見える所の、身浄色、眼浄色、耳浄色、鼻浄色及び舌浄色は、団塊状に属するものである。というのも、あなたはいまだ、三種類の「密集」 (ghana) を、看破していないが故に (第五章参照の事) 。

もし、継続して、透明体の中の四界を識別するならば、それは発光し、光芒を四方に発射するようになる。この光が、少なくとも半時間、持続的に出現する様になったその後に、あなたが、透明体の中の空界 (小さな空間) を識別するならば、当該の透明体は、粉碎されて、名を「色聚」 (rūpa kalāpa) と呼ばれる、多くの極微な粒子となる。

(+修行者が) 名を「心清浄」 (citta visuddhi) という、この段階に到達した時、色聚の分別の修習を通して、「見清浄」 (diṭṭhi visuddhi) を育成する事ができる。し

かしながら、あなたの定力の光が、いまだ強くて盛んではないながら、その他の止禪を修習したいと思う時、色聚を見る前に、止禪の修習に転換するのがよい。この場合、あなたは 32 身分 (注 20) に転換する事ができる。そして、その中の一つの身分を選んで、その不浄を観じて、初禪を証得するまで、定力を育成する。または、その中の一つの身分の、色彩を選んで、第四禪に至るまで、遍禪 (*kaṣiṇa*) を修習し、その後に、慈心観、仏随念、不浄観及び死随念の四種類の護衛禪を修習する。

もし、禪修行者が、純観行者 (*suddha vipassanā yānika*) である場合、彼は、四界のそれぞれの性質を、透明体が見えるまで、識別しなければならない。その近行定の光が極めて明るくなった時、(+禪修行者には) 諸々の色聚が、識別できる様になるが、そうなるまで、修習を進めなければならない。

注 20：《智慧の光》の中国語版では、パオ禅林の禪修行者は、通常、安般念または四界分別観の修習を入門としている。もし、後者を選ぶならば、禪定の光が充分に輝く様になるまで待つて後、32 身分、白骨観、白遍と四護衛禪等の修習に転じ、その後に、色業処、名業処、縁起及び観禪の修習に進む。



第五章：色業処の基本理論

観禅の修行における諸法の観照

‘ Sabbaṃ bhikkhave anabhijānaṃ aparijānaṃ avirājayaṃ appajahaṃ abhabbo dukkhakkhayaṃ … (P) … Sabbañca kho bhikkhave abhijānaṃ parijānaṃ virājayaṃ pajahaṃ bhabbo dukkhakkhayaṃ.’ (Saḷāyatana Saṃyutta, Sabbavagga, Aparijānana Sutta) ——

「比丘たちよ。一切において、知解せず、通解せず、離欲せず、捨棄しない者は、苦の滅を得る事はできない・・・比丘たちよ。一切において、知解し、通解し、離欲し、捨棄する者は、善く苦の滅にする事ができる。」（六処相応、一切品、不通解經）注 21。

注 21：『漢訳南伝大蔵經』「相応部」四。

当該の經の註釈は、更に一步進んで以下の様に解説する：

「それは三遍知の事である」と：

Iti imasmim sutte tissopi pariññā kathitā honti. ‘Abhijānaṃ’ti hi vacanena ñātapariññā kathitā, ‘parijānaṃ’ti vacanena, tīraṇapariññā, ‘virājayaṃ pajahaṃ’ti dvīhi pahānapariññāti..——

「この經の中において説かれているのは、三遍知の事である。『知解』という語彙は『所知遍知』（ñāta pariññā）の事であり、『通解』は、『審察遍知』（tīraṇa pariññā、または度遍知とも）の事であり、『離欲』と『捨棄』の二つは、『断遍知』（pahāna pariññā）の事である。」

こうした事から、（+我々は）三遍知によって、一切は五取蘊の名色法に属しているのだという事を、徹底的に理解して初めて、名色法への愛（=執着）を断じ除いて苦を滅する事ができる（+事が分かる）。また、《大疏鈔》（Mahā-ṭīkā）では以下の様に言う：

Taṃhi anāvasesato pariññeyyaṃ ekamsati virājitabbam..——

「先に、徹底的に、全くの遺漏なく、この観禅の目標である所の、五取蘊を識別しなければならない。」

その後、それは禅修行者に、名色への愛着・執着を断つために、一切の名色法の無常・苦・無我の三相を観照する様にと、指示する。

これらの經論の指示によると：

(一) 禪修行者は先に、五取蘊を構成する所の、一切の名色法を、個別に識別しなければならない。一切の色法を個別に識別する智慧を「色分別智」(rūpa pariccheda ñāna) と言う；一切の名法を個別に識別する智慧を「名分別智」(nāma pariccheda ñāna) と言う；名法と色法を、二種類の個別の組み合わせであると識別する智慧を「名色分別智」(nāmarūpa pariccheda ñāna) と言う。

この三智は、それぞれ、「色摂受智」(rūpa pariggaha ñāṇa)、「非色摂受智」(arūpa pariggaha ñāṇa) と「名色摂受智」(nāmarūpa pariggaha ñāṇa) という。この段階において「人というのではない、有情というのではない」「(+我々は)無我的な存在であり、ただ色法と名法があるのみ」と理解するのを「名色差別智」(nāmarūpa vavatthāna ñāṇa) と言う。

一切の名色法を識別する時、もし、禪修行者がいまだジャーナを証得していないのであれば、ジャーナと関係のある名色法(+の観察)は省略する。もし、ジャーナを証得しているのであれば、禪修行者は、それらを観照しなければならない。

(二) 禪修行者は、正確に、また如実に、名色法の因を、知見しなければならないが、この智慧は「縁摂受智」(paccaya pariggaha ñāṇa) と言う。名色分別智と縁摂受智は、明確に、また正確に、観禪の目標としての、諸々の行法を知見できるが故に、この二種類の智は「所知遍知」(ñāta pariññā) と言う。

(三) 観禪の段階、すなわち「思惟智」(sammasana ñāṇa) の始まりにおいて、禪修行者は、一切の色法、名法及びそれらの因の無常・苦・無我の三相を、徹底的に見なければならない。諸々の観智の中で、「思惟智」と「生滅随観智」の作用は、一切の名色法及び、それらの諸々の因の無常・苦・無我の三相を審察し、また識別するものである。この二種類の智は、また、「審察遍知」(tīraṇa pariññā) とも言う。

「壊滅随観智」(bhaṅga ñāṇa) から始まる所の観智は、一切の名色法及び、それらの因の壊滅と、それらの行法の無常・苦・無我の三相をのみ、見るものである。断ずべき煩惱は、その(+知見によって)暫定的に断じ除かれる為、それらは「断遍知」(pahāna pariññā) と呼ばれる。

四種類の聖道智は、心を眩まし隠蔽する所の無明(avijjā)、または痴(moha)を、徹底的に根こそぎ、断じ除く。聖道を証悟した者は、一切の名色は苦諦である事を知り、名色は因の集諦である事を知り、苦諦と集諦における、無常・苦・無我の三相を知る。聖道は、諸々の行法の無常・苦・無我の作用を、円満に遍知し、審察する事ができるが

故に、「所知遍知」と「審察遍知」と言う；（+この知は）煩悩を徹底的に、根本から断じ除く事ができるが故に、「断遍知」と（+も）言う。

28 種類の色法

三遍知を育成する為には、五取蘊を構成する一切の名色法を、徹底的に、明確にしなければならない。故に、禅修行者は一切の色法と名法を知り、学習し、暗記しなければならない。以下は、28 種類の究極色法の説明である：

（1～4）大種（*mahā bhūta*）、すなわち、四界（四大）

1、地界（*pathavī dhātu*）：

重地（*garupathavī*）：硬さ、粗さ、重さ。

軽地（*lahupathavī*）：柔らかさ、滑らかさ、軽さ。

2、水界（*āpo dhātu*）：流動性、粘着性。

3、火界（*tejo dhātu*）：熱さ、冷たさ。

4、風界（*vāyo dhātu*）：支持性、推進性。

（5～9）浄色（*pasāda rūpa*）

1、眼浄色（*cakkhu pasāda*）：

2、耳浄色（*sota pasāda*）：

3、鼻浄色（*ghāna pasāda*）：

4、舌浄色（*jivhā pasāda*）：

5、身浄色（*kāya pasāda*）。

（10～13）境色（*gocara rūpa*）：

1、色彩（*vaṇṇa*）

2、音（声）（*sadda*）

3、香（*gandha*）

4、味（*rasa*）

5、触（*phoṭṭhabba*）（地・火・風）

地、火、風の三界は、触境を構成する。もし、それらを三境とするならば、合計で7境あることになる。28種類の色法を計算する時、触は含めない。というのも、触境色の地、火、風の三界はすでに四界の中に列せられているが故に。

(14、15) 性根色 (bhāva rūpa) には二種類ある：

1、女根色 (itthī bhāva rūpa)

2、男根色 (purisa bhāva rūpa)

一人ひとり各人には、その中の一種類の性根色しかない。女性には女根色しかなく、男性には男性色しかない。性根色は、全身に分布してる。

(16) 心色(hadaya rūpa)

心色とは、意界と意識界が依存する所の色法である。故に、心所依処と呼ぶ。それは、心臓の内部の血液の心色法聚の中に散らばって存在している。

(17) 命根色 (jīvita rūpa、jīvitindriya)

この色法は、全身に分布している。それは、業生色 (kammaja rūpa) の生命を、維持するものである。

(18) 食色 (āhāra rūpa)

段食 (kabalīkāra āhāra) は、食物の中の食素 (ojā) である。一切の色聚の中には、皆、食素色 (ojā rūpa) がある。業生、心生及び時節の色聚でさえも (+それを) 含む。それら食素は、それぞれ、業生食素 (kammaja ojā)、心生食素 (cittaja ojā) 及び、時節食素 (utuja ojā) と言う。禪の修行者が混同するのを避ける為、以下に説明する：食物が消化された後、その「食素」によって生じる所の、食素八法聚の中の食素のみが、食生食素 (āhāraja ojā) である。言い換えれば、胃の中の、未だ消化していない食物の食素は、なお時節生食素(utuhā ojā) (+のまなの) である。

上の18種類の色法は、また以下の様に言う：

1、「自性色」(sabhāva rūpa)。というのも、それらは、その一つひとつに自性相、すなわち、硬さ、粗さ等を擁するが故に。

2、「有相色」(salakkhaṇa rūpa)。というのも、それらは、一切の名色法における共相を擁しているが故に：生・滅するが故に「無常」(+という相)であり、生・滅の逼迫を受けるが故に「苦」(+という相)であり、永恆不変の実体を持たないが故に、または、我ではないが故に、「無我」(+という相をもっているの) である。

3、「完成色」(nipphanna rūpa)。というのも、それらは業、または心、または時節、または食を因として生起するが故に。

4、「色色」(rūpa rūpa、真実色)。というのも、それらの強度は、不断に変化しているが故に。すなわち、熱さから冷たさへ、硬さから柔らかさへと。

5、「思惟色」(sammasana rūpa)。というのも、観禪の目標とするに相応しいが故に。それらは、無常・苦・無我として、観照する事ができる。

この後に列挙する所の、10種類の色法(19～28)は、上に述べた18種類の色法とは反対に、それらは：

- 一、無自性色(asabhāva rūpa)；
 - 二、無相色(alakkhaṇa rūpa)；
 - 三、非完成色(aniphana rūpa)；
 - 四、非色色または非真実色(arūpa rūpa)；
 - 五、非思惟色(asammasana rūpa)
- である。

(19) 制限色(pariccheda rūpa)

すなわち、空界(ākāsa dhātu)の事である。一つひとつの色法は、皆、その他の色法と混同して一体となる事はなく、其々、限界を持っている。この限界及び、色聚と色聚の間の空間を、制限色と言う。

(20、21) 表色(viññatti rūpa) 二種類ある。

1、身表(kāya viññatti)。すなわち、意思表示としての、身体動作。

2、語表(vacī viññatti)。すなわち、話をする時の動作。

他人に、己自身の考えを理解させる為の動作は、表色と言う。身表は、身体の動作によって、己自身の考えを表現するもので、それはたとえば、手を振って人を招くなどである。語表は、言語によって、己自身の考えを表現するもので、それはたとえば、人を呼ぶときに「ここへ来て下さい」と言う様なものである。身表と語表は、心所によって造られる為、それらは無生命物(例えばテープレコーダ)の中には存在しない。唯一、有情の言語と身体動作の中にのみ存在する。

(22～24) 変化色(vikārā rūpa)。五種類ある：

1、色軽快性(lahutā)：心生、時節生及び、食生真実色の軽快性。

2、色柔軟性(mudutā)：心生、時節生及び、食生真実色の柔軟性。

3、色適業性(kammaññatā)：心生、時節生及び、食生真実色の適業性。

色軽快性、色柔軟性と色適業性に、上に述べた身表と語表の、二種類の色を合わせて、合計五種類の変化色とする。

(25～28) 相色 (lakkaṇa rūpa)。四種類ある：

1、色集積 (upacaya)：受胎から目、耳等の諸根が完成する時期において、真実色が生起する (upādā、生時)。それは、諸根の成長、完成及び適当な色法が十分な程度にまで (+成長し)、また引き続き、継続して成長する (+事をいう)。

2、色相続 (santati)：諸根が完成した後、死亡するまでの間、真実色の生起 (生時) の呼び名は「色相続」と言う。諸根が完成した後、それによって、真実色が一生の内に不断に相続する事を、保証される。

3、色老性 (jaratā)：真実色の成熟または、老化をいう。すなわち、真実色の住時 (ṭhita) である。

4、色無常性 (aniccatā)：真実色の壊滅。すなわち、壊滅の時 (bhaṅga)。

18個の真実色に10個の非真実色を加えると、合計28色となる。その中の地、水、火、風は、その名を界 (dhātu)、または大界 (mahā dhātu)、または種色 (bhūta rūpa) と呼ぶ。その他の24色の名は、所造色 (upādā rūpa) と呼ぶ。というのも、それらは四大界に依存して生じるが故に。



表 5-1 : 二十八種色法

十八種完成色 (nipp hannarūpa)		十種不完成色 (anipp hannarūpa)	
(1) 元素色 (大種)	1. 地界	(8) 限制色	19. 空界
	2. 水界	(9) 表色	20. 身表
	3. 火界		21. 語表
	4. 風界	(10) 變化色	22. 色輕快性
(2) 淨色	5. 眼淨色		23. 色柔軟性
	6. 耳淨色		24. 色適業生
	7. 鼻淨色		身表色
	8. 舌淨色		語表色
	9. 身淨色	(11) 相色	25. 色積集
(3) 境色	10. 顔色		26. 色相續
	11. 声		27. 色老性
	12. 香		28. 色無常性
	13. 味		
	触(地・火・風)		
(4) 性根色	14. 女根色		
	15. 男根色		
(5) 心色	16. 心所依処		
(6) 命色	17. 命根色		
(7) 食色	18. 食素		

色法の本質

この 28 (+種類) の色は、単独では存在する事ができない。ただ、色聚として構成された形態でのみ出現する。すなわちそれは、最も小さい色法の構成・構造であって、その名はまた「密集」(ghana) とも言う。同一の粒の色聚の中の諸色は：同時に生起し(ekuppāda)、同時に滅し(ekanirodha)、同一の処に依存する(ekanissaya)。

同じ一粒の、色聚の中の四大は、相互に依存し合い、所造色 (upādā rūpa) は、同じ一粒の、色聚の中の四大に依存して存在する。四大と所造色は、みな、その他の一粒の色聚の中の四大に依存する事はない。

究極色、四大がどの様にして相互に依存するのか、及び所造色が、どの様にして、四大に依存しているのかを、如実に知見する為には、(+修行者は) 先に、色聚が見えなければならぬ。修行者が、色聚を見ることが出来たならば、その後において、彼は、一種類毎の色聚の中の、究極色法は、8個、または 9個、または 10個、またはもっと多くあるのを見ることができる。その後、彼は、一種類毎の色法の自性相と本質を、智慧でもって、識別する事ができる様になる。唯一、この様にして初めて、彼は、究極色法を理解する事ができる。色聚を識別する所の、この方法の名は「界分別」と言う。

《中部・根本 50 經篇・大牧牛者經》において、仏陀は以下の様に言う：

「比丘たちよ。11支を具足する比丘は、この教法の中で成長し、向上し、または成就する事は出来ない。」

この11支の中の一について、仏陀は以下の様に言う：

「比丘たちよ。色を知らない比丘とは何か？」

この点に関して、仏陀は更に一步進んで解説する：

「比丘たちよ。どの様な色であろうとも、すべての色は、皆、四大及び、四大に依存して造られる所の色である事を、如実に知らない比丘の事を、言うのである。比丘たちよ。この様な比丘は、色を知らない(+比丘である)と言うのである。」 (注 22)

注 22：『漢訳南伝大蔵經』「中部經典」一。

当該の経は、以下の様に言う：

「色を知らない」とは、どの様な事か？ 色法に対して、彼は、二つの点で、知らない事がある。すなわち、それらの「数」と「起因」である。それらの数を、知らないという事は、すなわち、パーリ聖典で列挙されている所の、25色：目、耳、鼻、舌、身、色彩、音、香、味、触、女根、男根、命根、身表、語表、空界、水界、色輕快性、色柔軟性、色適業性、色積集(=色集積、以下同様)、色相續、色老性、色無常性と食素を知らない、という事である。

(+己の所有する) 牛の数を知らない放牧者の様に、色法の多少を知らない比丘は、色法、非色法(名)、名色法とそれらの起因を識別する能力、それらの三相を觀照して、禪修の目標に到達する能力を、持たない。仏法の中において、その様な比丘は、戒、定、觀、道、果、または涅槃を、成長(+増強・成就)させることはできない。

それはちょうど、牛による、五種類の乳製品を、享受する事の出来ない放牧者の様に、当該の比丘は五法、すなわち、阿羅漢の戒・定・慧、解脱と解脱知見を享受することができない。

色法の起因を知らないという事はすなわち、「これらの色法には一個の起因があり、二個の起因があり、三個の起因があり、四個の起因がある」という事を知らない事を言う。ちょうど牛の色彩または形状を知らない放牧者の様に、色法の起因を知らない比丘は、色法、非色法（名）・・・を識別する能力を持たず・・・五法、すなわち、阿羅漢の戒、定、慧、解脱と解脱知見を享受する事ができない。

道、果と涅槃を得たいと思う禅修行者は、特に仏陀のこれらの言いつけに注意を払わねばならない。もし、色法の数とそれらの起因を知りたいのであれば、あなたは（+それらに関して）それぞれ個別に、識別できなければならないし、また諸々の色聚も、分別できなければならない。というのも、色聚の分別をできなければ、どの色法が業生であり、心生であり、時節生であり、食生であるのかを識別できないが故に。（+この様な比丘は）彼は已に、究極法を見る事を得た、とは言えないのである。

色法の三種類の密集

もし、究極色を知見したいのであれば、禅修行者は、必ずや、色法の三種類の密集 (rūpa ghana) を看破しなければならない。《大疏鈔》(Mahāṭīkā) は、色法の三種類の密集について、以下の様に解説する：

Ghanavinibbhogan'ti santati samūha kicca ghanānaṃ vinibbhujanaṃ vivecanaṃ.

——「密集を識別するという事は、密集の『相続』、『構成』、『作用』を分別し、見分ける事をいう」。

(一) 相続密集 (santati ghana) :

一切の色聚の中には、又の名を、時節 (utu) という火界 (tejo dhātu) がある。この火界は、新しい時節生食素八法聚を生じせしめ、また増加させる事ができる。この色聚の中には、地、水、火、風、色彩、香、味と食素の 8 個の色法がある (注 23)。

眼十法聚を例にとると、もし、この色聚を分別するならば、我々は、その 10 個の色法を見る事ができる。すなわち、上に述べた 8 個に、命根と眼浄色を加えたものである。眼十法聚の中の色法は、住時が来ると、その火界は、時節生食素 8 法聚を、生じせしめる事ができる。この様に一代また一代と、4 または 5 代まで、生じせしめる事ができる。この一系列の、最後の一代の、色聚の中の火界は、二度と色聚を、生じせしめる事はできない。ある種の色聚の中の火界は、4、または 5 代の色聚を生じせしめ

るが、ある種のもは、更に多くの代、生じせしめる事ができる。上に述べた風に生起する所の、一切の時節生食素 8法聚の名は、皆、時節生色と言う。

胃の中の食物は、時節生食素 8法聚によって構成されている。業生の消化の火（命根 9法聚の中の火界）の助力の下、これら時節生食素は消化され、その後に吸収されて、食生食素 8法聚となって全身に散布される。通常、その食生食素の助力の下、業生、心生と時節生色聚の中の食素は一系列において、10乃至 12代の食素八法聚を生じせしめる事ができる。もし、食した所の食物が高度の栄養物である時、その強度に基づいて、多くの代の食素 8法聚が生じる事ができる。

禅修行者が、これらの過程の中の一粒毎の色聚を、明確に、個別に識別することができたならば、彼はすなわち、相続密集を看破したと言える。

（二）構成密集 (samūha ghana) :

究極色 (paramattha rūpa) を分別することができる時、それはすなわち、構成密集を看破したのだと言える。これはすなわち、智 (ñāṇa) でもって、色聚の中の一粒毎の究極色 (8、9、または 10個) の自性相を知見した (+のだと言える)。

（三）作用密集 (kicca ghana) :

智 (ñāṇa) でもって、色聚の中の一つひとつの究極色の作用をしっかりと見ることができたならば、それはすなわち、作用密集を看破したのだと言える。こうしたことから、三種類のすべての密集を看破する為には、禅修行者は定力を近行定または安止定にまで育成しなければならない。その後、一種ごとの色聚の中の一つひとつの究極色の相、作用、現起 (現象) と近因を識別する。

(注 23) どの様な色聚であっても、少なくとも、この 8個の色法が存在する為、それらは「八不離色」と呼ばれる。



第六章：色業処 Rūpa Kammaṭṭhāna

如何にして色聚の中の四界を識別するのか

色聚は、それらを生じせしめる事の出来る、業、心、時節（火界）及び食素という、四つの因によって、四種類に分類する事ができる。すなわち：業生、心生、時節生及び食生色聚である。色聚はまた、「明浄」と「非明浄」という二種類に分ける事ができる。「浄色」（pasāda rūpa）だけを含む、業生色聚のみが、明浄である（＋と言える）。

色聚を見る（＋修習を）開始する時、禅修行者は、それらの生・滅が、非常に迅速である事を発見する。この時、彼は、諸々の色聚を分別する能力が、未だない為、見ている色聚とは、なお体積を持つ、極微な粒子（＋の状態を持つもの）である。これは、彼が未だ、三種類の密集、すなわち、相続密集、構成密集及び作用密集を、看破していないが為であり、故に、未だ概念の境に留まっていて、尚、「小さな粒」または「小さな塊」（極微）の概念の下に、あるのである。もし、更に一步進んで、諸々の界（dhātu）を分別する事なく、これらの極微なる、小粒子の生・滅を觀照して、觀禅の修習をするならば、彼はただ、概念を目標にして、觀禅をしているに過ぎない事になる。こうした事から、禅修行者は、究極色法を見るためには、更に一步進んで、諸々の界を、分別しなければならないのである。

まず、一つひとつ個別の明浄色聚の中、及び非明浄色聚の中の、地、水、火、風の四界を、識別しなければならない。もし、色聚の生・滅が、極めて迅速である為、単一の粒の色聚の中の、四界を識別する事ができないならば、禅修行者は、それらの生・滅に注意を払ってはならない。ちょうど、会いたくない人に会った時、その人を一目でも見たくない様に、それらの生・滅を無視して見ない様にし、ただ、単一の粒の、色聚の中の四界に、專注する様にする。

もし、それに成功しないならば、あなたは同時に、全身の硬さに注意を払い、その後、単一の粒の色聚の中の硬さに、注意を払う。この様にして、単一の粒の、色聚の中の硬さを、識別できる様になるまで、何度も繰り返して識別・修習する。その後、地界のその他の性質、及び水界、火界、風界の性質に対しても、また逐一、この様に修行しなければならない。上に述べる様に、禅修行者は、明浄色聚と非明浄色聚の中の、四界を識別しなければならない。この修行に成功したならば、次にあなたは、目、耳、鼻、

舌、身体と心臓の中の、明浄色聚と、非明浄色聚の中の四界を、逐一識別する修習に進む事ができる。

色彩、香、味、食素、命根、性根、心色

色彩 (vaṇṇa) :

又の名を、色所縁 (rūpārammaṇa) と言う。一粒一粒毎の色聚の中には、非常に識別し易い、色法が存在している。

香 (匂い、ghandha) :

一粒毎の色聚の中には、皆、この色法が含まれている。まず、あなたは、鼻浄色と有分透明界の二者を識別しなければならない。鼻の中の四界を識別すれば、あなたは非常に容易に、鼻の内部に存在する、正確な色聚 (すなわち、鼻十法聚) の中において、鼻浄色を見ることができる。あなたが、六処門の明浄色聚と、非明浄色聚の四界を、識別する事に成功したなら、あなたは、明るく輝く、有分透明界をもまた、非常に容易に見る事ができる。それは、心臓の中の、心所依処に依存して、生起する。心所依処とはすなわち、心色十法聚 (hadaya dasaka kalāpa) の事である。鼻浄色と有分透明界を識別した後、あなたは、一粒の色聚を選んで、その香を識別する。あなたは、香が、鼻浄色と有分透明界に、同時にぶつかるのを、見ることができる。

香とは、一種の、鼻識または意識によって認知することの出来る法である。鼻識は、鼻浄色に依存して生起し、有分透明界と意識は皆、心所依処に依存して生起する。大善意門観禅心路過程を基とする意識は、有分透明界が、心色十法聚に依存したものである (=依存して生起したものである)。これが、なぜ、色聚の中の香を識別しようとする時、先に、香と関係のある鼻浄色と、有分透明界を、観察しなければならないのか、という問いに対する答えである。

味 (rasa) :

一粒毎の色聚の中には、必ずこの色法がある。香と似ていて、味は一種の、舌識でもって、または意識でもって認知できる所の、目標である。故に、先に、舌浄色と有分透明界を識別した後、一粒の色聚を選んで、その味を識別しなければならない。《迷惑氷消》では、以下の様に言う :

sabbopi panessapabhedo manodvārika javaneyeva labhati.—

「意門速行心にのみ依るだけで、一切の異なる目標を認識することができる。」

この事は、意識のみに依って、色、香と味を知る事ができる、ということを意味している。禅の修行の深さが足りない時、鼻識と舌識に依れば、(+ 一体自分は) どの様に

して、香と味を認識するのかという、己自身の学習を支えることができる。禅の修行が深まり、強固になった後であれば、あなたは、意識のみに依って、香と味を認識することができる。

食素 (ojā) :

一粒毎の色聚の中には皆、この色法が存在している。四種類の食素があり、それはすなわち、業、心、時節と食より生じるものである。この食素から、色聚は、繰り返し増加するかまたは生起することができる。

命根 (jīvita) :

この色法は、それと同一の、一粒の色聚の中の業生色の生命を維持する。心生、時節生と食生色聚の中には命根はなく、業生色聚の中にのみ命根は、ある。一切の明浄色聚は、業によって生じるが、故に、あなたは先に、明浄色聚の中の命根を、識別してから、その後に、非明浄色聚の中の命根を、識別する。身体の中では、ただ三種類の、非明浄色聚の中にのみ、命根がある。その中の一種類は、ただ心臓の中の「心色十法聚」にのみ、存在する。その他の二種類、すなわち「性根十法聚」(bhāva dasaka kalāpa) と「命根九法聚」(jīvita nabaka kalāpa) は、全身に分布している。故に、もし、心臓の外の、非明浄色聚の中において、命根が見えたならば、当該の色聚は、必ずや性根十法聚または、命根九法聚である。この二者を区別する為に、あなたは必ず、性根色を識別しなければならない。

性根色 (bhāva rūpa) :

もし、命根を具有する非明浄色聚の中に性根があるならば、当該の色聚は、すなわち、性根十法聚であり、命根九法聚ではない。男性には、ただ男根色のみがあり、女性にはただ、女根色のみがある。男根色は、我々をして(+その人を)「この人は男性である」と知らしめる要素であり；女根色は、我々をして「この人は女性である」と知らしめる要素である。あなたが、性根色を識別する事ができる時、次には引き続き、全身の六処門の性根色の識別をする。

心色 (hadayarūpa) :

これは眼界 (manodhātu) と意識界 (manoviññādhātu) (注 24) を支える色法である。目、耳、鼻、舌、身体五識以外の、その他の心識は、みな、心所依処に依存して生起する。故に、心色の相は、眼界と意識界が依存する所の、色法という事になる。

心色を識別する時、心は、有分透明界において保持し、その後に、指を一本曲げてみる。指を曲げようとしている心が、有分透明界(心色)の中で生起するのを、観察する。その後に、それらの心は、どの様な色法に依存して、生起するのを観察する。当該の

色法は心色と呼ぶが、それは心色十法聚の中に存在する。あなたは、心色と共に俱生する所の、その他の九種類の色法をも、識別しなければならない。

注 24：論教法によると「眼界」とは、五門引転心及び領受心を言い、「意識界」とは、眼界を除いた、及び双五識以外の、その他の一切の心を言う。第七章「名業処」参照の事。

五浄色の識別

明浄の色聚は五種類ある。すなわち：
眼十法聚 (cakkhu dasaka kalāpa)、
耳十法聚 (sota dasaka kalāpa)、
鼻十法聚 (ghāna dasaka kalāpa)、
舌十法聚 (jivhā dasaka kalāpa)、
身十法聚 (kāya dasaka kalāpa) である。

身浄色を含む身十法聚 (kāya dasaka kalāpa) は、全身の六処門に、遍在している。それは目の中においては眼十法聚と、耳の中においては耳十法聚と、鼻の中においては鼻十法聚と、舌の中においては舌十法聚と混じり合っている。それはちょうど、米粉と小麦粉が混ざり合っている様である。この様であるから、目、耳、鼻、舌の中には、それぞれ二種類の明浄色聚が存在している (+と言える)。

眼浄色 (cakkhu pasāda) :

眼浄色は色彩 (色塵) の衝撃に敏感であり、身浄色は触塵の衝撃に敏感である。この、(+ある種の) 目標 (所縁) に敏感な度合の差異は、あなたをして、どれが眼浄色で、どれが身浄色であるかを、識別せしめ、知らしめる事ができる。(+あなたは) 先に、目の中の四界を識別し、その後に、一粒の明浄色聚を選んで、その後に、少し遠い所にある、一塊の色聚の色彩を見る。もし、色彩が、あなたの選らび、観察している所の浄色にぶつかるならば、それは眼浄色であり、眼浄色の色聚を含む色聚は、すなわち、眼十法聚である。もし、その色彩が、あなたが選んだ浄色にぶつかることがないならば、それはすなわち、眼浄色ではなく、必ずや身浄色である。というのも、目の中には二種類の浄色しかないが故に。

身浄色 (kāya pasāda) :

身浄色は、触塵の衝撃に敏感である。触塵とはすなわち、地、火、風の三界を言う。

先に、一粒の明浄色聚を選び、その後に、近くにある一粒の色聚の中の地、火、風界に注意を払う。もし、この三界の中の一つが、あなたの選らんだ浄色にぶつかるならば、それはすなわち、身浄色であり、身浄色を含む色聚とは、すなわち、身十法聚である。目の中の、身十法聚を識別するのと同じ様に、あなたは耳、鼻、舌、身体と、心臓の中の、身十法聚を識別しなければならない。

耳浄色 (sota pasāda) :

耳浄色は、音塵の衝撃に対して敏感である。先に、耳の中の四界を見て、その後に一粒の明浄色聚を見る。その後に、音を聞いて、若し、当該の音が、あなたの選らんだ浄色にぶつかるならば、それはすなわち、耳浄色であり、耳浄色を含む色聚とはすなわち、耳十法聚である。身十法聚を識別する方法は、すでに述べた。

鼻浄色 (ghāna pasāda) :

鼻浄色は、香塵の衝撃に対して敏感である。先に、鼻の中の四界を見て、その後に一粒の明浄色聚を見る。その後に、一粒の色聚の匂いを嗅ぐ。若し、当該の香が、あなたの選らんだ浄色にぶつかるならば、それはすなわち、鼻浄色であり、鼻浄色を含む色聚とはすなわち、鼻十法聚である

舌浄色 (jihvā pasāda) :

舌浄色は、味塵の衝撃に対して敏感である。先に、舌の中の四界を見て、その後に一粒の明浄色聚を見る。その後に、その近くにある一粒の色聚の味を味わってみて、若し、当該の味が、あなたの選らんだ浄色にぶつかるならば、それはすなわち、舌浄色であり、舌浄色を含む色聚とはすなわち、舌十法聚である。

心生色の識別

一生の内において、結生心を除いて、一切の、心所依処に依存して生起する所の眼界と意識界は、皆、全身に散布している所の、多くの心生食素八法聚 (cittaja ojā aṭṭhamaka rūpa kalāpa) を、生じせしめる事ができる。故に、もし、有分透明界を観察するならば、あなたは多くの、心所依処色に依存する心識が、継続不斷に、色聚を生じせしめているのを見ることが出来る。もし、修行の初めに、それを明確に見ることができないのであれば、有分透明界を観察した後、一本の指を何度か折り曲げてみる。この様にすれば、あなたは、心が指を移動させ様として、多くの、全身に散布する所の、色聚を生じせしめる事を見ることが出来る。これらは皆、八個の色法を含む、非明浄色聚である。

時節生色の識別

一切の、色聚の中の火界は、また時節 (utu) とも言う。色法の法則によると、時節が住時 (ñhita kāla) (注 25) にある時にのみ、新しい色聚を生じせしめる事ができる。すなわち：時節生食素八法聚 (utuja ojā aṭṭhamaka rūpa kalāpa) である。この新しい一代の、時節生色聚の中の火界もまた、時節生食素八法聚 (第二代) を、生じせしめる事ができる。もし、第一代の色聚の火界が、業生色聚から生じたものであるならば、上に述べた過程は、継続して、四または五代の、時節生色聚を生じせしめる事ができる。

注 25：色法には三時がある。すなわち、生時、住時と壊滅時である。

もし、第一代の色聚を生じせしめる火界が、普通の欲界心によって生じた所の、心生色聚から来てるものであれば、この過程は、二代から三代持続する。もし、第一代の色聚を生じせしめる火界が、遍作定、近行定、安止定、観禅、道または果心によって生じた所の、心生色聚から来ている場合、その慧または定の強弱によって、この過程は、多くの代を、維持することができる。これらの時節生色聚は、体内において生じる事ができるほかに、身体の外に向かって、発散する事も出来る。禅の修行の時に生じる光明は、まさに、これらの心生色聚と、時節生色聚の中の、極めて明るく輝く、色彩界なのである。

通常、もし、第一代の色聚を生じせしめる火界が、食生色聚から来ているものであれば、この過程は、10 から 12 代続く。もし、それが特別な食物、たとえば、天界の食物であれば、この過程は、非常に長い時間持続することができる。



表 6-1 : 四種時節生色聚

四種の時節生色聚	修法の図解
1. 業生時節生八法聚 Kammaja utujatṭhamaka kalāpa	
2. 心生時節生八法聚 Cittaja utujatṭhamaka kalāpa	
3. 時節時節生八法聚 Utujā tejatṭhamaka kalāpa	
4. 食生時節生八法聚 Āhāraja utujatṭhamaka kalāpa	

註 ❶: K=Kamma samutṭhāna kalāpa 業生色聚；C=Citta samutṭhāna kalāpa 心生色聚；
utu=時節；ojā=食素 註 ❷: 火界に注意-「熱さ」あるいは「冷たさ」の特徴

食生色の識別

《清浄道論》の中において、以下の様に言う：胃の中の物、糞、膿と尿という、四種類の身体部分は、時節生食素八法聚より成っている、と。業生命根九法聚の、消化の火の力を借りて、胃の中の物の時節生食素は、全身において、多くの代、散布する事のできる色聚・・・すなわち：食生食素八法聚を、生じせしめる事ができる。一日の内に食した食物は、食生色聚を、七日間の長きにわたって、生じせしめる事ができるが、天界の食物においては、食生色聚を、一か月又は二か月、生じせしめる事ができる。一日の内に食した食物は、その後の七日の間、業生、心生と時節生色聚の食素を、支えることができる。

表 6-2 : 四種食生色聚

四種の食生色聚	修法の図解
1. 業生食素生八法聚 Kammaja ojaṭṭhamaka kalāpa	
2. 心生食素生八法聚 Cittaja ojaṭṭhamaka kalāpa	
3. 時節食素生八法聚 Utujā ojaṭṭhamaka kalāpa	
4. 食素食素生八法聚 Āhāraja ojaṭṭhamaka kalāpa	

註 ①: K=Kamma samuṭṭhāna kalāpa 業生色聚 : C=Citta samuṭṭhāna kalāpa 心生色聚 :
utu=時節 : oja=食素 註 ②: 火界に注意-「熱さ」あるいは「冷たさ」の特徴

あなたは、食事の時に、禅の修習をして、これらの現象を、観察することができる。先に、口、喉、胃と腸内の食物の四界に注意を払えば、あなたは、そこにある色聚を見ることができる。次に、それらの色聚の食素が、業生の消化の火の支援の下、全身に散布する所の、食生色聚を生じせしめるのを識別する。

また、あなたは食事の後に、これらの現象を観察する事もできる。順序よく定力を育成した後、あなたは、胃または腸の中の、今食べたばかりの、食物の四界を観察する。そして、食物の中の色聚の食素が、業生の消化の火の力を借りて、全身に散布する所の食生色聚を生じせしめるのを見る。その後、あなたは、これらの非明浄色聚の中の、八種類の色法を識別しなければならない。その中の食素の名を、食生食素と言う。比較的先に生起した所の食生食素が、比較的後に生起した所の、食生食素の支援が得られた場合、それは、多くの代、または何代かの、新しい色聚を、生じせしめる事ができる。これは、当該の食物の品質と、消化の火の能力 (+程度) による。

次に、目の中に散布された、食生色聚を識別する。その中の食生食素は、眼十法聚の中の、業生食素に出会う時、通常、それは後者を支援して、4または、5代の食生色聚を生じせしめる事ができる。最終的に、何代の色聚を生じせしめる事ができるのかは、業生食素と食生食素の、強度による。あなたは、身十法聚、性根十法聚などの、その他

の業生色聚の中の食素もまた、観察しなければならない。それが如何にして、食生食素の支援の下、4または5代の食生色聚を生じせしめるのかを、見るのである。

一粒毎の、心生色聚の中には、みな、食素が存在している。心生食素は、食生食素の支援の下、それは2または3代の食生色聚を生じせしめる事ができる。一粒毎の、時節生色聚の中には、みな、食素が存在している。この時節生食素は、食生食素の支援の下、それは10まから12代の、食生色聚を生じせしめる事ができる。

時節と食素は、皆、住時においてのみ、新しい色聚を生じせしめる事ができる。色聚が生じる時、どれが何代であろうとも、最後の一代の中の、時節と食素は、新しい時節生色聚と食生色聚を、生じせしめる事はできない。

あなたは細心に、これらの説明を閲読し（表を参考にして～訳者注）、よき師の指導の下、正確に、系統的に、禅の修行を実践しなければならない。この様にすれば、あなたは業、心、時節と食という、四個の原因によって生じる所の、色聚を識別する事に、熟練するであろう。目の中の色法を識別するのと同じ様に、あなたは、その他の五処門、及び42の身体部分の、すべての色法を、識別しなければならない。



表 6-3 : 一代また一代と生起する時節生、食生色聚

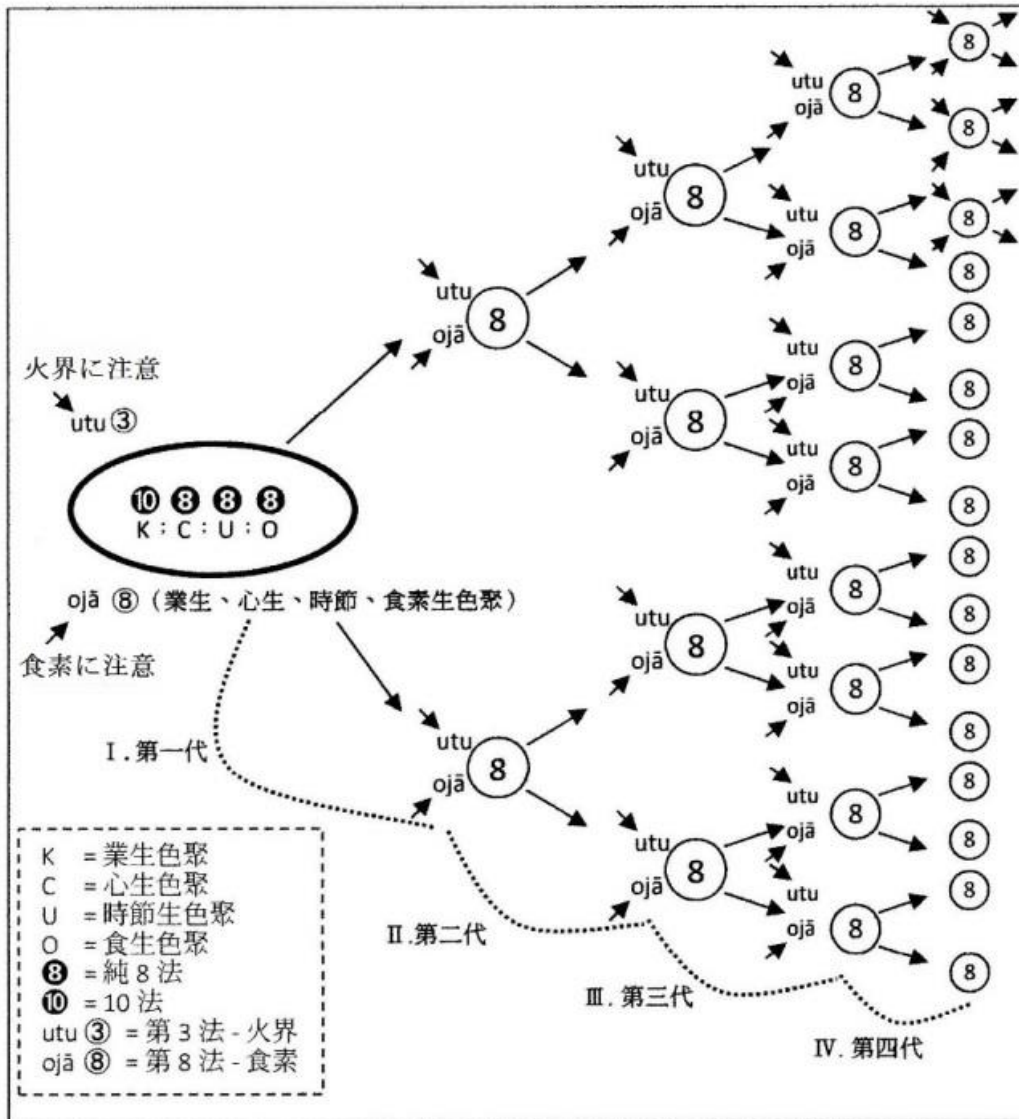


表 6-4 : 眼門五十四色

眼十法聚	身十法聚	性根 十法聚	心生 八法聚	時節生 八法聚	食生 八法聚
八不離色	八不離色	八不離色	八不離色	八不離色	八不離色
命根	命根	命根			
眼淨色	身淨色	性淨色			
業生	業生	業生	心生	時節生	食生
明淨	明淨	非明淨	非明淨	非明淨	非明淨

表 6-5 : 耳門五十四色

耳十法聚	身十法聚	性根 十法聚	心生 八法聚	時節生 八法聚	食生 八法聚
八不離色	八不離色	八不離色	八不離色	八不離色	八不離色
命根	命根	命根			
耳淨色	身淨色	性淨色			
業生	業生	業生	心生	時節生	食生
明淨	明淨	非明淨	非明淨	非明淨	非明淨

表 6-6 : 鼻門五十四色

鼻十法聚	身十法聚	性根 十法聚	心生 八法聚	時節生 八法聚	食生 八法聚
八不離色	八不離色	八不離色	八不離色	八不離色	八不離色
命根	命根	命根			
鼻淨色	身淨色	性淨色			
業生	業生	業生	心生	時節生	食生
明淨	明淨	非明淨	非明淨	非明淨	非明淨

表 6-7 : 舌門五十四色

舌十法聚	身十法聚	性根 十法聚	心生 八法聚	時節生 八法聚	食生 八法聚
八不離色	八不離色	八不離色	八不離色	八不離色	八不離色
命根	命根	命根			
舌淨色	身淨色	性淨色			
業生	業生	業生	心生	時節生	食生
明淨	明淨	非明淨	非明淨	非明淨	非明淨

表 6-8 : 身門五十四色

身十法聚	性根 十法聚	心生 八法聚	時節生 八法聚	食生 八法聚
八不離色	八不離色	八不離色	八不離色	八不離色
命根	命根			
身淨色	性淨色			
業生	業生	心生	時節生	食生
明淨	非明淨	非明淨	非明淨	非明淨

表 6-9 : 意門(依処=心臓)五十四色

心色十法聚	身十法聚	性根 十法聚	心生 八法聚	時節生 八法聚	食生 八法聚
八不離色	八不離色	八不離色	八不離色	八不離色	八不離色
命根	命根	命根			
心色	身淨色	性淨色			
業生	業生	業生	心生	時節生	食生
非明淨	明淨	非明淨	非明淨	非明淨	非明淨

四界分別觀 (詳細法 : 42 身分)

身体の 20 個の部分は、地界が最も顕著な部分である。その中で、胃の内容物と糞以外の、その他の一つひとつの部分には、皆、44 種類の色法がある。胃の内容物と糞には、ただ、時節八法聚が存在しているのみであるが故に、8 種類の色法がある。

表 6-10 : 42 身分—地界

1. 頭髮	kesā	44 色法	11. 心臓	hadayaṃ	44 色法
2. 体毛	lomā	44 色法	12. 肝	yakanaṃ	44 色法
3. 爪	nakhā	44 色法	13. 膜	kilomakaṃ	44 色法
4. 齒	dantā	44 色法	14. 脾	pihakaṃ	44 色法
5. 皮膚	taco	44 色法	15. 肺	papphasaṃ	44 色法
6. 筋肉	maṃsaṃ	44 色法	16. 腸	antaṃ	44 色法
7. 腱	nahāru	44 色法	17. 腸間膜	antaguṇaṃ	44 色法
8. 骨	aṭṭhi	44 色法	18. 胃の内容物	udariyaṃ	8 色法
9. 骨髓	aṭṭhimiṅgaṃ	44 色法	19. 糞	kaṛīsaṃ	8 色法
10. 腎	vakkaṃ	44 色法	20. 脳	matthaluṅgaṃ	44 色法

身体の 12 個の部分は、水界が最も顕著である。この 12 の部分の中において、膿、汗、涙、唾、鼻水と尿以外の、その他の部分には、44 種類の色法がある。膿と尿は、時節生八法聚しか存在しないが故に、それらには、八種類の色法しかない。汗、涙、唾と鼻水は、心生と時節生八法聚が存在しているが故に、16 種類の色法がある。

表 6-11 : 42 身分—水界

1. 胆汁	pittaṃ	44 色法	7. 涙	assu	16 色法
2. 痰	semhaṃ	44 色法	8. 脂膏	vasā	44 色法
3. 膿	pubbo	8 色法	9. 唾	kheḷo	16 色法
4. 血	lohitaṃ	44 色法	10. 鼻水	siṅghānika	16 色法
5. 汗	sedo	16 色法	11. 関節髄液	lasikā	44 色法
6. 脂肪	medo	44 色法	12. 尿	muttaṃ	8 色法

身体の一つひとつの部分の、色法を識別する事が出来る為には、あなたは、先に、系統的に、定力を、育成しなければならない。その後、表に示した様な、六処門の諸々の色法を、識別する。もし、この様に修習する事が出来たならば、次に、身体の一つの部分を選んで、当該の部分の透明になると共に、その中の空間を観察する。その様に修習して、当該の部分の構成する多くの色聚を見る事が出来るまで、その中の四界を、観照する。色聚が見えたなら、次に、それらをそれぞれに：業生色聚、心生色聚、時節生色聚及び、食生色聚として、識別する。

体毛と頭髪の中の色聚を識別する時、あなたは、皮膚内部の、毛髪の中の部分の、44 種類の色法を識別しなければならない。というのも、皮膚の外部の毛髪は、非常に少量の身十法聚があるだけの為、識別が難しいが故に。同様に、手の指の爪と足の爪は、それらの、肉に近い根の部分の、識別しなければならない。

身体の四つの部分は、火界が顕著である。この四つの部分と、地界または水界の、最も顕著な部分とは異なっていて、それらは形状がなく、ただ火界が顕著な、非明浄色聚によって構成されているに過ぎない。故にあなたは、火界の、最も顕著な色聚を見つけて、これらの部分を観察するのがよい。もし、それらが不鮮明であった場合、風邪で熱を出した時の、色聚でもって分析をする。

表 6-12 : 42 身分—火界

1、発熱の火 (たとえば、マラリアの時の隔日の発熱)	santappana tejo	33 色法
2、普通の発熱の火 (たとえば、太陽の火に照らされた時等)	ḍaha tejo	33 色法
3、成熟または老化に至る火	jīrana tejo	33 色法
4、消化の火 (命根九法聚の作用の一)	pācaka tejo	命根 9 法聚

身体の 6 個の部分は、風界が顕著である。この 6 個の部分の中において、入息と出息を除いて、その他の一つひとつの部分には、33 種類の色法があり、四種類の色聚によって構成されている。それはすなわち：

- 一、命根九法聚；
- 二、心生八法聚；
- 三、時節生八法聚；
- 四、食生八法聚、である。

先に、逐一、この五個の部分の中の四界を識別し、色聚が見えた後、33 種類の色法すべてを識別する。

入息と出息は、ただ心生声 (= 音) 九法聚 (cittaja sadda navaka kalāpa) しか存在しない。すなわち、八不離色と声 (= 音) という、九種類の色法のみ、存在するのである。それらは、心によって生じるが、故に、あなたは、先に、心所依処に依存して生起する所の心が、如何にして、入息と出息を、生じせしめるのかを識別し、その後で、息の四界を識別しなければならない。この様にすれば、あなたは、息を構成する色聚を見ることができる。この時、あなたは、その中の、九種類の色法を識別しなければならない。

表 6-13 42 身分—風界

1. 上昇風	uddhaṅgama vātā	33 色法
2. 下降風	adhogama vātā	33 色法
3. 腸内、腸外の風	kucchisaya vātā	33 色法
4. 腸内の風	koṭṭhāsaya vātā	33 色法
5. 肢体内部を循環する風	aṅgamaṅgānusārino vātā	33 色法
6. 入息と出息	assāsa passāso vātā	心生声 (= 音) 九法聚

九種類の業生色聚

六処門と 42 身体部分の中の色法を識別する時、あなたは、九種類の業生色聚を、見る事ができる：

- 一、眼十法聚；
- 二、耳十法聚；
- 三、鼻十法聚；
- 四、舌十法聚；
- 五、身十法聚；
- 六、女性根十法聚；
- 七、男性根十法聚（注 26）
- 八、心色十法聚；
- 九、命根九法聚。

今世（＝今生）の業生色法は、過去世（＝過去生）において、造（ナ）された業によって生起する；

前世の業生色法とは、すなわち、更に遠い過去世において、造（ナ）した業によって生起する；

未来世において、生起する業生色法は、すなわち、今世または、過去世において造（ナ）した業によって生起する。

もし、それらが、どの様な業によって生起したのかを、知りたいと思うならば、例えば、布施、持戒または禪の修行などであるが、あなたは、過去世と未来世における、名色法を識別できなければならない。この様にして初めて、あなたは自ら体験し、理解する事ができる。これらは、後に（＋説明する所の）「縁摂受智」の段階において、学習する。今の段階では、あなたは、これらの色法は、業によって生じているのだ、という事を受け入れる必要がある（＋だけである）。

上に述べた業生色、心生色、時節生色と食生色は皆、真実色法であり、それらは、あなたが、後々において、観禪の修行をする時に、観智でもって、無常・苦・無我として観照する目標である。これより以外に、非真実色法と心生、時節生、食生の色法が（＋一か所において）混ざり合う事がある。以下において説明する。

注 26：《智慧の光》では、男性は男根のみ、女性は女根のみ、有している為、一人ひとりの人間には、最も多くて、八種類の業生色聚がある事になる。

八種類の心生色聚

1、心生純八法聚 (cittaja suddhaṭṭhaka kalāpa) は、すべての六処門及び、多くの42 身体部分の中に、存在している。それらは真実色法であり、観禪の目標となる。

2、身表九法聚 (kāyaviññatti navaka kalāpa) 。有分透明界を照見した後、一本の指を屈伸させると、あなたは、多くの心生色聚が生じるのを見ることができる。それらは、八不離色と身表を具備しており、合計で九種類の色法がある。

3、色軽快性 11 法聚 (lahutā ekadasaka kalāpa) : 11 種類の色法がある。すなわち、八不離色に色軽快性 (lahutā) 、色柔軟性 (mudutā) と色適合性 (kammaññatā) である。

4、身表色軽快性 12 法聚 (kāyaviññatti lahutā dvidasaka kalāpa) : 12 種類の色法がある。すなわち、八不離色に身表、色軽快性、色柔軟性と色適合性を加えたものである。

注意:日常生活及び威儀路明覚において、身表色に属する所の、身表九法聚及び身表 12 法聚という、この二種類の色聚は、よく出現するが故に、重要である。もし、日常生活及び威儀路明覚において、禅修行者は、こられの色法を (+瞑想の対象にして) 修行できないのであれば、智慧において、これら究極色法を、明晰に分別する事は、不可能である。

5、語表十法聚 (vacīviññatti dasaka kalāpa) : 十種類の色法がある。すなわち、八不離色に、語表と音声を加えたものである。声を出して「a、b、c」と言い、その後有分透明界を見て、その後に再度「a、b、c」と声を出してみる。そして、あれら心生色聚が喉、声帯、その他の音の出る場所に、散布されるのを見る。そして、語表の動作と、声の生じる場所において、心生色聚の中の地界がどの様にして、業生色聚の中の地界と、相互に摩擦し合って、声 (=音) が出るのかを、観察する。

6、語表声 (=音) 色軽快性十三法聚 (vacīviññatti sadda lahutā terasaka kalāpa) : 13 種類の色法がある。すなわち、八不離色に語表、声 (=音) 色軽快性、色柔軟性と色適合性を加えたものである。

注意:この第五番目と六番目の二種類の色法は、日常生活及び威儀路明覚において、修行しなければならない主要な色法である。

7、入出息心生声(=音)九法聚(assāsa passāsa cittaja sadda navaka kalāpa) : 九種類の色法がある。すなわち、八不離色に声(=音)を加えたものである。これらは真実色法であり、観禅の目標として適合する。

8、入出息心生声(=音)色軽快性12法聚(assāsa passāsa cittaja sadda lahutā dvidasaka kalāpa) : 12種類の色法がある。すなわち、八不離色に声(=音)、色軽快性、色柔軟性と色適業性を、加えたものである。

真実と非真実の二種類の色法を含む色聚は、名色を分別する時に、識別する様にする。しかし、(+それ)以降の(+修行における)観禅の目標とする事は出来ない。それらを、無常・苦・無我として、観ずる事は出来ないのである。

四種類の時節色聚

1、時節生純八法聚(utuja suddhaṭṭhaka kalāpa) : 八種類の色法がある。すなわち、八不離色である。これは真実色法である。

2、時節生声(=音)九法聚(utuja sadda navaka kalāpa) : 九種類の色法がある。すなわち、八不離色に声(=音)を足したものである。これもまた真実色法である。

3、色軽快性11法聚 : 11種類の色法がある。すなわち、八不離色に色軽快性、色柔軟性、色適業性を加えたものである。これは非真実色法を含む色聚である。

4、声(=音)色軽快性12法聚(sadda lahutā dvidasaka kalāpa) : 12種類の色法がある。すなわち、八不離色に声(=音)、色軽快性、色柔軟性と色適業性を足したものである。これは、非真実色法を含む色聚である。

四種類の時節生色聚の中において、一番目と二番目の二種類の色聚は、真実色法であり、観禅の目標(法所縁)とする事ができる。一番目の色法——時節生純八法聚は、六門及び多くの42身体部分に存在する。二番目の色聚——時節生声(=音)九法聚は、胃の中の音、及びその他の類する音の事を言う。この二種類の色聚は、内在、外在、識有り、識なしが存在する。三番目と四番目の色聚は、色軽快、色柔軟、色適業などの、非真実色聚が含まれており、この非真実色法は、観禅の修習の目標にはなり得ない。ただ、真実色法のみが、観禅の修習の目標となる。しかし、名色分別智の段階において、色法を修習する時、上に述べた修習は、実践されなければならない。もし、非真実色法

を取り去るならば、その修法は、一番目と二番目の、二種類の色法の修行の仕方と同じになる。また、この二種類の色法は内在する、または外在する有識の衆生の中に存在し、外在する無識の所縁の中には存在しない。

二種類の食生色聚

- 1、食生純八法聚。
- 2、色軽快性 11 法聚：11 種類の色法がある。すなわち、八不離色に色軽快性、色柔軟性と色適業性を足したものである。

この二種類の色聚は、すべての六門及び多数の 42 身体部分に出現する。一番目の色聚は真実色法であり、二番目は非真実色法が含まれる。この二種類の色聚は、有情の体内にのみ存在する。

三種類の音声

- 1、入出息心生声（=音）九法聚：入出息の音。
- 2、語表十法聚：話をする時の声。
- 3、時節生声（=音）九法聚：胃の中の音、風の音等。

この三種類の音の中において、前の二種類は、生命を有するものにおいてのみ、出現する。三番目は、生命を有するものにも、生命を有しないものにも出現する。その声（=音）は、前の二種類には、含まれない所の、すべての音声を含む。二番目は、観禅の目標にするには適当でない。しかし、一番目と三番目は可能である。

四個の相色の識別

受胎と胚胎の中で成長する色法を、見ることが出来た時だけ、色集積（=色積集、*upacaya*）を見ることができる。色相続（*santati*）、色老性（*jaratā*）、色無常性（*aniccatā*）に関しては、それぞれ、真実色法の生・住・滅であるに、過ぎない。修行する時、先に、一粒の色聚を見て、その中の八、九、または十種類の色法を識別し、その後、これらの真実色法が、同時に生起し、住し、滅するのを観察する。その後、再び同時に、六処門と 42 身体部分の中の真実色法の生、住、滅を遍照する。全部の色聚が皆、同時に

生じ、住し、滅するという事は有り得ない。すべて（+の色聚）が、同一の段階にある、という事はない。

諸々の色法を「色」と観ずる時刻

先に、（+禅修行者は）一つの処門ごとの 54 種類、または 44 種類の真実色法を、それぞれ観察し、かつ、出来るだけ、それらの非真実色法を観察する様、尽力する。一つの処門毎の、すべての色法が、変化の干渉を受ける相のある時刻を観察して、その後、それらを「色、色」または「これらは色である」または「これらは色法である」と観ずる。42 身体部分に関しても、同様の方法を用いて、識別する。

ここで言う所の「変化の干渉を受ける相」というのは、諸々の色法の強度が変化して、例えば熱さから冷たさへ、硬さから柔らかさへ、粗さから滑らかさへ（+と変化する事を言うが）、しかし、それらの自性相（特徴）は、依然として、硬く、流動的で、熱く、また支持性を有しており、変化がない。熱い時、体内の色法の熱さは、忍耐の出来ない程になる：冷たい時、その冷たさも、忍耐の出来ない程になる。故に、色聚の中の諸々の色の強度は、不断に変化しており、それらは外部において、相互に、不断に干渉し合うのである。

要約

未だ色聚を見ていない時、あなたは地、水、火、風の四界を照見して、近行定（+を得られる）まで、定力を育成するべきである。色聚を見る事が出来る様になったなら、一種類毎の色聚の中の、すべての色法、例えば：眼十法聚を、識別しなければならない。あなたは、その中の、地、水、火、風、色彩、香、味、食素（＝栄養素）、命根と眼浄色の十種類の色法を、識別するべきである。

その後、再度識別する：一個の処門の中のすべての色法、一つひとつの身体部分のすべての色法、すべての六処門の中の、すべての色法、すべての 42 身体部分の中の、すべての色法。それらのすべてが、変化の干渉を受けている相を見たならば、それらを「色、色」または「色法、色法」または「これらは色、これらは色」と観ずる。



第七章：名業処 **Nāma Kammaṭṭhāna**

純観行者の注意点

純観行者は、必ず、先に、色法を徹底的に識別し、その後において、初めて、名法を識別すべきである。これは、五蘊有情 (*pañca vokāra sattā*) の名法は、必ずや、目、耳、鼻、舌、身体及び心所依処という、この六依処色 (*vatthu rūpa*) の内の一つに依存しなければ、相続流 (*santāna*) の内において、生起する事が出来ないからである。六依処色とは、すなわち、眼、耳、鼻、舌、身の五淨色、及び心所依処色の事である。禅修行者が、色法を徹底的に分別できる時、名法もまた、明晰にその智において、顕現する。もし、未だ依処色を識別できないのであれば、彼は、名密集 (注 27) (*nāma ghaṇa*) を看破しておらず、また、究極法を知見する智慧には、いまだ甚だ遠いものがある。故に、徹底的に、色法を分別できて初めて、彼は、名法を識別することができる。そうでないならば、「彼の禅修行は、退歩する」 (*kammaṭṭhānato parihāyati*) ののである。(《清浄道論》第 18 章) (注 28)

注 27：四種類の密集に関しては、後述の項「四種類の名密集の看破」を参照の事。

注 28：《清浄道論》第 18 章では、彼が斯くの如くに、色法を明確に識別した後に初めて、非色法 (名法) が彼に対して、三個の方式でもって、明確に顕現する (+ と言う)。故に、彼は、それ (色法の識別) を完成させた後に初めて、非色法の識別という任務に取り組むのがよい。反対の (+ 順序での) 方式は、有り得ない。もし、彼が一、二種類の、明確に顕現する所の色法を識別した後、即刻、非色法の識別をするならば、「地遍の修習」の篇で述べられた母牛の様に、彼は、禅修行の業処から退歩する。しかしながら、彼が、すでに色法を明確に識別した後によりやく、非色法を識別するのならば、彼の禅修行の業処は、増長し、向上し、円満に到達する。

世間名法のみを観ずる

名法は、二つの大きな類に分ける事ができる：すなわち、心 (*citta*) と心所 (*cetasika*) である。心はまた、世間及び出世間の、二つの大きな類に、分ける事ができる。出世間心とはすなわち、四道及び四果であり、それらは、観智の所縁では、有り得ない。

禅修行者が識別すべきものは、世間名法であり、それはすなわち：欲界心、色界心、無色界心及び、それらと相応する心所である。又の名を、広大心 (mahaggata citta) とする所の、色界心及び無色界心に関して、《大疏鈔》では、以下の様に言う：

‘Labhino eva pana mahaggatacittāni supākatāni honti.’

——「唯一、已において、ジャーナを証得した者だけが、己自身が証得した所の、ジャーナ名法 (jhāna nāma dhamma) を、識別する事ができる。」

未だジャーナを証得していない者は、欲界名法をのみ、識別する事ができる。

六識 (viññāṇa)

心は、又、「識」とも言う。識によって縁として取られた色彩、音、香、味、触、法は、六種類の所縁 (目標) である (+と言える)。識は、以下の六種類に分類する事ができる：

- 1、眼識 (cakkhaviññāṇa) 眼浄色に依存して生起する識。色所縁 (rūparammaṇa) を識知する。
- 2、耳識 (sotaviññāṇa) 耳浄色に依存して生起する識。音所縁 (saddārammaṇa) を識知する。
- 3、鼻識 (ghānaviññāṇa) 鼻浄色に依存して生起する識。香所縁 (ganadhārammaṇa) を識知する。
- 4、舌識 (jihvāviññāṇa) 舌浄色に依存して生起する識。味所縁 (rasārammaṇa) を識知する。
- 5、身識 (kāyaviññāṇa) 身浄色に依存して生起する識。触所縁 (phoṭṭhabbārammaṇa)、すなわち、地、火、風の三界を識知する。眼、耳、鼻、舌、身の五識は、それぞれ善と不善の果報 (異熟) の二種類があり、合計 10 個で、合わせて双五識と言う。
- 6、意識 (manoviññāṇa) 有分透明界の縁及び心所依処色への依存によって生起する所の識は、六種類すべての所縁を識知する事ができる。

六種類の法所縁

- 1、五浄色 (5 pasāda rūpa)
- 2、16 の微細色 (16 sukhumā rūpa) : 12 種類の色法は容易に識別する事ができる。すなわち、五浄色、色彩、音、香、味、及び (触に属する所の) 地、火、風。その為、それらは粗色 (oḷārika) と呼ばれる。28 種類の色法の中から、この 12 種類を除い

た、残りの 16 種類の色法は、容易に識別する事ができない。故に、それらは微細色と呼ばれる。

3、心：六識界 (viññāṇa dhātu)

4、52 種類の心所

5、涅槃 (nibbāna) :無為界 (asaṅkhata dhātu)

6、概念 (paññatti、概念) : 各種の概念。例えば遍相の概念、名称の概念、形状の概念等。

六門心路過程の識別

身・語・意の三門 (kāya dvāra、vacī dvāra、mano dvāra) は、業門 (kammadvāra) である。目、耳、鼻、舌、身と意の六門は、処門 (āyatanadvāra) である。処門に基づく識別の方法は「混同がない」 (anākula) である為、《清浄道論》では、眼門等を通して、名法を識別せよ、と言う。それは正に、四種類の名密集の看破と、究極法を観じてその智を証得する為には、六処門の心路過程 (vīthi) を識別しなければならない、という意味である。故に、禅修行者は、処門によって生起する所の、心路過程心 (vīthiccita、略して路心と言う) を明確に、知る必要がある。

前後の順序から見て、眼門心路過程 (cakkhudvāravīthi) の、七種類の路心の名称は、以下の様になる：

- 1、五門引転 (pañcadvārāvajjana) : 色彩、音、香、味、触の五所縁。
- 2、眼識 (cakkhu viññāṇa) : 眼浄色に依存して生起する心。
- 3、領受 (sampaṭicchana) : 所縁 (目標) を領受する心。
- 4、推度 (santīraṇa) : 所縁を推度 (=推定) または審察する心。
- 5、確定 (votthapana) : 所縁を確定 (好ましいか好ましくないか) する心。
- 6、速行 (javana) : 所縁を体験する心、連続して迅速に生起する。
- 7、彼所縁 (tadārammaṇa) : 速行の所縁を引き続き識知する心。

耳、鼻、舌、身門心路過程における、それらの路心と、眼門心路過程の違いは、それが「眼識」ではない、という一点のみであり、それは、それぞれに、耳識、鼻識、舌識及び身識となる。

前後の順によると、意門心路過程の三種類の路心の名称は以下の通り：

- 1、意門引転 (manodvārāvajjana) : 意門に顕現した所縁を省察する心。
- 2、速行 : 所縁を体験する心。連続的に迅速に生起する。

3、彼所縁：継続的に速行の所縁を識知する心。

大多数の心路過程の中において、速行は、七回出現し、彼所縁は二回出現し、その他の路心は、一回のみ出現する。双五識を除いて、その他の心は、皆、意識 (*manoviññāṇa*) と呼ぶ。論蔵によると、諸々の意識の中で、五門引転と領受は「眼界」 (*manodhātu*) に属し、その他のものは「意識界」 (*manoviññāṇadhātu*) に属する、と言う。

所縁の寿命に従って、心路過程は、以下の四種類の時分 (*vāra*) (注 29) に分類する事ができる。すなわち：

- 1、空時分 (*mogha vāra*)、有分識のみが波動している；
- 2、確定 (*votthapana*) にのみ出現する時分；
- 3、諸々の速行において出現する時分；
- 4、彼所縁においても出現する時分。

この四種類の時分について、この書『禅修指南』では、唯一、彼所縁時分の心路過程にのみ、言及する。識別 (+の修習を) する時、あなたはその他の時分についても、理解するべきである。

注 29：四種類の時分及び極大、大、微細、極微細の四種類の所縁については《アビダンマ概要精解》を参照の事。

彼所縁

八種類の大果報心 (*mahāvīpāka citta*) と、三種類の推度心 (*santīraṇa citta*) は、彼所縁の作用を、執行する事ができる。すなわち、速行の取る所縁を、引き続いて、取る事ができる。通常、欲界速行が、欲界を所縁として取った結果、(+それが) 欲界有情の心の中に生起した時にのみ、彼所縁は、生起することができる。欲界の所縁とは、「欲法」 (*kāmadhamma*) の欲界心と心所、及び 18 種の色法を言う。但し、五門心路過程の所縁が極大 (*atimahanta*) である時と、意門心路過程の所縁が、明晰 (*vibhūta*) である時 (注 30) にのみ、彼所縁は、生起することができる。

この定義に基づけば、彼所縁は、概念を所縁とする心路過程においては生起しえない。もう一つは、《迷惑氷消》の中において述べられている事で、観禅速行 (*vipassanā javana*) の後、通常、彼所縁は、生起し得ないが、しかし、未成熟な観禅速行の後では、時には、彼所縁が生起する場合も有り得る。

大善速行 (mahākusala javana) の後、(相当の) 喜俱または捨俱は、生起する可能性はある。不善速行 (akusala javana) の後、大果報彼所縁、または無因推度彼所縁は、二者とも、生起する可能性がある。当該の書『禅修指南』では、一項毎につき、只、一つの例を挙げているに過ぎない。識別の修習をする時、あなたはその他の部分を、理に沿って、理解すべきである。一般的な規則に従えば、喜俱速行の後に生起するのは喜俱彼所縁である；捨俱速行と、憂俱速行の後に生起するのは、捨俱彼所縁である。下記に、結生心において、無貪、無瞋、無痴 (慧) を具足する所の、三因の凡夫 (tīhetuka puthujjana) の彼所縁を、列記した。

表 7-1: 三因凡夫の彼所縁

八種類の大善速行の後、11 種類すべての彼所縁は、すべて生起する事ができる。
八種類の貪根速行の後、11 種類すべての彼所縁は、すべて生起する事ができる。
二種類の瞋根速行の後、6 種類すべての彼所縁は、すべて生起する事ができる。
二種類の痴根速行の後、11 種類すべての彼所縁は、すべて生起する事ができる。

注 30 : 明晰及び不明晰という二種類の所縁に関しては《アビダンマ概要精解》を参照の事。

五十二心所

心 (citta) は、心所 (cetasika) と相応しないマ、(+単独で) 生起する、という事は有り得ない。一つひとつの、心識刹那の中において、心と心所は一つのグループを形成し、同時に生・滅する。心所には、四つの相がある。すなわち：

- 1、心と同時に生じる (ekuppāda)
- 2、心と同時に滅する (ekanirodha)
- 3、心と同一の所縁を取る (ekālambaṇa)
- 4、心と同一の依処に依る (ekavatthuka) 。

欲界及び色界において生起した所の、すべての心と心所は、皆、四つの相を持つ。これは一つの、自然法則である。無色界の中においては、「同一の依処」の相はない。というのも、当該の界では、依処色が無いが故に。

心所は合計 52 個ある。すなわち、

- 7 個の遍一切心心所 (sabbacitta sādhāraṇa cetasika) 。
- 6 個の雑心所 (pakīṇṇaka cetasika) 。

○14 個の不善心所 (akusala cetasika)。

○25 個の美心所 (sobhaṇa cetasika)。

七遍一切心心所

七個の遍一切心心所は、一つひとつの心と共に、同時に生起する。それらは：

- 1、触 (phassa) : その (特徴である所の) 相 (lakkhaṇa) は、所縁と接触する事。作用 (rasa、味) は、所縁と識を繋ぐ事。
- 2、受 (vedanā) : 所縁 (目標) を感受する。
- 3、想 (saññā) : 所縁に印を標記する ; 印をつける。
- 4、思 (cetanā) : 相応する心と心所を、促すか、または導いて、所縁に向かわせる。
- 5、一境性 (ekaggatā) : 心が唯一、一個の所縁にのみ向かう事 ; 安定して静か ; 相応する心と心所を散乱せしめない。ある種の状況において、一境性は定 (samādhi) と呼ばれる。
- 6、命根 (jīvita) : 相応する名法を保護する。すなわち、名法の生命を維持する。
- 7、作意 (manasikāra) : 相応する名法が、所縁に向かう様にコントロールするか、(+ またはその方向へ向かって) 押す ; 所縁に注意を向ける。

六雑心所

- 1、尋 (vitakka) : 心と心所を所縁に向かわせる ; 重複して (+ 何度も) 、所縁を取る。
- 2、伺 (vicāra) : 重複して (+ 何度も) 所縁を省察する ; 重複して所縁を取る。
- 3、勝解 (adhimokkha) : 所縁の確定。
- 4、精進 (vīriya) : 所縁に対して、それは、心と心所が生起する様、努める。不善法に対して、それは貪、瞋、または痴等が生起する様、努める。善法に対して、それは無貪、無瞋、無痴等が生起する様、努める。
- 5、喜 (pīti) : 所縁を好む。
- 6、欲 (chanda) : 所縁を獲得したいと思う ; 何かを為したいと思う。すなわち : 見たい、聞きたい、嗅ぎたい、味わいたい、触りたい、知りたい、である。それは、貪、瞋、痴または無貪、無瞋、無痴の生起を願う。

この六個の心所は、一切の心と同時に生起する訳ではなく、ある種の心と同時に生起する。故に、雑心所と言う。七個の遍一切心心所及び、六個の雑心所はまた、通一切心所 (aññasamānā) とも言う。というのも、それらは、善法と不善法の二者において、共に生起する事が出来るが故に。

尋、思と作意の違い

尋は、心と心所を、目標に投入する（+役割を持つ）；作意は、心と心所を、目標に転向せしめる；思は、心と心所を、目標に向かわせる様、促す（+働きをする）。これらの間の違いについて、マハーガンダヨン長老は、ボート遊びの時を例にして、以下の様に、説明している：ボート遊びをする時、小さなボートには、それぞれ三人の人間が、乗り込む。一人は後ろに座り、一人は真中に座り、一人は前に座る。後ろの席に座っている漕ぎ手の選手には、二つの任務がある。すなわち、ボートの方向をコントロール（制御）する事と、ボートが前に進む様、漕ぐ事である；真中に座っている選手は、ボートをコントロール（制御）する事はなく、ただ、前へ前へと漕ぐだけである；前に座る選手は、ボートを前に向かって漕がなければならないだけでなく、終点に到着すれば、ゴールの作業をしなければならず、彼が一番忙しい。前に座る選手は、思の様であり、真中の選手は尋の様であり、後ろの選手は、作意の様である。この様に、作意は、相応する心と心所を、目標に向かって転向せしめ、尋は、作意の指示を受けて、心と心所を目標に投入せしめる。思が、最も忙しい。それはちょうど、大工の良き助手の様に、己自身の仕事をこなさねばならないだけでなく、同時にまた、その他の弟子（相応する心と心所）が仕事をする様にと、促さなければならない。禅修行者は、それらの各々の作用に鑑みて、智でもって、それらを識別しなければならない。

14 の不善心所

14 個の不善心所：四個の遍一切不善心心所、三個の貪因心所、四個の瞋因心所、二個の有行心所、一個の痴因心所である。

四個の遍一切不善心心所

- 1、痴（moha）：又の名を無明と言う。所縁の真実の本質を知らない事；錯誤。
- 2、無慙（ahirika）：悪行（duccarita）及び貪、瞋、痴等の不善法に対して、恥を知らない事。
- 3、無愧（anottappa）：悪行及び貪、瞋、痴等の不善法に対して、怖れを知らない事。
- 4、掉挙（uddhacca）：心の散乱、平静でない事、所縁において停止できない事。

三個の貪因心所

- 5、貪（lobha）：所縁を「私（我）」または「私の（＝私のもの）」として渴愛するか、または執取（＝執着して掴む）する；所縁に（+過剰に）欲求するか、または恋々とする；所縁を強く掴む。
- 6、邪見（ditthi）：所縁を常、楽、我、淨（美）であると信じる事：邪なる信（間違った信仰）。

7、我慢 (māna) : 心が自大で、傲慢で、突出したがる事。

解説

あなたが、31界の中の、有情と非有情を識別して、非有情は、ただ一組一組の究極色法に過ぎない事、また、諸々の有情は、ただ一組一組の究極名色法、五蘊 (khandha)、12処 (āyatana) または 18界 (dhātu) に過ぎないのだ、という事を知見する時、それはすなわち、名色分別智である。それらをただ、一組一組の、因縁法及び果報法であると知見する時、それは、縁摂受智である。

色法、名法、因縁法及び果報法は皆行法 (saṅkhāra dhamma) であり、皆無常 (anicca) である。というのも、それらは生起した後、即刻、壊滅するが故に；

それらは皆、苦 (dukkha) である。というのも、それらは常に生・滅の圧迫にさらされているが故に；

それらは皆、無我 (anatta) である。というのも、それらには、壊滅しない実質というものが無いが故に；

それらは皆、不浄 (asubha) である。というのも、それらは、美しくなく、また嫌悪すべきものであるが故に。

人が、諸行を無常、苦、無我、不浄として知見するならば、それは観智である。これらの知見は正見 (sammādiṭṭhi) であり、明智 (vijjāñāṇa) である。

もし、(+人に) これらの知見がない時、非有情をば金、銀、樹木、水、地、森、高山などに見做す時、または有情を男性、女性、人、有情、人類、天神、梵天などに見做す時、または彼(それ)らをば、常、楽、我、浄であると見做す時、その時、邪見と無明が生起する。

この事を《清浄道論》(第17章)では以下の様に言う：

Paramatthato avijjamānesu itthi purisādisu javati,
vijjamānespi khandhādisu na javatīti avijjā.

——「それは究極的には存在しない女性、男性などに向かって行き、究極的に存在する所の、諸々の蘊などには向かって行かない。故に、それは無明である。」

更に分かりやすく無明(痴)(+とは何か)を理解する為に、ここでは、二種類の我見(atta diṭṭhi)を説明する。すなわち：

- (一) 世間的な通称としての我 (loka samaññā atta、世間が共通に認める我見)
- (二) 外道が有する我見 (micchā diṭṭhi、atta diṭṭhi)

(一) 世間的な通称としての我：世人は、男性、女性、人、有情、天神、梵天、牛、動物等が存在している思っており、また、非有情を金、銀、田畑、家屋、樹木、土、森林、高山であると、見做している。外観の(+修習が)できる禅修行者であって、もし、彼が、非有情の四界を識別するならば、彼は、ただ極微な微粒子を見るだけである。すなわち彼は、色聚 (rūpa kalāpa) を見るのみである。もし、次に、これらの色聚を識別するならば、彼はただ、火界によって生じる所の、「時節生食素八法色聚」と「時節生声九法色聚」を見るだけである。この様な知見は、正しい。もし、それらを無常・苦・無我及び不浄であると知見するならば、この知見もまた、正しい。しかし、それらを金、銀と見做したり、金、銀として受け入れたならば、その知見は間違っている。すなわち、これは、世間的に共通に認知される所の我見である。

(二) 外道が有する我見はまた、二種類に、分類する事ができる。すなわち、至上の我 (parama atta diṭṭhi) 及び、霊魂的我 (jīva atta diṭṭhi) である。至上の我とは、すなわち、創造主がいて、この世界、及び、一切の有情を創造したのだ、と認める考えである。霊魂的我とは、すなわち、有情の中に一個の、創造された霊魂が存在する、という考えである。

痴と邪見：痴とは、31界の中の有情と非有情は、常、楽、我及び浄であると、錯誤する事である；邪見とは、31界の中の有情と非有情は、常、楽、我及び浄である、という見解を持つ事である。

四個の瞋因心所

8、瞋 (dosa)：速行心やで残虐な心；破壊する心。

9、嫉 (issā)：他人の財産、富、榮譽に嫉妬する。

10、慳 (macchariya)：己の財産、富を隠匿する；(+それらを)他人と享受する事が出来ない。

11、後悔 (kukkucca)：

i.己の造(ナ)した悪業を後悔する；または、すでに做(ナ)した悪行を後悔する。

ii.本来、為すべきである善業を、未だ造(ナ)していない事を後悔する；または、為すべきであるのに、なしていない善行に関して後悔する。

二個の有行心所

12、昏沈 (thīna)：心が軟弱で無力。愉快でなく、また熱意がない。

13、睡眠 (middha)：相応する心所が軟弱で無力。愉快でなく、また熱意がない。

一個の痴因心所

14、疑 (vicikicchā)、以下の八項目を懷疑する：

- i .真実の仏陀 (+の存在)。
- ii .真実の法 (同上)。
- iii .真実のサンガ (同上)
- iv .戒・定・慧の三学。
- v .過去世、すなわち、過去蘊。
- vi .未来世、すなわち、未来蘊。
- vii .過去世と未来世の二者のある事、すなわち、過去蘊と未来蘊。
- viii .縁起。すなわち、12 因縁。業力果報を含む。

25 個の美心所

25 個の美心所は以下の通りである：

- 19 個の遍一切美心心所 (sobhaṇa sādharma cetasika)
- 三個の離心所 (virati cetasika)
- 二個の無量心所 (appamaññā cetasika)
- 一個の慧根心所 (paññindriya cetasika)

19 個の遍一切美心心所

- 1、信 (saddhā)：上に述べた、疑心所の八項目において、懷疑がなく、仏陀の功德、法の功德、サンガの功德、戒・定・慧の三学、過去世、未来世、縁起を、深く信じる事。
- 2、念 (sati)：浮いて漂う瓢箪の様ではなく、水に沈んだ石の様である。それは、相応する心と心所をして、仏、法等の善所縁に、「沈み入ら」せしめる。心は安定して、所縁に覚醒し、所縁を忘れない。
- 3、慙 (hiri)：悪法と悪行に羞恥を覚える。
- 4、愧 (ottappa)：悪法と悪行に恐れを感じる。
- 5、無貪 (alobha)：心は「世間」(lokiya)の所縁に執着しない。すなわち、「私、私なもの」として執着しない。
- 6、無瞋 (adosa)：心が所縁に対して、粗暴でない事；破壊しない事。
- 7、中捨性 (tatramajjhataṭṭā)：相応する心及び心所が、所縁に対して適切 (+な状況を) 保持して偏向せず、我慢 (=傲慢等) と昏沈睡眠を離れる事。捨でもって、所縁に対処する事。
- 8、身軽安 (kāyapassaddhi)：諸々の心所が軽安である事。
- 9、心軽安 (cittapassaddhi)：心が軽安である事。
- 10、身軽安性 (kāyalahutā)：諸々の心所が軽安である事。

- 11、心軽安性 (cittalahutā) : 心の軽安。
- 12、身柔軟性 (kāyamudutā) : 諸々の心所が柔軟である事。
- 13、心柔軟性 (cittamudutā) : 心が柔軟である事。
- 14、身適業性 (kāyakammaññatā) : 諸々の心所が適業である事。
- 15、心適業性 (cittakammaññatā) : 心が適業である事。
- 16、身練達性 (kāyapāguññatā) : 諸々の心所が練達である事。
- 17、心練達性 (cittapāguññatā) : 心の練達。
- 18、身正直性 (kāyujukatā) : 諸々の心所が正直であり、虚偽的でなく、欺瞞的でない。欺瞞 (māyā) とは、己の悪行、過失を粉飾する事。虚偽 (sātheyya) とは、己自身にない品德、素養を顕示する事。
- 19、心正直性 (cittujukatā) : 心が正直である事。虚偽と欺瞞の無い事。

三個の離心所

- 20、正語 (sammāvāca) : 生きていく上で無関係な妄語、両舌、悪口、綺語の四悪語から遠く離れる ; 悪語を言わない。
- 21、正業 (sammākammanta) : 生きていく上で無関係な殺生、偷盗、邪淫の三身悪行から遠く離れる ; 身の悪行を為さない。
- 22、正命 (sammā - ājīva) : 生きていく上で関係のある (マ) 四悪語と三身悪行から遠く離れる ; 悪語を言わない、また身の悪行を造 (ナ) さない。

二個の無量心所

- 23、悲 (karuṇā) : 憐憫の心。痛苦を受難している衆生を所縁に取る ; 救済したいと思う (+心) 。
- 24、喜 (muditā) : 随喜。楽しい、愉快的な衆生を所縁に取る ; 嫉妬しない。

一個の慧根心所

25、慧根 (paññindriya) : すなわち、慧。究極法または四聖諦を、徹底的に如実知見する。慧は、また、智、無痴、正見、択法とも言う。四聖諦を審察する時、それが最も主要な (+役割を果たす) 為に、故に慧根と言う。

以上は、25 個の美心所である。禅修行者は、究極法の自性相 (sabhāva lakkaṇa) または作用 (rasa) に依って、それらを識別する事ができる。所以に、ある種の心所に關しては、その自性相と作用の両方について、言及した。



先に識別すべき名法

《殊勝義註》（Dhammasaṅgani - aṭṭhakathā）では、以下の様に言う：

‘Tasmā taṃ rūpaṃ ārammaṇaṃ katvā uppannaṃ vedanaṃ saññaṃ
saṅkhāre viññāṇaṅca idaṃ arūpanti paricchinditvā aniccādito passati.’

——色法を所縁として取る事によって生起する受、想、行、識という諸々の非色法を分析した後、彼はそれらを無常として観照する。」

上に述べた註釈の教えに従えば、名法の識別を開始する時、禅修行者は先に、色法を所縁に取る名法を識別しなければならない。禅修行者は、名法を所縁に取る名法の識別をする事も出来なくはないが、しかし、名業処の修習を開始したばかりの時、それらを識別（duppariggaha、摂受が困難）するのは、比較的困難である。

もう一点は：男性、女性、人間、有情、金、銀等の密集の概念を所縁とする、名法を識別する事は、可能である。ここでは、それらの概念を識別するのではなくて、概念を所縁として取る事によって生起する所の、究極名法を識別するのである。

六グループの定義

色法を所縁の違いによってグループに分類すると、合計六種類の所縁がある（+事が分かる）。すなわち：

- 1、色所縁。
- 2、声（=音）所縁。
- 3、香所縁。
- 4、味所縁。
- 5、触所縁。すなわち、地、火、風。
- 6、法所縁。すなわち、五浄色と 16 微細色。

色所縁を目標として取る名法は、色所縁グループ名法と呼ばれる。その他の名法は、また、類推して名付けられる（注 31）。

六グループのすべての名法は、識別されなければならない。次に、善速行を具備する心路過程名法は、善グループと呼ばれる：不善速行を具備する心路過程名法は、不善グループと呼ばれる。唯作速行心を具備する心路過程は、唯一、阿羅漢の心中にのみ出現するものであって、故に、この書では、それを解説しない。

注 31：《智慧の光》では、ある種のグループの名称について、伝統的な用法を用いていない。それは、パオ Sayadaw が、禅修行者の理解に利する為に用いた、指導内容に依る為である。

四随観 (anupassanā)

観禅の修行において、色法、名法、因と果を観照する時、もし、色法の観照から始める時、それはすなわち：

身随観念処 (kāyānupassanā satipaṭṭhāna) であり；

もし、受の観照から始める時、それはすなわち：

受随観念処 (vedanānupassanā satipaṭṭhāna) であり、

もし、識の観照から始める時、それはすなわち：

心随観念処 (cittānupassanā satipaṭṭhāna) であり、

もし、触の観照から始める時、それはすなわち：

法随観念処 (dhammānupassanā satipaṭṭhāna) である。

五蘊、または 12 処、または 18 界等の方式によって観禅の修習をするのは、法随観念処である。

受、識または触の識別から始める

《中部註》 (Majjhima - Aṭṭhakathā) は、以下の様に言う：

Tividho hi arūpakammaṭṭhānena abhiniveso phassavasena vedanāvasena cittavasenā'ti.

名法の識別に関する入門法は、以下の三種類ある。すなわち：

- 1、受 (vedanā) が明確な者は、受から識別を始める。
- 2、識 (viññāṇa) が明確な者は、識から識別を始める。
- 3、触 (phassa) が明確な者は、触から識別を始める。

受の識別から始める場合の教え：

Yassa vedanā pākaṭā hoti, so 'na kevalaṃ vedanāva uppajjati. Tāya saddhiṃ tadevārammaṇaṃ phusamāno phassopi uppajjati, sañjānanamānā saññāpi, cetayamānā cetanāpi, vijānanamānaṃ viññāṇampi uppajjatī'ti phassapañcamake - yeva pariggaṇhāti.

——「受」が明確な者は、触の五法を識別すべきである。それは、ただ受の生起に注意を払うだけでなく、同時にまた、以下の状況にも、注意を払うべきである（+という教えである）。すなわち：受と接触する所の、同一の所縁における触もまた、生起しつつあるが故に、それに対しても、同時に、注意を払うべきである：当該の所縁を標記する想もまた、生起しておりが故に、相応する法を促して、当該の所縁に向かわせる所

の、思もまた生起しており、当該の所縁を識知する所の識もまた、生起しつつある（＋が故に、同時に識別するべきである）。（《中部・根本 50 經篇註》）

識の識別から始める場合の教え：

Yassa viññāṇaṃ pākaṭāṃ hoti, so 'na kevalaṃ viññāṇameva uppajjati, tena saddhiṃ tadevārammaṇaṃ phusamāno phassopi uppajjati, anubhavamānā vedanāpi, sañjānanamānā saññāpi, cetayamānā cetanāpi uppajjati'ti phassapañcamakeyeva pariggaṇhāti.

——「識」が明確な者は、識の五法を識別するべきである。それは、ただ識の生起に注意を払うだけではなく、同時にまた、以下の状況にも、注意を払うべきである（＋という教えである）。すなわち：識と接触する所の、同一の所縁における触もまた、生起しつつあるが故に、それに対しても、同時に、注意を払うべきである：当該の所縁を体験する所の受もまた、生起するが故に、当該の所縁を標識する想もまた生起するが故に、相応する法を促して、当該の所縁に向かわせる所の、思もまた生起しつつある（＋が故に、同時に識別するべきである）。（《中部・根本 50 經篇註》）

触の識別から始める場合の教え：

Yassa phasso pākaṭo hoti, so 'na kevalaṃ phasso uppajjati, tena saddhiṃ tadevārammaṇaṃ anubhavamānā vedanāpi uppajjati, sañjānanamānā saññāpi, cetayamānā cetanāpi, vijānanamānaṃ viññāṇampi uppajjati'ti phassa - pañcamakeyeva pariggaṇhāti. （《迷惑氷消》 Vibhanga - aṭṭhakathā）

——「触」が明確な者は、触の五法を識別するべきである。それは、ただ触の生起に注意を払うだけではなく、同時にまた、以下の状況にも、注意を払うべきである（＋という教えである）。すなわち：（＋その時）同一の所縁を体験する所の触も生起しつつあり、当該の所縁を標記する想もまた、生起しつつあり、相応する法を促して、当該の所縁に向かわせる所の、思もまた生起しつつあり、当該の所縁を識知する所の識もまた、生起しつつある（＋が故に、同時に識別するべきである）。

ここにおいて、註釈は、触の五法（phassa pañcamaka）を解説しているが、すれはすなわち、触を主とした、触、受、想、思、識の五種類の名法（＋を言うのである）・・・というのも、それらは一切の心の中において、最も主要な構成要素であるからである。同じ一つの心識刹那（cittakhaṇa）において生起する所の、諸々の名法の中において、最も重要な触思（phassa cetanā）を識別する時にはまた、その他の主要（apadhāna）な、相応する所の名法、行蘊に属する所の一切の究極法をも含めて、識別しなければならない。上に述べた、註釈と疏鈔の教えに基づけば、触、または受、または識を、それぞれ名法を識別する修習の初めとする時、一個の心識刹那の中の触、または受、または

識を識別しさえすればよい、というのではなく、すべての、相応する所の、心と心所を識別しなければならない。この事は、仏陀が《相応部・六処品・不通解經》(Saṃyutta Saḷāyatana Vagga, Aparijānana Sutta)において、開示しているものである。

再度の色法の識別

触の五法を主とした名法を識別した後、禅修行者は、以下に述べる通りに、再度色法を識別すべきである。

So ime phassa pañcamaka kim nissitāti upadhārento vatthuṃ nissitā'ti pajānāti.

Vatthu nāma karajakāyo. So atthato bhūtāni ceva upādārūpāni ca.

——触の五法を主とする名法を識別した後、再度、これらの名法は、何によって生起するのかを審察すれば、彼は、それらは依処色 (vatthu rūpa) に依存して生起する事が、明確に分かる。依処色とはすなわち「所生身」(karajakāya) である。所生身とは、すなわち、種色 (bhūta rūpa) と所造色 (upādā rūpa) である。

この註釈の指示に基づけば、名法が依存する所の、依処色を識別するという事は、しかし、眼浄色等の依処色を識別するだけでよい、というのではなく、当該の依処色と同時に生起する所の種色と所造色、例えば、眼門にある 54 種類の真実色法及び、ある種の非真実色法もまた、識別しなければならない、という事である。

二門と所縁を同時に識別する

《殊勝義註》(Dhammasaṅgani atthakathā) では、以下の様に言う：

Tattha ekekaṃ ārammaṇaṃ dvīsu dvīsu dvāresu āpāthamāgacchati.

Rūpārammaṇañji cakkhupasādaṃ ghaṭṭetvā taṅkhaṇaññeva manodvāre

āpāthamāgacchati. Bhavaṅga calanassa paccayo hotīti attho.

Sadda gandha rasa phoṭṭhabba ārammaṇesupi eseva nayo.

——「五所縁の中の、一つひとつは、皆、二門に顕現する：色所縁が、眼浄色を打つ刹那、同時に意門にも顕現して、有分波動を引き起こす。声 (= 音)、香、味及び触所縁においても、その状況は類似している。」

ここでの註釈の定義によると：色、声 (= 音)、香、味、触の五所縁は、皆、同時に二つの門に顕現する：その内の一個は、すなわち、それぞれが相対する所の、眼、耳、鼻、舌、身の五門であり、もう一つはすなわち、意門である。故に、この五所縁グルー

ブを目標にする名法を識別する時、あなたは先に、同時に二門の識別をする修習を、実践しなければならない。

次に、《中部・各別經》(Anupada Sutta)及び、その註釈と疏鈔では、名法を識別する時、禅修行者は、依処色及び所縁を、同時に識別する必要がある、と言う・・・すなわち：名法は依処色に依存して生起する；名法は、所縁としての色法を、縁として取るのである。《各別經》の註釈は、シャーリプトラ尊者が「各別法観法」

(anupadadhamma vipassanā)によって、逐一、初禅等のジャーナ法を觀照する時(+)の様子について)述べている：

vatthārammaṇānaṃ pariggahitatāya

——彼は逐一、名法を觀照する事ができる。というのも、彼は、依処色及び所縁を、同時に識別したが故に。ここにおいて、依処とは、眼、耳、鼻、舌、身と意の六門をいう事が、知れるのである。

上に述べた、二つの項目の教えによれば、あなたが色所縁(色塵)を、眼門の目標として取り、その為に、それに従って、意門と、純意門心路過程の名法が生起する時、あなたは先に、同時に、眼浄色と有分透明界、すなわち、眼門と意門の二者に注意を払わねばならないし、その後において、一粒または、多くの粒の色聚の、好ましい(iṭṭha)か、または好ましくない(aniṭṭha)色彩を、識別しなければならない。この様にすれば、当該の色彩が、同時に、眼浄色と有分透明界(意門)を打つ(+のが了解できる)。その時、色所縁を目標にする、眼門と意門心路過程が、生起する。もし、前者の確定心

(votthapana)及び、後者の意門引転心(manodvārā vajjana)の確定作用に、如理作意が(yoniso manasikāra)具備されている場合、当該の所縁を、

(1)色彩、(2)色法、(3)無常、(4)苦、(5)無我または(6)不浄として確定する。この場合、生起した速行は善である。もし、不如理作意(ayoniso manasikāra)が伴う時、当該の色所縁を、常、樂、我、浄などと確定するが、生起する速行は、不善である。耳門、意門心路過程などもまた、概ね、上に述べた通りであるが、その差異は、(1)項の如理作意、すなわち：声(=音)所縁を音と見做し、香所縁を匂いと見做す、という事である。

同様の理論でもって、声所縁(音塵)を目標とする名法を識別する時、あなたは先に、同時に、耳浄色と有分透明界(意門)の二者を識別し、その後、声所縁を識別しなければならない。

香所縁(香塵)を目標とする名法を識別する時、あなたは先に、同時に、鼻浄色と有分透明界(意門)の二者を識別し、その後、香所縁を識別しなければならない。

味所縁（味塵）を目標とする名法を識別する時、あなたは先に、同時に、舌浄色と有分透明界（意門）の二者を識別し、その後、味所縁を識別しなければならない。

触所縁（触塵）を目標とする名法を識別する時、あなたは先に、同時に、身浄色と有分透明界（意門）の二者を識別し、その後、一粒のまたは多くの粒の色聚の中の、地、水または風界、すなわち、触所縁を識別しなければならない。

法所縁に属する所の、色法を縁に取る名法を、識別する場合、あなたは同時に、有分透明界（意門）及び、任意のどれか一つの、法所縁グループの中の、色法を識別しなければならない。

遍相などの概念を目標とする、法所縁グループの名法を識別する時、あなたは同時に、有分透明界（意門）及び、当該の概念を、識別しなければならない。

眼門等の五門心路過程は、ただ一回のみ生起し、その後、多くの意門心路過程が生起する。そして、二つの心路過程毎の間には、多くの「有分心」が生起する。一番目の意門心路過程の名は「彼随起意門心路過程」（*tadanuvattaka manodvāra vīthi*）と言う。二番目から始まる所の、意門心路過程の名は「純意門心路過程」（*suddha manodvāra vīthi*）と言う。法所縁を目標に取る、意門心路過程はまた、純意門心路過程と言う。《清浄道論》の教えに基づけば、あなたはこれらの心路過程の、一つひとつの心識刹那のすべての名法を、識別しなければならない。

《泡沫比喩經註》（*Phenapiṇḍūpama Sutta Com.*）は以下の様に言う：一瞬の瞬きにおいて、または一瞬の稲妻という、極めて短い時間の中において、心は、一万億回、生・滅する事ができる。すなわち、多くの心路過程が生起するのである。それらの中において、あなたは、その中の幾つかのものを、識別することができるかもしれない・・・その他のものは、識別し難い。あれら、あなたが識別する事が出来る所の、心路過程において、あなたは、四種類の名密集（*nāma ghana*）を、識別し、また、看破しなければならない。

四種類の名密集の看破

色業処の章では、三種類の色密集（*rūpa ghana*）について、述べた。

ここでは、四種類の名密集について、述べる。

すなわち：

- 1、相続密集（*santati ghana*）
- 2、構成密集（*samūha ghana*）
- 3、作用密集（*kicca ghana*）
- 4、所縁密集（*ārammaṇa ghana*）である。

眼門心路過程を例にとると、もし、あなたが、その中の諸々の心を：
「これは五門引転」、「これは眼識」、「これは領受」、「これは推度」
等と、如実に識別する事が出来るならば、あなたは、名相続密集を看破したのだ、と言
える。そうでないならば、それらは（=あなたの認識は）名相続密集によって、覆い隠
されているのだと言える。

名法は、心の定法 (*citta niyāma*) に基づいて生起する。一つひとつの心識刹那の
中には、それらは、一組心と心所として、出現する。これらの組み合わせは、相応法
(*sampayutta dhamma*)、または名聚 (*nāma kalāpa*) と言う。一つひとつの
心識刹那の中には、最低で八個の名法がある。例えば、眼識の刹那の中には、一個の眼
識と、七個の遍一切心心所、合計 8 個の名法がある。もし、あなたが一個の心識刹那
の中の、一つひとつの名法を：

「これは触」、「これは受」、「これは想」、「これは思」、「これは識」
等と識別する事が出来るならば、あなたは已に名構成密集を看破した事になる。
そうでないならば、あなたは未だ、名構成密集に覆われていると言える。

相続密集と構成密集を看破したものの、未だ密集の作用を看破していないのであれば、
あなたは引き続き、作用密集を看破する修習を続けなければならない。例えば：「触」
には、所縁と識を連結する作用があり、「(楽) 受」には、相応法を引き上げる作用が
あり、「想」には、所縁に標記するか、または、再度「これは (+前のと) 同じもので
ある」と標記する作用があり、「思」には、構成する作用がある、など等である。もし、
あなたが一つひとつの作用を識別する事ができるならば、あなたはすでに、作用密集を
看破した事になる。そうでないならば、あなたは未だ、作用密集に覆い隠されている、
と言える。

所縁密集に関して、《大疏鈔》の中において、以下の様に言う：

**Tattha sārammaṇadharmānaṃ satipi ārammaṇakaraṇabhede
ekato gayhamānā ārammaṇa ghanatāca.**

この定義に基づけば、ただ「有所縁法」（所縁を取る事ができる法、*sārammaṇa
dhamma*）という名の名法だけが、所縁密集となる事ができる。仏陀は、究極法は、
二種類に分類する事が出来る、と述べる：

- 1、有所縁法（所縁を取る事の出来る法）に属する心と心所。
- 2、無所縁法 (*anārammaṇa dhamma*) に属する色法と、無為涅槃界 (*asaṅkhata
nibbāna dhātu*)。所縁を取る事の出来る法とは、有所縁法であり、所縁を取る事が出
来ない法は、無所縁法である。

所縁密集は、観禅の修習をする時に初めて、看破する事の出来る、名密集である。
観禅における、名法は二種類ある：

1、観照される名法。

2、智を導き手として、正に観の修習をしている最中の名法。

名法の観の修習にも相続、構成、および作用という三種類の密集があるが、しかし、それら三者は、一個の名称しかない。すなわち：所縁密集である。

あなたは、観照における名法及び観の修習における名法の二者の相続密集、構成密集、及び作用密集を看破する必要がある。その理由はすなわち《清浄道論》（第 20 章）に言う様に

： *ñātañca ñāṇañca ubhopi vipassati* .—— 「彼は所知と智の二者を観照する」

であるが故に。

七非色観法 (*arūpasattaka*) の修習をする時、及び、壊滅随観智等の、比較的高度なレベルの、観禅の段階において、あなたは「所知」 (*ñāta*) と「智」 (*ñāṇa*) の二者を、観照しなければならない。所知とは、苦諦に属する所の五蘊と、集諦に属する所の、12 縁起支の事である；智とはすなわち、観智を導き手とする、観の修習における名法である。

凡夫と有学聖者 (*sekha puggala*) に関しては、観智を導き手とする観の修習の名法は、意門大善速行心路過程 (*manodvārika mahā kusala javana vīthi*) である。それは、12 個の名法を含む所の、一個の意門引転と、その一つひとつにおいて、34 または、32 個の名法を有する、七個の速行である。未だ観禅が成熟していない段階において、彼所縁は生起する可能性があるが、しかし、壊滅随観智等の強力な観智 (*balava ñāṇa*) の段階においてであれば、彼所縁は生起しない。

色法と名法を識別して、色密集を看破できて初めて、究極智 (*paramattha ñāṇa*) を証得する事ができる；無我智を証得して初めて、道智 (*magga ñāṇa*) 及び果智 (*phala ñāṇa*) を、証得する事ができる。

《清浄道論》の中において、名前を、所知及び智と呼ばれる所の、行法の三相を、観想する事が出来て初めて、また、無常随観智、苦随観智と無我随観智の三者が完全に成熟して初めて、道智を証得する事が出来る、と言う。

《迷惑氷消》及び《清浄道論》では、以下の様に言う：

*Nānādhātuyo vinibbhujitvā, ghanavinibbhoge kate anatta - lakkhaṇaṃ
yāthāvasarasato upaṭṭhāti.*

—— 「諸々の界を分別する事を通して、『密集を分解した』 (*ghanavinibbhoga*)、無我相 (*anattalakkhaṇa*) はそれに依って、その真実なる本性が顕現する。」

諸々の密集を看破して後、初めて、無我智を証得する事ができるが故に、あなたは更に一歩進んで、色法と名法の相 (lakkhaṇa)、作用 (rasa)、現起 (現象) (paccupaṭṭhāna) と近因 (padaṭṭhāna) を識別しなければならない。

果報は斯くの如く、速行は改変する事ができる

「自性可喜所縁」 (= 自性的な喜ばしい所縁) (sabhāva iṭṭhārammaṇa) と「自性非常可喜所縁」 (= 自性的な非常に喜ばしい所縁) (sabhāva ati iṭṭhārammaṇa) は、過去の善業が原因である。所縁が喜ばしい時、引転、確定と速行以外の、その他の路心は、大果報心または無因果報心である。所縁が非常に喜ばしい時、例えば、仏陀の場合、五種類の喜俱彼所縁のみが、生起する。

「自性不可喜所縁」 (= 自性的な喜ばしくない所縁) (sabhāva aniṭṭhārammāṇa) は、過去の悪業が原因である。その時に生起する眼識等の五識、領受、推度及び彼所縁は皆「無因不善果報心」 (ahetuka akusala vipāka citta) であり、故に彼所縁に出現するのは「不善果報捨俱推度」 (akusala vipāka upekkhā santīraṇa) 以外に有り得ない。

所縁が喜ばしいもの、非常に喜ばしいもの、または喜ばしくないものであっても、もし、如理作意するならば、善速行は生起する。もし、如理作意をしないならば、不善速行が生起する。

信慧グループ名法 (saddhā - paññā group)

教学の利の為に (+ 説明を加えるならば)、もし、一個の心識刹那の中に、以下の 34 個の名法が生起したならば、すなわち、その名を「信慧グループ」名法と言う。

識	1
通一切心所	13
通一切美心心所	19
慧根心所	1

合計	34

もし、結生心が喜俱の三因者である場合、彼の結生、有分と死亡心は、必ず、信慧グループである。

ジャーナ名法の識別

禅修行者は、眼、耳、鼻、舌、身と意の六種類の心路過程の中の、すべての名法を、識別しなければならない。この六者の中において、先に、意門心路過程を識別するのが、比較的簡単である。というのも、それは比較的、種類が少ない路心であるが故に。止行者に関しては、先に、ジャーナ心路過程 (jhāna samāpatti vīthi) の名法を識別するのが、比較的簡単である。というのも、止禅の修習の段階において、彼はすでに禅支を識別しているが故に。

表 7-2 法所縁グループー意門ジャーナ心路過程

意門が依存する色	54	54	54	54	54	54
	意門引転	遍作	近行	随順	種姓	ジャーナ速行(多数回)
初禅	12	34	34	34	34	34
第二禅	12	34	34	34	34	32(尋と伺を除く)
第三禅	12	34	34	34	34	31(喜を除く)
第四禅	12	33	33	33	33	31(楽に代って捨)

意門引転 (manodvārāvajjana) は、白遍似相等の所縁を、省察する唯作心である。遍作 (parikamma) は欲界善心であり、予備的な作業を執行して、ジャーナ速行を生起せしめる。近行 (upacāra) は、ジャーナ速行に近い、大善速行心 (mahākusala javana citta) である。随順 (anuloma) は、大善速行心であり、ジャーナ速行が、正確に生起する様調整する。種姓 (gotrabhū) は、欲界種姓を切断する、大善速行心である。ジャーナ速行 (jhāna javana) は、色界善速行心 (rūpavacara kusala javana citta) である。

名法の識別を修習する時、禅修行者は、名前による概念、例えば「遍作」、「近行」、「随順」、「種姓」などを、知ることは出来ず、ただ、それらの各々の速行心の、本性を知るだけである。凡夫と有学聖者 (ソータパナ、サターガミ、アナーガミ) にとって、遍作、近行、随順と種姓は、大善速行である；阿羅漢にとって、それらは大唯作速行 (mahākiriya javana) である。利慧の禅修行者にとって、遍作は生起せず、ただ近行、随順、種姓のみが生起する。《アビダンマ論註》では以下の様に言う：レベルの高いジャーナ (すなわち、第二禅、第三禅) の遍作、近行、随順と種姓の中において、尋と伺は、それらと相応するが、しかし、第四禅の前においては、喜は存在しない、と。

尋、伺等の禪支は、ジャーナと呼び、ジャーナと相応する心と心所は、「ジャーナ相応法」(jhāna sampayutta dhamma)と呼ぶ。ジャーナ速行の中の、すべての名法は、ジャーナ名法と呼ぶ。非想非非想処禪を除いて、禪修行者はすべての、彼が已に証得した所の、ジャーナの名法(注 32)を、識別しなければならない。すなわち：安般念初禪は、第四禪まで。白骨觀の初禪：地、水、火、風、褐色、黄色、赤、白、光明。虚空 10 遍は、初禪から第四禪まで。前の九遍を基礎とする八定：慈、悲、喜の三無量心の初禪から第三禪、捨無量心第四禪。不淨觀は、初禪。

通常、ジャーナは似相のみを、所縁として取る。安般念においては、ジャーナと、ジャーナ相応の名法は、安般念似相を、所縁として取る；
白骨觀においては、白骨似相が所縁となる；
白遍禪においては、白遍似相が所縁となる；
慈心禪の所縁は、有情の概念である；
不淨觀の似相は、不淨なる死体の似相であるか？(マ)。

注 32：《清淨道論》第 18 章：この(見清淨)を成就したいと思う者で、もし彼が、止行者である場合、彼は、どれか一つの色界禪、または無色界禪から出定して(非想非非想処を除く)、その後、相(特徴)、作用等に基づいて、尋・伺等の諸々の禪支と、それらと相応する所の、法を識別しなければならない。このレベルまで修習したならば、彼は、それらをすべて「名」(nāma)として、識別しなければならない。というのも、それらは所縁に「向かう」(namana)が故に。

安般念の初禪名法の識別を例に説明する：まず、禪修行者は、安般念の初禪に、入らねばならない。禪定から出て、その後、彼は、有分透明界及び、安般似相の二者を、識別しなければならない(この時、修行者は、ジャーナから出たばかりであり、故に、安般似相は、未だ存在する)。当該の安般似相が、有分透明界に出現する時、五禪支は、多数回、生起する。まず先に、一つひとつの心識刹那の中の、すべての禪支を識別できる様になるまで、継続して、何度も、この五禪支を、識別する。もし、(+修習に)満足できない場合、再度、初禪に入り、その後、満足するまで、上に述べた手順を、何度も繰り返す。その後、識、受、または触の三個の内の、どれかを始まりとする、識別方法の一つを選び、徐々に、一つひとつの、心識刹那の中の、すべてのジャーナ相応法を、識別する。

たとえば、識から始めるならば、(ただ識だけを見て)識が多くの回数、生起するのを見る事ができる様になるまで、修習する。成功したならば、徐々に、識別する所の、識の名法の数を、増やしていく。すなわち、三個の名法の識別、四個の名法の識別等な

ど、連続して、多くの名法の、数を見ることができるようになるまで、修習する：（+修習して見る事の出来る名法とは）意門引転の中において生起する所の 12 個の名法、遍作、近行、随順、種姓とジャーナ速行における、一つひとつの刹那の中に生起する所の 34 個の名法（+などである）。

ここにおいて、安般似相を所縁として取る所の、初禅 34 名法を列挙する：

1、識：疏鈔の解説によると：‘Vijānanam ārammaṇassa upaladdhi’

——「（所縁を）得る事が出来るのを、識知と言う」

故に、この識とは、安般似相を「擁する」のである。

2、触：

触の特徴は、安般似相に接触する事である；作用は、安般似相と識を「繋ぐ」のである。

3、受：

樂受。安般似相の喜ばしさを体験する。

（以下の名法の特徴などは、「52 心所」の項において、解説したのと同じである。
所縁が安般似相になっているが、他（+の点は）は、同じである）

4、想、5、思、6、一境性、7、命根

8、作意、9、尋、10、伺、11、勝解、

12、精進、13、喜、14、欲

15、信、16、念、17、慙。

18、愧。19、無貪、20、無瞋。

21、中捨性、22、身軽安、23、心軽安。

24、身軽快性。25、心軽快性。26、身柔軟性。

27、心柔軟性。28、身適応性。29、心適応性。

30、身練達性。31、心練達性。32、身正直性。

33、心正直性。34、慧。

意門引転の中の 12 個の名法は、上に述べた 34 個の、前の 12 個であり、すなわち、識から精進までである。

《清浄道論》（第 18 章）は、これらのジャーナ及び、ジャーナ相応法の、相、作用、現起（現象）と近因によって、それらを識別するべきである、と言う。その後には：

Pariggahetvā sabbampetam ārammaṇābhimukhaṃ namato
nanaṃaṅṅhena nāmantī vavatthapetaḅbaṃ

——「これが出来た後に、彼はそれらをすべて、『名』として、識別しなければならない。というのも、それは所縁に『向かう』が故に。」

《清浄道論》（第 18 章）は、更に進んで、如何にして修習するのかを、以下の様に言う：

Tato yathā nāma puriso anto gehe sapparāṃ disvā taṃ anubandhamāno tassa āsayarāṃ passati, evameva ayampi yogāvacaro taṃ nāmarāṃ upaparikkhanto. ‘Idarāṃ namarāṃ kiṃ nissāya pavattatī’ti pariyesamāno tassa nisayarāṃ hadayarūparāṃ passati.

Tato hadayarūpassa nissayabhūtāni, bhūtanissitāni ca sesupādāyā rūpānīti rūparāṃ pariggaṇhāti. So sabbampetarāṃ ruppanato rūpanti vavatthapeti.

Tato namanalakkhaṇarāṃ nāmarāṃ ruppanalakkhaṇarāṃ rūpanti saṅkhepato nāmarūparāṃ vavatthapeti.

——「その後、一人の、部屋の中で、蛇を見つけた人間が、蛇について行けば、蛇の住居を見つける事ができる様に、同様に、彼はそれ（名法）は、何に依存して、生起するのかを追跡して、それは、心色に依存するのだ、と知見する。その後、彼は再度、心色が依存する所の四界と、その他の、この四界に依存して生起する所の、所造色を識別する。彼は、これら一切を、『色』（rūpa）として識別する。というのも、それは不断に（冷たさ等の）変化の干渉（ruppana）を、受けるが為に。その後、彼は再度、所縁の相に向かう所の、名法及び、干渉を受ける所の、相の色法を『名色』（nāma rūpa）として、識別する」

上に述べた定義によれば、すでにジャーナ名法を識別した禅修行者は、必ずや、名法と色法の二者を、識別しなければならない。



意門善速行心路過程の識別

ジャーナ名法を識別した後、禅修行者は必ずや、更に一步進んで、色法を所縁として取る名法を識別しなければならない。これらの名法の中において、先に、法所縁に属する色法を所縁として取る所の、意門心路過程を識別するのが比較的容易である。法所縁に属する色法とは、五浄色と 16 微細色であり、それらの中において、11 種類は真実色法であり、10 種類は非真実色法である。一つひとつの色法を所縁として取る所の、名法を識別しなければならない。もし、意門引転の確定作用が、如理作意を擁するのであれば、善速行は生起するが、反対に、もし不如理作意であれば、不善速行が生起する。

実修の方法

ここで、眼浄色を所縁に取る所の、意門善速行心路過程を、識別する方法を例にして、説明する。先に有分透明界（意門）を識別し、その後に眼浄色を所縁として取る。眼浄色が有分透明界（意門）において、出現したならば、それはすなわち、有分透明界（意門）に明晰に出現した時（+であるが）、意門心路過程は生起する。

もし、意門引転が、眼浄色を

- (1) 眼浄色；
- (2) ただの色法に過ぎない；
- (3) 無常である。眼浄色の生・滅を所縁として取る；
- (4) 苦である。眼浄色の、不断に生・滅の圧迫を受ける所の相を所縁として取る；
- (5) 無我である。眼浄色の中において、壊滅しない実質的な存在がない事を所縁とする；または
- (6) 不浄である。眼浄色の不浄（たとえば、臭いと混在している）を所縁する。これはすなわち、如理作意 (*yoniso manasikāra*) であって、故に、善速行は、それに随って生起する。

この六種類の如理作意の中において、禅修行者は先に第一項目、すなわち、眼浄色をば、眼浄色の意門心路過程として、識知しなければならない。識、または触、または受から、識別を開始する。

もし、先に識の識別から始めるならば、連続して多くの回数、識が、意門引転、速行（7回）と彼所縁（二回）において出現するのを、見る事が出来る様になるまで、修習しなければならない。その後に、逐一、識別する名法の数を増やして行き、最後には、一つひとつの心識刹那の中のすべての名法を、同時に識別できる様になるまで、修行する。たとえば：意門引転の 12 個の名法、速行の 34 個の名法及び彼所縁の 34 個の名法である。速行と彼所縁の中には：

- 1、ある時には、智 (ñāṇa) と喜 (pīti) の二者が共にあるが、これは喜俱智相応である。
- 2、ある時には智があるが、喜はない。捨俱智相応である。
- 3、ある時には、喜があり、智がないが、これは喜俱智不相応である。
- 4、ある時には、喜もなく、智もないが、これは捨俱智不相応である。

(+上に述べた所の) この四種類を逐一、識別する。その他の如理作意についても、同様の方法を用いて、この四種類を、識別する。一つひとつの種類毎にまた、「有行」(saṅkhārika、唆しを伴う) 及び「無行」(asaṅkhārika、唆しを伴わない) の、二種類がある。故に、合計、八種類の大善心がある事になる(阿羅漢の名相続流の中において、生起する所の大唯作心にもまた、この八種類が存在している)。有行であろうと、無行であろうと、これらの心と心所の数に、変化がない為、故に、この書においては、この四種類を列記した。もし、所縁が明晰であれば、彼所縁は生起する；所縁が不鮮明である時、彼所縁は生起しない。

ある種の教えでは、いまだ成熟していない観禅の段階において、彼所縁は「観禅善速行」(vipassanā kusala javana、すなわち、無常・苦・無我及び不浄を観照する速行心) の後に生起する、と言う。もう一つの教えでは、彼所縁は、観禅速行の後に生起することはない、と言うが、しかし、これは、強力な観禅の段階 (balava vipassanā ñāṇa) について、述べたものである。



表 7-3 : 眞実色法を所縁として取る意門善速行心路過程

意門 54 色		意門 54 色	意門 54 色		弁識四種
意門引転		速行 (7X)	有因 彼所縁 (2X)	無因 彼所縁 (2X)	
1. 眼浄色	12	34	34	12/11	喜俱智相応
	12	33	33	11/11	捨俱智相応
	12	33	33	12/11	喜俱智不相応
	12	32	32	11/11	捨俱智不相応
2. 色法	12	34	34	12/11	喜俱智相応
	12	33	33	11/11	捨俱智相応
	12	33	33	12/11	喜俱智不相応
	12	32	32	11/11	捨俱智不相応
3. 無常	12	34	34	12/11	喜俱智相応
	12	33	33	11/11	捨俱智相応
	12	33	33	12/11	喜俱智不相応
	12	32	32	11/11	捨俱智不相応
4. 苦	12	34	34	12/11	喜俱智相応
	12	33	33	11/11	捨俱智相応
	12	33	33	12/11	喜俱智不相応
	12	32	32	11/11	捨俱智不相応
5. 無我	12	34	34	12/11	喜俱智相応
	12	33	33	11/11	捨俱智相応
	12	33	33	12/11	喜俱智不相応
	12	32	32	11/11	捨俱智不相応
6. 不浄	12	34	34	12/11	喜俱智相応
	12	33	33	11/11	捨俱智相応
	12	33	33	12/11	喜俱智不相応
	12	32	32	11/11	捨俱智不相応

真実色法は、11 種類ある：

- (1) 眼浄色；(2) 耳浄色；(3) 鼻浄色；
- (4) 舌浄色；(5) 身浄色；(6) 水界；
- (7) 女根色；(8) 男根色；(9) 心所依処色；
- (10) 命根色；(11) 食素。

同様の方法を用いて、この 11 種類の真実色法を所縁に取る名法を識別する。

性根色を内観 (*ajjhata*) する時、男性の禅修行者は、ただ男根色を識別し、女性の禅修行者はただ女根色を識別する。外観を修習する時は、男根色と女根色の二者を識別する事ができる。

10 種類の非真実法 (マ) を所縁として取る時、それらの無常・苦・無我、不浄の、四つの相を観じてはならない。もし、非真実色法を無常を観じようとしても、それをば無常と見做す所の「観禅速行心路過程」 (*vipassanā javana vīthi*) は、生起しない。苦・無我及び不浄についても同様である。こうした事から、ただ二種類の方式でもって、一つひとつの種類毎に、非真実色法を観ずるべきである。例えば、空界 (*ākāsa dhātu*) を：(1) 空界；(2) 色法 と見做す等である。その後、それを空界または色法と見做す、四種類の心と心所を組み合わせる。すなわち、喜と智である。



表 7-4 : 非真実色法を所縁として取る意門善速行心路過程

意門 54 色		意門 54 色	意門 54 色	
意門引転		速行 (7X)	有因 彼所縁 (2X)	無因 彼所縁 (2X)
1. 空界	12	34	34	12/11
	12	33	33	11/11
	12	33	33	12/11
	12	32	32	11/11
2. 色法	12	34	34	12/11
	12	33	33	11/11
	12	33	33	12/11
	12	32	32	11/11

非真実色法は 10 種類ある；

(1) 空界；(2) 身表；(3) 語表；(4) 色軽快性；(5) 色柔軟性；
 (6) 色適応性；(7) 色積集；(8) 色相続；(9) 色老性；(10) 色無常
 同様の方法を用いて、この 10 種類の非真実色法を所縁として取る、名法を識別する。

禅修行者が、第一期の胎児の色法を、識別する事が出来る時にのみ初めて、色集積を所縁とする名法を、識別する事ができる。非真実色法を識別する時、先に、同一の一粒の色聚の中において生起する所の心生色、または時節生色、または食生色を識別（+する事を通）して、究極色法を知見する事に、至るべきであり、その後、観じようとしている所の、非真実色法を所縁として取る様にする。その理由は、色法はグループを成して（すなわち、色聚）生起するが故に。当該の色法が、有分透明界（意門）に出現する時、それを所縁として取る所の名法を、識別する。

五門善速行心路過程の識別

法所縁に属する所の、色法を所縁として取る名法を識別した後、禅修行者は次に進んで、色所縁等の五門所縁を所縁として取る、名法を識別しなければならない。

色所縁の識別方法

先に、眼浄色と有分透明界（意門）を同時に識別する。その後には一粒または一群の色聚の色所縁（色彩）を識別する。当該の色所縁が、同時に、眼浄色（眼門）と有分透明界（意門）を打つとき、[すなわち：眼浄色と有分透明界（意門）に同時に顕現する]、一個の眼門心路過程と、当該の色所縁を所縁として取る所の、多くの数の、意門心路過程が、引き続き、生起する。二個の心路過程毎の間には、多くの有分心が存在する。

もし、心路過程の中の五門引転、確定または意門引転が、それをば色所縁であると確定する時、それはすなわち、如理作意であり、善速行は生起する。眼門心路過程は、ただ色所縁を色彩として識知する事が出来るだけであって、その後には生起する所の、意門心路過程が、如理作意によって、色所縁を色法、無常・苦・無我、不浄であると識知する様には、識知できない。逐一、この六種類の方式でもって、色所縁を作意し、その後、それを因にして生じる所の、名法を識別する。

もし、識から名法の識別を始めるのであれば、先に、一つひとつの心識刹那の中の識、すなわち、眼門心路過程の中の、七種類の路心：五門引転、眼識、領受、推度、確定、速行（7個）、彼所縁（2個）及び意門心路過程の中の三種類の路心：意門引転、速行（7個）及び彼所縁（2個）を、徹底的に理解出来るまで、修行しておかねばならない。

一つひとつの、路心の中の識を、連続的に見る事出来る様になるまで、上に述べた（+修習の）手順を、何度も繰り返し（+修行する）。その後には、順次、同時に識別する名法の数を増やして行く。一つから二つ、三個、四個等・・・、最終的には、一つひとつの、心識刹那の中の、すべての名法を、同時に見る事が出来る様にする。触または、受の識別から始める場合もまた、同様である。もし、成功しない場合、《清浄道論》の教えに従って、何度も色法を識別する。この様にすれば、名法は自動的に明確になる。



表 7-5 : 五門善速行心路過程

眼門心路過程								意門心路過程				
意門	眼門	意門	意門	意門	意門	意門	意門	意門	意門	意門	意門	
54 色	54 色	54 色	54 色	54 色	54 色	54 色	54 色	54 色	54 色	54 色	54 色	
五門轉向	眼識	領受	推度	確定	速行 (7X)	有因彼所緣 (2X)	無因彼所緣 (2X)	有分	意門轉向	速行 (7X)	有因彼所緣 (2X)	無因彼所緣 (2X)
(1)色所緣を色彩としてみなす			(1)色所緣を色彩としてみなす						(1)色所緣を色彩としてみなす			
11	8	11	12	12	34	34	12/11	34	12	34	34	12/11
11	8	11	11	12	33	33	11/11	34	12	33	33	11/11
11	8	11	12	12	33	33	12/11	34	12	33	33	12/11
11	8	11	11	12	32	32	11/11	34	12	32	32	11/11
	識 ↓	識 ↓	識 ↓	識 ↓				(2) 色法		34/33/33/32	34/33/33/32	12/11
								(3) 無常		34/33/33/32	34/33/33/32	12/11
								(4) 苦		34/33/33/32	34/33/33/32	12/11
								(5) 無我		34/33/33/32	34/33/33/32	12/11
								(6) 不淨		34/33/33/32	34/33/33/32	12/11

表 7-6 : 心と心所の数

	五門引転	眼識	領受	推度	確定
	11	8	11	11(12)	12
1	識	識	識	識	識
2	触	触	触	触	触
3	受	受	受	受	受
4	想	想	想	想	想
5	思	思	思	思	思
6	一境性	一境性	一境性	一境性	一境性
7	命根	命根	命根	命根	命根
8	作意	作意	作意	作意	作意
9	尋		尋	尋	尋
10	伺		伺	伺	伺
11	勝解		勝解	勝解	勝解
12				(喜)	精進

五門引転： 必ず 11 個の名法を有する。必ず捨俱（捨受）である。

眼識： 必ず 8 個の名法を有する。必ず捨俱である。

領受： 必ず 11 個の名法を有する。必ず捨俱である。

推度： もし、喜俱である場合、12 個の名法を有する。もし、捨俱である場合、ただ 11 個の名法しかない（喜はない）。

確定： 必ず 12 個の名法を有する。必ず捨俱である。

速行： i = 喜俱智相応である場合、34 個の名法を有する（樂受を有する）。すなわち、信慧グループである。

ii = もし、捨俱智相応である場合、33 個の名法がある（喜はない）。

iii = もし、喜俱智不相応である場合、33 個の名法がある。

iv = もし、捨俱智不相応の場合、32 個の名法がある。

彼所縁： 速行と同じく、四種類ある。

意門引転： 確定と同じ。

推度： その多くは、速行及び彼所縁の中の受と同じ。

これらの心路過程の中において、眼識名法は、眼依処色 (*cakkhu vatthu rūpa*、すなわち：眼浄色) に依存して生起する。その他の名法は、皆心所依処色に依存して生起する。經における教法によると、例えば、《根本 50 經篇註》の中では、以下の様に言う：

Vatthu nāma karajakāyo ... atthato bhūtāni ceva upādārūpāni ca.

——「依処色とは、すなわち所生身であり・・・すなわち種色及び所造色である。」

禅修行者は、色法を、その密集が看破できるまで識別する必要があり、その為、「依処色」にかかわる提言のある時、それはすでに、当該の書 (+に記載された所) の、種色と所造色も含まれる、という事である。名色分別智の段階において、見える限りの非真実色法を、識別しなければならない。観禅の段階になって初めて、非真実色法 (+の識別を) 捨てるのである。

有分心の 34 個の名法は、結生心喜俱の三因者 (*tihetuka*) について、述べたものである。もし、禅修行者が、結生心捨俱の三因者であるならば、その有分心の名法はただ、33 個しかない。有分心の所縁は、前の一世界の臨終速行心 (*maraṇasanna javana*) の所縁であり、すなわち：業、業相及び趣相の三者の内の一つである。有分心の過去の所縁 (前世臨終の時の所縁) を、正確に識別出来て初めて、彼は、現在の心路過程の間 (+に出現する所) の有分心を識別することができる。名法の識別を開始する段階においては、それはひとまず、横においておく。

声 (=音、以下同様) 所縁グループの識別方法

まず、耳浄色と有分透明界 (意門) を同時に、識別する。その後に音を聞く。逐一、六種類の方式で音を作意する。すなわち、それを (1) 音声、(2) 色法、(3) 無常、(4) 苦、(5) 無我、(6) 不浄であると、見做すのである。色所縁グループと同じく、一つひとつの種類毎の作意において、四種類の心を識別する。すなわち、喜と智があるかどうかを、識別するのである。

香所縁グループの識別方法

先に、鼻浄色と有分透明界 (意門) を同時に識別し、その後に、一粒または多くの粒の色聚の匂いを識別する。その他の識別法は、上に述べた通りである。

味所縁グループの識別方法

先に、舌浄色と有分透明界 (意門) を同時に識別し、その後に、一粒または多くの粒の色聚の味を識別する。その他の識別法は、上に述べた通りである。

触所縁グループの識別方法

先に、身浄色と有分透明界（意門）を同時に識別し、その後、最も身浄色に近い所の、一粒または多くの粒の色聚の中の地界、または火界、または風界を識別する。その他の識別法は、上に述べた通りである。

触所縁グループの中で、もし、触所縁が喜ばしい (*iṭṭha*) ものであれば、身識 (*kāyaviññāṇa*) には、楽受が存在する。反対に、もし、触所縁が喜ばしいものでない (*aniṭṭha*) 時、身識には苦受 (*dukkha vedanā*) が存在する。

この段階において、禅修行者は、脳内に、智慧があるかどうかを、己自身で体験する事ができる。《アビダンマ》によると、脳は一塊の色聚にしか過ぎない。色業処の修習をする時、禅修行者はすでに、脳内の、44 種類の色法を、徹底的に識別する事が出来ている。この時、彼は、再度、脳内の、44 種類の色法を識別しなければならない。その後、身浄色と有分透明界（意門）と、身浄色の近くにある一粒または一塊の色聚の中の、地界、または火界、または風界を、同時に識別する。

（地、火、風）の内の一つの触界が、有分透明界（意門）と、脳内の身浄色（身門）を打つとき、触界を所縁として取る所の、身門と意門心路過程が、生起する。もし、これらの心路過程の中の、確定と意門引転が、如理作意を擁している（すなわち、それを地、火、風または色法、または無常であると、確定する）ならば、「大善速行心路過程」 (*mahākusala javana vīthi*) が生起する。もし、速行心が、喜俱智相応である場合、34 個の名法が存在する。この 34 個の名法は、心所依処色に依存して、また、有分透明界（意門）を縁にして、生起する。脳内の身浄色に依存して生起するのは、身識であり、ただ、一心と 7 心所のみあって、智はない。

法所縁グループ——善グループ

禅修行者が、法所縁グループの善名法を、記憶するのに便利な様に、ここでは、それらを四種類に分ける。すなわち：

- (A) 11 種類の真実色法を所縁に取る、名法グループ。
- (B) 10 種類の非真実色法を所縁に取る、名法グループ。
- (C) 離心所 (*virati*) または無量心所 (*appamaññā*) を擁するもの、また仏随念と死随念の名法グループ。
- (D) ジャーナ名法グループ。

A、B、D のグループの名法の識別法については、すでに解説した。次に、C グループの識別法について解説する。

正語 (sammā vācā)

正語とは、生活 (= 生計) と関係のない、四種類の語による、悪行 (vacī duccharita) である。心は、有分透明界 (意門) を保持し、過去の、妄語を離れた状態を所縁とし、所縁が意門に出現したならば、生起した意門心路過程の中の、複数の名法を、以下の様に識別して、練習する。速行の中に、喜智相応が 34 個 (+ あり)、(+ それに) 正語 (不妄語) を加えて、35 個の名法がある事になるが、喜智相応、不相応 (+ のそれぞれ) に対応して、四種類を識別する。所縁が、明晰であるが故に、有因大善果報彼所縁、または無因彼所縁の中の、一種類が出現する。有因大善果報彼所縁の中の、正語心所不相応は、喜智相応の 34 個の名法の事である。不両舌、不悪口、不綺語もまた、一つ一つ、継続して練習しなければならない。

正業 (sammā kammanta)

心は、有分透明界 (意門) を保持し、過去の殺生から離れた状態を所縁として、所縁が、意門に出現した後、生起した意門心路過程の中の、複数の名法、速行の中の喜智相応の 34 個に、正業 (不殺生) を加えた、合計 35 個の名法を、喜智相応、不相応に応じて、四種類を識別する事を、練習しなければならない。所縁が明晰である事から、有因大善果報彼所縁、または無因彼所縁の中の一種類が生起する。有因大善果報彼所縁の中の正業心所不相応、すなわち、喜智相応の 34 個の名法がある。不偷盜、不邪淫もまた、継続して練習しなければならない。

正命 (sammā ājīva)

心は、有分透明界 (意門) を保持し、何か一種類の、生計と関係のある語悪行か、または身悪行の状態、例えば過去において、非三浄の肉を食べた事を所縁として、所縁が意門に出現した後、生起した意門心路過程の中の複数の名法、速行の中の喜智相応の 34 個に、正命を加えた、合計 35 個の名法を、喜智相応、不相応に応じて、四種類を識別する事を、練習しなければならない。所縁が明晰である事から、有因大善果報彼所縁、または無因彼所縁の中の一種類が生起する。有因大善果報彼所縁の中の、正命心所不相応、すなわち、喜智相応の、34 個の名法があるが、喜智相応、不相応に基づいて、四種類の修習をする。

この三種類の離心所は、過去の正語、正業、正命の中の、外部の、欲界究極名色法を、所縁として取らなければならない。その為、彼所縁が存在する。もし、欲界有情男性、女性の概念を、所縁に取るならば、彼所縁は生起しない。

信、慧（正語、正業、正命）

離心所を擁する速行名法の中の「信」は、業報の法則に信心（＝確信）を有し、戒法の教えを信じる事を言う。「慧」は、業報の法則を知っている事を言い、すなわち「自業正見」（*kamassakatā sammādiṭṭhi*）である。

表 7-7：法所縁グループ離心所（意門心路過程）

意門の中の色法	意門 54 色	意門 54 色	意門 54 色	
	意門引転	速行 (7X)	有因 彼所縁 (2X)	無因 彼所縁 (2X)
1. 正語:				
a. 不妄語	12	35	34	12/11
b. 不悪口	12	34	33	11/11
c. 不両舌	12	34	33	12/11
d. 不綺語	12	33	32	11/11
2. 正業:	12	35	34	12/11
a. 不殺生	12	34	33	11/11
b. 不偷盜	12	34	33	12/11
c. 不邪淫	12	33	32	11/11
3. 正命	12	35	34	12/11
	12	34	33	11/11
	12	34	33	12/11
	12	33	32	11/11

悲 (karuṇā)

悲とは、痛苦の中にある有情 (dukkhita) を救いたいと思う事である。有分透明界 (意門)、及びあなたが救いたいと思っている一人の有情を、所縁とする。喜俱智相応の速行名法は、信慧グループの 34 個の名法に悲を加えたもので、合計 45 個の名法が存在する。四種類を識別する。すなわち、喜と智があるかどうか (+を識別する)。

喜 (muditā)

喜は、有情の楽しさを随喜するものである。有分透明界 (意門) と、一人の楽しい有情を所縁として取る。ここにおいて、もし、未だ喜心ジャーナ (muditā jhāna) を証得していないのであれば、ただ悦受 (somanassa vedanā) のみが、速行の中において、出現する。故に、ただ、二種類を識別する。すなわち、智相応であるかどうかを。もし、智不相応であるなら、ただ 34 個の名法が存在するだけである。すなわち、33 個に、喜を加えたものである。

阿那律大長老 (Ven. Anuruddha Mahāthera) によると、すでに喜心観を修習して、喜心ジャーナ (安止定) を得た禅修行者は、禅修の力によって、近行定の速行心の中において、捨受が存在し得る、という。故に、すでに、喜心ジャーナを証得した禅修行者は、「喜、智」の四種類 (pīti、注意：この喜は、pīti であって、muditā ではない) を識別する事ができる (+と言える)。この二種類の、近行定の悲心観と喜心観は、概念の衆生を法所縁として取るが故に、速行の後に、彼所縁は存在しない。

表 7-8 : 法所縁グループ——無量心所 (欲界速行意門心路過程)

意門の中の色法	意門 54 色	意門 54 色
	意門引転	速行(7X)
1. 悲	12	35
	12	34
	12	34
	12	33
2. 喜	12	35
	12	34
	12	34
	12	33

信、慧（悲、喜）

無量心所を擁する速行名法の中の「信」は、業報の法則に対して、信心（＝確信）がある事を言う。「慧」は、業報の法則を理解している事を言い、すなわち、「自業正見」（*kamassakatā sammādiṭṭhi*）である。この二個の「信」と「慧」は、悲心と喜心速行の前、遍作、近行から来る所の、欲界速行の中の名法の説明である。

仏随念（*Buddhānussati*）

もし、すでに、四護衛禪を修習した事があるのならば、禪修行者は、仏陀の功德を所縁とする、意門大善速行心路過程をも、識別するべきである。喜俱智相応の速行名法は、信慧グループの、34 個の名法である。仏随念の修習は、近行定に到達する事ができるだけであるので、速行はただ、七回だけ出現する。彼所縁は、生起する時もあれば、生起しない時もある。

仏陀の功德は、世間功德と出世間功德の、二種類がある。仏陀の世間功德は、近行定の功德（仏陀の布施と持戒の功德）、観禪 *vipassanā* の智慧功德、開示の功德と、一切知智の功德等々である。もし、仏陀の世間功德を、仏随念の業処として修行するのならば、所縁が欲界所縁である為、修行する禪修行者において、生起する心路過程は、欲界大善速行である。もし、所縁が明晰所縁である場合、心路過程の中の速行の後に、彼所縁が存在する。反対に、もし、所縁が不明晰所縁であるならば、速行の後に、彼所縁は存在しない。しかし、仏陀の究極功德の状態に入るのは、容易ではない。

次に、仏陀の安止定の功德、神通の功德は、廣大唯作法の世間功德に属する。仏陀の出世間智慧の功德は、道智と果智を含む。もし、廣大唯作法の世間功德と、出世間智慧の功德を所縁として、仏随念を修習するのならば、所縁が非欲界所縁である為、禪修行者の心路過程の中の速行には、彼所縁は存在しない。

仏随念を修習する時、もし、彼所縁がないのであれば、有因彼所縁、無因彼所縁は共に、出現する可能性がある。しかし、所縁が極可喜（極めて喜ばしい）の関係上、悦受相応の推度彼所縁は、生起する。仏陀の功德を、仏随念業処として修行する時、極可喜（＝極めて喜ばしい）所縁悦受相応の、四種類の、悦受有因大善果報所縁と、一種類の無因悦受相応の推度彼所縁は、その両方共に、出現する可能性がある。また、捨俱相応の速行の後、悦受彼所縁は、非常に出現しにくい。

極可喜所縁悦受相応の関係上、捨俱相応の速行の後、捨俱相応の彼所縁は出現しない。この部分は、修習の時に、明確に調べる必要がある。

実習の方法:

- 1、心を意門（有分透明界）に保つ。
- 2、己自身の好きなものの中から、仏陀の功德の一種類を選ぶ。
- 3、意門において、仏陀の功德を得ることができたならば、次には、意門心路過程内の、複数の名法を修習する。

死随念（maraṇānussati）

死随念の修習は、近行定にしか、到達する事が出来ない為、速行は、ただ七回のみ出現する。それらは「欲界近行定速行」（*kāmāvacara upacāra samādhi javana*）であり、彼所縁は生起したり、しなかつたりする。

もし、禅修行者は、己自身の色命根と名命根の死滅の状況に関して（+それを所縁として）、取れるならば、彼所縁は、明晰所縁が原因で、生起する。反対に、不明晰所縁であれば、それが原因で、生起しない。禅修行者が色命根と名命根の死滅の状態を（+所縁に）取る事が出来ず、ただ己自身の死亡の概念のイメージを（+所縁に）取る時、この様なレベルの死随念速行の後には、彼所縁は生起しない。

名色分別を学び、修習した事のある禅修行者は、色命根と名命根の死滅の状態を容易に（+所縁に）取る事ができる。名色分別を修習した事のない禅修行者は、この死随念の業処は、己自身の死亡の概念のイメージのレベルに、留まる事が多い。

実修の方法:

- 1、死随念を修習する禅修行者は、己自身の色命根と、名命根の死滅の状態を、所縁として取り、名法の練習をする。
- 2、己自身の、色命根と、名命根の死滅の状況に注意して、それを所縁として取る。
- 3、この所縁が、意門において出現するならば、意門心路過程の中の、速行名法を（+所縁に）取る練習を、しなければならない。

上に述べた、仏随念と死随念の、意門心路過程名法の修行において、禅修行者の智慧は、深くなればなる程、理想的である。



表 7-9 : 法所縁グループー仏随念、死随念

意門の中の色法	意門 54 色	意門 54 色	意門 54 色	
	意門引転	速行 (7X)	有因 彼所縁 (2X)	無因 彼所縁 (2X)
1. 仏随念	12	34	34	12
	12	34	34	12
	12	34	33	12
	12	33	33	12
2. 死随念	12	35	34	12/11
	12	34	33	11/11
	12	34	33	12/11
	12	33	32	11/11

10 個の結の生起

《大念処経註》の「法随観篇」において、10 結 (saṃyojana、結縛、すなわち、不善法) がどの様にして、色所縁を目標に取る事によって、生起するのかに、言及している。もし、この点を理解する事ができるならば、10 結が、如何にして、その他の 27 種類の色法を所縁とする時に生起するのかを、理解し、識別する事ができる。故に、ここにおいて、10 結は、如何にして、色所縁を目標に取って、生起するのかを解説する。

1、欲貪結 (kāmarāga saṃyojana) : 極度に、楽色所縁を淨 (subbha、美) とする為に生起する。

2、有貪結 (bhavarāga saṃyojana) : 福報のある生命は、非常に容易に、色所縁を得る事ができる。もし、この事を原因・理由にして、福報の生命を希求・欲求するならば、それは「有貪結」である。

3、戒禁取結 (sīlabbataparāmāsa saṃyojana) : 戒禁 (sīlabata) の修習をする。例えば牛に学ぶ、犬に学ぶ等。この様にすれば、色所縁を得られると思ひ込む。通常、上に述べた三種類の結は「貪見グループ」 (lobha - diṭṭhi group) 名法の一部である。

一般的に、欲貪結と有貪結は、邪見相応であり、ある時には、我慢（＝慢心）相応となる；戒禁取結は、邪見相応のみである。もし、人が色所縁を、常・楽・我と錯誤するならば、痴（moha）である。邪見とはすなわち、それを常・楽及び我であると思いつ事である。速行の中には 20、または 19、または 22、または 21 個の名法がある。

4、我慢（＝慢心）結（māna saṃyojana）：夜郎自大。例えば心の中で以下の様に思う：「ただ私一人だけが、色聚の中の色所縁を、識別することができる。」

この様な時、20、または 19、または 22、または 21 個の貪慢俱（lobha - māna - group）名法の、不善速行が生起する。

5、瞋結（paṭigha saṃyojana）：喜ばしくない色所縁に対して、不快に思うか、または怒る。これは瞋グループ（dosa group）の名法であり、速行の中に、18 または、20 個の名法が存在する。

6、嫉妬（issā saṃyojana）：たとえば：嫉妬の心でもって、以下の様に思う：「私以外に、この色所縁（＝物質）を、取得する事のできる者はいない。そうであれば、どれほど良いであろうか」この様な時、19、または 21 個の瞋嫉グループ（dosa - issā group）名法の速行が、生起する。

7、慳結（maccariya saṃyojana）：己自身が獲得した色所縁を、他人と分け与え、享受したいと思わない。この様に、吝嗇的に事を行う時、19 または 21 個の瞋慳グループ（dosa - macchariya group）名法の速行が、生起する。

8a、後悔（kukkucca 悪作）：間違った事をなしたと後悔する。例えば、他人の衣服を汚したとか；または、善い事をしなかったと後悔する。例えば、花の盛りの時に、仏（この二者は、共に色彩と関係がある）に、花を捧げなかったと、後悔する等。この時には、19 または 21 個の瞋悪作グループ名法の速行が生起する。

8b、掉挙（uddhacca）：色所縁を目標に取る時、もし、心が散乱するならば、すなわち、掉挙である。この様な時、16 個の掉挙グループ名法の速行が生起する。

9、疑結（vicikicchā saṃyojana）：色所縁を、有情（satta）であるか、我（atta）であるか、有情の実質または、我の実質について、懷疑する事。16 個の疑グループ（vicikicchā group）名法の速行が、生起する。

10、無明結 (avijjā saṃyojana) : Sabbeheva saḥajāta aññāṇavasena avijjāsaṃyojanaṃ uppajjati.

上に述べた結が生じる度に、無明結も又、生起する《中部・中 50 經篇》。

この 10 種類の結は、単独に生起する事はない。必ず、相応する心と心所と共に生起する。これらの名法は「心の定法」(citta niyāma) に従って、心路過程の中において、生起する。故に、これらの名法を識別する時、必ずそれらの密集を看破し、究極名法を、知見しなければならない。

貪見グループ——四種類

(1)

識	1
通一切心所	13
遍一切不善心心所	4
貪と邪見	2

合計	20

遍一切不善心心所と一切不善心は相応する。それらは痴、無慙、無愧と掉挙である。このグループの受は悦受 (somanassa vedanā) である。

(2) もし、捨俱である場合、喜 (pīti) はない。故に、20 から喜を減じて = 19 個の名法となる。

(3) もし、喜俱有行 (sasaṅkhārika) である場合、20 に昏沈と睡眠を加えて、= 22 個の名法となる。

(4) もし、捨俱有行である場合、19 に、昏沈と睡眠を加えて = 21 個の名法となる。ここにおいて「精進」は貪見が生起する事に尽力する事を言い、「欲」(chanda) とは、貪見の生起を願う事を言う。言い換えれば、精進は、貪欲 (rāga) の生起に努力する事を言い、欲は、貪欲が生起するのを、望む事を言う。禪修行者は、その他の名法の意味を、理解するべきである。

貪慢グループ——四種類

これは、貪見グループと、ほぼ似たようなものである。ただ、「邪見」が「我慢 (= 慢心)」に、変っただけである。それは、20、または 19、または 22、または 21

個の名法が存在する。ただし、我慢とはただ、「時に生起する心所」(kadāci cetasika) であって、故に、ある時には、我慢は、この中に含まれない時がある。もし、我慢がないのであれば(同時に邪見もない)、ただ、19-21-20 個の名法があるのみである。四種類を識別する。四種類の貪見に四種類の貪慢を加えると、合計八種類の貪根心(lobhamūla citta)が存在する。

瞋グループ——二種類

(1)

識	1
通一切心所(喜を除く)	12
遍一切不善心心所	4
瞋	1

合計	18

(2) もし、有行であれば、昏沈と睡眠を加え、 $18+2=20$ になる。

瞋嫉グループ——二種類

(1)

上に述べた瞋グループの心と心所	18
嫉	1

合計	19

(2) もし、有行であれば、昏沈と睡眠を加えて、 $19+2=21$ になる。

瞋慳グループ——二種類

(1)

上に述べた瞋グループの心と心所	18
慳	1

合計	19

(2) もし、有行であれば、昏沈と睡眠を加えて、 $19+2=21$ になる。

瞋後悔グループ——四種類

(1)

上に述べた瞋グループの心と心所 18

後悔 1

合計 19

(2) もし、有行であれば、昏沈と睡眠を加えて、 $19+2=21$ になる。

すでになした悪業を所縁に取り、無行と有行の二種類を識別する。次に、今まで実践した事のない善い事を所縁に取り、無行と有行の二種類を識別する。

痴掉挙グループ——一種類

識 1

遍一切心心所 7

尋・伺・勝解と精進（喜及び欲不相応）4

遍一切不善心心所 4

合計 16

痴疑グループ——一種類

識 1

遍一切心心所 7

尋・伺と精進（勝解、喜及び欲不相応）3

遍一切不善心心所 4

疑 1

合計 16

《アビダンマッタサンガハ》（Abhidhammatthasaṅgaha）の中において、以下の様に言う：12種類の不善速行を含む、29種類のすべての欲界速行（kāma javana）は、皆、五門及び意門心路過程に出現する可能性がある。《大念処経》で仏陀は以下の様に言う：

心随観（cittānupassanā）の段階において、貪欲（rāga）と同時に生起する所の、「有貪欲心」（sarāga citta）を観照しなければならない；

瞋 (dosa) と同時に生起する所の「有瞋心」 (sadosa citta) を観照しなければならない；

痴と同時に生起する所の、「有痴心」 (samoha citta) を観照しなければならない。

初心者は、先に、28 種類の色法の内の一つを所縁として取る不善名法を識別する。最後には、28 種類すべてを採用 (+して識別する)。識別する時、ある種の禅修行者は、ある種の不善名法グループは、識別するのが、困難であると感じる事がある。この様であれば、彼は先に、金、玉、紙幣、車、衣服などの、密集の概念を所縁として取る所の、不善名法を識別する。この様にすれば、それらに対する理解が、進むが故に。

概念を所縁として取る不善名法の識別方法

先に、有分透明界 (意門) を識別し、その後に、好ましい金を所縁として、それは金である、と確定する。それが、有分透明界 (意門) に出現する時、金の概念を所縁として取る所の、意門心路過程は生起する。それを金と確定したのは、不如理作意である為、貪見グループ不善速行は、生起する。

貪見グループ不善速行の中において、それを金と見間違ふのは痴 (moha) であり；金であると信じるのは、邪見であり；これを「世間通称我邪見」という。その他の名法は、理に沿って、理解する事。その後、金を常、楽、我、浄と確定 (または作意) すれば、貪見グループ不善速行心路過程は、生起する。金を、常、楽、我、浄と誤解するのは痴、それを常、楽、我、浄と信じるのは、邪見である。

その後、衣服などを所縁として、同様の方法を用いて、修習する。新しい衣服には、喜が生起し、古い衣服には、喜が生起しない事を、理解する必要がある。貪慢グループを識別する時、あなたが誇りに思っている物を、所縁とする。例えば、衣服、宝石、イヤリング等。もし、概念を所縁に取る場合の、貪見グループ及び貪慢グループの名法が、理解できたならば、更に進んで、究極色法を所縁として取る (+修行をする)。

瞋グループを識別する時、あなたは、あなたの嫌いな人を、所縁として取る；

瞋嫉グループを識別する時、あなたは、他人が持っている、あなたより良い物を所縁に取る；

瞋慳グループを識別する時、あなたが、他人に分け与える事が耐えられない物を、所縁として取る；

瞋後悔グループを識別する時、あなたは、すでになした悪業（たとえば、殺生）または、なすべきであった良い事（たとえば、布施をしなかった、持戒をしなかった）を所縁として取る。

後悔とは、悪業をなした事を悔いる事、または善業をなさなかった事を悔やむ事であるが故に、この二種類の所縁を取って（+修習しなければならない。）

掉挙グループを識別する時、普通の無貪無瞋の散乱心を、所縁として取る。

疑グループを識別する時、あなたをして、疑いの心を起せしめる事柄を所縁に取る。例えば「前世では、私は、本当に、人であったであろうか？」等。

上に述べた様に、概念を所縁とする時、彼所縁は、不善速行の後に、生起する事はできない。もし、概念を所縁として取る所の、不善名法を識別する事が出来たならば、更に一步進んで、一つ毎の種類、究極色法を、所縁として取る所の、不善名法を識別する。善グループの識別方法と同じく、不善名法を識別する時、法所縁グループから、始めなければならない。

表 7-10 : 法所縁グループ—不善意門心路過程)

意門の中の色法		意門 54 色	意門 54 色	意門 54 色	
		意門引転	速行 (7X)	有因 彼所縁 (2X)	無因 彼所縁 (2X)
1. 貪見グループ		12	20/19/22/21	12/11/12/11	34/33/33/32
2. 貪慢グループ		12	20/19/22/21	12/11/12/12	34/33/33/32
3. 瞋グループ		12	18/20	11/11	33/32
4. 瞋嫉グループ		12	19/21	11/11	33/32
5. 瞋慳グループ		12	19/21	11/11	33/32
6. 瞋後悔 グループ	すでになした悪	12	19/21	11/11	33/32
	未だなしていない善	12	19/21	11/11	33/32
7. 掉挙グループ		12	16	12/11/11	34/33/33/32
8. 疑グループ		12	16	12/11/11	34/33/33/32

究極眼浄色を所縁として取る貪見グループ識別の修法

ここでは、眼浄色を所縁とする貪見グループの不善名法を例にとって説明する：先に、有分透明界（意門）を識別し、その後に（眼十法聚を識別した後）、眼浄色を所縁に取る。眼浄色が意門を打つ時（または意門に出現する時）、眼浄色を所縁として取

った所の、意門心路過程は生起する。意門引転がそれを上（subha、美）であると確定する。これは不如理作意であるが故に、樂と思ひ、淨と思う貪見グループ速行は生起する。不如理作意は、不善法の近因である。眼淨色を常、樂、我と確定するか、または省察するのも、また同様である。

八種類の貪根心の中において、四種類が邪見と相応する。もし、喜俱であれば、喜（pīti）があり；もし、捨俱であれば、喜はない。もし、有行であれば、昏沈と睡眠がある；もし、無行であれば、昏沈と睡眠はない。行とは、ここにおいては、己自身または他人の唆し、または激励によって、貪や、瞋が生起するのを言う。理解し易い様に、以下において、眼淨色を所縁として取る所の、貪見グループ（喜俱行）の 20 個の名法を列挙する。

- 1、識：眼淨色を「擁する」。
 - 2、触：眼淨色に接触する；その作用は、眼淨色と識を連結する。
 - 3、受：所縁を体験する（somanassa vedana：悦受）。
 - 4、想：心内に所縁を標記する（淨として）。
 - 5、思：相応する心と心所を所縁に向かわせるか、導く。
 - 6、一境性：心をしてただ一個の所縁に向かわせる；相応する心と心所に散乱を齎さない。
 - 7、命根：相応する名法を所縁において保護または保持する。
 - 8、作意：相応する法を、所縁に向かわせる様、コントロール（制御）するか、押し出す。
 - 9、尋：相応の法を所縁に投入する。
 - 10、伺：所縁を重複して省察する。
 - 11、勝解：所縁を確定する（淨として）。
 - 12、精進：貪欲が生起する様、尽力する。
 - 13、喜：所縁を喜ぶ。
 - 14、欲：所縁を欲しいと思う（欲望）。
 - 15、痴：所縁が不淨であるという、真実なる本性を知らない；所縁を淨だと錯覚する。
 - 16、無慙：貪見などの不善法の生起に対して、恥を知らない。
 - 17、無愧：貪見などの不善法の生起に対して、怖れを知らない。
 - 18、掉挙：心の散乱；平静でない事。
 - 19、貪：所縁を「私のもの」と執着する事；所縁を渴愛する；所縁を執取する。
 - 20、邪見：所縁を淨であると、誤解して信じる。
- 彼所縁：（P150、中段、表 7-1 にかかわる説明、略）

瞋（+恨）、瞋嫉、瞋慳、瞋後悔という、この四グループの中において、それぞれの精進とは、瞋恨、瞋嫉、瞋慳、瞋後悔を生起せしめる事を言う；それぞれの欲とは、すなわち、瞋恨、瞋嫉、瞋慳、瞋後悔が生起する事を、希望する事を言う。通常、彼所縁の受は、速行の受と同じであるが、しかし、この四グループの速行は、憂俱である。彼所縁に出現するのは、捨受である。というのも、彼所縁には、憂俱が存在しないが故に。

痴：痴とは、所縁（眼浄色）を、常、楽、我及び浄と錯覚する事を言う。「彼の」眼浄色、「私の」眼浄色、等と錯覚する事。

無慙、無愧：貪見、貪慢、瞋、瞋嫉、瞋慳、瞋後悔、痴掉挙、疑等の悪法の生起に対して、羞恥もないし、恐れもない事。修習の時、悪を造（ナ）す事をば、所縁とすれば、無慙、無愧は、生起する。

法所縁に属する、その他の、10種類の真実色法と、10種類の非真実色法を、所縁として取る、不善名法グループを、識別する。

色所縁グループ不善名法を識別する方法

色所縁を、目標に取る事によって、生起する所の、10種類の結（samyojana）については、すでに述べた。10種類の結が生起する時、色所縁を目標に取る、眼門不善速行心路過程を、識別する。次に、同じ様な方法を用いて、声（＝音）、香、味、触所縁を目標とする、不善名法を、識別する。以下に述べるのは、色所縁グループ貪見グループの、識別方法である。

先に、眼浄色と有分透明界（意門）の二者を、同時に識別する。その後、色聚の喜ばしい色彩を、所縁として、取る。色所縁が、眼門と意門に、出現する時、当該の色所縁を目標に取る所の、眼門と意門心路過程は、生起する。もし、その中の確定と、意門引転が、当該の色所縁を省察し、（1）常、（2）楽、（3）我または（4）浄と、確定するならば、これらは不如理作意であるが故に、貪見を主とする、不善速行心路過程が、生起する。これらの不善名法は、すでに説明を終えた。

五門引転、眼識、領受、推度及び確定の中の、名法の数と、その構成と、善グループの名法とは、同じである。善グループと、不善グループの間には、ただ速行の中の、名法の数に、差異があるだけである。

表 7-11 : 色所縁グループ不善速行心路過程

依処色	眼門心路過程						意門心路過程					
	意門 54色 五門 轉向	意門 54色 眼識	意門 54色 領受	意門 54色 推度	意門 54色 確定	意門 54色 速行 (7X)	有因彼所 縁(2X)	有因彼 所縁(2X)	意門 54色	意門 54色 速行 (7X)	有因彼所 縁(2X)	有因彼 所縁(2X)
1. 喜貪見	11	8	11	12	12	20	12/11	34/33	34	20	12/11	34/33
2. 捨貪見	11	8	11	11	12	19	11/11	33/32	34	19	11/11	33/32
3. 喜貪見有行	11	8	11	12	12	22	12/11	34/33	34	22	12/11	33
4. 捨貪見有行	11	8	11	11	12	21	11/11	33/32	34	21	11/11	32
5. 喜貪慢	11	8	11	12	12	20	12/11	34/33	34	20	12/11	34/33
6. 捨貪慢	11	8	11	11	12	19	11/11	33/32	34	19	11/11	33/32
7. 喜貪慢有行	11	8	11	12	12	22	12/11	34/33	34	22	12/11	33
8. 捨貪慢有行	11	8	11	11	12	21	11/11	33/32	34	21	11/11	32
9. 瞋グループ	11	8	11	11	12	18	11/11	33/32	34	18	11/11	33/32
10. 瞋有行	11	8	11	11	12	20	11/11	33/32	34	20	11/11	33/32
11. 瞋嫉グループ	11	8	11	11	12	19	11/11	33/32	34	19	11/11	33/32
12. 瞋嫉有行	11	8	11	11	12	21	11/11	33/32	34	21	11/11	33/32
13. 瞋慳グループ	11	8	11	11	12	19	11/11	33/32	34	19	11/11	33/32
14. 瞋慳有行	11	8	11	11	12	21	11/11	33/32	34	21	11/11	33/32
15. 瞋後悔グループ(已造悪)	11	8	11	11	12	19	11/11	33/32	34	19	11/11	33/32
16. 瞋後悔有行(已造悪)	11	8	11	11	12	21	11/11	33/32	34	21	11/11	33/32
17. 瞋後悔グループ(未造善)	11	8	11	11	12	19	11/11	33/32	34	19	11/11	33/32
18. 瞋後悔有行(未造善)	11	8	11	11	12	21	11/11	33/32	34	21	11/11	33/32
19. 掉挙	11	8	11	11	12	16	12/11/11	34/33/ 33/32	34	16	12/11	34/33/ 33/32
20. 懷疑	11	8	11	11	12	16	12/11/11	34/33/ 33/32	34	16	12/11	34/33/ 33/32

声（＝音、以下同様）所縁、香所縁、味所縁、触所縁の四グループ

これらのグループの、法の識別は、色所縁グループの法の識別と、類似している。一つひとつのグループの、善グループ名法と、不善グループ名法を、識別する。

声所縁グループ：

耳浄色と有分透明界（意門）を同時に、識別する。喜ばしいか、または喜ばしくない所の、声所縁を目標にする。如理作意かまたは、不如理作意に従って、（+この時）善または、不善速行を擁する所の、耳門と意門心路過程は、生起する。

香所縁グループ：

鼻浄色と有分透明界（意門）を同時に識別する。喜ばしいか、または喜ばしくない所の、色聚の匂いを、所縁の目標にする。

味所縁グループ：

舌浄色と有分透明界（意門）を同時に、識別する。喜ばしいか、または喜ばしくない所の、色聚の味を、所縁の目標にする。

触所縁グループ：

身浄色と有分透明界（意門）を、同時に識別する。喜ばしいか、または喜ばしくない所の、色聚の触を、所縁の目標にする。ここにおいて、逐一、地、水、風界の、この三種類の触所縁を所縁とする、善グループ名法と、不善グループ名法を、識別する。

ここにおいて言及したのは、色法を所縁として取る所の名法の、簡略的な識別法である。詳細な識別法は：たとえば、六処門と 42 身分（＝42 の身体部分）の中の、一つひとつ一種類毎の、色聚の地界を所縁とする、一種類毎の名法を、徹底的に識別するのである。その他の色法を、所縁にする名法もまた、斯くの如くに識別する。

表 7-12：六グループ——概略

1. 色所縁グループ		善組	不善組
2. 声所縁グループ		善組	不善組
3. 香所縁グループ		善組	不善組
4. 味所縁グループ		善組	不善組
5. 触所縁グループ		善組	不善組
6. 法所縁グループ	A.11 種真実色法	善組	不善組
	B.10 種非真実色法	善組	不善組

表 7-13 : 法所縁グループ (c) —善グループ

	依処色	意門 54 色	意門 54 色	意門 54 色	
		意門 引転	速行(7X)	有因彼所縁 (2X)	無因彼所縁(2X)
1. 正 語	i. 不妄語	12	35-34-34-33	34-33-33-32	12/11-11/11-12/11-11/11
	ii. 不惡語	12	35-34-34-33	34-33-33-32	12/11-11/11-12/11-11/11
	iii. 不両舌	12	35-34-34-33	34-33-33-32	12/11-11/11-12/11-11/11
	iv. 不綺語	12	35-34-34-33	34-33-33-32	12/11-11/11-12/11-11/11
2. 正 業	i. 不殺生	12	35-34-34-33	34-33-33-32	12/11-11/11-12/11-11/11
	ii. 不偷盜	12	35-34-34-33	34-33-33-32	12/11-11/11-12/11-11/11
	iii. 不邪淫	12	35-34-34-33	34-33-33-32	12/11-11/11-12/11-11/11
3. 正命		12	35-34-34-33	34-33-33-32	12/11-11/11-12/11-11/11
4. 悲		12	35-34-34-33	無	無
5. 喜		12	35-34-34-33	無	無
6. 仏随念		12	34-33-33-32	34-34-33-33	12
7. 死随念		12	34-33-33-33	34-33-33-32	12/11-11/11-12/11-11/11

表 7-14 : 法所縁グループ(D)グループ—ジャーナ名法

1、安般念	初、第二、第三及び第四禪
2、白骨觀	初禪
3、白遍	初、第二、第三及び第四禪
4、慈心觀	初、第二及び第三禪
5、不淨觀	初禪

注意：もし、不断に継続して、六グループの不善グループ名法のみを、識別し続けるならば、光は、暗くなる。故に、一つひとつのグループまたは、一つ毎の種類、色所縁の名法を識別する時、善と不善グループの名法の、両方ともに、識別する様にする。

名法全体を「名法」として識別する

《清浄道論》（第 18 章）の中において、以下の様に言う：

‘So sabbepi te arūpadhamme namana lakkhaṇena ekato katvā etaṃ nāmantī passati.’

——「（全体的に）その一切が、（所縁に）向かう相を擁する所の、非色法を取り、彼はそれらを『名』として観ずる。」 この教えに従えば、すべての名法を、全体的、一体的な「名法」として、識別しなければならない、という事である。

処門 (āyatana dvāra) に基づいて、名法を識別する。先に、一つひとつを見る。例えば、識、触または受を見、その後に徐々に、識別する名法の数を、増やして行く。明晰に、同時に、一つひとつの心識刹那の中の、すべての名法を、見ることが出来た時、名法を所縁に趣向させる、または向かわせる所の、所縁の相を所縁として取り、それらを全体、一体として：「これは名法である」、または「名法、名法」と識別する。

名色法の分別

《清浄道論》（第 18 章）の中において、以下の様に言う：

‘Tato namanalakkhaṇaṃ nāmaṃ, ruppanalakkhaṇaṃ rūpaṃ saṅkhepato nāmarūpaṃ vavatthapeti..’

——「彼は、所縁に向かう相を擁する名法、及び干渉される相を擁する色法を、簡潔に『名色』と分別、認識した」

《清浄道論》（第 18 章）の中において、以下の様に言う：

‘Iti idaṅca nāmaṃ, idaṅca rūpaṃ, idaṃ vuccati nāmarūpaṃ saṅkhepato nāmarūpaṃ vavatthapeti..’

——「彼は斯くの如くに、簡潔に名色を分別した：『この名、及びこの色は「名色」である』。」

上に述べた教えによると、禅修行者は、更に一步進んで、名法と色法を識別する必要がある。すなわち、名法と色法の区別である。処門に基づいて、名色法を区別・識別しなければならない。先に、一つひとつの処門の、真実色法と非真実色法を識別し、その後、一つひとつの、心識刹那の中の名色法を、区別する。

眼門心路過程を例にとると：五門引転において、意門の中の、54 種類の色法、及び色所縁を色法として分別し、一心と、10 心所を、名法として分別する：眼識において、

眼門の中の、54種類の色法と色所縁を色法として分別し、一心と七心所を名法として・・・。

名色差別法 (nāmarūpavavatthāna)

六グループの中の、一つひとつの心識刹那における名色法を、同時に分別することができたなら、次に、名色法を所縁として、これらの名色法が、人無く、有情無く、無我なるものであり、ただ一組の、名法と色法に過ぎないのだ、と知見する事が出来る様になるまで、それらを智でもって、差別 (= 区別) する (+ 修習を实践する)。

威儀路明覚 (iriyāpatha sampajañña、行住坐臥明覚)

行住坐臥明覚及び、行動明覚 (たとえば、前進、後退、前を見る、横を見る、手足を曲げる、手足を伸ばす) :

- 1、四界を識別する事ができるならば、これらの姿勢と行動の中において、四界を識別する。
- 2、色法を識別する事が出来るならば、これらの姿勢と行動の中において、色法を識別する。
- 3、名法を識別する事ができるならば、これらの姿勢と行動の中において、名法を識別する。
- 4、名色と色法の区別が出来るならば、これらの姿勢と行動の中において、名法と色法を区別する。
- 5、名色と色法の差別が出来るならば、これらの姿勢と行動の中において、名法と色法を差別する。

もし、上に述べた様に、識別する事ができたならば、すなわち、五蘊を識別している事になる。というのも、色法は色蘊であり、一つひとつの心識刹那の中の名法とは、すなわち、受、想、行と識の四組、すなわち、四個の名蘊に、分ける事ができるからである。一つひとつの、心識刹那の中において、受と想を除いて、その他の心所は、皆、行蘊 (saṅkhāra khandha) に属する。

禅修行者は必ず、五蘊の識別方法を、了解しなければならない。すなわち：
歩くとき、ただ五蘊のみがあり；
立つとき、ただ五蘊のみがあり；

座る時、ただ五蘊のみがあり；
横になる時、ただ五蘊のみがあり；
前進する時と後退する時、ただ五蘊のみがあり；
前を見る時も横を見る時も、ただ五蘊のみがあり；
手足を曲げる時も伸ばす時も、ただ五蘊のみがあり；
鉢を持ち、袈裟を着る時も、ただ五蘊のみがあり；
食べる時、飲む時、噛む時、味わう時も、ただ五蘊のみがあり；
大小便の時も、ただ五蘊のみがあり；
行住坐臥、眠る時、目覚める時、話す時、及び沈黙する時、ただ五蘊のみがある。
(《大念処経註》の「威儀路明覚編」 Commentary to the section on iriyāpatha - sampajañña of the Mahāsatipaṭṭhāna Sutta)

行住坐臥の中の色法の識別

行住坐臥と行動明覚の修習をする時、必ず、二種類の色法を了解し、識別しなければならない。すなわち：

- (1) 主要な色法 (padhāna) ；
- (2) 主要でない色法 (appadhāna) 。

(1) 主要な色法：

または「主動的な色法」とも言う。身表が擁する所の、二種類の心生色法の中に存在している。すなわち：「身表九法聚」(kāyaviññatti navaka kalāpa) 及び、「身表色軽快性 12 法聚」(kāyaviññatti lahutādidvādasaka kalāpa) である。これらの色法の中において、風界 (vāyo dhātu) の力が、最も強い。

実際、色法を帶動 (= 帯同して動かす事、以下同様) (身体をして歩かしめる) のは、真実に帶動しているのではなく、ただ、不断に、新しい場所において、生起しているだけであるが、それが帯同している様に (+ 見えるのである)。その原因・理由は、真実究極法は、ある個所から、ある個所へと移動する本性を持っておらず、必ずや、生起した場所において、即刻壊滅しているのである。それらを生起せしめる因が、未だ断たれていないが故に、新しい色法は、相次いで、新しい場所において生起する (前の、古い場所で生起しない)。斯くの如くに、新しい場所において、相次いで、生起するのは、色法の力であり、その中においては、風界の力が最も強い。

(2) 非主要色法 (=主要でない色法、以下同様) :

又の名を「帶動される色法」と言う。上に述べた主要な色法の外に、六処門と 42 身分 (=42 身体部分、以下同様) の中のその他の色法は、すべて、行住坐臥と行動明覚における、非主要色法である。実際は、それらは帶動されている訳ではなく、ただ相次いで、新しい場所において、生起しているに過ぎないが、しかし帶動されている様に (+見えるのである。)

実修の方法 :

ここでは、歩く時の識別方法を、例に取る。すでに、白遍を修習した事のある、禅修行者ならば、経行の道に立ち、白遍第四禅が得られるまで、先に定力を育成する。その後、身体の中の四界を、識別する。色聚を見る事が出来たならば、六処門と 42 身分の中の色法を、全体的に識別する。その後、前に向かって、何歩か歩く。歩く時に、以下の様子を、順序よく識別する :

- 1、帶動する色法を主とした色法。
- 2、帶動される色法を主とした色法。

これは、仏陀が、帶動する色法を識別する事を主とせよ、とした教えに基づく :

'Gacchanto vā gaccāmīti pajanāti.'

——「歩く時、彼は『私は歩いている』と知る。」

仏陀はまた、帶動される色法を主に、識別する様にも教えている :

'Yathā yathā vā panassa kāyo paṇihito hoti. Tathā tathā naṃ pajānāti.'

——「どの様に姿勢にあっても、彼は、身体の姿勢において、覚知を保持するべきである」

また、護法尊者 (Ācariya Dhammapāla) は、《根本 50 經篇疏鈔》 (Mūlapaṇṇāsa tīkā) の中において、以下の様に言う :

Purima nayo vā iriyāpathappadhāno vutto ti tattha kāyo appadhāno anunipphādīti idha kāyaṃ padhānaṃ appadhānañca iriyāpathaṃ anunipphādaṃ katvā dassetuṃ dutiyanayo vuttoti evampettha dvinnam nayānaṃ viseso veditabbo.

帶動する色法を主とする時、それはすなわち、帶動される色法をも、識別している事になる。これは、帶動する色法を主に識別する時、禅修行者はまた、帶動される色法もまた、同時に、容易に、識別できてしまうからである。同様に、帶動される色法を識別する時、それはすなわち、帶動する色法をすでに識別しているのである。ちょうど、米俵を担いでいる人間に注意を向けるとして、あなたがその人間を見る時、担がれている

米俵もまた、目に入るのと同じであり、また、あなたが米俵に注意を払う時、米俵を担いでいる人間を、容易に見る事が出来るのである。

如何にして、行住坐臥の中の五蘊法を識別するのか

前に述べた通り、禅修行者は立っている時、順序に従って、定力を育成し、その後に、六処門と 42 身分の色法を、全体的、一体的に識別する。次に、前に向かって、何歩か歩き、歩く時に、帶動する色法と、帶動される色法を、順番に、交互に識別する。

帶動を生じせしめる所の、色法が生起せしめる意門心路過程には、四種類の名蘊がある。これらの意門心路過程の速行心は、善速行または不善速行であり得る（阿羅漢である場合は、唯作速行である）。五門心路過程は、表色を生じる事ができないが故に、ただ意門心路過程に関する説明をのみした。意門心路過程において、一つひとつの心識刹那には、皆、四個の名蘊が、存在している。色蘊に、四個の名蘊を加えると、合計五蘊となる。五蘊の識別が出来たならば、再度、同時に、名色法の分別を修習し、その後に、名色法の差別を修習する。行住坐臥及び、前進、後退、曲げる、伸ばす等の行動の中における、五蘊を識別できたならば、仏陀の《大念処経》の中にある、指導法に基づいて、修行しなければならない：

' Iti ajjhataṃ vā kāye kāyānupassī viharati, bahiddhā vā kāye kāyānupassī viharati, ajjhata bahiddhā vā kāye kāyānupassī viharati.

Iti ajjhataṃ vā vedanāsu vedanānupassī viharati, bahiddhā vā vedanāsu vedanānupassī viharati, ajjhata bahiddhā vā vedanāsu vedanānupassī viharati.

Iti ajjhataṃ vā citte cittānupassī viharati, bahiddhā vā citte cittānupassī viharati, ajjhata bahiddhā vā citte cittānupassī viharati.

Iti ajjhataṃ vā dhammesu dhammānupassī viharati, bahiddhā vā dhammesu dhammānupassī viharati, ajjhata bahiddhā vā dhammesu dhammānupassī viharati.'

「彼は内在する身を身として観照する事に安住し、または、外在する身を身として観照する事に安住し、または、内在しまた外在する身を身として観照する事に安住する。」

「彼は内在する受を受として観照する事に安住し、または、外在する受を受として観照する事に安住し、または、内在しまた外在する受を受として観照する事に安住する。」

「彼は内在する心を心として観照する事に安住し、または、外在する心を心として観照する事に安住し、または、内在しまた外在する心を心として観照する事に安住する。」

「彼は内在する法を法として観照する事に安住し、または、外在する法を法として観照する事に安住し、または、内在した外在する法を法として観照する事に安住する。」

上に述べた經文の中において、仏陀は内観、外観、内外観の三種類の方法でもって身・受・心・法 (kāya, vedanā, citta, dhamma) を識別しなければならない、と言う。これはすなわち、五蘊の識別である。

この事を強調する為に、《清浄道論》(第 21 章) 及び《殊勝義註》は、以下の様に、詳しく解説する：

' Yasmā pana na suddha ajjhatta dassanamatteneva maggavutthāni hoti.

Bahiddhāpi datṭhabbameva. Tasmā parassa khandhepi anupādiṇṇa saṅkhārepi aniccarū dukkhamanattāti passati.

——「五蘊を内観するだけでは、『出起に至る観智』(注 33) と道智を証得する事ができないが故に、外に存在する五蘊をも、外観しなければならない。こうしたことから、彼はその他の(有情の)五蘊と『無執着行』(anupādiṇṇa saṅkhāra。すなわち：非有情)を無常・苦・無我と見做す(+修習をしなければならないのである。)

《中部・各別經》(Majjhima Nikāya, Anupada Sutta) の疏鈔では、以下の様に言う：

Tasmā sasantānagate sabbadhamme parasantānagate ca tesarū santāna vibhāga akatvā bahiddhābhāva sāmāññato sammasanarū ayarū sāvakānarū sammasana cāro.

上に述べた疏鈔によると、声聞弟子の波羅蜜智(sāvaka pāramī ñāṇa)でもって、外観の修習をする時、有情の五蘊(この時は、彼らを男性、女性、有情、人類、天神などと分類しない)及び非有情(無執着行、anupādiṇṇa saṅkhāra)の時節生色をば、全体・一体として、識別しなければならない、と言う。というのも、それらは、皆同じものであり、それぞれを、個別に識別する必要は、ないからである。

注 33：「出起に至る観智」(vutthānagāminī vipassanāñāṇa)は、道智が出現する様な状況に至る観智である。それは、道心路過程(maggavīthi)自体、及び道心路過程の前の二、三個の心路過程を含む。

外観の方法

この書においては、先に、内部の五蘊を識別し、その後、外部の五蘊を識別する方法を、説明する。実際は、外部の五蘊を先に識別し、次に、内部の五蘊を識別しても、

よい。しかしながら、先に、内部の五蘊を、識別する禅修行者は、ただ、内部の五蘊を用いて、観禅の修行しているだけであって、それでは、道智を証悟する事は出来ないのであり、故に、彼は、外部の五蘊と非執着行もまた、識別しなければならないのである。同様に、もし、先に、外部の五蘊を識別する禅修行者は、ただ外部の五蘊でもって、観禅を修行しているだけであって、彼もまた、道智を証悟することはできない。こうしたことから、内部の五蘊もまた、識別しなければならないのである。

名色法を内観または外観する時、四界の識別から始める事ができる。まず、内在する色法を識別し、その後外在する四界を識別する。この時、智慧の光を借りて、己自身が着用している衣服から始めて、もし、その四界を識別する事が出来たならば、それが構成する所の、多くの色聚を、簡単に見る事ができ、衣服を見る事がなくなる。これらの色聚を分析して、それらは火界によって引き起こされた「時節生食素八法聚」である事（+が分かる）。その後、徐々に、範囲を広げて、最後には非有情界全体まで至る様にする。非有情界の中の樹木、水、地、山、森林、金、銀等の四界を識別し、色聚が見えた時、それらの究極色法を知見できるまで、それらを、識別する。非有情界の中には、二種類の色聚しかない。それはすなわち、「時節生純八法聚」(utuja suddhaṭṭhaka kalāpa) と「時節生声 (=音) 九法聚」(utuja saddanavaka kalāpa) である。

次に、有情界の六処門、及び 42 身分の中の、真実と非真実の色法（内観の法と同じ）を、識別する。不断に、順序良く交互に、内観と外観を修習すれば「修習智」(bhāvanā ñāṇa) を、強化する事ができる。その後、外部の六つのグループの名法（内観の法と同じ）を、全体的、一体的に識別する。内観の時と同様に、如理作意または、不如理作意によって引き起こされた、善グループと不善グループの名法を、識別する。

たとえば：

眼浄色（眼門）と有分透明界（意門）を、同時に識別し、一粒のまたは一塊の、色聚の色彩を所縁として取る時、それによって生起した所の、色所縁グループ名法を、識別する。この時、これは誰の眼浄色、有分、色所縁であるのか、という区別・判断をする必要はない。というのも、それらは皆同じものであって、故に、それらすべてを、一体と見做すのである。その他のグループを、識別する方法も、これと同様である。

名業処の段階において、内観と外観の修習を、順序良く繰り返す事によってのみ、禅修は、強力になることができる。外観の時、それらを、男性、女性、有情、人類、天神などと、区別してはならない。禅修行者は、それらを全体的、一体的に識別する。というのも、それらは皆同じものであるが故に。32 身分を外観する時、ただ一個の有情の、32 身分を観察する事もできる。同様に、色法を外観する時、ただ一個の有情の、32 身分の中の、すべての色法を、識別する事もできる。ただし、名業処の段階においては、

正確に他人の心を知ることはできない。というのも、それは「他心通」(paracittavijānana abhiññā) の範囲に属するが故に。観禪の修習の時、有情は分別することなく、ただそれらの全体を觀照する。これを、弟子の思惟行 (sammāsana cāra) と言う。

内部と外部の (1) 色法 (2) 名法を識別した後、内部と外部に関しては、(3) 名色法の分別 (4) 名色法の差別 (注 34) を識別する。

注 34 : 《智慧の光》では : 「名色の分別」とは、色は色であるとし、依処色に依存して生起して、かつ、所縁を識知する事の出来るのは、名であると分別する事を、言う。「名色差別」とは、智慧でもって、それらを差別する事を言う。(+ その内実は) これらの名色法は、人無く、有情無く、無我であり、ただ一組の名法と色法に過ぎないのだ、という事を知見出来るのを言う。

次の段階に進む

内部と外部の名色法の分別と差別の修習の後、《大念処経》「界作意篇」(dhātumanasikāra pabba) の中において述べられている所の、次の段階の修習法を修行する :

' Samudayadhammānupassī vā kāyasmīm viharati, vayadhammānupassī vā kāyasmīm viharati, samudayavayadhammānupassī vā kāyasmīm viharati.'

——「彼は、身体内部において、生起する現象を觀照する事に安住し、または、身体内部の壊滅現象を觀照する事に安住し、または、身体内部において生起する所の、また壊滅する所の現象を、觀照する事に安住する」(受、心と法についての教えも、同様である)

この經文の中において、仏陀は以下のものを觀照する様にと教えている :
因が (無明、愛、取、行と業) 生起する事によって ; 果 (五蘊) が生起する ;
因が (無明、愛、取、行と業) 滅する事によって ; 果 (五蘊) が滅する ;
因と果の生・滅 ; それらの無常・苦・無我の三相。

この段階において、仏陀は三種類の智 (ñāṇa) を教えている。すなわち :
縁摂受智 (paccaya pariggaha ñāṇa)
思惟智 (sammāsana ñāṇa) 、
生・滅隨觀智 (udayabbaya ñāṇa) である。

その中の縁摂受智に関しては、二種類の縁摂受法がある。すなわち :

1、縁摂受 (paccaya pariggaha) : 今世の名色 (五蘊) の因果を識別する。

2、世摂受 (addhāna pariggaha) : 過去世と未来世の名色 (五蘊) の因果を識別する。

上に述べた仏陀の教えの順序に基づいて、縁摂受智を体験、証悟する前、禅修行者は、必ず、内外の五蘊を系統的に識別する事ができていなければならない。縁摂受智を体験、証悟する方法としては、次に、縁起を識別する所の第五法と第一法を、詳細に解説する。

四念処の育成に関する修行

《殊勝義註》と《清浄道論》の中において、以下の様に言う：

**Yasmā pana na suddharūpadassanamatteneva vuṭṭhānaṃ hoti,
Arūpampi daṭṭhabbameva.**

——「もし、色法の三相をのみ、観照する事を通して、観禅の修行をするのならば、道智を証悟する事は出来ないのであって、名法もまた、観照されなければならない。」

観禅の目標に属する所の、名色法の識別を開始する時、禅修行者は先に、名法または色法を識別する。この二者の内、止行者 (samatha yānika) と純観行者 (suddha vipassanā yānika) は、二者とも、先に色法を識別してもよい、がしかし、止行者だけが、名法から先に識別する修習を、実践する事ができる。

しかし、ただ色法を観照するだけでは、道智は証得することはできない。故に、色法から識別を開始する修行者は、名法もまた識別し、観照しなければならない。また、名法だけを観照しても、道智を証得することはできない。故に、名法から識別を開始する修行者は、色法を識別し、観照しなければならない。

《不通解經》 (Apriyānana Sutta) の中において、仏陀は以下の様に言う：
もし、人が「三遍知」でもって、すべての五蘊または名色法を知見する事ができないのであれば、彼は苦を断ずる事はできないのである、と。
註釈にも言う：色法だけを観照するとか、または、名法だけを観照するならば、道智は証得する事はできない。仏陀と註釈の言う所に齟齬はなく、付合しており、何等の差別もない。それはちょうど、ガンジス河の水とヤマヤ河の水が混ざった様なものである。

若し、色法の識別から始めるならば、次に、名色法の識別を修習し、その因を遡及できる様にする。その後、これらの名色法、及び、因の三相を観照する。これがすなわち、「身随観念処」 (kāyānupassanā satipaṭṭhāna) である。
受によって、名色法を識別し、因を遡及した後、次に、名色法と因の三相を観照する。これがすなわち、「受随観念処」 (vedanānupassanā satipaṭṭhāna) である。

識によって、名色法を識別し、因を遡及した後、名色法と因の三相を觀照する。
これがすなわち、「心隨觀念處」(cittānupassanā satipaṭṭhāna)である。
觸によって、名色法を識別し、因を遡及した後、次に、名色法と因の三相を觀照する。
これがすなわち、「法隨觀念處」(dhammānupassanā satipaṭṭhāna)である。

こうしたことから、禪修行者は、以下の事を理解しなければならない：
一、もし、人が、その中の一種類の念處を、修習するならば、それはすなわち、すべての四念處を修習しているのである。
二、五蘊を識別する事、すなわち、四念處の修習の実践そのものである。

これまで何度も説明したものであるが：名法を識別したいと思う禪修行者は、先に、名法の依處色及び所緣としての色法を、識別しておかねばならない。名法を識別した後、次に、再度、名法の依處色を識別し、その後に、同時に、名色法を識別する必要があるのである。



第八章：緣起第五法 Paṭiccasamuppāda

《相応部・大因緣經》(Mahānidāna Sutta)の中において、以下の様に言う：

Gambhīro cāyam Ānanda paṭiccasamuppādo gambhīrāvabhāso ca.

Etassacānanda dhammassa ananubodhā appaṭivedhā evamayam pajā
tantākulakajātā gulāgaṅṭhikajāta muñjapabbajabhūta apāyam duggati,
vinipātam saṃsāram nātivattati.

——「アーナンダ、この緣起というものは、確かに奥深く、また奥深いものである。未だ三遍知(注35)でもって、徹底的に緣起を知見しておらず、道果を証悟する事が出来ない有情は、生死の輪廻の中にかからめとられ、ちょうど結び目がこんがらがった糸の

(+玉の) 様に、または織巢鳥の巢の様に、または端を見つける事の出来ない草製の足ふきマットの様である。そして、その上、彼らは悪趣輪廻から離脱する方法を持たない。」

上の如くの教えに基づき、論師方は、《清浄道論》(第17章)の中において、以下の様に言う：

**Nāṇāsīnā samādhīpavarasilāyaṃ sunisitena bhavacakkamapadāletvā,
asanivicakkamiva niccanimmathanāṃ Saṃsārabhayamatīto,
na koci supinantarepyatthi.**

——「もっとも優れた定石で磨いて鋭くなった智の剣でもって、絶え間ない壊滅性を有する有論(縁起論の事)を一刀両断できるのでなければ、誰も輪廻の畏怖から解脱する事などできない。たとえ夢の中でさえも。」

上に述べた経典と、註釈の教えに基づけば、涅槃を証悟したいと思う禅修行者は、三遍知でもって、12縁起を知見する様、必ずチャレンジしなければならない。仏陀は教えて言う：何度も、繰り返して、随覚智(すなわち、無随覚、*ananubodha*)及び通達智(すなわち、無通達、*appaṭivedha*)を、道果を証悟するに至るまで、明確にすることができないが故に、人々は、生死輪廻から解脱する事ができない。故に、人々は、随覚智と通達智を明確にするために、(+修行に)チャレンジしなくてはならない。「明確にする」とは、推理で知るのでもなく、憶測で知るのでもなく、また、仏陀の言葉を記憶しておくだけのものでもなく、他人の言葉を記憶するものでもない。

注 35：三遍知(*tipariññā*)：所知遍知(*ñāta pariññā*)、度遍知(*tīraṇa pariññā*)、また審察遍知とも)及び断遍知(*pahāna pariññā*)。所知遍知はまた随観智(*anubodhañāṇa*)の事である。度遍知と断遍知は、通達知(*paṭivedhañāṇa*)の事である。

三世間遍知 (3 *lokiya pariññā*)

(一) 所知遍知 (*ñāta pariññā*)

若し、人が智でもって、各々の縁起支(すなわち、無明、行、識、名色、六処、触、受、愛、取、有、生、老死など)の相(*lakkhaṇa*)、作用(*rasa*; また作味とも)、現起(=現象)(*paccupaṭṭhāna*)及び近因(*padaṭṭhāna*; また足処とも)を、徹底的に、明確に、識別する事ができたならば、この智は、名色分別智(*nāmarūpa pariccheda ñāṇa*)と言う。

もし、人が、それらの因と縁を徹底的に、例えば「無明に依りて、行生じ；行に依りて、識生じ・・・」を、明確に了解する事ができたならば、この智とはすなわち、縁摂受智 (paccaya pariggaha ñāṇa) である。この二種類の智 (すなわち、名色分別智と縁摂受智) は、所知遍知と呼ばれる。この二種類の智が所知遍知と呼ばれるその理由は、それらは、知るべき事柄を明らかにし、また分別し、また、観禪の目標 (所縁) となる行法 (sankhāra dhammā) であるからである。

(二) 度遍知 (tīraṇa pariññā)

思惟智 (sammasana ñāṇa) と生滅智 (udayabbaya ñāṇa) の二者は、智でもって、各々の縁起支の無常相、苦相、無我相を観照した後、それらを無常・苦・無我であると審察、確定する事ができる時、この二者の智は、度遍知と呼ばれる。これは、12 因縁法 (縁起法) の無常相、苦相、無我相を審察し、確定する審察慧である。

(三) 断遍知 (pahāna pariññā)

壊滅智 (bhaṅga ñāṇa) から始まる観智は、12 縁起支の滅を、徹底的に観照した後、再度、順序良く、それらの三相を、観照する。(＋その時) 暫定的 (tadaṅga) に、個別の煩惱 (kilesa) を、断じ除く。これら、12 縁起支の滅の無常相、苦相、無我相を識別し、了解する智慧は、断遍知と言う。以上が三世間遍知 (＋の説明) である。

三出世間遍知 (3 lokuttara pariññā)

観智 (すなわち、三世間遍知) の後、聖道 (ariyamagga) は生起する。聖道は、徹底的に、各種の煩惱を断じ除き (samuccheda、正断)、無為涅槃界 (asaṅkhata Nibbāna dhātu) を、透徹して証悟する。故に、断遍知とは、事実上は、道の別名であると言える。

聖道は、所縁通達 (ārammaṇa paṭivedha、すなわち、知見した所縁に対して徹底的に対面する、認める) によって、徹底的に、無為涅槃を知見する。この様に知見する時、聖道はまた、徹底的に四聖諦を遮断する所の、痴 (moha) を、断じ除く。それがすでに、四聖諦を遮断する所の痴を、断じ除いた為に、それはまた、四聖諦を知見する作用によって、成就されるのである。この様に、作用成就 (kicca siddhi) によって、四聖諦を知見する事を、無痴通達 (asammoha paṭivedhha) と言う。ここにおいて、聖道は、所縁通達によって、滅諦 (Nirodha Sacca) が証悟され、無痴通達によって苦諦、集諦、道諦が証悟される。聖道によって、苦諦と集諦に属する 12 縁起支と、

それらの間の、因と縁の作用を、知見する事を、すでに成就し得たが故に、それはまた、間接的に、所知遍知と呼ばれる。

次に、聖道はまた、徹底的に、苦諦と集諦を遮断する所の、無常相、苦相と無我相への愚痴（＝無知、愚かさ）を断じ除いた為、名を苦諦と集諦と呼ぶ所の行法（*sankhāra dhammā*、すなわち、名、色、因と果を指す）の無常相、苦相と無我相の作用に対する、審察と確定を成就する。故に、聖道はまた、度遍知とも呼ばれる。以上が、三出世間遍知である。

唯一、己自ら、世間遍知と出世間遍知でもって、12縁起を了知し得た後に初めて、随覚智と通達智を証得したのだ、と言える。唯一、斯くの如くに、随覚智と通達智でもって、12縁起を了知した後に初めて、人々は、生死輪廻から、解脱する事ができる。これが、上に述べた《大因縁經》における経文の、含意である。

随覚知と通達知

Ananubodhāti nātapariññāvasena ananubujjhanā appaṭivedhāti
tīraṇappahāna pariññāvasena apaṭivijjhana. (《長部註》)

疏鈔の説明によると：*anuanubujjhanatṭhena anūbodho*、

- (一) 名色分別智によって、識別しなければならない名色法。及び
- (二) 縁摂受智によって、識別しなければならない因果関係。

という、この二者の作用は、それらを、一度だけ識知すれば成就する、というものではない。それらを、何度も繰り返し識知して、初めて成就する事ができる。故に、名色分別智と縁摂受智は、随覚智である、と言える。随覚智によって、明確になったものは、随覚知である。これは所知遍知である。

度遍知と断遍知でもって、（＋識知したならば）、通達知と言う。観智は、間接的には、断遍知と呼ばれる。断遍知（＋こそ）は、真正なる聖道の名称である。故に、度遍知と断遍知は、徹底的に、名を苦諦と言う所の名色法、及び名を集諦と言う所の、12縁起を了知し、道果を証悟したならば、それは通達知である。

この二智は、すなわち、

- (一) 己自ら徹底的に、過去、現在と未来の、三時の中の、12縁起支を了知する事、たとえば、これは無明、これは行、等などである。また
- (二) 己自ら徹底的に、それらの因果関係を了知する事。たとえば、行が生起するのは、無明が原因であるなど、これは随覚知である。

己自ら、徹底的に、12 縁起支の無常相、苦相と無我相を了知して、道果を証悟したならば、それは通達知である。もし、人が、随覚知と通達知でもって、12 因縁を如実に知見する事ができないのであれば、彼は、生死輪廻から、解脱する事はできない。唯一、己自ら、それらを知見した後初めて、彼は生死輪廻を、解脱する事ができるのである。

第五法の概要

Atīte hetano pañca, idāni phalapañcakaṃ,
Idāni hetano pañca, āyati phalapañcakaṃ. (Vism)

上に述べた註釈によると、禅修行者は必ず（+以下の点を）識別し、かつ明らかにしなければならない。

1、過去の五因により、すなわち、無明、愛、取、行及び業（avijjā, taṇhā, upādāna, saṅkhāra, kamma）によって、現在の五果が生起する。すなわち識、名色、六処、触及び受（viññāṇa, nāmarūpa, salāyatana, phassa, vedanā）である。及び

2、現在の因、すなわち、無明、愛、取、行及び業によって、未来の五果が生起する。すなわち、識、名色、六処、触及び受（+の生起）である。

ここにおいて、因は集諦に属し、果は苦諦に属する。故に、禅修行者は必ず、禅の修行をして、己自ら以下の事を了知しなければならない。

- 1、過去世の集諦によって、今世の苦諦が生起する。
- 2、今世の集諦によって、苦諦が未来世において生起する。

集諦 (Samudaya sacca)

仏陀は、《分別論》(Abhidhamma Vibhaṅga Pāṭi) の中において、五種類の集諦を、教示している。すなわち：

- 1、愛 (taṇhā) は、集諦である。
- 2、一切の煩惱は、愛を含めて、皆、集諦である。
- 3、一切の不善法は、皆、集諦である。
- 4、一切の不善法、及び、漏 (āsava) としての所縁と、生死輪廻を引き起こす所の、無貪、無瞋、無痴の三善因は、皆、集諦である。

5、一切の漏となる所縁と、生死輪廻を引き起こす悪法及び善法は、皆、集諦である。

故に《迷惑氷消》（*Sammohavinodanī*）の中において、以下の様に言う：

**Tattha yasmā kusalākusalakammaṃ avisesena samudaya saccanti
sacca vibhaṅge vuttaṃ.**

その意味は、一切の善業と悪業は、皆、集諦である。

また、《増支部・三集》（*Aṅguttāra Pāḷi Tīka Nipāta*）の中において、一切の縁起支は、皆、集諦である、と教える：

**Katamañca bhikkhave dukkha samudayaṃ ariyasaccaṃ. Avijjā paccayā saṅkhārā,
saṅkhāra paccayā viññāṇaṃ, viññāṇa paccayā nāmarūpaṃ, nāmarūpa paccayā
saḷāyatanaṃ, saḷāyatana paccayā phassa, phassa paccayā vedanā, vedanā paccayā
taṇhā, taṇhā paccayā upādānaṃ, upādāna paccayā bhavo, bhava paccayā jāti, jāti
paccayā arāmaṇasokaparidevadukkhadomanassaupāyāsā ambhavanti.
Evametassa kevalassa dukkhakkhandhassa samudayo hoti. Idaṃ vuccati bhikkhave
dukkha samudayaṃ ariyasaccaṃ.**

《諦相応・重閣經》（*Sacca Saṃyutta, Kūtāgāra Sutta*）の中において、以下の様に言う：もし、人が、智でもって、四聖諦を徹底的に知見する事が出来ないのであれば、生死輪廻を終わらせる事はできない；唯一、己自ら智でもって、徹底的に四聖諦を知見する者だけが、生死輪廻を終わらせる事ができる。こうしたことから、生死輪廻を終わらせたいと思う禅修行者は、智でもって、四聖諦を徹底的に知見する事に、尽力しなければならない。なお、集諦は、四諦に含まれる事を、しっかりと覚えておく事。仏陀は言う：愛は集諦である、と。故に、禅修行者は、今世の苦諦を引き起こした愛（集諦）は、何時生起したのかを、探索し、省察しなければならない。

**Rūpārūpaṃ pañcakkhandhā, taṃ hoti dukkhasaccaṃ, taṃ samuṭṭhāpikā
purimatanhā samudayasaccaṃ. (《迷惑氷消》)**

——その意味は：名と色は、五蘊である。その五蘊とは、苦諦である。過去世において、累積した所の、苦諦を引き起こす事の出来る愛は、集諦である。

上に述べた註釈の教えに基づけば、禅修行者は、彼の、今世の五蘊（苦諦）を、引き起こす所の愛（集諦）は、今世で生起した愛ではなく、過去世において累積した所の愛である事を、明白に了解しなければならない。

〈無礙解道〉（Paṭisambhidāmagga）の教え

Purimakammabhavasmirā moho avijjā, āyūhanā saṅkhārā, nikanti
taṅhā, upagamanāṃ upādānāṃ, cetanā bhavo. Ime pañca dhamma
purimakammabhavasmirā idha paṭisandhiyā paccayā

——過去世において、業を累積した時（業有、kamma bhava）、生起した所の痴は、無明である。

業を造（ナ）す事に尽力するのは、行である。

生命と所縁を、渴愛するのは、愛である。

生命と所縁に、執着するのは、取である。

善思（kusala cetanā）と不善思（akusala cetanā）は、有である。

過去世において、業を造（ナ）す時に、生起した所のこの五法は、今世の結生（paṭisandhi、人類にとっては、五蘊の結生）の、因である（《無礙解道》）。

《無礙解道》の中（+に述べられている内容）の意味は、過去世において業有（kamma bhava）を造（ナ）した時の、無明、愛と取に包まれた所の、その業は、今世の果報蘊の、真正なる原因である、という事である。こうしたことから、禪修行者は、己自ら、徹底的に、苦諦（五蘊の結生など）が今世において生起する、その因は、過去世の業（集諦）である事を識知し、了解しなければならない。唯一、この様である時にのみ、彼は己自ら徹底的に「集諦故に、苦集が生起する事」が了解されるのである。

行と業有（saṅkhāra & kamma bhava）

1、布施する前（布施業を造（ナ、以下同様）す前）に生起した所の前思（pubba cetanā）は、行である。施物を受者の手の中に布施した時に生起するのは、立思（patitthapaka cetanā、または脱思：muñca cetanā）である。

2、または、業を造す時に生起する所の、意門心路過程速行心の中において、前の六個の速行心の思（cetanā）は遂行（āyūhana saṅkhāra）である。第七番目の速行心の思は業有である。

3、または、業を造す時に生起する速行心の思は業有である。その思と相応する心識及び心所は、遂行である。

こうしたことから、今世において、累積した所の無明、愛、行および業は、今世の五蘊の因（集諦）ではなく、未来世の五蘊（苦諦）の因（集諦）となる事が、知れるのである。この五因の中において、もし、人が、業について、慎重に考慮するならば、彼は以下の事に非常に満足して同意するであろう。過去世の集諦が原因で、苦諦が、今世に

において生起する、と。もし、人が、今世において生起する苦諦（五蘊の結生など）は、過去世の中において造した所の業（集諦）が縁である事に、同意しないのであれば、彼は、更に一步進んで、以下の様に考慮しなければならないであろう。正等正覺菩提（*sammāsambodhi*）を成就する為に、四阿僧祇劫と十万大劫の長きに亘って、波羅蜜の修行しなければならないのではないか：または波羅蜜を二阿僧祇と十万大劫を修して、辟支菩提（*paccekabodhi*）を成就する：または、上首（＝主席）弟子菩提（*aggasāvaka*）を成就する為に、二阿僧祇劫と十万大劫の長きに亘って波羅蜜を修行しなければならないのではないか：または、大弟子菩提（*mahāsāvaka*）を成就する為に、十万大劫に亘って、波羅蜜を修行しなければならないのではないか、と。

推理と自らの体験（*anumāna* & *paccakkha*）

‘*Ayaṃ lokiyo ayaṃ lokuttaro*’ti ariyaṃ aṭṭhaṅgikam maggaṃ
yathābhūtaṃ na pajānāti ajānanto lokiyamagge abhinivisitvā lokuttaraṃ
nibbattetuṃ na sakkāti.（《中部註》）

もし、禅修行者が、過去は已に、存在しないのだと思い、未来もまた、未だ来ていないと思い、故に、ただ推理（*anumāna*）または憶測の方法でもって、過去と未来を識別、識知しなければならないのだ、というのであれば：そして、推理の方法でもって、「現在の五果の生起は、過去の五因が原因であり、未来の五果の生起は、現在の五因が原因である」という事が明瞭になると考えるならば、聖者は、推理や憶測の方法でもって「苦諦の生起は集諦が原因である」事を、証悟することができる事になる。

しかしながら、仏陀と註釈の二者は、共に、苦諦と集諦を、明確に、明晰に、必ずや、如実に知見しなければならない、と教えている：

Idaṃ dukkhanti yathābhūtaṃ pajānāti.
Ayaṃ dukkha samudayoti yathābhūtaṃ pajānāti.（《中部》）

唯一、当人が、己自ら苦諦、集諦及び苦諦の生起は、集諦が因である事を、徹底的に如実に知見して初めて、彼は道諦を育成する事ができる。すなわち、この時、彼は初めて、苦諦と集諦の三相（無常・苦・無我）を、観照する事が出来る様になり、観禅の修行に、取り組む事が出来る。世間道諦（*lokiya maggasacca*）を育成した後初めて、彼は出世間道諦（*lokuttara maggasacca*）及び、出世間滅諦（*lokuttara nirodhasacca*）を、証得することができる。故に、注意して頂きたいのは：過去と未来を識別し了解する事は、12 因縁を、如実に知見する為には、決して欠かす事の出来ない（+修行である）事を（+忘れてはならないのである）。

縁摂受智の体験 (Paccaya Pariggaha Nāṇa)

Vipassakena pana kammantarañca vipākantarañca ekadesato jānitabbarū.

(《清浄道論》)

Ekadesato jānitabbarū anavasesato jānitarū na sakkā avisayattā.

Sabbena sabbarū ajānate paccayapariggaho na paripurati. (《大疏鈔》)。

その意味は、これほど多く、複雑な業及び果報（異熟、vipāka）の関係性の中において、観を修習する者（vipassaka）は、ある種の業と、その果を、体験・証悟する必要がある、という事である。一切の業、及びその果を遍知する事は、弟子（sāvaka）に属する範囲ではなく、仏陀の一切知智（sabbaññutāñña）の範囲に、属するものである。故に、禪修行者は、それらを遍知することはできない。しかしながら、もし、人が、何等かの業、及びその果を体験・証悟していないのであれば、彼は、縁摂受智を成就することはできない。これが、上に述べた註疏の文言の含意である。

業、及びその果の、体験・証悟をしていないならば、縁摂受智を成就する事は出来ない為、禪修行者はそれらを、ある種のレベルまで、明確にして、縁摂受智の体験・証悟に、対応するべきである。

あなた方が知っている様に、仏陀は、12種類の悪業の果報に遭った。すなわち、背中の激痛、金佳（Ciñca）の誣告、大象 Nalagiri の攻撃、提婆達多（Devadatta）の落とした大石の破片による怪我などなどである。これらの果報について、一つひとつの項には、皆、それが発生するべき業があった。同様に、この一期の生命の内に、人は、各種の異なった可喜所縁（iṭṭhārammaṇa）及び不可喜所縁（aniṭṭhārammaṇa）に出会うが、それらはすなわち、彼の善果であり、悪果である。これは自然な出来事である。可喜所縁を体験する事は、善業の為であり不可喜所縁を体験するのは、不善業の為である。多くの異なった善業があり、それぞれ、異なった可喜所縁を引き寄せる。同様に、多くの異なった悪業があり、それぞれ、異なった不可喜所縁を引き寄せる。弟子（sāvaka、また声聞とも）は、これら一切の業及びその果を遍知する事は出来ないが、ある程度は知る事が出来るのである。



神通と観禪 (Abhiññā & Vipassanā)

ある種の人々は、宿住随念智 (pubbenivāsānussati abhiññā) でもって、過去世を知る事を受け入れるし、また、天眼通 (dibba cakkhu) の未来分智 (anāgataṃsañña) でもって、未来世を知る事を受け入れながら、しかし、観禪で、過去と未来の五蘊を、識知する事を厭う。観智でもって過去と未来の五取蘊 (pañcupādānakkhandhā) を識知する事に関する仏陀の教えと註釈は以下の通り :

Ye hi keci bhikkhave samaṇā vā brāhmaṇā vā anekavihitaṃ pubbenivāsaṃ anussaramānā anussaranti, sabbe te pañcupādānakkhandhe anussaranti etesaṃ vā aññataraṃ.

Katame pañca?

‘Evaṃ rūpo ahoṣiṃ atītamaddhāna’nti, iti vā hi bhikkhave anussaramāno rūpaṃ yeva anussarati... Evaṃ vedana... Evaṃ sañño...

Evaṃ saṅkhāro... Evaṃ viññāṇo...(Saṃyutta Nikāya, Khajjaniya Sutta)

Pubbenivāsanti na idaṃ abhiññāvasena anussaraṇaṃ sandhāya vuttaṃ, vipassanāvasena pana pubbenivāsam anussarante samaṇabrahmaṇe sandhāyesaṃ vuttaṃ. Tenavāha... ‘sabbe te pañcupādānakkhandhe anussaranti, etesaṃ vā aññatara’nti. Abhiññāvasena hi samanussarantassa khandhāpi upādānakkhandhāpi khandhapaṭibaddhāpi paññattipi ārammaṇaṃ hoti yeva. Rūpaṃ yeva anussaratīti evaṃ hi anussaranto na aññaṃ kiñci sattaṃ vā puggalaṃ vā anussarati, atīte pana niruddhaṃ rūpakkhandhameva anussarati. Vedanādīsupi eśevanayoti. (《相応註》)

「比丘たちよ。ある種の沙門と婆羅門（比丘を言う）は、智でもって、多くの過去世の諸蘊を思い出し、識知する事ができる。これらの沙門及び婆羅門は、智でもって、過去世の五取蘊、またはその一部を、思い出す事ができる。」

上に述べたパーリ経文の中において、仏陀は「宿住」 (pubbenivāsaṃ) という詞を使っている。宿住随念智 (pubbenivāsānussati abhiññā) でもって、過去世の蘊を思い出した、と言っているのではない。仏陀が「宿住」と言う時、その詞の意味は、あれら沙門と婆羅門は、観智の力でもって、過去の蘊を思い出す事ができる、と言っているのである。

故に、仏陀は以下の様に言う :

‘...sabbe te pañcupādānakkhandhe anussaranti etesaṃ vā aññataraṃ..’

その意味はすなわち、「・・・これら沙門及び婆羅門は、智でもって五取蘊を思い出す事ができる。彼らはまた、智でもって、この五者の内の一を、思い出す事ができる。」

観智の力でもって（＋思い出しているのだという事に）言及するのは、宿住随念通には、四種類の所縁が、あるからである：

- 1、出世間法を含む五蘊。
- 2、出世間法を含まない五取蘊。
- 3、五蘊と関係のある族系、美、食物栄養、楽しさ、痛苦等。
- 4、各種の名称概念。

上に述べたパーリ経文の中において、智でもって、この四種類の所縁を識知する様に、とは言っていない。仏陀は、智でもって、過去世の五取蘊、またはその内の一を、識知する様にと教示しているにすぎず、故に、仏陀は、観智でもって、過去蘊を識知する様にと言っている。宿住随念通でもって、それらを識知する様にとは言っていない。観智でもって、過去蘊を識知している時、「有情」とか「人」とかを、識知しているのではなく、ただ過去において、已に滅した所の、色、受、想、行と識を、識別しているのである。

上に述べたこれらは、宿住随念通と観智の間の違いに関してであり、（＋禅修行者が）観智でもって、過去と未来を識知できる様にと、参考としての資料を、提供したものである。

因を追尋する方法

Paccayasamuppanne hi apariggahite paccayāpariggaho na sakkā hoti kāturaṃ. Tasmā dhammaṭṭhitiñāṅgahaṇeneva tassa hetubhūtaṃ pubbe siddhaṃ nāmarūpavavatthānañāṇaṃ vuttameva haṭṭhi veditabbaṃ. （《無礙解道註》）

上に述べた《無礙解道註》の定義によると、智でもって、因（すなわち、縁摂受）を識別したいと思う禅修行者は、先に、名色分別智（nāmarūpavavatthāna-ñāṇa）を、証得する事に尽力しなければならない。すなわち、その名を縁生法（paccayasamuppanna、または縁起）と呼ばれる所の、果（名色）を先に、識知し了解しなければならないのである。

その意味は、智でもって、過去の因を識別・了解したいと思う禅修行者は、先に、過去の因によって生起する所の、現在の名色（縁生法、paccayapanna dhamma）と、更に遠い過去の因によって生起した所の、過去の名色（縁生法）を識知し、了解しなければならない、という事である。

また、もし、禅修行者が「現在の五因によって、縁生法と呼ばれる所の、未来の五果が、生起する」という事を識知、了解したいのであれば、彼は、先に、智でもって、現在の五因（すなわち、無明、愛、取、行と業）が依存する所の、現在の名色（縁生法）及び、これら現在の五因によって、生起するであろう未来の五果（縁生法）を、識知、了解出来ていなければならない。唯一、この様にして後に初めて、彼は過去の因を容易に追尋する事ができ、現在の果の生起は、過去の因を縁にしている事を識別、識知する事が出来るのである。同様に、彼はまた、智でもって未来果の生起は、現在の因を縁にして、生起するのだという事も理解しなければならない。更に遠い過去世と未来世を追尋する方法は、またこの様に、である。

こうした事から、禅修行者は、先に注意を払わねばならないのは、「因が原因で、果が生起する」という事を、いまだ識知、識別できていないのであれば、彼は先に、過去の五蘊、現在の五蘊及び未来の五蘊というこれらの事実を、識知、了解しなければならない、という事である。

五種類の縁起の教法

《清浄道論》（第 17 章）と《迷惑氷消》の、縁起分別篇の中において、藤収集者が藤を切る比喻でもって、四種類の縁起の教え方を描写している。それはすなわち：

- 1、随順縁起法（*anuloma paṭiccasamuppāda*、すなわち前から後ろに）、「無明を因として、行が生起する」から「生を因として、老死が発生する」まで。
- 2、中間の「受」から「生」までの生起は、「有」があるが故であり・・・、すなわち中間から末尾へ。
- 3、逆縁起法（*paṭiloma paṭiccasamuppāda*、後ろから前に）、「老死の発生は、生が原因である」から「行の生起は、無明が原因である」まで。
- 4、「四食（*āhāra*）の生起は、愛が原因であり：愛の生起は、受・・・」から「行の生起の原因は無明である」。すなわち中間から前へ。
- 5、註釈においては、第五番目の教法に、言及している：
'*Atīte hetavo pañca, idāni phala pañcakaṃ.*'その意味は、すなわち、
 - 5.1 「過去の五因によって、現在の五果が、生起する」
 - 5.2 「現在の五因によって、未来の五果が、生起する」

上に述べた五法の内、禅修行者は、己自身が好きな方法を選んで、因または因果を追尋する。この五法の内、当書においては、主に、第五法による因果の識別について、解説する。因を追尋し始めたばかりの頃、中間から前端までを追尋する方法を採用する（+のがよい）。

中間から前端までの因を追尋する時、（《無礙解道註》の教えに従えば）、もし、禅修行者がすでに、今世から過去世までの五蘊を識別、了解しているのであれば、（+この種の修習は）非常に容易である。こうしたことから、今世から、過去世までの五蘊を、先に識別する。これは、宿住随念に基づいて、相継続して、過去の蘊を識別、了解する方法である。今世から過去世までの、五蘊を相継続して識別し、了解できたならば、禅修行者は、更に一步進んで、智でもって、以下の事柄を識別・了解する（+様に修習する）：「（過去の五蘊に依存して生起した所の）過去の五因によって、現在の五蘊が生起する」。もし、縁起第五法によって、因果を識別・了解し、因果を連貫する事ができたならば、その他の四法もまた、容易に了解する事ができる。

心（すなわち智）を過去に向かわせる

先に、順序に従って、定力を育成する。次に、内部と外部の名色法を識別し、了知する。特に、第六グループの名色によって、過去を識別する。この方法を採用する、禅修行者の多くは、成功する事が多い。

先ほど発生したばかりの、過去の名色法の、識別から始める（これは、宿住随念の段階である。後ほど、どの様にして、因果関係を識別するのかを、説明する）。まだ座禅・瞑想する前に、禅修行者は先に（蠟燭、または灯）の光、または水、または花を、仏陀に供養しなければならない。その後、発願する。もし、いまだ涅槃を証得しておらず、輪廻を継続する必要がある場合、来世は、比丘になりたいと願う、または女性になりたいと願う、など等（個人の願望に依る）。願を発した時に生起した所の、心路過程を識別する。

その後、座禅・瞑想する時、順序に従って、定力を育成する。その後、内外の名色法を、識別する。特に、法所縁グループの、善名法を主とする。もし、禅修行者が止行者である場合、彼は、ジャーナ名法（*jhāna nāma dhamma*）を識別する事を、主としなければならない。その光が、非常に強くなった時、比丘または女性になりたいと願を発した時、涅槃を証悟したいと願を発した時、先ほど、仏陀に光の供養、または水の供養、または花の供養をした時の、心路過程を識別する様、チャレンジする。

これらの名法を識別する時、先に、それらが依存している所の、心所依処（*hadayavatthu*）、及び心臓の中の、54種類の色法を、識別しなければならない。その後、心所依処に依存して生起する所の、有分心を、識別する。有分心を識別した後、有分心の前後を識別する。それは、有分心（+と有分心）の間に生起する所の、名法を識別するのであるが、それがすなわち、心路過程である。これらの名法を識別できるようになったならば、それらは、座禅・瞑想する前に発した願の、心路過程と同じであ

るかどうか、を調べてみる。もし、同様であれば、彼は、最も近い過去の、名色を、識別する事ができたのだと言える。

もし、禅修行者が止行者である場合で、梵天に生まれたいと発願するならば、彼を当該の界に生まれさせ得る所のジャーナを、十分に修習しておかねばならない。たとえば、当該のジャーナが、第四禅である場合、再度第四禅に入る。彼は第四禅に入る前、または入った後、梵天になりたい、または己が、梵天の様な傾向の生活に向かう様にと、発願する事ができる。

「発願」または「内心の傾向」とは、無明、愛及び取が、最も顕著な煩惱輪転 (*kilesavatta*) を造 (ナ、以下同様) しているのである。当該のジャーナに、何度も入るという事は、すなわち、業輪転 (*kammavatta*) を、造しているのである。すなわち、行と業である。

その後、次に、その煩惱輪転の名法、業輪転名法、及びこれらの名法の依存する所の処色を識別する。もし、これらの名色法を、識別する事ができたならば、彼は、最も近い、過去の名色を識別できたのだと言える。この様に、過去の名色を識別する時、心所依処色及び、有分心を識別する事を、主としなければならない。

煩惱輪転及び業輪転

前に述べた、生死輪転 (*samsāravatta*) を引き起こす所の、無明、愛、取、行及び業 (*avijjā, taṇhā, upādāna, saṅkhāra, kamma*) に関して、ここにおいて、更に一步進んで、解説する。上に述べた、一番目の発願の例について：

1、無明：「比丘」または「女性」がいる、と誤解する (20 個の名法)。

2、愛：比丘または女性の生活を、渴愛する。(20)

3、取：比丘または女性の生活に、執着する。(20)

(ここにおいて、20 とは、貪見グループを指す。それはまた、19/22/21 である可能性もある。心理的な状況によって異なる)

4、行：仏陀に光、水、花などの供養をした善思グループ (*kusala cetanā*) (信慧グループ、34 個の名法)。

5、業：34 個の名法の業力 (*kamma satti*)。

名を煩惱輪転と呼ばれる (1) 無明、(2) 愛及び (3) 取は、多くは、意門引転と七個の速行として、出現する。もし、色所縁を目標として取る場合、例えば、比丘の生活、または女性の生活の色所縁 (*rūpārammaṇa*)、彼所縁は生起する。速行に出現するのは、貪見グループ (20) であり、名を業輪転と呼ばれる (4) 行と (5) 業は、すなわち、信慧グループの意門速行心である。もし、喜俱及び智相応であれば、すなわち、

34 個の名法がある。この善グループは、無常法であるため、その生、住、壊滅の生命期が終了すれば、それは即刻、滅し去る。しかしながら、それらは業力 (kamma satti) である為、名色流の中に留まった後に初めて、滅する。そして、この業力は彼をして、未来世の中において、彼が願った様に、比丘になったり、女性になったりせしめる。それらは、滅し去った後には、如何なる業力をも残す事のない果報名法 (vipāka nāma、異熟名法)、または唯作名法 (kiriya nāma) とは異なる。当該の業力は、業と呼ばれる。それは異刹那業力 (nānākkhanika kamma satti) である。

二番目に発願した所の、梵天の例では：

- 1、無明；「梵天」が存在していると誤解する。(20)
- 2、愛：梵天の生活を渴愛する(20)
- 3、取：梵天の生活に執着する(20)
- 4、行：梵天になりたいという発願に沿って、累積した所の、第四禪の善思(30)。
- 5、業：行(31)の中における業力(kamma satti)。

ここにおいて、名を煩惱輪転と言う所の、無明、愛、取は貪見グループ(20)に属する。行はすなわち、第四禪のジャーナ名法(31)である。それらは、意門速行心路 (manodvārika javana citta) である。もし、禅修行者が、智でもって、最も近い過去の名法(すなわち、煩惱輪転及び業輪転)を、識別する事ができた上に、それらの名密集を、究極名色法を知見できるまでに、看破する事ができるならば、彼はすでに、最も近い過去の名色法を、識別する事に成功したのだ、と言える。

色相の出現

最も近い、過去の名色法を識別している時、もし、発願した所の、色相が出現した場合、その色相の、四界(四大種)を識別する。それは、多くの微細な色聚に変化する。それらの、色聚の中の色法を、識別する。次に、全体・一体としての、六処および、43 身分の色法を、識別する。特に、意門の中の、54 種類の色法を、識別する事を主とする。心所依処色(意門)を識別する。その後、心所依処に依存し、また、有分心(十と有分心)の間に出現する所の、心路過程名法を識別して、それらが先ほど発願した所の、過去の名法であるかどうかを、検査する。もし、二者が同じものであれば、最も近い過去の名法の識別に、成功したのだ、と言える。

(+この修習に)成功したならば、智をば、更に遠くの過去に向かわせて行き、徐々に、過去の名色法を識別する。例えば、昨日の名色法、前日の名色法、一月前の名色法、去

年の名色法など等である。この様に識別している時に、もし、色相が出現したならば、上に述べた方法でもって、究極法を知見出来るまで、それらの四界を、識別する。引き続き、母胎の中における、第一期の胎児の段階（kalala rūpa、卵黄色）まで、過去の名色法を識別する。

過去世の臨終の時に向かって

人類が結生（paṭisandhi）する時、三種類の色聚が生起する。すなわち、心色十法聚（hadaya dasaka kalāpa）、身十法聚（kāya dasaka kalāpa）と性根十法聚（bhāva dasaka kalāpa）であるが、それはまた、30種類の色法でもある（三種類の色聚または、30種類の色法しかないが、しかし、一つひとつの種類の数量は、非常に大きい）。名法については、もし、禅修行者が三因者（tihetuka）である場合で、その結生識が喜俱である場合、それは34個の名法（心と心所）の、信慧グループとなる。その智が鮮明になるまで、これらの名色法を識別する。智でもって、究極法を識別、了解できる時、以下の様な、審察をする。

So 'idaṃ nāmarūpaṃ na ahetu na appaccayā nibbattam, sahetu sappaccaya nibbattam. Ko panassa hetu, ko pana paccayo'ti upaparikkhanto 'Avijjāpaccayā taṇhāpaccayā kammaṃpaccayā āhārapaccayā cā'ti tassa paccayaṃ vavatthapetvā 'atītepi paccayā ceva paccayasamuppannadhammā ca, tato uddhaṃ satto vā puggalo vā natthi, suddhasaṅkhārapuñjā evā'ti tisu addhāsu kankhaṃ viharati. Ayaṃ pana vipassanāsankhārasallakkaṇā ñātapaṇiññā nāma.（《迷惑氷消》）

上に述べた註釈に基づけば、これらの名色法は、因無く（hetu または janaka、すなわち、直接果を引き起こす所の、因）及び無助縁（paccayā または upatthambhaka）のみに、生起するという事は、有り得ない。それらは、唯一、因と助縁が具足した時にのみ、生起する。智慧の光でもって、過去を照らした後、もし、何が因で、何が助縁であるかと、審察するならば、禅修行者は、過去世の臨終の時に生起した所の、名色法、または臨終速行心（maraṇasanna javana）の目標を、見ることが出来る（この目標とは、業（kamma）、または業相（kamma nimitta）、または趣相（gati nimitta）の、三者の内の一である）。

もし、禅修行者が、臨終の名色法を識別する事が出来たならば、それはすなわち、非常に確実に、この三種類の目標の内の一つ（すなわち、業、または業相、または趣相）

を見つけた、と言える。このレベルになれば、(+修行において) 困難な事は、なくなる。当該の目標が、出現するという事は、その業力が、果報を齎したのが、原因である。故に、もし、その目標を探し出す事が出来たならば、すなわち、必ずや、彼は、今世に属する所の、果報蘊 (vipāka khanda、結生五蘊など) の因である所の、行と業を、見つける事ができるのであって、次に、当該の行と業に囲まれた、無明、愛、取、行を識別する。

智でもって、過去を審察している時、もし、禅修行者が、臨終の名色法を探し出す事が出来ず、ただ一体の死体の色相を、見るだけであるならば、その時は、死体の四界を、識別する。彼は、(+死体は実は) 色聚でしかない事を見るであろう。次に、これらの色聚の中の色法を、識別する。彼は多数の、時節生食素八法聚の中の八種類の色法しかない(+状況) を、見るであろう。

上の段で「多数の」と述べたが、というのも、禅修行者は時には、当該の死体の中に、生きた蛆虫の色聚を見る事がある。その為、(+修行者は) 明浄色聚、及び非明浄色聚が、混在して出現する死体を、見るのである。しかしながら、死体自体は、唯一、非明浄色聚の時節生色しか、存在しない。

当該の死体の色法を識別した後、次には、臨終の時に生起した名色法をみる為に、更に遠くの過去に遡る。もし、臨終の時の名色法を識別する事ができたならば、その時に生起した所の、臨終速行心の目標を識別する。もし、成功しないならば、臨終の時の心所依処を探し出す。その後、心所依処に依存して生起する所の、有分透明界 (意門) を識別する。その後、意門の前と後に遡って、識別する。臨終の時の意門を識別できて初めて、禅修行者は臨終速行心の目標 (すなわち、業、または業相、または趣相) を見つけ出して、識別する事ができる。パオ森林僧院の道場で縁起の修習をした禅修行者に関する統計によると、多くは、業または業相が出現し、趣相が出現する禅修行者は、非常に少ない。

もし、当該の目標が業である場合で、かつ、禅修行者が再度、もう一度、その業を造したのならば (《アビダンマッタサンガハ》の中において、言及されている所の、**abhinavakarāṇavasena**、その意味は、再度、再び造した)、禅修行者は、更に一步進んで、真正に、その善業を造した時に生起した所の、名色法を識別しなければならない。

識別の方法は以下の通り：

先に、この善業を造した時の色相の四界を識別する。もし、色聚が見えたならば、究極法を証得できるまで、それらを識別する。特に、心臓の中の、54 種類の色法を識別するのを主とする。その後、心所依処の意門を識別する。その後、意門において生

起する所の名法（すなわち、あの善業を造した時に生起した名法）を識別する。智でもって、正確に、造したのは、どの様な善業であるのか、及び生起したのは、どの様な善心（すなわち、意門速行心路過程）であるのかを、識別する。もし、繰り返し、前へ、また後ろへと識別する時、禅修行者は、当時において生起した所の、善速行心路過程、及び、どの様な因の無明、愛、取でもって、その様な善業を造したのかを、見つけ出す事ができる。言い換えれば、禅修行者は無明、愛、取、行に囲まれた善行と業を見つけ出す事ができる。

註：人間としての生を齎す事の出来る行と業は、必ず、善行と業であるが故に、ここにおいては、善行と業に言及した。

煩惱輪転の三

- 1、涅槃を証悟する事の出来る「比丘」が、存在していると錯覚するのは、無明である。
 - 2、涅槃を証悟する事のできる比丘の生活を、渴愛するのは、愛である。
 - 3、涅槃を証悟する事の出来る比丘の生活に、執取・執着するのは、取である。
- これらの無明、愛、取は、煩惱輪転と言う。それらは、それら三個だけで生起するという能力は持ち合わせておらず、必ず、相応する心と心所（たとえば、触、受、想、思、識等々）と共に、同時に生起する。それらの多くは、貪見グループの、20個の名法である（もし、喜が無いならば、ただ 19個の名法となる）。

それはまた、有行または無行（*sasaṅkhārika* または *asaṅkhārika*）であり得る。心路過程に基づいて、それらの多くは、意門引転及び、七個の速行において出現する。彼所縁は、生起する事もあれば、生起しない事もある。もし、人が、己が願望した結果、なり得た所の、比丘の名色法に執着するならば、彼所縁は、生起する。それは以下の様に出現する：

- 1、意門引転：12個の名法がある（心と心所）。
- 2、一つひとつの速行心：多くは、20個の名法（貪見グループ）。
- 3、もし、彼所縁が生起したならば：12個の名法（喜俱の場合）。これらの名法の中において：
 - 1、受は受蘊である。
 - 2、想は想蘊である。
 - 3、その他の心所は、行蘊である。
 - 4、識は識蘊である。

こうしたことから、これらの名法は、四個の名蘊がある事になる。
(これらの名法が依存する所の) 心所依処、及び意門の中の、54の色法は色蘊である
(非真実色法は、この中に含まれる)。これらを連結したならば、以下の様になる：

- 1、意門引転において、五蘊がある。
- 2、一つひとつの速行心に五蘊がある。
- 3、一つひとつの彼所縁にも、五蘊がある。

註：各々の状況によって、彼所縁は大果報彼所縁、または無因不善果報彼所縁、または無因善果報彼所縁であったりする。それらは、各々、34-33 等々として生起する。
ここでは、喜俱推度彼所縁のみ、言及した。

過去の因の中の、無明、愛、取（すなわち、行と業を取り囲む煩惱輪転）を識別する時、禅修行者は、究極法を知見するまで、これら五蘊を識別し、名と色の密集 (ghana) を、看破しなければならない。諸々の智の次第によると、（+上に述べた）これらは、名色分別智である (nāmarūpa-paricchedañña)。

業輪転の内容

食物を仏塔（=仏陀）に布施する時：

- 1、生起する善速行心路過程 (kusala javana vīthi) は、受者（すなわち、仏陀）を所縁とする。
- 2、生起する善速行心路過程は、施物（=食物）を所縁とする。
- 3、その後生起する善思 (kusala cetanā=kusala javana vīthi) は、直前の布施をした時の善思を所縁とする。

食物を布施する時に生起するのは、どのような善速行心路過程なのであるか、を正確に識別する。もし、それらの善速行に楽受があり、また、智相応 (ñāṇa sampayutta) がある時、それらの名法（心と心所）は、34 個になる。これらは信慧グループに属する。心路過程 (vīthi) に基づいて、それらは、以下の様に出現する：意門引転、七個の速行心、彼所縁（二個）は、生起したりしなかったりする。

- 1、意門引転の中には、12 個の名法（1 心 11 心所）
- 2、一つひとつの速行の中には、34 個の名法（1 心 33 心所）
- 3、一つひとつの彼所縁の中には、34 個の名法（1 心 33 心所）。

これらの名法は四個の名蘊である。意門の中の色法は色蘊である。故に以下の様になる：

- 1、意門引転の時、五蘊がある。
- 2、一つひとつの速行心には五蘊がある。
- 3、一つひとつの彼所縁には五蘊がある。

これらの五蘊を識知し、識別し、分別する智は、名色分別智である。

これらの煩惱輪転五蘊及び業輪転五蘊は、今世において、比丘として生まれた果報五蘊の因である。業を造した（願望の如くに、比丘の五蘊、または名色が生起する）時に生起する、一つひとつの速行心の中には、**34** 個の名法があり、これは行と呼ばれる。それはすなわち、未来世を引き起こす為に「尽力」するのである。

これらの行法が無常法である為、それらは生起した後、即、壊滅する。しかしながら、果報蘊と異なっている点は、それらは、名色流の中において、何等の業力も残さないのである。それらは、ただ、未来の五蘊を引き起こす業力を、名色流の中に残して後、ようやく、壊滅する。上に述べた例では、その未来の五蘊は、涅槃を証悟する事のできる、比丘の生命である。この業力がすなわち、業である。

縁摂受の段階

もし、禅修行者が過去世に造（ナ、以下同様）した因を、見つけ出す事が出来たならば、すなわち、無明、愛、取、行及び業であるが、その業（すなわち、業力）と、今世の結生の時の、**30** 種類の業生色を、相互に連貫（=関連付ける）してみる。業と業生色の間に、関係があるかどうかを、識別する。ちょうど、心と、心生色の間には、関係がある様に、禅修行者は、業と業生色の間に、関係があるかどうかを、正確に、識別しなければならない。

もし、関係があるならば、禅修行者は、己自ら、業生色が、当該の業によって、継続的に生起するのを見ることができる。もし、それらの間に関係がないならば、それはすなわち、禅修行者は、業生色（*kammaja rūpa*）の生起は、当該の業が原因であるという事を、見ていないのである。

この場合、彼は引き続き、果報を引き起こす所の業を、探さねばならない。前に遡るか、後ろに辿っていくかして、臨終の時に出現した所の、有分心の間の所縁を、照らし見るのである。彼はやがて、あの果報を引き起こす所の業を、見つけるであろう。ある種の禅修行者にとって、臨終において、二個または三個の業が、有分心の間に出現する。まさに果報を引き起こさんとする、これらの業は、「ぶつかり合い」または「奪い合い」をやっている。ちょうど牛囲いに囲い込まれた、一群の牛たちが、早朝に柵を開けると、

我先に、外へ出ようと、争う様なものである。ある種の人々にとって、諸々の業は、臨終の時に「争う」のである。ちょうど、牛囲いの門の傍にいる猛牛が、角で他の牛を押しつけて、先に外へ出てくる様なものである。臨終の時に出現する、諸々の業の中において、最も強く、かつ最も最後に出現する業が、果報を先導する事になるのである。

更に一步進んで解説する：果報を引き起こす業は、最後の速行心の目標（*nimitta* 注36）である。それはすなわち、果報を引き起こさんとする業力によって、業、または業相、または趣相が、臨終速行心の目標として、出現するのである。もし、多くの業が、臨終の時に出現するならば、禅修行者は、臨終速行心の目標を「捉まえる」事が出来たその後に、前に述べた方法でもって、当該の目標の無明、愛、取、行及び業を、追尋しなければならない。

もし、多くの業が臨終の時に出現し、かつ、果報を引き起こさんと争うならば、その中の一つは、果報を直接引き起こす因業（*janaka kamma*、生業とも言う）である可能性があり、その他の業は、因業を支える所の、助業（*upatthambhaka kamma*、助縁とも言う）でありえる。過去世の、臨終の時に出現する目標を、識別する事にチャレンジしている時、禅修行者は、臨終速行心の前の目標を識別し、その為に、臨終速行心の目標を、見逃す可能性がある。

もし、本当に見逃したならば、彼は先に、助業を見つける事になる。もし、助業と結生業生色との間に、関係があるかどうかを、識別する事にチャレンジすれば、彼は、それらの間には、関係がない事が知れるであろう。もし、先に見つかったのが因業である場合、かつ、智でもって、それと、結生業生色の間に、関係があるかどうかを、識別する事ができた場合、彼は、それらの間には、関係がある事を知るであろう。こうしたことから、過去の業を追尋する時、禅修行者は、先に、因業、または助業を、見つける事になるかも知れない。

故に、禅修行者は、繰り返し、重複して、識別し、検査し、連貫して、死亡心（*cuti citta*）に最も近い、最後の臨終速行心の目標を「捉まえる」必要がある。当該の目標が出現するのは、すなわち、果報を引き寄せる所の、業力が原因である為、検査と連貫を通して、業（業、または業相、または趣相として顕示される）を、正確に識別する事ができるのである。

注 36：《智慧の光》では、*nimitta* は、通常「相」として訳されるが、ここでは目標の意味である。

目標を変える

死亡心(ただし、臨終速行心の前)の近くで出現する業は、ある時は、如理作意 (*yoniso manasikāra*) 不如理作意 (*ayoniso manasikāra*) などなどを通して、変化する事がある。以前、ある一人の比丘がいたが、彼は、ソーナ尊者 (*Ven. Soṇa* 阿羅漢) の父親であった。臨終の時、まず彼の心中に出現したのは、地獄の趣相であった。(その後、彼は人に担がれて仏塔の前に行き、仏塔に花を献じた) その後、彼は、仏塔に花を献じた事をば、目標として、変更する事ができ、その上、一人の女性の天神の相も、出現した。当該の比丘の出来事から、臨終の時の目標は、如理作意または、不如理作意に基づいて、変更する事ができる、ことが分かるのである。

目標の改変が原因で、禅修行者は、過去の因を追尋する時、臨終速行心の目標を見逃して、因業ではなく、先に、更にもっと前に生起した所の、助業を見つけるかもしれない。この種の状況の下では、禅修行者は、先に助業 (*upatthambhaka kamma*) を見つけ、その後に、検査を通して、因業 (*janaka kamma*) を見つけることになる。

もう一つは、臨終速行が未だ生起していない前、多くの目標が、出現する可能性がある。臨終速行心の目標は、臨終速行心がいまだ生起する前に、出現する可能性がある。如法居士 (*Upāsaka Dhammika*) は、臨終の時、六ヶ所の天界から来た、六輛の馬車の相を見た。如法居士は、この六輛の馬車の中から、兜率天から来た馬車を選んだ所、その後は、兜率天の馬車だけが、最後の臨終速行心に出現する様になった、という事である。

因果の識別

臨終の時に出現する所の、目標に基づいて、過去の因を、追尋する時、例えば、その目標が、仏塔に食物を供養する事であるとして、食物を布施する時の、その名色法の中の無明、愛、取、行及び業を識別した後、次に、その業力と(十母胎内の)卵黄の時期の、30種類の色法 (*kalala rūpa*) と、関係があるかどうか識別する。因と果を順序良く何度も識別し、それらの組み合わせが、合っているかどうかをみる。もし、禅修行者が、因と果の間に関係がある(ちょうど、心と心生色の間に、因と縁の関係がある様)のを見たならば、彼は、以下の様に、因と果の関係を、識別しなければならない。

- 1、無明 (20) が原因で、結生業生色 (*paṭisandhi kammaja rūpa*) が生起する。
- 2、無明が因で、結生業生色は果である・・・。

この様に因と果を識別したならば、智でもって、因と果の間の関係を識別する。

この知見を縁摂受智という。

先に注意する点

色蘊（色法）の過去因は無明、愛、取、行及び業である。色法の現在因は心、時節と段食（citta、utu、āhāra）である。言い換えれば：

- 1、業生色（これは色蘊の一部である）の因は、無明、愛、取、行及び業である。これらは過去因である。
- 2、心生色の因は、心所依処に依存して生起する心である。
- 3、時節生色の因は（ほとんどの一つひとつの色聚の中の）（註 37）住時を迎えた所の、火界である（tejo dhātu）。
- 4、食生色の因は段食（āhāra）である。すなわち、業生食素、心生食素、時節生食素及び食生食素（kammaja ojā、cittaja ojā、utuja ojā、āhāraja ojā）である。

食物は、消化された後に、如何にして、食生食素を生じせしめるのか、及び、一つひとつの業生食素、心生食素、時節生食素と食生食素が、食生食素の支援の下に、如何にして、新しい色法を製造するのか、を理解する事。一つひとつの食素八法聚の中の食素は、次の食生食素の支援を受けて、再度、新しい食素八法聚を製造する事ができる。故に、食生食素（āhāraja ojā）は、食生色の因である。

註 37：色業処（rūpa kammaṭṭhāna）の段階においてすでに言及したが、業生、心生、時節生と食生色聚の中の火界（時節と呼ぶ）が、新しい一列の色聚を製造する時、最後の一粒の色聚は、新しい代の色聚を製造する事ができない。故に、上記本文では「ほとんどの一つひとつ色聚」と表現した。

四つの名蘊（4 Nāma khandhā）

果報四名蘊（vipāka 4 nāma khandhā）の過去因は無明、愛、取、行及び業である。果報四名蘊は、非心路過程心（また離路心とも。すなわち、心路過程の中の心には出現しない）に属する有分心、結生心と死亡心（bhavaṅga、paṭisandhi、cuti）、及び心路過程心に属する五識（たとえば、眼識）、領受、推度と彼所縁（pañcaviññāṇa、sampaṭicchana、santīraṇa、tadārammaṇa）である。

これらの名法の現在因は：

- 1、依処 (vatthu、これらの名法は、依処色に依存しないで生起する事は出来ない。)
- 2、所縁 (付合する所縁が、正確な根門に出現した時にのみ、これらの名法は、生起する事ができる。唯一、ある種の所縁が識知された時に初めて、識知 (心識) は、生起する)。
- 3、触 (phassa、相応の名法[たとえば、触等々]は、俱生縁、相互縁[sahajāta aññamañña]などの力が、相互に支え合う事を通して、初めて生起する事ができる。)

心路過程の中に出現する所の、善、悪及び唯作名法 (kusala akusala kiriya nāma) すなわち、五門引転、確定、速行と意門引転は、過去因が原因で引き起こされる訳ではなく、現在因 (たとえば、依処、所縁、触、如理作意及び不如理作意) によって引き起こされる、名法である。故に、それらには、過去因はない。それらには、現在因しか存在しない、たとえば、依処、所縁と触である。もし、これらの事が理解できれば、禅修行者は、次に言及される所の識別法も、理解できるはずである。

(一) 一性理 (Ekattanaya)

禅修行者が、12 縁起支を識別している時、彼は、少なくとも、四つの理を、理解しておかねばならない。すなわち、一性理 (ekattanaya)、異性理 (nānattanaya)、不作為理 (abyāpāranaya) 及び、如法性理 (evaṃ dhammatānaya) である。縁起を修習する時、この四つの理は、非常に重要である。

一性理：過去世、今世と未来世において、それぞれに、過去の名色、現在の名色及び未来の名色がある。それらは：

- 1、過去因を累積した所の、過去の名色。
- 2、今世の結生の時から始まって、今現在、観禅の修習をしている、または、12 因縁の修習をしている時に、生起する名色。
- 3、もし、今世で阿羅漢を証悟する事ができない場合で、かつ、引き続き、輪廻しなければならぬ時、この一刻 (すなわち、いま現在、12 因縁を修習している時) から、最後の未来世において (+の間に) 生起する所の、未来の名色。

禅修行者は、過去に生起し、現在生起しつつあり、また、将来生起するであろう名色は、同一の、相続性を持つ名色流である事を識別しなければならない。

更に詳しく解説する：過去世において造 (ナ) した善業が、この一世の人生の心を引き起こす事を識別する時、また、この一生の心を識別する時、それらは、同一の相続流 (santati) の中において発生しているのだという事を理解するまで、識別しなければな

らない。過去世の名色流の一部分である所の有分心が自分のものであるかどうかを、正確に識別する。

もし、それが真実に、己自身の有分心である時、禅修行者は、非常に容易に、それが己自身に属するものである事が分かる。有分心は、一生の内で、最も多く、頻繁に、密度高く発生する為に、故に、ここにおいて、それに言及し、（+禅修行者にとって）それを理解して貰う助けとする。その他の名色もまた、同様であることに、注意する事。色相続流もまた同様の方式で生じる。すなわち、同一つの相続流の中に（+おいて生じるのである。）

3 または 4 人

ある時には、禅修行者は（過去世において）3 または 4 人の、まさに善業を造（+、以下同様）している人を、その善業を造している所の目標の中において、見る事がある。もし、この様であれば、彼らの四界を、逐一識別し、次に、彼らの名色法を識別する。一人ひとりの有分心を、識別する事を主とする。禅修行者は、非常に容易に、当該の有分心が、己自身のものであるかどうかを、識別する事ができる。その理由は、禅修行者が慧眼で己自ら、今世の己自身の有分心及び、過去の有分心が、同一の名（マ）相続流の中に、出現するのを知見したならば、当該の、過去の有分の心は、己自身のものであるという事を、理解する事ができる。

まさに識別している所の、過去の有分心が、己自身のものでないならば、彼は、それが己自身のものでない事を、非常に容易に、知る事ができる。その理由は、それが、己自身の名（マ）相続流とは、何等の関係もないからである。もし、過去の名色が、己自身のものでない場合、それと己自身の名色相続流とは、同じ一つの相続流ではなく、それらの間には、関連する事がない（+という事が分かるのである）。

己自身の過去世と、今世の名色流は、相続的・連続的に生起するものであり、その前後の関係性は、連続的、連携的に、同一の相続流の中において出現する。もし、禅修行者が、斯くの如くに、名色は、同一の相続流の中において生起している事を、知見することができるならば、彼は已に、一性理を知見したのだと言える。今世及び、未来世の名色流に関して、それらは、同一の相続流の中において生起する事を識別する方法もまた、同じである事を、理解しなければならない。



断見と常見

この智は、絶え間ない名色相続流、因果の間に連貫する所の関係、たとえば、過去世の因と今世の果；今世の因と未来世の果などを、徹底的に知見する。故に、「生命はただ揺り籠と棺桶の間にのみ存在する。死後には、生命と言うものはなく、棺桶の後にはまったく何もない」という断見 (*uccheda ditṭhi*) を断じ除く事ができる。

その反対に、もし、因果の間にある関係を、正確に知見する事ができないマ、それらを間違って識別するならば、常見 (*sassata ditṭhi*) が生起する。それらを、間断の無い因果関係であり、また、間断の無い名色相続流は、単一の、一個の生命であると誤認し、識別するのである。因名色と果名色の二者の無常・苦・無我を知見していなが故に、彼は当該の邪見に執着し、その名色相続流は、単一の、一個の生命に属しているのだと見做してしまう。この種の邪見を、常見と言う。

(二) 異性理 (Nānattanaya)

因名色と果名色 (たとえば、無明、行、識、名色、六処、触、受、愛、取、有、生、老死などなど) は、同一の、一個の相続流の中において、生起する事、また、因果の関係を保つものである事を識別できる時、以下の事柄も、知らねばならない。

- 1、それらをして、個別の心識刹那と、個別の色聚である、と識別できる事。
- 2、智でもって、一個の心識刹那において生起する所の色聚と、名聚もまた、識別できる事。
- 3、(上に述べた通り、諸々の縁起支は、単独で生起する事はできないが故に、それらは自然・当然に、名聚・色聚と呼ばれる組み合わせ・構造を形成する事によってのみ、生起する事ができる。) 名聚 (すなわち、同じ一つの心識刹那の中において生起する所の名法) の中の、一つひとつの究極界 (*paramattha dhātu*) の自性相、および色聚の中の、一つひとつの究極界の自性相を、如実に知見できた後、新しい究極界だけが生起している事を、徹底的に知見できる時、彼は、已に異性理を理解した、と言える。

禅修行者は智でもって、究極界の相、作用、現起 (現象) と近因を知見しなければならない。禅修行者が己自身自ら徹底的に、因果の関係によって、新しい究極界が生起する事を知見できた時、彼は已に、異性理を了解して、常見を断じ除く事が出来る。

もし、彼の観法に誤謬があり、同一の名色流の中において、生起する所の名色法は、皆、各々個別の名色流に属するのだと思った時、彼は以下の様な断見を持つ：

「今世において、この私がそれを体験し、あの一生では、あの私がそれを体験した」と。

(断見とは、異なった名色流が存在するのだとする邪見である。あの、善または悪を造した人はこの人で、善報または悪報を体験している人は、また別の人間であると思う事)。

(三) 不作為理 (Abyāpāranaya)

諸々の因は、果を生起させようと、尽力している訳ではない。諸々の果にもまた、以下の様な作為はない：「もし、諸々の因が生起したならば、我々も生起しよう。」
無明にも、以下の様な作為はない：「私は、行を生起させよう。」
行もまた、以下の様な作為はない：「私は、識を生起させよう。」
無明、行等などに、まったく、何等の作為がない事を、不作為理という。
もし、禪修行者が、己自ら、徹底的に、不作為理を知見したならば、彼は、我見 (atta diṭṭhi)、すなわち、造作を行う所の「靈魂我」 (jīva atta) が存在している、という我見を、断じ除く事ができる。

諸々の因 (たとえば、無明) が、諸々の果 (たとえば、行) を生起せしめるのは、自性定法 (sabhāva niyāma) であり、何らかの造作があるが故に、果が生起せしめられる訳ではない。しかし、観法に誤謬がある時、無作見 (akiriya diṭṭhi) :
「何かを造したが、何も造していない」 (+という見解) を持つことになる。

自性定法

もし、因 (たとえば、無明) があるならば、果 (たとえば、行) は生起する。もし、因がないならば、果は生起しない。言い換えれば、無明、愛、取、行及び業の諸々の因がある時、識、名色、六処、触と受の諸々の果も、生起する。これはまさに、自性定法によって生起するのである (sabhāva niyāma siddha hetu bhāva)。
もし、人が、因が果を引き起こす、という自性定法を受け入れる事が、出来ないのであれば、業力と果報を、排斥、否定する無作見は、生起する。

(四) 如法性理 (Evaṃ Dhammatānaya)

ヨーグルトが、牛乳から出来ている様に、もし、因 (たとえば、無明) が、果を生じさせる時、その果は、確実・絶対的に (行) のみであって、その他の果が、生起する事は、有り得ない。言い換えれば、もし、無明、愛、取、行及び業の諸々の因が、果を生じさせる時、生起するのは、識、名色、六処、触と受の諸々の果であって、その他の果は、生起しえない。これが、如法性理である。もし、禪修行者が正確に、如法性理を知見する事ができたならば、因果を排斥する所の無因見 (Ahetuka diṭṭhi、すなわち、因というものは無いという邪見) と無作見 (すなわち、「做したことは、做したことになる」という邪見) を、断じ除く事ができる。

若し、観法に誤謬のある時、彼は、果は固定の因から生じるという事を、受け入れることが出来ず、また、因は、固定的な果を、引き起こすのだという考えを、受け入れる

事が出来ないが故に、無因見と定論 (niyata vāda) を、持する事になる。(《アビダ
ンマッタサガハ註》、《清浄道論》第 17 章)

定論 (Niyata Vāda)

定論とは、有情の善報及び悪報は、早くから決定されているものである、という考えであり、業力果報を否定する、邪見である。故に、修行者は知らねばならない。己自ら、縁起の法を、徹底的に知見する事は、各種の邪見を断じ除く、最上の法である事を。

要点

以下の四種類の目標 (所縁) は同じものである ;

- 1、前の一世の臨終速行心の目標。
- 2、今世の結生心の目標。
- 3、今世の有分心の目標。
- 4、今世において生起するであろう死亡心の目標。

この四種類の心の中において、禅修行者がいまだ未来を識別していないのであれば、彼は、(1) (2) 及び (3) の目標が、一致しているかどうかを、正確にかつ細心に、識別し、検査しなければならない。また、もう一点、この一生の結生心、有分心と死亡心の中の、心と心所の数量は、同じでなければならない、という事である。それらを何度も繰り返して、子細に、正確に、識別する事。この段階において、禅修行者はすでに、有分心を正確に、識別する事ができている。もし、それを識別する事が出来ないのであれば、結生心の名法を、識別する。その後、結生心の滅後 (及び心路過程が未だ出現する前) に生起する所の、心と心所の組み合わせ (有分心) を識別する。心路過程が、いまだ出現しない時、これらの有分心は、継続して生起する為、再度、諸々の心路過程の間に生起する所の、有分名法を識別すれば、この点を、明らかにする事ができる。



五蘊の構成

縁起第五法に基づいて、因果関係を識別する時、禅修行者は、一つひとつの、心識刹那の中の、五蘊を構成して後、その関係性を、識別しなければならない。結生心、有分心と死亡心は、非心路過程心 (*vīthi mutta citta*。離路心とも言う) は、心路過程には出現しない。禅修行者は、これらの非心路過程心を五蘊に構成し、次に、それらの関係を識別する。心路過程心に関しても同様である。蘊という詞の意味は、組み合わせという事である：

1、色蘊には 11 個の存在形式がある。すなわち、過去、未来、現在、内、外、粗い、微細、劣等、上等 (勝)、遠い、及び近い、である。漏法 (*āsava dhamma*) の目標、及び愛見 (*taṇhā diṭṭhi*) として、「私、私のもの」として、執着、執取される所の色蘊は、色取蘊 (*rūpupādānakkhandha*) である。

2、受蘊には、11 個の存在形式がある。すなわち、過去、未来、現在、内、外、粗い、微細、劣等、上等 (勝)、遠い、及び近い、である。漏法 (*āsava dhamma*) の目標、及び愛見 (*taṇhā diṭṭhi*) として、「私、私のもの」として、執着、執取される所の受蘊は、受取蘊 (*vedanupādānakkhandha*) である。

3、同じく、類似の想蘊は、想取蘊 (*saññupādānakkhandha*) である。

4、類似の行蘊は、行取蘊 (*saṅkhārupādānakkhandha*) である。

5、類似の識蘊は、識取蘊 (*viññāṇupādānakkhandha*) である。

(《相応部・蘊品・蘊經》*Saṃyutta Nikāya, Khandha Vagga, Khandha Sutta* 参考の事)。

一つひとつの、心識刹那の中の名法、依処色及び所縁色法は、五蘊を構成する。

一つひとつの、心識刹那は、以下の通りである：

1、依処色と所縁色法は、色蘊。

2、受は受蘊。

3、想は想蘊。

4、受、想と識以外の、その他の心所は、皆、行蘊に属する。

5、識は、識蘊。

もし、以上の定義を理解する事ができたならば、次に言及する所の、一つひとつの、心識刹那の中の五蘊が、如何に構成されるか、を理解する事ができる。一つひとつの組

を成す五蘊には、皆、その因を有しているが故に、それらの因果関係を、識別しなければならぬ。

結生五蘊 (Paṭisandhi 5 Khandha)

結生の時（+の状況は、以下の通りである）：

- 1、色蘊は、30種類の色法＝3種類の色聚、すなわち、心色十法聚（マ）、身十法聚、性根十法聚。
- 2、受蘊は、結生 34名法の中の受。
- 3、想蘊は、結生 34名法の中の想。
- 4、一番目の説明：行蘊は、結生 34名法の中の思。
第二番目の説明：結生 34名法の中の受、想と識以外の、その他の31名法は、皆、行蘊。
- 5、識蘊は、結生 34名法の中の識。

上に述べた五蘊は、結生識喜俱の三因者について述べたものである。結生識捨俱の三因者については、喜がない為、33の名法となる。二因者 (dvihetuka) に関しては、33または、32の名法となる。

行蘊に関する二種類の説明方法は、仏陀が《蘊分別》(Khandha Vibhaṅga Pāḷi) において、經の形式で解説する時、主に、思にのみ言及した（+事が原因である）。その為、一番目の説明方法は、思をば、行蘊の中に入れていた。この様であれば、人は質問するかもしれない：「その他の心所は、それぞれ自分自身の因が、あるのではないか？」故に、二番目の解説を加えておいた。ここにおいては、二つの目的がある：

- (1) その他の心所にも、因がある事を、理解して貰いたい。
- (2) どの様な究極界もまた、除外されることはない。

注意点：毎回、行蘊について言及される時、斯くの如くに理解する事。

因果関係の識別

先に、過去の五因を識別して、煩惱輪転に属する所の無明、愛と取が、行及び業を引き起こしたのだという事を理解する。次に、その業力（業輪転の一部分）が果報輪転 (Vipāka Vatṭa) の一部分に属する所の、色蘊を識別し、それらの因果関係を関連させる。智でもって、因（業）と果（結生業生色）[すなわち、無明、愛、取に囲まれた、

行と業（因）と結生業生色（果）]を知見し、果は、因に依存して生起するのだという事を知見したならば、以下の様な、因果関係を識別する。

結生色蘊

- 1、無明（20）が生起するが故に、結生業生色が生起する。
無明（20）は因、結生業生色は果。
- 2、愛（20）が生起するが故に、結生業生色が生起する。
愛（20）は因、結生業生色は果。
- 3、取（20）が生起するが故に、結生業生色が生起する。
取（20）は因、結生業生色は果。
- 4、行（34）が生起するが故に、結生業生色が生起する。
行（34）は因、結生業生色は果。
- 5、業（34）が生起するが故に、結生業生色が生起する。
業（34）の業力は因、結生業生色は果。

註：無明、愛と取の（20）とは、貪見グループ名法の事である。行と業の（34）は、信慧グループ名法の事である。もし、禅修行者が、過去の業を造した時に、捨俱であった場合、喜が、捨俱の行と業の中に、含まれない為、33個の名法になる。名色と因果の識別に関して、このレベルに到達する事のできる人の多くは、三因者である為、ここでは、三因者の例をのみ記載した。二因者の名法の数量は、33 または、32である事を、理解しなければならない。結生の時、心生色、時節生色と食生色は皆、生起しないので、この段階においては、業生色（30）に関する、因果関係の識別に関してにのみ、言及した。

名蘊（たとえば、受蘊）に関しては、智でもって、諸々の因が、諸々の果を引き起こす事を識別し、その後、以下の様に、因果関係を識別する：

「無明（20）が生起するが故に、結生受蘊は生起する。無明（20）は因であり、結生受蘊は果である・・・。」

説明を簡潔にするため、以下において、「無明（20）は因、結生受蘊は果」と記して、「無明（20）が生起するが故に、結生受蘊は生起する」という表現は略した。しかしながら、それらを識別する時、禅修行者はその識別方法は、色蘊において言及されたものと同様である事を理解しなければならない。

結生受蘊

五個の過去因がある：

- 1、無明（20）は因、結生受蘊は果。

- 2、愛（20）は因、結生受蘊は果。
- 3、取（20）は因、結生受蘊は果。
- 4、行（34）は因、結生受蘊は果。
- 5、業（34）の業力は因、結生受蘊は果。

三個の現在因：

- 6、依処色（30）は因、結生受蘊は果。
- 7、所縁は因、結生受蘊は果。
- 8、触（34－受＝33）は因、結生受蘊は果。

解説

（一）依処（*Vatthu*）：五蘊界（*pañcavokāra*）の中において、名法は、ただ依処色（*vatthu rūpa*）が存在している時にのみ、生起する事ができる。依処色がないならば、それらは生起する事ができない。結生受蘊は、結生刹那において、それと同時に生起する所の、心所依処色に依存して、初めて生起する事ができる。また、心所依処色は、単独で生起する事はできず、一つのグループ毎に、色聚として出現する。それらは、必ず、四界の助力（*Satti*、例えば俱生の力 *sahajāta*）に依存しなければ、生起する事が出来ない。また、心色十法聚は、身十法聚と性根十法聚と同時でしか、生起する事ができない。

こうしたことから、註釈（+書）の教えに基づくと：*Vatthunāma karajakāyo... attato bhūtāni ceva upādārūpāni ca.*（《中部註》）。依処は業生身（*karajakāya*）である。これらの業生身は、究極界においては、種色（すなわち、四大）と所造色である。註釈によると、色密集を看破して、究極色法を知見した後、種色（*Bhūta rūpa*）と所造色（*Upādā rūpa*）を依処色と見做して、それらを識別する。《アビダンマ》の教えに基づけば、結生受蘊における依処色は、心所依処色である、という事になる。經の教えに基づけば、心所依処を含む、30種類の種色すべてを、「依処色」としなければならない、という事になる。もし、色密集を看破して、究極法を知見したいのであれば、30種類すべての色法を、識別しなければならない。

故に、以下の点に注意する事。（經の教えに基づけば）30種類すべての色法は、皆、依処色と呼ばれる。智でもって、己自ら、徹底的に、結生受蘊は、ただ依処色に依存してのみ、生起する事ができることを知見したならば、次に因果を識別する。

注意：毎回、依処に言及する時、常にこの様である事を理解する事。

（識別：依処が生起するが故に、結生受蘊は生起する：依処は因、結生受蘊は果）

(二) 目標 (所縁) :

前に述べた通り、結生名法の目標とは、すなわち、前の一世の、臨終速行心の目標である。受は、その目標を、体験するのである。智でもって、もし、体験すべき目標がないならば、受は生起しない事を、識別する。この点が理解できる様になるまで、識別する。前に述べた例は、仏塔に食物を供養する事を目標とした場合であった。多くの禅修行者の業は、多くは、お互いに、異なっているものである。ある種の人々にとっては、果を引き起こすのは布施業であり、ある種の人々にとっては、持戒の業であり、ある種の人々にとっては、禅修の業である。また、布施の業には、色々な種類がある。例えば、食べ物を供養する業、袈裟を布施する業など等である。持戒にもまた、色々な種類があり、例えば五戒、8戒、10戒などなどの業がある。禅修行者の業もまた多く、例えば、遍禅の修行、不浄観、安般念、慈心観、観禅などなどの業がある。業には色々な種類があり、目標 (所縁) もまた、色々ある。智でもって、結生受蘊は、ただ目標を体験できるという状況の下でしか、生起しないという事を、識別した後、次に、因果を識別する。(識別：目標が生起するが故に、結生受蘊は生起する：目標は因、結生受蘊は果。)

(三) 触 (phassa) :

触が最も顕著であるが故に、「触が生起するが故に、受が生起する」(phassa samudayā vedanā samudayo) 等の教法が存在する。《発趣論》(Paṭṭhāna, 24 縁) の中において、以下の様に言う：

Cattāro khandhā arūpino aññamaññaṃ sahaṅgāpaccayena paccayo.

Cattāro khandhā arūpino aññamaññaṃ nissayapaccayena paccayo.

その意味はすなわち、四つの名蘊は、俱生縁力 (sahaṅgāpaccaya satti) と依止縁力 (nissaya paccaya satti) によって、相互に支え合う、という事である。名法は、相互に依存し合いながら、支え合うのである。ちょうど緬甸の格言の様に：「島は陸地に依存して存在し、陸地もまた、島に依存して存在する」。

食べ物を食べる時、何度か多目に咀嚼してから飲み込めば、更に多くの食べ物の精華を吸収する事ができ、その味を味わう事ができる。同様に、もし、一個の心識刹那と、その後に生起する所の、多くの心識刹那の触が皆、目標に透徹的に接触して、識と目標を連結するならば、受は、透徹的に、当該の目標である「精華」を体験する事ができる。

これが、なぜ、触の顕著である事に基づいて、受は、触の生起を因として、生起する事を教えるのか、という答えである。しかしながら、触は単独では、生起しえない。その他の心と心所 (相応法) が、それを支援する時、その支援の下において、それは、これらの相応法と同時に、生起する事ができる。まさに、「藤の蔓を一本掴んだならば、絡まった藤の全体もまた、同時に揺らすことができる」の格言の通りなのである。触に

言及している時、その他の相応法もまた、已に、その中に含まれているのだ、という事を忘れてはならない。

注意すべき要点：

同一の、一個の心識刹那に出現する所の、相応法の中において、もし、その中の一つの名法を、果とするならば、その他の名法は、因となる：もし、二個、または三個の名法を果とするならば、その他の名法は、因となる。この要点に注意を払う事。その他の、名蘊の分析方法と、受蘊の分析方法は、同じである。この後、名法は如何にして、その他の心識刹那の中の名法を、支援するのかを説明する。智でもって、名法は相互に依存し合いながら、生起する、または受は、触等の名法に依存して、生起する事を識別し、知見する事。言い換えれば、受蘊は、想、行と識蘊によって生起する。その時、それらは俱生縁、相互縁、依止縁等々 (sahjāta-añña-mañña-nissaya etc) によって、相互に支え合っているのであるが、智でもって、この点を知見した後、次に因果を識別する。

(識別：触 (34-受=33) が生起するが故に、受蘊が生起する。触 (34-受=33) は因、受蘊は果)

結生想蘊：

五個の過去因：

- 1、無明 (20) は因、結生想蘊は果。
- 2、愛 (20) は因、結生想蘊は果。
- 3、取 (20) は因、結生想蘊は果。
- 4、行 (34) は因、結生想蘊は果。
- 5、業 (34) の業力は因、結生想蘊は果。

三個の現在因：

- 6、依処 (30) は因、結生想蘊は果。
- 7、目標 (所縁) は因、結生想蘊は果。
- 8、触 (34-受=33) は因、結生想蘊は果。

結生行蘊 (一番目の解説法、思を行蘊とする)：

五個の過去因：

- 1、無明 (20) は因、結生行蘊は果。
- 2、愛 (20) は因、結生行蘊は果。
- 3、取 (20) は因、結生行蘊は果。
- 4、行 (34) は因、結生行蘊は果。

5、業（34）の業力は因、結生行蘊は果。

三個の現在因：

6、依処（30）は因、結生行蘊は果。

7、目標（所縁）は因、結生行蘊は果。

8、触（34-思=33）は因、結生行蘊は果。

（この一番目の解説方法では、最も顕著な思のみを。行蘊とする）

結生行蘊（二番目の解説法、その他の31心所）：

一番目から七番目の因は、第一番目の説明方法と同じ。

8、その他の三名蘊は因、結生行蘊は果。

註：結生 34名法から、受、想と識を除くと、残りは 31となり、触と思が最も顕著な心所は果、すなわち、行蘊となる。もし、その因を追尋するならば、その他の三名蘊は、その近因（*sesakkhandhattya padaṭṭhāna*）となる。それらは、最も接近している所の因である。二番目の方法でもって識別の修習をするのは、すべての因果を識別したいが為である。この様にするのは、以下の様に質問する人がいるからである：

「もし、触が名蘊の因であれば、触または行蘊と呼ばれる所の、その他の心所は、無因であるのか？」

その他の行蘊の分析方法はまた、斯くの如くである事を、理解するべきである。

結生識蘊：

五個の過去因：

1、無明（20）は因、結生識蘊は果。

2、愛（20）は因、結生識蘊は果。

3、取（20）は因、結生識蘊は果。

4、行（34）は因、結生識蘊は果。

5、業（34）の業力は因、結生識蘊は果。一個の現在因：

6、名色は因、結生識蘊は果。

註：「名」は、識と同じ、一個の心識刹那の中において生起する所の心所を言う。結生心の中において、それはすなわち、結生識と同時に生起する所の 33 個の所縁を指す。もし、禅修行者の結生心が、捨俱である時、喜は含まれない為、名は 32 個の心所となる。「色」とは、依処色と所縁色を言う。結生心の目標は業または業相、または趣相の三者の内の一である為、もしそれが色所縁（*rūparammaṇa*）である場合、

色所縁はすなわち、所縁色 (ārammaṇa rūpa) となる：もし、それが。声 (=音) 所縁である場合、声所縁は、すなわち、所縁色となる。以下の様に教えもある：

’ nāmarūpa samudayā viññāṇa samudayo ’

その意味はすなわち、「名色が生起するが故に、識が生起する」また別の教えもある。

’ viññāṇa paccayā nāmarūpa. ’

その意味はすなわち、「識が名色を引き起こす」

故に、識と名色は相互に支え合っている事に注意を払う事。「名色が識を引き起こす」の因果関係を識別した後、禅修行者は、必ずや、因果を識別しなければならない。これらの解釈に基づけば、「依処、目標と触」と言われるものと、「名色」の因は、異なった名称を持つが、しかし、究極界においては、それらは同一のものなのである。(識別：名色が生起するが故に、結生識蘊は生起する；名色は因、結生識蘊は果。)

結生心の後、15 または 16 回の有分心が生起する。その後、心路過程の生起が開始される。それらは意門引転と七回の「欲貪有速行」 (bhava nikantika lobha javana) である。有分心の刹那において、例えば、一番目の有分心の時、心生色と時節生色は生起する。経典の中において教えているのは、時節生色は、結生心の住時 (ṭhiti) において、その生起を開始する事である。母親が食べ物を食べて、胎盤に運ばれた時、食生色は、その生起を開始する。故に、結生心の後に生起する所の有分五蘊を識別しようとするならば、色蘊の中において、二種類の、現在因果の色法を、何度も識別しなければならない。

- 1、心が生起するが故に、心生色が生起する；心は因、心生色は果。
- 2、時節が生起するが故に、時節生色が生起する；時節は因、時節生色は果。

有分四名蘊と結生名蘊の識別方法は同じである。次に、結生心の後に生起する所の、意門引転五蘊と、速行五蘊の、因果の連貫を識別する方法を、解説する。

有分五蘊

有分色蘊

五個の過去因：

- 1、無明 (20) は因、(業生色) 有分色蘊は果。
- 2、愛 (20) は因、(業生色) 有分色蘊は果。
- 3、取 (20) は因、(業生色) 有分色蘊は果。
- 4、行 (34) は因、(業生色) 有分色蘊は果。

5、業（34）の業力は因、（業生色）有分色蘊は果。

三個の現在因：

6、心は因、（心生色）有分色蘊は果。

7、時節は因、（時節生色）有分色蘊は果。

8、食素は因、（食生色）有分色蘊は果。

有分四名蘊

1、受蘊は有分（34）名法の中の受。

2、想蘊は有分（34）名法の中の想。

3、行蘊は有分（34）名法の中の思（一番目の説明方法）、または、その他残りの、
31 心所（二番目の説明方法）。

4、識蘊は有分（34）名法の中の識。

有分受蘊

五個の過去因：

1、無明（20）は因、有分受蘊は果。

2、愛（20）は因、有分受蘊は果。

3、取（20）は因、有分受蘊は果。

4、行（34）は因、有分受蘊は果。

5、業（34）の業力は因、有分受蘊は果。

三個の現在因：

6、依処（6 = 54、意門）は因、有分受蘊は果。

7、目標は因、受蘊は果。

8、a、前生有分（注38）は因、有分受蘊は果。

b、後生有分意触（34 - 受 = 33）は因、有分受蘊は果。

有分想蘊：

（1）から（8a）と有分受蘊の因は、同一である。

8.b. 後生有分意触（34 - 想 = 33）は因、有分想蘊は果。

有分行蘊（思：一番目の解説方法）：

（1）から（8a）と有分受蘊の因は、同一。

8. b、後生有分意触（34 - 思 = 33）は因、有分行蘊は果。

有分行蘊（31名法：二番目の説明方法）

（1）から（8a）と有分受蘊の因は同一。

8. b、後生有分その他の三名蘊は因、有分行蘊は果。

有分識蘊：

（1）から（5）と有分受蘊の因は同一。及び、二個の現在因がある：

6、前生有分意触（34）は因、有分識蘊は果。

7、名色は因、有分識蘊は果。

「名」とは、33相応心所を言い、「色」とは、依処色と所縁色を言う。

死亡五蘊

表 8-1 : 死亡五蘊の内容

1. 色蘊	意門 54 色
2. 受蘊	死亡 34 名法の中の「受」心所
3. 想蘊	死亡 34 名法の中の「想」心所
4. 行蘊	i .死亡 34 名法の中の「思」心所 ii .死亡 (34-受・想・識=) 31
5. 識蘊	死亡 34 名法の中の「識」



表 8-2 : 死亡五蘊の因果

死亡五蘊			因	果	
色蘊	過去 5 因	1	無明 (20)	(30)業生色蘊	
		2	愛 (20)	(30)業生色蘊	
		3	取 (20)	(30)業生色蘊	
		4	行 (34)	(30)業生色蘊	
		5	業 (34)	(30)業生色蘊	
	現在因	6	心	死亡 (心生) 色蘊	
		7	時節	時節生色蘊	
		8	食	食生色蘊	
受蘊	過去 5 因	1-3	無明、受、取	死亡受蘊	
		4-5	行、業	死亡受蘊	
	現在因	6	依処 (意門 54 色)	死亡受蘊	
		7	目標 (死亡の目標)	死亡受蘊	
		8A	有分意触 (34)	死亡受蘊	
8B	死亡意触 (34-受=33)	死亡受蘊			
想蘊	過去 5 因	1-5	同上	死亡想蘊	
	現在因	6-8A	同上	死亡想蘊	
		8B	死亡意触 (34-想=33)	死亡想蘊	
行蘊	(i) 思心所	過去 5 因	1-5	同上	死亡行蘊 (思)
		現在因	6-8A	同上	死亡行蘊 (思)
			8B	死亡意触 (34-思=33)	死亡行蘊 (思)
	(ii) 34-受、 想、識=31	過去 5 因	1-5	同上	死亡行蘊 (31)
		現在因	6-8A	同上	死亡行蘊 (31)
			8B	死亡意触 (受、想、識)	死亡行蘊 (31)
識蘊	過去 5 因	1	無明 (20)	死亡識蘊	
		2	愛 (20)	死亡識蘊	
		3	取 (20)	死亡識蘊	
		4	行 (34)	死亡識蘊	
		5	業 (34)	死亡識蘊	
	現在因	6	有分意触 (34)	死亡識蘊	
		7	名色	死亡識蘊	

↓

名 = 34 - 死亡識 = 33

色 = ① 依処 (意門 54 色)

② 目標 (死亡の目標)

色所縁グループ：五門引転五蘊

- 1、五門引転色蘊は、意門の中にある依処色（6種類の色聚=54色法）と色所縁である。
- 2、五門引転受蘊は、五門引転 11名法の中の受である。
- 3、五門引転想蘊は、五門引転 11名法の中の想である。
- 4、五門引転及び行蘊は、五門引転 11名法の中の思である（第一番目の説明方法）または、残りの8個の心所（二番目の説明方法）
- 5、五門引転識蘊は、五門引転 11名法の中の識である。

五門引転色蘊：

五個の過去因：

- 1、無明（20）は因、（業生色、30）五門引転色蘊は果。
- 2、愛（20）は因、（業生色、30）五門引転色蘊は果。
- 3、取（20）は因、（業生色、30）五門引転色蘊は果。
- 4、行（34）は因、（業生色、30）五門引転色蘊は果。
- 5、業（34）の業力は因、（業生色、30）五門引転色蘊は果。

三個の現在因：

- 6、心は因、（心生色）五門引転色蘊は果。
- 7、時節は因、（時節生色）五門引転色蘊は果。
- 8、食素は因、（食生色）五門引転は果。

五門引転受蘊の三個の現在因：

- 1、依処（6=54、意門の中の色法）は因、五門引転受蘊は果。
- 2、目標（所縁）は因、五門引転受蘊は果。
- 3、a.有分意触（34）は因、五門引転受蘊は果。
b.五門引転意触（11-受=10）は因、五門引転受蘊は果。

五門引転想蘊の三個の現在因：

- 1、依処（6=54、意門の中の色法）は因、五門引転想蘊は果。
- 2、目標（所縁）は因、五門引転想蘊は果。
- 3、a.有分意触（34）じゃ因、五門引転想蘊は果。
b.五門引転意触（11-想=10）は因、五門引転想蘊は果。

五門引転行蘊（思：一番目の説明方法）：

- 1、依処（6=54、意門の中の色法）は因。五門引転行蘊は果。
- 2、目標（色所縁）は因、五門引転行蘊は果。

- 3、 a.有分意触（34）は因、五門引転行蘊は果。
- b.五門引転意触（11－思＝10）は因、五門引転行蘊は果。

五門引転行蘊（八名法：二番目の説明方法）：

- 第（1）、（2）及び（3a）は、第一番目の説明と同じ。
3. b.その他の三名蘊は因、五門引転行蘊は果。

五門引転識蘊：

- 1、有分意触（34）は因、五門引転識蘊は果。
- 2、名色は因、五門引転識蘊は果。
「名」は10個の相応心所を言う。
「色」は意門の中の依処色（54）と色所縁を言う。

色所縁グループ：眼識五蘊

- 1、色蘊とは、眼門の中において、眼識が依存する所の6種類の色法である。
すなわち、54種類の色法と、色所縁である。
- 2、受蘊とは、眼識（8）名法の中の受。
- 3、想蘊とは、眼識（8）名法の中の想。
- 4、行蘊とは、眼識（8）名法の中の思（一番目の説明方法）、または、残りの五個の心所（二番目の説明方法）。
- 5、識蘊は、眼識（8）名法の中の識。

眼識色蘊：

五個の過去因：

- 1、無明（20）は因、（業生色）眼識色蘊は果。
- 2、愛（20）は因、（業生色）眼識色蘊は果。
- 3、取（20）は因、（業生色）眼識色蘊は果。
- 4、行（34）は因、（業生色）眼識色蘊は果。
- 5、業（34）の業力は因、（業生色）眼識色蘊は果。

三個の現在因：

- 6、心は因、（心生色）眼識色蘊は果。
- 7、時節は因、（時節生色）眼識色蘊は果。
- 8、食素は因、（食生色）眼識色蘊は果。

眼識受蘊：

五個の過去因：

- 1、無明（20）は因、眼識受蘊は果。
- 2、愛（20）は因、眼識受蘊は果。
- 3、取（20）は因、眼識受蘊は果。
- 4、行（34）は因、眼識受蘊は果。
- 5、業（34）の業力は因、眼識受蘊は果。

五個の現在因：

- 6、依処（眼門の中の54色）は因、眼識受蘊は果。
- 7、目標（色所縁）は因、眼識受蘊は果。
- 8、触（8-受=7）は因、眼識受蘊は果。
- 9、光（āloka）は因、眼識受蘊は果。
- 10、作意（=五門引転=11）は因、眼識受蘊は果。

作意とは、ここでは、五門引転が目標（色所縁）に注意を向ける事を言う。註疏では、それは、心識過程の基因作意（Vīthi Paṭipādaka Manasikāra）と呼ばれる。それは、心路過程を生起せしめる所の作意である（《殊勝義註》）。光は、四種類ある。すなわち、月光、日光、火の光と智慧の光である。《増支部・四集・光經》（*Aṅguttara Pāḷi, Catukka Nipāta, Ābhā Sutta*）などの經において、言及されている。目を閉じて、座禅・瞑想する時、智慧の光は最も重要である。智慧の光が無いならば、色聚、色聚の色彩とその因果を、見る事ができない。座禅・瞑想していない時、肉眼で、色所縁を見ることができるが、その時の月光、日光と火の光は、眼識の因である。

眼識想蘊：

第（1）から（7）、及び（9）と（10）は、眼識受蘊の因と同じ。
8、触（8-想=7）は因、眼識想蘊は果。

眼識行蘊（思：一番目の説明方法）：

第（1）から（7）、及び（9）と（10）は、眼識受蘊の因と同じ。
8、触（8-思=7）は因、眼識行蘊は果。

眼識行蘊（五名法：二番目の説明方法）：

第（1）から（7）、及び（9）と（10）は、眼識受蘊の因と同じ。
8、その他の三名蘊は因、眼識行蘊は果。

眼識識蘊：

第（１）から（５）は、眼識受蘊の因と同じ。三個の現在因：

- 6、名色は因、眼識識蘊は果。
- 7、光は因、眼識識蘊は果。
- 8、作意（＝五門引転＝ 1 1）は因、眼識識蘊は果。
「名」は相応の七個の心所。「色」は依処色と色所縁。

色所縁グループ：領受五蘊

- 1、色蘊は意門の中の依処色（5 4）と、色所縁である。
- 2、受蘊は領受（1 1）名法の中の受。
- 3、想蘊は、領受（1 1）名法の中の想。
- 4、行蘊は領受（1 1）名法の中の思（一番目の説明方法）、またはその他の 8 個の心所（二番目の説明方法）。
- 5、識蘊は領受（1 1）名法の中の識。

領受色蘊と五門引転色蘊の識別方法は、同じである。

領受受蘊

五個の過去因：

- 1、無明（2 0）は因、領受受蘊は果。
- 2、愛（2 0）は因、領受受蘊は果。
- 3、取（2 0）は因、領受受蘊は果。
- 4、行（3 4）は因、領受受蘊は果。
- 5、業（3 4）の業力は因、領受受蘊は果。

三個の現在因：

- 6、依処（意門の中の 54 色法）は因、領受受蘊は果。
- 7、目標（色所縁）は因、領受受蘊は果。
 - a.眼触（8）名法は因、領受受蘊は果。
 - b.領受意触（1 1－受＝1 0）は因、領受受蘊は果。

領受想蘊

第（１）から（8 a）までは、領受受蘊の因と同じ。

8. b. 領受意触（1 1－想＝1 0）は因、領受受蘊は果。

領受行蘊（思：一番目の説明方法）

第（1）から（8a）までは、領受受蘊の因と同じ。

8. b. 領受意触（1 1－思＝1 0）は因、領受受蘊は果。

領受行蘊（八名法：二番目の説明方法）

第（1）から（8a）までは、領受受蘊の因と同じ。

8. b. その他の三名蘊は因、領受行蘊は果。

領受識蘊

第（1）から（5）までは、領受受蘊の因と同じ。

6、眼触（8）名法は因、領受識蘊は果。

7、領受名色は因、領受識蘊は果。

「名」は、領受識（マ）相応の10個の心所、「色」は依処色（5 4）と色所縁。

色所縁グループ：推度五蘊

1、色蘊は意門の中の依処色（5 4）と色所縁。

2、受蘊は推度（1 2）名法の中の受。

3、想蘊は推度（1 2）名法の中の想。

4、行蘊は推度（1 2）名法の中の思（第一番目の説明方法）、または、その他の9個の心所（二番目の説明方法）。

5、識蘊は推度（1 2）名法の中の識。

註：もし、推度が喜俱ならば12の名法がある。しかし、もし、捨俱であるならば、11名法になる。喜が含まれないが故に。もし、速行の中に喜があるならば、推度の中にも喜は存在する。五門引転色蘊の識別方法に基づいて、推度色蘊を識別する。

推度受蘊：

五個の過去因：

1、無明（2 0）は因、推度受蘊は果。

2、愛（2 0）は因、推度受蘊は果。

3、取（2 0）は因、推度受蘊は果。

4、行（3 4）は因、推度受蘊は果。

5、業（3 4）の業力は因、推度受蘊は果。

三個の現在因：

- 6、依処（意門の中の 54 色法）は因、推度受蘊は果。
- 7、目標（色所縁）は因、推度受蘊は果。
- 8、a.眼触（8）名法は因、推度受蘊は果。
b.領受意触（1 1）は因、推度受蘊は果。
c. 推度意触（1 2 - 受 = 1 1）は因、推度受蘊は果。
または推度意触（1 1 - 受 = 1 0）は因。推度受蘊は果。

推度想蘊

第（1）から（8b）までは、推度受蘊の因と同じ。

8. c. 推度意触（1 2 - 想 = 1 1）は因、推度受蘊は果。
または、推度意触（1 1 - 想 = 1 0）は因。推度想蘊は果。

推度行蘊（9または8名法：二番目の説明方法）

第（1）から（8b）までは、推度受蘊の因と同じ。

8. c. その他の三名蘊は因、推度行蘊は果。

推度識蘊

第（1）から（5）、（8a）から（8b）までは、推度受蘊の因と同じ。

- 8、c. 推度名色は因、推度識蘊は果。

「名」1 1 個（喜俱）または1 0（捨俱）相応の心所；

「色」は依処色（5 4）と色所縁。

色所縁グループ：確定五蘊

- 1、色蘊は、意門の中の依処色（5 4）と色所縁。
- 2、受蘊は、確定（1 2）名法の中の受。
- 3、想蘊は、確定（1 2）名法の中の想。
- 4、行蘊は、確定（1 2）名法の中の思（第一番目の説明方法）、または、残りの 9 個の心所（二番目の説明方法）。
- 5、識蘊は確定（1 2）名法の中の識。

確定は、過去の因によって引き起こされるのではない為、唯作心に属する。故に、確定された四名蘊には過去因はない。それらは、ただ現在因によって引き起されるのである。五門引転色蘊の因果の識別と同じ方法で、確定色蘊を識別する。

確定受蘊の三個の現在因：

- 1、依処（意門の中の 54 個の依処色）は因、確定受蘊は果。
- 2、目標（色所縁）は因、確定受蘊は果。
- 3、a.眼触（8）は因、確定受蘊は果。
b.推度意触（1 2 または 1 1）は因、確定受蘊は果。
c.確定意触（1 2 - 受 = 1 1）は因、確定受蘊は果。

確定想蘊の三個の現在因：

- 第（1）から（3b）は、確定受蘊の因と同じ。
3 c.確定意触（1 2 - 想 = 1 1）は因、確定想蘊は果。

確定行蘊（思：第一番目）には三個の現在因がある：

- 第（1）から（38）までは、確定受蘊の因と同じ。
3 c.確定意触（1 2 - 想 = 1 1）は因、確定行蘊は果。

確定行蘊（9 名法：一番目）には三個の現在因がある：

- 第（1）から（38）までは、確定受蘊の因と同じ。
3 c.その他の三名蘊は因、確定行蘊は果。

確定識蘊：

- 1、a. 確定眼触（8）は因、確定識蘊は果。
b.推度意触（1 2 または 1 1）は因、確定識蘊は果。
- 2、確定名色は因、確定識蘊は果。

「名」は 11 相応心所を言い、「色」は依処色（5 4）と色所縁を言う。

速行の基因作意 (Javana paṭipādaka nāmasikāra)

この五門心路過程の中の「確定刹那」において、喜または、不可喜（＝喜ばしくない、以下同様の、所縁への作意が、「不如理作意」である時、「確定刹那」の後、不善速行は生起する。次に、「確定刹那」が所縁に対して、喜ばしい、または喜ばしくない、常、楽、我または浄であると見做した場合は、真実の確定ではない。これは、五門心路過程の前、多くの所縁を取り、かつ所縁を、喜ばしい、喜ばしくない、常、楽、我、または浄と確定する所の、意門心路過程の親依止縁の支援の下、当該の五門心路過程の中の、「確定刹那」もまた、所縁に対して、喜ばしい、喜ばしくない、常、楽、我、浄の様な

状態を生起せしめるからである。これは不如理作意であり、この不如理作意の縁に依存して、当該の五門心路過程の「確定刹那」の後、「不善速行」は生起する。

もし、反対に、色所縁に対する作意が、色所縁の「確定刹那」が、如理作意である時、この「確定刹那」の後、「善速行」は生起する。しかし、この「確定刹那」は、真実の確定ではなく、ただ、確定の状態の様なものである。故に「確定刹那」は、速行の基因作意 (Javana paṭipādaka manasikāra、速行基礎因縁、作意所縁状態) と呼ばれる。これは、Abhidhamma 註解の解釈である。ここでは、先に、善速行（その基因は如理作意である）の因果関係の、識別方法を説明する。

色所縁グループ：速行五蘊（善グループ）

- 1、色蘊は依処色（5 4）と色所縁。
- 2、受蘊は速行（3 4）名法の中の受。
- 3、想蘊は速行（3 4）名法の中の想。
- 4、行蘊は速行（3 4）名法の中の思（第一番目）。
またはその他の 31 個の心所（二番目）。
- 5、識蘊は速行（3 4）名法の中の識。

五門引転色蘊の識別の方法に基づいて、速行色蘊を識別する。速行名法は、過去因によって引き起こされたものではなく、ただ現在因によって引き起こされたものである。故に、それらには過去因はなく、ただ現在因だけが存在している。

第一大善速行受蘊の四個の現在因：

- 1、依処（意門の中の 54 色）は因、第一大善速行受蘊は果。
- 2、目標（所縁）は因、第一大善速行受蘊は果。
- 3、a. 眼触（8）は因、第一大善速行受蘊は果。
b. 第一速行意触（3 4 - 受 = 3 3）は因、第一大善速行受蘊は果。
- 4、如理作意（確定 = 1 2）は因、第一大善速行受蘊は果。

第一大善速行想蘊の四個の現在因：

- (1)、(2)、(3a)、(4) は第一大善速行受蘊の因と同じ。
- 3、b. 第一速行意触（3 4 - 想 = 3 3）は因、第一大善速行想蘊は果。

第一大善速行行蘊（思：第一番目）の四個の現在因：

(1)、(2)、(3a)、(4)は第一大善速行受蘊の因と同じ。

3、b. 第一速行意触(34-思=33)は因、第一大善速行行蘊は果。

第一大善速行行蘊(31名法：二番目)の四個の現在因：

(1)、(2)、(3a)、(4)は第一大善速行受蘊の因と同じ。

3、b. その他の三名蘊第一速行意触は因、第一大善速行行蘊は果。

第一大善速行識蘊：

1、眼触(8)は因、第一大善速行識蘊は果。

2、名色は因、第一大善速行識蘊は果。

3、如理作意(確定=12)は因、第一大善速行識蘊は果。

「名」は33相応心所、「色」は54依処色と色所縁。

註：もし、速行は捨俱である時、喜(pīti)は含まれない。故に、上に述べた34名法から喜を減じる。もし、智不相応である場合、智を減じる。もし、智と喜が、共に含まれない時、二者を減じる。受、想、識を除いた、残りの心所は多くても少なくとも、行蘊と呼ばれる。

第二速行に関して、仏陀は《発趣論》(Paṭṭhāna、24縁)において、以下の様に教えている：

’Purimā purimā kusalā dhammā pacchimānaṃ pacchimānaṃ
kusalānaṃ dhammānaṃ anantara paccayena paccayo...’

(《発趣論》)大意は：「前生速行は後生速行の因である(前生善業は後生善業の無間縁である)」

言い換えれば：’Yesaṃ yesaṃ dhammā, te te dhammā tesaṃ tesaṃ
dhammānaṃ anantara paccayena paccayo.’(《発趣論》)

この教えによると、前生心(前生名法)は後生心(後生名法)の無間縁である、という。禅修行者は、第二速行等と彼所縁の無間縁(anantara paccaya)の識別も、修習しなければならない。もし、この様であれば、以下の様に問う人がいる：「第一速行には無間縁はないのか？」と。あるのである。「確定」こそが第一速行の無間縁である。しかしながら、確定は、ここにおいては如理作意と呼ばれる為、故に、ここではそれに言及しないで、第二大善速行受蘊の識別方法を挙げたのである。同様の方法を用いて、その他の名蘊、その他の速行(第三から第七)及び、彼所縁を識別する。一つひとつの速行と、彼所縁心識刹那が、五蘊を構成した後(+初めて)、それらを識別する事を忘れてはならない。

第二大善速行受蘊の四個の現在因：

- 1、依処（意門の中の 54 色）は因。第二大善速行受蘊は果。
- 2、目標（色所縁）は因、第二大善速行受蘊は果。
- 3、a.眼触（8）は因、第二大善速行受蘊は果。
b. 第一速行意触（3 4）は因、第二大善速行受蘊は果。
c. 第二速行意触（3 4 - 受 = 3 3）は因、第二大善速行受蘊は果。
- 4、如理作意（確定 = 1 2）は因、第二大善速行受蘊は果。

註：以下のものをよく理解する事。

第三速行の無間縁（3 8）は第二速行であり；

第四速行の無間縁（3 8）は第三速行であり；

第五速行の無間縁（3 8）は第四速行であり；

第六速行の無間縁（3 8）は第五速行であり；

第七速行の無間縁（3 8）は第六速行であり；

第一彼所縁の無間縁は、第七速行であり；

第二彼所縁の無間縁は、第一彼所縁である。

上に述べた解説に基づいて、(3b) は調整して後修習する事。他は類推の事。

色所縁グループ：彼所縁五蘊

- 1、色蘊は依処色（5 4）と色所縁。
- 2、受蘊は彼所縁（信慧グループ、3 4）名法の中の受。
- 3、想蘊は彼所縁（34）名法の中の想。
- 4、行蘊は彼所縁（3 4）名法の中の思（第一番目）。または、その他の 31 心所（二番目）。
- 5、識蘊は彼所縁（3 4）名法の中の識。

五門引転色蘊の識別方法に基づいて、彼所縁色蘊を識別する。

第一彼所縁受蘊：

五個の過去因：

- 1、無明（2 0）は因、第一彼所縁受蘊は果。
- 2、愛（2 0）は因、第一彼所縁受蘊は果。
- 3、取（2 0）は因、第一彼所縁受蘊は果。
- 4、行（3 4）は因、第一彼所縁受蘊は果。
- 5、業（3 4）の業力は因、第一彼所縁受蘊は果。

三個の現在因：

- 6、意処（意門の中の 54 色）は因、第一彼所縁受蘊は果。
- 7、目標（色所縁）は因、第一彼所縁受蘊は果。
- 8、a.眼触（8）は因、第一彼所縁受蘊は果。
b.第七速行意触（34）は因、第一彼所縁受蘊は果。
c.第一彼所縁意触（34-受=33）は因、第一彼所縁受蘊は果。

その他の名蘊の識別の方法は、受蘊と同様である。ただし（以下）を除く：

第一彼所縁想蘊の（8c）：

第一彼所縁意触（34-想=33）は因。

第一彼所縁行蘊（第一番目）の（8c）：

第一彼所縁意触（34-思=33）は因。

第一彼所縁行蘊（二番目）の（8c）：

その他の三名蘊（受、想、識）は因。

第一彼所縁識蘊：

（1）から（5）までは、受蘊の因と同じ。二個の現在因：

- 6、a. 眼触（8）は因、第一彼所縁識蘊は果。
b. 第七速行意触は因、第一彼所縁識蘊は果。
- 7、第一彼所縁名色は因、第一彼所縁識蘊は果。

「名」は相応心所；「色」は54依処色と色所縁。

もし、彼所縁が捨俱である時、喜は含まれないので、33名法となる。もし、智不相応である場合もまた、33名法である。もし、喜と智共に不相応である場合、32名法となる。故に、注意して頂きたいのは、二番目の説明の方法における、行蘊名法の数量は、状況によって、変化するという事である。

もし、その彼所縁が、無因喜俱善果報彼所縁である時、12名法（心と心所）しかない。もし、それが無因捨俱善果報、または不善果報彼所縁である時、11名法（心と心所）となる。もし、それが無因彼所縁である時、その識別方法は、推度五蘊と同じである。

（8b）の、この一個の因の中において、第二彼所縁の無間縁は、第一彼所縁であるが故に、（8b）は、「第一彼所縁意触（34）」に変更されなければならない。



色所縁を目標に取る意門心路過程

ここまでにおいて、已に、善速行眼門心路過程の中の、一つひとつの心識刹那五蘊の識別方法を、解説した。禅修行者は、この方法に基づいて、その他の善グループ名法を識別するよう、理解し、実践しなければならない。次に、眼門心路過程の後に生起する所の、有分心に沿って、その後に、同一の色所縁を目標に取る所の、意門心路過程が生起する。ここにおいて、前に述べた有分五蘊の識別方法に基づいて、有分五蘊を識別する（+方法を説明する）。下の文は、意門引転受蘊と速行受蘊だけ（+を取り上げて）説明し、その例とする。

意門引転受蘊：

- 1、依処（意門の中の54色）は因、意門引転受蘊は果。
- 2、目標（色所縁）は因、意門引転受蘊は果。
- 3、a.眼触（8）は因、意門引転受蘊は果。
b.有分意触（34）は因、意門引転受蘊は果。
c.意門引転意触（12-受=11）は因、意門引転受蘊は果。

第一速行受蘊：

- 1、依処（意門の中の54色）は因、第一速行受蘊は果。
- 2、目標（色所縁）は因、第一速行受蘊は果。
- 3、a.眼触（8）は因、第一速行受蘊は果。
b.有分意触（34）は因、第一速行受蘊は果。
c.第一速行意触（34-受=33）は因、第一速行受蘊は果。
- 4、如理作意（確定=12）は因、第一速行受蘊は果。

第二速行受蘊：

- 1、依処（意門の中の54色）は因、第二速行受蘊は果。
- 2、目標（色所縁）は因、第二速行受蘊は果。
- 3、a.眼触（8）は因、第二速行受蘊は果。
b.有分意触（34）は因、第二速行受蘊は果。
c.第一速行意触（34）は因、第二速行受蘊は果。
d.第二速行意触（34-受=33）は因、第二速行心受蘊は果。
- 4、如理作意（確定=12）は因、第二速行受蘊は果。

注意：この方法に基づいて、その他の名蘊、速行（第三から第七）と彼所縁を識別する。禅修行者は、これらを調整する必要性を理解しながら、練習する事。

解説

Yampidaṃ cakkhusamphassapaccayā uppajjati vedayitaṃ sukhaṃ
vā dukkhaṃ vā adukkhamasukhaṃ vā. (Saṃyutta Nikāya)
Cakkhusamphassapaccayā uppajjati vedayitaṃti cakkhusamphassaṃ
mūlapaccayaṃ katvā uppannā sampañcchanā santīraṇavoṭṭhabbana - javanavedanā.
Cakkhuviññānasampayuttāya pana vattabbameva natthi.
Sotadvārādivedanāpaccayādīsupi eseva nayo. (Saṃyutta Aṭṭhakathā)
Yampidaṃ manosamphassapaccayā uppajjati vedayitaṃ sukhaṃ
vā dukkhaṃ vā adukkhamasukhaṃ vā. (Saṃyutta Nikāya)
Manosamphassoti bhavaṅgasahajāto samphasso. Vedayitanti
javanasahajātā vedanā. Sahāvajjanena bhavaṅgasahajātāpi vaṭṭati yeva...
Yamidaṃ =(yampidaṃ)cakkhusamphassapaccayā uppajjati vedanā gataṃ saññā
gataṃ saṅkhā ragataṃ viññā ṇagataṃ. (Majjhima Nikāya)
Yamidaṃ manosamphassapaccaya uppajjati vedanāgataṃ saññā
gataṃ saṅkhā ragataṃ viññā ṇagataṃ. (Majjhima Nikāya)
Sahāvajjanavedanāya javanavedanā 'vedayita'nti adhippetā. Bhavaṅgasampayuttāya
pana vedanāya gahaṇe vattabbameva natthi.
(Saṃyutta Tīka)

パーリ経典、註釈と疏鈔によれば、眼触を基因とする受、すなわち、眼識、領受、推度、確定、速行及び彼所縁の受は、眼触生受と呼ぶ。《小羅候羅教誡經》によれば、眼触は、受を引き起こすだけでなく、受、想、行と識の四名蘊すべてを引き起こすのである（Yamidaṃ cakkhusamphassa - paccayā uppajjati vedanāgataṃ saññāgataṃ saṅkhāragataṃ viññāṇagataṃ。）。

故に、以下の事に注意して頂きたい：眼識と相応する所の、眼触は、眼識、領受、推度、確定、速行と彼所縁の、それぞれの四名蘊を支え、それらを生起せしめるのである。註釈では、眼触は、ただ眼触によって引き起こされた名法しか支えない、すなわち、同一の眼門心路過程の名法しか支えないと言うものの、しかし、それは以下の事を排斥しない：「眼触は当該の色所縁目標として、継続して取る智を支える、すなわち、異なった心路過程、すなわち、意門心路過程を、支えるのである。」

（Cakkhusamphassapaccayā vedanākkhandho atthi anupādinna anupādāniyo asaṅkiliṭṭha asaṅkilesiko avitakka avicāro..）。

耳触などもまた同様に、理解する事。

意門引転の前に生起する所の、有分心の相応触心所は、無間縁によって、意門引転を支えるが、当該の触とは、すなわち、意触である。当該の意触はまた、意門心路過程の

意門引転、速行と彼所縁名法の生起を、支援する。故に、ここにおいて、眼触、有分意触に相応する意触を因として、それらは、色所縁を目標に取る所の、意門心路過程名法を支援する（+という状況）を列挙した。第二速行などに関しては、無間意触が一つ増えた事が因となる。

故に、知らねばならない：眼触は、色所縁を目標に取る所の、眼門名法の構成を支援し、眼触と有分意触は、皆、色所縁を継続して目標とする所の、意門名法の構成を支援する事を。禅修行者は、すべての因果関係を、識別しなければならない。

色所縁グループ：不善グループ

色所縁を目標に取る所の、不善グループ眼門、及び意門心路過程の中において、五門引転、眼識、領受、推度、確定、彼所縁、（有分心）、意門引転の識別方法は、善グループの識別方法と、同じである。同様の識別方法を用いて、それらを識別する。速行において、些かな違いがあるため、ここでは、貪見グループ（20）の例を挙げて、説明する。

色所縁グループ：（貪見グループ）速行五蘊

- 1、色蘊は意門の中の 54 種類の依処色と色所縁。
- 2、受蘊は速行（貪見グループ 20）名法の中の受。
- 3、想蘊は速行（貪見グループ 20）名法の中の想。
- 4、行蘊は速行（貪見グループ 20）名法の中の思（第一番目）。またはその他の 17 の心所（二番目）。
- 5、識蘊は速行（貪見グループ 20）名法の中の識。

引転色蘊の識別方法を用いて、速行色蘊を識別する。

（貪見グループ）第一速行受蘊の四つの現在因：

（過去因はない）

- 1、依処（意門の中の 54 種類の依処色）は因、（貪見グループ）第一速行受蘊は果。
- 2、目標（色所縁）は因、（貪見グループ）第一速行受蘊は果。
- 3、a.眼触（8）は因、（貪見グループ）第一速行受蘊は果。
b.第一速行意触（20-受=19）は因、（貪見グループ）第一速行受蘊は果。
- 4、不如理作意（確定=12）は因、（貪見グループ）第一速行受蘊は果。

もし、確定心が色所縁を常、楽、我、淨などと確定するならば、それは不如理作意である為、不善速行は生起する。

(貪見グループ) 第一速行識蘊：

- 1、眼触（8）は因、（貪見グループ）第一速行識蘊は果。
- 2、名色は因、（貪見グループ）第一速行識蘊は果。
- 3、不如理作意（確定=12）は因、（貪見グループ）第一速行受蘊は果。

「名」は 19 相応心所、

「色」は意門の中の 54 種類の色法と色所縁。

(貪見グループ) 第二速行受蘊：

- 1、依処（意門の中の 54 種類の依処色）は因、（貪見グループ）第二速行受蘊は果。
- 2、目標（色所縁）は因、（貪見グループ）第二速行受蘊は果。
- 3、a.眼触（8）は因、（貪見グループ）第二速行受蘊は果。
b.第一速行意触（20）は因、（貪見グループ）第二速行受蘊は果。
c.第二速行意触（20-受=19）は因、（貪見グループ）第二速行受蘊は果。
- 4、不如理作意（確定=12）は因、（貪見グループ）第二速行受蘊は果。

(貪見グループ) 第二速行識蘊：

- 1、a.眼触（8）は因、（貪見グループ）第二速行識蘊は果。
b.第一速行意触（20）は因、（貪見グループ）第二速行識蘊は果。
- 2、名色は因、（貪見グループ）第二速行識蘊は果。
- 3、不如理作意（確定=12）は因、（貪見グループ）第二速行受蘊（マ）は果。

「名」は 19 の相応心所。「色」は 54 種類の依処色と色所縁。

注意：この方法に基づいて、その他の名蘊、速行（第三から第七）と彼所縁を識別する。禅修行者は（+各種の）調整をして、練習する必要がある。この様に類推する事。

注意

禅修行者は、前に述べた説明に基づいて、色所縁グループ不善グループの、識別方法を理解する事が出来る。もし、禅修行者が、色所縁の善と不善グループの、因果関係の識別方法を、理解したならば、彼は、その他のグループの修習に、転換する事ができる。

たとえば、声所縁グループである。禅修行者は、相応する法の状況に合わせて、心所は増減する事を、理解しなければならない。一つひとつの、心識刹那の中の、心所の数量の変化に伴って、行蘊と意触の名法の数量もまた、変化する事に、注意を払う事。もし、禅修行者の、《アビダンマ》に関する知識が少ない時、または、それを学習した事がないのであれば、(+修行に関して) 導師の協力を必要とする。故に、以下において、些かの要点を列挙する。

交換

- 1、色所縁グループ。
- 2、声所縁グループ：目標（色所縁）を声所縁に変更する；眼触を耳触に変更する。
- 3、香所縁グループ：目標を香所縁に変更する；眼触を鼻触に変更する。
- 4、味所縁グループ：目標を味所縁に変更する；眼触を舌触に変更する。
- 5、触所縁グループ：目標を触所縁に変更する；眼触を身触に変更する。

声 (=音、以下同様) 所縁グループ

声所縁グループ：五門引転受蘊

- 1、依処（意門の中の 54 種類の色法）は因、五門引転受蘊は果。
- 2、目標（声所縁）は因、五門引転受蘊は果。
- 3、a.有分意触（3 4）は因、五門引転受蘊は果。
b.五門引転意触（11-受=1 0）は因、五門引転受蘊は果。

ここにおいて、禅修行者はすでに、その他の名蘊の識別方法を理解したと思われる。ここに列挙したのは、ある種の心識刹那の中の、一、または二個の蘊に関する説明である。しかしながら、実際の修行の折には、一つひとつの心識刹那の中のすべての五蘊を識別しなければならない。

声所縁グループ：耳識受蘊

五個の過去因：

- 1、無明（2 0）は因、耳識受蘊は果。
- 2、愛（2 0）は因、耳識受蘊は果。
- 3、取（2 0）は因、耳識受蘊は果。
- 4、行（3 4）は因、耳識受蘊は果。
- 5、業（3 4）の業力は因、耳識受蘊は果。

五個の現在因：

- 6、依処（耳門の中の 54 色）は因、耳識受蘊は果。
- 7、目標（声所縁）は因、耳識受蘊は果。
- 8、触（8-受=7）は因、耳識受蘊は果。
- 9、虚空（ākāsa）は因、耳識受蘊は果。
- 10、作意（五門引転=1 1）は因、耳識受蘊は果。

声所縁グループ：領受受蘊

（五個の過去因は上に述べたのと同じ）

三個の現在因：

- 6、依処（意門の中の 54 色）は因、領受受蘊は果。
- 7、目標（声所縁）は因、領受受蘊は果。
- 8、a. 耳触（8）は因、領受受蘊は果。
b. 領受意触（11-受=1 0）は因、領受受蘊は果。

声所縁グループ：領受行蘊（二番目の説明方法）

（五個の過去蘊は上に述べたのと同じ）

三個の現在因：

- 6、依処（意門の中の 54 色）は因、領受行蘊は果。
- 7、目標（声所縁）は因、領受行蘊は果。
- 8、a. 耳触（8）は因、領受行蘊は果。
b. その他の三名蘊は因、領受行蘊は果。

声所縁グループ：領受識蘊

（五個の過去因は上に述べたのと同じ）

二個の現在因：

- 6、耳触（8）は因、領受識蘊は果。
- 7、領受名色は因、領受識蘊は果。

「名」は 10 相応心所、「色」は 54 種類の依処色と声所縁。

声所縁グループ：推度受蘊

（五個の過去因は上に述べたのと同じ）

三個の現在因：

- 6、依処（意門の中の 54 色）は因、推度受蘊は果。
- 7、目標（声所縁）は因、推度受蘊は果。

- 8、a.耳触（8）は因、推度受蘊は果。
- b.領受意触（1 1）は因、推度受蘊は果。
- c.推度意触（12-受=1 1）は因、推度受蘊は果。

禅修行者の便の為に、上において、些かの例を列举した。ここにおいて、禅修行者は声所縁の識別方法を理解しなければならない。

香所縁グループ

香所縁グループ：五門引転受蘊

- 1、依処（意門の中の 54 種類の色法）は因、五門引転受蘊は果。
- 2、目標（香所縁）は因、五門引転受蘊は果。
- 3、a.有分意触（3 4）は因、五門引転受蘊は果。
- b.五門引転意触（11-受=1 0）は因、五門引転受蘊は果。

香所縁グループ：鼻識受蘊

（五個の過去因は上に述べたのと同じ）

五個の現在因：

- 6、依処（鼻の中の 54 色）は因、鼻識受蘊は果。
- 7、目標（香所縁）は因、鼻識受蘊は果。
- 8、鼻触（8-受=7）は因、鼻識受蘊は果。
- 9、風界（Vāyo dhātu）は因、鼻識受蘊は果。
- 10. 作意（五門引転=11）は因、鼻識受蘊は果。

香所縁グループ：領受受蘊

（五個の過去因は上に述べたのと同じ）

三個の現在因：

- 6、依処（意門の中の 54 色）は因、領受受蘊は果。
- 7、目標（香所縁）は因、領受受蘊は果。
- 8、a.鼻触（8）は因、推度受蘊は果。
- b.領受意触（11-受=10）は因、領受受蘊は果。

香所縁グループ：推度受蘊

（五個の過去因は上に述べたのと同じ）

三個の現在因：

- 1、依処（意門の中の 54 色）は因、推度受蘊は果。
- 2、目標（香所縁）は因、推度受蘊は果。
- 3、a.鼻触（8）は因、推度受蘊は果。
 b.領受意触（11）は因、推度領受は果。
 c.推度意触（12-受=11）は因、推度受蘊は果。

要点：鼻識、領受、推度等の識蘊の現在因の中の、「名色」の「名」は、識と相応する心所であり、「色」は依処色と香所縁である。その他のグループの中の「名色」もまた、この様に類推する事。

味所縁グループ

味所縁グループ：五門引転受蘊

三個の現在因：

- 1、依処（意門の中の 54 色）は因、五門引転受蘊は果。
- 2、目標（味所縁）は因、五門引転受蘊は果。
- 3、a.有分意触（34）は因、五門引転受蘊は果。
 b.五門引転意触（11-受=10）は因、五門引転受蘊は果。

味所縁グループ：舌識受蘊

（五個の過去因は上に述べたのと同じ）

五個の現在因：

- 6、依処（舌門の中の 54 色）は因、舌識受蘊は果。
- 7、目標（味所縁）は因、舌識受蘊は果。
- 8、舌触（8-受=7）は因、舌識受蘊は果。
- 9、水界（āpo dhātu）は因、舌識受蘊は果。
- 10、作意（五門引転=11）は因、舌識受蘊は果。

舌識などの識蘊の、現在の因果において、相見合う所の相応心所を「名」とし、相見合う所の依処色と味所縁を「色」とする。

味所縁グループ：領受受蘊

（五個の過去因は上に述べたのと同じ）

三個の現在因：

- 6、依処（意門の中の 54 色）は因、領受受蘊は果。
- 7、目標（味所縁）は因、領受受蘊は果。

- 8、a.舌触（8）は因、領受受蘊は果。
b.領受意触（11-受=10）は因、領受受蘊は果。

味所縁グループ：推度受蘊

（五個の過去因は上に述べたのと同じ）

三個の現在因：

- 6、依処（意門の中の 54 色）は因、推度受蘊は果。
7、目標（味所縁）は因、推度受蘊は果。
8、a.舌触（8）は因、推度受蘊は果。
b.領受意触（11）は因、推度受蘊は果。
c.推度意触（12-受=11）は因、推度受蘊は果。

触所縁グループ

触所縁グループ：五門引転受蘊

三個の現在因：

- 1、依処（意門の中の 54 色）は因、五門引転受蘊は果。
2、目標（味所縁）は因、五門引転受蘊は果。
3、a.有分意触（34）は因、五門引転受蘊は果。
b.受五門引転意触（11-受=10）は因、五門引転受蘊は果。

触所縁：身識受蘊

（五個の過去因は上に述べたのと同じ）

五個の現在因：

- 6、依処（意門の中の 44 色）は因、身識受蘊は果。
7、目標（触所縁）は因、身識受蘊は果。
8、身触（8-受=7）は因、身識受蘊は果。
9、地界（*pathavī dhātu*）は因、身識受蘊は果。
10、作意（五門引転= 1 1）は因、身識受蘊は果。

註：識蘊の現在因の中において、相見合う相応心所は「名」及び相見合う依処色（心識の依処色は身門の中の 44 依処色であり、その他の触所縁を目標とする身門と意門心路過程身の依処色は、意門の中の 54 依処色である）と触所縁は「色」である。

触所縁：領受受蘊

(五個の過去因は上に述べたのと同じ)

三個の現在因：

- 6、依処（意門の中の 54 色）は因、領受受蘊は果。
- 7、目標（触所縁）は因、領受受蘊は果。
- 8、a.身触（8）は因、領受受蘊は果。
b.領受意触（11-受=10）は因、領受受蘊は果。

触所縁グループ：推度受蘊

(五個の過去因は上に述べたのと同じ)

三個の現在因：

- 6、依処（意門の中の 54 色）は因、推度受蘊は果。
- 7、目標（触所縁）は因、推度受蘊は果。
- 8、a.身触（8）は因、推度受蘊は果。
b.領受意触（11）は因、推度受蘊は果。
c. 推度意触（12-受=11、または 11-受=10）は因、推度受蘊は果。

法所縁グループ：善グループ（目標=眼浄色）

第一速行受蘊には、四個の現在因がある：

- 1、依処（意門の中の 54 依処色）は因、第一速行受蘊は果。
- 2、目標（眼浄色）は因、第一速行受蘊は果。
- 3、a.有分意触（3 4）は因、第一速行受蘊は果。
b.第一速行意触（34-受=3 3）は因、第一速行受蘊は果。
- 4、如理作意（意門引転=12）は因、第一速行受蘊は果。

第二速行受蘊には、四個の現在因がある：

- 1、依処（意門の中の 54 依処色）は因、第二速行受蘊は果。
- 2、目標（眼浄色）は因、第二速行受蘊は果。
- 3、a.有分意触（3 4）は因、第二速行受蘊は果。
b.第一速行意触（34-受=3 3）は因、第二速行受蘊は果。
c.第二速行意触（34-受=33）は因、第二速行受蘊は果。
- 4、如理作意（意門引転=12）は因、第二速行受蘊は果。

注意：この方法に基づいて、その他の名蘊、速行（第三から第七）と彼所縁を識別する。禅修行者は各種の調整を識別ながら練習する事。以下類推。

法所縁グループ：善グループ（目標＝安般念似相）

第一速行受蘊には四個の現在因がある：

- 1、依処（意門の中の 54 依処色）は因、第一速行受蘊は果。
- 2、目標（安般念似相）は因、第一速行受蘊は果。
- 3、a.有分意触（3 4）は因、第一速行受蘊は果。
b.第一速行意触（34-受＝3 3）は因、第一速行受蘊は果。
- 4、如理作意（意門引転＝12）は因、第一速行受蘊は果。

第二速行などと第一速行の唯一の違いは、因が一個多い事である。すなわち、無間縁である。無間縁とは前生名法であり、たとえば、第一速行は、第二速行の無間縁である。この（安般念）ジャーナ速行識蘊の「名色」因は、ただ 54 依処色を「色」とする。というのも、安般念似相の目標は、ただ概念のみであるが故に。白骨、白遍似相を目標にする名法において、第（二）番目の因としての安般念似相は、白骨、白遍似相（目標）に変更すればよい。言い換えれば、それを修習している所の止禅似相に転換すればよいのである。初禅には 34 の名法がある：第二禅は 32 名法：第三禅及び第四禅は 31 名法である。それらの各々の「速行意触」因の中において、その心所の数量は、減少する。彼所縁は安止定速行（ジャーナ速行）の後、生起する事はない。

法所縁グループ：目標＝色法

諸々の色法の中において、法所縁グループの目標としての色法は、五浄色と 16 微細色である。それらの内のどれか一つを目標とする時、もし、如理作意であれば、善速行は生起する；もし、不如理作意であれば、不善速行は生起する。もし、それを「色」または「眼浄色」または「無常」「苦」「無我」「不浄」と注意を向けるならば、それは如理作意である。不如理作意が如何にして生起するののかについて、名業諸の中の説明を参考されたい。その他の因は、以前に述べたものと同じである。ここにおいて、不善グループの因果関係を如何にして識別するののかについて、すでに理解されたと思う。もし、彼所縁が生起するならば、前に述べた方法によって、識別する事。

局面

五蘊を構成する方式に基づいて、六つのグループ（すなわち、色、声、香、味、触と法所縁グループ）の中の、善グループの一つひとつの心識刹那の因果関係を識別する。《清浄道論》では、この様に識別する時、禅修行者は更に一步進んで、ある種の業とその果報について、知るべきである、という。

Vipassakena pana kammantarañca vipākantarañca ekadesato jānitabbarā

六種類の心路過程の中の種々の果報は、一つひとつが、皆、結生心、有分心と死亡心を引き起こす、という訳ではない。ある種の果報は結生心と有分心を引き起こす業によって引き起こされる。しかし、ある種の果報は当該の業によって引き起こされるものではない。例えば、仏陀が遭遇した 12 種類の（悪）果報（異熟）である。故に、禅修行者は徹底的に、過去の五蘊を識別しなければならない。識別する時に、もし、ある種の善業と悪業を見たならば、彼はそれらが、今世に齎す所の善報または悪報を識別し、また、それらの因果関係を識別しなければならない。

外観と更に遠くの過去と未来世に向かって

上に述べた五個の過去因と現在果を識別し、またそれらの因果関係を連貫させた後、同じ方法によって、外観を識別する。しかしながら、外部は皆同じものであり、故に、全体としてそれらを識別する。

（+その修習に）成功した後、心を更に遠くの過去世に向かわせて、その因果を識別する。たとえば、前二世の因と、前一世の果；前三世の因と、前二世の果等々。同様に、現在の因と未来の果を識別し、それらの因果関係を連貫させる。智を更に遠くの未来世、最後の一個の未来世に向かわせて、出来る限りの因果関係を識別する。内観する時と同じ様に、外観の時にも、過去、現在、未来の三時の因果関係を識別する。

行と明の「種子」

この様に識別する時、過去に造した所の、及び、涅槃を發願した所の「行の種子」（*caranā*）すなわち、布施、持戒と止禅の修習と、「明の種子」（*vijjā*）たとえば、(a) 以前に四界を觀照した (b) 以前に名色を識別した (c) 以前に行法（＝名色と因果）の三相を觀想した、などを識別する事に重点を置かねばならない。これら「行」と「明」

の種子は、継続的に助力（Upatthamghaka satti=助縁）と因力（Janaka satti=直接的な、引き起こせしめる力）を通して、（多くの世を）支えて来たのである。

有分について

有分とは、生命を維持する心である。その生起は、一生の間において、名法相続流を中断させない事にある。前に述べた通り、有分を引き起こす因は、無明、愛、取、行、業、依処、目標、触等々である。一生のうちに最も多く生起するのは有分心である為、有分の中には多くの無間縁がある。注意しなければならない要点として、識別されている有分心の前生心（それは一個前の心識刹那）は、その有分心の無間縁（それらは前後して生起し、間隔がない）である事である。故に：

- 1、結生心は、無間縁力によって、第一有分を支援する。
- 2、第一有分は、第二有分を支援する。
- 3、前生有分は後生有分を支援する。
- 4、（もし有分が確定に従って生起する時）確定は、その有分を支援する。
- 5、もし、有分が速行に従って生起する時、第七速行（または最後の速行）はその有分を支援する。
- 6、もし、有分が彼所縁の後に生起する時、第二彼所縁はその有分を支援する。

それらは皆、無間縁力によって、後生有分を支援するのである。もし、有分が再び生起したならば、前生有分は無間縁力によって後生有分を支援する。

所知遍知の体験証悟

禅修行者は、已に、徹底的に、処門に基づいて、六個のグループの名法と色法を識別した後、もし彼が以下の様に審察するならば、すなわち：「これらの名色法は、無因（hetu、janaka、直接の因）、無縁（upatthambhaka、paccaya、助縁）によって生起するのではない。それらは、必ず因と助縁の支援の下において、生起する。これらの名色法の因と助縁とは、何であるのか？」であるが、その時、彼は、智によって以下の事を知見する事ができる：「それらは、無明、愛、取、行、業及び食などなどによって生起する」と。これら名色法の種々の因（たとえば、：「無明は因、色蘊は果」等々）を識別した後、彼は以下の三項によって、過去、未来、現在の三世への疑いを断じ除く事ができる。

- 1、過去には因と果しかない。

- 2、未来においても、因と果しかない。
- 3、現在においても、因と果しかない。

これらの因果以外に、別に創造主がいて、創造される有情がいるという訳ではない。有るのは、行法、すなわち、名色と因果のみである。これを所知遍知と言ひ、すなわち、如実知見されるべき、観智の目標（所縁）である所の行法である。

この行法とはすなわち：

- 1、色法。
- 2、名法。
- 3、因。
- 4、果（《迷惑氷消》）。

しかしながら、（+この種の修習が成功した後にあっても）再度、徹底的にこれらの行法（すなわち、名色と因果）の相、作用（味）、現起（現象）と近因（足処）（Lakkhaṇa, Rasa, Paccupaṭṭhāna, Padaṭṭhāna）を識別しなければならない。



第九章：縁起第一法 Paṭiccasamuppāda

縁起分別——經分別教法

Paṭiccasamuppāda Vibhaṅga Pāḷi Suttanta Bhājanīya Method

以下のパーリ文は、暗記されなければならない：

‘Avijjā paccayā saṅkhārā, saṅkhāra paccayā viññāṇaṃ, viññāṇa paccayā nāmarūpaṃ, nāmarūpa paccayā saḷāyatanaṃ, saḷāyatana paccayā phassa, phassa paccayā vedanā, vedanā paccayā taṇhā, taṇhā paccayā upādānaṃ, upādāna paccayā bhava, bhava paccayā jāti, jāti paccayā jarāmaraṇa soka parideva dukkha domanassa upāyāsā

sambhavanti. Evametassa kevalassa dukkhakkhandhassa samudayo hoti. Idam vuccati bhikkhave dukkhasamudayaṃ ariyasaccaṃ.’

「無明の縁によりて行生じ、行の縁によりて識生じ、識の縁によりて名色生じ、名色の縁によりて六処生じ、六処の縁によりて触生じ、触の縁によりて受生じ、受の縁によりて愛生じ、愛の縁によりて取生じ、取の縁によりて有生じ、有の縁によりて、生生じ、生の縁によりて老、死、愁、悲、苦、憂、悩が生じる。苦蘊の全体は、この様にして生起する。」

1、Avijjāpaccayā（無明の縁によりて）＝無明が原因で（すなわち、四聖諦を知らない事；錯誤。これは因）Saṅkhāra（行）＝今世と未来世の輪廻の為に造（ナ、以下同様）した業、すなわち善行と不善行（kusala saṅkhāra、akusala saṅkhāra）。

Sambhavanti＝生起する。（無明の縁によりて、行が生起する）

2、Saṅkhārapaccayā（行の縁によりて）＝今世と未来世の輪廻の為に造した行（すなわち、善行と不善行。これは因）。

Viññānaṃ＝業識（kamma viññāṇa）または（別の法では）果報識（vipāka viññāṇa）。

Sambhavanti＝生起する。（行の縁によりて、識が生起する。）

3、Viññāṇapaccayā nāmarūpaṃ sambhavanti（識の縁によりて、名色が生起する）＝（i）業識（因）があるが故に、果報名と業生色（vipāka nāma kammaja rūpa）が生起する。

（もう一つ別の法）＝（ii）果報識（因）があるが故に、果報心所名法と心生色（vipāka cetasika nāma cittaja rūpa）が生起する。

4、Nāmarūpapaccayā saḷāyatanaṃ sambhavanti（名色の縁によりて、六処が生起する）＝名色（因）があるが故に、六内処（6 āyatana）が生起する。

5、Saḷāyatanapaccayā phasso sambhavanti（六処の縁によりて、触が生起する）＝六内処（因）があるが故に、六触（6 phassa）が生起する。

6、Phassapaccayā vedanā sambhavanti（触の縁によりて、受が生起する）＝六触があるが故に（因）、六受（6 vedanā）が生起する。

7、Vedanāpaccayā taṇhā sambhavanti（受の縁によりて、愛が生起する）＝六受があるが故に（因）、六愛（6 taṇhā）が生起する。

8、Taṇhāpaccayā upādānaṃ sambhavanti (愛の縁によりて、取が生起する)
=六種類の渴愛があるが故に、四種類の執着・執取(4 upādāna)が生起する。

9、Upādānapaccayā bhavo (取の縁によりて、有が生起する)
=これらの執着・執取があるが故に、業有(kamma bhava)と生有(upapatti bhava)が生起する。

10、Bhavapaccayā jāti (有の縁によりて、生が生起する)
=業有があるが故に、生(jāti、すなわち、結生 paṭisandhi)が生起する。

11、Jātipaccayā jarāmarāṇa soka parideva dukkha domanassupāyāsā sambhavanti.
Evametassa kevalassa dukkhakkhandhassa samudayo hoti.
=生があるが故に、老、死、愁、悲、苦、憂と悩が生起する。(全くもって、楽しいものは何もない所の)苦蘊は、この様にして生起する。

(1) Tattha katamā avijjā? Dukkhe aññānaṃ dukkhasamudaye aññānaṃ, dukkhanirodhe aññānaṃ dukkhanirodhagāminiyā paṭipadāya aññānaṃ. Ayaṃ vuccati avijjā.

意味はすなわち：(上に述べた)「無明の縁ありて・・・」の中の、無明とは何か? 無明と言われるものは、以下の四種類である：

- i、苦を知らない。
- ii、苦の集を知らない(苦の因)。
- iii、苦の滅を知らない(苦の止息)。
- iv、苦の滅に向かう道を知らない。

以下は、逐次翻訳(の例)である：

Tattha=上に述べた。 Avijjā=無明。 Katamā=何が。

- i、Dukkhe=苦諦を、 aññānaṃ=知らない。
- ii、Dukkhasamudaye=苦の集を、 aññānaṃ=知らない。
- iii、Dukkhanirodhe=苦の滅の諦を、 aññānaṃ=知らない。
- iv、Dukkhanirodhagāminiyā=苦の滅に向かう道を、aññānaṃ=知らない。

Ayaṃ=この四種類の無知、avijjā=無明、vuccati=・・・と言う。

(2) Tattha katame avijjāpaccayā saṅkhārā? Puññābhisaṅkhāro apuññābhisaṅkhāro āneñjābhisaṅkhāro, kāyasaṅkhāro vacīsaṅkhāro cittasaṅkhāro. Tattha katamo puññābhisaṅkhāro? Kusalā cetanā kāmāvacarā rūpāvacarā dānamayā sīlamayā

bhāvanāmayā. Ayaṃ vuccati puññābhisaṅkhāro. Tattha katamo apuññābhisaṅkhāro?
 Akusalā cetanā kāmāvacarā. Ayaṃ vuccati apuññābhisaṅkhāro.
 Tattha katamo āneñjābhisaṅkhāro? Kusalā cetanā arūpāvacarā.
 Ayaṃ vuccati āneñjābhisaṅkhāro. Tattha katamo kāyasaṅkhāro? Kāyasañcetanā
 kāyasaṅkhāro; vacīsañcetanā vacīsaṅkhāro; manosañcetanā cittasaṅkhāro. Ime
 vuccanti avijjāpaccayā saṅkhārā.

上に述べた、無明の縁によりて、生起した所の行とは何か？ それは：

- i、puññābhisaṅkhārā = 福行、善行。
- ii、apuññābhisaṅkhārā = 非福行、不善行。
- iii、āneñjābhisaṅkhārā = 不動行。
- iv、kāyasaṅkhārā = 身行。
- v、vacīsaṅkhārā = 語行。
- vi、cittasaṅkhārā = 意行。

(i) これらの行の中において、福行とは何か？

善思の中には、以下の様なものがある：

a. 大善思 (mahākusala cetanā) (注 39) は、欲界善思であり、布施、持戒と禅修によって造される (ここで言う所の、禅修とは、遍作、近行と観禅の禅修を言うが、しかし、すべての観禅の修習の業を言う訳ではなく、もう一つ別の生を齎す所の、観禅の修習を言う。)

b. 色界善思 (rūpāvacara kusala cetanā)、止禅の修習、または安止禅によって造された、色界善思。これらの欲界と色界善思は、福行と呼ばれる。

(8 大善 + 5 色界 = 13)

(ii) これらの行の中において、何が非福行であるか？ 欲界不善思は非福行である。

(iii) これらの行の中において、何が不動行であるか？ 無色界の無色禅思は、不動行と言う。

(iv) これらの行の中において、身行とは何であるか？ 身門において生起する所の、身思 (kāyasañcetanā = 八種類の欲界善思と 12 種類の不善思) は、身行である。

(v) 語門において生起する所の語思 (vacīsañcetanā = 8 種類の欲界善思と、12 種類の不善思) は語行である。

(vi) 二種類の表色 (viññatti rūpa、すなわち、身法と語表) を除いた、30 - 1 = 29 すべての思 (すなわち、12 種類の不善思、八種類の大善思、五種類の色善思と、四種類の無色善思 = その意味は、manosañcetanā) は、意行である。これらは無明によって引き起こされる行である。

注 39 : 《智慧の光》では以下の様に言う。

大善とは何か？数量が多いが故に大善と言う。諸々の身識グループの中において、欲界心は 24 個、欲界無因心は 18 個、欲界不善心は 12 個、色界心は 15 個、無色界心は 12 個、出世間心は 8 個である。欲界善心の数量が最大であるため、大と呼ばれるのである。

(3) *Tattha katamaṃ saṅkhārapaccayā viññāṇaṃ? Cakkhaviññāṇaṃ sotaviññāṇaṃ ghānaviññāṇaṃ jivhāviññāṇaṃ kāyaviññāṇaṃ manoviññāṇaṃ. Idaṃ vuccati saṅkhārapaccayā viññāṇaṃ.*

上に述べたパーリ經典の文中、行によって、引き起される所の、識とは何か？それらは以下の、6 種類の識である。

- i、眼識 (*cakkhaviññāṇa*)。
- ii、耳識 (*sotaviññāṇa*)。
- iii、鼻識 (*ghānaviññāṇa*)。
- iv、舌識 (*jivhāviññāṇa*)。
- v、身識 (*kāyaviññāṇa*)。
- vi、意識 (*manoviññāṇa*)。

(4) *Tattha katamaṃ viññāṇapaccayā nāmarūpaṃ? Atthi nāmaṃ, atthi rūpaṃ. Tattha katamaṃ nāmaṃ? Vedanākkhandho saññākkhandho saṅkhārakkhandho, idaṃ vuccati nāmaṃ.*

Tattha katamaṃ rūpaṃ? Cattāro mahābhūtā catunnañca mahābhūtānaṃ upādāya rūpaṃ, idaṃ vuccati rūpaṃ. Iti idañca nāmaṃ idañca rūpaṃ, idaṃ vuccati viññāṇapaccayā nāmarūpaṃ.

上に述べたパーリ經典の文中、識によって引き起される所の、名色とは何か？

(A) 名有り、(B) 色有り：

(A) 名色の中において、名とは何か？ 名とは以下の三蘊である：

- i、*vedanākkhandha*=受蘊。
- ii、*saññākkhandha*=想蘊。
- iii、*saṅkhārakkhandha*=行蘊。

(B) 名色の中において、色とは何か？ 色とは：

- i、四大種色、及び
- ii、四大種色に依存して生起する所の、24 種類の所造色。これらは、識によって引き起こされる所の、名色である。

(5) Tattha katamaṃ nāmarūpapaccayā saḷāyatanaṃ?

Cakkhāyatanaṃ sotāyatanaṃ ghānāyatanaṃ jivhāyatanaṃ kāyāyatanaṃ manāyatanaṃ. Idaṃ vuccati nāmarūpapaccayā saḷāyatanaṃ.

上に述べたパーリ經典の文中、名色によって引き起こされる所の、六処とは何か？

名色によって引き起こされる所の六処とは：

- i、眼処 (cakkhāyatana)
- ii、耳処 (sotāyatana)
- iii、鼻処 (ghānāyatana)
- iv、舌処 (jivhāyatana)
- v、身処 (kāyāyatana)
- vi、意処 (manāyatana) 。。

(6) Tattha katamo saḷāyatanapaccayā phasso? Cakkhusamphasso sotasamphasso ghānasamphasso jivhāsamphasso kāyasamphasso manosamphasso. Ayaṃ vuccati saḷāyatanapaccayā phasso.

上に述べたパーリ經典の文中、六処によって引き起こされる所の触とは何か？

六処によって引き起こされる六触とは：

- i、眼触 (cakkhusamphassa)
- ii、耳触 (sotasamphassa)
- iii、鼻触 (ghānasamphassa)
- iv、舌触 (jivhāsamphassa)
- v、身触 (kāyasamphassa)
- vi、意触 (manosamphassa)

(7) Tattha katamā phassapaccayā vedanā? Cakkhusamphassajā vedanā, sotasamphassajā vedanā, ghānasamphassajā vedanā, jivhāsamphassajā vedanā, kāyasamphassajā vedanā, manosamphassajā vedanā. Ayaṃ vuccati phassapaccayā vedanā.

上に述べたパーリ經典の文中、触によって引き起こされる受とは何か？

触によって引き起こされる、六種類の受とは：

- i、cakkhusamphassajā vedanā = 眼触によって受生ず。
- ii、sotasamphassajā vedanā = 耳触によって受生ず。
- iii、ghānasamphassajā vedanā = 鼻触によって受生ず。
- iv、jivhāsamphassajā vedanā = 舌触によって受生ず。
- v、kāyasamphassajā vedanā = 身触によって受生ず。
- vi、manosamphassajā vedanā = 意触によって受生ず。

(8) Tattha katamā vedanāpaccayā taṇhā? Rūpataṇhā saddataṇhā gandhataṇhā rasataṇhā phoṭṭhabbataṇhā dhammataṇhā. Ayaṃ vuccati vedanāpaccayā taṇhā.

上に述べたパーリ經典の文中、受によって引き起こされる愛とは何か？

受によって引き起こされる所の、六種類の渴愛とは：

- i、rūpataṇhā＝色所縁を渴愛する（色愛）
- ii、saddataṇhā＝声所縁を渴愛する（声愛）
- iii、gandhataṇhā＝香所縁を渴愛する（香愛）
- iv、rasataṇhā＝味所縁を渴愛する（味愛）
- v、phoṭṭhabbataṇhā＝触所縁を渴愛する（触愛）
- vi、dhammataṇhā＝法所縁を渴愛する（法愛）。

(9) Tattha katamaṃ taṇhāpaccayā upādānaṃ? Kamupādānaṃ diṭṭhupādānaṃ sīlabbatupādānaṃ attavādupādānaṃ. Idaṃ vuccati taṇhāpaccayā upādānaṃ.

上に述べたパーリ經典の文中、愛によって引き起こされる取とは何か？

愛によって引き起こされる所の、四種類の執着（執取）とは：

- i、kāmapādāna＝欲取。欲樂への執着。
- ii、diṭṭhupādāna＝見取。邪見への執着。
- iii、sīlabbatupādāna＝戒禁取。間違った修行方法に執着する。たとえば、牛、犬の真似をするなど。
- iv、attavādupādāna＝我論取。我見の執取。

(10) Tattha katamo upādānapaccayā bhavo? Bhavo duvidhena atthi kammabhavo atthi upapattibhavo. Tattha katamo kammabhavo? Puññābhisaṅkhāro apuññābhisaṅkhāro āneñjābhisaṅkhāro. Ayaṃ vuccati kammabhavo. Sabbampi bhavagāmikammaṃ kammabhavo. Tattha katamo upapattibhavo? Kāmapbhavo rūpabhavo arūpabhavo saññābhavo asaññābhavo nevasaññānāsaññābhavo ekavokārabhavo catuvokārabhavo pañcavokārabhavo. Ayaṃ vuccati upapattibhavo. Ayaṃ vuccati upādānapaccayā bhavo.

上に述べたパーリ經典の文中、取によって引き起こされた有とは何か？

二種類の有がある。すなわち、(A) 業有 (kamma bhava) と (B) 生有 (upapatti bhava) である。

(A) この二者の中において、業有とは何か？

業有（＝生起の因）は、以下の三種類の行である。

- i、福行。
- ii、非福行。
- iii、不動行。

一切の、生命（有）を齎す事のできる業は、業有である。

(B) この二者の中において、生有とは何か？

以下の 9 種類の生命は生有である。

i、kāma**bhava**=欲有。11 欲界の中の生命。

ii、rūpa**bhava**=色有。16 色界の中の生命。

iii、arūpa**bhava**=無色有。四無色界の生命。

iv、saññā**bhava**=想有。想を有する生命 [欲界は 11 個、色界は 15 個（無想天を除く）
無色界は 3 個（非想非非想処を除く）、合計 29 界] :

v、asaññā**bhava**=無想有。無想の生命。

vi、nevasaññānāsaññā**bhava**=非想非非想有（生命）。

vii、ekavokāra**bhava**=一蘊有。ただ一つの蘊を擁している生命（すなわち、無想天）。

viii、catuvokāra**bhava** : 四蘊有。ただ四蘊のみ擁している生命（すなわち、四無色界）

ix、pañcavokāra**bhava**=五蘊有。五蘊を擁している生命（欲界は 11 個、色界は 15 個
（無想天を除く）、合計 26 個）

これらの業有と生有は、取によって引き起こされた所の有である。

(1 1) Tattha katamā bhavapaccayā jāti? Yā tesam tesam sattānam tamhi tamhi
sattanikāye jāti sañjāti okkanti abhinibbatti khandhānam pātubhāvo āyatanānam
paṭilābho. Ayaṃ vuccati bhavapaccayā jāti.

上に述べたパーリ經典の文中、有によって引き起こされた生 (= 生有) は、何であるか？
諸々の有情の中において、出生、生起、母胎の進入があり、新しい生命になり、蘊が生
起し、種々の有情の処 (āyatana) を獲得する。これらは、有によって引き起こされた
生である。

(1 2) Tattha katamaṃ jātipaccayā jarāmarañam? Atthi jarā atthi marañam. Tattha
katamā jarā? Yā tesam tesam sattānam tamhi tamhi sattanikāye jarā jīraṇatā
khaṇḍiccaṃ pāliccaṃ valittacatā āyuno saṃhāni indriyānam paripāko. Ayaṃ vuccati
jarā.

上に述べたパーリ經典の文中、生によって引き起こされる老死とは何であるか？
この二者の中において、老とは何か？ 諸々の有情の中において、年老いる、老衰、齒
の脱落、白髪、皺、生命の敗廃及び種々の有情の諸々の根の老化がある。
これらは老いである。

(1 3) Tattha katamaṃ marañam? Yā tesam tesam sattānam tamhā tamhā
sattanikāyā cuti cavanatā bhedo antaradhānam maccu marañam kālakiriya

khandhānaṃ bhedo kaḷevarassa nikkhepo jīvitindriyassupacchedo. Idaṃ vuccati maraṇaṃ. Iti ayaṅca jarā idaṅca maraṇaṃ. Idaṃ vuccati jātipaccayā jarāmaraṇaṃ.

老死の中において、死とは何か？

諸々の有情の中において、生、死亡、分離、逝去があり、死亡の中に死ぬこと、死亡、諸々の蘊の分離、身体の捨棄及び種々の有情の命根の終りがある。これらは死である。故に、老死は存在しており、これらは生によって引き起こされた所の老死である。

(1 4) Tattha katamo soko? Nātibyasanena vā phuṭṭhassa, bhogabyasanena vā phuṭṭhassa, rogabyasanena vā phuṭṭhassa, sīlabyasanena vā phuṭṭhassa, diṭṭhibyasanena vā phuṭṭhassa, aññataraññatarena byasanena samannāgatassa, aññataraññatarena dukkhadhammena phuṭṭhassa, soko socanā socitattaṃ antosoko antoparisoko cetaso parijjhāyanā domanassaṃ soka - sallaṃ. Ayaṃ vuccati soko.

上に述べたパーリ経典の文中、愁とは何か？

親戚の喪失、財産の喪失、疾病、犯戒、邪見の保持、何らかの不幸に見舞われた人、苦しんでいる人は、愁があり、愁を発し、内心において愁を発し、心全体が愁であり、心は完全に燃えており、不愉快及び愁の棘に刺されるのである。これらは愁である。

(1 5) Tattha katamo paridevo? Nātibyasanena vā phuṭṭhassa, bhogabyasanena vā phuṭṭhassa, rogabyasanena vā phuṭṭhassa, sīlabyasanena vā phuṭṭhassa, diṭṭhibyasanena vā phuṭṭhassa, aññataraññatarena byasanena samannāgatassa, aññataraññatarena dukkhadhammena phuṭṭhassa, ādevo paridevo ādevanāparidevanā ādevitattaṃ paridevitattaṃ vācā palāpo vippalāpo lālappo lālappanā lālappitattaṃ. Ayaṃ vuccati paridevo.

上に述べたパーリ経典の文中、悲とは何であるか？

あれら親戚の喪失、財産の喪失、疾病、犯戒、邪見の保持、不幸な人と苦しみの人には、悲泣があり、不断に悲泣し、悲泣の境、不断の悲泣の境があり、悲泣し、不断に悲泣つづけ、悲哀にみちて叫び（たとえば、「ああ、私の息子！ああ、私の娘！」）不断に悲哀にみちて叫び、種々に不断に悲哀にみちて叫び、悲哀の境及び不断に悲哀にみちて叫ぶ境地がある。これがすなわち、悲である。

(1 6) Tattha katamaṃ dukkhaṃ? Yaṃ kāyikaṃ asātaṃ, kāyikaṃ dukkhaṃ, kāyasamphassaṃ asātaṃ dukkhaṃ vedayitaṃ kāyasamphassajā asātā dukkhā vedanā. Idaṃ vuccati dukkhaṃ.

上に述べたパーリ経典の文中、苦とは何か？

身体の苦、身触によって体験する痛苦の苦及び身触によって生起する所の苦受。これらは苦である。

(17) Tattha katamañ domanassañ? Yañ cetasikañ asātañ cetasikañ dukkhañ cetosamphassañ asātañ dukkhañ vedayitañ cetosamphassajā asātā dukkhā vedanā. Idañ vuccati domanassañ.

上に述べたパーリ經典の文中、何が憂であるか？心の苦受がある事、思触（＝意触）によって、体験する苦、思触（＝意触）によって体験した苦受。これらは憂である。

(18) Tattha katamo upāyāso? Ñātibyaśanena vā phuṭṭhasa, bhogabyaśanena vā phuṭṭhasa, rogabyaśanena vā phuṭṭhasa, sīlabyaśanena vā phuṭṭhasa, diṭṭhibyaśanena vā phuṭṭhasa, aññataraññatarena byaśanena samannāgatassa, aññataraññatarena dukkhadhammena phuṭṭhasa, āyāso upāyāso āyāsitattañ upāyāsitattañ. Ayañ vuccati upāyāso.

上に述べたパーリ經典の文中、悩とは何か？あれら親戚を失い、財産を失い、疾病があり、犯戒し、邪見を保持し、不幸及び苦のある人は、絶望があり、極度の絶望があり、絶望を感じ、また極度に絶望する。これらは悩である。

(19) Evametassa kevalassa dukkhakkhandhassa samudayo hotīti. Evametassa kevalassa dukkhakkhandhassa saṅgati hoti. Samāgamo hoti. Samodhānañ hoti. Pātubhāvo hoti. Tena vuccati evametassa kevalassa dukkhakkhandhassa samudayo hotīti. (Abhidhamma - II, p.142 - 145) Suttanta Bhājanīyañ niṭṭhitañ.

故に、これは（全くの楽しみのない）苦蘊の生起である。言い換えれば、これは（全くの楽しみのない）苦蘊の構造であり、構成と出現の因である。故にそれを：「一切の苦蘊は斯くの如くに生起する」と言う。（Evametassa kevalassa dukkhakkhandhassa samudayo hoti.）

縁起を系統的に修習したいと思い、随覚智と通達智を体験証悟したいと思う禅修行者は、修習を始める前に、上に述べた縁起（12縁起）のパーリ文とその訳文を覚えておくべきである。その含意を熟知して初めて、縁起第一法を修習する事。



12 縁起支

縁起第一法と呼ばれている所の随順縁起教法に関して、禅修行者は、それが 12 支、三時、三連結、四摂類及び 20 法のある事を知っておかねばならない。

- 1、avijjā = 無明。
- 2、saṅkhāra = 行。
- 3、viññāṇa = 識。
- 4、nāmarūpa = 名色。
- 5、saḷāyatana = 六処。
- 6、phassa = 触。
- 7、vedanā = 受。
- 8、taṇhā = 愛。
- 9、upādāna = 取。
- 10、bhava = 有。
- 11、jāti = 生。
- 12、jarāmaraṇa = 老死。。

三時

もし、今世を（縁起輪廻の）中間に置くとするならば：

- 1、無明と行は過去世に属する。
- 2、識、名色、六処、触、受、愛、取と有（業有）は、今世に属する。
- 3、生と老死は未来世に属する。

もし、第一の過去世（縁起輪廻の）中間に置くとするならば：

- 1、無明と行は第二過去世に属する。
- 2、識、名色、六処、触、受、愛、取及び有（業有）は第一過去世に属する。
- 3、生と老死は今世に属する。

更に遠い過去世は、類推の事。

もし、第一未来世を（縁起輪廻）中間に置くなれば：

- 1、無明と行は今世に属する。
- 2、識、名色、六処、触、受、愛、取及び有（業有）、は第一未来世に属する。
- 3、生と老死は、第二未来世に属する。

更に遠い未来世は、斯くの如く類推の事。

三連結

因と果が接続している処を「連結」と言う。

- 1、過去因に属する所の行と現在果の識の間には、因果の連結がある。
- 2、受（現在果）と愛（現在因）の間には、果因の連結がある。
- 3、業有（現在因）と生（未来果）の間には、因果の連結がある。

12支の中には、合計3連結がある（更に遠い過去世と未来世に関しては、斯くの如く類推の事）。

四摂類（四グループ）

1、過去の無明（を所縁として）取る時、無明と同じ煩惱輪転に属する愛と取もまた、それに含まれる。行を取る時、行と同じ業輪転に属する業もまた、それに含まれる。故に、過去は五因となる。すなわち、無明、愛、取、行及び業である。それらは過去因のグループに属する。

2、識、名色、六処、触と受は、過去五因を因として生起した所の現在五果である。それらは現在果のグループに属する。

3、現在因の中において、愛と取を取る時、同じく煩惱輪転に属する所の無明もまたそれに含まれる。業有（=業）を取る時、同じく業輪転に属する所の行もまたそれに含まれる。故に、現在には五因ある。すなわち、無明、愛、取、行及び業である。それらは現在因のグループに属する。

4、生は現在因が因となって引き起こされた未来結生名色グループである。言い換えれば、それは果報輪転名色（vipākavaṭṭa nāmarūpa）の識、名色、六処、触と受に属する。それらは未来果のグループに属する。

20 法

合計20の法がある。すなわち、

- 1、過去五因。
- 2、現在五果。
- 3、現在五因。

4、未来五果。

更に遠い過去世と未来世もまた、斯くの如く類推の事。

先に知っておくべき識別方法

縁摂受智の段階

この段階においては、諸々の因と諸々の果を：
「無明が生起するが故に、行が生起する；無明は因、行は果・・・」（+と知っておかねばならない）。

思惟智慧と初期の生滅随観智の段階

この段階においては、12縁起支の生・滅を目標として、それらの三相を観ずる。例えば、「無明が生起するが故に、行が生起する。無明（生と滅）——無常（苦、無我）。行（生と滅）——無常（苦、無我）。」

成熟した生滅随観智の段階

- この段階においては、諸々の縁起の三相を詳細に観照する：たとえば、
- 1、Paccayato udayadassana（縁生を見る）＝「因が生起するが故に、果が生起する」を観ずる時、「無明が生起するが故に、行が生起する；行が生起するが故に、識が生起する・・・」と観じなければならない。
 - 2、Paccayato vayadassana（縁滅を見る）＝「因が滅する（+が故に）果滅する」を観ずる時、「無明が滅するが故に、行滅する；行が滅するが故に、識が滅する・・・」と観じなければならない。
 - 3、Khaṇato udayadassana（刹那生を見る）＝刹那生起を観じている段階においては、諸々の縁起支の生をのみ目標として観ずるべきであり、「無明の生じる時、行の生じる時・・・」と観ずる。
 - 4、Khaṇato vayadassana（刹那滅を見る）＝刹那滅を観じている段階において、諸々の縁起支の滅をのみ目標として観ずるべきであり、「無明の滅する時、行の滅する時・・・」と観ずる。
 - 5、縁生滅と刹那生滅を見ている時（paccayato udayabbaya dassana, khaṇato udayabbaya dassana）の段階においては、

「無明が生起するが故に、行が生起する；無明が滅するが故に、行が滅する；無明（の生と滅）は無常である；行（の生と滅）は無常である・・・」（注 40）

注 40：《智慧の光》では、上に述べた「生の時」と「滅の時」は、一つひとつの刹那の中の、生、住と滅の三時における生と滅であるとする。

壊滅随観智の段階

更に高度な観智の段階において、たとえば、壊滅随観智であるが、諸々の縁起支の滅をのみ目標に取る為、「取転起」（*upādinnakapavatta*）と呼ばれている所の、「因が生起するが故に、果が生起する」に注意を向けてはならず、その後に、諸々の縁起支の滅の三相を、順序よく観ずる。たとえば、

「無明（滅、滅）——無常（苦、無我）；行（滅、滅）——無常（苦、無我）・・・」

観智において、諸々の縁起支が迅速に滅している時にのみ、それらを、以下の様に観ずる：

「無明（滅、滅）——無常（苦、無我）；観照している所の観智（滅、滅）——無常（苦、無我）；行（滅、滅）——無常（苦、無我）；観照している所の観智（滅、滅）——無常（苦、無我）・・・」

識別している時、已に生じている、正に生じつつある、（+これから）將に生じようとしている所の、諸々の因果心路過程心を観じなければならないし、また、智でもって、密集が看破できるまで、観照している所の観智もまた識別しなければならない。

各自各々

一切の有情は、各々自ら無明と行を有している。諸々の有情の間の無明と行は、それぞれ異なっている。たとえば、この人は、男性に生まれる様にといい、無明、愛、取に取り囲まれた、行と業の発願を造（十）しており、また別の人は、女性に生まれる様にといい、無明、愛、取に取り囲まれた、行と業の発願を造（十）している：この人の布施業は、果を引き起こし；もう一人の持戒業は、果を引き起こし；またもう一人の人の禅修業は、果を引き起こす。また、布施業の中において、この人は、食物の布施による業が、果を引き起こし、もう一人の人は、花を供養した業が、果を引き起こす。その上、己自身の名色相続流の中において、諸々の、世間的な無明と、行の状況もまた、それぞれ異なるものである。

こうしたことから、智でもって、己自身の名色流（のみに）已に生じた、正に生じつつある、将に生じようとしている無明と行をのみ、観ずるべきである。無明、愛、取、行及び業を追尋する方法は、縁起第五法の解説の時に、已に説明した為、ここでは重複せず、ただ、識別の方法を説明する。この章で列挙する識別方法は：「無明が生起するが故に、行が生起する・・・」等々である。縁摂受智、生滅随観智と壊滅随観智の段階においては、上に述べた説明に従って、禅修をする事。

無明の縁によりて行 (Avijjāpaccayā saṅkhāra)

(無明が生起するが故に、行が生起する)

智でもって「過去世で造(ナ)した無明(愛、取)すなわち、煩惱輪転は、過去世において造(ナ)した行(業)であり、すなわち、それによって業輪転もまた、生起する」を知見した後、以下の様に因果を識別する：

「無明が生起するが故に、行が生起する；無明は因、行は果。」

ここにおいて、過去世で生起した無明と行は、以下の心路過程において出現する：

表 9-1：意門心路過程

	意門引転	速行(7x)	彼所縁(2x)
無明	12	20	12/34
行	12	34	34/12

註：無明の多くは、貪見グループ 20 名法（心と心所）において生起する。ある時には、それは 19 の名法として出現する、捨俱、無喜（+として）。ある時には、それは昏沈睡眠と相応する 2 2 または 2 1 の名法として出現する。この四種類は、貪根邪見相応である。彼所縁は、生起する時もあれば、生起しない時もある。若し、彼所縁が喜俱速行の後に生起したならば、その彼所縁は、喜相応である。有因彼所縁と無因彼所縁は、状況によって生起する。行についても、斯くの如くに類推すること。上に述べたものは、人類の行為の例である。その行の中において、智と喜は、状況によって生起する。名業処が示す様に、それは状況によって、34、33 または 32 であったりする。彼所縁は生起したり、しなかったりする。禅修行者が観禅の段階に到達した時に、これらに関して、心路過程にそって、その生・滅する名法を識別した後、彼は因と果の三相を觀照しなければならない。一つひとつの密集を、智でもって看破する。

五門心路過程は、結生果を引き起こす事はできず、ただ転起果だけを、引き起こすが故に、ここではただ、意門心路過程のみに、言及した。

行の縁によりて識 (Saṅkhārapaccayā viññāṇaṃ)

(行の生起によりて、果報識が生起する)

「無明によりて、行が生起する」と「行によりて、識が生起する」に関して、それは無明と行の自然的エネルギー (atthi bhāva) を言うのである。無明と行の間には、非常に多くの数量の心識刹那または多くの心路過程が存在している。ある時には、無明と不善行は、同一の心識刹那または心路過程において、生起する事ができる。しかし、無明と善果報識 (たとえば、この生における、人の結生果報識) を引き起こす事のできる善行の間には、非常に多くの心路過程が挟まれる。

「行によりて、果報識が生起する」の場合の、行と果報識の間には、一世または多くの世が挟まれる。所以、果の生、住、と滅の時、因の生、住と滅は、二度と存在する事がない。無明と行の生、住、滅が二度と存在しない時に初めて、それは果を引き起こす。故に、「無明と行によりて、それに合い見合う果が生起する」に言及する時、それは無明と行が、その果を引き起こすことができる所の、自然のエネルギーを指しているのである。

その自然的エネルギーとは、すなわち、無明、愛と取 (たとえば、人間になりたいという欲) に取り囲まれた所の、善行法グループの業力である。業を造 (ナ) す事は、この自然的力の精緻、肝要である。(善または不善の) 行を造 (ナ) す時、それは初めて果の因となる事ができる。その生、住、滅の時が発生するかどうかは、重要ではない。

Kāmāvacarassa kusalassa kammaṃsa katattā upacittā vipākāṃ

cakkhuvīññāṇaṃ uppannaṃ hoti.

——欲界善業を造 (ナ) したが故に、善果報眼識が生起する。(《殊勝義註》)

識

輪廻を引き起こす所の行を造 (ナ) したが故に、眼、耳、鼻、舌と意の六種類の果報識が生起する。

果報意識＝果報識

果報識は、五識と果報意識 (*vipāka manoviññāṇa*) である。果報意識は、離心路過程心 (*vīthimutta citta*) に属する結生識、有分識、死亡識を含み、また、心路過程心 (*vīthi citta*) に属する領受、推度と彼所縁果報識を含む。

五識、領受、推度と無因彼所縁は、善果報または不善果報で有り得る。五識、領受、推度と彼所縁は、心路過程の心定法 (*citta niyāma*、心の自然定法) と呼ばれるものによって生起する為、禅修行者はそれらが生起する所の心路過程に基づいて因果を識別しなければならない。

心路過程に基づいて識別する時、唯作心 (*kiriya citta*) に属する五門引転、確定及び意門引転はと、速行の善と不善と呼ばれるものは、果報識と同一の心路過程の中において生起する。(確定=*votthapana*、また *voṭṭhabbana*) は、心路過程において生起したどの様な究極界(*paramattha dhātu*)をも取りこぼさない為に、唯作、善と不善心に対して、観(禅)の修習を行うのは、正しい。ただし、因果関係を連貫させる時、行と果報識の間の因果関係をのみ識別するべきである。六グループすべてを識別する。すなわち、色所縁グループから法所縁グループまでのすべてを、である。

離心路過程心の識別 (*vīthi mutta citta*)

- 1、行 (34) が生起するが故に、結生識が生起する；行 (34) は因、結生識は果。
- 2、行 (34) が生起するが故に、有分識が生起する；行 (34) は因、有分識は果。
- 3、行 (34) が生起するが故に、死亡識が生起する；行 (34) は因、死亡識は果。

眼門心路過程の果報識

- 1、行 (34) が生起するが故に、眼識が生起する；行 (34) は因、眼識は果。
- 2、行 (34) が生起するが故に、領受識が生起する；行 (34) は因、領受識は果。
- 3、行 (34) が生起するが故に、推度識が生起する；行 (34) は因、推度識は果。
- 4、行 (34) が生起するが故に、彼所縁識は生起する；行 (34) は因、彼所縁識は果。

註：眼門と意門心路過程の中において生起する所のすべての彼所縁(二回)を識別しなければならない。全体の心路過程の中のすべての果報識(名業処表に示す通りの如く)を識別する。一切の善と不善速行心路を、以下の方法によって、識別する。

- 1、声(=音)所縁グループの耳識、領受、推度と彼所縁果報識；
- 2、香所縁グループの鼻識、領受、推度と彼所縁果報識；
- 3、味所縁グループの舌識、領受、推度と彼所縁果報識；
- 4、触所縁グループの身識、領受、推度と彼所縁果報識；
- 5、法所縁グループの彼所縁果報識。

識の縁によりて名色 (Viññāṇapaccayā Nāmarūpaṃ)

(識の生起によって、名色が生起する)

Yañhi nāmarūpassa hetu viññāṇaṃ, taṃ vipākāvipāka bhedato dvidhā mataṃ.

——「果報識 (vipāka viññāṇa) と非果報識 (avipāka viññāṇa=abhisaṅkhāra viññāṇa 行作識) の二者は、皆、名色の因の識とする事ができる。(《清浄道論》第 17 章)

果報識はまた、俱生識 (sahajāta viññāṇa) と呼ばれるが、その意味は、相応する心所と同時に生起する識、である。結生、有分と死亡は、心路過程の中にはない、果報識ではあるが、五識、領受、推度と彼所縁は、心路過程の一部分に属する、果報識である。五門引転、確定、速行と意門引転識もまた、俱生識である。すなわちそれは、相応する心所と、同時に生起する識であるが、しかし、果報識ではない。

果報識と非果報識の識別について、非果報識が行と関連がある為、先に、非果報識の識別方法について、説明する。註釈 (《清浄道論》第 17 章) の中において、非果報識は、行作識と呼ばれる。その意味はすなわち、「造作」によって、新しい生 (有) が引き起こせる所の識、という訳である。疏鈔 (《大疏鈔》) では、それを業識 (kamma viññāṇa) と、呼んでいる。

業識=行作識

過去世において造 (ナ) した所の、行と業相応の (善と不善) 識は、業識と言う。また、前文で述べた通り、「行縁識」の中において、行名法グループ (34=因) の一部分に属する所の識は、業識 (=行作識) である。この段階においては、業識 (行作識) を主に、識別するべきである。

来世を獲得する為に、今世において造 (ナ) された、行と業相応の (善と不善) 識もたま、業識 (=行作識) である。

現見智 (paccakkha ñāṇa、現見=己自身自ら体験する) でもって、今世果報名色 (=果報心と心所と業生色、たとえば、結生果報名色) が生起するのは、過去世業識の故である事を、知見した後；また、未来世の果報名色 (=未来世の果報心と心所と業生色、たとえば、結生名色) の生起は、今世業識の故である事を、知見した後、禪修行者は、因と果を識別する事ができる。

しかしながら、この段階においては、禪修行者は現見智でもって、先に以下の事を、識別する：今世の果報名色の生起は、過去世の業識の故であること。

名色

上に述べた通り、業識のみが、因に属する「識」である。果に属する所の名色、「名」は、心所を含むだけではなく、相応の識も含む。業生色だけが、直接的な「色」であると言える。しかしながら、観禪の段階において、禅修行者は業生色、及びそれと混在して生起する所の、心生、時節生と食生色を観照する事ができる。因果を連貫する時、それはすなわち、業生色を連貫させるのである。次に、識別方法の幾つかの例を挙げる。

離心路過程心

- 1、過去業識が生起するた故に、結生名色は生起する。過去業識は因、結生名色は果。
- 2、過去業識が生起するが故に、有分名色は生起する；過去業識は因、有分名色は果。
- 3、過去業識が生起するが故に、死亡名色が生起する；過去業識は因、死亡名色は果。

眼門心路過程の果報名色

- 1、過去業識が生起するた故に、眼識名色は生起する。過去業識は因、眼識名色は果。
- 2、過去業識が生起するが故に、領受名色は生起する；過去業識は因、領受名色は果。
- 3、過去業識が生起するが故に、推度名色が生起する；過去業識は因、推度名色は果。
- 4、過去業識が生起するが故に、彼所縁名色は生起する；過去業識は因、彼所縁名色は果。

註：同等の方法を用いて、耳識、領受、推度、彼所縁などの果報識名色の生起を識別する。観禪の修習の時、引転、確定、速行を識別しても問題はない。因果を識別している時には、禅修行者は、過去業識と、果報名色を連貫させなければならない。六グループすべてを識別する。一つひとつのグループの、心路過程の中の、すべての果報名色を識別する。

行と業有 (=業)

縁起第五法の中において、已に説明したが、異刹那業力 (nānakhaṇika kamma satti、すなわち、無明、愛、取、行によって取り巻かれている所の行の業力) によって、果報名色と業生色が生起せしめられる事を、智によって知見し、その後に因果を識別しなければならない。ただし、業力は観禪の目標ではないため、禅修行者は、真正に、観禪の目標に属する所の、業と業有 (=業) を知っていなければならない。

Āyūhanā saṅkhārāti taṁ kammaṁ karoto purima cetanāyo, yathā dānaṁ dassāmīti cittaṁ uppādetvā māsaṃpi saṃvaccharaṃpi dānupakaraṇāni sajjentassa uppannā purimacetanāyo. Paṭiggāha - kānaṃ pana hatthe dakkhinaṃ patiṭṭhāpayato cetanā

bhavoti vuccati. Ekāvajjanesu vā chasu javanesu cetanā āyūhanasaṅkhārā nāma, sattamā cetanā bhavo. Yā kāci vā pana cetanā bhavo. Taṃ sampayuttā āyūhanasaṅkhārā nāma (Abhidhamma Commentary - vol. II - 182, 183 Burmese script)

1、圍繞行 (āyūhanā saṅkhāra) は、いまだ業を造 (ナ) していない前に生起する所の思である。すなわち、前思 (purima cetanā=pubba cetanā) である。たとえば：ある人が布施をしたいと思っているとして、その心 (すなわち、前思) が生起した後、その人が、一か月または一年の時間をかけて物品を準備して布施をしたとする。当該の物品を受者に布施する時に生起するのは、立思 (patitṭhāpaka cetanā) であるが、これは業有と呼ばれる。

2、もう一つ別の説明方法：善または不善の業を造 (ナ) している時に生起する所の多くの心路過程の中において、一つひとつの心路過程の前 6 個の速行相応の思は、行であり、第七速行相応の思は業有である。

3、もう一つ別の説明方法：一つひとつの速行刹那の中において、一切の善思または不善思相応の心と心所は皆、行である；一切の善思と不善思は皆、業有である。

上に述べた定義によれば、もし、人が、無明、愛、取、行が最も顕著な心路過程の、一つひとつの心識刹那の究極界 (名法)、及び行と業に属する意門心路過程名法グループを修観 (注 41) するならば、彼は已に行と業有の修観を円満したのだと言える。こうしたことから、観禪の段階において、上に述べた定義に従って、行と業有の三相を観照しなければならない。業縁の篇で述べた所の、業力 (すなわち、異刹那業力) は、観禪の目標ではない事に注意を払う事。業力の来源、すなわち、行と業こそが、観禪の目標となるのである。

俱生識 (果報識) が生起するが故に、俱生名色が生起する

- 1、結生識が生起するが故に、結生名色が生起する；結生識は因、結生名色は果。
- 2、有分識が生起するが故に、有分名色が生起する；有分識は因、有分心名色は果。

註：同一の一個の心識刹那の中で、有分識と相応する所の心所を「名」とし、有分識によって引き起こされた心生色を「色」として取る。しかしながら、観禪の段階において、心生色と同時に生起する所の、業生、時節生と食生色を修観しもよい。因果を識別する段階において、智でもって、相見合う所の識と心生色の関係を知見した後、因果を識別する。心路過程心の識別方法もまた同様である。心路過程心に関して、果報識とは、五識、領受、推度と彼所縁のみである。「俱生識」は、果報識のみを指す

のではなく、唯作識と速行識、すなわち、五門引転、確定、速行と意門引転、速行を含む事に注意する事。經の教えでは、識、名色、六処、触と受縁起支は果報法に過ぎないと言う。

しかしながら、これらの果報の中において：もし、五門引転がないならば、五識、領受、推度は生起することができない；もし、速行が無いならば、彼所縁は生起することができない（《大疏鈔》）。故に、すべての究極界を取り逃さない為に、因果を識別する時、五門引転、確定、速行と意門引転、速行を識別することは可能である。もし、禪修行者が、それらは果報輪転に含まれない事を、理解しているならば、（それらを識別しても）問題はない。死亡識はが、生色を引き起こす事ができるかどうか、異なる著作は、それぞれに異なった論点を擁している。

3、死亡識が生起するが故に、死亡名（色）は生起する；死亡識は因、死亡名（色）は果。〔五門引転識が生起するが故に、五門引転名色は生起する；五門引転識は因、五門引転名色は果。〕

4、眼識が生起するが故に、眼識名法は生起する；眼識は因、眼識名法は果。
または：眼識が生起するが故に、眼識名色は生起する；眼識は因、眼識名色は果。

註：同様の方法を用いて、耳識、鼻識、舌識と身識を識別する。「名」は七相応心所である。五識（たとえば、眼識）は、心生色を引き起こすことはできないが故に、「間接的」に、五識が発生した時の業生色を目標とするのである。観禪の段階において、生時（*uppāda*）のある所の、業生、時節生と食生色、及び前生心（前の一心）によって引き起こされた正に住時（*thiti*）にある所の、心生色を、同時に観照する事はできる。こうする事に、問題はない。毎回、同じ方法で修習する事。

5、領受識が生起するが故に、領受名色が生起する；領受識は因、領受名色は果。

註：「名」とは、領受心相応の10心所の事を言う。「色」とは、領受心によって引き起こされた所の、心生色を言う。その後の、心路過程心の中において、たとえば、推度は、上に述べた方法によって、各々に相応する心所を「名」とし、心生色を「色」とする。

6、推度識が生起するが故に、推度名色が生起する；推度識は因、推度名色は果。
〔確定識が生起するが故に、確定名色が生起する；確定識は因、確定名色は果。〕
〔速行識が生起するが故に、速行名色が生起する；速行識は因、速行名色は果。〕

7、彼所縁が生起するが故に、彼所縁名色が生起する；彼所縁は因、彼所縁名色は果。

[意門引轉識が生起するが故に、意門引轉名色が生起する；意門引轉識は因、意門引轉名色は果。]

(意門心路過程の) 速行と彼所縁の識別方法は、上に述べたものと同じである事を理解しなければならない。これらの識別方法に関して、参考にした聖典は以下の通りである：

Nāmarūpassa yaṃ hetu, viññāṇaṃ taṃ dvidhā mataṃ

vipākamavipākaṅca, yuttameva yato idaṃ. (《迷惑氷消》)。

Sahajātaviññāṇa paccayā nāmarūpaṃ, kammaviññāṇa paccayā

ca nāmarūpaṅca yathāsambhavaṃ yojetabbaṃ. (《根本疏鈔》)。

Kammaviññāṇappaccayā vipākacittappavattikāle vipāka namassa, kammasamuṭṭhāna

rūpassa ca vasena. Sahajātaviññāṇa paccayā pana itaracittappavatti kālepi vipāko

vipāka nāmasena, cittasamuṭṭhāna rūpavasena ca nāmarūpassa sambhavo

dassetabboti āha 'sahajāta ... yojetabba'ti. (《随疏鈔》)。

注 41：《智慧の光》に関して、ここで用いられている「修観」とは、観禅の修習の事を言う。例えば、名法修観とある時、すなわち、それは名法を目標として観禅の修習をする事を言う。以後、「修観」という詞が出てきた時は、斯くの如くに理解する事。

名色の縁によりて六処 (Nāmarūpapaccayā Salāyatanam)

(名色が生起するが故に、六処が生起する)

この段階においては、五個の識別 (+するべき) 部分がある：

- 1、名が生起するが故に、意処 (manāyatana) が生起する。
- 2、名が生起するが故に、処色 (āyatana rūpa) が生起する。
- 3、色が生起するが故に、処色が生起する。
- 4、色が生起するが故に、意処が生起する。
- 5、名色が生起するが故に、意処が生起する。

(A) 名が生起するが故に、意処が生起する

この段階において、ただ、意処と相応する所の心所を「名」として取る。意処とはすなわち、心所と同時に生起する所の識である。この段階において、心所法の支持とそれらと相応する心 (=意処=識) を識別する。

- 1、結生名法（3 3）が生起するが故に、結生意処が生起する；結生名法（3 3）は因、結生意処は果。
- 2、有分名法（3 3）が生起するが故に、有分意処が生起する；有分名法（3 3）は因、有分意処は果。
- 3、死亡名法（3 3）が生起するが故に、死亡意処が生起する；死亡名法（3 3）は因、死亡意処は果。（ここにおいて列挙した例は、喜俱三因者の結生、有分と死亡である）
- 五門引転名法（1 0）が生起するが故に、五門引転意処は生起する；五門引転名法（1 0）は因、五門引転意処は果。
- 4、眼識名法（3 3）が生起するが故に、眼識意処が生起する；眼識名法は因、有分意処は果。
- 5、領受名法（1 0）が生起するが故に、領受意処が生起する；領受名法（1 0）は因、領受意処は果。
- 6、推度名法（1 1）が生起するが故に、推度意処が生起する；推度名法（1 1）は因、推度意処は果。確定名法（1 1）が生起するが故に、確定意処が生起する；確定名法（1 1）は因、確定意処は果。速行名法が生起するが故に、速行意処が生起する
速行名法は因、速行意処は果。
- 7、彼所縁名法が生起するが故に、彼所縁意処が生起する；彼所縁は因、彼所縁意処は果。意門引転名法（1 1）が生起するが故に、意門引転意処が生起する；
意門引転名法（1 1）は因、意門引転意処は果。

註：名業処に示す通り、推度、速行と彼所縁の中の「名」＝相応心所を識別する。善と不善速行心グループを識別する。五門引転、確定、速行と意門引転は、果報輪転に属さない為、それらを（+識別する事を）省略してもよいが、しかし、如何なる究極界も取りこぼさないという意味において、それらを識別するのならば、それも間違いではない。禅修行者が、それらは果報輪転には属しておらないという事を理解していれば、問題はない。同等の方法を用いて、耳門心路過程などなどを識別する。五蘊界の名（＝心所）は、「同伴」（すなわち、相見合う依処色、たとえば、心所依処）が存在する下でしか、意処を支援できない（+という事を理解する事）。



(B) 名が生起するが故に、処色が生起する

Pacchājātā citta cetasikā dhammā purejātassa
imassa kāyassa pacchājāta paccayena paccayo.

その意味はすなわち、四無量果報を除いて、一つひとつの後生（注 42）名法グループ（85 心と 52 心所の、すべての組み合わせ）は、皆、前生心識刹那の中において生起した所の四生色身（四等起色身、*catusamuṭṭhānika rūpakāya*）を支援する。（《発趣論》）。

- 1、結生名蘊と同時に生起する所の一生身（*ekaja-kāya*、すなわち、業生色、または別の言い方では、二生身、すなわち、業生色と時節生色）が住時（*ṭhiti*）に到達した時、第一有分名蘊法縁は、後生縁力（*pacchājāta paccayā satti*）によって、それを支える。
- 2、前生有分名蘊（たとえば、第一有分）と同時に生起する所の三生身（*tija-kāya*、すなわち、業身、心生と時節生色）が住時に到達した時、後生心と心所名蘊縁法は、後生縁力によって、それを支える。
- 3、（食生色が生じる時に）前生心と同時に生起する所の四生身（*catuja-kāya*、すなわち、業生、心生、時節生と食生色）が、住時に到達した時、後生心と心所名蘊縁法は、後生縁力によって、それを支える。
- 4、欲界有情の結生から数えて、第 15 番目の有分心と同時に生起する所の四生身（すなわち、業生、心生、時節生と食生色）が、住時に到達した時、後生意門引転名蘊縁法は、後生縁力によって、それを支援する。（色界有情は、三生身である。）
- 5、五門引転と同時に生起する所の四生身（または三生身）が住時に到達した時、後生五識名蘊縁法は後生縁力によって、それを支援する。
- 6、五識と同時に生起する所の欲界三生身（すなわち、業生、時節生と食生色、または色界では二生身、すなわち、業生と時節生色）が住時に到達した時、後生領受名蘊縁法は、後生縁力によって、それを支援する。
- 7、領受名蘊と同時に生起する所の欲界四生身（すなわち、業生、時節生、心生と食生色、または色界では三生身、すなわち、業生、心生と時節生色）が住時に到達した時、後生推度名蘊縁法は、後生縁力によって、それを支援する。

上に述べた方法に基づき、後生心と心所（名蘊）は、前生心と同時に生起する所の四生色を支援する事を理解しなければならない。

この「名が生起するが故に、処色が生起する」の段階において、後生心と心所の二者を因とする。前生心と同時に生起して、現在は住時にある眼処、耳処、鼻処、舌処と身処は、果に属する「処色」である。業力が尽きていないならば、五種類すべての処色はみな、一つひとつの心識刹那の生、住と滅時において、生起する能力を擁している。もし、それらを複雑にしたくないならば、それらを個別の識別する事も出来る。そうでないならば、それらを同時に識別する事もできる。

個別の識別方法は以下の通り

- 1、有分波動名法が生起するが故に、眼処が生起する；有分波動名法は因、眼処は果。
（この眼処は、過去有分 [atīta bhavaṅga] と同時に生起する所の、眼処である。）
- 2、有分断（bhavaṅgupaccheda）名法が生起するが故に、眼処が生起する；有分断名色法は因、眼処は果。（これは有分波動 [bhavaṅga calana] と同時に生起する所の眼処である）。
- 3、五門引転名法が生起するが故に、眼処が生起する；五門引転名法は因、眼処は果。
（これは有分断と同時に生起する眼処である）
- 4、眼識名法が生起するが故に、眼処が生起する；眼識名色法は因、眼処は果。（これは五門引転と同時に生起する所の眼処。同様の方法でもって、耳識等々を識別する。）
- 5、領受名法が生起するが故に、眼処が生起する；領受名法は因、眼処は果。
（これは領受と同時に生起する眼処である。）
- 6、推度名法が生起するが故に、眼処が生起する；推度名法は因、眼処は果。
（これは領受と同時に生起する眼処。）
- 7、確定名法が生起するが故に、眼処が生起する；確定名法は因、眼処は果。
（これは推度と同時に生起する眼処。）
- 8、第一速行名法が生起するが故に、眼処が生起する；第一速行名法は因、眼処は果。
（これは確定と同時に生起する所の眼処。）
- 9、第二速行名色法が生起するが故に、眼処が生起する；第二速行名法は因、眼処は果。
（これは第一速行と同時に生起する所の眼処。）

この様に、後生心と心所名法グループは、前生心と同時に生起する眼処を支援する事を知見する。この方法で六種類すべての心路過程を識別する。同様の方法を用いて、耳処等を識別する。もし、禅修行者がそれらを全体として識別したいのであれば、以下の様にして、五処色すべてを識別する。

全体的な識別方法

- 1、有分波動名法が生起するが故に、五処色が生起する；有分波動名法は因、五処色は果。（この五処色は、過去有分と同時に生起する所の眼、耳、鼻、舌と身処である。）
- 2、有分断名法が生起するが故に、五処色が生起する；有分断名法は因、五処色は果。（この五処色は、有分波動と同時に生起する所の眼、耳、鼻、舌と身処である。）
- 3、五門引転名法が生起するが故に、五処色が生起する；五門引転名法は因、五処色は果。（この五処色は、有分断と同時に生起する所の眼、耳、鼻、舌と身処。）
- 4、眼識名法が生起するが故に、五処色が生起する；眼識名法は因、五処色は果。（この五処色は、五門引転と同時に生起する所の眼、耳、鼻、舌と身処。）

この様に、後生心と心所（名法）は、後生縁力によって、前生心と同時に生起する所の五処色を支援する事を知見する。六門すべてを識別する。

注 42: 《智慧の光》では、前生 (*purejāta*) は、前生起を言い、後生 (*pacchājāta*) は、その後続く生起を指す。それらは 24 縁の中の二者である。

(C) 色が生起するが故に、処色が生起する

(これは「名色縁」の中の色が「六処」の中の処色を支援するのである。)

- 1、(眼処と) 同一の一粒の色聚の中の四界が生起するが故に、眼処が生起する；同一の一粒の色聚の中の四界が因、眼処は果。
- 2、同一の一粒の色聚の中の命根が生起するが故に、眼処が生起する；同一の一粒の色聚の中の命根が因、眼処は果。
- 3、同一の一粒の色聚の中の食素が生起するが故に、眼処が生起する；同一の一粒の色聚の中の食素が因、眼処は果。

註：同様の方法を用いて、引き続き、同一の一粒の色聚の中の(1) 四界、(2) 命根、(3) 食素 が、どの様にしてそれぞれに、耳、鼻、舌と身を支援するのかを識別する。四界は、助力 (*upatthambhaka satti*) によって、同一の一粒の色聚の中の処色を支援する；命根は、随護力 (*anupālaka satti*) によって、同一の一粒の色聚の中の方処色を支援する；食素は、助力によって、同一の一粒の色聚の中の処色を支援する。食素自体は、食生食素の助力を受けて初めて、処色を支援する事ができる。

胃の中において、先ほど食べたばかりの、いまだ消化されていない食物は、時節生八法色聚である。業生の消化の火界 (*pācaka tejo dhātu*) の援助の下、これら時節

生八法聚の中の食素 (ojā) は、食素八法聚を製造する事ができる。これらの色法は、食素によって引き起こされる為、故にそれらは、食生色と呼ばれる。

これらの食生色の中の食生食素 (āhāraja ojā) は、業生食素、心生食素、時節食素と前生食生食素を支援する時、それらの一つひとつは、新しい色聚を製造する事ができる。この様な生起・発生と支援の下、諸々の処色は、強化される。支援を受けた食素の中の、業生色聚の中の業生食素もまた、その中に含まれる。智でもって、これらを知見した後、上に述べた様に識別する。同様の方法を用いて、耳処から身処までを識別する。

(D) 色が生起するが故に、意処が生起する

五蘊界の中 (人界を含む) において、名法は、必ず、それぞれにおいて、依処色が存在する時にのみ、生起することができる。もし、依処色がないのであれば、それらは生起することができない。智でもって、この点を知見した後初めて、この段階の識別方法を修習する事ができる。もう一点の要点は、意処と呼ばれる所の識が生じる時、分離する事の出来ない相応心所もその中に含まれるという事である。それぞれが、それぞれの依処色に、依存して初めて、これらの心所と意処は、生起する事ができる。これらの中で、五識とは、各々の処色 (たとえば、過去有分と同時に生起する所の、眼依処、cakkhuvatthu) に依存して生起する所の、意処である。

結生心 (=意処) は、それと同時に生起する所の、心所依処色に依存する。死亡心意処は、死亡心自身から、もとへ向かって数えて、第 17 番目の心と同時に生起する所の、心所依処色に、依存する。

多くの有分心は、前生心と同時に生起する所の心所依処色に依存する。同様に、五識を除いて、眼界 (manodhātu) と意識界 (manoviññāṇa dhātu) と呼ばれる所の意処は、前生心と同時に生起する、心所依処色に依存する。しかしながら、不分離理 (avinābhāva) に基づいて、観禅の段階において、依処色と同時に生起する色法 (たとえば、四生色 = 5 4 または 4 4 色等) を、同時に観照しても、問題はない。

識別方法の幾つかの例

- 1、結生心所依処色が生起するが故に、結生意処が生起する；結生心所依処色は因、結生意処は果。
- 2、有分心所依処色が生起するが故に、有分意処が生起する；有分心所依処色は因、有分意処は果。(これは禅修行者が識別する有分心の、前の一個の心識刹那の中において、生起した心所依処色である。)

- 3、死亡心所依処色が生起するが故に、死亡意処が生起する；死亡心所依処色は因、死亡意処は果。（これは、死亡心からもとへ向かって 17 個数えた心と同時に生起した、心所依処色である。）
- 4、心所依処色が生起するが故に、五門引転意処が生起する；心所依処色は因、五門引転意処は果。（これは、有分断と同時に生起する心所依処色である。）
- 5、眼依処色が生起するが故に、眼識意処が生起する；眼依処色は因、眼識意処は果。（これは過去有分と同時に生起する「中命眼依処色」(majjhimāyuka cakkhuvatthurūpa) である。）
- 6、心所依処色が生起するが故に、領受意処が生起する；心所依処色は因、領受意処は果。（これは眼識または五識と同時に生起する心所依処色である。）
- 7、心所依処色が生起するが故に、推度意処が生起する；心所依処色は因、推度意処は果。（これは領受と同時に生起する心所依処色である。）
- 8、心所依処色が生起するが故に、確定意処が生起する；心所依処色は因、確定意処は果。（これは推度と同時に生起する心所依処色である。）
- 9、心所依処色が生起するが故に、第一速行意処が生起する；心所依処色は因、第一速行意処は果。（これは確定と同時に生起する心所依処色である。）
- 10、心所依処色が生起するが故に、第二速行意処が生起する；心所依処 (マ) は因、第二速行意処は果。（これは第一速行と同時に生起する心所依処色である。）その他の速行意処は、類推の事。
- 11、心所依処色が生起するが故に、第一彼所縁が生起する；心所依処色は因、第一彼所縁は果。（これは第七速行と同時に生起する心所依処色である。多くがこの形状を取る事に注意する事。）
- 12、心所依処色が生起するが故に、第二彼所縁が生起する；心所依処色は因、第二彼所縁は果。（これは、第一彼所縁と同時に生起する心所依処色である。）
- 13、心所依処色が生起するが故に、意門引転意処が生起する；心所依処色は因、意門引転意処は果。（これは前生有分一有分断一と同時に生起する心所依処色である。）

これらの方法に基づいて、心路過程の一つひとつの心識刹那を識別する。六門すべてを識別する。一つひとつの門の善と不善心路過程を識別する。

(E) 名色が生起するが故に、意処が生起する

ここにおいて、個別の、心相応の心所を「名」として取る。個別の心識刹那の名法が依存する所の依処色（主要な）、及び分割することのできない色法（たとえば、54 色または 44 色）を「色」とする。智をもって、関連し合う名色が意処を支援するのを見した後、以下の通りにそれらを識別する。因に属する名（すなわち、心所）と果に属

する意処は、同一の心識刹那において、同時に生起する所の相応法である。前に述べた通り、依処色の多くは、意処（果）の前生法（purejāta dhamma）である。結生の時、それは俱生法（sahajāta dhamma）となる。

識別方法の幾つかの例

- 1、結生名色が生起するが故に、結生意処が生起する；結生名色は因、結生意処は果。
- 2、有分名色が生起するが故に、有分意処が生起する；有分名色は因、有分意処は果。
- 3、五門引転名色が生起するが故に、五門引転意処が生起する；五門引転名色は因、五門引転意処は果。
- 4、眼識名色が生起するが故に、眼識意処が生起する；眼識名色は因、眼識意処は果。
- 5、領受名色が生起するが故に、領受意処が生起する；領受名色は因、領受意処は果。
- 6、推度名色が生起するが故に、推度意処が生起する；推度名色は因、推度意処は果。
- 7、確定名色が生起するが故に、確定意処が生起する；確定名色は因、確定意処は果。
- 8、第一速行名色が生起するが故に、第一速行意処が生起する；第一速行名色は因、第一速行意処は果。
- 9、第一彼所縁名色が生起するが故に、第一彼所縁意処が生起する；第一彼所縁名色は因、第一彼所縁意処は果。
- 10、意門引転名色が生起するが故に、意門引転意処が生起する；意門引転名色は因、意門引転意処は果。

これらの方法によって識別する

色所縁を目標にする眼門と意門心路過程を識別する。声所縁などなどを目標にする心路過程を識別する。六種類すべての心路過程の、一切の善と不善速行心路過程を識別する。また、五門引転、確定、速行と意門引転を識別して、如何なる究極界も見落としのない様にする。



六処の縁によりて触 (Saḷāyatanapaccayā phasso)

(六処が生起するが故に、触が生起する)

触 (phassa) は六種類ある。すなわち、眼触、耳触、鼻触、舌触、身触と意触である。一切の、結生、有分、死亡、五門引転、領受、推度、確定、速行、彼所縁及び意門引転相応の触は、皆、意触と言う。

六処：ここでは、12 処すべてを「六処」とする。すなわち：

- 1、六内処 (ajjhakkāyatana)：眼処、耳処、鼻処、舌処、身処、意処。
- 2、六外処 (bāhirāyatana)：色処、声 (=音、以下同様) 処、香処、味処、触処と法処 (注 43)。

これら内外処は、心と心所を強化せしめる道具または媒介である。例えば：色処に属する色所縁が眼処の眼浄色を打った時、もし、その色所縁が喜ばしい所縁である時、笑顔が強化される：もし、その色所縁が喜ばしくない所縁である時、愁眉が強化される。故に、眼処と色処は、心と心所 (色所縁を目標に取る眼門と意門心路過程) を強化する道具または媒介であると言う。それらは、斯くの如くに理解されるべきである。

52 心所と 16 微細色 (sukhuma rūpa) もまた、この 12 処の中に含まれる。一切の、各々の心相応する心所は、皆法処と呼ばれる。各々の心相応の心所、特に色々な触 (phassa) と相応する心所は皆、相応法処と呼ばれる。一切の識は、意処と呼ばれる。

識別方法の幾つかの例

結生意触 (結生心と相応の触)

- 1、心所依処法処が生起するが故に、結生意触が生起する；心所依処法処は因、結生意触は果。
- 2、外処 (すなわち、業、業相と趣相の三者の内の一) が生起するが故に、結生意触が生起する；外処は因、結生意触は果。
- 3、結生識 (意処) が生起するが故に、結生意触が生起する；結生識 (意処) は因、結生意触は果。
- 4、相応法処 (3 2) が生起するが故に、結生意触が生起する；相応法処 (3 2) が因、結生意触は果。

結生意触は名法である。(五蘊界) 名法の自性に基ついて、それらは必ず、依処色の存在する状況の下でのみ生起する事ができる。次に、触 (phassa) は「接触」という自性を有するが故に、それは、目標 (所縁) があって、初めて生起する事ができる。も

し、接触する目標がない時、触は生起しえない。結生名法グループの目標は業または業相または趣相である為、状況に応じて、その目標は六所縁の内のどれかの一つで有り得る。もし、その目標が業（人として生まれるなら必ず善思である）である時、それはすなわち、善思法処である。

もし、禪修行者がその法処を指定したい（＝何であるかを見極めたい）のであれば、彼は上に述べた第（２）項を以下の様に設定する：

業所縁（法処）が生起するが故に、結生意触が生起する；

業所縁（法処）は因、結生意触は果。

相応法処

喜俱三因者の結生心は、結生識と相応する 33 個の心所がある。それらの中で、触は結生意触である。33 心所から果に属する触を除くと、32 の心所がある事になる。これらの心所は法処、（＋すなわち）相応法処である。結生識はすなわち、意処である。一項毎の分析方法もまた角の如くである事に注意する事。結生意触を識別する方法に基づいて、次は、有分意触と死亡意触を識別する。

五門引転意触（色所縁グループ）

1、心所依処（法処）が生起するが故に、五門引転意触が生起する；

心所依処（法処）は因、五門引転意触は果。

2、色処（色所縁）が生起するが故に、五門引転意触が生起する；

色処（色所縁）は因、五門引転意触は果。

3、五門引転意処が生起するが故に、五門引転意触が生起する；

五門引転意処は因、五門引転意触は果。

4、相応法処（9）が生起するが故に、五門引転意触が生起する；

相応法処（9）は因、五門引転意触は果。

註：次の説明は短縮形である。一切の識別方法は、上に述べた如くである事を理解しなければならない。

眼触＝眼識と相応する触

1、眼処（眼処依処）が生起するが故に、眼触が生起する。

2、色処（色所縁）が生起するが故に、眼触が生起する。

3、眼識意処が生起するが故に、眼触が生起する。

4、相応法処（6）が生起するが故に、眼触が生起する。

領受意触（色所縁グループ）

1、心所依処（法処）が生起するが故に、領受意触が生起する。

2、色処が生起するが故に、領受意触が生起する。

- 3、領受意処が生起するが故に、領受意触が生起する。
- 4、相応法処（9）が生起するが故に、領受意触が生起する。

推度意触（色所縁グループ）

- 1、心所依処（法処）が生起するが故に、推度意触が生起する。
- 2、色処が生起するが故に、推度意触が生起する。
- 3、推度意処が生起するが故に、推度意触が生起する。
- 4、相応法処（9または10）が生起するが故に、推度意触が生起する。

確定意触（色所縁グループ）

- 1、心所依処（法処）が生起するが故に、確定意触が生起する。
- 2、色処が生起するが故に、確定意触が生起する。
- 3、確定意処が生起するが故に、確定意触が生起する。
- 4、相応法処（10）が生起するが故に、確定意触が生起する。

第一速行意触（色所縁グループ：善速行）

- 1、心所依処（法処）が生起するが故に、第一速行意触が生起する。
- 2、色処が生起するが故に、第一速行意触が生起する。
- 3、第一速行意処が生起するが故に、第一速行意触が生起する。
- 4、相応法処（32）が生起するが故に、第一速行意触が生起する。

この方法に基づいて、善と不善速行心路過程の、七個すべての速行を識別する。

第一彼所縁意触（色所縁グループ）

- 1、心所依処（法処）が生起するが故に、第一彼所縁意触が生起する。
- 2、色処が生起するが故に、第一彼所縁意触が生起する。
- 3、第一彼所縁意処が生起するが故に、第一彼所縁意触が生起する。
- 4、相応法処（32）が生起するが故に、第一彼所縁意触が生起する。

この方法に基づいて、状況によって生起する所の、その他の大果報彼所縁または無因善果報彼所縁、または不善果報彼所縁を識別する。それらの差異は、相応法処の心所の数のみによる。

意門引転意触（色所縁を目標に取る）

- 1、心所依処（法処）が生起するが故に、意門引転意触が生起する。
- 2、色処が生起するが故に、意門引転意触が生起する。
- 3、意門引転意処が生起するが故に、意門引転意触が生起する。
- 4、相応法処（10）が生起するが故に、意門引転意触が生起する。

註：色所縁グループのすべての善と不善速行心路過程を識別する。推度、速行と彼所縁の心所の数は、状況によって変更があるが、それらの中から触を取り除き、残りのものを「相応法処」とする。耳門心路過程等との唯一の差異は：「色処」を「声処＝声所縁」等に変更する事である。同様の方法を用いて、識別する。確定、速行、五門引転と意門引転は、果報輪転に属さないものの、しかし、如何なる究極法も取りこぼさないという意味において、それらもまた識別する。もし、前生五門引転が無いならば、五門心路過程の五識、領受、推度と彼所縁名蘊は生起することができない。意門心路過程の彼所縁は、もし、意門引転が無い場合、それもまた生起することができない。彼所縁は、必ずや、速行の後にのみ、生起することができる。もし、確定が無いならば、五門速行は、決して生起する事はない；もし、意門引転が無いならば、意門速行もまた、決して生起する事はない。こうしたことから、果報名法に属する五識、領受、推度と彼所縁が生起するならば、引転、確定と速行もまた、自然に生起することができる。故に、禅修行者は、果報名法を識別する時、もし、彼が如何なる究極法も取りこぼさないという意味において、引転、確定と速行を識別するならば、それに問題はない。

法処は四種類ある：

- 1、16 微細色。
- 2、52 心所すべて。
- 3、涅槃。
- 4、概念。例えば白遍、安般似相などなど。

五浄色と七境色（注 44）以外、その他の 16 色は微細色（ $28 - 12 = 16$ ）である。この 16 の微細色の中には、心所依処も含まれる為、それは法処に属するのである。

注 43：《智慧の光》では、眼処、耳処、鼻処、舌処と身処のそれぞれを、眼浄色、耳浄色、鼻浄色、舌浄色、身浄色とする：意処は、一切の識であり、色処、声処、香処、味処と触処は色塵、声塵、香塵、味塵と触塵とする：その他の色法、一切心所、概念法と涅槃は、法処に属する。

注 44：《智慧の光》では、七境色（*gocara rūpa*）は、色彩、声、香、地、火と風（触＝地、火、風）とする。

触の縁によりて受（Phassapaccayā vedanā）

（触が生起するが故に、受が生起する）

六種類の触によって、以下の六種類の受が生起する：

- 1、Cakkhusamphassajā vedanā＝眼触生受。
- 2、Sotasamphaassajā vedanā＝耳触生受。
- 3、Ghānasamphassajā vedanā＝鼻触生受。
- 4、Jivhāsamphassajā vedanā＝舌触生受。
- 5、kāyasamphassajā vedanā＝身触生受。
- 6、Manosamphassajā vedanā＝意触生受。。

ここにおいて、禅修行者は、眼触生受と眼触縁受（cakkhusamphassapaccayā vedanā）等々を、理解しなければならない。

眼触生受と眼触縁受

Cakkhusamphassajā vedanā ... atthi kusalā, atthi akusalā, atthi abyākatā.

（《迷惑氷消》）

Cakkhusamphassapaccayā vedanākkhandho atthi kusalo, atthi akusalo, atthi abyākato.

（《迷惑氷消》）

Cakkhusamphassajā vedanā ... manosamphassajā vedanā'ti etaṃ
`cakkhusamphassajā vedanā atthi kusalā, atthi akusalā, atthi abyākatā'ti
evaṃ vibhaṅge agatatta cakkhudvāradīsu pavattānaṃ
kusalākusalābyākatavedanānaṃ `Sāriputto, Mantāṇiputto'ti evamādīsu
mātito nāmaṃ viya mātisadisavatthuto nāmaṃ. Vācanattho panettha
cakkhusamphassahetu jātā vedanā cakkhusamphassajā vedanāti. Esa
nayo sabattha. （《中部註》；《相応部註》）

Cakkhusamphassapaccayā vedanākkhandho atthikusaloti kāmāvacara
aṭṭhakusalacittavasena veditabbo. Atthi akusaloti dvādasa akusalacittavasena
veditabbo. Atthi abyākatoti tisso manodhātuyo tisso ahetuka manoviññādhātuyo,
aṭṭha mahā vipākāni, dasa kāmāvacarakiriyāti catuvīsatiyā cittāni vasena veditabbo.
Tattha aṭṭha kusalāni dvādasa akusalāni ca javanavasena labbhanti, kiriyamanodhātu
āvajjanavasena labbhanti. Dve vipākamanodhātuyo sampañcchanavasena, tisso
vipākamanoviññādhātuyo santīraṇatadārammaṇavasena,
kiriyāhetukamanoviññādhātu voṭṭhabbanavasena, aṭṭhamahā vipākacittāni
tadārammaṇavasena, nava kiriyacittāni javana vasena labbhanti.
Sotaghāna jivhākāyadvāresupi eseva'nayo. （《迷惑氷消》）

Cakkhusamphassapaccayā uppajjati vedayitanti cakkhusamphassaṃ mūlapaccayaṃ
katvā uppannā sampaṭicchanasantīraṇa voṭṭhabbanajavanavedanā.

Cakkhuvīññānasampayuttāya pana vattabbameva natthi.

Sotadvārādivedanāpaccayādīsupi esevanayo. (《相応部註》)

経典と註釈によると、一切の（眼識と相応する）眼触は、基因の受とし、五門引転であらうと、眼識、領受、推度、確定、欲界善速行、不善速行、欲界唯作速行または彼所縁（すなわち、善、不善と無記＝果報唯作諸心）相応等は、皆、眼触生受と眼触縁受と呼ばれる。耳触生受と耳触縁受等もまた角の如くに類推する事。

Kiriyamanodhātu āvajjanavasena labbhati. (《迷惑氷消》)。

五門引転相応の受は、眼触によって引き起こされたと形容されることがある。これは、方便説 (pariyāya) である事に注意しなければならない。五門引転相応の受が先に生起して、それが五門引転名法と共に滅した後、眼識相応の眼触がようやく生起する。果が先に生じ、後に因が生じる。前生の五門引転の受は、後生（眼識と相応）の眼触の支援を受ける。これは後生縁であるように見える。「名色縁六処」の段階において、已に説明したが、因に属する後生縁は名法であり、果に属する縁生法 (paccayuppanna dhamma) は色法である。しかしながら、こきにおける因と果は共に名法であり、故に、後生縁の中に入らないのである。

どの様であれ、眼浄色を具備し、眼触を生起せしめる条件を擁している人だけに、色所縁を省察する五門引転は生起することができる。眼浄色がなく、眼触を生起せしめる条件を擁しない人は、色所縁を省察する五門引転は、決して生起する事はない。これは、眼浄色を持たない人は、眼門心路過程全体が、生起しえないが故である。こうしたことから、五門引転相応の受は、眼触によって引き起こされたという言い方は方便に過ぎない事が分かる。耳触等への支援と五門引転相応の受は、皆、斯くの如くに理解する事。

これらの解釈に基づいて、眼触によって引き起こされる受は、眼門心路過程と、引き続きその色所縁を目標とする意門心路過程の中の一切の受である事に注意を払う事。これらすべての受は皆、眼触生受である。智でもって、「眼触によって、眼触生受が生起する」を知見した後、再度、逐一、色所縁グループ全体を識別する。同様の方法に基づいて、「耳触によって、耳触生受が生起する」等々を識別する。

- 1、眼触が生起するが故に、眼触生受が生起する；眼触は因、眼触生受は果。
- 2、耳触が生起するが故に、耳触生受が生起する；耳触は因、耳触生受は果。
- 3、鼻触が生起するが故に、鼻触生受が生起する；鼻触は因、鼻触生受は果。

- 4、舌触が生起するが故に、舌触生受が生起する；舌触は因、舌触生受は果。
- 5、身触が生起するが故に、身触生受が生起する；身触は因、身触生受は果。
- 6、意触が生起するが故に、意触生受が生起する；意触は因、意触生受は果。

意触

Manosamphassoti bhavaṅgasahajāto samphasso. Vedayitani sahāvajjanavedanāya javanavedanā. Bhavaṅgasampayuttāya pana vattabbameva natthi. (《相応部註》)

上に述べた註釈に基づくと、意門心路過程の前の有分相応の触は、意触である事になる。意門心路過程の中において、意門引転、速行（及び彼所縁）相応の受とは、意触生受である。前生有分意触の縁によりてのみ、後生有分意触生受は生起することができる。32俱生有分意触によって、俱生意触生受もまた、生起する事に注意を払うこと。意門心路過程が、六所縁の中のどれか一個を目標として取る事ができるために、全部を識別しなければならない。次に、有分と意門引転相応の触もまた、意触と呼ばれるが、これらの意触は、速行（と彼所縁）相応の意触生受（+と共に）生起するが故に（《相応部註》）。これらを智でもって識別できる様にする。

受の縁によりて愛 (Vedanāpaccayā taṇhā)

(受が生起するが故に、愛が生起する)

六種類の受が引き起す所の六種類の愛は、色愛、声愛、香愛、味愛、触愛と法愛である（《迷惑氷消》）。

一つひとつの愛は、また、三種類に分類する事ができる。すなわち、欲愛 (kāmatāṇhā)、有愛 (bhavataṇhā)、無有愛 (vibhavataṇhā) である。物欲 (vatthu kāma) に楽しむ、またすなわち、欲楽 (kāmassāda) によって、色所縁に執着する時、色愛は生起する。この時、それは欲愛と呼ばれる。それが「色所縁は常である。それは永恆に存在する」という常見に伴って生起するならば、それはすなわち、有愛である。常見と共に生起する食欲 (rāga) もまた有愛と呼ばれる。それが、「死亡の時、当該の色所縁は壊滅して終結する」という断見に伴って、生起するならば、それはすなわち、無有愛である。断見に伴って生起する所の食欲もまた、無有愛と呼ばれる。声愛などもまた、斯くの如くに理解する事。（《迷惑氷消》：《清浄道論》第17章）。

Bhavataṇhā: Bhavatīti bhavo.

Bhavoti pavattā diṭṭhi bhavadiṭṭhi.

Bhavana sahatā taṇhā bhavataṇhā

色所縁、声所縁など、どれか一つを（+目標に）取る時、「私は常である」と思う常見は「有」（bhava）である。当該の「有」と同時に生起する愛はすなわち、有愛である。

Vibhavataṇhā: Na bhavatīti vibhavo, vibhavoti pavattā ditṭhi vibhavadiṭṭhi, vibhavena sahaḡatā taṇhā vibhavataṇhā.

自分の為に、六所縁のどれか一個を（+所縁として）取る時、「私は無常である、死後それは終結する」と思う断見は、すなわち、「無有」である。当該の「無有」と同時に生起する愛はすなわち、無有愛である。

Yasmā vātiādinā na kevalaṃ vipākasukhavedanā eva, tissopi pana vedanā vipākā visesena taṇhāya upanissaya - paccayo, avisesena itarā cāti dasseti.（《根本疏鈔》）。

sātisayaṃ taṇhāya vipākavedanā upanissayo, na tatthā itarāti āha `vipākā visesena ... avisesena itarā cā'ti. Itarāti avipākāti attho.（《随疏鈔》）。

有情が業を造（+）す時、心には、果報への極めて大きな渴求を抱く。故に、上に述べた疏鈔と復註疏鈔は、以下の様に言う：五識、領受、推度と彼所縁に相応する果報受のみが、特別（visesa）に、親依止力でもって、貪根心に属する愛を、支援する；引転、確定と速行に相応する受は、一般的（avisesa）に、親依止力でもって、愛を支援する。

因に属する受と、果に属する愛は、同一の一個の心路過程の中で生起することができるし、また、多くの心路過程を挟む事ができる事に、注意を払う事。こうしたことから、眼門と（引き続き、その色所縁を目標に取る）意門心路過程の中の一つひとつの心識刹那の受は、因に属する「眼触生受」であり、またすなわち、色愛（rūpataṇhā）の因でもある（+と言える）。声愛の因に属する耳触等々について、斯くの如くに理解する事。

主に果報受を因としているが故に、因に属する受と、果に属する愛の多くは、同一の一個の心識刹那の中で生起するとは限らない。多くの場合、一個、または多目の、または多くの心識刹那を挟んでいるのである。

未来輪転論（Anāgata vaṭṭa kathā）

この段階で輪転論に言及する場合、それは、生死輪廻に関してという事になるが故に、禅修行者にとって、来世を獲得する為に発願した結果、造（+）した業と関係がある。故に、（+禅修行者の修習は）「来世を感受して受が生起する、来世を渴愛する愛が生起する」を識別するのを主とする。この愛は、取と業有を含めて、現在因である。それはすなわち、来世を獲得したいという願いを抱いて造（+）す所の、無明、愛、取、行

及び業である。故に、禪修行者は、己自身が、来世を獲得せんとして造（ナ）した所の（無明）、愛、取、（行）と業を主に識別する。

識別方法の幾つかの例

- 1、眼触生受が生起するが故に、色愛が生起する；眼触生受は因、色愛は果。
- 2、耳触生受が生起するが故に、声愛が生起する；耳触生受は因、声愛は果。
- 3、鼻触生受が生起するが故に、香愛が生起する；鼻触生受は因、香愛は果。
- 4、舌触生受が生起するが故に、味愛が生起する；舌触生受は因、味愛は果。
- 5、身触生受が生起するが故に、触愛が生起する；身触生受は因、触愛は果。
- 6、意触生受が生起するが故に、法愛が生起する；意触生受は因、法愛は果。

註：法愛（*dhammatanḥā*）とは、心、心所、色法（五所縁、すなわち、色彩、声、香、味と触を除く）と各種の概念を言う。

愛の縁によりて取（*Taṅhāpaccayā upādānam*）

（愛が生起するが故に、取が生起する）

四種類の取がある、すなわち、欲取、見取、戒禁取と我論取である。

- 1、欲取（*kāmapādāna*）：五欲の目標を渴愛するのを欲愛と言う。前生欲愛が、親依止縁力の支持を得るという状況の下、後生欲愛は、強くて強固なものに変化する。この強く強固な欲愛は欲取となる。
- 2、見取（*diṭṭhupādāna*）：業力と果報を、心の深い所から排斥する事に執着する邪見。たとえば、無見、無因見、無作為見（*natthika diṭṭhi, ahetuka diṭṭhi, akiriya diṭṭhi*）（戒見取と我論取は除く）、これはすなわち、見取である。
- 3、戒禁取（*sīlabbatupādāna*）：犬の真似をして学び、牛の真似をして学ぶ修行は、煩惱を清め断じ除いて、生死輪廻から解脱できるという邪見を、心の深い所から執着するのは、戒禁取である。
- 4、我論取（*attavādupādāna*）：心の深い所から、我見に執着するのは我論見である。この邪見は、世界を創造した至上我と、創造された靈魂我がいるという認識を持ち、すべての五蘊またはどれか一蘊であっても、それは私であると思う。これはまた身見（*sakkāya diṭṭhi*）と我見（*atta diṭṭhi*）とも言う。

この段階において、禪修行者は智でもって以下の事を知見しなければならない：来世を獲得しようとして造（ナ）した所の相、取は生起する。たとえば、煩惱輪転と業輪転を累積した時に、彼が仏法を教えることの出来る天神になりたいと発願したとする。智

でもって「欲愛は基因（教法天人の生活を渴愛する）であり、欲取（教法天人の生活に執着する）もまた、それを因として生起する。」と知見した後、以下の様に識別する：

1、愛欲が生起するが故に、欲取が生起する；欲愛は因、欲取は果。

もう一つ別の識別方法：教法天人が真実存在していると思うのは身見。場合によっては、これは「世間通称我見」（*loka samaññā attā diṭṭhi*）と言う。もし、教法天人の生活を渴愛する有愛と（教法天人という存在を認める）身見または我見が相応するならば、智でもって、「愛があるが故に、我論取または見取が生起する」と知見した後、以下の様に識別する：

2、有愛が生起するが故に、我論取が生起する；有愛は因、我論取は果。または：有愛が生起するが故に、見取が生起する；有愛は因、見取は果。

もう一つ別の識別方法

1、極度に、教法天人になった時に獲得する事のできる色所縁を喜ぶ色愛は欲愛。

2、「色所縁は常、永恆である。」の常見と同時に生起する所の色愛は有愛。

3、「死亡の時、色所縁もまた壊滅し、終結する、」の断見と同時に生起する所の色愛は無有愛。

この様に、色愛は三種類ある、すなわち、欲愛、有愛、無有愛である。

同様に、声愛等の、一つひとつに三種類ある。

識別：

1、色（欲）愛が生起するが故に、欲取が生起する；色（欲）愛は因、欲取は果。

2、色（有）愛が生起するが故に、見取が生起する；色（有）愛は因、見取は果。

3、色（無有）愛が生起するが故に、見取（断見）が生起する；色（無有）愛は因、見取は果。

もう一つ別の方法：

常論（*sassata vāda*）と相応する所の有愛と、断論（*uccheda vāda*）と相応する所の無有愛の二者は共に、我論（*atta vāda*、たとえば、色所縁を我として執着する）を基本にしているが故に、以下の様に識別する事ができる：

1、色（有）愛が生起するが故に、我論取が生起する；色（有）愛は因、我論取は果。

2、色（無有）愛が生起するが故に、我論取が生起する；色（無有）愛は因、我論取は果。

同様の方法を用いて、声愛から法愛までを識別する。たとえば、禅修行者が波羅蜜を累積する時、来世において、弘法する事のできる比丘になりたいと発願したならば、そ

の場合も、上に述べた方法でそれを識別する。仏教徒にとっては、戒禁取の生起は非常に少ない。

表 9-2：愛と取の意門心路過程

	意門引転	速行(7x)	彼所縁(2x)
色(欲)愛	12	20	12/11/34/33
取	12	20	12/11/34/33

ある時には、喜不相応の速行と彼所縁が生起する。来世の為に造(ナ)した煩惱輪転を正確に識別すること。

注意：すでに名色分別智と縁摂受智を証得した禅修行者は、見取、戒禁取と我論取は非常に生起しにくく、多くの場合、欲取のみが生起する。故に、「愛が原因で欲取生起する。」を識別すれば十分に足りる。しかしながら、無始より輪廻して以来、どのような煩惱も、取も、有情の名色相続流の中において、生起した事がない、という事はない。故に、「過去因が生起するが故に、過去果が生起する。」を識別する時、禅修行者は必ずや、あれら過去世の中において、愛を原因にして生起した所の、各種の邪見と取を識別しなければならない。

取の縁によりて有 (Upādānapaccayā bhavo)

(取が生起するが故に、有が生起する)

有 (bhava) は二種類に分類する事ができる、すなわち：

- 1、業有 (kamma bhava) ；
- 2、生有 (upapatti bhava) 。業有は生起の因であり、生有は生起 (有) である。

来世を獲得する為に、今世において造(ナ)した善業または悪業は、すなわち、業有である。これは生有の因であり、生起の因でもある。来世において当該の善業または悪業が引き起こす果報四名蘊と業生色は生有(または再生有)である。これらは生有であり、生起するものである。

生有(すなわち、来世において生起する所の果報名蘊と業生色)を獲得する為、今世において造(ナ)した行=業(すなわち、福行または非福行または不動行)は、業有である。禅修行者は、必ずや、智でもって、「(無明、愛及び)取を業有と生有の基因として、それら(業有と生有)は生起する」を知見するまで、識別しなければならない。

業有に関して、己自身が来世を獲得したいがために、造（ナ）した善思がもっとも顕著な所の、善名法グループを主として、識別しなければならない。

禅修行者は、已に生起した所の不善思グループを識別する事もできる。悪行（*duccarita*）に執着する愛を基因にして、悪行に執着・執取する取は生起する事を識別する；当該の執取は基因であり、悪業を造（ナ）すか、または不善行が生起する；その不善業（業有）の為に、未来において、生有という名の五蘊は、悪道において生起する。

已にこの段階に到達した禅修行者にとって、我論取、見取と戒禁取の生起は、非常に少ない。多くは、ただ欲取が生起するだけである。この欲取は、来世の五蘊、または六所縁、たとえば、比丘の生活または教法天人の生活を執取するものである。智でもって、「その欲取が生起するが故に、業有または生有が生起する。」を知見するまで、識別しなければならない。

要点

この段階においては、来世を獲得したいがために、造（ナ）した所の無明、愛、取、行及び業を識別するだけである。故に、来世を獲得するために造（ナ）した（無明）、愛、取、（行と）業の、任意の一グループを（+取り上げて識別すれば）充分である。これは、あなたが、来世を獲得するために、造（ナ）した多くの業の中において、あなたが最も好きな業を（+修習の目標として）採用すればよいのだ、という事である。

故に；

- 1、未来に「比丘」がいるまたは、「教法の天人」がいると、錯覚する事。
- 2、その種の生活を渴愛するのは愛である。
- 3、愛によって引き起こさる生命を執取するのは取であり、すなわち、欲取である。
- 4、その欲取を基因として、造（ナ）した所の布施または持戒または禅修の行。
- 5、業は業有（業力）である。

来世において、業有によって引き起こされた比丘または教法天人の五蘊は、生有であり、それはすなわち、未来の生（*jāti*）である。もし、禅修行者が止行者である場合、すなわち、ジャーナを擁する人である時、梵天有または梵天蘊（彼が好むジャーナに付合する梵天界、下等でも、中等でもまたは上等のジャーナでも有り得る）を発願するか、気持ちちがそちらに傾いた後、同じ方法を用いて、識別する：その無明、愛、取、行（ジャーナ）と業によって、彼は、梵天有、または梵天蘊を獲得するであろう。未来において、いまだ輪廻しなければならない禅修行者は、生有、すなわち、梵天有または梵天蘊を見ることになる。

禅修行者の間に見られる無明、愛、取、行及び業は異なっている。上に述べた比丘または教法天人の識別方法に基づいて、禅修行者は己自身の願または内心の傾向によって、識別の修習をしなければならない。

幾つかの識別方法

- 1、欲取が生起するが故に、業有が生起する；欲取は因、業有は果。
- 2、業有が生起するが故に、生有が生起する；業有は因、生有は果。

表 9-3 : 意門心路過程

	意門引転	速行 (7x)	彼所縁 (2x)
1. 欲取	12	20	12/34
2. 業有 (善)	12	34	34/12
3. 生有	当該の業有によって引き寄せられた未来蘊		

(上の表に列記したのは善業有を「業有」とした例である)

しかしながら、禅修行者は彼の名色流の三時の中において、已に生じ、正に生じ、將に生じんとしている善または不善業有を識別しなければならない。もしそれがジャーナ業有である場合、それはすなわち、以下のものであると知らねばならない：

- 1、初禅業有 = 3 4。
- 2、第二禅業有 = 3 2。
- 3、第三禅業有 = 3 1。
- 4、第四禅業有 = 3 1。
- 5、無色界禅業有 = 3 1。



有の縁によりて生 (Bhavapaccayā jātai)

(有が生起するが故に、生が生起する)

Bhavoti panettha kammabhavova adhippeto, so hi jātiyā
paccayo na upapatti bhavo. (《清浄道論》第 17 章)。

「有の縁によりて生」に関して、有とは、生 (jāti) を引き起こす事の出来る、業有を言う。その業有は、生の真正なる原因である。生起 (upapatti) は、生 (jāti) の真正なる原因ではない。

Upapattibhavupapattiyeva jāti āha 'na upapatti bhavo'. (《大疏鈔》)。

生有の生起は、生であるが故に、註釈では以下の様に言う：

「生起 (upapatti) は、生の真正なる原因ではない。」

こうしたことから、生有と呼ばれる所の未来の五蘊が、生起し始める時が、生 (jāti) である。これは、結生五蘊の生起を、言うのである。たとえば、もし、禪修行者が、白遍四禪からの業有を識別する時、彼は、未来梵天生有を獲得する事ができる。梵天生有五蘊の中において、鼻浄色、舌浄色、身浄色と性根色がないが故に、彼は智でもって、鼻十法聚、舌十法聚、身十法聚と性根十法聚の不存在を識別する事ができる。これらの子細に識別する事。

1、業有が生起するが故に、生が生起する；業有は因、生は果。

生の縁によりて老死 (Jātipaccayā jarāmaṇam)

(生が生起するが故に、老死が生起する)

識別する：

1、生が生起するが故に、老死が生起する；生は因、老死は果。

これには二種類の識別方法がある。すなわち、俗諦法 (samuti sacca) または究極諦法 (paramattha sacca、真諦) である。俗諦法は、「生において、一生のうちに一度だけ結生が出現する。老と死もまた、この様に発生する」。これは未来世及び、老と死の識別によって知る事ができる。

究極諦法は：

- 1、（未来）の一期の生命の中において、將に生起しつつある色法。
- 2a、（未来）の一期の生命の中において、処門に基づいて生起する所の名法。
- 2b、（未来）の一期の生命の中において生起する結生、有分と死亡名法（離心路過程）。
 - （一）それら（1、2a、2b）の生時（uppāda）は生；
 - （二）それら（1、2a、2b）の住時（ṭhiti）は老；
 - （三）それら（1、2a、2b）の滅時（bhaṅga）は死。

智でもって、未来の一世の中の名色法の生、住、滅を知見した後、以下のものを識別する。

- 1、生が生起するが故に、老死が生起する；生は因、老死は果。

愁、悲、苦、憂、惱

愁、悲、苦、憂及び惱は、生ある人の中において生起する。しかしながら、それらは必ず生ある人に生起するとは限らない法である。已に、完全に煩惱を断じ除いた聖者にとって、彼らの名色流の中に生（jāti）があるものの、しかし、愁、悲等は生起しない（状況に応じて、ただ身苦だけは、生起する可能性はある）。故に、愁、悲等は、生の定果（mukhaya）であるとは言えない。それらが、未来において生起するであろうタイプの人ならば、愁、悲等の生起を識別する事ができる。

識別：

- 1、生が生起するが故に、愁が生起する；生が因、愁が果。
- 2、生が生起するが故に、惱が生起する；生が因、惱は果。
（悲、苦と憂もまた同じ方法で識別する事を理解すること。）

表 9-4：愁、悲、憂、惱心路過程

	意門引転	速行(7x)	彼所縁(2x)
愁、悲、憂、惱	12	18(瞋グループ)	11/33/32

愁、悲、憂、惱は、瞋速行グループに属する。ここにおいて列挙するのは、意門心路過程を例にしたものである。五門心路過程もまた、状況に応じて生起する。しかし、強烈な愁、悲等は、意門の中においてのみ生起することができる。彼所縁は生起することもあれば、生起しない事もある。もし、彼所縁が瞋速行の後に生起するとするならば、

ただ、捨俱彼所縁のみが生起することができる。そうでない場合、「到訪有分」(āgantuka bhavaṅga) が生起する。もし、来世は梵天であれば、愁等は生起しえない。その界自体は無瞋である。ここにおいて説明した縁起第一法は、今世を（縁起輪転の）中間に、おいたものである。この方法に基づけば、禅修行者は、一個の過去世を真中において、更に遠い過去世を、識別する事ができる。未来世を真中におけば、更に遠い、未来世を識別する事ができる。



第十章：四種類の縁起の教法

四人の藤の採取者が藤を採取する様に擬えて、仏陀は四種類の方法で、縁起を教えた。
すなわち：

第一法：初めから最後へ。

第二法：真中から最後へ。

第三法：最後から始めへ。

第四法：真中から始めへ。

(一) 初めから最後へ＝随順縁起第一法 (anuloma paṭiccasamuppāda)

この四人の藤の採取者の中で、ある人が、先に藤の根を見つけた。この人はその藤の根を切り、次には、その全体を、最後の尾の部分まで、ひとからげに持ち上げ、そして、それを持ち去り、それぞれ、適材適所に用いた。同様に、仏陀は無明から始めて（始まり）、老死に至るまで（末尾）の方法をもって、縁起を教えた：

Iti kho bhikkhave avijjāpaccayā saṅkhārā ... jātipaccayā jarāmaraṇaṃ.

——この様に、比丘たちよ。無明の縁によりて、行が生じ・・・生の縁によりて、老死が生じる。（《中部・大愛尽滅經》 Majjhima Nikāya, Mahātaṇhāsankhaya Sutta ; 《清浄道論》第 17 章）

(二) 真中から最後へ＝随順縁起第二法

四人の藤の採取者の中で、もう一人の人は、藤の真ん中を見つけた。彼はその藤の真ん中の部分を切って、上の半分だけを引っ張って、それを持ち去って、適材適所に用いた。同様に、仏陀は教えた：

Tassa taṃ vedanaṃ abhinandato abhivadato ajjhosāya tiṭṭhato uppajjati nandī. Yā vedanāsu nandī tadupādānaṃ. Tassupādāna paccayā bhavo. Bhavapaccayā jāti, Jāti paccayā jarāmaṇaṃ.

——受者は心から、それを喜んで迎え入れて、言う：「これはよい！これはよい！」彼は、未だそれに執着しており、樂が彼の心中に生起する。受を楽しむのは取であり、その人は、
取の縁によりて有が生じ；
有の縁によりて生が生じ；
生の縁によりて老死が生じる。

この様に、仏陀は、受（真中）から、老死（末尾）までの方法を用いて、縁起を教えたのである（《清浄道論》第 17 章）

（三）末尾から始めへ＝逆縁起法（paṭiloma paṭiccasamuppāda）

もう一人の人は、先に藤の末端を見つけた。彼は藤の末端を引っ張り、その根に及んだ。次に藤の全体を持ち去り、適材適所に用いた。同様に、仏陀は問う：

Jātipaccayā jarāmaṇanti iti kho panetaṃ vuttaṃ.

Jātipaccayā nu kho bhikkhave jarāmaṇaṃ no vā, kathaṃ vā ettha hotīti.

Jātipaccayā bhante jarāmaṇaṃ, evaṃ no ettha hoti 'jātipaccayā jarāmaṇa'nti.

Bhavapaccayā jāti ... Avijjāpaccayā saṅkhārāti iti kho panetaṃ vuttaṃ. Avijjāpaccayā nu kho bhikkhave saṅkhārā no vā, kathaṃ vā ettha hotīti.

Avijjāpaccayā bhante saṅkhārā, evaṃ no ettha hoti 'avijjāpaccayā saṅkhārāti.

「『私は、生の縁によりて、老死が生じると言う。比丘たちよ。老死は生が因であるか？あなた方は、どの様に思うか？』

『生が因で、老死は生起する。尊者。我々は、生の縁によりて、老死が生じると言う』

『私は、有の縁によりて生が生じ・・・無明の縁によりて行が生じる、と言う。比丘たちよ。行は、無明が因であるか？あなた方は、どの様に思うか？』

『無明を因にして、行が生起する。尊者、我々は無明の縁によりて、行が生じると言う』

この様にして、仏陀は老死（末端）から無明（始まり）の方法によって、縁起を教えた。（《清浄道論》第 17 章）。

（四）真中から始めへ＝逆縁起第二法

四人の藤の採取者の中で、もう一人の人は、藤の真ん中の部分を見つけた。彼は、真ん中を切って、下に沿って引っ張って、根に至った。彼はそれを持ち帰って、適材適所に用いた。同様に、仏陀は教えた：

Ime kho bhikkhave cattāro āhārā kiṃ nidānā kiṃ samudayā kiṃ jātikā kiṃ pabhavā. Ime cattāro āhārā taṇhā nidānā taṇhā samudayā taṇhā jātikā taṇhā pabhavā. Taṇhā cāyaṃ bhikkhave kiṃ nidānā ... Vedanā ... Phasso ... Saḷāyatanaṃ ... Nāmarūpaṃ Viññānaṃ ... Saṅkhārā kiṃ nidānā ... Saṅkhārā avijjā nidānā avijjā samudayā avijjā jātikā avijjā pabhavā.

——比丘たちよ。何が、この四食（āhāra）の因と縁（nidāna）であるか？

（その他の因と聚集する時。その他の因は趣、依存、時と加行である：gati、upadhi、kāla、payoga）何がそれらの集（samudayā）であるか？

何がそれらの生の因であるか？ 何がそれらの原因であるか？

この四食は、渴愛を因縁としている；（その他の因と聚集する時）渴愛によって集となり；渴愛によって生の因となり；渴愛によって原因となる。渴愛の因縁とは何か？

・・・受・・・触・・・六処・・・名色・・・識・・・行の因縁は何であるか？

（その他の因と聚集する時）集とは何か？生の因とは何か？原因とは何か？

行は無明を因縁としている；

（趣、依存、時と加行等の因が聚集する時）無明によって集となり；無明によって生の因となり；無明が原因となる。

この様に、仏陀は、四食、または業有、または愛（真中）から無明（始まり）の方法によって、縁起を教えた。（《清浄道論》第 17 章）。

上に述べた、四つの縁起の教法の中で、ここにおいて、第一法を説明した。すなわち、始まり（無明）から始まって、末端（老死）までの、随順縁起第一法である。次は、中から末に至る、随順縁起第二法を説明する。

（二）随順縁起第二法

Sa kho so bhikkhave kumāro vuḍḍhimanvāya indriyānaṃ paripākamanvāya pañcahi kāmagaṇehi samappito samaṅgibhūto paricārati. Cakkhuvīññeyyehi rūpehi itṭhehi kantehi manāpehi piyarūpehi kāmūpasamhitehi rajanīyehi. Sotavīññeyyehi saddehi ... Ghānavīññeyyehi gandhehi ... jivhāvīññeyyehi rasehi ... kāyavīññeyyehi phoṭṭhabbehi itṭhehi kantehi manāpehi piyarūpehi kāmūpasamhitehi rajanīyehi. So cakkhunā rūpaṃ

disvā piyarūpe rūpe sārājati, appiyarūpe rūpe byāpajati anupaṭṭhitakāyasati ca viharati parittacetaso, tañca cetovimuttim paññāvimuttiṃ yathābhūtaṃ nappajānāti, yathassa te pāpakā akusalā dhammā aparisesā nirujjhanti. So evaṃ anurodhavirodhaṃ samāpanno yaṃ kiñci vedanaṃ vedeti sukhaṃ vā dukkhaṃ vā adukkhamasukhaṃ vā, so taṃ vedanaṃ abhinandati, abhivadati, ajjhosāya tiṭṭhati. Tassa taṃ vedanaṃ abhinandato abhivadato ajjhosāya tiṭṭhato uppajati nandī. Yā vedanāsu nandī tadupādānaṃ. Tassupādāna paccayā bhavo. Bhavapaccayā jāti, jātipaccayā jarāmaṇaṃ, soka parideva dukkha domanassupāyāsā sambhavanti. Evametassa kevalassa dukkhakkhandhassa samudayo hoti.

比丘たちよ。あの男の子は、諸根が成熟し、五欲を享受する事、すなわち、喜ばしい、楽しい、親愛な、好ましさと欲貪（kāmarāga）に関連する事に樂を得る。眼識から色彩を知り、耳識から声を知り、鼻識から香を知り、舌識から味を知り、身識から触を知る。

あの男の子は、喜ばしい色彩を見る時、それに執着する；もし、それが喜ばしくないものであれば、彼はその色所縁に瞋心を起す；彼は身至念（kāyagatāsati）に住まず、心が狭い。彼は、不善法を完全に取り除き、低めた阿羅漢道心と、自在なる阿羅漢慧を、如実に知見する事ができない。

その人は、憎悪を好み、種々の受を体験し、または樂、または苦、または不苦不樂を体験する。その人は受において楽しみ、心よりそれを歓迎し、言う：「これは非常によい！これは非常によい！」そして依然として、それに執着する。受を楽しみ、心からそれを讚嘆し、依然としてそれに執着する。樂貪（nandīrāga）が彼の心中に生起する。受において樂貪するのは取である。その後、彼において、以下の事が発生する：取が原因で、有が生起し；有が原因で、生が生起し；生が原因で、老死、愁、悲、苦、憂と悩が生起する。この様に、（全く楽しさのない）苦蘊が生起する。（耳門などについても同様である）（《大愛尽滅經》）

上に述べた教示に随えば、以下の様に言える：

- 1、六処から始めて縁起を識別する。または
- 2、受から始めて縁起を識別する。

この識別方法は、随順縁起第一法の中の、六処から老死に至る方法と同一である。

更に遠くの未来世における、輪廻の終結まで識別する事を理解しなければならない：

- 1、六処、触、受、（無明）、愛、取、有（業有と行）は、今世に属する。

2、生と老死は一番目の未来世である。

もし、更に遠い（未来）輪廻があるならば：

- 1、六処、触、受、（無明）、愛、取、有（業有と行）は一番目の未来世に属する。
- 2、生と老死は二番目の未来世に属する；等々。

禅修行者は過去の輪廻を識別する事もできる：

- 1、六処、触、受、（無明）、愛、取、有（業有と行）は一番目の前世に属する。
- 2、生と老死は今世。

その後

- 1、六処、触、受、（無明）、愛、取、有（業有と行）は二番目の前世に属する。
- 2、生と老死は一番目の前世に属する。

その後

- 1、六処、触、受、（無明）、愛、取、有（業有と行）は三番目の前世に属する。
- 2、生と老死は二番目の前世に属する；等々。

これは、二つの世を連貫させる識別方法である。もし、比較的遠い過去世から未来世まで識別する事ができるならば、禅修行者はそれを相似している縁起第一法もまた理解する事ができる。その理由は：生とはすなわち、識、名色、六処、触と受であり、無明は愛と取に含まれ、行は業に含まれるが故に。言い換えれば、縁起第五法（縁起の初めの段階において、已に説明した）と随順縁起第一法の二者に熟練している禅修行者にとっては、この随順縁起第二法は、非常に容易に修習できるのである。

（三）逆縁起第一法（末端から始めへ）

ここでは、転倒した順序によって縁起を教える。すなわち、末端の老死から一番前の無明までである。逆縁起の順序とは：

- 1、老死。
- 2、生。
（上の二者は未来時に属する）
- 3、有。
- 4、取。
- 5、愛。

- 6、受。
- 7、触。
- 8、六処。
- 9、名色。
- 10、識。

(三から10までは、現在時に属する)

- 11、行。
- 12、無明

(11と12は過去時に属する)

次に、もし、禅修行者が更に遠い未来世を識別したいのであれば、彼は以下の様に識別する事ができる：老死と生は二番目の未来世に属する；有、取、愛、受、触、六処、名色、識は、一番目の未来世に属する；行と無明は今世に属する。この様に因果関係を連貫させながら、最後の一個の未来世の因と果まで識別する。

次に、禅修行者は更に遠い過去の輪廻を識別する事ができる；老死と生は今世に属する；有、取、愛、受、触、六処、名色、識は一番目の前世に属する；行と無明は二番目の前世に属する。

この方法に基づいて、禅修行者は、己自身の力の及び限り、更に遠くの過去世の因果を識別する。これは三世の因果関係を連貫させる方法である。すでに、随順縁起第一法に熟練した禅修行者ならば、この識別方法は決して難しくない。

識別方法の幾つかの例

智でもって、老死は生によって引き起こされる事を知見し、その次に以下の様に因果を識別する：

生が生起するが故に、老死が生起する；生は因、老死は果。

次に、智でもって、業有が生を引き起こす事を知根した後、以下の様に因果を識別する：

業有が生起するが故に、生が生起する；業有は因、生は果。

この様に逆の順序で、前の端の無明に至るまで識別する。



(四) 逆縁起第二法 (中から始めへ)

四食

この種の識別方法に関して、註釈では、《相応部・因縁品・食經》(Samyutta Pāli, Nidāna Vagga, Āhāra Sutta) から摘った一節がある。この經典の中において、仏陀は、中間の四食から前端の無明までの、逆縁起法を教えている、故に、ここにおいて、先に、四食についての説明をする。四食とは：

- 1、段食 (kabaḷīkāra āhāra) : 荒いものでも、微細なものでも、この食は、一口大に丸めた後、食べていなくとも、食べた様に (+作用する)。(以下において再度説明する)。
- 2、触食 (phassāhāra) : 所縁に接触する所の食。
- 3、意思食 (manosañcetanāhāra) : 心を促す食。
- 4、識食 (viññāṇāhāra) : 識知の食。

Vipākavaṭṭabhute paṭisandhipavattiphassādike kammamuttāhānañca ojaṃ sandhāya 'cattāro āhāra taṇhānidānā'ti ādi vuttaṃ. Vaṭṭupathambhakā pana itarepi āhāra taṇhāpabhave tasmim avijjamāne na vijjanṭīti 'taṇhānidānā'ti vattum vaṭṭanti. (《根本疏鈔》 : 《大疏鈔》)

以下の、果報輪転に属するものに関して、及び結生 (paṭisandhi) と生起 (pavatti) 時に生起する所の四食とは、すなわち：

- 1、触食：果報識と相応する触。
- 2、意思食：果報識と相応する思。
- 3、識食：果報識。
- 4、段食：業等起色 (kammamuttāhāna rūpa) を含む、その中の業生食素 (kammaja oja)。

仏陀は以下の様に教える：この四食は、愛をそれらの因縁としている (cattāro āhāra taṇhā nidāna)。ここにおいて、了義教法 (nītattha) に基づいて、それを果報輪転に属する四食とするが、しかし、もし、渴愛を根源としないのであれば、その他の非業生食 (これは、親依止力によって輪転苦が不断に増長する様に支援する力、すなわち、煩惱輪転、業輪転及び果報輪転を不断に輪転せしめる事) もまた、生起することができない。故に、愛 (taṇhā) は因縁 (nidāna) である、と言うのは適切である。

非業生食＝非執取食（**anupādiṇṇaka āhāra**）

Imesaṃ sattānaṃ khādantānampi akhādantānampi bhuñjantānampi abhuñjantānampi paṭisandhiccitteneva sahaḥajātaṃ kammajā oḍā nāma atthi. Sa yāvapi sattamā divasā pāleti. Ayameva upādiṇṇaka kabaḷikārāhāroti veditabbo.

Tebhūmakakusalākusalakiriyavasena anupādiṇṇaka. Lokuttarā pana ruḥiḥvasena kathitāti. （《相応部註》）

Paṭisandhiccitteneva sahaḥajātāti lakkhaṇavacanametaraṃ. Sabbāyapi kammajarūpapariyāpannāya oḍāya atthibhavassa avicchedappavatti sambhavadassanatto. Sattamāti uppannavasato patthāya yāva sattamadivasāpi. Rupasantatiṃ paveniḥgaṭṭanavasena. Ayamevāti kammaja oḍā. Kammajaojaṃ pana paṭicca uppannaoḍā akammajattā anupādiṇṇa āhārotveva veditabbo. （《相応部疏鈔》）

上に述べた註釈と疏鈔に基づくと、果報輪の一部の属する所の上述の四食は、四執取食（**upādiṇṇaka āhāra**）である。四非業生食（**akammaja āhāra**）または非執取食とはすなわち：

- 1、触食は、善心、不善心と唯作心に相応する触。
- 2、意思食は善思、不善思、唯作思。
- 3、識食は、善識、不善識と唯作識。
- 4、段食は、心生食素、時節生食素と食生食素。

この四非業生食（非執取食）は、生死輪廻の苦（**saṃsāra vaṭṭa dukka**）を支援する。もし、渴愛をして、この四食の根源とせしめないのであれば、それらは生起することができないが故に、隠喩の法（**neyyattha**）でもって、愛は因縁であるというのは適切である。

段食

食生食素は非執取食の中に含まれる。食生食素には、四種類ある。すなわち：

- 1、業生食素によって製造される食生食素。
- 2、心生食素によって製造される食生食素。
- 3、時節生食素によって製造される食生食素。
- 4、前生生食生食素によって製造される食生食素。

ここにおいて、それらに関して些かの説明をする。古代の大徳は「段食」を翻訳するのに、：「まだ一塊（+の団子状）になっていないながら、已に一塊になったかの状態」としている。この訳文は、非常に奥深い含意がある。

色法または究極法は、一つの処から、別の一つの処へ移動する性質は持っていない。一たび生起するや否や、それらは即刻、生起した処で壊滅する。食（たとえば、有情が食事をする）が、皿の上、口の中、喉の所、飲み込んだばかりの胃の中などにある時、それらは、ただ一つひとつのグループ毎の時節生食素八法色に過ぎない。それらは、絶え間なく、不断に、色聚の中の火界（時節）によって製造された色法に過ぎない。

究極法の本質から見れば、色法は生起するや否や即刻、壊滅する。咀嚼の時に生じる色法は一個であり、飲み込む時の色法は、また別の一個であり、胃の中の食物はまた別の一個である。それらは、皿から口、口から喉、喉から胃へと、持続して存在できる究極法ではないのである。それらは、長く存在する事が出来ない為に、人は、それを一塊の団子状にする十分な時間がなく、その様にして、飲み込むことは、できないのである。しかしながら、名前を「食物」と呼ぶ所の時節生色聚の中の火界の支援の力が尽きていない時、新しい時節生色聚は、継続して不断に生起することができる。故に食は、「一塊の団子状になってはいないけれど、一塊の団子状になっているかの如く(+のもの)」と訳されたのである。

今食べたばかりの食物（すなわち、段食と呼ばれる時節生色聚）の時節生食素は、命根九法聚の火界（消化の火界）の助けを得た時、食素八法聚を製造する事ができる。それらは、時節生食素から製造された食生色である。一つひとつの業生食素、心生食素、時節生食素及び前生食生食素は、あの食生食素の支援を受けて、一つひとつ（の食素）もまた、新しい食素八法聚を製造する事ができる。これら新しい食素八法聚は、あれら食素が製造した食生色である。また、これら食生色の中の食素もまた食生食素である。これは、支援の力を提供する食生食素が、どの様にして食生食素を獲得するのかという（+説明である）。

四食の力量

- 1、段食は食素八法聚を引き寄せる。
- 2、触食は三種類の受を引き起こす。
- 3、意思食は三有（bhava）を引き起こす。
- 4、識食は結生名色を引き起こす。

（1）段食：上に述べた説明の様に、段食は食素八法聚を引きよせる。

（2）触食：

楽受を引き寄せる事の出来る能力を有する触が生起した時にのみ、触食は楽受を引き寄せる事ができる。

苦受を引き寄せる事の出来る能力を有する触が生起した時にのみ、触食は苦受を引き寄せる事ができる。

捨受を引き寄せる事の出来る能力を有する触が生起した時にのみ、触食は捨受を引き寄せる事ができる。

(3) 意思食：欲界に生まれるに至る様にする業が欲有 (kāma bhava) を引き寄せる。色界または無色界に生まれるに至る様にする業は、付合する有を引き寄せる。意思は三有を引き寄せる。

(4) 識食：識食は、俱生等の縁力により、結生の刹那に相応の名蘊及び業生色を引きよせる。(《相応部註》)

Ettha ca ‘manosañcetanā tayo bhava āharatī’ti sāsava - kusalākusala
cetanāva vuttā. ‘Viññāṇaṃ paṭisandhi nāmarūpaṃ āharatī’ti paṭisandhi
viññāṇameva vuttaṃ. Avisesena pana taṃ samupayuttataṃ
samuṭṭhānadhammānaṃ āharaṇatopete ‘āharā’ti veditabbā. (《相応部註》)
Sāsavakusalākusala cetanāva vuttā visesapaccayābhāvadassanaṃ hotanti.
Tenāha ‘avisesena panā’ti ādi. Paṭisandhi - viññāṇameva vuttanti esevanayo.
Yathā tassa tassa phalassa visesato paccayatāya etesaṃ āhārattho.
Evaṃ avisesatopīti dassetuṃ ‘avisesenā’ti ādi vuttaṃ. (《相応部疏鈔》)

「意思は三有を引きよせる」に関して、それは漏 (āsava) に属する所縁及び、生死輪廻苦を「推転」せしめる能力を有する善思と不善思を指して言うのである事に注意する。この様に言うのは、それらは、(+我々を) 生死輪廻苦に至らせしめる特定因であるから、という事を理解しなければならない。通常、一切の世間思 (善または不善と唯作) は、相応の名法と心生色を引き寄せる因である。

「識は結生名色を引き寄せる」 (viññāṇaṃ paṭisandhi nāmarūpaṃ āharati) というこの詞は、ただ結生識についてのみ述べているものである。通常、識が「食」と呼ばれるのは、それが相応の法と心生色を引き寄せるからである。

(一) 四食の中において、段食 (すなわち、四等起食素または四生食素) は、新しい食素八法聚を製造する事と、四等起色を支援する事によって、食としての作用を完成させる。

(二) ただ所縁と接触している時にのみ、触食は受を引き寄せる作用を完成させる事ができる (食の作用)。

(三) 意思は心を促すか、または、因果の生起、またその後の連結に尽力した後、三有の食を引き寄せる作用を完成させる。

(四) ただ諸蘊の生起を省察し、かつ、所縁を明確に識知した後においてのみ、結生識は、完全に、相応法と業生色または心生色の食の作用を引き起こす事ができる。

(一) 段食は、食素八法聚を製造する事を通して、また、四等起色を支援して色身を維持する事を通して、色相続流が中断しない様にする結果、諸々の有情が引き続き存在を維持する因となる。色身は、業によって引き起こさるものではあるが、しかし、段食の支援の下、それは 10 年乃至 100 年、すなわち、寿命の終りまで維持する事ができる。なぜ、母親が生んだ嬰兒は、乳を飲ませる等の世話の下に、ようやく生き延びる事ができるのか？ これはまさに、柱で支えられた家屋が倒壊しないのと同じで、食の支援を受けた色身は、長く生きる事ができる。

四等起色を支援した後、段食は食の作用を完成させたと言えるが、しかし、それは、二種類の色相続流（すなわち、食等起色と執取色＝業生色）の因である。それは、随護力（*anupālaka satti*）でもって、業生色を支援し、生力（*janaka satti*、直接引き起こす力）でもって、食等起色を支援する。

(二) 受の「足処」の所縁に接触した後、触食は、受を引き起こす事を通して、諸々の有情が引き続き存続する因となる。

(三) 業（すなわち、善業、または不善業）を造（ナ）す事を通して、意思は有（*bhava*）の基因となり、諸々の有情が引き続き存続する因となる。

(四) 所縁を明確に識知した後、識食は名色を引き起こす事を通して、諸々の有情が引き続き存続する因となる。

Upādiṇṇarūpasantatiyā upatthambhaneneva utucittajarūpa santatīnampi
upatthambhanasiddhi hotīti ‘Dvinnarūpasantatīna’nti vuttam. Upatthambhaneva
sandhāya ‘anupālako hutvā’ti ca vuttam.
Rūpakāyassa thitihetutā hi yāpanā anupālanā. (《相応部疏鈔》)

上に述べた疏鈔は、以下の様に言う、段食は随護力によって、業生色（すなわち、執取色）を支援し、また、生力によって、食等起色を支援する。業生色相続流の支援を通して、時節生色と心生色相続流を支援する作用を、同時に完成させる。こうしたことから、食縁力（*āhāra paccayā satti*）を通して、業生色（すなわち、執取色）と食生色相続流を支援する（+現象に）言及した。当該の疏鈔は、随護力は、助力（*upatthambhana*）を指すと言う。色身が継続して不断である様に維持する因は、すなわち、随護（保護）であるが故に。

識別の要点

「食」を以下の二種類に分類する事ができる：

- 1、果報輪転四食。
- 2、業輪転四食。

《食經註》（《相応部註》）は、果報輪転四食を「食」としている：業輪転四食を「食」とするのは、《相応註》、《根本疏鈔》、《大疏鈔》である。もし、禅修行者が果報輪転四食の識別から始めたいのであれば、彼は以下の説明に基づいて識別するが、それは、結生刹那の四果報輪転法の識別から始める、という事である。彼は同じ方法を用いて、彼の一生の中において生起した所の果報輪転法を識別する事から始める事もできる。

果報輪転四食から始める識別方法

もし、あなたの結生が三因喜俱結生であるならば、結生刹那は、すなわち、34名法と、30種類の業生色である。結生刹那の四食とは：

- 1、段食：30種類の業生色の中の業生食素。
- 2、触食：結生識と相応する触。
- 3、意思食：結生識と相応する思。
- 4、識食：結生識。

この四食を識別することから始める。この様に識別する時、もし、三世に分けるならば：

- 1、四食（すなわち、果報輪転四食）は、今世に属する。
- 2、有、取、愛、受、触、六処、名色及び識は、一つ目の過去世に属する。
- 3、行と無明は二番目の過去世に属する。

この様にして、更に遠くの過去と未来、三世を連貫する因果関係を識別する。同様の方法を用いて、あなたは、その他の果報輪転四食から始まる識別の修習をする事もできる。

業輪転四食から始まる識別方法

もし、あなたが、業輪転に属する四食を識別したいのであれば、あなたが未来の輪廻の為に造（ナ）した業輪転を先に識別する。たとえば、未来において阿羅漢果を証悟したいと思う比丘が多くの業を造（ナ）したとして、あなたはその中の一個、己自身が覚えている所の業を選ぶ。当該の業を造（ナ）した時に生起した四食とは：

- 1、業を造（ナ）す時、一つひとつの意門54色における、四種類（または身門内）の四等起食素は皆段食である。
- 2、善名法グループの中の触は触食である。
- 3、その時の思は意思食である。
- 4、その時の善識は識食（すなわち、業識である）。

この四食を識別する事から始める。触、思と識は、業有の善行法と呼ばれる。業有は業輪転の一部である。

（一）業有＝四食、取、愛、（無明）、受、触、六処、名色、識（果報識）は現在世に属する法である。

（二）行と無明は、第一番目の過去世に属する法である。この例に鑑みて、更に遠い過去と未来世の識別もまた、同様である事を理解しなければならない。

記載されているもう一つ別の識別方法

Āhārā vā taṇhāya pabhāvetabbā anāgato addhā, taṇhādayo paccuppannā, saṅkhārāvijjā atītoti. （《根本疏鈔》：《大疏鈔》）

今世で造（ナ）した所の愛が、引き起こした未来の結生刹那の四食を、《食經》で言及された所の「四食」とする。もし、その未来の結生は、三因喜俱結生であれば、それは34名法がある。あなたが願望した所の（阿羅漢果を証悟できる様にと）比丘の未来結生を目標にする。

当該の未来結生法の中において：

- 1、業生色の一部に属する業生食素は段食である。
- 2、結生識と相応する触は触食である。
- 3、結生識と相応する思は意思食である。
- 4、結生識は識食である。

（一）この四食は未来世の法である。

（二）当該の未来四食の基因は、すなわち、愛等々（業有、取、愛、受、触、六処、名色と識）は現在世の法である。

（三）行と無明は過去世の法である。

この様に、未来、現在と過去の三時を含める事。この識別方法の、その順序は、逆転していなければならない、すなわち、未来の結生に属する四食から始めて、過去世に属する無明まで、順序よくそれらの因果関係を識別するものである。



第十一章：相、作用、現起（現象）、近因

Lakkhaṇa Rasa paccupaṭṭhāna Padaṭṭhāna

以下において、一つひとつの究極法の、各々の相などを解説する。

☆相 (lakkhaṇa、特徴の事) : それを持つ特徴。

☆作用 (rasa、味とも言う) : それが執行する所の任務 (kicca) または獲得した所の成就 (sampatti) 。

☆現起 (現象) (paccupaṭṭhāna) : それが、(禅修行者の) 体験に呈する所の方式。

☆近因 (padaṭṭhāna、また足処とも) : それが直接依存する所の近縁。

色蘊品：28色

(一) 地界 (paṭhāvī dhātu)

相：硬い、非常に硬い。

作用：同一の粒の色聚の中のその他の色法を支える。

現起 (現象) : 受け入れる : たとえば、同一の粒の色聚の中のその他の色法は、この上において住む。

近因 : その他の三界。

(二) 水界 (āpo dhātu)

相：流動。

作用：その他の俱生色法の増大。

現起（現象）：同一の粒の色聚の中の諸色を粘着する。

近因：その他の三界。

(三) 火界 (tejo dhātu)

相：熱さまたは冷たさ。

作用：同一の粒の色聚の中の色法を成熟させる。

現起（現象）：同一の粒の色聚の中の色法を柔軟にする。

近因：その他の三界。

(四) 風界 (vāyo dhātu)

相：支持（支える）、硬さを齎す。

作用：押す。移動させる。

現起（現象）：俱生色法をある場所から別の場所に帯同する。

近因：その他の三界。

(五) 眼浄色 (cakkhu pasāda)

相：1、色所縁が衝撃せしめる様に、準備する所の四大種の浄。

2、色愛 (rūpa taṇhā、色所縁を見たいと思う) を因と縁とした業生四大種の浄。

作用：心路過程を牽引して色所縁に至らしめる。

現起（現象）：眼識の依処。

近因：色愛を因と縁にした業生四大種、すなわち、同一の粒の色聚の中の四大。

(六) 耳浄色 (sota pasāda)

相：1、声所縁が衝撃せしめる様に準備する所の四大種の浄。

2、声愛 (sadda taṇhā、声所縁を聞きたいと思う) を因と縁とした業生四大種の浄。

作用：心路過程を牽引して声所縁に至らしめる。

現起（現象）：耳識の依処。

近因：声愛を因と縁にした業生四大種、すなわち、同一の粒の色聚の中の四大。

(七) 鼻浄色 (ghāna pasāda)

相：1、香所縁が衝撃せしめる様に準備する所の四大種の浄。

2、香愛 (ghanda taṇhā、香所縁を嗅ぎたいと思う) を因と縁とした業生四大種の浄。

作用：心路過程を牽引して香所縁に至らしめる。

現起（現象）：鼻識の依処。

近因：香愛を因と縁にした業生四大種、すなわち、同一の粒の色聚の中の四大。

（八）舌浄色 (jivhā pasāda)

相：1、味所縁が衝撃せしめる様に準備する所の四大種の浄。

2、味愛 (rasa taṇhā、味所縁を味わいたいと思う) を因と縁とした業生四大種の浄。

作用：心路過程を牽引して味所縁に至らしめる。

現起（現象）：舌識の依処。

近因：味愛を因と縁にした業生四大種、すなわち、同一の粒の色聚の中の四大。

（九）身浄色 (kāya pasāda)

相：1、触所縁が衝撃する様に準備する所の四大種の浄。

2、触愛 (phoṭṭhabba taṇhā、触所縁に触れたいと思う) を因と縁とした業生四大種の浄。

作用：心路過程を牽引して触所縁に至らしめる。

現起（現象）：身識の依処。

近因：触愛を因と縁にした業生四大種、すなわち、同一の粒の色聚の中の四大。

（十）色所縁 (rūparammaṇa)

相：眼浄色を衝撃する。

作用：1、眼識の目標である：所縁縁力 (ārammaṇa paccayā satti) によって、眼識 (功用の作用、kicca rasa) を支える。

2、眼識を支える所縁縁力 (成就の作用、sampatti rasa) を具備する。

現起（現象）：眼識の境。

近因：同一の粒の色聚の中の (それが依存する所の) 四大。

（十一）声所縁 (saddārammaṇa)

相：耳浄色を衝撃する。

作用：1、耳識の目標である：所縁縁力によって、耳識 (功用の作用) を支える。

2、耳識を支える所縁縁力 (成就の作用) を具備する。

現起（現象）：耳識の境。

近因：同一の粒の色聚の中の (それが依存する所の) 四大。

(十二) 香所縁 (gandhārammaṇa)

相：鼻浄色を衝撃する。

作用：1、鼻識の目標である：所縁縁力によって、鼻識（功用の作用）を支える。

2、鼻識を支える所縁縁力（成就の作用）を具備する。

現起（現象）：鼻識の境。

近因：同一の粒の色聚の中の（それが依存する所の）四大。

(十三) 味所縁(rasārammaṇa)

相：舌浄色を衝撃する。

作用：1、舌識の目標である：所縁縁力によって、舌識（功用の作用）を支える。

2、舌識を支える所縁縁力（成就の作用）を具備する。

近因：同一の粒の色聚の中の（それが依存する所の）四大種。

(十四) 女根 (itthindriya/itthi bhāva rūpa)

相：女性。

作用：「彼女は女性である」と顯示する。

現起（現象）：1、女性。2、女性の相。3、女性的行為。4、女性の色身の因。

近因：同一の粒の色聚の中の（それが依存する）業生四大種。

(十五) 男根 (purisindriya/purisa bhāva rūpa)

相：男性。

作用：「彼は男性である」と顯示する。

現起（現象）：1、男性。2、男性の相。3、男性的行為。4、男性の色身の因。

近因：同一の粒の色聚の中の（それが依存する）業生四大種。

(十六) 命根 (jīvitindriya/rūpa jīvita)

相：俱生の業生色を守護する。

作用：これら俱生の業生色が生起し、壊滅するまでの間、存在する事ができる様にする；
長命。

現起（現象）：これらの業生色が、壊滅するまでの間、存在する様維持する。

近因：同一の粒の色聚の中の（それが依存する）業生四大種。

(十七) 心所依処 (hadaya vatthu)

相：眼界と意識界に依止と支持（＝支え）を提供する。

作用：この二界の依処となる。

現起（現象）：この二界を支える。

近因：同一の粒の色聚の中の（それが依存する）業生四大種。

（十八）段食（**kabaḷīkāra āhāra**）

相：食べ物の栄養。

作用：色法を滋養する。

現起（現象）：食生色を製造して身体を維持する。

近因：それが滋養する所の処色を受け取る。

（十九）空界（**ākāsa dhātu**）

相：色聚の限界を分ける。

作用：色聚の際を顕示する。

現起（現象）：1、色聚の限界。

2、四大種の不接触。

3、色聚の間の隙間。

近因：区画されるべき色聚。

（二十）身表（**kāyaviññatti**）

相：心生風界が帯同する所の、往、還、屈、伸等の動作、俱生色身をして、安定させるかまたは移動せしめる。（地界が強すぎる心は、大種を生じる）。

作用：動作を通じて、己自身の意志を示す。

現起（現象）：身体の転動する因。

近因：心が風界を生む。

（二十一）語表（**vacīviññatti**）

相：言葉を製造する事ができる地界が相互にぶつかり、言語による表現がある事。（地界が強すぎる心は、大種を生じる）。

作用：言語を通して、己自身の意志を表現する。

現起（現象）：言語の因。

近因：心によって地界が生じる。

（二十二）色軽快性（**rūpassa lahutā**）

相：1、真実心生色の重くない事と遅鈍でない事。

2、真実時節生色の重くない事と遅鈍でない事。

3、真実食生色の重くない事と遅鈍でない事。

作用：これらの色法の重さを取り除く事。

現起（現象）：これらの色法が、軽快に生起し、また変化する事。

近因：軽快な色。

(二十三) 色柔軟性 (rūpassa mudutā)

- 相：1、真実心生色の堅固でない事と粗くない事。
2、真実時節生色の堅固でない事と粗くない事。
3、真実食生色の堅固でない事と粗くない事。

作用：これらの色法の堅固性と粗さを取り除く事。

現起（現象）：これらの色法の弱さのない状態。

近因：柔軟な色。

(二十四) 色適業性 (rūpassa kammaññatā)

- 相：1、真実心生色の適業性。
2、真実時節生色の適業性。
3、真実食生色の適業性。

作用：不適業性の除去。

現起（現象）：これらの色法の弱さのない状態。

近因：適業の色。

(二十五) 色集積 (rūpassa upacaya)

- 相：1、一期の生命の中の真実色法の生起の初め。
2、諸々の根が具足するまでの成長。

作用：色法の生起。

- 現起（現象）：1、始まり。
2、色が円満に生起する事。

近因：生起した色法。

(二十六) 色相続 (rūpassa santati)

相：諸々の根が具足した後、真実色法が、継続して不断に生起する事。

作用：随順（一つまた一つと）連続して結合する事。

現起（現象）：持続して、不断に生起する事。

近因：間断のない事、随順して結合した色法。

(二十七) 色老性 (rūpassa jaratā)

相：真実色法の成熟と老化。

作用：壊滅、死亡に至らしめる。

現起（現象）：色の自性を離れないながら、新性を失う事。

近因：成熟した色法。

(二十八) 色無常性 (rūpassa aniccatā)

相：真実色法が完全に壊滅する。

作用：真実色法を消失せしめる、すなわち、住時の色法が滅尽する。

現起（現象）：真実色法の滅尽。

近因：滅尽の色法。

識蘊品

(一) 識蘊 (viññāṇakkhandha)

相：目標（所縁）を識知する事；目標を「持つ（＝保持する）」事。

作用：目標を識知する事を先導する。

現起（現象）：名相続流が中断しない様に、後生心と接続する。

近因：名色（無色界ではただ名だけが存在する）

(二) 結生心 (paṭisandhi citta)

相：前世の臨終速行の目標を識知するかまたは、それを目標に取る。すなわち、業または業相または趣相。

作用：二世を連結する。すなわち、前世と後世の名相続流を連結する。

現起（現象）：二世の連結。すなわち、前世と後世の名相続の連結。

近因：心所と依処色に相応する。

(三) 有分心 (bhavaṅga citta)

相：前世の臨終速行の目標を識知する、またはそれを目標に取る。すなわち、業または業相または趣相。

作用：有（その意はすなわち、生命）の因。一期の生命の中の前後に、名相続流が中断しない様にする。

現起（現象）：心路過程を連結する。心路過程の間に間断がない様にする。

近因：心所と依処色に相応する。

(四) 五門引転：唯作眼界 (pañcadvārāvajjana = kiriya manodhātu)

相：色所縁などの目標を、識知するかまたはそれを目標に取る。眼識などの五識の前に生起する。

作用：一つの所縁に注意を払うかまたは省察する。言い換えれば、すなわち、古い目標、

すなわち、有分心の目標を捨棄して、もう一つ別の心境に転換する。

現起(現象)：目標に対面する(たとえば、色所縁)。

近因：有分断。

五門引転は、同時にすべての五所縁を識知する事はできない。故に、禅修行の時、禅修行者はそれぞれを個別に識別しなければならない。すなわち、

1、色所縁を目標にする引転の相、作用、現起(現象)と近因。

2、声所縁を目標にする引転の相、作用、現起(現象)と近因。

3、香所縁を目標にする引転の相、作用、現起(現象)と近因。

4、味所縁を目標にする引転の相、作用、現起(現象)と近因。

5、触所縁を目標にする引転の相、作用、現起(現象)と近因。

(五) 眼識(cakkhu viññāṇa)

相：色所縁を目標として識知するかまたはそれを所縁にする；眼所依処に依存して生起する。

作用：ただ色所縁を目標として識知するかまたはそれを目標として取る。

現起(現象)：色所縁に対面する。

近因：色所縁を目標にする五門引転心の滅尽。

(六) 耳識(sota viññāṇa)

相：声所縁を目標として識知するかまたはそれを所縁にする；耳所依処に依存して生起する。

作用：ただ声所縁を目標として識知するかまたはそれを目標として取る。

現起(現象)：声所縁に対面する。

近因：声所縁を目標にする五門引転心の滅尽。

(七) 鼻識(ghāna viññāṇa)

相：香所縁を目標として識知するかまたはそれを所縁にする；鼻所依処に依存して生起する。

作用：ただ香所縁を目標として識知するかまたはそれを目標として取る。

現起(現象)：香所縁に対面する。

近因：香所縁を目標にする五門引転心の滅尽。

(八) 舌識(jivhā viññāṇa)

相：味所縁を目標として識知するかまたはそれを所縁にする；舌所依処に依存して生起する。

作用：ただ味所縁を目標として識知するかまたはそれを目標として取る。

現起(現象)：味所縁に対面する。

近因：味所縁を目標にする五門引転心の滅尽。

(九) 身識 (kāya viññāṇa)

相：触所縁を目標として識知するかまたはそれを所縁にする；身所依処に依存して生起する。

作用：ただ触所縁を目標として識知するかまたはそれを目標として取る。

現起(現象)：触所縁に対面する。

近因：触所縁を目標にする五門引転心の滅尽。

(十) 領受 (sampaṭiccana) 果報意界

(眼門心路過程の領受を例に説明する)

相：色所縁を目標にして識知するかまたはそれを目標にする。眼識の後に生起する。

作用：色所縁を領受する。

現起(現象)：色所縁の状態を領受する。

近因：眼識の滅尽。

領受は、同一の心識刹那の中において、すべての五所縁を識知するのではない為、禅修行の時、禅修行者は、各々、その他の異なった所縁を目標にする領受を識別しなければならない。すなわち：

- 1、耳門心路過程の中において、声所縁を目標にする領受の相、作用、現起(現象)と近因。
- 2、鼻門心路過程の中において、香所縁を目標にする領受の相、作用、現起(現象)と近因。
- 3、舌門心路過程の中において、味所縁を目標にする領受の相、作用、現起(現象)と近因。
- 4、身門心路過程の中において、触所縁を目標にする領受の相、作用、現起(現象)と近因。

(十一) 推度 (santīraṇa) : 無因果報意識界

相：六所縁を識知するかまたはそれを目標にする。(注 45)

作用：目標を推度または審察する。

現起(現象)：目標の状態を推度 (= 推定) する。

近因：心所依処。

禅修行者は、それぞれに、異なった所縁を目標にする推度を識別しなければならない。

すなわち：

- 1、色所縁を目標にする推度の相、作用、現起(現象)と近因。
- 2、声所縁を目標にする推度の相、作用、現起(現象)と近因。
- 3、香所縁を目標にする推度の相、作用、現起(現象)と近因。
- 4、味所縁を目標にする推度の相、作用、現起(現象)と近因。
- 5、触所縁を目標にする推度の相、作用、現起(現象)と近因。
- 6、法所縁を目標にする推度の相、作用、現起(現象)と近因。

(十二) 確定：通一切唯作意識界

(vottapana=sādhāraṇa kiriya manoviññāḍadhātu)

相：六所縁の目標を識知するかそれを目標にする。(注 46)

作用：五門の目標を確定する；意門の目標を省察する。

現起(現象)：五門の目標の状態を確定する；意門の目標の状態を省察する。

近因：五門無因果報意識界(すなわち、推度)の滅尽；意門有分の滅尽。

眼門心路過程の確定

相：色所縁を目標として、それを識知するかまたはそれを目標にする。

作用：色所縁を喜ばしいものか、喜ばしくないものかなど等と確定する。

現起(現象)：色所縁の状態を確定する。

近因：推度心の滅尽。

禅修行者は、各々の、その他の所縁を目標にする確定について、識別しなければならない。すなわち；

- 1、耳門心路過程の中において、声所縁を目標にする確定の相、作用、現起(現象)と近因。
- 2、鼻門心路過程の中において、香所縁を目標にする確定の相、作用、現起(現象)と近因。
- 3、舌門心路過程の中において、味所縁を目標にする確定の相、作用、現起(現象)と近因。
- 4、身門心路過程の中において、触所縁を目標にする確定の相、作用、現起(現象)と近因。

(意門心路過程の意門引転に関しては後に説明する)

(十三) 一、速行(善速行) [javana (kusala javana)]

相：叱責されない；善果がある。

作用：不善を破る。
現起（現象）：清浄な状態。
近因：如理作意。

または、それは、叱責されるべき不善と対抗するが故に；
相：叱責されない。
作用：清浄。
現起（現象）：よい果報がある。
近因：如理作意。

（十三）二、速行（不善速行） [javana (akusala javana)]

相：叱責されるべき；悪果あり。
作用：無益；悪果を齎す。
現起（現象）：心の汚染がある状態。
近因：不如理作意。

または、不善法は確実に叱責されるべきであるが故に、
相：叱責を受ける。
作用：心の汚染がある状態。
現起（現象）：苦の悪果がある。
近因：不如理作意。

（十四）彼所縁 (tadārammaṇa)

（眼門心路過程を例に説明する）

相：色所縁を目標として識知するかまたはそれを目標に取る。
作用：速行の目標を目標に取る。
現起（現象）：速行の目標を目標に取る状態。
近因：速行の滅尽。

禪修行者は各々、耳門、鼻門、舌門、身門と意門心路過程の彼所縁の相、作用、現起（現象）と近因を識別しなければならない。

（十五）意門引転（意門心路過程） [manodvārāvajjana (manodvāra vīthi)]

すなわち、捨俱無因唯作意識界

相：六所縁を目標としてそれを識知するか、それを目標に取る。
作用：意門に出現した目標を省察する。

現起（現象）：意門に出現した目標の状態を省察する。

近因：有分断。

禅修行者は各々、異なった所縁を目標に取る意門引転を識別しなければならない。すなわち；

- 1、色所縁を目標に取る意門引転の相、作用、現起（現象）と近因。
- 2、声所縁を目標に取る意門引転の相、作用、現起（現象）と近因。
- 3、香所縁を目標に取る意門引転の相、作用、現起（現象）と近因。
- 4、味所縁を目標に取る意門引転の相、作用、現起（現象）と近因。
- 5、触所縁を目標に取る意門引転の相、作用、現起（現象）と近因。
- 6、法所縁を目標に取る意門引転の相、作用、現起（現象）と近因。

（十六）（阿羅漢）笑起心（*hasituppāda citta*）

相：六所縁を目標として識知するかまたはそれを目標に取る。

作用：功用を通して、阿羅漢をして、非殊勝な目標（たとえば、白骨鬼）に対して微笑する。

現起（現象）：微笑の状態に至る。

近因：心所依処。

註：この心は、ただ阿羅漢の心中にのみ生起する。故に、阿羅漢だけがそれを識別する事ができる。

（十七）死亡心（*cuti citta*）

相：前世臨終速行の目標を目標として取るか、または識知する。すなわち、業または業相または趣相。

作用：転生。

現起（現象）：転生の状態。

近因：1、もし、死亡心が速行の後に生起したならば、その近因は、速行の滅尽である。

2、もし、死亡心が、彼所縁の後に生起したならば、その近因は、彼所縁の滅尽である。

3、もし、死亡心が、有分の後に生起したならば、その近因は、有分の滅尽である。

注 45：《智慧の光》では、推度心とは、三種類の無因果報意識界の一と言う。それは、心路過程の中の推度と彼所縁において出現する事ができるし、また、結生、有分と死亡の三離路心に出現する事もできる（+と言う）。故に、それは法所縁を目標に取る事もできる。

注 46：《智慧の光》では、この確定は、「意門引転心」であるとする。「意門引転心」は、五門心路過程の中の確定、及び意門心路過程の中の意門引転に出現する事ができる。故に、それはすべての六所縁を目標に取る事もできる。

受蘊品

(一) 楽受 (sukha vedanā)

相：喜ばしい所縁を体験する。

作用：相応の法を増長する。

現起（現象）：身体の愉楽。

近因：身根、すなわち、身淨色。

(二) 苦受 (dukkha vedanā)

相：喜ばしくない所縁を体験する。

作用：相応の法が弱まる。

現起（現象）：身体が痛苦に遭遇する状態。

近因：身根、すなわち、身淨色。

(三) 悦受 (somanassa vedanā)

相：自性 (sabhāva) の喜ばしさを体験するまたは喜ばしい所縁を造作 (parikappa) するに至る。

作用：自性または造作を通して、喜ばしい所縁を体験する。

現起（現象）：心内が愉悦の状態。

近因：心と心所の輕安。

註：自性の喜ばしい所縁の本性は、喜ばしいものである。喜ばしい所縁を造作するに至るとは、すなわち、造作を通してようやく喜ばしさに変化することを言う。例えば自性が喜ばしくない魚醬も、煮炊きすれば喜ばしいものに変化する、等。

悦受のもう一つ別の定義：

相：衆生をして、相応する法において、所縁を楽しむ。

作用：相応の法が増長する。

現起（現象）：心内の愉悦。

近因：心と心所の輕安。

註：二番目の定義は、特に、刹那定、遍作定、近行定、安止定、観智相応の悦受（すなわち、心の樂受）を言う。一番目の定義は、一切の悦受に適応するが、しかし、貪根悦受の近因は、輕安では有り得ず、依処、所縁、相応法の三者の一である。

（四）憂受（*domanassa vedanā*）

相：自性の喜ばしくない様を体験するかまたは喜ばしくない所縁に至るべく造作する。

作用：自性の喜ばしくない様を体験するかまたは、喜ばしくない所縁を造作するに至る状態。

現起（現象）：心内において痛苦に遭う。

近因：心所依処。

註：喜ばしくない自性の所縁を体験して、喜ばしくないのは憂受である。外道は、自性において非常に喜ばしい所縁（たとえば、仏陀）を喜ばしくないと見做すが、これは喜ばしくない所縁に至る造作である。

外道の邪見と邪思惟によって、喜ばしい所縁が、喜ばしくない所縁に変化したのである。造作を通して、所縁を喜ばしくないものとして体験するのは憂受である。

（五）捨受（*upekkhā vedanā*）

相：自性の中捨を体験する事、または中捨に至る所縁を造作する事。

作用：あまり増長がない、または相応法の減弱。

現起（現象）：平静な状態。

近因：喜（*pīti*）の心がない、すなわち、喜不相応の心。

禪捨＝第三禪相応の中捨性（*jhānupekkhā=tatramajjhataṭṭā*）

相：中捨。

作用：殊勝なる樂であるが、相手にしない。

現起（現象）：殊勝なる樂に対して中捨を保つ。言い換えれば、それは相応する法が、殊勝なる樂に対して、中捨を保つ事。

近因：喜（*pīti*）を厭離する、すなわち、喜を制御する。

不苦不樂＝捨受＝第四禪の捨

相：喜ばしい所縁と喜ばしくない所縁に相反する、中程度の喜ばしい所縁を体験する。

作用：中捨に留まる。

現起（現象）：顕著でない受。

近因：樂が去る、すなわち、無樂の第四禪の近行。

想蘊品

想心所 (saññā cetasika)

相：心の中で、標記または記号を記し、目標の間の違いを知る。例えば<褐色」「金色」等々。

作用：1、以前実施した標記を通して、同じ所縁を認める。

2、記号を知る。心をして、今後、再度、「これはあれである」と認めせしめる。

(例えば、大工が板の上に印をつける様に)。

現起(現象)：1、心所が記号に注意を向ける；当該の記号または相に基づいて、目標に注意を向ける。

2、深く入らずに目標を取る；目標を長い時間取る事がない。

近因：目標の顕現。(たとえば、鹿が草でできた案山子を見る時、それを「人」だと思うなど)。



行蘊品

通一切心心所(sabba citta sādhāraṇa cetasika)

(5 + 受 + 想 = 7)

(一) 触 (phassa)

相：目標と接触する。

作用：目標と識との接触。

現起(現象)：1、依処、目標と識が集合して生起する。

2、受を生起せしめる。

近因：諸々の識の門に出現する境。

(二) 思 (cetanā)

相：相応の法を目標に向かう様に促すかまたは発動する。

作用：集合（相応の法が散乱しない様にする）。

現起（現象）：指導。

近因：1、依処。

2、目標。

3、触から作意までの最も顕著な相応法。

(三) 一境性 (ekaggatā) = 定 (samādhi)

相：1、首領としての役割。

2、目標において安定する事というもの、散乱しない事。

3、相応の法が目標に対して散乱しない因。

作用：俱生法の統一。

現起（現象）：1、平静；寂止。

2、智（果）が生起する因。

近因：（多くの）樂受。

(四) 命根 (jīvita)

相：相応の名法の維持。

作用：俱生名法をして、生起から壊滅の間、存在せしめる。

現起（現象）：俱生名法の存在を、壊滅まで維持する。

近因：維持されるべき名法。

(五) 作意 (manasikāra)

相：相応の法あ目標に向かう様に、「押す」かまたは指揮する。

作用：相応の法と目標を連結する。

現起（現象）：目標に対面する。

近因：目標。

六雑心所 (pakīṇṇaka cetasika)

(一) 尋 (vitakka)

相：心をして、目標に向けせしめる。

作用：目標に対して全面的に打つ (=ぶつかる)。

現起（現象）：心をして目標に向かわせる。

近因：目標（または目標+依処+触）

(二) 伺 (vicāra)

相：繰り返し目標を省察する。

作用：繰り返し相応の名法を、目標として置く。

現起（現象）：心を目標に留める。

近因：目標（または目標＋依処＋触）

(三) 勝解 (adhimokkha)

相：目標の確定。

作用：目標への猶豫の対治。

現起（現象）：確定または決定。

近因：もう一つ別の選択するべき目標。

(四) 精進 (vīriya)

相：対面しているどの様な苦にも、努力または忍耐する。

作用：相応の名法を支持するまたは安定させる。

現起（現象）：放棄しない。

近因：1、悚懼智 (saṃvega ñāṇa) 《増支部・一集》において、仏陀は以下の様に言う「悚懼智を有する者は、正確に精進する事ができる。」

2、精進する事

悚懼智

- 1、生 (=生まれる事) の厄難、すなわち、結生が生起した時の苦難。
- 2、老の厄難、すなわち、老いる苦難。
- 3、病気の苦。
- 4、死の苦。
- 5、悪趣に堕ちる苦。
- 6、過去の生死輪廻を基因とする苦。
- 7、未来の生死輪廻を基因とする苦。
- 8、食を求め苦、すなわち、今世において、食と富を求め苦。

この 8 項目を省察する時、愧と相応しつつ生起する所の智は、俱愧智 (sahottappa ñāṇa) であり、又の名を「悚懼」とする。この悚懼智を擁する者の多くは、非常に熱心に、善の修習、布施、持戒、禅修などなどに精進する。故に、悚懼智は、精進に導く近因である。

精進事 (vīriyārambha vatthu)

- 1、遠くに行く前。
- 2、遠くに行った後。
- 3、仕事の前。
- 4、仕事の後。
- 5、病気の時。
- 6、病気が治った後。
- 7、十分な食べ物が得られない時。
- 8、多くの食べ物を得た時。

ひとたび、上の 8 項目が発生した時に、もし、如理作意省察智 (yoniso manasikāra paccavekkhaṇa ñāṇa) があるならば、それは精進の因となる。それ所以に、精進事と言う。

(五) 喜 (pīti)

相：目標を好む。

作用：1、身体と心をして喜悅せしめる。

2、勝心生色を全身に散布する。

現起（現象）：身体と心の喜悅。

近因： 目標（または目標＋依処＋触）

(六) 欲 (chanda)

相：欲作（＝欲的行為）。

作用：目標を探す。

現起（現象）：目標を必要とする：目標を求める。

近因：求める所の目標。

14 不善心所(akusala cetasika)

(一) 痴 (moha)

相：1、心の盲目；究極法の真実性を如実に知見する方法を持たない。

2、あるいは、無智、すなわち、究極法の真実性を徹底的に知見することができない。

作用：1、究極法の真実性を徹底的に知見することができない。

2、究極法の真実性の隠蔽。

現起（現象）：1、間違った修行への誤導、または正確な修行をしない。

2、慧眼が盲目になる。

近因：不如理作意、すなわち、目標（究極法）を常、楽、我、浄などと作意する。

（二）無愧（ahirika）

相：悪行を嫌悪しない。または悪行に恥じない。

作用：悪を恥を伴わずに行う。

現起（現象）：悪を造（ナ）すにおいて、退かない。

近因：己自身を尊重しない。

（三）無慙（anottappa）

相：悪行を恐れない。

作用：懼れなしに悪をなす。

現起（現象）：諸々の悪を避けない。

近因：他人を尊重しない。

（四）掉挙（uddhacca）

相：心が平安でない（たとえば、風で漣が起こる水の様である）

作用：心が安定しない（たとえば、風に吹かれた旗の様である）

現起（現象）：混乱。

近因：散乱する心に対して、不如理作意を起す。

（五）貪（lobha）

相：目標を「私の」と執着する。

作用：目標に粘着する。

現起（現象）：目標を捨棄できない。

近因：諸々の結の法は、楽の味がすると思う。

（六）邪見（ditṭhi）

相：究極法を常、楽、我、浄であると、間違っ作意する。

作用：究極法を常、楽、我、浄であると、錯覚する。

現起（現象）：究極法を常、楽、我、浄であると間違っ理解する。

近因：聖者に会いたくない、たとえば、仏等々。

（七）慢（māna）

相：驕慢。

作用：己を高くする；「称赞」「奉る」に相応する名法。

現起（現象）：自我（＝エゴ）の顕示。

近因：見に不相応の貪。

（八）瞋（dosa）

相：粗野。

作用：1、（毒蛇の毒に当たった様な苦であり）己自身抗い、顛倒する。

2、または（毒蛇の毒に当たった様な苦であり）身体の抗いと顛倒。

3、（瞋の）心所依処または身・心を怒りで焼く；たとえば、森林の大火の如く。

現起（現象）：身・心の破壊；または己と他人の利益の破壊。

近因：9 または 10 種類の瞋恚の事柄（āghātavatthu）

9 または 10 種類の瞋恚の事柄

- 1、「過去において、彼は私に不利益を齎した」と思う時、怒りを覚える。
- 2、「現在、彼は私に不利益を齎しつつある」と思う時、怒りを覚える。
- 3、「未来において、彼は私に不利益を齎すであろう」と思う時、怒りを覚える。
- 4、「過去において、彼は私の愛する人に不利益を齎した」と思う時、怒りを覚える。
- 5、「現在、彼は私の愛する人に不利益を齎しつつある」と思う時、怒りを覚える。
- 6、「未来において、彼は私の愛する人に不利益を齎すであろう」と思う時、怒りを覚える。
- 7、「過去において、彼は私の敵に利益を齎した」と思う時、怒りを覚える。
- 8、「現在、彼は私の敵に利益を齎しつつある」と思う時、怒りを覚える。9、「未来において、彼は私の敵に利益を齎すであろう」と思う時、怒りを覚える。
- 10、怒りを覚える必要のない事柄に対して、怒りを覚える、すなわち、無理の怒り（aṭṭhānakopa）。

無理の怒りとはすなわち、何等の理由もなく怒る事である。《主張義註》では、瞋行者（dosacarita）について、言及している。

- 1、「雨が降る」と言って、怒る。
- 2、「雨が降らない」と言って、怒る。
- 3、「天気が熱い」と言って、怒る。
- 4、「天気が熱くない」と言って、怒る。
- 5、「風が吹いた」と言って、怒る。
- 6、「風が吹かない」と言って、怒る。
- 7、掃除をしたくないので、地面に落ちている落ち葉に怒る。
- 8、風が吹いて、己の着る袈裟が乱れたと言って、怒る。
- 9、不注意で、切り株に躓いた時、切り株に対して怒る。

《根本疏鈔》（Mūlajīkā）は、別の 9 種類の＜無理な＞怒りに言及している。

- 1、「過去において、彼は一度も私に利益を齎した事がない」と言って、怒る。
- 2、「現在、彼は一度も私に利益を齎さない」と言って、怒る。
- 3、「未来において、彼は一度も私に利益を齎さないであろう」と言って、怒る。
- 4、「過去において、彼は一度も私の愛する人に利益を齎した事がない」と言って、怒る。
- 5、「現在、彼は一度も私の愛する人に利益を齎さない」と言って、怒る。
- 6、「未来において、彼は一度も私の愛する人に利益を齎さないであろう」と言って、怒る。
- 7、「過去において、彼は私の敵に損失を与えたことがない」と言って、怒る。
- 8、「現在、彼は私の敵に損失を与えない」と言って、怒る。
- 9、「未来において、彼は私の敵に損失を与えないであろう」と言って、怒る。

（九）嫉妬（issā）

相：他人の成就を嫉妬する。

作用：他人の成就を喜ばない。

現起（現象）：他人の成就を受け入れられない；他人の成就に背を向ける。

近因：他人の成就。

（十）慳（macchariya）

相：己自身のすでに得たか、または得るべき利益を隠蔽する。

作用：己自身の利益を、他人と分かち合う事に耐えられない。

現起（現象）：1. 怨恨と吝嗇（己の得たものを他人と分かち合う事を楽しめない）。
2. 楽しくない、喜ばない、苦痛である。

近因：己自身の得るもの、得たもの。

（十一）後悔（悪作、kukkucca）

相：後悔。

作用：すでに造（ナ）した悪を後悔する、または実行しなかった善に関して後悔する。

現起（現象）：不斷に思い出して後悔する、または心において不快を感じる。

近因：すでに造（ナ）した悪及びいまだ実践していない善。

（十二）昏沈（thīna）

相：努力しない；精進しない。

作用：精進の除去。

現起（現象）：心の沈潜、または物事に取り組む精進力の減衰。

近因：怠惰な所縁が不如理作意を起すに至る。

(十三) 睡眠 (middha)

相：心所の不適業。

作用：意門の閉塞、または相応法の沈滞。

現起（現象）：1、目標からの退散。
2、昏々と眠る。

近因：怠惰な所縁が不如理作意を起すに至る。

(十四) 疑 (vicikicchā)

相：懷疑（八事に対する懷疑）。

作用：（八事に対して）動揺する。

現起（現象）：1、（八事に対して）躊躇して決められない。
2、多くの立場がある。

近因：八事に懷疑して、不如理作意を起す。

以下の八事に懷疑する；

- 1、真実の仏。
- 2、真実の法。
- 3、真実のサンガ。
- 4、戒定慧の三学。
- 5、過去世、すなわち、過去の五蘊。
- 6、未来世、すなわち、未来の五蘊。
- 7、過去世と未来世、すなわち、過去と未来の五蘊。
- 8、縁起。

二十五美心所 (sobhaṇa cetasika)

(一) 信 (saddhā)

相：1、信じるべき事柄 (saddheyya vatthu) に確信を持つ。

2、信じるべき事柄に信仰（＝敬う心）と確信を持つ。

作用：1、相応の名法が、信じるべき事柄を明確に知っている事。

2、己自身と相応する名法に関して、信じるべき事柄に確信を持ち、後退したり、退避したりしない。

現起（現象）：1、相応する名法が信じるべき事柄に迷わない。

2、疑いがなく、不如理作意がなく、及び信じるべき事柄を迷わず決定

し、または信じるべき事柄に決定を下すことができる。

近因：信じるべき事柄。

(二) 念 (sati)

相：1、相応の法が目標（身、受、心、法の四念処）に対して、念々として、明瞭で、見失わない。（ひょうたんの様に浮遊しないで、石が水中に沈む様である）

2、全心に善行に投入する。

作用：目標を見失う事になる放逸を取り除く；目標を消失させない。

現起（現象）：1、心を守る、または禅修の目標を守る。

2、心が目標に直面している状態。

近因：1、強くて力のある想。

2、または身念処等々。

(三) 慚 (hiri)

相：悪行に嫌悪を感じる。

作用：悪を造（ナ）す事に恥じる。

現起(現象)：諸々の悪を避ける。

近因：己自身を尊重する。

(四) 愧 (ottapa)

相：悪行を恐れる。

作用：悪を造（ナ）すのを恐れる。

現起(現象)：諸々の悪を避ける。

近因：他人を尊重する。

(五) 無貪 (alobha)

相：1、心は目標（所縁）を貪欲に求めない。

2、心は目標に執着しない（たとえば、水玉が蓮の葉に粘着しない様に）。

作用：目標を「私の」または「私のもの」として執着しない。

現起(現象)：目標に執着しない。

近因：目標（または依処+目標+触）、または如理作意。

(六) 無瞋 (adosa)

相：1、粗野ではない。

2、対抗しない（たとえば、事に臨んで、友人の意見に従う）

作用：1、怨恨を除く。

2、怒りの火を除く。

現起(現象)：満月の如く、清らかで祥和（＝安らぎ）である。

近因：目標（または依処＋目標＋触）；または如理作意。

(七) 中捨性 (tatramajjhataṭṭā)

相：心と心所をバランスさせる。

作用：1、過剰または不足を防止する。

2、偏差を取り除く（心が昏沈睡眠または傲慢に傾くのを防止する）

現起(現象)：中捨。

近因：相応の名法（または依処＋目標＋触）；または如理作意。

(八) 身軽安 (kāya passaddhi)

(九) 心軽安 (citta passaddhi)

相：不安な心と心所を平静にする、または不安心所と心の平静。

作用：心と心所の不安の打破。

現起（現象）：心所と心の静けさ、または心所と心の軽安と不転動。

近因：心所と心。

(十) 身軽快性 (kāya lahutā)

(十一) 心軽快性 (citta lahutā)

相：心所と心の重さを取り除く。

作用：心所と心の重さの打破。

現起（現象）：心と心所が重くない事。

近因：心所と心。

(十二) 身柔軟性 (kāya mudutā)

(十三) 心柔軟性 (citta mudutā)

相：心所と心の硬さの除去。

作用：心所と心の硬さの打破。

現起（現象）：心所と心の、目標に対する無抵抗と無障害。

近因：心所と心。

(十四) 身適業性 (kāya kammaññatā)

(十五) 心適業性 (citta kammaññatā)

相：心所と心の、善作業への不適応性の除去。

作用：心所と心の、善作業への不適応性の打破。

現起（現象）：心所と心が、ある所縁を目標に取る事に成功すること。

近因：心所と心。

(十六) 身練達性 (kāya paguññatā)

(十七) 心練達性 (citta paguññatā)

相：心所と心に疾と病のない事。

作用：心所と心の疾病の除去。

現起（現象）：心所と心に、全くの瑕疵がないこと。

近因：心所と心。

(十八) 身正直性 (kāyujukatā)

(十九) 心正直性 (cittajukatā)

相：心所と心の正直（＝まっすぐな事）性。

作用：心所と心の欺瞞性の除去。

現起（現象）：心所と心の狡猾でない事。

近因：心所と心。

三離心所 (virati cetasika)

(二十) 正語 (sammā vācā)

相：悪語を犯さない。

作用：悪語から遠く離れる。

現起（現象）：悪語を造（ナ）さない、すなわち、悪語を戒する。

近因：信、慙、愧、知足などなど。

(二十一) 正業 (sammā kammanta)

相：身体において悪行を犯さない。

作用：身体における悪行を遠く離れる。

現起（現象）：身体における悪行を造（ナ）さない。

近因：信、慙、愧、知足などなど。

註：状況に応じて、「殺生」、「偷盜」または「邪淫」を「身体における悪行」と置き換える。

(二十二) 正命 (sammā ājīva)

相：邪命を犯さない。

作用：邪命から遠く離れる。

現起（現象）：邪命を造（ナ）さない。

近因：信、慙、愧、知足などなど。

梵住心所 (brahmavihāra cetasika)

四個の梵住心所がある。すなわち、慈、悲、喜、捨である。それはまた、四無量 (appamañña) とも言う。この四個の内、慈は無瞋心所から来ているが、しかし、どの無瞋心所でも、みな、慈であるとは限らない。どの無瞋心所でも、皆、慈であるとは限らないという事から、ここにおいて、慈（特に慈心ジャーナ）について説明する。

慈 (mettā)

相：諸々の有情の幸福と利益を願い、尽力する事。

作用：諸々の有情の利益を齎す。

現起（現象）：瞋恚怨恨を取り去る。

近因：如理作意によって有情の長所を見る。

(二十三) 悲 (karuṇā)

相：諸々の有情の苦痛を取り去りたいと思う。

作用：他人の苦しみを見るに堪えない。

現起（現象）：残忍でない事、または諸々の有情に対して残忍でない事。

近因：苦難の中にある有情が帰依（＝拠り所）のない事を如理作意によって見る。

(二十四) (随) 喜 (muditā)

相：幸福な有情に随喜する；裕福な、成功していて、楽しい有情に随喜する。

作用：他人の成就に嫉妬しない。

現起（現象）：他人の成就に嫌悪しない、または嫌悪を取り除くに至る。

近因：有情の成就を見る事。

捨梵住 (upekkhā=中捨性)

相：有情に対して、中捨である事。

作用：諸々の有情を平捨において、対応する、怨恨もなく、好ましく思う事もない。

現起（現象）：諸々の有情の怨恨と愛着を減ずる。

近因：自業正見智 (Kammassakatā sammādiṭṭhiñāṇa)。

この智は、諸々の有情が、己自身の造（ナ）した業を、己の財産として擁している事を見て、他人である人々が、その人にして上げられる事はない、と思う事。

1、楽しさ。（その意は、すなわち、有る人がその人に慈愛を散布してあげたとしても、それでその人が楽しくなれる事はない、という事）。

2、苦痛から離脱する事。（彼は、他人が悲心観を修習したからと言って、苦痛から逃れることはできない）。

3、已にある財産を減らさない様にする。（彼が擁する財産は、他人が喜心観を修習し、発願したからと言って、減らないという事はない）。

（二十五）無痴（paññā=慧根=慧）

相：1、究極法の自性相と共相を、徹底的如実知見すること。

2、何等の瑕疵なく、究極法を徹底的に知見する。例えば矢が的の中心を射るが如くに。

作用：ランプが目標を照らすが如くである。

（その意は、目標を隠蔽する暗黒愚痴を駆除する事）。

現起（現象）：目標に対して迷いが無い。（よいガイドと共に森を歩く様なもの）。

近因：定。（仏陀は言う、定のある者は、諸法を如実知見することができる、と）。

（この種の定は、観智の近因である）。



縁起品

（一）無明（avijjā）

相：究極法（paramattha dhamma）の真実性を知らない事。

言い換えれば、すなわち、究極法を智見する智と反対のもの。

作用：相応の法と無明の人間を、愚かにならせしめる。

現起（現象）：究極法の真実性を覆う。

近因：四漏（āsava）。注 47

（二）行（saṅkhāra）

相：集合して生起する；準備（業を造（ナ）す）。

作用：結生が生起する様に造作する。言い換えれば、すなわち、果（識と名色）を集合する、または果（識と名色）を生起せしめるに至る。

現起（現象）：それは、思として、禅修行者の智に顕現した時に、もっとも顕著である。

近因：無明。

(三) 識 (viññāṇa)

相：目標を識知するかまたは取る。

作用：名色法の首領である。

現起（現象）：前世と連結した状態。

近因：行、または依処色と目標。

(四) (A) 名 (nāma=心所)

相：目標に向かう、傾向する。

作用：相互に識と相応する。

現起（現象）：それぞれに分ける事ができない。

近因：識。

(四) (B) 色 (rūpa)

相：変化する。

作用：色法の分散、この間に結合がないが故に。（それらには相応の相がない。

sampayoga lakkhaṇa）。

現起（現象）：無記 (abyākata)。すなわち、非善、非不善；または目標を取れない状態。

近因：識。

(五) 六処 (saḷāyatana)

相：衝撃。または心と心所の増益 (āya)。

作用：見る、聞く、嗅ぐ、味わう、触れる、知る。

（これは一種の比喩に過ぎない。各々の処門処において生起する識。《大疏鈔》と《随疏鈔》参照の事）。

現起（現象）：五識として、意界と意識界に出入りする処門と依処。

近因：名色。

眼処 (cakkhāyatana)

相：色所縁が衝撃するのを受けける準備をする、または眼門と意門心路過程の心と心所の増益。

作用：色所縁を見る。すなわち、色所縁を取る。（《大疏鈔》参照の事）現起（現象）：眼識の依処。眼門心路過程名法が出入りする処門。

近因：名色。

耳処 (sotāyatana)

相：声所縁が衝撃するのを受ける準備をする、または耳門と意門心路過程の心と心所の増益。

作用：声所縁を聞く。すなわち、声所縁を取る。

現起（現象）：耳識の依処。耳門心路過程名法が出入りする処門。

近因：名色。

鼻処 (ghāṇāyatana)

相：香所縁が衝撃するのを受ける準備をする、または鼻門と意門心路過程の心と心所の増益。

作用：香所縁を嗅ぐ、すなわち、香所縁を取る。

現起（現象）：鼻識の依処。鼻門心路過程名法が出入りする処門。

近因：名色。

舌処 (jihvāyatana)

相：味所縁が衝撃するのを受ける準備をする、または舌門と意門心路過程の心と心所の増益。

作用：味所縁を味わう。すなわち、味所縁を取る。

現起（現象）：舌識の依処。舌門心路過程名法が現起（現象）

近因：名色。

身処 (kāyāyatana)

相：触所縁が衝撃するのを受ける準備をする、または身門と意門心路過程の心と心所の増益。

作用：触所縁に触れる。すなわち、触所縁を取る。

現起（現象）：身識の依処。身門心路過程名法が出入りする処門。

近因：名色。

意処 (manāyatana)

相：法所縁が衝撃するのを受ける準備をする、または意門心路過程の心と心所の増益。

作用：法所縁の識知。すなわち、法所縁を取る。

現起（現象）：意識の依処。意門心路過程名法の出入りする場所。

近因：名色。

註：五処色は、各々の所縁色を取らない。色法たちは、所縁の法を取らない。「作用」の部分において言及した所の「見る」「聞く」「嗅ぐ」「触る」は、それに似た言い方を採用したものである（kāraṇūpacāra）。

たとえば、眼処（＝眼依処色＝眼門）は、色所縁をみた眼識心と相応の名法たちが依存する所の縁分に過ぎない（依処は依所縁を前生する、または依処の前に依処縁が生じる）。果報法眼識心が、色所縁を見る作用の因法は、眼浄色である。耳処、鼻処、舌処と身処もまたこの様に理解する事。

(六) 触 (phassa)

相：目標との接触。

作用：目標との接触。

現起（現象）：依処、目標と識の三者が集合して生起する。

近因：六処。

眼触 (cakkhu samphassa)

相：色所縁との接触。

作用：色所縁との接触。

現起（現象）：眼所依処、色所縁と眼識の三者が集合して生起する。

近因：眼処。

耳触 (sota samphassa)

相：声所縁との接触。

作用：声所縁との接触。

現起（現象）：耳所依処、声所縁と耳識の三者が集合して生起する。

近因：耳処。

鼻触 (ghāna samphassa)

相：香所縁との接触。

作用：香所縁との接触。

現起（現象）：鼻所依処、香所縁と鼻識の三者が集合して生起する。

近因：鼻処。

舌触 (jihvā samphassa)

相：味所縁との接触。

作用：味所縁との接触。

現起（現象）：舌所依処、味所縁と舌識の三者が集合して生起する。

近因：舌処。

身触 (kāya samphassa)

相：触所縁との接触。

作用：触所縁との接触。

現起（現象）：身所依処、触所縁と身識の三者が集合して生起する。

近因：身処。

意触 (mano samphassa)

相：法所縁との接触。

作用：法所縁との接触。

現起（現象）：意門、法所縁と意識の三者が集合して生起する。

近因：意処。

註：意触の範囲は非常に大きい。双五識心相応の五触以外に、その他の心路過程と離心路過程の中のすべての相応する触所縁はみな、意触であり、六所縁はみな（+縁として）取られる。前に述べたは、法所縁（+を縁に取る）意触をのみ取り上げたものである。

《相応部》を註解した《Pahāna》では、経典を解釈するに、有分心相応の触と意門引転相応の触もまた意触であるという。故に、先に、結生意触と有分意触を修習し、残りの意触も修習する事ができれば尚良い。経典では、意触は、果報輪転の中の触心所であると言ひ、故に、果報輪転の触心所は、修習しなければならない主要な意触である、という事になる。

(七) 受 (vedanā)

相：目標の感覚を体験する。

作用：目標の感受を受用する。

現起（現象）：楽と苦の状態。

近因：触。

眼触生受

相：色所縁の感覚を体験する。

作用：色所縁の感受を受用する。

現起（現象）：楽の状態（善果報眼触眼生受）；

苦の状態（不善果報眼触眼生受）。

近因：眼触。

註：眼触生受とは、色所縁を目標に取る眼門心路過程と意門心路過程の中の、一つひとつの刹那の中の善果報受取と、不善果報受取を、所縁とする。耳触生受から身触生受までもまた、同様に理解する事。

耳触生受

相：声所縁の感覚を体験する。

作用：声所縁の感受を受用する。

現起（現象）：楽の状態（善果報耳触生受）；

苦の状態（不善果報耳触生受）。

近因：耳触。

鼻触生受

相：香所縁の感覚を体験する。

作用：香所縁の感受を受用する。

現起（現象）：楽の状態（善果報鼻触生受）；

苦の状態（不善果報鼻触生受）。

近因：鼻触。

舌触生受

相：味所縁の感覚を体験する。

作用：味所縁の感受を受用する。

現起（現象）：楽の状態（善果報舌触生受）；

苦の状態（不善果報舌触生受）。

近因：舌触。

身触生受

相：触所縁の感覚を体験する。

作用：触所縁の感受を受用する。

現起（現象）：楽の状態（善果報身触生受）；

苦の状態（不善果報身触生受）。

近因：身触。

意触生受

相：法所縁の感覚を体験する。

作用：法所縁の感受を受用する。

現起（現象）：楽の状態（善果報意触生受）；

苦の状態（不善果報耳触生受）。

近因：意触。

註：経典では、六種類の触受はみな、果報受であると言う。故に、その中の一個を取って（+修習してもよいが）、更によいのは、すべての果報受を取って（+修習する事である）。

（八）愛 (taṇhā)

相：苦の因。

作用：目標と界を、非常に好む。

現起（現象）：心または個人が、目標と界に不満足である事。

近因：受。

註：愛は集聖諦である、すなわち、苦聖諦（五取蘊）が生起する因と縁でる。

色愛

相：苦の因。

作用：非常に色所縁が好きである。

現起（現象）：心または個人が色所縁において不満足である。

近因：眼触生受または眼触縁受。

声愛

相：苦の因。

作用：非常に声所縁が好きである。

現起（現象）：心または個人が声所縁において不満足である。

近因：耳触生受または耳触縁受。

香愛

相：苦の因。

作用：非常に香所縁が好きである。

現起（現象）：心または個人が香所縁において不満足である。

近因：鼻触生受または鼻触縁受。

味愛

相：苦の因。

作用：非常に味所縁が好きである。

現起（現象）：心または個人が味所縁において不満足である。

近因：舌触生受または舌触縁受。

触愛

相：苦の因。

作用：非常に触所縁が好きである。

現起（現象）：心または個人が触所縁において不満足である。

近因：身触生受または身触縁受。

法愛

相：苦の因。

作用：非常に法所縁が好きである。

現起（現象）：心または個人が法所縁において不満足である。

近因：意触生受または意触縁受。

註：過去の五種因（無明、愛、取、行及び業）が現在の五種果報（色、受、想、行と識）を造る。現在の五種因は、未来の五種果報を造る。現在の愛は、未来果報の苦蘊の生起の因縁であり、現在の五取蘊の出現は、完全に、過去世の愛の因縁に基づく。故に、現在の愛は、未来世の果報の生起する因縁であり、過去世の愛は、この一世において、果報が生起する因縁である。この点に注意する事。愛と相応する因法たちと、相応果報法たちの因果縁起の修行の法門は非常に重要である事を理解しなければならない。

（九）取（upādāna）

相：目標を執取する。

作用：[愛見（taṇhādītṭhi）]によって、目標に錯誤的に注意した後、目標を放棄しない。

現起（現象）：1、強烈な愛に属する（欲取）。

2、邪見（その他の三種類の取）。

近因：愛。

四種類の取：

1、欲取：極めて強烈に五根所縁と界（すなわち、欲界）を執取する。

2、見取：極めて強烈に種々の邪見（我論見と戒禁取見を除く）を執取する。

3、戒禁取：極めて強烈に邪行を執取する。例えば犬の真似をする、牛の真似をする等、この種の修行が己自身の生死輪廻からの解脱、己自身の煩惱の浄化に有用であると思う事。

4、我論取：極めて強烈に我論を執取する。すなわち、至上我（＝創造主）と靈魂我（＝被創造者）（＋の存在に執着する）。

（十）有 (bhava)

註：業有と生有に関して、註釈では、それらを一体化して解説している。智の成熟していない者の便利の為、ここでは、それらを個別に識別する方法を説明する：

（A）業有 (kamma bhava)

相：業である。すなわち、業の生起。

作用：生有を引き起す。

現起（現象）：善と不善法。

近因：取。

（B）生有 (upapatti bhava)

相：業果；業の果、すなわち、業果の生起。

作用：業によって生起する。

現起（現象）：無記果報（不善不悪）。

近因：取。

修法の注意点：

輪廻は非常に長いので、たまたま善業が生起して、善道に転生する事もあり、またたまたま不善業が生起して、悪道へ転生する事も多い。善業には、それが生起する理由があり、善果報は有を生じる；不善業もまたそれが生起する理由があり、不善果報は有を生じる。この二種類の状況は、共に出現する。輪廻が終焉していないならば、未来においても、状況は同様である。

禪修行者は己自身の輪廻の中で出現した事のある善業有と不善業有、今まさに出現しているもの、未来において出現するものに基づいて「善業有が生起するが故に、善果報が有を生じる；不善業有が生起するが故に、不善果報が有を生じる」を修習しなければならない。

（十一）生 (jāti)

相：一期の生命の中において、諸々の蘊の初めに生起する。

作用：与えられたものの様である（輪転する有情は、諸々の蘊を具備する一世を生きる。）

現起（現象）：（前世とは間隔を置かず）今世の諸々の蘊の生起の状態。または種々の苦果の生起。

近因：業有。

註：一期の生命の中に、最初に生起した諸々の蘊は結生蘊と言う。故に、この註釈においては、生 (jāti) の相は、最初に生起する、と言う。

(十二) (A) 老 (jarā)

相：一期の生命の中において、諸々の蘊の成熟と老化。

作用：死亡に向かう。

現起（現象）：青春を失う。

近因：生。

(12) (B) 死 (maraṇa)

相：一世の諸々の蘊を交換する。

作用：1、一世の諸々の蘊を分ける；分けせしめる。

2、一世の諸々の蘊の終結と分離。

現起（現象）：今世と分離した状態。

近因：生。

註：この、生の縁ありて、老と死という部分は、概念諦と究極諦があり、この二種類は別々に修習されなければならない。

概念諦の意味：一個の生命の中において、結生は生であり、老化は老、死亡は死である。究極諦の意味：すべての名色法の生は生、住は老、滅は死である。

愁 (soka)

相：(+心の) 内部が燃焼している、または心が愁を發する。

作用：徹底的に心を燃焼せしめる。

現起（現象）：親戚を失ったなどの境地において、不断に愁心を發する。

近因：不可喜 (=喜ばしくない、以下同様) の目標。例えば、親戚を失う等。

悲 (parideva)

相：不断に哭く；声を出して泣く。

作用：功德と過失を言い続ける。

現起（現象）：悲の感情を有する、または心の不安定と旋転、または混濁した心。

近因：不可喜の目標。例えば、親戚を失う等。

苦 (dukkha) =身苦 (kāyika dukkha) すなわち、「苦俱身識」相応の「苦」は苦である。(その苦受を選んで識別する)

相：身体をして苦に遭わせしめる。

作用：智慧の欠乏する者の内心を不快にする。

現起（現象）：身体の痛苦。

近因：その苦を齎す所の不可喜の目標。

憂 (domanassa) =心所の苦 (cetasika dukkha)

相：心をして、苦に遭わせしめる。

作用：瞋相応の心を騒がせる。

現起（現象）：心内の苦痛。

近因：この憂を齎す所の不可喜の目標。

悩 (upāyāsa)

親戚を失ったなどの有情が、極度の内心の苦痛を感じる瞋恚は悩と言う。（これはすなわち、それは憂受 (domanassa vedanā) ではない）、という事である）。ある種の論師は、それは行蘊 14 不善心所の内の一であると言う。

相：内心の徹底的な燃焼。または不正常的に、失った親戚に執着する等。

作用：悲嘆にくれる。

現起（現象）：身と心を目標に投入せしめる。例えば失った親戚等；または身と心を目標に投入する、たとえば、失った親戚等。

近因：不可喜の目標。例えば失った親戚。

注 47：《智慧の光》では、四漏を欲漏、有漏、邪見漏と無明漏としている。



第十二章道非道智見清淨義釈

Maggāmagga Ñāṇadassana Visuddhi Nīddesa

思惟智 (Sammasaṇāṇa)

この観智は、正確で誤りなく、無随煩惱 (upakkilesa) なる、恒古 (=古くから変わらずにある) の観道であり、それはすなわち、恒古の正道であり、聖道の前に生起する所の前分道 (pubabhāgamagga) である。十随煩惱 (たとえば、光明) は、恒古なる正観の道でもなく、聖道の前に生起する前分道でもない。あの、如実に了解し、かつ知見する所の、恒古なる正観前分道、及び非道 (非恒古正観前分道) の観智は、道非道智見清淨と呼ばれ、すなわち、随煩惱の汚染を受けない清淨の観智であり、「これは正道であり、あれは正道ではない」と、知見するものである。(《清淨道論》)。

聚思惟または理法観

道非道智見清淨を成就したいと思う禅修行者は、先に、聚思惟 (kalāpa sammāsana) と呼ばれる所の理法観 (naya vipassanā) を修習しておかねばならない。

聚思惟：全体的に、または一組ずつ、順序に従って、過去、現在、未来、内、外等の名色の三相を観照する観法である。これは古印度の大長老が採用した呼称である。

理法観：仏陀は、完全なる三輪転法の教示 (Teparivattadhamma desana) の中において、たとえば、《無我相經》 (Anattalakkhaṇa Sutta) の中に言う様に (+以下の様に述べている) :

Yaṃ kiñci rūpaṃ atītānāgatapaccuppanna ṃ ...

五取蘊 (すなわち、色蘊、受蘊、想蘊、行蘊と識蘊) には、11 の形式が存在しており、それはすなわち、過去 (atīta)、未来 (anāgata)、現在 (paccuppanna)、内 (ajjhatta)、外 (bahiddha)、粗い (oḷārika)、微細 (sukhuma)、劣る (hīna)、優れる (paṇīta)、遠い (dūra)、近い (santika) である。

以下の三個の方法に基づいて、五蘊をグループに分けた後、それらの三相観ずる事によって観の修習とするのを、理法観と言う :

- 1、それらを五個のグループに分ける (すなわち、五蘊法) 。
- 2、それらを 12 個のグループに分ける (すなわち、12 処法) 。

3、それらを 18 個のグループに分ける（すなわち、18 界法）。
理法観は、スリランカの大長老が採用した呼称である。

観智の目標（所縁）

- 1、六処門において、目標と共に生起した六法：眼門法、耳門法、鼻門法、舌門法、身温法と意門法。
- 2、五蘊：色蘊、受蘊、想蘊、行蘊と識蘊。
- 3、六門：眼門、耳門、鼻門、舌門、身門と意門。
- 4、六所縁（目標）：色所縁、声所縁（＝音所縁。以下同様）、香所縁、味所縁、触所縁と法所縁。
- 5、六識：眼識、耳識、鼻識、舌識、身識と意識。
- 6、六触：眼触、耳触、鼻触、舌触、身触と意触。
- 7、六受：眼触生受、耳触生受、鼻触生受、舌触生受、身触生受と意触生受。
- 8、六想：色想、声想、香想、味想、触想と法想。
- 9、六思：色思、声思、香思、味思、触思と法思。
- 10、六愛：色愛、声愛、香愛、味愛、触愛と法愛。
- 11、六尋：色尋、声尋、香尋、味尋、触尋と法尋。
- 12、六伺：色伺、声伺、香伺、味伺、触伺と法伺。
- 13、六界：地界、水界、火界、風界、空界と識界。
- 14、十遍処（10 kasiṇa）。
- 15、32 身分（32 koṭṭhāsa）。
- 16、12 処（12 āyatana）。
- 17、18 界（18 dhātu）。
- 18、22 根（22 indriya）。
- 19、三界（3 dhātu）：すなわち、欲界、色界と無色界。
- 20、九有（9 bhava）：すなわち、欲有、色有、無色有、想有、無想有、非想非非想有、一蘊有（＝無想有）、四蘊有（＝四無色界）、五蘊有（＝11 欲界と 15 色界）。
- 21、四色界ジャーナ。
- 22、四無量心：慈、悲、喜、捨。
- 23、四無色界ジャーナ。
- 24、12 縁起支。

三種類の、度する（＝渡する、以下同様）に値する人、及び、得度する（＋資格）を具備する人がいる。仏陀は種々の方法によって、観禪（たとえば、五蘊法等）を教えた

その目的は、この三種類の人間を度するためであった。もし、人が、五蘊法、または 12 処法、または 18 界法によって、観を修するならば、その人は、阿羅漢果を証悟することができる。もし、人が、どれか一法によって、観を修して、その願（すなわち、阿羅漢果）を実現させる事ができるならば、仏陀は何故に、これほど多くの種類の方法を教えたのか？なぜに一種類だけ教えないのか？その理由は、仏陀のこの教えの目的は、三種類の有情を度する為なのであった。

三種類の度するに値する有情の違いは、以下の如くである：

区別その一：

- 1、色疑者（rūpa sammūḥhā）、色に対して、愚痴（＝無知で愚かな事、以下同様）な者。
- 2、無色疑者（arūpa sammūḥhā）、名に対して、愚痴な者。
- 3、二疑者（ubhaya sammūḥhā）、名色の二者に対して、愚痴な者。

区別その二：

- 1、利根者（tikkhindriyā）。
- 2、中根者（majjhindriyā）。
- 3、鈍根者（mudindriyā）。

区別その三：

- 1、簡略を好む者（sankhittaruci）。
- 2、中等を好む者（majjhimaruci）。
- 3、詳細を好む者（広説を好む者、vitthāraruci）。

仏陀は種々の方法に基づいて教示したが、以下の三種類の有情を度する為であった。

1、仏陀は五蘊法によって、観禪を教えた（たとえば、《無我相經》）が、それは以下の有情を度する為であった：

- i、名法に対して愚痴である無色疑者。
- ii、利根者。
- iii、簡略を好む者。

2、仏陀は 12 処法によって、観禪を教えたが、それは以下の有情を度する為であった：

- i、色法に対して愚痴な色疑者。
- ii、中根者。
- iii、中等を好む者。

3、仏陀は 18 界法によって、観禪を教えたが、それは以下の有情を度する雨であった：

- i、名法の二者（マ）に対して愚痴な二疑者。
- ii、鈍根者。
- iii、詳細を好む者。

また、根に基づいて、観禪を教える法もあった。それは禅修行者が無我相の観照に便利な様にと（+いう教えであった）。唯一、正見智によって、徹底的に、以下の四項を知見する時にのみ、上に述べた種々の観法は、道、果と涅槃の利益を齎することができる。

- 1、転起（pavatti）：五蘊の生起、すなわち、苦諦。
- 2、起因（pavatti hetu）：苦諦の因。
- 3、滅（nivatti）：苦諦と集諦の滅。
- 4、滅因（nivatti hetu）：苦諦と集諦の滅へ趣く行道。

正見智でもって、己自ら、上に述べた四項を徹底的知見していないならば、道果と涅槃の利益を獲得することはできない。故に仏陀は、諦法と縁起法によって、観禪を教え、人々がそれらを体験、証悟できる様にしたのである。

注意

究極法（paramattha）は四種類ある。すなわち、心、心所、色と涅槃である。それら四者の中において、心、心所と色法は、無常究極法であり、苦究極法であり、無我究極法である；涅槃はすなわち、常究極法であり、楽究極法であり、無我究極法である。

常、楽、無我究極法である涅槃（第四番目の究極法）を証悟したいと思う善者は、心、心所と色法（第一、第二、第三の究極法）とそれらの因の三相（すなわち、無常・苦・無我）を、繰り返し重複して観照しなければならない。

この様に修習する時：

- 1、心と心所を名グループに纏め、色法をもう一つ別のグループに纏める。その後に、もし、禅修行者が名色法の方法で観を修習するならば、彼は道果と涅槃を証悟することができる。
- 2、色法を一つのグループに纏め、名法を四つのグループ、すなわち、受、想、行、識に纏めた後、五蘊法で観の修習をするならば、彼は道果と涅槃を証悟することができる。
- 3、名色法を 12 のグループに纏め、12 処法によって、観の修習をするならば、彼は道果と涅槃を証悟することができる。

- 4、名色法を 18 のグループに纏め、18 界法によって、観の修習をするならば、彼は道果と涅槃を証悟することができる。
- 5、名色法を 22 のグループに纏め、根教法によって、観の修習をするならば、彼は道果と涅槃を証悟することができる。
- 6、名色法を 12 支に纏め、縁起法によって、観の修習をするならば、彼は道果と涅槃を証悟することができる。
- 7、名色法を苦諦と集諦の二つのグループに纏め、諦教法によって、観の修習をするならば、彼は道果と涅槃を証悟することができる。

これら、観智の目標（所縁）としての名色、五蘊、12 処、18 界、22 根、12 縁起支、苦諦と集諦は皆、心、心所と色法に過ぎない。観法は違えども、しかし、観智の目標である所の、根本究極界は皆、同様である。故に、観禪を修習したいと思う禅修行者は、先に名色分別智と縁摂受智を証得する必要がある。すなわち：

- 1、色法と名法の区別。
- 2、諸々の因の識別。

人は問うかも知れない：「すでに識別できた名色と因果の内、どの法でもって、観の修習をすればよいのか？」と。
その答えは：「容易なもの、明確なものから始めよ」である。

《清浄道論》（第 20 章）では以下の様に言う：

Yepi ca sammasanupagā, tesu ye yassa pākaṭā honti sukhena pariggahaṃ
gacchanti, tesu tena sammasanaṃ ārabhitabbaṃ.

《大疏鈔》では以下の様に言う：

Ye rūpārūpadhamā. Yassā ti yogino. Tesu tena sammasanaṃ ārabhitabbaṃ
yathāpākaṭaṃ vipassanābhinivesoti katvā. Pacchā pana anupaṭṭhahantepi upāyena
upaṭṭhahāpetvā anavasesatova sammasitabbā.

観禪の修習に適した世間名色法の中において、禅修行者は、己自身が容易で、また明確、明晰であると思われる名色の三相を観照を通して、観禪の思惟智を修習しなければならない。

（甲）「禅修行者は、己自身が容易で、また明確、明晰であると思われる名色法の三相の観照を通して、観禪の思惟智を修習しなければならない。」というこの言葉については、（+当該の）禅修行者が、明確、明晰な名色法に関する、観の修習の能力を有していると判断した（+場合の）論師による（+アドバイスである）。

(乙) かしながら、その後半では、彼は巧妙な技術を応用して、智が不明確、不明晰な名色法についても、観照しなければならない。どの様な遺漏（名色と因果）もない様にする為に。（《大疏鈔》）。

禅修行者は、上に述べた註釈の指示は、五摂受の識別に成功した人について述べているものである事に注意を払わねばならない。

五摂受とは：

- 1、色摂受 (rūpa pariggaha)。
- 2、非色摂受 (arūpa pariggaha、すなわち、名摂受)。
- 3、色非色摂受 (rūpārūpa pariggaha、すなわち、名色摂受)。
- 4、縁摂受 (paccaya pariggaha、今世の名色の因の識別)。
- 5、世摂受 (addhāna pariggaha、過去と未来の名色の因の識別)。

これらの指示は、禅修行者は、心の赴くままに何か生起する法または容易な法を観照すればよい、概念法と究極法の二者の区別をしなくともよい、と言っているのではない事に注意する事。それらは、禅林（＝修行道場）に来たばかりで、以下の事柄に知見を持たない禅修行者に対して、述べられた事ではない：

- 1、色から究極法までを知見した事がない。
- 2、名から究極法までを知見した事がない。
- 3、名色から究極法までを知見した事がない。
- 4、今生の名色から究極法までを知見した事がない。
- 5、過去と未来世の名色の因を知見した事がない。

ある種の人々は、今まさに生起しつつある、また明確な法のみを観照する様にと指導するが、この様であれば、彼らは、ただ（甲）項の註釈と疏鈔の解釈にのみ依拠しており、（乙）項の疏鈔の解釈を参考にしていない。《相応部・六処品・不通解經》(Saṃyutta Nikāya, Saḷāyatana - vagga, Aparijānana Sutta) の疏鈔に基づけば、禅修行者は三遍知でもって、徹底的に一切の色法と名法を識別、観照しなければならないのである（＋と言える）。

尊重すべき規則

完全なる三輪転法教示 (Teparivattadhamma desana、たとえば、《無我相經》) と、上に述べた註釈及び疏鈔の指示に基づけば（＋観の修習とは）、過去、未来、現在、

内、外等の、一切の行法（名色と因果）を觀照するものであるが、ある種の人々は、以下の様に問うかもしれない：一体、どの様な方法で、どの様な規則でもって、觀禪の修習をすればよいのか、と。《殊勝義註》（*Aṭṭhasālinī*）と《清淨道論》（第 21 章）の中の、「至出起觀」に関連する篇章において、遵守すべき規則が、言及されている。

以下は《殊勝疏鈔》の註釈（+の一部）である：

Idhekacco āditova ajjhataṃ pañcasu khandhesu abhinivisati, abhinivisitvā te aniccādito passati, yasmā pana na suddha ajjhataḍassanamatteneva maggavutṭhānaṃ hoti, bahiddhāpi daṭṭhabbameva, tasmā parassa khandhepi anupādinnaṣaṅkhārepi aniccaṃ dukkhamanattāti passati. So kālena ajjhataṃ sammasati kālena bahiddhāti. Tassevaṃ sammasato ajjhataṃ sammasanakāle vipassanā maggena saddhiṃ ghaṭiyati. Evaṃ ajjhataṃ abhinivisitvā ajjhataṃ vutṭhāti nāma. Sace panassa bahiddhā sammasanakāle vipassanā maggena saddhiṃ ghaṭiyati, evaṃ ajjhataṃ abhinivisitvā bahiddhā vutṭhāti nāma. Eseva nayo bahiddhā abhinivisitvā bahiddhā ca ajjhataṅca vutṭhānepi.

Aparo āditova rūpe abhinivisati abhinivisitvā bhūtarūpaṅca upādārūpaṅca paricchinditvā aniccādito passati, yasmā pana na suddharūpadassanamatteneva vutṭhānaṃ hoti arūpampi daṭṭhabbameva, tasmā taṃ rūpaṃ ārammaṇaṃ katvā uppannaṃ vedanaṃ saññaṃ saṅkhāre viññāṅgaṅca idaṃ arūpanti paricchinditvā aniccādito passati. So kālena rūpaṃ sammasati kālena arūpaṃ. Tassevaṃ sammasato rūpasammasanakāle vipassanā maggena saddhiṃ ghaṭiyati. Evaṃ rūpe abhinivisitvā rūpā vutṭhāti nāma. Sace panassa arūpasammasanakāle vipassanā maggena saddhim ghaṭiyati, evaṃ rūpe abhinivisitvā arūpā vutṭhāti nāma. Esa nayo arūpe abhinivisitvā arūpā ca rūpā ca vutṭhānepi.

‘Yaṃ kiñci samudayadhammaṃ sabbaṃ taṃ nirodhadhamma’nti (mahāva. 16; dī. ni. 1.298).

Evaṃ abhinivisitvā evameva vutṭhānakāle pana ekappahārena pañcahi khandhehi vutṭhāti nāmāti. Ayaṃ tikkhavipassakassa mahāpaññaṣa bhikkhuno vipassanā. (《殊勝義註》)

Abhiniveso ti ca vipassanāya pubbhāge kattabbanāmarūpa paricchedo veditabbo. Tasmā paṭhamaṃ rūpapariggaṅhanaṃ rūpe abhiniveso. Esa nayo sesesupi. (《大疏鈔》)

「識別」(abhinivesa) (+を完成させる)とは、觀の修習を始める前、智でもって、名色を識別する名色分別智(+を完成しておかねばならない事を言う)。例えば、先に色法を識別し、次に、觀禪の修習をする。すなわち、色識別(rūpe abhinivesa)であ

る。その他の識別は、これに基づいて、類推するべきである。識別を觀智の目標とする行法（すなわち、苦諦と集諦）は、「辨別」と呼ばれる。

出世間聖道は、以下の方式によって出起（出現）する：

- (一) 内（内行法）の觀照から始める。それは内（内行法）から出起する。
- (二) 内の觀照から始める。それは外（外行法）から出起する。
- (三) 外の觀照から始める。それは外から出起する。
- (四) 外の觀照から始める。それは内から出起する。
- (五) 色の觀照から始める。それは色から出起する。
- (六) 色の觀照から始める。それは名から出起する。
- (七) 名の觀照から始める。それは名から出起する。
- (八) 名の觀照から始める。それは色から出起する。
- (九) 五蘊から出起する。

(一) この教理において、ある種の禪修行者は、内五蘊の識別から始めて、内五蘊の三相を、順序良く繰り返し觀照する。しかしながら、内五蘊の觀だけを修習しても「至出起觀」（*vuṭṭhānagāminī vipassanā*、すなわち、行法から出起して、涅槃に趣く事）と道心路過程（*magga vīthi*）を生起させる事は、出来ないのである。彼は必ずや、外五蘊も觀照しなければならない。故に、他人の五蘊と、非有情の無執取行法を識別した後、彼は、順序良く、繰り返し、外行法の無常・苦・無我の三相を、觀照しなければならない。禪修行者は、ある時は、内行法の三相を觀照し；ある時は、外行法の三相を觀照しなければならない。この様に、内行法を觀照する時、彼の觀智が聖道と接する（その意はすなわち、聖道智が觀智の末端で生起する）が、これを「内の觀照から始めて、それは内から出起する」と言う。

至出起觀は、行法出起（出現する）して、無為涅槃の「觀心路過程」に趣き向う。これがすなわち、達頂觀（*sikhāpattā vipassanā*）と呼ばれる所の行捨智、隨順智と種姓智である。

(二) もう一つ別の方式：禪修行者は、内の觀照から始めて、内と外を交代させながら觀じる。彼がまさに、外を觀じている時、觀智が聖道と接する。これを「内の觀照からは始めて、それは外から出起する」と言う。

- (三、四) 外の觀照から始めて、それは外と内から出起する。
(第一と第二と類似している。違いは、外の觀照から始める事である。)

(五) (内外ともに名色の二者が存在する) また別の修行者は、先に色業処 (すなわち、色法の識別) を修習し、その後、四大界と 24 所造色の三相を觀照する (+事がある)。しかし、色法を觀照するだけでは、「至出起觀」を生起させる事は不可能である。彼は、必ずや、名法の三相を、觀照しなければならない。こうしたことから、受、想、行、識を、「これは名法である」と識別した後、彼は、名法の無常・苦・無我の三相を、觀照しなければならないのである。彼が、まさに色法を觀照している時、その觀智が聖道智と接するが、これが「色の觀照から始めて、それは色から出起する」である。

(六) もし、まさに名法を觀照している時に、その觀智が聖道と接したならば、これはすなわち、「色より始めて、それは名から出起する」である。

(七、八) 第五と第六に類似している。違いはただ「名の觀照から始める」である。

(九) 「一切の集起法は、最終的には壞滅する」 (Yaṃ kiñci samudaya dhammaṃ, sabbaṃ taṃ nirodha dhammaṃ) を觀照した後、至出起觀智が生起するが、これがすなわち、五蘊からの出起である。これは大慧利觀 (tikḥha vipassaka mahāpañña) 比丘の禪觀である。

註釈では、容易に識別できる名色法から、觀禪の修習を始めると言うが、これは、すでに五摂受の修習に成功した場合の言であって、それは、まさに、思惟智の修習に轉換した者を言う。疏鈔が示しているのは、識別した名色法に関して、思惟智を修習した後、禪修行者は、必ずや、種々の技巧を運用して、不明晰な名色法を明晰にさせ、その後、それらの三相を觀照しなければならない、という提言である。

それは以下の理由による：

- 1、色法を觀照しただけでは、聖道を証悟する事はできない。
- 2、名法 (四名蘊) を觀照しただけでは、聖道を証悟する事はできない。
- 3、内五蘊を觀照しただけでは、聖道を証悟する事はできない。
- 4、外五蘊を觀照しただけでは、聖道を証悟する事は出来ない。



注意すべき要点

観禅を修習する時（順序良く、繰り返し）、以下の事を実践する事：

- 1、ある時は内を観ずる（内五蘊）；
- 2、ある時は外を観ずる（外五蘊）；
- 3、ある時は色を観ずる（四大界と所造色）；
- 4、ある時は名を観ずる（四名蘊）；
- 5、ある時は無常相を観ずる；
- 6、ある時は苦相を観ずる；
- 7、ある時は無我相を観ずる。

観禅の修習の方法に注意する事。なんら、概念法と究極法を区別する事なく、心の欲する様に、まさに生起しつつある法を、観照するのではない。言い換えれば、概念法は、観禅の目標ではないのであって、唯一、究極法のみが、観禅の目標なのである。

三相

Eko āditova aniccato saṅkhāre sammasati. Yasmā pana na aniccato sammasanamatteneva vuṭṭhānaṃ hoti, dukkhatopi anattatopi sammasitabbameva, tasmā dukkhatopi anattatopi sammasati. Tassevaṃ paṭipannassa aniccato sammasanakāle vuṭṭhānaṃ hoti, ayaṃ aniccato abhinivisitvā aniccato vuṭṭhāti nāma.

Sace panassa dukkhato anattato sammasanakāle vuṭṭhānaṃ hoti, ayaṃ aniccato abhinivisitvā dukkhato, anattato vuṭṭhāti nāma. Esa nayo dukkhato anattato abhinivisitvā sesavuṭṭhānesupi.

（一）智でもって、行法の生・滅の本質を識別した後、ある種の禅修行者は、観禅の修習として、それらを無常として観照することを始める。しかし、無常だけを観じても、至出起観は生起しない。彼は、必ずや、行法が生・滅の圧迫を受けている本質を識別して、それを苦として観じなければならないし；また、それらは壊滅しない、という実質を有していない、という事を識別して、それらを、無我として観じなければならない。こうしたことから、彼は必ずや、苦と無我を観照しなければならないのだ、と言える。彼がまさに、行法を無常であると観照している時に、至出起観が生起したならば、彼はすなわち、「無常の観照から始めて、無常から出起した」のである。

(二) もし、彼がまさに苦を觀照している時に至出起觀が出起したのならば、それはすなわち、「無常の觀照から始めて、苦から出起した」のである。

(三) もし、彼がまさに無我を觀照している時に至出起觀が出起したのならば、それはすなわち、「無常の觀照から始めて、無我から出起した」のである。

苦の觀照と、無私の觀照から始めた出起もまた、斯くの如く類推する事。上に述べた註釈によると、禪修行者は順序よく、繰り返し行法を觀照しなければならない：

- 1、ある時は無常として；
- 2、ある時は苦として；
- 3、ある時は無我として。

無私の光

仏陀が世に出ても出なくても、無常相と苦相は、世間において顕現する；しかしながら、もし、仏陀が世に出ないならば、無我相は、世間に顕現することはない。智者であっても、たとえば、大神通を有するサラバンガ (Sarabhaṅga) 菩薩であっても、法を無常と苦として、教える事は出来ても、無我を教示する事はできないのである。もし、智者が行法を、無我として教示する事が出来るならば、その弟子または聴衆は、聖道果智を証悟することができる。

ただ、「一切知正等正覚者」(Sabbaññūtā Sammāsambuddha) 以外、無我相を教示するのは、どの様な人間、どの様な有情の能力の内にはないのである。注 48。故に、無我相は、顕著な相ではない(ことが分かる)。仏陀は、無我相を(一) 無常相と関連づけて、または(二) 苦相と関連づけて、または(三) 無常と苦相の二者と一緒に、纏めて教えるのである。

Nānādhātuyo vinibbhujitvā ghanavinibbhoge kate anattalakkhaṇaṃ yathāvasarasato upaṭṭhāti (Abhi-com、Vism)

——もし、究極法を知見するまで、一つひとつの色界 (rūpa dhātu) と名界 (nāma dhātu) を識別し、色密集と名密集を看破する事ができるならば、無我相 (無私の光) は、禪修行者の智において、如実に顕現する。

色聚と名聚の中の究極界の相、作用、現起 (現象) と近因を逐一識別する能力を有する時にのみ、色密集と名密集は看破することができる。密集を看破した後で初めて、禪修行者は究極智を証得することができる；と言うことは、この様にして初めて、無私の

光は明るく、条件に合致して生起する事ができる；無常・苦・無我を非常に明晰に観照している時にのみ、彼は聖道を証悟することができる。

こうしたことから、もし、人（＝指導者）の教法に以下の概念が含まれている時、彼の教えは、正道から乖離しており、また、聖典に依拠したものでないことが分かる。色聚と名聚の分別が出来る時初めて、禅修行者は究極なる観智を証得することができる。究極界を通して初めて、涅槃を証悟する事が出来る事に注意を払う事。概念を通しては、涅槃を証悟する事はできないのである。

- 1、色聚と名聚を見る必要はない；
- 2、弟子（声聞）は色聚と名聚を見ることができない；
- 3、弟子は色聚と名聚の分別ができない；
- 4、弟子は、仏陀が教えた究極色と究極名を識別することができない；
- 5、一切知正等正覚者だけが、仏陀の教えた名色法を知見することができる。これは仏陀の能力の範囲にのみ、属するのである；
- 6、阿羅漢だけが、これらの名色法を知見することができる。

注 48：《智慧の光》では、諸々の弟子は、仏陀の教えた無我相を、そのまま伝え、教えるのだと言う。

聚思惟観法と個別法の観法

Samūhagahaṇavasena pavattaṃ kalāpasammasanam. Phassādi ekeka
dhammagahaṇavasena pavattā anupadadhammavipassanā (Mūlaṭṭikā)

二種類の観法がある。すなわち、理法観の聚思惟観法（kalāpa sammasana）と個別法の観法（anupadadhamma vipassanā）である。名色法、五蘊法、12 処法、18 界法、縁起法などに基づいて、名色または行法を二組、または五組、または 12 組、または 18 組などに分け、これらの組ごとに観を修習する。すなわち、聚思惟の理法観と呼ばれるものである。

（この観法においては、六処門と 42 身分の中の色法全体を「色」として取り、順序よく、繰り返しその三相を観照する。同様に、禅修行者は必ずや、過去、現在、未来、内と外全体の色法の三相を観照しなければならない。

名法に関しては、彼は一個の心識刹那の中の名法全体を「名」するか、またはそれらを受蘊、想蘊、行蘊と識蘊として観ずる。過去、未来、現在、内、外等の観法もまた同

様である。色聚の中の一つひとつの色法（たとえば、地、水、火、風等）を対象に、逐一に観を修習し、また、逐一に、一個の心識刹那の中の一つひとつの名法（たとえば、触、受、想、思等）に対して観の修習をするのを、個別法観法と言う。この二種類の観法の中で、《清浄道論》（第 20 章）では、観の修習を始めたばかりの禅修行者は、先に、聚思惟の理法観と呼ばれる方法から、修するべきだと指示している。

縁起法

《清浄道論》（第 20 章）では、12 縁起支もまた観禅の目標であると言及している。

Sappaccayanāmarūpavasena tilakkhaṇaṃ āropetvā vipassanā paṭipatiya aniccaṃ dukkhaṃ anattā'ti sammasanto vicarati. (Mūlapaṇṇāsa Aṭṭhakathā)

この《中部・根本 50 經篇》の註釈において、観智の段階に応じて、名色とそれらの因の三相を観照するべきであると指示している。これらの指示に基づいて、智でもって、諸々の縁起支の因果関係を識別する時、禅修行者は、時には因の三相を識別しなければならないし；時には果の三相を識別しなければならない。すなわち、順序良く繰り返し、それらの無常・苦・無我を観照するのである。観禅の修習をする禅修行者は、以下の通りに実践する事：

- 1、ある時には内を観ずる。
- 2、ある時には外を観ずる。この二者に関して、また：
- 3、ある時は色を観ずる；
- 4、ある時は名を観ずる；
- 5、ある時は因を観ずる；
- 6、ある時は果を観ずる；
- 7、ある時は無常を観ずる；
- 8、ある時には苦を観ずる；
- 9、ある時には無我を観ずる；
- 10、ある時には不浄を観ずる。

'Asubhā bhavetabbā rāgassa pahānāya.'

——「貪欲を取り除く為に、不浄を修習するべきである。」（《自説語・メギヤ經》Meghiya Sutta, Udana Pāḷi）は、《メギヤ》經の中において、仏陀が貪欲（rāga）を取り除く為に、不浄観を修習する様にと指示している；彼は《勝利經》(Vijaya Sutta)の中において、貪欲を取り除くために不浄観を修習する様にと指示している。三相の中

で、不浄は苦随観を「取り巻いて」いるが、この観法は、現在五蘊において、運用されなければならない。

次に、完璧三輪転教法（たとえば、《無我相經》）の中において、仏陀はまた、過去の五蘊と未来の五蘊を観照する様にと指示している。これらの指示に基づけば、禅修行者は、現在の五蘊を観照するのと同じ様に、過去蘊と未来蘊もまた観照しなければならない事を知らねばならない。故に、彼は以下の事を実践しなければならない：

11、ある時は過去を観ずる；

12、ある時は未来を観ずる（合計 12 項目）。

これらは、禅修行者が観禅の修習を実践するに当たり、先に知っておくべき要点である。次に、彼は各種の異なった方法によって、名色を観照することができる、たとえば、五蘊法、12 処法、18 界法、12 縁起法支等々である。この『禅修指南』では、主に、名色法によって観の修習をする方法を説明した。

観智と神通

過去と未来を識別する件に関して、幾人かの大徳は、已に神通（特に宿命通）を証得している人だけが、過去と未来を識別することができる、と言う。実際は、過去と未来を識別するには、二種類の方法がある。すなわち、宿住随念智と観智である。

《相応部・蘊品》と註釈は、以下の様に言う：

‘Ye hi keci, bhikkhave, samaṇā vā brāhmaṇā vā anekavihitaṃ pubbenivāsaṃ anussaramānā anussaranti sabbete pañcupādānakkhandhe anussaranti etesaṃ vā aññataraṃ. Katame pañca?’

‘Evaṃ rūpo ahoṣiṃ aṭṭhamaddhāna’nti ... iti vā hi, bhikkhave, anussaramāno rūpaṃ yeva anussarati. ‘Evaṃ vedano ahoṣiṃ aṭṭhamaddhāna’nti ... iti vā hi, bhikkhave, anussaramāno vedanaṃ yeva anussarati. ‘Evaṃ sañño ahoṣiṃ aṭṭhamaddhāna’nti ... ‘Evaṃ saṅkhāro ahoṣiṃ aṭṭhamaddhāna’nti... ‘Evaṃ viññāṇo ahoṣiṃ aṭṭhamaddhāna’nti ... iti vā hi, bhikkhave, anussaramāno viññāṇameva anussarati.’
(Saṃyutta)

Pubbenivāsanti na idaṃ abhiññāvasena anussaraṇaṃ sandhāya vuttaṃ, vipassanāvasena pana pubbenivāsaṃ anussarante samaṇabrāhmaṇe sandhāyetaṃ vuttaṃ. Tenevāha ... ‘sabbete pañcupādānakkhandhe anussaranti, etesaṃ vā aññatara’nti. Abhiññāvasena hi samanussarantassa khandhāpi upādānakkhandhāpi khandhapaṭṭibaddhāpi paññattipi ārammaṇaṃ hotiyeva. Rūpaṃ yeva anussaratīti evaṃ

anussaranto na aññaṃ kiñci sattaṃ vā puggalaṃ vā anussarati, aṭṭe pana niruddhaṃ rūpakkhandhameva anussarati. Vedanādīsūpi eseva nayoti. (Saṃyutta aṭṭhakathā)

「比丘たちよ。この世において、ある種の沙門と婆羅門は智憶によって、多くの過去蘊を思い出すことができる；この様に追憶する時、そうしたいのであれば、彼らは五取蘊または五蘊の一を思い出すこともできる。もし、必要であれば、これらの沙門と婆羅門は、智憶によって、以下の事を思い出すこともできる；

- 1、どの色が過去において、生起した事があるか；
- 2、どの受が過去において、生起した事があるか；
- 3、どの想が過去において、生起した事があるか；
- 4、どの行が過去において、生起した事があるか；
- 5、どの識が過去において、生起した事があるか。」

（《相応部・所食經》Khajjanīya Sutta, saṃyutta Nikāya）。

仏陀は説明する時、「宿住」（pnbbenivāsa、すなわち、過去蘊）という詞を使っているが、しかし、宿住随念智（pubbenivāsānussati abhiñña）でもって、過去の蘊を思い出す事を言っているのではなく、あれら沙門と婆羅門が、観智でもって過去蘊を思い出せる事を言っているのである。こうしたことから、仏陀は示して言う：

「（彼らは）・・・智でもって、五取蘊または五取蘊の一を思い出すことができる。」その違いは、神通によって過去蘊を思い出す時、宿住随念智は以下の事を知見することができる：

- 1、出世間法を含む五蘊。（その意味は、それは聖者、たとえば、過去仏の心中に生起した出世間法を知る事ができる。）
- 2、五取蘊（その意味は、出世間法を含まない。）
- 3、五蘊と関係のある族系、美しさ、食べ物の栄養、楽しさ、苦痛等。
- 4、各種の概念、たとえば、名称概念。

しかしながら、観智は、上に述べた第一、第三と第四項を知る事ができない。ただ、第二項、観禪の目標に属する五取蘊をのみ知る事ができる。上に述べた経文が言及する所の、「智でもって色を思い出すのみ」（rūpaṃ yeva anussarati）とは、智でもって過去蘊を思い出した時、どの様な人も、有情または私などというものを思い出すのではなくて、究極法、それは智でもって、過去においてすでに滅尽した所の色蘊をのみ思い出すの言う。これは受についても同様である事に注意すること。（《相応部註》）

故に以下の事に注意しなければならない: 禅修行者は観智でもって識別する事を通して、過去の五取蘊を知見することができる。ここにおいて、名色分別智と縁摂受智もまた観智の中に含まれる (+ 事も言い添えておく)。

一個の重要な条件

過去五蘊を思い出すことができる (+ 能力) は、過去因を識別する為には、非常に重要であると言える。もし、人が過去五蘊を思い出す事ができないのであれば、彼は過去五蘊の一部分に属する所の過去因を識別することができない。同様に、「過去果の生起は、更に遠い過去因による」及び「現在果の生起は、過去因による」に関して、彼は識別する方法を持たない事になる。もし、人が、未来の五蘊を識別することができないのであれば、彼は「未来果の生起は、現在因または過去因が原因である」及び「更に遠い未来果が生起する原因は未来因による」というのも識別することができない。これは、未来果と未来因は、未来五蘊の一部分に属するが故である。

過去の因果と未来の因果を追尋する一つの重要な条件は、臨終速行の目標、すなわち、業または業相または趣相を識別することができるかどうかである。その目標が、果を引き起こす所の業が原因で出現するが故に、それは、引き起されんとする果、すでに引き起こされた果、またはまさに引き起こさんとしている果の業を追尋する主要な条件となるのである。それは臨終速行が、相見合う所の六根門において生起する所の目標であり、特に、臨終の時に意門において出現する所の目標である。先に六門 (特に意門) が識別できていなければならない。禅修行者は、そうであって初めて、相見合う根門に出現する所の目標を識別することができるのである。その目標を明らかに識別する事ができて初めて、禅修行者は果を引き起こす所の業、及びその業を取り巻く無明、愛と取を識別することができるのである。

意門を識別する事ができて初めて、禅修行者は有分心の中に生起する所の心路過程を識別することができる。因に属する無明、愛、取、行と業はすなわち、これら心路過程に含まれており、それらは心路過程心の一部なのである。

過去因を追尋する時、過去の臨終速行の目標を識別できる事は非常に重要である。その臨終速行の目標を識別する為には、過去世の臨終の時野有分心を識別できなければならない。この様に出来てこそ、以下の事を識別することができる ;

- 1、意門に出現する臨終速行の目標。
- 2、有分心の中に出現する心路過程。臨終速行心路過程を含む。
- 3、その目標を出現せしめる所の業または因。
- 4、その業を取り巻く無明、愛と取。

同様に、もし、（+あなたに）未来世があるならば、今世の臨終速行の目標を識別できなければならない：そして、この事が出来る様になる為には、先に、今生の臨終の時の有分透明界（意門）を識別できなければならない。唯一、この様にして初めて：臨終速行の目標、その目標が出現するに至る事になる（+因で）、かつ、果報を引き起こせんとする業、及び当該の業の助縁としての無明、愛、取を識別することができる。

同様に、若し、彼に、更に遠い未来の輪廻があるならば、諸々の未来世の間の因果関係（縁起）を識別している時、彼は、必ずや、未来世の臨終の時野、意門に出現する所の、臨終速行の目標を識別出来なければならない。その目標は、まさに新しい未来世を引き起こさんとしている所の業として出現する故に、目標を出現せしめる所の業は、未来の蘊（たとえば、第二未来世など）の因と縁となるのである。その目標は、過去世の業が原因で、生起することができる（この業は、順後業、*aparāpariya kamma* と言う）。または今世で造（ナ）した業が原因で生起するが、これは死亡の前に造（ナ）した業も含まれるものである。

もし、人が、その目標に従って、業を追尋するならば、彼は非常に輕輕にそれを見つける事ができるし、また、その業を支援する所の無明、愛、取をも見つける事ができる。この様に識別できる様になるためには、彼は臨終時の六門、特に意門を識別する事ができなくてはならない。

こうしたことから、過去と未来蘊を識別する事は、ただ単に観禪の修習の時に、過去と未来蘊を観照する事の重要性以外に、それは、因果関係（縁起）と観を修習する時に、縁起を観照する為の重要な条件なのである（+ことが分かる）。

易観者から始める観禪の修習

易観（＝観察しやすい）と明晰な名色から始めて、名色の観禪の修習をする原則について、『禅修指南』では、先に、今世の名色の観の修習から説明する。

まず、順序に従って定力を育成し、直前まで証得していた再考の定力まで上げておく。もし、第四禪を証得する事が出来るのであれば、毎回、座禅・瞑想の時に、彼は先に第四禪に入らなければならない；すでの四界分別観を成就した純観行者に関しては、彼は、四界分別観を修習して、定力を育成し、光が極めて明るく輝く様にしておく。

ここでの教法は、先に色業処を教える事もあり、また、先に色法を観ずる方が容易である事もあって、色法を先に観じなければならない、とする。まず、六処門と 42 身分の真実色法に対して：

- 1、一個の処門の中の54または44種類の色法を全体として見做す。
- 2、一個の身分の中の44種類の色法を全体として見做す。
- 3、六処門と42身分の中のすべての色法を全体として見做す。

(一) 智によって、これらの色法の生・滅の本質を観ずる。それらの「生・滅」を目標に取り、それらを無常であると、何度も観ずる。何度も繰り返して交代しながら、内と外を観ずる。外を観ずる時は、先に近くを観じ、次に徐々に遠くを観ずる。最後は無辺世界まで観ずる。この様に重複して、繰り返し何度も観照する。

(二) 智によってこれらの色法を「不断に生・滅の圧迫を受ける」本質を観じた後、それらの苦を何度も観ずる。内と外、及び近くから遠くまで、無辺世界に至るまで、繰り返し何度も観ずる。

(三) 智によって、これらの色法を「壊滅しないという実質、または我を有していない」と観じた後、何度も繰り返して、それらを無我として観ずる。内と外、及び近くから遠くまで、無辺世界に至るまで、交代しながら観ずる。

註：非真実色法は観禅における三相の観照の対象ではない為、この段階においては、最早、非真実色法を観ずる事は止める事。

この様に連続して、繰り返し、内外の三相を観照する時、明晰に、極めて迅速な生・滅が見えていなければならないが、但し、中等の速度で、それらの無常・苦・無我を観ずる事。色聚の生・滅を見ている時、それらを目標として三相を観照してはならない；色聚の識別をした後に、智でもって、究極色の生・滅を観照するものであって、この点を実践できた時にのみ、究極色の三相を観照する事とする。

註：色法を観照している時、非有情の色法も観ずる。すなわち、無執取行である。

名色の滅尽と見做す

色聚は、最も小さい密集の概念である。実際は、構成概念 (*samūha paññatti*) 等の概念は、(+その時点では) 未だ看破されていない。概念は、真実的な存在ではない為、長時間それを見る事は出来ない。禅修の時、宿世の波羅蜜がよい禅修者は、色聚を見ることが出来る。しかし、それを地、水、火、風、色、香、味、食素などの究極法として識別しないし (=できないし)、また究極智を証得してないならば、彼は、これらの

色法の生・滅無常を觀じようとしても、久しからずして、彼に色聚が見えなくなる。というのも、概念は、長時間、觀智によって觀照される事が出来ないが故に。色聚が斯くの如くに消失した時、定力が未だ減退していなが故に、彼は白色または透明の物体を見ることができる。

彼の心は、静かになって、その目標に專注することができるが、ある種の禪修行者は、これこそが、色の滅尽である、と言う。もし、精進力を少しばかり低減するならば、その静かな、目標に專注する心は、有分に落ちる可能性がある。当時の目標を知らないが故に（＝見失ったが故に）、彼は、己自身すでに空を知見したと思い、有分に落ちたのを、名の滅尽であると言う。

注意すべきは、パーリ經典、註釈、疏鈔の中において、言及されている様に、以下の状況においては、聖道は証悟することはできないのである：

- 1、内五蘊を觀照するだけの觀禪の修習。
- 2、外五蘊を觀照するだけの觀禪の修習。
- 3、ただ色法のみを觀ずる。
- 4、ただ名法のみを觀ずる。
- 5、三遍知でもって縁起を知見していない。
- 6、三遍知でもって、すべての五取蘊または名色法を知見していない。

もう一つ、注意すべき点は、もし、再度、当該の透明体の中の四界と虚空界を識別する時、彼は久しからずして、色聚を見ることができるであろう、という点である。

名法の觀照

もし、禪修行者がすでに、色法を觀照する事に満足を覚えたならば、彼は名法の觀照の修習に轉換することができる。色法の觀照に熟練し、徹底的に色法を觀照できるとき初めて、名法の觀照に轉換するのがよい。

名業処の修習は、処門に基づいて名法の識別をする為、名法の觀照を開始する時は、同じく、処門によるものとする。心路過程心と、心路過程心（＋と心路過程心）の間に出現する所の有分心の生・滅を目標に取り、それらを「無常・無常」として觀ずる。内と外とで、一切の善と不善速行心路過程、たとえば、眼門心路過程などを觀照する。近処から始め、交互に、内と外を多数回觀照する。禪修が強くて力のある様になったなら、徐々に範囲を広げていき、内と外の 31 界を、交互に觀照する。無辺の世界全体を觀照できる様になるまで、多数回（＋修習する。）

もし、無常の観照に対して、已に満足を感じたならば、これらの名法が生・滅の圧迫を受けている本質を「苦、苦」と観じてよい。この様に繰り返して、多数回観照する。もし、苦相の観照にも満足したならば、これらの名法が永恆の、壊滅しない実質を持っていない、または我ではないということ「無我、無我」と観じてよい。すべての内外の六所縁グループの善と不善速行心路過程を観照する。この様に名方を観照する時、下記のように、心路過程全体を観照しなければならない（たとえば、名色業処表に示した如く）。

- 1、色所縁を目標として取った、眼門と意門心路過程。
 - 2、声所縁を目標として取った、耳門と意門心路過程。
 - 3、香所縁を目標として取った、鼻門と意門心路過程。
 - 4、味所縁を目標として取った、舌門と意門心路過程。
 - 5、触所縁を目標として取った、身門と意門心路過程。
- それらを繰り返し重複して多数回、観照する。

禅修行者が止行者の場合

もし、禅修行者が止行者である場合、已に証得した所のジャーナ心路過程名法の観照から、観禅の修習を始めるのが、彼にとってもよいと言える。たとえば、先に初禅に入り、その後に、初禅から出定して、初禅心路過程名法の三相を順序よく、繰り返し観照する。第二禅などの心路過程名法の観方もまた同様である。すべての、己自身がすでに証得した所のジャーナの名法を観照し、それらの三相を順序良く、何度も繰り返し観照する。もし、これらに対して、已に満足を覚えたならば、六所縁グループの名法の三相を観照することができる。たとえば、色所縁を目標に取る眼門と意門心路過程である。



主に好きな相から観照する

Evam saṅkhāre anattato passantassa diṭṭhisamugghāṭanaṃ nāma hoti. Aniccato passantassa mānasamugghāṭanaṃ nāma hoti. Dukkhatto passantassa nīkantipariyādānaṃ nāma hoti. Iti ayaṃ vipassanā attano attano ṭhāneyeva tiṭṭhatīti.
(Vism)

禅修行者は、熟練して力を有するまで、行法の三相を観照しなければならない。この様に修習するならば、もし、その中の一つの随観智 (anupassanā ñāṇa) が、残り二個の随観智の、親依止縁力の支援を得られたならば、それは即刻、鋭利で、強大で、清浄になる。当該の随観智が鋭利になり、強大で清浄である時にのみ、それは初めて、煩悩を取り除くことができる。

無常随観智と苦随観智の親依止力の支援の下、無我随観智が鋭利になり、強大で清浄となる。すでに、何度となく、徹底的に、無常随観智と苦随観智でもって、行法の観照に取り組んでいる禅修行者は、次には、繰り返し、徹底的に、無我随観智によって、行法を観照するべきである。無我随観智を、観の修習の主とする。この様であれば、無我随観智は、成熟し、鋭利になり、強大で清浄となり、その為に行法への邪見を「取り除くかまたは断じ除く」事が出来る。一切の邪見は、皆我見を根基 (= 根深い基礎) としているが、無我随観智は、直接我見と対立しているが故に、無我随観智は、邪見を取り除くことができる。

次に、苦随観智と無我随観智の親依止力の支援の下、無常随観智は、鋭利になり、強大で清浄になる。すでに何度も徹底的に、苦随観智と無我随観智でもって、行法を観照した禅修行者は、次には、繰り返し徹底的に、無常随観智でもって行法を観照しなければならない。無常随観智でもって観の修習をするのを主とする。この様にすれば、無常随観智は成熟し、鋭利になり、強大で清浄になるが故に、行法への慢見を「取り除くかまたは断じ除く」事が出来る。もし、人が行法を、たとえば、「これは常である、これは永恒である」 (idaṃ niccaṃ, idaṃ dhavaṃ) の様に、常として執取するならば、彼は婆迦梵天 (Baka brahma) の様に自大になる。

次に、無常随観智と無我随観智の、親依止力の支援の下、苦随観智は鋭利になり、強大で清浄になる。已に繰り返し、徹底的に無常随観智と無我随観智でもって、行法の観照を実践してきた禅修行者は、次には、繰り返し徹底的に、苦随観智でもって、行法の観照をしなければならない。苦随観智による、観の修習を主とする。この様にすれば、苦随観智は成熟して、鋭利になり、強大で清浄になる。その為、行法を「私の、私の」

として執着する所の愛欲 (taṇhānikantai) は、尽滅する。行法に対して、樂想 (sukha saññā、行法を樂と見做す) のある時にのみ、行法を「私の、私の」として執着する愛見 (taṇhā gāha) は生起する。苦随觀智は、愛見と直接対立する為に、苦随觀智は、愛見を止息することができる。(《清淨道論》：《大疏鈔》)。

こうしたことから、三相を徹底的に觀照した後、己自身が比較的好ましいと思う相を優先して、相当長い時間を費やして、それを觀照する。もし、選んだ随觀智が強大でない時、その他の二相を觀照する。しかしながら、この時、煩惱はただ暫定的 (tadaṅga) に「取り除かれまたは断じ除かれる」だけであり、唯一、聖道智のみが、煩惱を正断 (samuccheda) し、徹底的に余す所なく、断じ除く事ができる。聖道を証悟する為に、禪修行者は必ずや、觀智を成熟せしめるために、大いに尽力しなければならない。

現在世 (addhā paccupanna)

この一生に対して、(+すなわち) 結生心から死亡心の間において、已に生起した、まさに生起しつつある、將に生起せんとしている名色法は、繰り返し多数回順序よく以下の様に觀照されなければならない。

- 1、色法の三相のみである。
- 2、名法の三相のみである。

一つひとつの随觀によって、それらを多数回、繰り返し、觀照する。ある時は内を觀じ、ある時は外を觀じ、ある時は無常を觀じ、ある時は苦を觀じ、ある時は無我を觀じる事。

五蘊法

禪修行者は、再度、処門によって、名法を觀ずる(名業処の表参照の事)。先に、再度、喜俱智相応大善速行の眼門と意門心路過程を識別する。一つひとつの心識刹那の色法を一組に纏め、名法を四組に纏める。

- 1、依処色 (5 4) と色所縁は色蘊である；
- 2、一つひとつの刹那の中の受は、受蘊である；
- 3、一つひとつの刹那の中の想は想蘊である；
- 4、一つひとつの刹那の中のその他の心所は行蘊である；
- 5、一つひとつの刹那の中の識は、識蘊である。

その後、順序よくそれらの三相を觀照する。

五蘊法と同様に、以下の一つひとつの心路過程を觀照する：

- 1、色所縁を目標にするその他残りの眼門と意門心路過程。
- 2、声所縁を目標にする耳門と意門心路過程。
- 3、香所縁を目標にする鼻門と意門心路過程。
- 4、味所縁を目標にする舌門と意門心路過程。
- 5、触所縁を目標にする身門と意門心路過程。
- 6、法所縁を目標にする意門心路過程。

五門引転から意門心路過程に至る彼所縁（名業処表参照の事）は、以下の方法によって、順序よく一つひとつのグループの三相を觀照する：

- 1、全体のグループの中の色だけを觀ずる。
- 2、全体のグループの中の受だけを觀ずる。
- 3、全体のグループの中の想だけを觀ずる。
- 4、全体のグループの中の行（心所）だけを觀ずる。
- 5、全体のグループの中の識だけを觀ずる。

この様に觀照する時、心路過程の間に出現する所の有分心刹那を、五蘊法でもって、觀照する；法所縁を目標にする所の意門心路過程の觀法は、上と同じである。

五蘊法を運用して、内部の觀察に満足したならば、次は、同様の方法を用いて、外を觀ずる。近くから遠くへ、繰り返す、何度も、内、外と觀ずる。外部の觀は、智が觀照する範囲を徐々に広げていき、無辺世界に至る様にし、31界全体を觀照の目標とする。

この様に、名法または五蘊法によって觀禪の修習をする時、禪修行者は、「いまここ」（*khaṇa paccuppanna*、または現在刹那）に到達できる様、尽力する。智が「いまここ」の刹那を觀ずる事ができる様にするため、彼は、心路過程の間に出現する所の有分刹那の五蘊法を、「いまここ」の刹那の境になるまで、觀照しなければならない。

五蘊法を運用して觀照する事に満足した今、次に、五蘊法によって現在世（*addhā paccuppanna*、すなわち、結生から死亡に至るまで）の三相を觀照する。心路過程心と離心路過程の二者に対して、それぞれ順序良く繰り返す（+觀ずる）：

- 1、色のみを觀ずる。
- 2、受のみを觀ずる。
- 3、想のみを觀ずる。

4、行（心所）のみを観ずる。

5、識のみを観ずる。

無常を多数回観ずる事；

苦を多数回観ずる事；

無我を多数回観ずる事。

結生から死亡までの、一つひとつの蘊を観照する。たとえば、結生から死亡までの色蘊を徹底的に観照した後初めて、同様の方法を用いて、受蘊を観照する。内と外、交互に繰り返して観照する。

同時に色法を観照する

名色法と五蘊法を運用して、修観に満足した時、（+その上に）必要と思うのであれば、禅修行者は同時に、名色法を観照することができる。まず、再度、内と外において、色だけを観じ、また名だけを観じる。その智が鋭利に変化した時、巧みに、徹底的に観照することが出来る時、処門において、一つひとつの心識刹那の名色を、対になる様に組み合わせる（たとえば、名業処の表に示す様に）。すなわち：

1、依処色と所縁色；

2、名法（心と心所）。

その後、それらの壊滅または生・滅を目標として取り、順序良く繰り返しそれらの三相を観照する。

眼門心路過程を例にとるならば：一つひとつの心識刹那の名色の生・滅（たとえば、五門引転の中の54種類の依処色と所縁色の生・滅と11名法の生・滅）を識別した後、順序良く繰り返し何度も、

ある時は無常を観じ；

ある時は苦を観じ；

ある時は無我を観ずる。

処門によって、すべての六門を観照する。一切の内外の善と不善速行心路過程を観照する。

以下の方法を運用して、順序良く繰り返し、内外（名色）を観照する：

1、色のみを観ずる。

2、名のみを観ずる。

3、名色を同時に観ずる。

その後、結生から死亡に至るまで；

- 1、色のみを観ずる。
- 2、名のみを観ずる。
- 3、名色を同時に観ずる。

この様に、已に生じた、今まさに生じている、これからまさに生じようとしている名色を全体的に観照する。次に五蘊法に基づいて、結生から死亡までを観照する。

過去・現在・未来

Aniccādivasena vividhehi ākārehi dhamme passatīti vipassanā. (Aṭṭhasālinī)

名色法を運用して、順序良く繰り返し何度も、現在世（結生から死亡まで）の名色を観照した後、もし、禅修行者が已に満足を覚えたならば、かれは次に過去、現在と未来の名色を観照することができる。

Aniccādivasena vividhehi ākārehi dhamme passatīti vipassanā.

——これは行法の種々の状態、たとえば、無常、苦、無我を観照する種々の方法である為、それは異観（Vipassanā）と言う。（Abhi-com-175）

上に述べた註釈が言う様に、究極行法の三相を観照している段階をのみ、異観（観禅）の修習であると言える。

注意する事：

いまだ、名色の究極智を証得していない時で、概念と究極法を分ける事なく、生起した法ならどの様なものでも、観照するならば、その禅修は、観禅とは言えず、観禅ではありえない。

己自身が識別することのできるもっとも遠い過去世の名色（結生から死亡まで）に関して、順序良く繰り返し何度も観照する：

- 1、色法の三相をのみ観ずる；
- 2、名法の三相のみ観ずる；
- 3、名色法の三相。

その後、同様の方法を用いて、もう一つ別の（比較的近い）過去世の名色（結生から死亡）を観照する；

一つ前の世の結生から死亡までの名色；
今生の結生から死亡までの名色；
一番目の未来世の結生から死亡；
（もし、まだ未来があるのであれば）二番目の未来世の結生から死亡までの名色；
己自身が識別することのできる最も遠い未来世。。

ここまできても、いまだはっきりと理解できない禅修行者の為に、ここでは、観の修習に関して、更に一步進んだ説明をする：（たとえば）禅修行者は、五番目の前世の行法（名色と因果）を識別する事ができるならば、彼は、過去世から現在世、未来世まで、順序良く繰り返し何度もそれら（の名色）の三相を観照するべきである。

- 1、色のみを観ずる。その後
- 2、名のみを観ずる。その後
- 3、名色を同時に観ずる、すなわち：
 - 3.1 五つ前の世の結生から死亡までの名色、その後
 - 3.2 四つ前の世の結生から死亡までの名色、その後
 - 3.3 三つ前の世の結生から死亡までの名色、その後
 - 3.4 二つ前の世の結生から死亡までの名色、その後
 - 3.5 一つ前の世の結生から死亡までの名色、その後
 - 3.6 今生の結生から死亡までの名色、その後（もし未来世があるならば）
 - 3.7 一番目の未来世の結生から死亡までの名色、その後（更に遠い未来世があるならば）
 - 3.8 二番目の未来世の結生から死亡までの名色、などなど。

順序良く繰り返し、ある時は内を観じ、ある時は外を感じる。

同様に、五蘊法に基づいて以下を観ずる；

- 1、色のみを観じて、その後
- 2、受のみを観じて、その後
- 3、想のみを観じて、その後
- 4、行（心所）のみを観じて、その後
- 5、識のみを観ずる。

ある時は無常を観じ：

ある時は苦を観じ；

ある時は無我を観ずる。

順序良く繰り返し内外を観ずる。重複して、順序良く繰り返し何度も観照する。この様に観照する時、以下の様に、五蘊は皆、観照されなければならない：

- 1、粗い色、受、想、行、識：または
- 2、微細な色、受、想、行、識：または
- 3、劣っている色、受、想、行、識：または
- 4、優れている色、受、想、行、識：または
- 5、遠い色、受、想、行、識：または
- 6、近くの色、受、想、行、識。

もし、禪修行者がこの様に観照することができるならば、彼はすなわち、已に過去、現在、未来、内、外、粗い、微細な、劣っている、優れている、遠いと近いの 11 個の形式で存在する所の、色、受、想、行、識の五蘊を観照する事ができたのだと言える。

《無我相経》の観法は：

“Tasmātiha, bhikkhave, yaṃ kiñci rūpaṃ atītānāgatapaccuppannaṃ ajjhattaṃ vā bahiddhā vā oḷārikaṃ vā sukhumaṃ vā hīnaṃ vā paṇītaṃ vā yaṃ dūre santike vā, sabbaṃ rūpaṃ ... ‘netaṃ mama, nesohamasmi, na meso attā’ ti evametaṃ yathābhūtaṃ sammappaññāya daṭṭhabbaṃ. Yā kāci vedanā atītānāgatapaccuppannā ajjhattā vā bahiddhā vā ...pe... yā dūre santike vā, sabbā vedanā ... ‘netaṃ mama, nesohamasmi, na meso attā’ ti evametaṃ yathābhūtaṃ sammappaññāya daṭṭhabbaṃ.

Yā kāci saññā ...pe... ye keci sañkhārā atītānāgatapaccuppannā ajjhattaṃ vā bahiddhā vā ...pe... ye dūre santike vā, sabbe sañkhārā... ‘netaṃ mama, nesohamasmi, na meso attā’ ti evametaṃ yathābhūtaṃ sammappaññāya daṭṭhabbaṃ.

Yaṃ kiñci viññāṇaṃ atītānāgatapaccuppannaṃ ajjhattaṃ vā bahiddhā vā oḷārikaṃ vā sukhumaṃ vā hīnaṃ vā paṇītaṃ vā yaṃ dūre santike vā, sabbaṃ viññāṇaṃ ... ‘netaṃ mama, nesohamasmi, na meso attā’ ti evametaṃ yathābhūtaṃ sammappaññāya daṭṭhabbaṃ.” (Saṃyutta)

Netāṃ mama, nesohamasmi, na meso attāti samanupassāmīti aniccaṃ dukkhaṃ anattāti samanupassāmi. (majjhima aṭṭhakathā)

「比丘たちよ。五蘊は無常、苦、無我であるが故に、この教法において、11 種類の形式において存在する色法を以下の様に観ずる、すなわち：

- 1、過去色 (atīta) ；
- 2、未来色 (anāgata) ；
- 3、現在色 (paccuppanna) ；
- 4、内色 (ajjhatta) ；
- 5、外色 (bahiddha) ；

- 6、粗い色 (oḷārika) ;
- 7、微細色 (sukhuma) ;
- 8、劣った色 (hīna) ;
- 9、優れた色 (paṇīta) ;
- 10、遠い色 (dūre) ;
- 11、近い色 (santika) は :
 - i. 「この色は、私の色ではない」 (netam mama) 、すなわち苦である ;
 - ii. 「この色は私ではない」 (nesohamasmi) 、すなわち無常。
 - iii. 「この色は己自身ではない」 (na meso atta) 、すなわち無我。
 観智の光によって、名色の密集を看破して、それらを如実知見に観する」

上と同様の方法によって、四名蘊、すなわち、受、想、行、色を観ずる。

粗い・微細／劣・優／遠・近

この様に観照する時、もし、禅修行者が希望するならば、名色を粗い、微細などとして、これを観ずることもできる。

(一) 五浄色と七境色 (合計 12 色) は、智によって、識別され易い為、粗い色、と呼ばれる。

(二) その他の 16 色は、智でもって識別するのは容易ではない為、微細色と呼ばれる。

(三) 諸々の名法の中で、不善の受、想、行、識は智によって、識別され易い為、粗いと呼ばれる。

(四) 無記 (=果報+唯作) の受・想・行・識と、善なる受・想・行・識、たとえば、五門引転、五識、領受、推度、確定、彼所縁、意門引転、彼所縁、結生、有分、死亡、唯作速行等は、微細であって、識別しにくい為、微細と呼ばれる。

(五) 不善果に属する色は劣 (=劣っている、以下同様) である。

(六) 善果に属する色は勝 (=優れている、以下同様) である。

(七) 粗い名は劣。

(八) 微細な名は勝。

(九) 微細色は、智によって識別されることが容易でない為、智から遠く離れており、故に、それらは遠い (+と呼ばれる) 。

(十) 粗い色は、智によって、識別されることが容易である為、智に近く、故に、近い (+と呼ばれる) 。

(十一) 不善の受・想・行・識は、名を無記とする果報と唯作の受・想・行・識からは遠く、また善受・想・行・識からも遠い為、それらは遠い (+と呼ばれる)

(十二) 不善の受・想・行・識は、不善の受・想・行・識に非常に近い為に、それらは近い（＋と呼ばれる）。善と無記の受・想・行・識は、善と無記の受・想・行・識に非常に近いので、これらは近い（＋と呼ばれる）。

それらの法を分別する法は、《清浄道論》第 14 章などで、見ることができる。もし、禅修行者が名色法と五蘊法によって、過去から現在、未来へと、徹底的に、三時の内と外を観照することができるならば（＋修習において、遺漏がなく完璧である）：

- 1、六処門と 42 身分の中の色法
- 2、善と不善速行心路過程の名法、及び離心路過程名法、すなわち、結生、有分と死亡、それらは粗い、微細、劣る、優れる、遠い、近い名色が皆含まれていて、遺漏のないものである。

故に、禅修行者は、名色法を上にも述べた如くに運用して、観照する（＋のがよい）：

- 1、色だけ、その後に
- 2、名だけ、その後に
- 3、名色の二者。

《法句經註》の中において、ある一対の（＋夫婦の）施主が、名色を二組に分けた後、名色法によって行法を観照し、アナーガミを証悟したという記載がある。こうしたことから、もし、禅修行者が個別に内外の三時の粗い、微細、劣、勝（＝優秀）、近い名色を観照する事ができたならば、尚良好である。



不浄観

仏陀は《増支部・山悦經》(Aṅguttara Nikāya Girimānanda Sutta) の中において、不浄想業処 (asubha saññā kammaṭṭhāna) について、言説している。これは、有情の有識不浄 (saviññāṇaka asubha)、すなわち、不浄観の事である。

仏陀は《メギヤ經》の中において、以下の様に言う：

Asubhā bhāvetabbā rāgassa pahānāya

——不浄観を修習して、貪欲 (rāga) を取り除くべきである。

《經集・勝利經》(Sutta Nipāta, Vihaya Sutta) の中において、有情に対する、不浄観を教えている。(＋それらは) すなわち、有識不浄であり；(＋もう一つは) 死体への不浄観、すなわち、無識不浄観 (aviññāṇaka asubha) である。不浄観は苦随念の一部分に属する。

有識不浄観

有情の 32 身分の嫌悪想を作意する不浄観は、二種類に分類することができる。すなわち、嫌悪作意 (paṭikūla-namasikāra) によって、ジャーナを証得する法と、身体の不浄過患を知見する過患随観法 (ādīnavānupassanā) である。もし、内部のすべての 32、またはいくつか、または一個の身分を作意する所の、嫌悪想 (＋を修習するの) であれば、禅修行者は、初禅を証得することができる；もし、同様の方法でもって、外部の身分を作意するのであれば、彼はまた、近行定を証得することができる。これらは、以前にも説明した。

ここでは、32 身分の過患随観法について説明する。32 身分の嫌悪相を目標として取り、「不浄、不浄」と観じて、智でもって、明晰に不浄相を知見する。順序良く繰り返し内を観じ、外を観じる。徐々に外部の範囲を広げていく。

この時、已に、究極色法と究極名法を知見する観智に善く慣れている為、内部と外部を交代に、32 身分の不浄の逆相を観照したなら、非常に速くに、32 身分の消失を見、ただ色聚だけを見ることになる。これは、観智がすでに、究極諦 (paramattha sacca) に対して、良好に育成されたのが原因である。内外の 32 身分の不浄を観照する時、もし、禅修行者が色聚を簡単に見ることができないのならば、彼は、個別に、または全体的に、身分の四界を識別する様にする。この様にすれば、彼は非常に容易に色聚を見ることができる。色聚が見えたならば、究極智を証得するまで、それらを分別し、次に、順序良く繰り返し、それらの三相を観照する。交互に、内部と外部を観ずる。そして、

禅修行者が、不浄観に満足を覚えた時に初めて、身分の四界を観ずること、及び色聚の中の究極法を観照する事に（+修習内容を）転換する。

虫の充満する身体

《泡沫比喻經》（*Phenapiṇḍūpama Sutta*）及びその註釈において、もう一つ別の有情の有識不浄観に言及している部分がある：この身体には虫が充満していて、非常に多くの虫が、この身体の中で、交配し、繁殖し、大便し、小便し、病気にしており、この身体はまた、彼らの「墓場」でもある。ここでは、不浄が充満している身体と嫌悪相を目標として、それを「不浄、不浄」と、順序良く繰り返し、内観と外観をする。（《相応部註》）。

この様に多数回観照したならば、已に究極諦に関して、良好な観智の力量を育成しているが故に、禅修行者は久しからずして、色聚を見ることができるようになる。色聚から究極色までを識別した後、これらの究極色の三相を、再度、観照する。もし、禅修行者が容易に色聚を見ることができないならば、彼は、不浄観の修習に満足を覚え（+る程実践し）た後、諸々の虫または虫が充満する身体の四界を識別する。この時、（+禅修行者は）非常に速く、色聚を見ることができるといっても、その智は、已に、究極諦に対して、良好な育成が出来ているが故に。色聚の中の究極色を識別した後、次にそれらの三相を観照する。内と外の二者を観ずる。

究極色の不浄相

究極色にも不浄相が存在する、すなわち：

- 1、匂い（*duggandha*）；
- 2、不浄（*asuci*）または嫌悪すべきもの；
- 3、疾病（*byādhi*）；
- 4、老（*jarā*）；
- 5、死（*maraṇa*）、すなわち、壊滅の時。（《相応部註》）。

観智でもって、これらの不浄相を識別した後、内外を順序良く繰り返し交代してそれらを「不浄、不浄」として観ずる。

この様にして、有識不浄に関して、不浄相を三種類に分類した後、以下の様に観ずる：

- 1、32 身分の不浄；
- 2、身体に充満する虫の不浄；
- 3、究極色の不浄。

無識不淨觀（死体の不淨を觀ずる）

Puna caparaṃ, bhikkhave, bhikkhu seyyathāpi passeyya sarīraṃ sivathikāya chaḍḍitaṃ ekāhamataṃ vā dvīhamataṃ vā tīhamataṃ vā uddhumātaṃ vinīlakāṃ vipubbakajātaṃ. So imameva kāyaṃ upasamharati ... 'ayampi kho kayo evaṃ dhammo evaṃ bhāvī evaṃ anatīto'ti.(Mahāsatipaṭṭhāna Sutta)

——次に、比丘たちよ。ある比丘は、死んで一日経った死体、二日経った死体、三日経った死体を見た。その死体は膨張し、変色し、膿液で満たされ、お墓に捨てられたものである。この死体を見て、彼は以下の様に己自身を觀照した：「私の身体もまた、この様な相がある、この相は、必ずや発生し、それは（＝彼は）この相から逃げる事が出来ない。」（《大念處經》）。

Dīghabhāṇakamahāsīvatthero pana 'navasivathikā ādīnavānupassanāvasena vuttā'ti āha.

——阿羅漢長部頌者大吉祥尊者（Mahāsīva）は、仏陀の教えた九墳墓不淨觀（navasivathikā asubha）は過患隨觀智である、という。

もし、上に述べたパーリ經典と註釈に基づいて、無識不淨觀を修習したいのであれば、禪修行者は必ずや、一個の死体を選んで觀照しなければならない。止禪の段階で、不淨觀を修習するのは、初禪を証得するためであるが、その場合、男性の禪修行者は、男性の死体を觀想しなければならず；女性の禪修行者は女性の死体を觀想しなければならない。これは、禪修行者は外部の死体に專注する必要がある、また近行定において、貪欲（rāga）が、生起して、禪修（定力）に干渉する可能性があるからであり、同性の死体を觀想する必要があるのである。

過患隨觀の修習における、觀禪の段階（＝己自身と他人の身体の過患）において、内外の過患を、順序良く繰り返し觀照する法では、禪修行者は性別に関係なく、觀照しやすい死体を選ぶことができる。たとえば、《經集・勝利經》の中において、比丘、比丘尼、男性居士、女性居士が指示を受けて、祥瑞（Sirimā）なる死体を目標にして、觀禪に属する不淨觀を修習したと、言及されている。

止禪の段階において、禪修行者はただ一個の外部に存在する死体に專注して、ジャーナの証得するものであるが、觀禪の段階においては、禪修行者は内外を交代して、過患を觀照するものである。

禪修の方法

禪修行者が徹底的に、順序良く繰り返し何度も内、外、過去、現在と未来の名色（五蘊）の三相を觀照する時、その觀智によって、極めて明るい光が生起する；または、以前にすでに修習した事のある第四禪に進入する事もできる。このジャーナに相応する智

の為に、極めて明るい光が生起する。順序よく定力を育成するか、または順序よく観禪の修習をした後、彼は、すでに死体を目標として修習する無識不浄観を実践するに、相応しいものになっている。もし、その光がまだまだ暗くて無力である場合、再度、順序良く定力を育成しなければならない。光が、定に相応する智によって、極めて明るく光る時、その時には、無識不浄観を修習することができる。

光が止智または観智によって極めて明るく光る時、禅修行者は光を用いて、己自身が見た事のある死体、または覚えている死体を禅修の目標として、それを照見することができる。智の光で照見するという事は、ちょうど小型のライトで照らす様なものである。当該の死体の不浄は、観智に置いて、明晰に顕現しなければならない。当該の死体がすでに腐乱し、悪臭のあるものであれば尚良い。その不浄に専注して「不浄、不浄」と観ずる。修習する時、心をして平静にその不浄を観じる時、禅修行者は観智でもって、己自身の不浄を、あの外部にある、腐乱した死体と同じであるが如くに、観照する事にチャンレンジしてみる。己自身の腐乱した躯体の不浄を見た時、それを「不浄、不浄」と観ずる。

もし、禅修行者が智でもって、己自身の不浄を照見できない時、彼は、再度、外部の不浄を観じ、その後あなたに内部を観ずる。もし、彼がこの様に多数回修習するならば、彼は、内部の不浄を見ることができる。もし、いまだ成功しないならば、智でもって、現在から（＋始めて）未来までの己自身を識別する。この様にすれば、己自身が死体に変化している不浄の様を、簡単に見ることができる。現在因と未来果の因果関係を識別できる禅修行者にとって、この観法は、非常に容易なものである。

もし、智でもって己自身の不浄を観照する事が出来るならば、彼は内と外とを交代しながら、それらを「不浄、不浄」として観照することができる。この様に修習する時、己自身が貪染している所の、他人を観照することもできる。徐々に範囲を拡大していき、内患と外観を交代して修習する。もし、彼が、この様に、内と外とで、多数回不浄を観照するならば、その前の観の修習の力量によって、また、究極定の修習の経験を積んでいるが故に、彼は内外の死体の色聚見ることができるか、または死体がゆっくりと一塊の白骨になり、その後骨灰になるのを見ることができる。

また、智でもって、徐々に死体の未来を観ずるならば、当該の死体がゆっくりと一塊の白骨になるのを見ることができるし、その後骨灰になるのを見ることができる。死体の、一つひとつの腐乱の段階を「不浄、不浄」として観ずる。もし、簡単に色聚を見ることができるならば、究極色（時に時節生色）を識別した後、それらの三相を観照する。

もし、容易に色聚を見ることができないのであれば、内外の死体の四界を識別する。この様にすれば、これらの死体の色聚を見る事ができる。もし、これらの色聚を識別する事が出来るならば、彼はまた、色聚の中の火界が持続的に不断に造り出す所の時節生食素八法聚をみることもできる。これらの色聚を識別した後、次にそれらの三相を觀照する。修習している不淨觀に満足した後にのみ、不淨觀から觀禪に轉換する。

特別の状況

もし、觀じられている死体の中に蛆虫がいた場合、禪修行者が、その死体を觀ずる時、時節生食素八法聚が見る以外に、その他の色聚も見る事がある、たとえば、明淨色聚とその他の非明淨色聚である。その原因は、彼は、その死体に依存して生きている所の蛆（死体の色聚と混ざり合っている）の色聚が見えたのであり、その場合、死体に淨色と四等起色が存在する訳ではない。内外の死体の色聚を識別した後、次に、その究極色の三相を觀照する。

縁起支

《清淨道論》第 20 章において、縁起支は、觀智の目標の内に列記されているが、この説は、《無碍解道》に基づくものである。故に、禪修行者は、縁起支も觀照して、次に、隨順縁起法によって、因果を識別しなければならない。すなわち、「無明が生起するが故に、行が生起する」などである。この段階においては、諸々の縁起支に対して、觀の修習を實踐するべきである。諸々の過去世と未來世に対して、以下の事を理解する事：

もし、今世を縁起輪轉の中間に置いたならば：

- 1、無明と行は前世に属する；
- 2、識、名色、六処、觸、受、愛、取、有は、今世に属する；
- 3、生と老死は、未來世に属する。

もし、一番目の前世を縁起輪轉の中間に置いたならば：

- 1、無明と行は、二番目の前世に属する；
- 2、識、名色、六処、觸、受、愛、取、有は、一番目の前世に属する；
- 3、生と老死は、今世に属する。

もし、一番目の未來世を縁起輪轉の中間に置いたならば：

- 1、無明と行は今世に属する；

- 2、識、名色、六処、触、受、愛、取、有は、一番目の未来世に属する；
- 3、生と老死は、二番目の未来世に属する、など等。これは不斷に連貫する、三世因果の觀法である。

幾つかの觀法の例

(一) 無明が生起するが故に、行が生起する：無明（生・滅）無常；行（生・滅）無常。

己自身の名色相續流の中の、すでに生起した、今まさに生起しつつある、これから生起する無明と行の無常を觀照する。通常、無明は、貪見グループの意門心路過程に属し、行は状況によって、善または不善速行意門心路過程に属する。たとえば、禪修行者のこの一生を引き起こす行は、かならず、過去世に造（ナ）した修行が原因であるに違いない。諸々の世において、すでに生じた、今まさに生じつつある、これから生じようとしている無明と行の無常を觀照する。同様の方法でもって、苦相と無我相を觀ずる。

(二) 行が生起するが故に、結生識が生起する；行（生・滅）無常；結生識（生・滅）無常。

一切のその他の果報識を無常として觀照する。すなわち、すべての六門心路過程、有分識と死亡識を觀照する。緣起第一法の中において、すでに識別した因果に基づいて、その他の緣起支を、生から老死までを、觀照する。順序良く繰り返し因果の三相を觀照する。經の教法によると、因果関係を識別している時、果報輪轉の法に属する所の識、名色、六処、触と受をのみ、識別すればよい、というのも確かな事である。（《大疏鈔》）。

觀禪の修習をする時、それらは別離（avinābhāva、不別離性）できない為、故に、それらを五門引轉、確定、速行、意門引轉と速行と共に、一纏めにして、觀照しても問題はない（いかなる究極界も遺漏しない為に）。己自身の能力に合わせて、最も遠い過去世から、最後の一個の未来世までを觀照する。順序良く繰り返し、内を觀じ、外を觀じる。外に関しては、全体として觀ずるものであつて、人とか有情とか分別してはならない。

40 種類の思惟法

《無碍解道》、《清淨道論》（第 20 章）が、思惟相（lakkhaṇa sammāsana）の段階における、40 種類の思惟法に言及しているが、暗記に便利な様に、大清淨寺

（Mahāvisuddhārāma）の住職が、その書《究極有色分別》（paramatthasarūpabhedanī）において書かれた、幾首の偈は、無常相の思惟の法を 10 個に；苦相は 25 個、無我相は 5 個に、列している。以下は、これらの偈に基づいて、三グループに分けた三相の思惟法の説明である。

無常相は十

Rūpaṃ aniccaṃ palokaṃ, calaṃ pabhaṅgu addhavaṃ

Viparināmāsāraṃ vibhavaṃ maccu saṅkhataṃ.

(一) 無常 (aniccato)

Aniccantikātāya, ādiantavantatāya ca aniccato. (Vism)

Aniccantikātāyāti accantikātābhāvato, asassatatāyāti attho.

Sassatañhi accantikaṃ parāya koṭiyā abhāvato. (Mahāṭīkā)

【名色には両端がある。始まりの端は「生起」であり、末端は「壊滅」である。それらは生起端と壊滅端と呼ばれる。名色は、常 (sassata) ではなく、それらは壊滅の末端を超える事は出来ない。壊滅の末端を超える事が出来ないが故に、また、それらには、一個の生起の端と、一個の壊滅の端があるが故に、それらは無常の法である。

五蘊法によって、色、受、想、行と識を觀照する。上に述べた定義を思惟した後、色 (受、想、行、識) を無常として觀ずる。

ここにおいて、「生起の始端を超えることができない」とは、名色の生起の前においては存在しておらず、生起する為に待機するとか、準備するとかの相も存在しない。また、壊滅の後、それらは一か所に集積するという事もない。それらは、ただ、発生する二つの不存在 (すなわち、生起の前と壊滅の後の、不存在がある) の間に、生、住、滅の刹那があるだけである。生起端と壊滅端があるが故に、また、この両端を超越する事が出来ないが故に、名色は無常と呼ばれる：こうしたことから】無常として觀ずる、すなわち、常または永恒はない、のである。

(二) 毀 (palokato)

Byādhi jarāmaṇehi palujjanatāya palokato. (Vism)

病老死によって毀壞されるが故に、毀として觀ずる。

(三) 動 (calato)

Byādhi jarāmaṇehi ceva lābhālābhādīhi ca lokadhammehi pacalitatāya calato. (Vism)

Lokadhammā lābhādihetukā anunayapaṭighā; tehi, byādhiādīhi ca anavaṭṭhitatā pacalitatā (Mahāṭīkā)

【愛と恨の基因は、世間法である。たとえば、得と失の如くに。これら世間法は、心をして、動揺せしめるが、それは愛と恨の如くである。名色は、病老死する事と得失などが原因で、世間法であり、動揺し、不安定である。】が故に、動揺または不安定として觀ずる。

(四) 壊 (pabhaṅguto)

Upakkamena ceva sarasena ca pabhaṅgu pagamanasīlatāya pabhaṅguto. (Vism)。

【それらは、自力か、または他力か、または自性を因として、混乱の中において壊滅する相を持つ。】壊＝混乱の中において壊滅する相を擁する。

(五) 不恒 (addhuvato)

Sabbāvatthanipātītāya, thirabhāvassa ca abhāvatāya addhuvato (Vism)

【落性を有する、すなわち、生命の如何なる時期においても、死ぬという事がある。たとえ青年であるとか、または楽しい幼少期であっても。これは正に、果実が、小さな粒の時から始まって、如何なる時期においても、落下する可能性がある事と同じである；たとえ落下しなくても（すなわち、死亡しなくても）、それには実質がなく、堅固性がない。】不恒として観ずる＝安定、堅固性がない。

(六) 変易法 (vipariṇāmadhammato)

Jarāya ceva maraṇena cāti dvedhā pariṇāmapakatitāya vipariṇāmadhammato. (Vism)

【老（または住）と死（壊滅）という二種類の変易性があるが故に】それらは変易法である。（その意味は、それらは生時から変じて、住時（+を迎え）または老い（+を迎え）、また壊滅時に変化するか、または死する）。

(七) 不実 (asārakato)

Dubbalatāya, pheggu viya sukhabhaṅjanīyatāya ca asārakato. (Vism)

【力が弱い為に、たとえば、白木質の様に、破壊を受けるが故に】それは不実であり、堅固な実質がない。

(八) 無有 (vibhavato)

Vibhavasambhūtātāya ca vibhavato. (Vism)

【生起の後、即刻壊滅し、増長、拡大または増益がなく、また、無有愛 (vibhava taṇhā) と無有見 (vibhava diṭṭhi) を基とした、徹底的な毀滅性の故に】それらは無有である＝それらは徹底的な毀滅性である。

(九) 死法 (maraṇadhammato = maccu)

Maraṇapakatitāya maraṇadhammato. (Vism)

【死（＝壊滅）性が有るが故に】それは死法であり、すなわち、死性を有しているのである（＝壊滅性の具備）。

(十) 有為 (saṅkhatato)

Hetupaccayehi abhisaṅkhatatāya saṅkhatato (Vism)

【因 (hetu、janaka) と助縁が和合することによって造られる】故に、それらは有為である＝不断に因と縁とによって造られる。

直接色法を引き起こす所の因は業であり、因 (hetu、janaka) である。煩惱輪転 (無明、愛、取) は、過去の業を支援する助縁である。煩惱輪転は縁力 (たとえば、親依止) によって、善業を支援するが、また、縁力 (たとえば、親依止) と因 (たとえば、俱生) によって、不善業を支援する。

次に、心、時節と食もまた、色法を支援する助縁である。心、時節と食は、些かの心生、時節生、食生色法を引き起し、また些かの色法を支援するものの、しかし、これは業力が業生色を引き起すのとは、方法が異なる。心は、俱生などの縁力でもって、心生色を支援する；時節は、親依止縁力などでもって、時節生色を支援する；食は、食縁力などでもって、食生色を支援する。それらは業力ではない為、因 (janaka) ではなく、ただの助縁である。

果報名法の因 (hetu、janaka) は業である。煩惱輪転、すなわち、無明、愛と取は、上に述べた色法と同じで (助縁で) ある。一切の善、不善と無記としての、現在因の依処、助縁、触などは、助縁である事に、注意する事。上に述べた説明に基づいて、色 (受、想、行、識) を、「無常」または「毀」等々として、観ずる。

以上が、無常想の 10 種類の思惟法である。

苦相は 25

Dukkhañca rogāghaṃ gaṇḍaṃ, sallā bādhaṃ upaddavaṃ

Bhayī tyūpasaggā tāṇaṃ, aleṇā saraṇaṃ vadhaṃ.

Aghamūlaṃ ādīnavaṃ sāsavaṃ mārāmīsaṃ.

Jātijjaraṃ byadhi sokaṃ, parideva mūpāyāsaṃ

Saṃkilesasabhāvakaṃ.

(一) 苦 (dukkhato)

Uppādavayapaṭipīḷānatāya, dukkhavattatūya ca dukkhato. (Vism)

Uppādavayapaṭipīḷānatāyāti uppādena, vayena ca pati pati khaṇe khaṇe taṃsamaṅgino vibādhanasabhāvattā, tehi vā sayameva vibādhetabbattā. Udayabbayavanto hi

dhammā abhiñhaṃ tehi paṭipīlītā eva honti, yā pīlanā 'saṅkhāra dukkhatā'ti vuccati.

Dukkhavattutāyāti tividhassāpi dukkhassa,

saṃsāradukkhassa ca adhiṭṭhānabhāvato. (Mahāṭīkā)。

【名色は、一つひとつの刹那生滅の逼迫性によって「虐め」があり、名色を擁する者、また名色自体が、不断に生・滅の逼迫を受けるが故に：苦苦（すなわち、苦受）であり、変易苦（すなわち、樂受、その意味は、住時は樂であり、壞滅時は、苦である）と行苦（すなわち、捨受+受の名色を除く）の依処であり、または生死輪廻苦の依処である】
苦＝卑劣と苦。

行苦：三界の一切の行法は、皆、行苦と呼ぶことができる。苦受と樂受は、それぞれ、苦苦と変易苦と呼ばれる為に、ここでは、行苦を下記の様に定義する：捨受に一切の三地行法を加えて、受を除く（すなわち、一切の三界行法から、苦受と樂受を除く）。一切の三地名色行法は、皆行苦と呼ばれる。というのも、それらを生起せしめる所の、有為苦 (saṅkhata dukkha) が存在する為と、不断に生・滅の圧迫を受けるが故に。

(二) 病 (rogato)

Paccayayāpanīyatāya, rogamūlatāya ca rogato. (Vism)

【縁によって維持を得る、これは病の根本である】それらは病＝痛苦の病である。】

【その意味は、名色は、身・心の一切の疾病の発生する基地であるが故に、それらは慢性病の様である。】

(三) 悪 (aghatō)

Vigaraṇāyātāya, avaḍḍhiāvahanatāya, aghavatthutāya ca aghato. (Vism)

【仏陀と、その他の聖者が呵責する所の、不善法であり、損失を招き、悪の発生する基地である】故に、それらは悪＝損失または無益である。

(四) 瘡 (gaṇḍato)

Dukkhatāsūlayogitāya, kilesāsucipaggharanatāya, uppādajarābhaṅgehi

uddhumātaparipakkapabhinnatāya ca gaṇḍato. (Vism)

【苦（すなわち、苦苦、変易苦と行苦）と相応して、目標または相応法の縁によって、常に煩惱(たとえば、貪欲)が流れるという不浄を引き起す。その前にはなかったのに、突然に生起する所の膨張；住時(老)の成熟と、壞滅時の破壊】の為に、それらは瘡(癩)である。

「目標または、相応法の縁によりて、常流煩惱(たとえば、貪欲)の不浄が引き起される。」とは、後生貪欲は、前生貪欲を目標にとって生起する事を言うのである；煩惱(たとえば、貪欲)は、心と心所が、煩惱を齎す目標を縁に取る事によって生起する。

それらは名色から流れ出て来る「膿」であり、それはまさに、瘡から流れ出る膿の様である。

(五) 箭 (sallato)

Pīlājanakatāya, antotudanatāya, dunnīharanīyatāya ca sallato. (Vism)

【それらは、生・滅の逼迫を齎すが故に；身体内に刺された苦受の様に、行法は生起する時に、内において、生・滅でもって刺すが故に；聖道で抜く事を除けば、名色行法は、「鉤針」の様に、取り出しにくい】故に、それらは箭である＝刺す箭である。

(六) 疾 (ābādhato)

Aseribhāvajanakatāya, ābādhapadaṭṭhanatāya ca ābādhato. (Vism)

【(一) 重病を罹患した病人の様に、己自身で歩く事も動く事もできず、他人の援助を必要としているのと同じ様に、諸蘊は皆、己自身独自に生起することができず、その他(の縁)に依存する；(二) それらは一切の疾病の因であるが故に。】それらは疾である＝頑なる疾病。

(七) 禍 (upaddavato)

Aviditānaṃ yeva vipulānaṃ anattānaṃ āvahanato, sabbupaddavavattutāya ca upaddavato. (Vism)

【それらは、多くの、予測できない過患、たとえば、懲罰、老い、病、死、悪道への墮落等を齎すが故に；それらは一切の過患の基地であるが故に】それらは禍である。

(八) 畏怖 (bhayato)

Sabbabhayānaṃ ākaratāya, dukkhavūpasamasāṅkhātassa.

Paramassāsassa paṭipakkhabhūtātāya ca bhayato. (Vism)。

【(一) 諸蘊は危険な「陷穽」である。今生と来世の危険。(二) それらは苦の寂滅と言われる至上解脱涅槃と対抗するが故に、それらは畏怖であり、無楽の大畏怖である。】

(九) 難 (ītito)

Anekabyasanāvahanatāya ītito. . (Vism)

【諸蘊が種々の不幸を招くが故に】危難である。

(十) 災難 (upasaggato)

Anekehi anatthehi anubaddhatāya, dosūpasatṭhatāya, upasaggo viya anadhivāsanārahatāya ca upasaggato. (Vism)

【(一) 種々の不利に随追される。たとえば、外部では親族を失うなど、内部では疾病(+)に見舞われる) ;

(二) 疾病と夜叉鬼神が齎す痛苦の如くに忍び難い】故にそれらは災難である。

(十一) 非保護所 (atāṇato)

Atāyanatāya ceva, alabbhaneyyakhematāya ca atāṇato. (Vism)

【(一) それらが生起した後、壊滅しない様に保護する事が無い。というのも、諸蘊は生起した後、必ず壊滅するが故に ;

(二) 保護するという事も出来なければ、安全を与える事もできない】故に、それらは非保護所である。

(十二) 非避難所 (aleṇato)

Allīyitum anarahatāya, allīnānampi ca leṇakiccākāritāya aleṇato. (Vism)

【(一) 苦難を恐れて、避難を求める者に対して、諸蘊は、彼らの避難所として値しない ;

(二) それらは、この身(蘊)に依存している者が、苦難に面している時に、その苦を完全に取り除くことができないが故に】それらは避難所で有り得ない。

(十三) 非帰依処 (asaraṇato)

Nissitānaṃ bhayasārakattābhavena asaraṇato. (Vism)

【苦難を恐れて、依止を探し求める者に対して、それらは彼らの畏怖を取り除くことができない。たとえば、老病死などなど】故にそれらは帰依処とはなり得ない。

(十四) 殺戮者 (vadhakato)

Mittamukhasapatto viya vissāsaghātītāya vadhakato. (Vism)

【それらは敵でありながら、笑顔の友人の様に偽装して、それらに近い親しい人を殺すことができる】故に、それらは殺戮者 (vadham) である。時々刻々、(俗諦の) 人、天神、梵天神、有情を殺しており、彼らが、生、住、壊滅の三刹那において、超越できない様にせしめている。

それらに近い存在、また「色・受・想・行・識は楽であり、苦ではない」と思う人を殺害するが故に、諸蘊は、親しい人を殺害する凶手である。有情は諸蘊に対して、「それは私のものである」 (etaṃ mama) という邪見を持つが故に、確実に不幸である。これは、苦諦と呼ばれる所の蘊が、集諦と呼ばれる所の愛貪 (taṇhā lobha) によって生起する事を言うのである。また、親しい者を殺害するが如くに、諸蘊はそれと親しい人を殺害する。故に、「近親者の殺害者」と呼ばれるのである。

(十五) 悪の根 (aghamūlato)

Aghahetutāya aghamūlato. (Vism)

Aghassapāpassahetutā aghahetutā (Mahāṭīkā)

【それらは悪の基因であるが故に】それらは悪の根である。

(十六) 患 (ādīnavato)

Pavattidukkhatāya, dukkhassa ca ādīnavatāya ādīnavato, atha vā ādīnaṃ vāti gacchati pavattatīti ādīnavo, kapaṇamanussassetarṃ adhivacanaṃ, khandhāpi ca kapaṇāyevāti ādīnavasadisatāya ādīnavato. (Vism)。

Pavattidukkhatāyāti bhavapavattidukkhabhāvato. Bhavapavatti ca pañcannaṃ khandhānaṃ aniccādiākārena pavattanameva, so ca ādīnavo. Yathāha ‘yaṃ bhikkhave pañcupādānakkhandhā aniccā dukkhā vipariṇāmadhammā. Ayaṃ bhikkhave pañcasu upādānak - khandhesu ādīnavo’ti. Tenāha ‘dukkhassa ca ādīnavatāyā’ti. Ādīnanti bhāvanapurisakaniddeso yathā ‘ekamanta’nti, ativiya kapaṇanti attho. Bhusattho hi ayaṃ ākāro. (Mahāṭīkā)

【(一) 五蘊の無常などの諸法は、「有転起」(bhava pavatti) と呼ばれる。これらの法の存在は、また、諸蘊の過患と言われる。仏陀は、以下の様に言う：「比丘たちよ。この無常苦変易法(anicca dukkha vipariṇāma dhamma)は五取蘊の過患である。」というのも、「有転起輪転苦」が存在するが故に、五蘊の無常などの諸法が存在する；(二) 五蘊(苦諦)の過患があるが故に、それはすなわち、無常苦変易法である】が故に、それらは悪染の過患である。(これは、無常苦変易法を具備する所の、諸法を指して言うのである。)

【また、困窮者は過患である。五蘊は、あの帰依のない困窮者の如くである】が故に、それらは無帰依の困窮者である。(これは、生起した後、壊滅時に到達した時、それらは何等の依止も無く、壊滅を免れない。)

(十七) 有漏 (sāsavato)

Āsavapadaṭṭhānatāya sāsavato. (Vism)

Āsavānaṃ ārammaṇādinā paccayabhāvo āsavapadaṭṭhānatā. (Mahāṭīkā)

【名色の基因としての煩惱輪転(無明、愛、取)は、有漏法(āsava dhamma)である。これらの有漏法の生起は、五蘊(名色)が所縁縁力(ārammaṇa paccaya satti)等の縁力で支援するのが原因である。五蘊(名色)は有漏法の近因であるが故に】それらは有漏であり、すなわち、四有漏法の増長である。

(十八) 魔食 (mārāmisato)

Maccumārakilesamāraṇaṃ āmisabhūtatāya mārāmisato. (Vism)

Maccumārassa adhiṭṭhānabhāvena, kilesamārassa paccayabhāvena saṃvaḍḍhanato āmisabhūtatā, khandhāpi khandhānaṃ āmisabhūtā paccayabhāvena saṃvaḍḍhanato, tadantogadhā abhisaṅkhārā. Devputtamārassa pana 'mameta'nti adhimānavasena āmisabhāvoti khandhādimārānampi imesaṃ yathārahaṃ āmisabhūtatā vattabbā. (Mahāṭṭikā)。

【魔には五種類ある、すなわち、天子魔、煩惱魔、蘊魔、死魔と行作魔 (devaputta māra, kilesamāra, khandha māra, maccumāra, abhisaṅkhāramāra) である。

これらの中で、《清浄道論》は、煩惱魔と死魔について言及している。疏鈔は、すべての五魔は、皆含まれると言う。

諸蘊は死魔 (死亡) が発生する地である。(その意味は、蘊が無ければ、死亡もない、という事である。諸蘊は煩惱輪転 (無明、愛と取) の依止の縁であり、それが増長する縁でもある。蘊は蘊の因であるが故に、蘊は蘊の食べ物でもある。こうしたことから、蘊は蘊が依止して生起する所の因であり、また、蘊を増長せしめる因でもある。新しい生命を引き起す事の出来る善と不善行は行作魔であり、これもまた五蘊の中に含まれる。蘊は行作を因にして生起する：行作は、また、蘊に依存して生起する。行作はまた、善行と不善行の名蘊でもある。天子魔に関しては、それを「増上慢食」(adhimāna āmisa) として理解しなければならない。それはすなわち、「この一切の法は、すべて私のものである」(etaṃ mama=mametaṃ) と思う事である。五蘊は、天子、煩惱、蘊、死、行作の五魔が「食べたり、嚼したり、用いたり」するが故に】それらは五魔の食べ物である。

(十九～二十一) 生法、老法、病法

(jātidhammato, jarādhhammato, byādhidhammato)

Jātijarābyādhimaraṇapakatitāya jātijarābyādhimaraṇa dhammato. (Vism)

【諸蘊には、生 (生時)、老 (住時)、病 (と死=壊滅時) があるが故に】それらは生老病の法である。(死法はすでに、無常相の中に列記されている)。

(二十二～二十四) 愁法、悲法、惱法

(sokadhammato, paridevadhammato, upāyāsadhammato)

Sokaparidevaupāyāsahetutāya sokaparidevaupāyāsa dhammato.

【諸蘊は愁悲悩の生起の因であるが故に】それらは愁、悲、悩法である。

(二十五) 雑染法 (saṅkilesikadhammato)

Taṇhā - diṭṭhi - duccharita - saṅkilesānaṃ visayadhammatāya saṅkilesikadhammato.
(Vism)。

Saṅkilesattayaggahaṇena tadekaṭṭhānaṃ dasannaṃ kilesavatthūnampi saṅgaho
daṭṭhabbo. Tadārammaṇā hi dhammā tadanativattanato saṅkilesikā eva. Tathā khuddā,
taṇhā, jaṭādīsu sarīrassa, saṅkilesassa ca saṅgaho daṭṭhabbo. (Mahāṭīkā)。

【煩惱の所縁としての諸蘊は、心路過程または有情をして、三雑染法（すなわち、愛雑染、見雑染、悪行雑染）によって、汚染せしめるが故に】それらは雑染法＝愛、見、悪行の三雑染の増長または十煩惱＝である。上に述べた説明を詳細に閲読し、その後、名色を五蘊に分けて、一つひとつの思惟法ごとに、一つひとつの蘊を、「苦、苦」；「病、病」等と観照する。

無我相は五

Anattā ca param rittam, tuccham suññanti tālīsam
Vedanādayo khandhāpi, tatheva pañcakāpivā.

(一) 無我 (anattato)

Sāmi - nivāsi - kārakavedakādhiṭṭhāyakavirahitatāya suññato.
Sayañca assāmikabhāvādītāya anattato. (Vism)

【五蘊には主、住、造作、受と決意諸性 (sāmi、nivāsi、kāraḥ, vedaka、adhiṭṭhāyaka)
がないが故に、以下のものがない：

- 1、主我 (sāmi atta) : 諸蘊を擁する我；
- 2、住我 (nivāsi atta) : 諸蘊の交換を望まない。すなわち、一世毎に同じ身体に住みたいと思う我；
- 3、造作我 (kāraḥ atta) : 一切の仕事と作用を実行する我；
- 4、受我 (vedaka atta) : 目標を感受する我；
- 5、決意我 (adhiṭṭhāyaka atta) : 一切の仕事と作用に、判断を下す我。】
故に、無我は非主、非住、非造作、非受と非決意であると言える。

(二) 空 (suññato)

【諸蘊は、主我、住我、造作我、受我と決意我が無いが故に】空である。

(三) 敵 (parato)

Avasatāya avidheyyatāya ca parato. (Vism)。

Avasatāyāti avasavattanato. Yathā parosatanto puriso parassa vasaṃ na gacchati, evaṃ subhasukhādibhāvena vasa vattetuṃ asakkuṇeyyato. Avidheyyatāyāti 'mā jīratha, mā mīyathā'tiādinā vidhātuṃ asakkuṇeyyato. (Mahāṭīkā)。

【諸蘊は、縁起の段階で言及した所の、諸因によって生起する。まさに、主権を持つ人が、他人の希望に従う必要がないのと同じ様に、諸蘊は人の願望と関係がない。例えば、苦樂が生起しない様に、樂受だけ生起せよと思っても、美しくありたいと思っても（＋それは不可能な）如くに。それらは、人の願望に従わないし、
「老いたくない；病気したくない；死にたくない」（＋という願いも）受け付けない。】
故に、それらは、敵である＝外から来る親しくない者。

(四) 無 (rittato)

Yathā parikkappitehi dhuvasubhasukhāttabhāvehi rittatāya rittato. (Vism)。

【この教えの外において、邪見を執取する者は、五蘊（名色）は常、淨、樂、我（dhuva、subha、sukha、atta）であると思うのである。しかしながら、実際は、それらは無常・無淨・無樂・無我なのである。】

故に、それらは無であり、すなわち、常、淨、樂、我ではないのである。

(五) 虚 (tuccato)

Rittatāyeva tucchato appakattā vā, appakampi hi loke tucchanti vuccati. (Vism)。

【五蘊（名色）が常、淨、樂、我ではないが故に、それらは虚である。または、五蘊（名色）の中には、常、淨、樂、我がないとは言うものの、おれらは究極界の中に存在しないと言う訳でもなく、実際は、究極の中にそれらは存在する。それらは、生起、住、壊滅の三時の中に存在する。故に究極名色法はただ、非常に短い時間の中において存在しているのであって、故に、それらは「虚」（tuccha）なのである。「虚」の、もう一つ別の意味は、少ない、である。】故に、五蘊（名色）は虚である。



無常、苦、無我の基因

Rupaṃ bhikkhave aniccaṃ, yopi hetu yopi paccayo rūpassa uppādāya, sopi anicco, aniccasambhūtaṃ bhikkhave rūpaṃ, kuto niccaṃ bhavissati.

(Saṃyutta Nīkāya, Sahetu Anicca Sutta. 《相応部・有因無常經》)

——「比丘たちよ。色は無常である。直接引き起こす因 (hetu、janaka) を有し、(＋それは) また、それを支援する縁 (助縁、paccaya、upatthambhaka) でもあり、これらの因と縁は、無常である。比丘たちよ。無常の因によって引き起される色は、なぜにして、常で有り得るか？」

仏陀のこの經の教えによると、五蘊を引き起す所の無明、愛、取、行及び業の諸々の因自体は、無常・苦・無我なるものであって、故に、名色または五蘊の諸々の果もまた、無常・苦・無我なのである。禅修行者は智でもって観照して、「諸々の因自体が無常・苦・無我であり、故に、諸々の果もまた無常・苦・無我なのである」事を知見しなければならぬ。

理法観の 200 種類の思惟

色蘊または一つひとつの蘊の中において、十個の無常随観、25 個の苦随観、五個の無我随観、合計 40 種類の思惟法が、存在している。一つひとつの蘊には、それぞれ 40 種類の思惟法がある為、五蘊の理法観は合計 200 種類の思惟法がある事になる。

先に、名業処表に基づいて、一つひとつの種類毎の、心路過程における全体的な系列の五蘊の無常をのみ、観照する。内と外を交代しながら、すべての六所縁グループを、40 種類すべての思惟法の修習が完成するまで、観照する。その意味は、禅修行者は 40 回修習しなければならない、という事である。

同様に、五蘊法を (見えるものから始めて) 最も遠い過去世から、最後の一個の未来世まで、40 種類のすべての随観を修習する。この様にするならば、もう一つ別に 40 回修習する訳である。勿論、更に多数回、修習するならもっと良い。ここにおいても、内観も外観も修習しなければならない。

もし希望するならば、禅修行者は名色法を採用して、内外を交代しながら、六種類すべての心路過程について、40 種類の随観を修習する。その後、名色法を採用して、最も遠い過去世から、最後の一個の未来世まで、40 種類の随観を修習する。この様に、内外を、順序良く繰り返し何度も観照する。

慧の成就

Evaṃ kālena rūpaṃ kālena arūpaṃ sammasitvāpi tilakkhaṇaṃ aropetvā anukkamena paṭipajjamāno eko paññābhāvanaṃ sampādeti. (Vism)

Anukkamenāti udayabbayañāṇadhigamānukkamena paññābhāvanaṃ sampādeti arahattaṃ adhigacchati. (Mahāṭṭkā)。

もし、禪修行者が名色法と五蘊法を（+用いて修習でき）その上、12 処法と 18 界法でもって、観禅の修習をする事が出来るならば、彼は以下の様に実践する：

- 1、ある時は、色のみを観ずる；
- 2、ある時は、名のみを観ずる；
- 3、ある時は、名色の二者を同時に観ずる；

または

- 1、ある時は、色のみを観ずる；
- 2、ある時は、受のみを観ずる；
- 3、ある時は、想のみを観ずる；
- 4、ある時は、行のみを観ずる；
- 5、ある時は、識のみを観ずる；
- 6、ある時は、内を観ずる；
- 7、ある時は、外を観ずる；
- 8、ある時は、内外の過去、現在と未来を観ずる；
- 9、ある時は、無常相を観ずる；
- 10、ある時は、苦相を観ずる；
- 11、ある時は、無我相を観ずる。

そしてまた、観智の順序に従って、観禅の修習が出来るならば、彼は「慧の修」(paññā bhāvanā) の成就、すなわち、阿羅漢果を証悟することができる。もし、いまだ成就することができないならば、観の修習を順序良く繰り返し何度も実践すること。もし、それでも成功しないのであれば、彼は七色観法と七非色観法の修習に転じるのがよい。

七色観法 (Rūpa Sattaka Vipassanā)

‘Ādānanikkhepanato, vayovuḍḍhatthagāmito; āhārato ca ututo,
kammato cāpi cittato; dhammatārūpato satta, vitthārena vipassatī’ti.

(一) 取捨色観法 (ādānanikkhepa rūpa)

(ここで言う「取」は結生の事で；「捨」は死亡の事である。)
順序良く繰り返し、内外を観照する時、結生から死亡に至る色法の三相を観照する。

(二) 年齢によって増長し生滅する色の観法

(vayo vuḍḍhatthaṅgama rūpa)

それぞれの年齢の段階における色法の壊滅を観照する。仮に、禅修行者の寿命を 100 年とする (もっと長い、または短い可能性はある)

- 1、100 年を 3 齢に分ける。すなわち、初齢は 33 年、中齢は 34 年、後齢は 33 年とする。一つひとつの各齢は、約 33 年であるとする。
- 2、100 年を 10 個の段階に分ける。一つひとつの段階は 10 年である。
- 3、100 年を 20 個の段階に分ける。一つひとつの段階は 5 年である。
- 4、100 年を 25 個の段階に分ける。一つひとつの段階は 4 年である。
- 5、100 年を 33 個の段階に分ける。一つひとつの段階は 3 年である。
- 6、100 年を 50 個の段階に分ける。一つひとつの段階は 2 年である。
- 7、100 年を 100 個の段階に分ける。一つひとつの段階は 1 年である。
- 8、100 年を 300 個の段階に分ける。一つひとつの段階は一季 (緬甸は一年に、三季を数える) である。
- 9、100 年を 600 個の段階に分ける。一つひとつの段階は二か月である。
- 10、100 年を 2400 個の段階に分ける。一つひとつの段階は半月 (15 日) である。

次に、一日毎の色法を：

- 1、昼と夜の二段階に分ける。
- 2、昼間を、朝、日中、午後の三個の段階に分け；夜は初夜、中夜、後夜の三個の段階に分ける。

一つひとつの段階において転起する所の色法の三相を順序良く繰り返し観照する。
(仮に聚網を 100 年とした場合、毎日毎の六段階を観じなければならない。一日観ずれば終わり、という事ではない。)

その後、六個の部分の中において、転起する色法の三相を観ずる：

- 1、足を挙げて、足が地面から離れる時に、転起する色法；
- 2、前に向かおうとして、動かない方の足において転起する色法；
- 3、動かない足を超えて、前へ進もうとする時に、転起する色法；

- 4、足を降ろす時に転起する色法；
- 5、（+足が）地面に着く時に転起する色法；
- 6、地面を踏みしめた時に転起する色法。

近察 (upalakkhaṇa) と顕示 (nidassana) の方式（たとえば、「影を見るだけでそれが何かを知る事」）によって、姿勢を觀照する事と、行動における色法の三相の指示を理解する事。100年の内の、毎日発生する所の一切の身体動作を觀照する。

(三) 食所成色觀法 (āhāra maya rūpa)

毎日を二つの部分に分ける。この二時の四相続色 (catusanti rūpa、すなわち、業、心、時節、食の四種類の因によって引き起こされる色法) の三相を觀照する。すなわち：

- 1、飢餓 (=空腹) の時に転起する四相続色；
- 2、満腹の後に転起する四相続色。

(四) 時節所成色觀法 (utu maya rūpa)

以下の、毎日生起する所の色法の三相を觀照する：

- 1、暑い時に転起する四相続色；
- 2、寒い時に転起する四相続色。

(五) 業生色觀法 (kammaja rūpa)

一つひとつの処門の色法の生・滅を識別した後、それらの三相（一つの処門を觀じ終わった後初めて、もう一つ別の処門の色法を觀ずる）を觀照する。

- 1、眼門：目の中に生起する所の 54 種類の色法；
- 2、耳門：耳の中に生起する所の 54 種類の色法；
- 3、鼻門：鼻の中に生起する所の 54 種類の色法；
- 4、舌門：舌に生起する所の 54 種類の色法；
- 5、身門：身体に生起する所の 54 種類の色法；
- 6、意門：心臓の中に生起する所の 54 種類の色法。

毎日、一つひとつの処門の中において生起する色法を觀照する事。

(六) 心等起色観法 (cittasamuṭṭhāna rūpa)

毎日、以下の時刻において生起する所の四相続色を、順序良く繰り返し、観照す：

- 1、楽しい時に生起する色法 (somanassita、喜びの時) ；
- 2、嬉しくない時に生起する色法 (domanassita、憂の時) 。

(七) 法性色観法 (dhammatā rūpa)

禪修行者は非有情界、根と無関係 (anindriya baddha) なもの、例えば鉄、銅、鉛、金、銀、真珠、宝石、猫目石、ほら貝、水晶、珊瑚、樹木、水、地、森林、山等の時節生食素八法聚と声九法聚を観照しなければならない。先に、智の光でもって、それらの四界の、色聚が見える様になるまで、識別し、次に、これらの色聚の中の8、または9種類の究極色を識別する。次に、これらの色法の三相を順序良く繰り返し観照する。

註：一番目の項から六番目の項の色法は、有情界に属する色法である。これに対しては、内と外と共に観照しなければならない；七番目の項、法性色はすなわち、非有情無執取行法であり、これに対しては、外の非有情界のみ、観ずればよい。

七非色観法 (Arūpa Sattaka vipassanā)

七種類の非色観法がある。

すなわち、聚によって、双によって、刹那によって、次第によって、除見によって、去慢によって、破欲によって (kalāpa, yamaka, khaṇika, paṭipati, ditṭhi ugghāṭana, māna samugghāṭana, nikanti pariyādāna) 。

(一) 聚観法

七色観法の中の、色法を無常 (または苦、または無我) として「修観の心」を観照し、次に「後生修観の心」を、無常 (または苦、または無我) として観ずる。この観の修習法は聚観法と言う。

七色観法の中の色法を、一体のグループに纏めて、それらを「取捨色」などとして分ける事なく、それら全体を無常として観ずる。上に述べた色法を無常として観ずる修観の心に関して、後生修観の心でもってその無常を観ずる；次に、後生修観の心でもって、それを苦を観ずる；及び、後生修観の心でもって、その無我を観ずる。

また、七色観法の色法の全体を苦として、この、色を苦として観ずる修観の心を、後生修観の心でもって、その無常を観ずる；次にそれを苦として観じ；及びそれを無我として観ずる。

また、七色観法の中の色法の全体を無我とし、この、色を無我として観ずる修観の心を、後生修観の心でもって、その無常を観じ；次にそれを苦として観じ；及びそれを我として観ずる。これがすなわち、聚観法であり、すなわち、七色観法の中の色法を、一体のグループにして、これを観ずる観法である。

前生修観の心と後生修観の心

《アビダンマ論註》の中における、智分別 (Ñāṇa Vibhaṅga) の註釈では、凡夫と学者の修観の心は、大善速行意門心路過程であると、言及している。

‘Sekhā vā puthujjanā vā kusalaṃ aniccato dukkhato anattato vipassanti, kusale niruddhe vipāko tadārammaṇatā uppajjati.’

「有学聖者と凡夫は、善法を無常、苦、無我として観照する。善速行 (vipassanā kusala javana) の滅尽を観じた後、欲界果報彼所縁はその後に生起する。

‘Taṃ kusalassa javanassa ārammaṇabhūtaṃ vipassitakusalaṃ ārammaṇaṃ katvā uppajjati attho.’

彼所縁の欲界果報心として生起し、善速行の目標を観ずる善法を目標として取る。
(Abhi-com)。

上に述べた経典によると、彼所縁は初観速行 (taruṇa vipassanā javana、すなわち、未成熟の観速行) の後において、生起する事が出来る為、注意する事。

Tilakkhaṇārammaṇikavipassanāya tadārammaṇaṃ na labbhati.

Vuṭṭhānagāminiyā balavavipassanāya tadārammaṇaṃ na labbhati.

上に述べた経典のよると、彼所縁は強力な観速行 (balava vipassanā javana) の後に生起することができない、という事に注意する事。

表 12-1 : 観速行意門心路過程

意門引転		速行 (7X)	有因彼所縁 (2X)	無因彼所縁 (2X)
1.喜俱智相応	12	34	34	12/11
2.捨俱智相応	12	33	33	11/11
3.喜俱智不相応	12	33	33	12/11
4.捨俱智不相応	12	32	32	11/11

一性理 (ekatta) に基づいて、観速行意門心路過程全体は、以下の様に呼ばれる：

- 1、無常を観ずる心：苦を観ずる心：無我を観ずる心。
- 2、第一心、第二心などなど。
- 3、前生心と後生心。

その理由は、一番目の観速行意門心路過程の中で、その目標は七種類の色観法の中の色法であるからである；二番目の観速行意門心路過程の中で、その目標は、第一番目の観速行意門心路過程、すなわち、名法である。同一の一個の心路過程の中で、一心が色を目標に取り、もう一つ別の一心が名を目標に取ることは不可能である。故に、色を目標に取るのは、一個の心路過程であり、名を目標に取るのは、また別の一個の心路過程である。一性理に基づけば、いわゆる前生心または後生心とは、心路過程全体の事である旨、理解する必要がある。彼所縁はある場合もあり、ない場合もあり得る。もし、彼所縁が生起したならば、状況に応じて、それは無因であったり、有因彼所縁であったりする。

(二) 双観法

取捨色を無常として観照した後、次に後生心でもって、修観の心を無常として観照し、次に苦として観じ、及び無我として観ずる。(取捨色を苦と無我とする、修観の心の、その観法は上と同様である)。

年齢の増長に応じて消滅する色、食所成色、時節所成色、業生色、心等起色と法性色の観法もまた同じである事に注意を払う事。聚観法において、七色観法の中のすべての色法を一体として、別けて観照されるものはない、とする；双観法において、それらは個別の観法の色として分類する。一つひとつの観法を徹底的に観ずるべきである。特に年齢の増長によって消滅する色に関しては：生命の各々の段階において、それらの色法を観照し、次に、修観の心を観照する。たとえば、初齢の色法を観照し、その後にその修観の心を観照する：次に、中齢の色法を観照し、その後に、その修観の心を観照するなど等である。その他の色法の観法もまた、同様である事を理解する事。

(三) 刹那観法

取捨色を無常として観じ、その後に：

- 1、第二心 (第二観速行心路過程) でもって、一個目の修観の心を無常として観照する。
- 2、その後に、第三心でもって、第二心を無常として観ずる。
- 3、その後に、第四心でもって、第三心を無常として観ずる。
- 4、その後に、第五心でもって第四心を無常として観ずる。

(順序良く繰り返しそれらを苦として、無我として観ずる)

取捨色を苦、無我として観ずる観法もまた同様である事を理解する。その他の色(たとえば、年齢の増長によって消滅する色)の観法もまた同様である。七色観法に基づいて、一つひとつの種類毎の観法の中の色法を観照する。一つひとつの種類毎の観速行心路過程は、皆、連続して四回、後生心(後生心路過程)によって、前生心(前生心路過程)を観ずる。

(四) 次第観法

取捨色を無常として観照した後、次に、連続して、以下の後生心でもって、前生心を無常として観ずる：

- 1、第二心でもって、第一心を観ずる；
- 2、第三心でもって、第二心を観ずる；
- 3、第四心でもって、第三心を観ずる；
- 4、第五心でもって、第四心を観ずる；
- 5、第六心でもって、第五心を観ずる；
- 6、第七心でもって、第六心を観ずる；
- 7、第八心でもって、第七心を観ずる；
- 8、第九心でもって、第八心を観ずる；
- 9、第10心でもって、第九心を観ずる；
- 10、第11心でもって、第10心を観ずる。

それらの苦と無我也観ずる事。(取捨色を苦とし、無我として観ずる観法もまた斯くの如くであることを理解する；その他の色の無常、または苦、または無我を観ずる観法もまた同様である。)

(五) 除見観法

徹底的に、行法を無我として観ずるのは、すなわち、除見である。無常随観智と苦随観智の、親依止縁力の支援の下、無我随観智は、見(我見)を断じ除く事ができる。

(六) 去慢観法

徹底的に、行法の無常を観ずるのは、すなわち、去慢である。苦随観智と無我随観智の親依止縁力の支援の下、無常随観智は我慢(=傲慢、高慢)を断じ除く事ができる。

生滅随観智 (Upayabyayañāṇa)

名色法と五蘊法の二者

生滅随観智の目標は蘊、処、界、諦、縁起支である。縁起支においては、ただ、無明から有 (bhava) まだが、生滅随観智の目標の内である、とされる。(《無碍解道》)。

生滅随観智を証得したいと思う人は、先に(下記の如くに)徹底的に、現在の(名色)の三相、ある時は無常相を觀じ、ある時は苦相を觀じ、ある時は無我相を觀じなければならない。

- 1、内外を交代しながら、ただ色のみを觀ずる；
- 2、内外を交代しながら、ただ名のみを觀ずる；
- 3、内外を交代しながら、同時に名色の二者を觀ずる；

ただ色法だけを觀ずる、または一つひとつの所縁グループ(六グループの修習を完成しておく事)の名法を觀ずる時、いまこの刹那 (khaṇa paccuppanna) を、觀ずる様にしなければならない。同様に、五蘊法に基づいて、徹底的に觀の修習を實踐し、ある時は無常相を觀じ；ある時は苦相を觀じ；ある時は無我相を觀ずる。(以下の)いまこの刹那を觀照できるまで修習する：

- 1、色のみ。
- 2、受のみ。
- 3、想のみ。
- 4、行のみ。
- 5、識のみ。

ある時は、内觀し、ある時は、外觀する。

同様に、諸々の縁起支、すなわち、無明、行、識、名色、六処、触、受、取、有(業有と生有)の生・滅を目標に取り、順序良く繰り返しそれらの三相を觀照する。ここでは、ただ、それらの三相の生・滅を目標に取るのみであり、それらの因果関係を、連貫させる事はない。

過去、未来、現在、内、外

もし、禅修行者が徹底的に、現在の行法を觀照して、いまこの刹那に到達し、かつ、その智が、非常に明晰であるならば、彼は、名色法と五蘊法を用いて、（己自身が見える事のできる）最も遠い過去世から今生まで、次に、最後の一個の未来世まで、内外、交代して、順序良く、以下の三相を觀照する。

- 1、色のみ。
- 2、名のみ。
- 3、名色の二者。

その後、

- 1、色のみ。
- 2、受のみ。
- 3、想のみ。
- 4、行のみ。
- 5、識のみ。

を觀照する。

無常を多数回觀照し、苦を多数回觀照し、無我を多数回觀照する事。この様に多数回觀照したならば、禅修行者は、相当長い時間をかけて、ただ最も己自身に適合する所の相を、觀ずるのがよい。もし、禅修行者が、己の（+修習に）満足を覚えたならば、（+その段階において）生・滅が、極めて迅速に、その智に、顯現する。そして彼は、己に、いまこの刹那に到達しているために、彼は、生滅隨觀智の詳細法に転じて、修習することができる。

生滅隨觀智の詳細修習法

（一）隨觀集法（samudayadhammānupassī）

＝見生起（udayadassana）＝生起だけを觀ずる

《大念處經は》以下の様々に教える。一つひとつの念處に対して、以下の三法を運用して、修習する事：

- 1、隨觀集法（samudayadhammānupassī）
- 2、隨觀滅法（vayadhammānupassī）

3、随観集滅法 (samudayavayadhammānupassī)

智慧第一のシャーリプトラ尊者は《無碍解道》の中において、それを解釈するに、「無明の修、色の集徹底的」とした。禅修行者は、これらの指示に従って、生滅随観智の詳細法を修習しなければならない。ここにおいて、結生時の色蘊と四つの名蘊を例に説明する。已に縁起第五法の修習を終えている禅修行者は、一つひとつの心識刹那の五蘊(たとえば、名業処の表の如く)を観照することができる。縁起第五法の様に、ここでは、智でもって因果関係を知見しなければならない。

色蘊：

- 1、無明(20)が生起するが故に、(業生)色が生起する。
- 2、愛(20)が生起するが故に、(業生)色が生起する。
- 3、取(20)が生起するが故に、(業生)色が生起する。
- 4、行(34)が生起するが故に、(業生)色が生起する。
- 5、業(34)が生起するが故に、(業生)色が生起する。
(業生色の生起)
- 6、心が生起するが故に、心生色が生起する。(心生色の生起)。
- 7、時節が生起するが故に、時節生色が生起する。(時節生色の生起)。
- 8、食が生起するが故に、食生色が生起する。(食生色の生起)。

註：結生の時には、業生色しか存在しない。特に、結生の生起刹那の、その時には、心生色、時節生色と食生色はいまだ存在していない。ここでは、比較的後の心識刹那の色蘊を列記した。

結生受蘊：

- 1、無明(20)が生起するが故に、結生受蘊が生起する。
- 2、愛(20)が生起するが故に、結生受蘊が生起する。
- 3、取(20)が生起するが故に、結生受蘊が生起する。
- 4、行(34)が生起するが故に、結生受蘊が生起する。
- 5、業(業力、34)が生起するが故に、結生受蘊が生起する。
- 6、依処(心所依処)が生起するが故に、結生受蘊が生起する。
- 7、目標(結生心の目標)が生起するが故に、結生受蘊が生起する。
- 8、触(=34-受=33)が生起するが故に、結生受蘊が生起する。
(結生受蘊の生起)

結生想蘊：

- 1、無明（20）が生起するが故に、結生想蘊が生起する。
 - 2、愛（20）が生起するが故に、結生想蘊が生起する。
 - 3、取（20）が生起するが故に、結生想蘊が生起する。
 - 4、行（34）が生起するが故に、結生想蘊が生起する。
 - 5、業（業力、34）が生起するが故に、結生想蘊が生起する。
 - 6、依処（心所依処）が生起するが故に、結生想蘊が生起する。
 - 7、目標（結生心の目標）が生起するが故に、結生想蘊が生起する。
 - 8、触（＝34－受＝33）が生起するが故に、結生想蘊が生起する。
- （結生想蘊の生起）

結生行蘊（＝思、第一番目の解説方法）

- 1、無明（20）が生起するが故に、結生行蘊が生起する。
 - 2、愛（20）が生起するが故に、結生行蘊が生起する。
 - 3、取（20）が生起するが故に、結生行蘊が生起する。
 - 4、行（34）が生起するが故に、結生行蘊が生起する。
 - 5、業（業力、34）が生起するが故に、結生行蘊が生起する。
 - 6、依処（心所依処）が生起するが故に、結生行蘊が生起する。
 - 7、目標（結生心の目標）が生起するが故に、結生行蘊が生起する。
 - 8、触（＝34－思＝33）が生起するが故に、結生行蘊が生起する。
- （行の生起）

結生行蘊（34－受－想－識＝31、二番目の説明方法）：

- 1、無明（20）が生起するが故に、結生行（マ、以下同様）が生起する。
 - 2、愛（20）が生起するが故に、結生行が生起する。
 - 3、取（20）が生起するが故に、結生行が生起する。
 - 4、行（34）が生起するが故に、結生行が生起する。
 - 5、業（業力、34）が生起するが故に、結生行が生起する。
 - 6、依処（心所依処）が生起するが故に、結生行が生起する。
 - 7、目標（結生心の目標）が生起するが故に、結生行が生起する。
 - 8、その他の三名蘊が生起するが故に、結生行が生起する。
- （行の生起）

その他の三名蘊とは受蘊、想蘊と識蘊である。34名法の中において、この三蘊を除いて、残りの31心所は果であり、残りの三名蘊は因という事になる。

結生識蘊：

- 1、無明（20）が生起するが故に、結生識が生起する。
- 2、愛（20）が生起するが故に、結生識が生起する。
- 3、取（20）が生起するが故に、結生識が生起する。
- 4、行（34）が生起するが故に、結生識が生起する。
- 5、業（34）が生起するが故に、結生識が生起する。
- 6、名色が生起するが故に、結生受蘊が生起する。

（結生識の生起）

名＝心所依処（30色）＋所縁色（所縁色が色法である場合）。

この観法に基づいて、一つひとつの心識刹那の五蘊を観照する。たとえば、有分五蘊、死亡五蘊、五門引転五蘊、眼識五蘊などなど。縁起第五法の因果関係の識別に熟練している禅修行者には、この観法は、通常、難しいものではない。

註：ここにおいて、無明、愛、取を（20）及び行為（34）としたのは、一つの例に過ぎない。己自身の名色流の中において、已に生じた、まさに生じている、将に生じんとしているものを観じる様にすればよい。心と心所の数量は、変化する時もあり、それはまた、善行であったり不善行であったりする。出来る限り、最も遠い過去世から（＋始めて）最後の一個の未来世まで、多数回、観照の修習を实践する事。

（二）随観滅法（*vayadhammānupassī*）

＝壊滅を見る（ただ壊滅をのみ観ずる）

‘Avijjānirodhā vedanānirodhoti ... paccayanirodhaṭṭhena vedanākkhandhassa vayam passati.’

‘Avijjānirodhā rūpanirodhoti aggamaggañāṇena avijjāya anuppādanirodhato anāgatassa rūpassa anuppādanirodho hoti paccayābhāve abhāvato.’

已に、智でもって「諸果（たとえば、色）の生起は諸因（たとえば、無明）の故である」と知見した禅修行者は、次に、智でもって、未来において阿羅漢道、及び般涅槃死亡を証悟した後、「諸因滅尽（たとえば、阿羅漢道の故に、無明は二度と生起することがない、すなわち、無生の滅（*anuppāda nirodha*）であり、諸果の滅尽（たとえば、色の滅後、二度と生起しない、すなわち、無生の滅）である」を簡単に観ずることができる。

ここにおいて、禪修行者は、何が有生の滅 (uppāda nirodha) で、何が無生の滅 (anuppāda nirodha) であるのかを、知っておかねばならない。

有生の滅 (uppāda nirodha) : 因行法と果行法は、生起の後、即刻壊滅する行法である。無常に属する持続的生・滅は、有生の滅である。諸因が持続的に支援しさえすれば、果は不断に生・滅するという形式で存在する。ここで言う滅とは、有生の滅である。

(因もまた果行法である事に注意を払う事。それは、それを引き起す所の因を有している。) 壊滅の後、因が未だ断じ除かれていない事が原因で、それは再び生起して、壊滅する。これがすなわち、有生の滅であり、いまだ生起する事を保持している滅であり、それは刹那滅 (khaṇika nirodha) と呼ばれるものである。

無生の滅 (anuppāda nirodha) : ソータパナ道、サターガミ道とアナーガミ道は、皆、それぞれ、相関する煩惱を断じ除く(または軽減する)ことができる。最上道 (agga magga) と呼ばれる阿羅漢道は、徹底的に残りの煩惱も断じ除く事ができる。(阿羅漢道に至る) 諸々の聖道は、徹底的に相関する煩惱を断じ除いた後、これらの煩惱は完全に、二度と、名色流の中において生起することがない。それらは、已に完全に滅尽して、二度と生起しない。この種の滅は、無生の滅と言う。

諸因(たとえば、無明)が徹底的に滅尽して、二度と生起しない時(すなわち、無生の滅)、諸果(たとえば、色)は、未来の般涅槃死亡の後、二度と再び、生起の縁が存在しないという事から、滅尽するが、この種の滅もまた、無生の滅と言う。それらが滅尽するのは: 無因であるため、無果が生起するからである。

禪修行者は、観智をば、未来において、阿羅漢道を証悟する時と、般涅槃死亡をする時に向かわせ、無生の滅を観照する様にする。唯一、観智でもって「諸因(無生)が滅尽したので、諸果(無生)が滅尽した」を、明確に知見した後に初めて、以下の文にある様な修習に取り組む。

色蘊の観照

- 1、無明が滅尽するが故に、(業生)色が滅尽する。
- 2、愛が滅尽するが故に、(業生)色が滅尽する。
- 3、取が滅尽するが故に、(業生)色が滅尽する。
- 4、行が滅尽するが故に、(業生)色が滅尽する。
- 5、業が滅尽するが故に、(業生)色が滅尽する。

(これは無生の滅であり、未来において色が滅尽した後、二度と生起しない。)

(業生色の有生の滅も観ずる。)

- 6、心が滅尽するが故に、心生色が滅尽する。

(心生色の有生と無生の滅の二者を観ずる。)

7、時節が滅尽するが故に、時節生色が滅尽する。

(時節生色の有生と無生の滅の二者を觀ずる。)

8、食が滅尽するが故に、食生色が滅尽する。

(食生色の有生と無生の滅の二者を觀ずる。)

この觀法では、禪修行者は二種類の滅尽を明確に知見しなければならない。すなわち、無生の滅と有生の滅である。《無碍解道》では、有生の滅は變易相 (*vipariṇāma lakkaṇam*) と呼ばれるが、これは行法の刹那滅である。一つひとつの刹那を五蘊に纏めた後(緣起第五法の説明の如く)、禪修行者はすべての、六所緣グループの善と不善速行心路過程を觀照しなければならない。交代に内觀と外觀を修習する。ここにおいて眼識受蘊に対する觀法を例に挙げて説明する。

眼識受蘊識の觀照：

1、無明が滅尽するが故に、眼識受蘊が滅尽する。

2、愛が滅尽するが故に、眼識受蘊が滅尽する。

3、取が滅尽するが故に、眼識受蘊が滅尽する。

4、行が滅尽するが故に、眼識受蘊が滅尽する。

5、業が滅尽するが故に、眼識受蘊が滅尽する。

6、眼依処色が滅尽するが故に、眼識受蘊が滅尽する。

7、色所緣が滅尽するが故に、眼識受蘊が滅尽する。

8、眼觸 (= 7) が滅尽するが故に、眼識受蘊が滅尽する。

9、光 (*āloka*) が滅尽するが故に、眼識受蘊が滅尽する。

10、作意 (= 五門引轉 = 1 1) が滅尽するが故に、眼識受蘊が滅尽する。

(無生滅法)

(眼識受蘊の滅尽の状態 [有生滅法])

同様の方法によって、出来る限り、最も遠い過去世から最後の一個の未来世まで觀照を進める。



(三) 随観集滅法 (samudayavayadhammānupassī)

=集滅を見る (udaya vayadassana)

Samudayadhammānupassī vā kāyasmim viharati, vayadhammānupassī vā kāyasmim viharati, samudayavaya - dhammānupassī vā kāyasmim viharati.

Avijjāsamudayā rūpasamudayo ...pe... avijjānirodhā rūpanirodho ...pe... Tesam vasena evampi rūpassa udayo evampi rūpassa vayo, evampi rūpaṃ udeti, evampi rūpaṃ vetīti paccayato ceva khaṇato ca vitthārena manasikāraṃ karoti.

上に述べたパーリ経典と註釈の指示によると、生滅随観智詳細法を修習する禅修行者は、観智でもって「因あ生起するが故に、果が生起する；因が滅尽するが故に、果が滅尽する」を識別した後、彼は必ず、因果を不断に連貫させてながら、観照しなければならない。

この観法に対して、《根本 50 経篇註》では、以下の様に言う：

Sappaccayanāmarūpavasena tilakkhaṇaṃ āropetvā vipassanā paṭiṭṭhāya 'aniccaṃ - dukkhaṃ - anattā'ti sammāsanto vicarati.

この註釈の指示によると、禅修行者は必ず、順序良く繰り返し因果の二者の三相を観照しなければならない。こうしたことから、ここにおいて、因果の無常相を観照する例を挙げた。それらの苦相と無我相の観法もまた、同様である事を理解しなければならない。

生・滅を見る：色蘊

- 1、無明が生起するが故に、業生色が生起する；無明が滅尽するが故に、業生色が滅尽する；無明（生・滅）無常、業生色（生・滅）無常。
- 2、愛が生起するが故に、業生色が生起する；愛が滅尽するが故に、業生色が滅尽する；愛（生・滅）無常、業生色（生・滅）無常。
- 3、取が生起するが故に、業生色が生起する；取が滅尽するが故に、業生色が滅尽する；取（生・滅）無常、業生色（生・滅）無常。
- 4、行が生起するが故に、業生色が生起する；行が滅尽するが故に、業生色が滅尽する；行（生・滅）無常、業生色（生・滅）無常。
- 5、業が生起するが故に、業生色が生起する；業が滅尽するが故に、業生色が滅尽する；業（=思、生・滅）無常、業生色（生・滅）無常。
- 6、心が生起するが故に、心生色が生起する；心が滅尽するが故に、心生色が滅尽する；心（生・滅）無常、心生色（生・滅）無常。
- 7、時節が生起するが故に、時節生色が生起する；時節が滅尽するが故に、時節色生が滅尽する；時節（生・滅）無常、時節生色（生・滅）無常。
- 8、食が生起するが故に、食生色が生起する；食が滅尽するが故に、食生色が滅尽する；

食（生・滅）無常、食生色（生・滅）無常。

眼識受蘊を觀ずる

- 1、無明が生起するが故に、（眼識）受が生起する；無明が滅尽するが故に、（眼識）受が滅尽する；無明（生・滅）無常、（眼識）受（生・滅）無常。
- 2、愛が生起するが故に、（眼識）受が生起する；愛が滅尽するが故に、（眼識）受が滅尽する；愛（生・滅）無常、（眼識）受（生・滅）無常。
- 3、取が生起するが故に、（眼識）受が生起する；取が滅尽するが故に、（眼識）受が滅尽する；取（生・滅）無常、（眼識）受（生・滅）無常。
- 4、行が生起するが故に、（眼識）受が生起する；行が滅尽するが故に、（眼識）受が滅尽する；行（生・滅）無常、（眼識）受（生・滅）無常。
- 5、業が生起するが故に、（眼識）受が生起する；業が滅尽するが故に、（眼識）受が滅尽する；業（生・滅）無常、（眼識）受（生・滅）無常。
- 6、眼所依処が生起するが故に、（眼識）受が生起する；眼所依処が滅尽するが故に、（眼識）受が滅尽する；眼所依処（生・滅）無常、（眼識）受（生・滅）無常。
- 7、色所縁が生起するが故に、（眼識）受が生起する；色所縁が滅尽するが故に、（眼識）受が滅尽する；色所縁（生・滅）無常、（眼識）受（生・滅）無常。
- 8、眼觸が生起するが故に、（眼識）受が生起する；眼觸が滅尽するが故に、（眼識）受が滅尽する；眼觸（生・滅）無常、（眼識）受（生・滅）無常。
- 9、光が生起するが故に、（眼識）受が生起する；光が滅尽するが故に、（眼識）受が滅尽する；光（生・滅）無常、（眼識）受（生・滅）無常。
- 10、作意（=五門引轉= 1 1）が生起するが故に、（眼識）受が生起する；作意が滅尽するが故に、（眼識）受が滅尽する；作意（生・滅）無常、（眼識）受（生・滅）無常。

説明

縁起第五法に、已に熟練した禪修行者は、上に述べた説明に従って、この段階での修習を實踐することができる。生滅隨觀智の詳細法に関して、一つひとつの心識刹那の五蘊を觀照しなければならない。

ここにおいて、禪修行者は、一つ前の前世の因と今生の果の因果関係を識別した後、この法を修習することができる；彼はまた、二番目の前世の因と、一番目の前世の果の因果関係を識別した後、この法を修習することができる；また、今世の因と来世の果の因果関係を識別した後、この法を修習する事も出来る。禪修行者は、更に遠い過去の諸々の世を識別する事ができるし、また、未来世の諸々の世の因果関係を識別することもできる。その後この法の修習をする。

希望するならば、禪修行者は、無明などを二グループに分けて観の修習をすることができる。すなわち、無明、愛と取を煩惱輪転に、行と業を業輪転に分けるのである。たとえば、諸因（+によって）一番目の前世に生まれたならば、禪修行者は、先に、一番目の前世の有分心透明界（意門）を識別し、次に、有分心の中に生起する所の諸因を観照し、それらの生・滅（＝無常）を知見する。更に遠い過去、及び未来世の観法もまた同様である事を理解する事。縁起の段階で説明した様に、無明、愛と取は多く、以下の意門心路過程に出現する：

意門引転(1X)	速行(7X)	有因彼所縁(2X)	無因彼所縁(2X)
12	20	34	12

喜は相応しても、しなくてもよい。彼所縁もまた、生起してもよく、生起しなくてもよい。もし、彼所縁が生起するならば、愛、取の多くは、貪見グループ速行である。観智でもって、これらの心路過程名法の生滅無常性を観照して、いまこの刹那に至った後、順序良く繰り返しそれらの三相を観照する。行と業においては、多く以下の心路過程に出現する：

意門引転(1X)	速行(7X)	有因彼所縁(2X)	無因彼所縁(2X)
12	34	34	12

もし、この意門心路過程の速行が喜俱智相応大善である時、喜と智の二者は共に相応し、合計 34 の名法になる。もし、捨俱智相応であれば、ただ智相応で喜が無く、合計 33 の名法となる。彼所縁は生起することもあれば、しないこともある。もし、彼所縁が生起するならば、状況に基づいて、生起するのは、有因または無因彼所縁である。一つひとつの心識刹那の行業名法の生・滅を観じて、いまこの刹那に至らば、順序良く繰り返しそれらの三相を観ずる。

行と業有

業力は、観禅の目標ではない。観の修習の時、善行グループの三相を観照するのを主とする。故に、禪修行者は、観禅の目標である行と業有について、理解が必要である。ここにおいて、布施の説明をして例に取る。

- 1、善業（布施）を造（ナ）す前に生起した所の前思（pubbe cetanā）は行である；善業を造（ナ）した時（布施した時）に生起した立思（muñca cetanā）は業有である。

2、業を造（ナ）した時に生起した七個の速行の中において、第一から第六の速行相応の思は行であり、第七速行相応の思は業有である。

3、業を造（ナ）した時に生起した所の速行心識刹那の中において、思は業有、その他の相応法は行である。

上に述べた定義に基づいて、もし人が、観照することができるのであれば、上に述べた所の、已に生じた、またはまさに生じ様としている意門善速行心路過程の中の、一つひとつの心識刹那のすべての名法を、いまこの刹那に至るまで（+観照するならば）すなわち、行と業有の二者は已に観照されたのだと言える。

一切の観照

一つひとつの心識刹那を五蘊に纏める。たとえば、結生五蘊、有分五蘊、死亡五蘊、意門引転五蘊、眼識五蘊などである。その後、上に述べた方法で、内と外を観ずる。禅修行者は（+以下の様に観ずる）：

- 1、前世と今世の因果関係を連貫させた後、それらに対して、観の修習をする。
- 2、諸々の過去世の間の因果関係を連貫させた後、それらに対して、観の修習をする。
- 3、今世と来世の因果関係を連貫させた後、それらに対して、観の修習をする。
- 4、諸々の未来世の間の因果関係を連貫させた後、それらに対して、観の修習をする。

縁起第一法

‘Nāyaṃ, bhikkhave, kāyo tumhākaṃ napi aññesaṃ. Purāṇamidaṃ, bhikkhave, kammaṃ abhisaṅkhatam abhisañcetaṃ vedaniyaṃ daṭṭhabbam.’

“Tatra kho, bhikkhave, sutavā ariyasāvako paṭiccasamuppādaññeva sādhukaṃ yoniso manasikaroti ... ‘iti imasmim sati idaṃ hoti, imassuppādā idaṃ uppajjati; imasmim asati idaṃ na hoti, imassa nirodhā idaṃ nirujjhati, yadidaṃ ... avijjāpaccayā saṅkhārā; saṅkhārapaccayā viññāṇam ...pe... evametassa kevalassa dukkhakkhandhassa samudayo hoti. Avijjāya tveva asesavirāganirodhā saṅkhāranirodho; saṅkhāranirodhā viññāṇanirodho ...pe... evametassa kevalassa dukkhakkhandhassa nirodho hotīti.”

(Saṃyutta Nikāya I 294 - 295, Natumha Sutta)

「比丘たちよ。これら色身と名心（一切の色法と名法）は、あなたのものではなく、（その意味は、それはあなたの「我（私）」ではない。というのも、それは「無我」であるが故に）、また他人（それは他人の「我」ではない）に属している訳でもない。これら

の色心と名心は、過去の古い業によって生じた法であり、善業と悪業によって構成されており、善思と不善思がそれらの基因である。それらは受の依処である。

比丘たちよ。聖教聞 (āgama suta、理論上の智慧) と証得聞 (adhigama suta、実修上の智慧) の聖声聞弟子は、縁起の観に長じている；もし、この因があるならば、この果は、すなわち、生起する。この因の生起により、この果が生起する。もし、この因がないならば、この果は生起しない。この因が滅尽したならば、この果は滅尽する。

縁起は以下の様なものである：

『無明が生起するが故に、行が生起する；行が生起するが故に、(果報)識が生起する・・・この様に、これは苦があり、楽の無い集である。』

『無明が滅尽 (阿羅漢道によって断じ除かれた) するが故に、行が滅尽し、(果報)識が滅尽し・・・この様に、これは苦があり、楽のない集の滅尽である』

上に述べた教法に基づけば、禅修行者は縁起第一法によって、観禅、すなわち、集のみを観じ、その後に滅のみを観じ、次に集と滅の二者を観ずる観禅を修習するべきである。

随観集法 (samudayadhammānupassī)

縁起第一法に基づいて、因果関係を識別した後、次に生起を観照する。
たとえば：

- 1、無明が生起するが故に、行が生起する；
- 2、行が生起するが故に、結生識が生起する；
行が生起するが故に、有分識が生起する；
行が生起するが故に、死亡識が生起する；
行が生起するが故に、眼識が生起する；などなど。

内と外を観ずる。三世の間の因果関係を連貫させる方法によって、最も遠い過去世から、最も後ろの一個の未来世までを観ずる。すでに縁起第一法に修習に熟練した禅修行者は、上記の修習に困難はない。

随観滅法 (vayadhammānupassī)

その智が、最後の一個の未来世の縁起 (たとえば、「無明が生起するが故に、行が生起する・・・) に対して明晰な (+認識の有る) 禅修行者は、次に、未来において、阿羅漢道を所得する時の、無生の滅を観照する。たとえば、阿羅漢道が引き起す所の「一

切の煩惱（たとえば、無明）が滅尽して、二度と生起しないが故に、一切の果（たとえば、行）は滅尽して、二度と生起しない。」（+を觀照する）。

次に彼は、以下の様に觀照をしなければならない：

- 1、無明が滅尽するが故に、行が滅尽する；
- 2、行が滅尽するが故に、結生識が滅尽する；
行が滅尽するが故に、有分識が滅尽する；
行が滅尽するが故に、死亡識が滅尽する；
行が滅尽するが故に、眼識が滅尽する、などなど。

三時の内外の滅尽のみ觀ずる。

隨觀集滅法（samudayavayadhamānuppsī）

觀智でもって、生・滅の二者を觀照する。たとえば「無明が生起するが故に、行が生起する；無明が滅尽するが故に、行が滅尽する・・・」

次に下記の如くに觀照する：

- 1、無明が生起するが故に、行が生起する；無明が滅尽するが故に、行が滅尽する；
無明（生・滅）無常、行（生・滅）無常。
- 2、行が生起するが故に、結生識が生起する；行が滅尽するが故に、結生識が滅尽する；
行（生・滅）無常、結生識（生・滅）無常。
- 3、行が生起するが故に、有分識が生起する；行が滅尽するが故に、有分識が滅尽する；
行（生・滅）無常、有分識（生・滅）無常。
- 4、行が生起するが故に、眼識が生起する；行が滅尽するが故に、眼識が滅尽する；
行（生・滅）無常、眼識（生・滅）無常。

緣起第一法に基づいて、因果関係を識別する事に熟練した禪修行者は、上に述べた例を参考に、この程度まで修習することができる。彼は、引き続き、「有」まで、この様に觀照しなければならない。すなわち、業有と生有。緣起第一法において示した通り、六所緣グループすべてに波及する所の緣起支は、皆、六グループすべてを觀照しなければならない。過去、未来、現在の三時の内外を觀照する。三世を連貫させる方式を用いて、最も遠い過去世から、最後の一個の未来世の三相を觀照する。少なくとも、上に述べた様に、徹底的の一回は觀照する事。

生滅觀の進展

Santativasena hi rūpārūpadhamme udayato, vayato ca manasi karontassa
anukkamena bhāvanāya balappattakāle ñāṇassa tikkhavisadabhāvappattiyā khaṇato
udayabbayā upaṭṭhahantīti.

Ayañhi paṭhamañ paccayato udayabbayaṃ manasi karonto avijjādike
paccayadhamme vissajetvā udayabbayavante khandhe gahetvā tesañ paccayato
udayabbayadassanamukhena khaṇatopi udayabbayaṃ manasi karoti.

Tassa yadā ñāṇañ tikkhaṃ visadaṃ hutvā pavattati, tadā rūpārūpadhammā khaṇe
khaṇe uppajantā, bhijjantā ca hutvā upaṭṭhahanti.

一世において、結生から死亡までの名色法は、現在世法（*addhāna paccuppanna dhamma*）である。一個の心路過程の中の、名法は、現在相続法（*santati paccuppanna dhamma*）と呼ばれる。一粒の色聚の火界（時節）、四、または五または六代の色法を製造する過程は、「一時節所造色法過程」と呼ばれる。色聚の中の食素が食生食素の支援の下、それは、四、五、または六代の色法の過程を製造することができる。この過程を「一食所造色法過程」と言う。四等起色の中の一つの時節、または一個の食素が造る色法の過程は、現在相続法と呼ばれる。生、住、滅の三小刹那に分ける所の、一個の心識刹那の中で発生する名法、及び、生、住、滅の三小刹那の中で発生する色法は、現在刹那（*khaṇa paccuppanna*）の名色法、と呼ばれる。先に、禪修行者は必ず、現在相続名色の生・滅を觀照しなければならない。徐々に、觀の修習による智が強固で、鋭利、明晰になった時、連続して、間が不断なる行法の生・滅が、はっきりと、現在刹那に至るまで、その智に顯現する様になる。

始め、禪修行者は、縁生滅法（*paccayato udayabaya dassana*）を修習して、それを見る。たとえば、「無明が生起するが故に、色が生起する；無明が滅尽するが故に、色が滅尽する。」その後、彼は諸々の因を横に置いて（すなわち「無明が生起するが故に、色が生起する；無明が滅尽するが故に、色が滅尽する」を觀ない）、觀智でもって、生・滅の本質を有する所の因蘊と果蘊を觀照する。言い換えれば、禪修行者は先に、縁生滅法によって、「因が生起するが故に、果が生起する；因が滅尽するが故に、果が滅尽する」を觀照するのである。次に、これらの蘊の刹那生滅を觀照する。

たとえば、
無明が生起するが故に、色が生起する；＝見縁生法
無明が滅尽するが故に、色が滅尽する；＝見縁生法

無明（生・滅）無常＝見刹那生滅。

色（生・滅）無常＝見刹那生滅。

もし、過去の如くに多数回観照したならば、禅修行者の智は、鋭利、明晰に変化する。そして、一つひとつの刹那の中において、生・滅する所の名色法もまた、その智において明晰に顕現するのである。この様に明晰である時、生滅随観智の「初観智」（*taruṇa vipassanā ñāṇa*）と呼ばれる智を証得することが出来る。故に、禅修行者は「初観者」（*āradha vipassaka*）と呼ばれるのである。（《大疏鈔》）

10 種類の随煩惱（*upakkillesa*、また染とも）

見縁生滅と見刹那生滅の二種類の方法でもって、徹底的に、初観を証得するまで、観の修習を実践し、また過去、未来、現在、内、外などの五取蘊を観じた後には、（+禅修行者において）10種類の観の随煩惱は自然的に発生する。

（一）観の光明（*Vipassanobhāso*）

Vipassanobhāsoṭi vipassanācitta samuṭṭhitam, sasantatipatitam utusamuṭṭhāṇaṇca bhāsuram rūpaṁ. .（《大疏鈔》）

この光明は、「観の修習の心」が引き起す所の心生色である。この心生色は、新しい時節生色を製造することのできる火界を具有している。これらの心生色と時節生色は、内部で生起するが、外部のあるのは、唯一時節生色聚のみである。もし、これらの内部から生起する所の心生色聚を識別するならば、八種類の色法を見ることが出来る。内在する時節生色聚もまた、この八種類の色法であり、この八種類の色法の中の色所縁（色彩）は、非常に明るいものである。光が、外で生起する事ができる理由は、時節が製造する色聚は外部に向かって拡散するからであり、これらの色聚もまた八種類の色法である。

禅修行者は必ずこの八種類の色法の、無常・苦・無我の三相を観照しなければならない。こうしたことから、光明に対して観の修習をしたいと思う禅修行者は、どの様な修行をすればよいのであろうか？ 彼は必ず、光の四界から色聚が見える様でなければならない。その後、これらの色聚を識別するのである。内光明は、八個の色法を具有する心生色聚と時節生色聚であり、外光明は、八個の色法を具有する時節生色聚である。智でもって、この八個の色法の生・滅を「無常」として観ずる；それらを、不断に生・

滅の圧迫を受けているのを「苦」であると観ずる；それらを壊れない実質を持たない、または我ではないと見るのは「無我」である。

《アビダンマ》によると、一切の光は、皆、一団の色聚に過ぎないのであり、これらの色聚の中の色所縁の明るさなのである、と言う。諸々の色聚が一か所に集まって生起する時、それらの色所縁は、連合する。故に、禪修行者は初め、それらが連続して不断の様に見える。が、しかし、それらの四界を識別してみれば、それらは色聚に変化して、更に識別すれば、それらは八種類の色法を具備する色聚であることが分かる。この段階においては、この八種類の色法の生・滅を、無常・苦・無我の三相として観照しなければならぬ。これが、光明を克服する方法である。

(二) 智 (ñāṇa)

Ñāṇanti vipassanāñāṇaṃ, tassa kira rūpārūpa dhamme tulayantassa tīrentassa vissattha inda vajiramiva avihatavegaṃ tikhinaṃ suraṃ ativisadaṃ ñāṇaṃ uppajjati.

この時、観智は非常に鋭利になっている。どれほどの鋭利さか？ 名色の無常・苦・無我の三相を観照する時、観智は電気のように、障礙物の無いが如くに、迅速に進行する。無常・苦・無我の三相を観ずる智は、非常に鋭利に、力あるもの、清浄になる。

(三) 喜 (pīti)

Tassa kira tasmim̐ samaye khuddakāpīti, khaṇikā pīti okkantikā pīti, ubbegā pīti, pharanā pīti. Ayaṃ pañca vidhā pīti sakāla sarīraṃ pūrayamānā uppajjati.

この時、五種類の喜が、禪修行者の智の中に生起する。
小喜 (khuddaka pīti) は、体毛を立たせる程の喜である。
刹那喜 (khaṇika pīti) は、異なった時間に、電光石火の様にして出現する喜である。
継起喜 (okkantikā pīti) は、一陣一陣の波の様に、不断に生起する喜である。
勇躍喜 (ubbegā pīti) は、身体を浮かせる事が出来る程の喜である。
遍満喜 (pharanā pīti) は、勝心生色が全身に遍満する為に生起する喜である。
禪修行者は、まるで油の中に浸された綿花の様に感じがして、全身が勝心生色に満たされる。観の修習心と相応する喜が全身を遍満する為、禪修行者はその喜が、全身に拡散するのを感じる事がある。

(四) 軽安 (passaddhi)

観智と相応する軽安心所である。

Tassa kira tasmim̄ samaye rattitthāne vā divātthāne vā nisinnassa kāyacittānaṃ neva daratho, na gāraṃ, na kakkhalatā, na akammaññatā na gelaññaṃ, na vankatā hoti, atha kho panassa kayācittāni passaddhāni lahūni mudūni kammaññāni suvisadāni ujukāniyeva honti.

六対の「双対心所」(yugala cetasika)がある：
身軽安と心軽安；身軽快性と心軽快性；身柔軟性と心柔軟性；
身適業性と心適業性；身練達性と心練達性；身正直性と心正直性。
この時、この六対の心所は非常に力のあるものとなる。
経典の中では、それらの中で、軽安が最も顕著であると言及している。

(五) 観の楽 (sukha)

Tassa kira tasmim̄ samaye sakāla sarīraṃ abhisandayamānaṃ
ati pañītaṃ sukhaṃ uppajjati.

この時、殊勝な楽が全身を遍満する。観の修習によって、引き起された心生色は、勝心生色 (pañīta citta ja rūpa) と呼ばれる。この勝心生色が全身を遍満する時、これは観智に相応する楽と言う。

(六) 勝解 (adhimokkha) は堅信

Adhimokkhoti saddhā. Vipassanā sampayuttoyeve hissa citta cetasikānaṃ
atisaya pasāda bhūtā balavatī saddhā uppajjati.

これは、観智と相応する信である。彼は已に、名色の因果の存在を肯定しており、已に因と果の二者が皆、無常・苦・無我の本質を有している事を肯定している；過去、現在、未来、内、外の諸々の行法の存在も肯定している。智が顕著になる時、その信もまた、非常に堅固になる。故に、観智と相応する信は、非常に堅固なものになるのである。

(七) 策励 (paggaha)

これは、禪修行の精進力である。正精進道支である。

Vipassanā sampayuttameva hissa asithilaṃ anaccāradham
supaggahitaṃ vīriyaṃ uppajjati.

この時、極めて強い精進が観智と相応する。この精進支は、その他の相応名法が倒れない様に支え、それはゆるからず、きつからずの身精進 (kāyika vīriya) と、心所精進 (cetasika vīriya) となって、観の修習において、目標から抜け出さない (+という

作用を起す)。禅修の期間、時には怠惰になるものであろうか？ 禅修行者は、禅修を止めて、以下の様に言う：「禅修に意義はない」

禅修を實踐したくないという念は、起きないであろうか？ この時、その様な考えが起きない様に、精進は、その他の相応する名法の極めて強力な支援となって、それらが禅修の目標から退出しない様にせしめるのである。

(八) 現起(現象) (upatthāna) は念

Vipassanā sampayuttāyeva hissa supatthitā supatthitā nikhātā
acalā pabbatarājasadisā sati uppajjati.

これは、観智と相応する念である。この念は、城門の柱の様に、一本ごとに、10 フィートの高さを持ち、10 フィートの深さで、埋められている柱は、四方から吹く風で動揺する事がない；同様に念は、観の修習心を平静にして、目標、すなわち、名色因果を観照せしめるのである（これは名色因果行法の無常・苦・無我の三相を観照する段階の事である）。それは、一座の高山の様でもあり、暴風雨もまたそれを動揺させることができない；同様に、念もまた、観の修習心を保持して、平静に目標を観照する。

So yaṃ yaṃ thānaṃ āvajjati samannāharati manasikāroti paccavekkhati, taṃ taṃ thānamassa okkanditvā pakkanditvā dibbacakkhuno paraloko viya satiyā upatthāti.

天眼通を証している人は、もし、彼がその他の世界を観てるならば、彼はその他の一切の衆生を見ることが出来る。同様に、この段階において、禅修行者がどの様な目標、または名、または色、または因果、または過去法、または未来法、または内、または外を観照しているにしても、それらの目標は、非常に迅速にその観智の上に顕現する。その時、念は極めて強大である。

(九) 捨 (upekkhā)

Upekkhāti vipassanupekkhā ceva āvajjanupekkhā ca.

諸々の捨の中において、その中の二個は、観捨(vipassanā upekkhā)と引転捨(āvajjana upekkhā)である。

Tasmim̐ hissa samaye sabbasankhāresu majjhata bhūtā vipassanupekkhāpi balavatī uppajjati. Manodvāre āvajjanupekkhāpi sā hissa taṃ taṃ thānaṃ āvajjantassa vissattha indavajiramiva pattapute pakkhitta tattanārāco viya ca sūrā tikhinā hutvā vahati.

引転捨とは、観智速行の前に生起する意門引転であり、それは引転捨と呼ばれる。

というのも、それは、捨相と相応する名法であるが故に。観捨は、観智と相応する所の中捨性心所 (tatramajjhatatā) である。もし、その時、観智が喜俱智相応である時、すなわち、34 の名法がある時、中捨性心所はその中の一であり、それは心の平捨を保ちながら、目標を観照することができる。この時、それは極めて強大である。どれほど強大であるか？ それは、帝釈天の繰り出す雷の様である。それは、中捨的に、行法の無常・苦・無我相を、観照することができ、何等の欲求も憂慮もしない。行法の無常・苦・無我相が非常に明晰に、観智に顕現するが故に、行法に対して、何等の欲求も執着も生じない。たとえば、ある人が、己の愛する人の過患を見る時、彼に対して平捨を保つ事が出来ないであろうか？ 同様に、禅修行者が行法の無常過患、苦過患と無我過患を見る時、行法に対して、中捨と無憂無執着の能力を保持するのである。

(十) 欲 (nikanti) は観智への執着

Evam obhāsādīpatimandīṭāya hissa vipassanāya ālayam kurumānā sukhumā santākārā nikanti uppajati. Yā nikanti kilesoti pariggahetumpi na sakkā hoti.

ある時には、上に述べた九法 (すなわち、観の光明から、観の捨まで) の観智に対して、好ましい気持ちが生じる事がある。それはすなわち、欲である。それは非常に微細であり、故に、通常、禅修行者はそれを察知することができない。観智が非常に強大になる時、禅修行者は喜ばないだろうか？ 喜ぶのである。

観の修習の智は、意門引転と七個の智相応速行の心路過程に生起する為、それは、上に述べた九法すべてに相応する可能性がある。禅修行者は、必ず、それらの無常・苦・無我の三相を観照しなければならない。この様に観すれば、喜と軽安が最も顕著な名法に対する執取を断じ除く事が出来る。若し、欲がはまだ生起するならば、欲が最も顕著な「貪速行意門心路過程」の無常・苦・無我の三相を観照する。これが、それを克服する方法である。この様に修習して、観智を非常に鋭利なものに変化せしめる。

この 10 種類の観の随煩惱は、以下の四種類の人間には発生しない：

- 1、已に聖道聖果を証得した聖声聞弟子、及び已に強力な観智 (たとえば、厭離随観智) を証得した禅修行者。(《大疏鈔》)
- 2、法を間違えて修習した人。たとえば、戒律が腐敗している、定力がない、また邪慧を修習する人。
- 3、ある種の人々にとって、彼らはまさに、観禅を修習しているのではあるが、それに対して失望しており、故に、観禅の修習から撤退しているか、または放棄している。
- 4、戒行を具足しているものの、怠惰で観禅の修習に取り組まない人。

反対に、それらは必ずや、正確な戒・定・慧を修習している正行者 (sammāpatipannaka)、すなわち、継続して、勇猛果敢に慧の精進をする初観者 (āradha vipassaka) において、発生する。

10種類の観の随煩惱の中で、第二項の智から第九項の捨までは、雑染法であるとは、限らない。智、喜、軽安、楽、勝解、策励、現起(現象)、捨の八法は、観修習の智と相応する心所行法であり、それは観智相応の心識刹那の中の34名法(心と心所)の一部である。凡夫と学者にとって、この八法は、ただ「観善速行」であって、雑染とは言えない。しかしながら、これらの法を目標に取った後、もし、禅修行者が「これらの法は私のものである；これらの法は私である；これらの法は私の『私』または『靈魂』(etaṃ mama, esohamasmi, eso me attā) であるとし、たとえば、「私の智、私の喜・・・」とするならば、愛、慢、邪見 (taṇhā, māna, diṭṭhi) が生起する。これらの愛、慢、邪見とはすなわち、雑染法である。

もし、人が、智、喜などを、どれか一個の道果智であるとするならば、彼はすなわち、観禅の道を乖離している事になる。というのも、彼は、この非真実道果の法に楽(+)を覚え)、それらを、真実の道果であると考え、根本業処、すなわち、観禅を放棄するが故に。



第十三章 : 行道智見清浄義釈

六処門によって、智でもって、名色法の生・滅を觀照する；また、七色觀法と七非色觀法によって、名色法の生・滅を觀照する；次に、光明から欲（*nikanti*）までに至る、觀の随煩惱の究極法の生・滅を觀照する。現在刹那（*khaṇa paccuppanna*）まで来たならば、次に、その中の一個、己自身が最も好む所の法を選んで、徹底的に、順序良く、繰り返し、名色法の三相を、觀照する：

- 1、名色法；
- 2、五蘊法；
- 3、12 処法；
- 4、18 界法。

内、外の三時を觀照する。この様に、順序良く、繰り返し、多数回、觀照する事は、必須である。明晰に、行法の現在刹那を知見できる様に、チャンレンジしてみる。また、順序良く繰り返し、多数回、三相が、益々明晰になるまで、觀照にチャレンジしてみる。

四隨觀

(一) 色法を主として觀照し、その後に、名法を觀照するのは、身隨念処の修習である。
(二) 名法を觀照する時、三念処（たとえば、受隨念）を修習する禪修行者は、必ず、所緣色と依処色もまた、觀照しなければならない。名業処の段階において、すでに、言及した所の規則（*saṃkhittena vā vitthārena vā pariggahite rūpakammaṭṭhāne*）に基づいて、禪修行者は、必ず、簡略法と詳細法でもって、色業処を修習しなければならない。唯一、それらを識別した後において、名法の觀を修習する。そうして初めて、受隨觀念処の修習であると、言われる。

この觀法は、処門によって、一つひとつの心路過程及び、有分心の依処、所緣（目標）、受（＝一切において、受は、最も顕著な名法である）を：

- 1、依処の生・滅；無常；
 - 2、所緣の生・滅；無常；
 - 3、受の生・滅；無常。
- として觀ずる。

この観法において、五門引転から意門彼所縁（名業処表参照の事）までの、一つひとつの心識刹那の（一）依処のみ；（二）所縁のみ；（三）受（＝一切において、の受は最も顕著な名法である）のみ、の生・滅を観照した後、次にそれらの「無常」を観照する。苦相と無我相の観法もまた、同様である。三時の内外を出来るだけ、観照する。

（三）次に、名法の三種類の観法の中で、もし、人が先に、識が最も顕著な名法を識別した後、次に観禅を修習するならば、彼はすなわち、心随観念処を修習しているのである。

彼は、以下の事柄を、観照しなければならない；

- 1、依処；
- 2、所縁；
- 3、識（＝一切において、識は、最も顕著な名法である）。

（四）次に、もし、人が先に、触（思）を、最も顕著な名法として、識別した後、次に観禅の修習をするならば、彼はすなわち、法随観念処を修習しているのである。

彼は、以下の事柄を観照しなければならない；

- 1、依処；
- 2、所縁；
- 3、触（＝一切において、触は、最も顕著な名法である）。

また、名色法でもって、観禅の修習をするならば、色法を観照した後、受から始めて、名法の観照をするのは、受随観念処であり；

識から始めて、名法を観照をするのは心随観念処であり；

触から始めて、名法の観照をするのは、法随観念処である。

また、以下の方法を採用して観禅の修習をするのも、また、法随観念処に属するものである。

- 1、五蘊法：名色を五グループに分ける；
- 2、12 処法：名色を 12 グループに分ける；
- 3、18 界法：名色を 18 グループに分ける；
- 4、縁起法：名色を 12 縁起支に分ける；
- 5、五蓋法；
- 6、七覚支法；
- 7、諦教法：苦諦と集諦の二組に分ける。

威儀路と明覚 (iriyāpatha & sampajañña)

威儀路（行住坐臥）と身体行動（たとえば、前進、後退、屈、伸等）の中に生起する五蘊（＝名色）を、観照する方法である。これは、名業処の段階において、已に説明した。これら五蘊または名色を識別した後、以下の方法を用いて、それらに対して、観の修習をする：

- 1、名色法：二グループに分ける。または；
- 2、五蘊法：五グループに分ける。または；
- 3、12 処法：12 グループに分ける。または；
- 4、18 界法：18 グループに分ける。または；
- 5、縁起法：12 支に分ける。または；

もし、禅修行者が名色法によって、観禅の修習をしたいのであれば、彼は、以下の三相を観照しなければならない：

- 1、色法にみ、その後に
- 2、名法のみ、その後に
- 3、名色の二者。

三時の内外を観照する。もし、已に内外三時を観照することができるならば、威儀路と身体行動における、五蘊（名色）の生・滅から、現在刹那 (khaṇa paccuppanna) に至るまでの、それらの三時を、観照することができるのであれば、次には、縁起法の観の修習に、進むことができる。

以下を識別する：

- 1、「因が生起するが故に、果が生起する。」その後
- 2、「因が滅尽するが故に、果が滅尽する。」その後
- 3、「因が生起するが故に、果が生起する。因が滅尽するが故に、果が滅尽する。」。

因果の二者の生・滅を識別した後、交代しながら、それらの一つひとつの三相を観照する。三時の内外を観照する。ある時には、これらの名色行法の不浄相も観照する。徹底的に、三相を観照した後、禅修行者は、己自身が最も好ましいと思う相を、主に観照する事も出来る。名色法、五蘊法諸法の中において、己自身が最も好ましいと思うものを選んで、順序良く繰り返し何度も、多数回、観照する。

壊滅随観智 (Bhaṅgañāṇa)

壊滅随観智に向かつて

この様に、徹底的に四威儀路の行法を観照している時、前生観智と後生観智が、連続不断であるならば、観智は、非常に強く力のある、鋭利なものに変化する。この時、もし、もはや、行法の生起に注意を払わずに、それらの壊滅に注意を払うならば、それはすなわち、：

Ñāṇe tikkhe vahante saṅkhāresu lahuṃ upaṭṭhahantesu uppādaṃ vā ṭhitaṃ
Vā pavattiṃ vā nimittaṃ vā na sampāpuṇāti. Khaya vāya bheda nirodheyeva
sati santiṭṭhati. (Vism)。

Na sampāpuṇāti aggahaṇato. (Mahāṭikā)。

彼の観智は、以下のものに到達しない（及ばない）：

- 1、生起 (uppāda) : 行法の生時；
- 2、住 (ṭhiti) : 行法の住時；
- 3、相 (nimitta) : 行相 (saṅkhāra nimitta)、例えば色聚；
- 4、転起 (pavatta) : 転起の執取。すなわち、「因が生起するが故に、果が生起する」の転起。

これは、彼が已に、それらの（すなわち、一から四）に注意を向けないのが原因である。前生観智は、親依止縁力 (upanissaya paccaya satti) の支援の下、後生観智相応の念が、已に、安定的に、行法の滅尽、壊滅、破壊と滅（その意味は、この観智は念によって主導されている）に安住している。

この時：

- 1、滅であるから無常 (aniccam khayattṭhena) : 行法の滅尽、壊滅、破壊と滅を目標に取った後、それらを「無常、無常」と観ずる。
- 2、畏怖であるから苦 (dukkham bhayattṭhena) 行法の不断に壊滅する畏怖を目標に取った後、それらを「苦、苦」と観ずる。
- 3、不実であるから無我 (anattā asāraṭṭhena) : 行法は永恒の実質、または我を持っていない事を目標に取った後、それらを、「無我、無我」と観ずる。
- 4、ある時には、それらの不浄の本質を観ずる。

注意

行法の壊滅だけを目標に取り、それらの三相を観ずる修習をする時、それらの壊滅は、非常に速く発生する可能性がある。しかし、中等の速度でもって、無常相（及び苦相と無我相）を観照する事。禅修行者は、多くの心路過程、または心識刹那、または多くの色法が壊滅するのを見るが、しかし、彼は、逐一、一つひとつの心識刹那または色法を「無常」として、観照してはならない；多くの心識刹那及び多くの色法の滅を目標に取り、中等の速度でもってそれらを「無常、無常」として観照する。苦と無我への観法もまた、この様である事に注意する事。名色法または五蘊法などを運用して、順序良く繰り返し何度も、三時の内外行法を観ずる。

色聚の消失

Nimittanti saṅkhāra nimittam, yaṃ saṅkhārānaṃ samūhādighanavasena, sakiccaparicchadatāya ca saviggahānaṃ viya upaṭṭhanaṃ, taṃ saṅkhāranimittam.
(Mahāṭīkā)。

見清浄における名色分別智によって、色密集と名密集が看破されたが、今、禅修行者は壊滅随観智の段階に到達した。壊滅随観智の前には、いまだ以下のものを見る事ができる：

- 1、生起：行法（すなわち、名、色、因と果）の生時；
- 2、住：行法の住時（老時）；
- 3、転起：転起への執取（*upādiṇṇaka pavatta*）。すなわち、「因が生起するが故に、果が生起する」；または「有の転起」（*bhava pavatti*）も見ることが出来る。すなわち、過去因によって、有（新しい生命）が生起する。
- 4、相：已に、智でもって、色密集と名密集を看破し、究極法を知見しているものの、しかし、ある時には、些かの色聚と名聚を看破していない、または看破する事ができないでいる。これは、色聚と名聚の数量が非常に大きいためであって、かつ、それらの生起は非常に速いが為でもある。これらの色聚と名聚の色密集と名密集（たとえば、構成密集と作用密集）は、いまだ看破していないか、または看破することができないが故に、それらを色聚と名聚として見る事になる。これはすなわち、相（*nimitta*）を観ているのであり、それは、行法の発生の相である。

しかしながら、禅修行者が壊滅随観智に到達した時、その智が非常に鋭利で明晰である事から、行法は、極めて迅速に、その智に顕現する。

その時：

1、生起：その智は、二度と、行法の生時を見ることができない；

2、住：その智は、二度と、行法の住（老）時を、見ることができない；

3、転起：その智は、二度と、「有転起」を見ることができない。すなわち、無明、愛、取、行と業の諸因の生起、識、名色、六処、触と受の諸果（生有）の生起（+を見ることができない。）その理由は：

その智は、二度と、因果行法の生時と住時に、住する事ができず、因果行法の、刹那生・滅と呼ばれる所の、壊滅時に住する様になるからである。それは、二度と、執取転起（*upādiṇṇaka pavatta*）、すなわち、「因が生起するが故に、果が生起する」に住する事ができないのである。

4、行相：壊滅随観智では、禅修行者の観智が非常に鋭利で明晰な為、彼は二度と色密集と名密集（たとえば、構成密集と作用密集）などのいまだ、看破していない所の色聚と名聚を見る事が無い。その理由は、有形の最も微細な小粒子である所の色聚と名聚は、相があって、識知することのできる行法であるが、それらは行相（*saṅkhāra nimitta*）と呼ばれる。この時、観智はすでに、行相を觀照することはなく、ただ刹那滅と呼ばれる所の壊滅をのみ見るのである。

この時の観智は、色聚と名聚を見ていないが、禅修行者の壊滅随観智によって、非常に明晰に、究極色法と究極名法を見ることが出来る。これは、その前の観智とは異なっていて、それはすでに、完全に究極界に到達しているのである。

実際、すでにこの段階に到達した禅修行者は、壊滅の極めて迅速なのを見て、彼は以下の方法を運用して、内外の三時の名色法の三相を觀照する：

1、色のみを觀ずる；その後

2、名のみを觀ずる；その後

3、同時に名色法を觀照する。

次に、過去、現在、未来、内、外等、11種類の形式で存在している五蘊をグループに分けて、五蘊法によって、徹底的にそれらの三相を觀照する。

註：以下の事に注意する事。

これは、壊滅随観智の時にだけ、行法は一つひとつ迅速に生起するのだという意味ではない。行法の本質は、一回の瞬きの内に、または放電の間、または一弾指の間、それはすでに、何億回と生・滅しているのである。故に、観智がいまだ鋭利でない前、それはこれらの行法の真実の本質を見ることができないのである。しかしながら、壊

滅随観智の時、禅修行者の観智が非常に鋭利、明晰になるが故に、その観智は、極めて迅速に壊滅する行法を見ることができるのである。

もう一点、禅修行者が行法の生時、住時、転起と（行）相に注意を払わない時、その智は、それらを見ることができない。注意すべきは、これはすなわち、それらに注意を払ったならば、彼は見ることができるといふ事である。

観の修習の観智を観照する（反観 paṭivipassanā）

Ñātañca ñāṇañca ubhopi vipassati.

禅修行者が斯くの如くに、観智でもって、行法の壊滅だけを見る時、彼は必ず、以下の観照を、実践しなければならない。

- 1、「所知」（ñāta）と呼ばれる所の、行法、すなわち、三時の内外の色法、名法、因と果：
- 2、智（ñāṇa）と呼ばれる所の観智。すなわち、これらの「所知」（ñāta）を観照する観智。

彼は、必ず、この二種類の、所知と智と呼ばれる法を観照しなければならない。智と呼ばれる観智とは、意門速行心路過程であり、彼所縁は生起する場合もあれば、生起しない場合もある。この段階においては、已に「強力な観智」（balava vipassanā ñāṇa、たとえば、厭離随観智）に接近している為、彼所縁は殆どの場合、生起しない。

意門引転	速行(7X)	有因彼所縁(2X)	無因彼所縁(2X)
12	34/33	34/33	12/11

禅修行者は、順序良く繰り返し観修習の観智（反観の修習、paṭivipassanā）すなわち、上に述べた、意門速行心路過程の三相を観照しなければならない。



幾つかの観法の例

- 1、色、色の壊滅：無常の観照；
- 2、名、名の壊滅：無常；観修習の智もまた壊滅する：無常の観照。

以下の三相を順序良く繰り返し観照する：

- 1、ある時は内を；
- 2、ある時は外を：この二者を；
- 3、ある時は色を；
- 4、ある時は名を；
- 5、ある時は因を；
- 6、ある時は果を。

過去と未来の観法もまた同様である。過去、未来、現在、内、外等 11 種類の形式で存在している五蘊をグループに分けて、五蘊法に基づいて、同様にそれらを観照する。この段階において、《無我相經》（Anattalakkhaṇa Sutta）の中で言及されている所の五蘊観法は、禅修行者から見て、非常に貴重なものであり、それは観智を成熟させることができる観法である。

壊滅随観智でもって、因果を観照する段階において、不作意によって、「因が生起するが故に、果が生起する」故に、二度と執取転起を見ることがないにしても、しかし、縁摂受智、思惟智と生滅随観智の時に、禅修行者は観照に善くし、またこの執取転起法を知見するが故に、もし、彼が因（たとえば、無明）と果（たとえば、行）を目標に取りたいのであれば、彼は非常に容易にそれを見ることができる。これらの因果の壊滅は、観智によって観照されることが出来る。

壊滅を観ずる力量

ここでは、壊滅随観智に到達したばかりの（+修行者の）話ではないものの、いまだ智が成熟していない禅修行者は、一旦座禅・瞑想を始めると、ただ行法の壊滅のみが見えることがある。壊滅随観智の修習を始めたばかりの頃で、しかし、いまだそれを証得していない時、ある種の程度において、生と滅の二者が見える事がある。観智が鋭利になった時、すなわち、二度と行法の生時を見なくなり、ただ行法の壊滅時をのみ見る様になる。壊滅随観智が頂点に到達した時、ただ行法の壊滅時をのみ見る様になる。（《大疏鈔》）。

Tato pana pubbabhāge anekākāravokārā anupassanā icchitabbāva. (Mahāṭṭikā)。

壊滅随観智を成熟させる為に、必ず、壊滅随観智が頂点に到達する前、各種の、異なった方法でもって、観の修習をする事。

己自身の好む法を主として観照する

行法の壊滅を観照する壊滅随観智の段階では、もし、色法を観照する方が比較的良好であるのであれば、禅修行者は色法を主として、観照するのは可能である；もし、名法を観照する方が比較的良好であれば、名法を主として、観照するのは可能である。上に述べた方法で、徹底的に、多数回、(たとえば、名法)を観照し、また、壊滅随観智が非常に強くなった時に初めて、この様に観照することができる。たとえば、ただ(名法の)善速行心路過程を主として、観照する(+などである)。

もし、禅修行者が止行者である時、彼はジャーナ名法を主に観照することができる。三相に関して、もし、彼が、すでに、三相を運用して、徹底的に観の修習をしているのであれば、彼はただ、己自身の好む、かつ最も有効な相を観ずる事が出来る。禅修行者は、「依処、所縁、受」；「依処、所縁、識」；「依処、所縁、触」と観照する事ができる；

観修習の智の壊滅も含めて(+観ずる時)、その観法は以下の通りである：

- 1、依処、依処の壊滅：無常；観修習の智の壊滅：無常の観照。
- 2、所縁、所縁の壊滅：無常；観修習の智の壊滅：無常の観照。
- 3、受、受の壊滅：無常；観修習の智の壊滅：無常の観照。

次に、同様の方法によって、「依処、所縁、識」；「依処、所縁、触」を観照する。内外三時のすべての六門を観照する。威儀路と明覚の観法に関して、身体の姿勢と動作の内の行法を目標として取り、それを観照する。

また、諸々の縁起支の壊滅を目標に取り、それらの三相を観照する。ここでは、壊滅を目標として観の修習をし、二度と「無明の縁ありて行あり」等の因果関係を目標としない。内外三時を観照しなければならない。ある時には観修習の智を観照するが、これは反観 (paṭivipassanā) である。この段階から聖道を証悟するに至るまで、禅修行者は必ず、内外三時の行法 (名、色、因と果) の壊滅を観ずる事；ある時には、観修習の智の壊滅を観照する事。

壊滅随観智から行捨智まで

禅修行者が、三界三時内外の諸々の行法の刹那を所縁とする時、壊滅随観智によって、順序良く繰り返し何度も観照し、また、継続的に不断に、已に到達した更に高度なレベルの壊滅随観智によって、行法の壊滅を観照する。三界の中の行法、または名色蘊の苦相（すなわち、不断に壊滅の圧迫を受けている）はすでに非常にはっきりとしており、静楽であると考えられている色界または無色界であっても、（+それを見れば実は）非常に恐ろしいものであって、この観智はすなわち、畏怖現起智 (*bhayatupaṭṭhāna ñāṇa*) でもある。

この時、徹底的に過患を見る観智は、過患随観智 (*ādīnavānu passanā ñāṇa*) であり、過患とは、無常過患、苦過患、無我過患及び変易 (*vipariṇāma*) 過患であり、（+禅修行者は）三界三時内外の、諸々の行法の、変易の過患に、対面しなければならないのである。この様に、徹底的にこれらの過患を見た時、三界三時の一切の行法に対して（+生じる所の）、厭離の観智は、厭離随観智 (*nibbidānupassanā ñāṇa*) である。

心がすでに、厭離を感じ、二度と、三界三時の中の、どの行法にも、執着しない時、その心中には、一切の行法から解脱したいと願う欲 (*chanda*) が生起する。過去と未来の一切の行法からの解脱を欲する観智は「欲解脱智」 (*muñcītukamyatā ñāṇa*) と言う。

一切の行法から解脱したいと欲する心は、再度、観智によって、一切の行法を分別と識別をした後、禅修行者はこれらの行法を無常・苦・無我と不浄であると観じるが、この観智は審察随観智 (*paṭisaṅkhānupassanā ñāṇa*) と言う。この段階において、再度、前の、思惟智の段階ですすでに述べた所の、40種類の観法を修習する。（その他の方法に関しては、《清浄道論》を参照の事）

もし、聚思惟法によって、徹底的に、また順序良く繰り返し三界三時の中の行法を観ずる時、たとえば、

内観と外観を、順序良く繰り返し観ずる；

因と果を順序良く繰り返し観ずる；

無常・苦・無我を順序良く繰り返し観ずる。

これら行法の壊滅は、非常に明瞭に、迅速に（壊滅は、非常に粗く顕現する様になる）顕現する。引き続き、三相に基づいて、壊滅を、順序良く繰り返し、観照する。

もし、その様に観照することができるのであれば、「観修習の心」 (*vipassanā bhāvanā citta*) は、徐々に行法に対して、無憂無欲となり、それに対して、ただ捨の

みである、という段階に到達する。あの観修習の心は、ただ静かに、所縁、すなわち、行法の壊滅を觀照するのみになるのである。

観修習の心が斯くの如くに平静である時、色、声、味、触の五所縁を識知する五門心路過程は生起しない。觀ぜられる名法の側にて、生起するのは、意門速行心路過程であり、まさに觀照している觀智のこちら側で、生起するのは同じく、ただ意門速行心路過程だけである。

三相に基づいて、色と名、内と外を順序良く繰り返し觀ずる、できるならば以下の様に修習する：

- 1、内行法を觀ずる時、観修習の心は、安定して、平静に、内行所縁を觀照出来る。その時は引き続き、ただ内行法をのみ觀ずる。また
- 2、外行法を觀ずる時、観修習の心は、安定して、平静に、外行所縁を觀照出来る。その時は引き続き、ただ外行法をのみ觀ずる。もし、未だ、不断に順序良く繰り返し内と外を觀ずるならば、修觀の定 (*vipassanā samādhi*) は、減退する可能性がある。

同様に、もし：

- 1、色法を觀ずる時、観修習の心は、安定して、平静に、色行所縁（の壊滅）を觀照出来る。その時は引き続き、ただ色行法をのみ觀ずる。また
- 2、名法を觀ずる時、観修習の心は、安定して、平静に、名行所縁を觀照出来る（名行の壊滅を觀照する）。その時は引き続き、ただ名行法をのみ觀ずる。もし、未だ、不断に順序良く繰り返し色と名を觀ずるならば、修觀の定 (*vipassanā samādhi*) は、減退する可能性がある。

大念に基づいて修行する道

ここでは、念でもって、勤修するべき段階（+が来たと言える）。（+それは）信と慧及び精進と定をバランスさせる為である。唯一、信、精進、念、定、慧の五根がバランスする時にのみ、聖道と聖果は証得されるが故に。名を壊滅（+という現象）を所縁として、その三相を觀ずる。上に述べた一切の觀法をみな完成させて、行法壊滅の捨を証得しようとする時、法所縁グループの善速行心路過程名法を主に觀照する。もし、禪修行者が止行者であれば、この時彼は、ジャーナ名法（すなわち、ジャーナ定心路過程の中のジャーナ法）を主として觀照するが、三相の中では、無我の觀照を主とする。

この様に觀照する時、観修習の心は、平穩で平静になって、行法の壊滅を觀ずる様になる。その時、禪修行者は外の音などを、聞かなくなる。もし、観修習の心が平穩

で平静になって、行法の壊滅を観ずる時で、外の音が聞こえないならば、不動揺で、安寧であり、観修習の心の力は非常に大きなものに変化する。

上に述べた様に、この時、すでに「ある時は内観、ある時は外観」の観法を採用するのを停止しており、故に、ただ引き続き内のみを観ずる；

もし、観修習の心が平静に外を観ずるならば、引き続き、ただ外のみ観ずる；

もし、観修習の心が平静に色を観ずるならば、引き続き、ただ色のみ観ずる；

もし、観修習の心が平静に名を観ずるならば、引き続き、ただ名のみ観ずる。

この様に観照する時、三相の内の最も好ましい一個を選んで、それを主とする。

この様に観照する時、ある種の禅修行者は、同時に名色の二者を観照するのを好み；ある種の禅修行者は、ただ色のみ観ずるのを好み；ある種の禅修行者はただ無常をのみ観ずるのを好み；ある種の禅修行者は、ただ苦のみ観ずるのを好み；ある種の禅修行者は、ただ無我を観ずるのを好む。

禅修行者は最も己自身に適合する行法及び相でもって観照することができる。この様に観照する時、ある種の禅修行者は、ただ名法の壊滅をのみ見て、色法の壊滅は見ない。もし、この様であれば、名法の壊滅をのみ観じて、見えない色法の壊滅を、無理やり探して、見る必要はない。

実際は、もし、禅修行者が純観業行者である場合、壊滅の名法の多くは、將に修観している所の、意門速行心路過程及び有分である。後生の心路過程によって、前生心路過程を観照する時、緊接してやってくる「修観速行心路過程」(vipassanā javana vīthi)は、一個前の「修観速行心路過程」を観照するのである。

もし、禅修行者が止行者である場合、壊滅の名法は、ジャーナ定心路過程の中の名法、及び「修観速行心路過程」の中の名法である。この時、引き続き、徹底的に、彼が主に観照している所の、ジャーナ名法、及び修観速行心路過程名法を観ずる。止行者にとって、もし、彼が、比較的好ましいと思うのが、ジャーナ名法の無我相であるならば、それはよい傾向である。

ある種の禅修行者は、色と名の二者を見ることがあるが、実際は、彼は、順序良く交代に、名と色を所縁するか、または同時に名と色の二者を所縁として、引き続き、己自身が最も好ましいと思う相でもって、それらを観照する。ある時には観修習の智を観照することもできる。この様に、各種の方法でもって、観照するならば、非常に良好に、欲、色、無色の三界行法の捨を育成することができる。同時に、行法への厭もまた育成することができる。

Bhayañca nandiñca vippahāya sabba sañkhāresu udāsino hoti majjhatto. (Vism)。

行法は過患であると見極め、また、諸行からの欲解脱心が、行法の壊滅の三相を觀照する時、またその上、如何なる行法も「私、私の」として執取することができないならば、また、畏怖（bhaya；諸々の行に畏怖を感じる）と樂（nandī；行を楽しむ）の、二つの極端を捨棄した後、一切の行法の捨が生起する；この智はすなわち、行捨智である。

智見清淨に向かつて

行捨智から聖道へ

すでに成熟した行捨智が寂界涅槃（santa dhātu、寂界＝それは名色行法から脱離している為、無生滅の界である）を見たならば、心は、諸々の行の生起を捨棄した後、二度と行の壊滅を見ることはなく、無行（＝無生滅）の寂界涅槃に入るのである。（Vism）。

もし、行捨智がはまだ寂界涅槃（また寂樂とも）を見ていないならば、行捨智はいまだ成熟していないのであり、尚不斷に行の壊滅を所縁にして（+修習を続けなければならない）。（Vism）。

もし、この様であれば、行捨智を成熟させる為に、徹底的に以下のものを觀ずる：

- 1、ある時は、無常相を觀ずる、
- 2、ある時は、苦相を觀ずる、
- 3、ある時は、無我相を觀ずる、
- 4、ある時は、色法を觀ずる、
- 5、ある時は、名法を觀ずる、
- 6、ある時は、内觀を觀ずる、
- 7、ある時は、外觀を觀ずる、

同様に、徹底的、順序良く繰り返し（8）と（9）の三相を觀ずる：

- 8、ある時は、因を觀ずる、
- 9、ある時は、果を觀ずる。

繼續して、同様の方法でもって、再度、五蘊法でもって觀の修習をする。もし、禪修行者が止行者である場合、彼は、己自身が比較的好ましく思うジャーナ定心路過程名法の無我相を主に觀照する。たとえば、第四禪ジャーナ名法の無我相を主に觀照する。ある時は、「修觀速行心路過程名法」を觀照することもできる。

行捨智が成熟した時、以下を体験証悟する（1から2へ至る）：

- 1、転起 (pavatta) : 行法の壊滅。
- 2、無転起 (apavatta) : 行法の不生不滅。

もし、いまだ証得することができないならば、個別の観法 (anupadadhamma vipassanā) の修習にチャレンジしてみる。たとえば、先に初禅に入り、初禅から出定した後、初禅の 34 ジャーナ名法を識別し、次に、逐一、これらの名法の三相を観照する。

内観と外観を修習する。同様の方法を用いて、すべての、その他の、己自身がすでに証得した所のジャーナ (非想非非想処禅は除く) を観照し、すべての三相を観照する。また個別の法観法でもって、欲界の名色法を観照する。個別の法観法でもって、色法を観照する時、逐一、一つひとつの色聚 (たとえば、眼十法聚) の中の一つひとつの究極界 (たとえば、地界) の三相を観照する。逐一に、六処門と 42 身分の中は一切の色法を観照し、順序良く繰り返し内観と外観を修習する。

(声聞弟子は、個別の法観法で非想非非想処禅の名法を観照する能力を有しない。ただ、聚思惟法によって、それを観照するしかないが故に、このジャーナは、個別法観法の中に列挙されない。)

禅修行者は個別の法観法を修習する事を通して、道果智を証得することができる。もし、証得することができないのならば、次に、聚思惟法 (すでに述べた) の思惟智から行捨智までを修習する、禅修行者は己自身の波羅蜜に応じて成就することができる。



第十四章 : 道智と果定

禅修行者が己自身が已に道果を証悟したと思う時、当該の体験が真実であうかどうかを明らかにするために、多くの、何度も、点検しなければならない事柄がある。というのも、諸々の禅修行者の経験によると、多くの、涅槃と類似した経験が、往々にして発生する可能性が、あるからである。導師の立場に立てば、彼もまた、彼らを何度も検査する。「ソータパナ」は、一個の名称の概念である。多く教えを聞いた者は、「ソータパナ果」について知っているが、しかし、多くを聞かない者にとっては、知る事がない。

彼が知っているのは、コンダンニヤ尊者が知っているものと同じである：

Atha kho āyasmato Kondañña virajāṃ, vitamalaṃ, dhammacakkhuṃ udapādi:

‘Yaṃ kiñci samudayādhamaṃ sabbaṃ taṃ nirodhadhammaṃ’ti.

——「この時、コンダンニヤ尊者は遠く、塵、垢を離れて、法眼が生じた『一切の生法は皆滅し去る』」次には？

Atha kho āyasmā Kondañño diṭṭhadhammo pattadhammo veditadhammo pariyoḡāhadhammo tiṇṇavicikiccho vikattakathaṃ katha vesārajapatto.

——「この時、コンダンニヤ尊者は、已に見法し、已に得法し、已に知法し、已に深く法を解し、已に疑いを度し、已に疑惑を断じ、已に無畏を得た」

すべての、以下の疑惑は、解消した：

「四聖諦は存在するか？過去生はあるか？未来生はあるか？過去と未来生はあるか？現在果は過去の因によって生じたものか？現在因は未来果を齎すか？比較的遠い過去生は、比較的近い過去生を生起させるか？業は、果報を産むか？」なぜであるか？

というのも、彼は已に、完全に苦、集、滅、道の四聖諦を覚悟（＝覚醒、以下同様）したが故に。彼は恐れなく言う（**vesārajapatta**）事ができる。四聖諦は真実存在しているし、また実証することができる。（經文では）ただ、彼が、この種の能力と智慧を有する、とだけ言及している。彼は、「私は已にソータパナに成った」と知っただろうか？ 否。

この名称は一種の概念法であり、多くの教えを聞いた者しか、それを知る事ができない。道果を証悟する時、諸々の聖者は「所縁通達」（**ārammaṇa**）を通して、徹底的に名色の完全なる滅尽、すなわち、「無為涅槃」（**asaṅkhata nibbāna**）の滅諦を覚悟する。彼らは「作用成就」（**kiicca siddhi**）によって、「無痴通達」（**asammoha paṭivedha**）をなし、徹底的に、その他の三聖諦、すなわち、苦聖諦、集聖諦及び道聖諦を、覚悟する。

「無痴通達」とは何か？ 作用 (*kiicca*) によって、四聖諦の覆いを取り去り、如実知見が出来ない痴 (*moha*) (+を取り除く事)、すなわち、これが「無痴通達」である。聖者は随時に、逐一、過去、現在、未来、内、外等の 11 種類の形式で存在する五蘊、集諦と縁起を観察することができる。というのも、如実に五蘊と集諦を知る事を覆い隠す痴が、已にソータパナ道によって断じ除かれたからである。

もし、人が、己自身がソータパナであると自認する時、彼は「試金石によって黄金を点検」して（これは黄金の塊を、点検に用いる石の上で引っ搔いてみて、黄金が試金石の上に残す軌跡を見て、黄金の真贋を判断するものである）己自身に問わねばならない：「私は過去、現在、未来、内、外、粗い、微細、劣、勝（＝優）、遠い、近いの 11 種類の形式で存在している苦諦を覚悟したのであるだろうか？ 已に、三世を連貫する縁起を、覚悟したのであるだろうか？（＋それは）己自身の体験を通してであるか、または、他人の言語文字を通してであろうか？」もし、彼がただ、他人の言語文字を通してそれらを理解しただけであるのならば、彼はソータパナであろうか？

《大因縁經》 (*Mahānidāna Sutta*) の註釈では、以下の様に言う：

Sotāpānānañca nāma paccayākāro uttānakova hutvā upaṭṭhāti.

——「いわゆるソータパナ者とは、縁作が明確になった後に、初めて現起する」。

もし、彼がソータパナであるならば、彼は必ず縁作 (*paccayākāro*) と呼ばれる縁起についてはっきり知っていなければならない。これは、経典の解釈を考慮しなければならない段階である。ソータパナ道智は、四聖諦を覆い隠す所の痴を断じ除く力量を具備しているものであるが、では、「試金石」でもって、己自身を点検してみればよい。そうすれば、彼は己自身がソータパナであるかどうかを、知る事ができる。

彼は、真贋を知る為に、何度も何度も決意 (*adhiṭṭhāna*) をしなければならない。もし、彼が「涅槃を一時間覚悟（＝悟る、体験する）する事を願う」、「涅槃を二時間覚悟する事を願う」等と決意した時、即刻涅槃を見ることが出来るならば、彼は比較的、涅槃を覚悟したのだと言えるかも知れない。この後、更に一歩進んで点検しなければならない。何を点検するのか？

《アビダンマ概要》 (*Abhidhammatthasaṅgaha*) では、以下の様に言う：

Maggam phalañca nibbānañ paccavekkhati paṇḍito,

Hīne kilese sese ca paccavekkhati vā na vā.

智者は、道、果と涅槃を省察する、また彼が已に断じ除いた煩惱と残りの煩惱が、あるかないかを、省察する。注 50

これがすなわち、五種類の「速行心心路過程の省察」(paccavekkhaṇa javana vīthi) である。以下を省察する：(一) 道：(二) 果：(三) 涅槃：(四) 已に断じ除いた煩惱：(五) いまだ断じ除いていない煩惱。

この五者の中で、道、果及び涅槃を観察する心路過程は、一人ひとりの聖者において生起する。いまだ断じ除いていない煩惱と、已に断じ除いた煩惱を観察する心路過程は、多くの教えを聞いた聖者において生起する。この説明から、どの煩惱が已に断じ除かれたか、どの煩惱が未だ断じ除かえていないかを知るためには、禅修行者は種々の所縁を対象を縁に取って、生起する所の、善速行及び不善速行を観察するべきである。その時、彼は、どの不善法が観察される事がないかを知る事ができる。というのも、それらは、已に断じ除かれているからであり、また、どの不善法がいまだ生起するかを知る事も出来る。というのも、それらは未だ断じ除かれていないが故に。

この様な検査ではいまだ不足である。Ledi Sayadaw (レディー 大長老) は、少なくとも三年観察するべきだと提言する。というのも、大龍大長老 (Mahānāga Mahāthera) の様な状況が発生する可能性があるからである。大龍大長老は、己自身は 60 年前にすでに阿羅漢果を証得したのだと、思った。彼の弟子の法施長老

(Dhammadinna Thera) は、別の場所に住んでいた。ある日、彼は彼の先生は、実際阿羅漢果を証得したのかどうかを思惟し、神通でもって、観察した所、彼の先生はいまだ凡夫であることを発見した。次に、彼はもし、彼が、先生に会いにいかないのならば、先生は道、果と涅槃を証悟することができず、凡夫のま、世を去るであろう、と思惟した。彼は、神通によって、虚空を飛んで、先生の所へ行った。到着した後、先生に向かって礼拝し、為すべき任務をなした。お互いに挨拶を交わしたあと、先生は彼に何用で訪ねて来たのかと問うた。彼は、幾つかの問題を聞きに来たのだと答えた。彼は 1000 個の、阿羅漢が答える事の出来る問題を訊ね、先生はすべての問題に解答した。これは先生が阿羅漢である事を示していた。

法施長老は、神変ができるかどうか訊ねた。先生は出来ると、答えた。彼は先生に大きな白い象に変身してもらいたいと言った。先生はその様に出来た。次に、彼は先生に、大白象の鼻を口の中に入れて、恐ろしい声を出し、自分の所に向かって来て欲しい、と願いだした。先生は、どれも実行する事ができた。しかし、大白象が実際に彼に向かって走って来た時、大龍大長老は逃げ出したのである。法施長老は、彼の袈裟を掴んで聞いた：「尊者、阿羅漢に、いまだ恐れがあるのでしょうか？」

ここにおいて、大龍大長老は、己自身がいまだ凡夫である事に気が付いた。諸々の阿羅漢は已に、すべての煩惱を断じ除いている、瞋 (dosa) を含んで。今、大龍大長老は、彼には未だ瞋があり、それが恐れとして表現された事を認めた。彼は法施長老に近づき、業処を教えて欲しいと請うた。法施長老は、彼に 32 身分業処を教えた。聞くとところによると、彼は、久しからずして、阿羅漢果を証得したそうである。

大龍大長老は、經の教えに関して、無知な人間ではない。彼は長らく多くの学生が、阿羅漢果を証悟するまで、教えていたために、阿羅漢智慧で知るべき事柄は、彼も非常によく知っている様であり、故に、彼は己自身が阿羅漢であると思ったのである。言い換えれば、彼は、己自身がすでに、一切の煩惱を断じ除いたのだと思い、実際、これらの煩惱は、60 年の間、潜伏していたのである。彼は、ある程度の強固な知識を持ち、煩惱を潜伏せしめる事が出来た。故に、彼は、己自身の堅固な知識は、涅槃を所縁にした所の、道智、果智であると結論したのである。こうしたことから、正確に判断することの出来る仏陀はすでに涅槃に入った為、また、現在の聖者は少ないが故に、禪修行者は長い時間をかけて、己自身が聖者であるかどうかを知る様にしなければならない。

ある種の人々は、彼らは果定に証入したと言う。彼らは己自身の体験を言う：

「すべての名色が消滅した。私は完全に何も知らない状態になった。」

有る種の人々は真実その通りであるが、しかし、誰でもがそうであるとは限らない。故に、經典の教えに従って、本当に果定に証入したのであるかどうかを点検しなければならない。この様な状況の下、「聖者」は必ず道と果を観察しなければならない。もし、果定の前に、先に道と果の説明をすれば、あなたは、比較的理解しやすいかも知れない。道果智を証得した聖者は、証得した道智の中において、名法が幾つあり、道支が幾つあるかを点検することができる。

もし、彼が色法または初禪名法の無常想、または苦相、または無我相を観照している時に道智を証得したのであれば、彼の道智の中には、37 個の名法、八道支が存在する。この 37 名法は、「信慧グループ」 (saddhā paññā) と言い、一個の識、13 通一切心所 (aññasamāna)、19 遍一切美心心所 (sobhaṇa sādharmaṇa)、一慧根心所 (paññindriya) 及び正語、正業と正命の三個の離心所 (viratiyo) が含まれる。

もし、彼が第二禪名法の無常想、または苦相、または無我相を観照している時に道智を証得したのならば、すなわち、35 個の名法がある事になる：というのも、尋と伺が無いが故に；道支から見て、尋が正思惟に属さない事が原因で、七道支しかない事になる。もし、彼が第三禪名法の無常相、または苦相、または無我相を観照している時に道智を証得したのならば、喜がない事が原因で、34 個の名法になり、また同様に七道支にな

るのである。もし、第四禪名法を觀照している時に道智を証得したのならば、34個の名法になる。それはすなわち、尋、伺、喜がなく、捨と一境性があるが故に。

こうしたことから、禪修行者は、己が証した道と果について、幾つの名法があったのか、7または8道支であったかどうかを、正確に知る事ことができる。彼は、己自身が証得した所の道智の方式——無常相、または苦相、または無我相の形式を觀照していたのかどうか、色法または名法を觀照していたのかどうか；欲界名法、または初禪名法、または第二禪名法、または第三禪名法、または第四禪名法であったのかどうかを、正確に点検することができる。

彼が、果定に入る練習を開始した時、彼は何をなすべきであろうか？ この事は《清淨道論》（第23章）に書かれている：

Phalasamāpattikena hi ariyasāvaka rahogatena paṭisallinena udayabbayādivasena saṅkhārā vipassitabbā.

——「果定に入りたいと欲する聖弟子は、空き地または静かな場所に行き、生・滅などの諸々の行を觀ずる。」（注51）

果定に証入したいと欲する聖者は、静かな場所に趣て、觀禪の修行をする。生滅智（udayabbaya ñāṇa）から、諸々の行法の生・滅の觀照を開始し、壞滅智（bhaṅga ñāṇa）を経由して、至高の觀智に始る。

《清淨道論》（第23章）では、更に一步進んで解説する：

Tassa pavattānupubba vipassanāssa saṅkhārārammaṇa gotrabhū ñāṇānantarā phalasamāpattivasena nirodhe cittaṃ appeti.

——「彼の觀智は、順序に従って転起し、諸々の行法を所縁とした、種姓智の後、彼は果定に入る事によって、滅において安止する」

禪修行者は、果定に到達せんとする時、心路過程は、以下の様に生起する：
意門引轉→遍作→近行→隨順→種姓

（manodvārāvajjana→parikamma→upacāra→anuloma→gotrabhū）。

比較的高度な觀智——種姓智を含む——は皆、行法の滅を所縁としている。種性（マ）の後、彼は果定に入る事によって、滅に安止するのである（phalasamāpattivasena nirodhe cittaṃ appeti）。滅と呼ばれる無為涅槃を縁として目標に取る果定速行（phala samāpatti javana）は、多くの刹那生起する。

疏鈔は言う：

Ariyassa phala jhānassa nibbāne ārammaṇa bhūte appanākarena pavatti.

——「聖果ジャーナ心は、涅槃を所縁として取り、安止に証入する。」

この説明に基づくと、道心、果心への到達、及び果定への証入において、名法はいまだ存在しているかどうか？ そう、それらは存在している。これは、名法も滅尽の定の一つではない。実際、その時は、二種類の法が存在している：所縁と当該の所縁を観察している所の智である。果定の中において、この智はすなわち、果心の名法である。では、果定名法とは何か？ それはすなわち：**nirodhe nibbāne** ——（一切の名色が完全に）滅尽した所の涅槃である。涅槃には、名色が無いというのは正しいが、しかし、果定の中において、涅槃を縁とした所縁として取る果心は存在している。果心は如何にして生起するのか？ 彼ら、禅修行者の心所依処 (**hadayavatthu**) に依存して生起する。故に、これは名法の滅尽した定ではない。これらは区別されなければならない。

名色のない涅槃を観察している時、それを確定する為に、聖者は、涅槃の中に四界が無いかどうか、観察する。もし、四界がないのならば、それは比較的肯定的に見なすことができる。何故か？ 仏陀は以下の様に教える：

Yathā ca āpo pathavī tejo vāyo na ghātati.

——「地水火風の四界は、涅槃の中において生起することができない。」

もし、四界がないのならば、四界に依存して生起する所の、所造色が存在するであろうか？ 完全に存在しない。色法の不存在により、色法に依存して生起する所の名法もまた存在しない。無為涅槃の中においては、名色は完全に存在しない。

唯一、滅尽定 (**nirodha samāpatti**) 注 52 のみが、名法が滅尽する定である。どのような人間が滅尽定に入る事ができるのか？ 唯一、四色禅及び四無色禅八定を具備するアナーガミと阿羅漢だけが、滅尽定に入る事ができる。何故、彼らは、滅尽定に入るのか？

《清浄道論》（第 23 章）では以下の様に言う：

Kasmā samāpajjantīti saṅkhārānaṃ pavattibheda ukkaṅṭhatvā diṭṭheva dhamme acittakā hutvā 'nirodhaṃ nibbānaṃ patvā sukhaṃ viharissāmā'ti samāpajjanti.

——「なぜ入定するのか？ 諸々の行の種々生・滅転起を厭離するが故に。『現世において無心になるには、私は滅の涅槃に到達して楽に住せん』と思うが故に。」（注 53）。

八定を具備するアナーガミと阿羅漢は、行法の生・滅を厭離して、滅尽定に入る。何故か？ 仏陀は《七処善經》 (**sattaṭṭhānakusala Sutta**) の中において、以下の様に言う：諸々の阿羅漢は、常に、処、界及び縁起に住み、行法の滅を見る。彼らの念力は堅固であり、行法の生・滅に專注する時、常々、この様に安住する。故に、彼らは行法に対して厭離を感じ、二度とそれを見たくないと思う。こうしたことから、彼らはこの様な目的でもって滅尽定に入るのである：

「喜悦の下に入り、諸々の名法の滅尽が滅尽する滅尽定に安住する。行法を了知する識がない、これは良い事である。」

故に「無心になった後」(acittakā hutvā) というこの説明によれば、滅尽定とは名法の滅尽した定であることが分かる。

この章は、《大牧牛者經》(Mahāgopālaka Sutta) に基づいて、阿羅漢果の体験に関わる(十部分に言及した)。すでにソータパナ道果智を証得した者は、更に高い果位を証したいという願望を持って、行法の無常相、苦相及び無我相を觀照しなければならない。各自の波羅蜜に従って、サターガミ道果智、アナーガミ道果智、阿羅漢道果智は、觀智の成熟と共に、逐一生起し、一切の煩惱を断じ除く。

(注 49) パーリ語では phalasangāmi と言い、「果等至」とも。

(注 50) 《アビダンマ概要精解》を参考にした。

(注 51) 《清浄道論》参照

(注 52) 「滅等至」とも訳す。

(注 52) 《清浄道論》参照のこと。



第十五章 : 14 種類の心制御法

(一) 順遍

地、水、火、風、褐色、黄色、赤、白を、初禅から第四禅までと、空無辺処定、識無辺処定、無所有処定、非想非非想処定の順で修習する。

(二) 逆遍

上記(一)を逆に修習する。以下類推。

(三) 順逆遍

(四) 順禅

地、水、火、風、褐色、黄色、赤、白を、初禅から第四禅までと、空無辺処定、識無辺処定、無所有処定、非想非非想処定の順で修習する。

(五) 逆禅

(六) 順逆禅

(七) 跳禅

(八) 跳遍

(九) 跳禅と遍

(10) 超支

(11) 超所縁

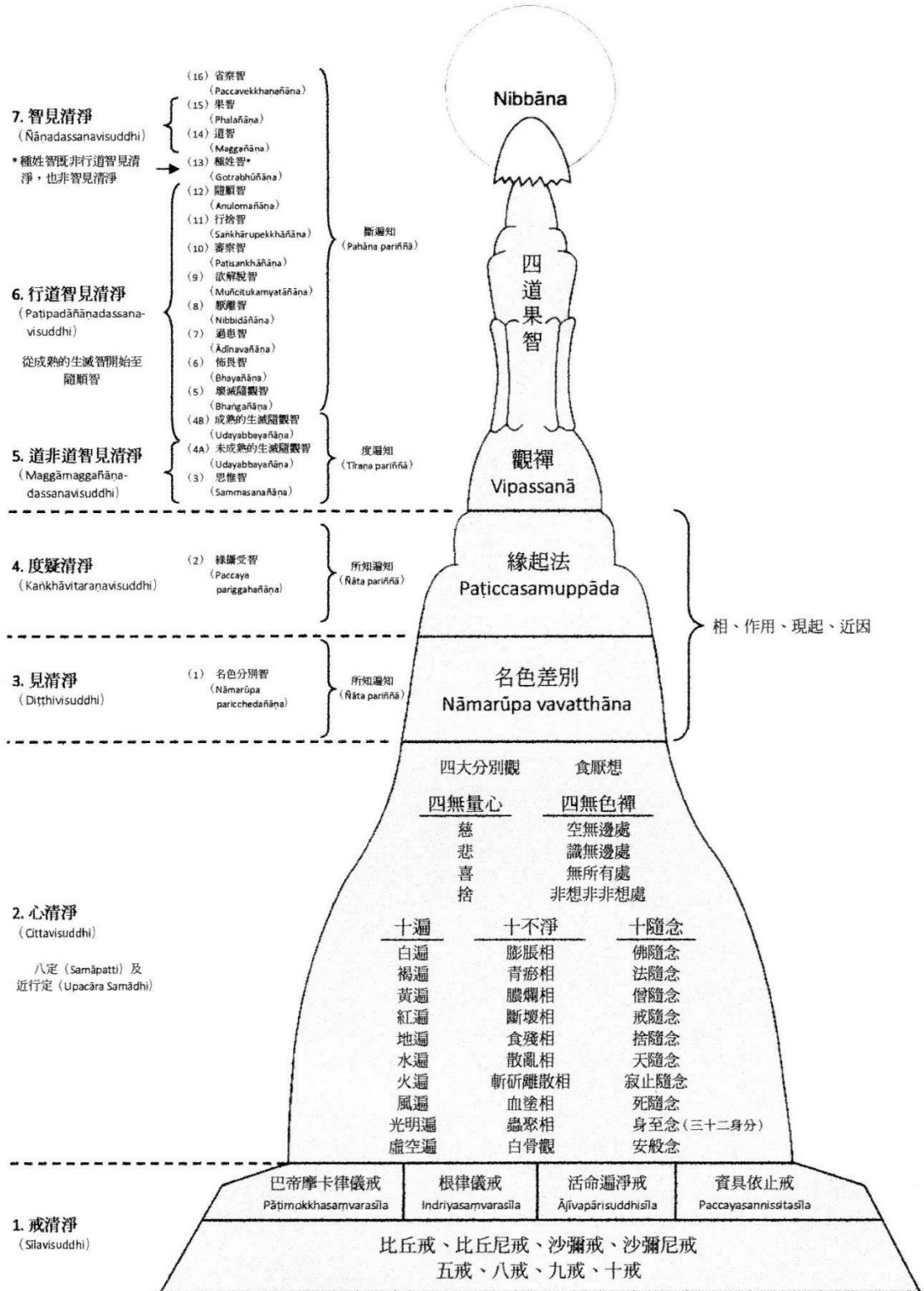
(12) 超支と所縁

(13) 支の確定

(14) 所縁の確定

訳者：主に見出しのみ表記。具体的な修習方法は、ご自身の指導者に教示を受けて下さい。

導至苦之滅盡——涅槃的八聖道



(翻訳完了)

